

---

# 灼熱のドラゴンニュート

小湊拓也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灼熱のドラゴンニユート

### 【Nコード】

N5858T

### 【作者名】

小湊拓也

### 【あらすじ】

竜殺しの英雄ダルーハ・ケスナーは暴君と化し、禁断の力「魔獣人間」の軍団を率いてヴァスケリア王国を蹂躪・征服する。これに立ち向かうはダルーハの息子ガイエル。王女ティアナを助けながら彼は、魔人と化したる父親に戦いを挑むが……剣と魔法のファンタジー物語、の皮を被った変身ヒーロー物となっております。特撮とか好きな方は是非どうぞ。

## 序章 ドラゴン・スレイヤー

左手の中で、兵士の首が折れた。

それほど苦しい思いはさせずに死なせてやれた、はずである。

だらりと首の伸びた屍を放り捨てながら、ダルーハ・ケスナーは戦場を見回した。

同じように物の如く放り捨てられた歩兵たちの屍で、地面が見えなくなっている。

戦争、とは言えないであろう。これはもはや、一方的な虐殺だ。構うまい、とダルーハは思う。

この世界を、己のものとする。そのためには、このような虐殺をこれから先、いくらでも行わなければならないのだ。

40歳である。

武力のみで全世界を支配下に置く。などという難業を、今から死ぬまでの間に、果たして成し遂げられるであろうか。

やるしかないのだ。何故なら、止めてくれる人間はもういないのだから。

「レフイーネよ、見ているがいい」

いなくなった者の名を呟きながら、ダルーハは歩み出した。

「お前の夫が魔道に堕ちる様を……ようにく見ているがいい」

鋼の脛当てを履いた足が、ずしりと兵士の屍を踏みつける。

たくましい身体に血まみれの甲冑をまとう、その姿が。遠巻きに群れる王国正規軍を威圧するかのように1歩また1歩と、歩兵の屍の絨毯を踏み締める。

鎖帷子の袖が筋肉ではち切れてしまいそうな両腕に、武器は持っていない。

敵兵たちを鎧もろとも叩き斬っている間に、戦斧は潰れ、槍は折れ、剣は欠けた。

今のダルーハの力に耐えられる武器など、この世に存在しないの

だ。

左掌に、右拳を打ち付ける。良い音が響いた。

そうしてからダルーハは、手甲の上からボキボキと拳の関節を鳴らした。

やはり、素手だ。今の自分は、何の武器も持たずに、あらゆる物を破壊し、あらゆる命を奪う事が出来る。

ダルーハは微笑した。品良く整えられた口髭が、ニヤリと獐猛に歪む。

右側しかない目が、猛々しい眼光を輝かせて、王国正規軍を睨み据える。

左目は、と言うより顔の左半分は完全に潰れて、惨たらしい傷跡となっていた。

もう19年も前に、ある戦いで負わされた傷である。

相手は、こんな腑抜けの王国正規軍とは比べ物にならないほど、恐ろしい敵だった。

「……本当に、腑抜けになったものよな。騎士団も」

遠巻きに布陣したまま動こうとしない正規軍騎士たちを、ダルーハは嘲笑って見せた。

「歩兵を楯として自らは動かず……これが誇りあるヴァスケリア王国騎士団の、俺がいなくなった後の有り様というわけか」

「ほざくな逆賊！」

司令官と思われる、少なくとも着ている鎧だけは立派な人物が、声を張り上げた。

「英雄とまで呼ばれた身でありながら、かくもトチ狂った野心を抱きおって！」

「そうとも、我は英雄……」

自身が造り上げた屍の道を、ゆっくりと歩みながら、ダルーハは答えた。

「英雄とは、いかなるものか……腑抜けの騎士団に、とくと思いい知らせてくれようか」

「貴様こそ思い知れ。国王陛下に刃を向けたる、その罪の重さをなあ！」

司令官のその大声を合図として、黒っぽい姿が複数、と言うより無数。分厚く布陣した正規軍騎士団の中から、ぞろぞろと進み出て来た。

軽い甲冑の上から、黒いローブを羽織っているようだ。目深にかぶったフードのせいで顔はよくわからないが、恐らく全員が男であろう。

皆、身長よりも長い杖を両手で捧げ持っている。先端に宝石がはめ込まれた杖。

ただの宝石ではない。魔石と呼ばれる、一種の飛び道具である。それも弓矢とは段違いの威力を発揮する。数さえ揃えれば、攻城兵器として使えるほどだ。

城攻めと同規模の魔石が今、黒装束の男たちによって、ダルーハに向けられている。

「王国正規軍の切り札、攻撃魔法兵团である」

鎧だけは立派な司令官が、魔石の杖を構えた男たちの背後で、尊大に言った。

攻撃魔法兵とは読んで字の如く、魔力を用いての攻撃を目的とした兵科である。

人間が持つ微弱な魔力を、破壊・殺傷が行えるほどに増幅強化する。そんな機能を有する物質が魔石であり、これをより効果的に用いる訓練を受けた兵士が、攻撃魔法兵なのである。

「これで終わりだ、逆賊。竜殺しの英雄ともあろう者が、今から屍すら残らぬ死を迎える事となる。魔法の炎に焼かれ、あるいは雷に打たれ」

司令官の声に、笑いが混じった。

「そして私は、竜殺しの英雄を倒した……英雄を超えた、英雄となる」

「良かろう、なってみろ」

変わらぬ足取りでダルーハは、騎士団に向かって歩み続けた。

その騎士団を守る形に、黒装束の攻撃魔法兵たちがズラリと横長に布陣し、魔石の杖を構えている。

その様を隻眼で見回し、ダルーハは言った。

「いかなる手を用いても、この俺の身体に傷1つ負わせる事が出来れば……貴様たちは立派な英雄だ。誇るがいい、地獄でな」

「……やれ！ 逆賊を、この世から消し去るのだ！」

引きつった声で、司令官が号令を下す。

ずらりと構えられた無数の魔石が、一斉に光を放った。

炎の輝き、雷の閃き。あるいは冷気の煌めき。

部隊を成せるほど群れた攻撃魔法兵士、各人の魔力が、様々な形で発現し、ダルーハ1人に対して迸ったのだ。

太い電光の筋が、ダルーハの頭を打つ。兜が吹っ飛び、刈り込んだ黒髪が露わになる。

巨大な火の玉が、正面からぶつかって来る。爆炎が、ダルーハの全身を包み込んだ。左右の肩当てがちぎれ飛び、胸甲と鎖帷子がドロドロに溶けて一緒くたになった。

生暖かい液体金属が身体の上を流れ落ちてゆく、のを感じながら、ダルーハは歩み続ける。

こんなもの、ではなかった。

19年前の、あの戦い。

竜の返り血を全身に浴びた時の、痛みと言うべきか、熱さと言うべきか。

皮膚と筋肉が焼けただれながら溶け、溶けながら別のものに変質してゆく。あの地獄そのものの激痛と比べれば。

人間の攻撃魔法兵ごときが浴びせて来る、この火炎の、雷の、冷気の。何と涼やかで、心地良い事か。

鎧はあらかた破壊され、溶けちぎれていた。鋼を練り固めたような胸板や肩が、剥き出しとなっている。

その力強い裸の上半身の表面で、炎が碎け散り、電光が弾け飛ん

だ。

人間が一瞬にして凍結しひび割れるほどの冷気の嵐が、ダルーハの皮膚に凍傷1つ負わせる事もなく、蒸発してしまう。

狙いの誤った電光が、火の玉が。ダルーハの周囲で、屍の絨毯を直撃。安らかなる死を迎えた兵士たちが、焼け焦げ、砕け散り、燃え盛る生首や手足となって大量に舞い上がる。

その凄惨な光景の中を、ダルーハは悠然と歩み続けた。剥き出しになった胸板も、分厚い肩や二の腕も、全くの無傷である。

「無駄だ……竜の返り血を浴びたるこの身体、人間の魔法ごときで傷付きはせん」

呟くダルーハの周囲で、歩兵らの屍の破片がさらに激しく、大量に飛び散り続ける。

標的がこうして自ら近付きつつあると言うのに、攻撃魔法兵士たちの狙いが乱れ始めているのだ。

怯えている、という事である。

「我が宿敵……赤き竜よ。貴様にもらった力で俺は、貴様よりも禍々しく忌まわしきものへと今……変わる……ッうおおおおお」失われた19年前の敵に語りかけながら、ダルーハは歩みを止めた。

身体が痙攣し、反り返る。突き上げられた胸板が、炎を、雷を、弾き散らせる。

メキッ……と己の肉体が鳴る音を、ダルーハは聞いた。

19年前、竜の返り血を浴びた時と同じだ。

皮膚が、筋肉が、いや骨格や内臓に至るまでが、メキメキッ！と音を発して変化してゆく。

人間の肉体、ではないものへと。

異変が声帯にまで達し、まともに声を出す事が出来ない。

だがダルーハは無理矢理、声を絞り出した。

「悪竜……転……身……」

一際、巨大な火の玉が、ぶつかって来た。

人間2、3人を一瞬にして灰に変えるであろう熱量の中、ダルーハの下半身でも甲冑が融解してゆく。腰鎧も、脛当てや軍靴も。下着までをも失い、隆々たる男の一物を丸出しにしながら、ダルーハは再び歩み始めた。メキ、メキッ……と、全身の至る所を変化させながらだ。

新たな鎧が、身体の内より迫り出して来る。そんな感じだった。やがて、爆炎を割って。ダルーハ・ケスナーの人間ではない肉体が、騎士たちの、攻撃魔法兵団の眼前に、ゆったりと進み出た。たくましい両肩が、胸板が、そのまま甲殻化している。

黒い、だが所々が燃えるように赤い、火山帯の岩石を思わせる外骨格。

表面をそんなふうに変化させながら、内部にも頑強な骨格を有する、異形の裸体。

その姿は、禍々しい甲冑に身を包んだ、人間ならざる騎士のようでもある。

首から上では、奇怪な仮面の如く異形化した頭蓋骨が、皮膚も表情筋もちぎり飛ばして露わになっていた。

巨大な2本の角を後ろ向きに生やし、小さな幾本もの角を鬣の形に並べた、悪鬼の頭蓋骨。がっちり噛み合わさった牙は、唇もないのに微笑しているように見える。

2つの眼窩は、右側のものだけが炯々と赤い光を宿している。左の眼窩は洞窟の如く、ただ暗い。竜の爪によって抉られた眼球は、肉体にいかなる変化が起ころうと、再生する事はないのだ。

竜の血を全身に浴びたる者の、真の姿。

それを目の当たりにして、最前列の攻撃魔法兵たちが、まず恐慌状態に陥った。

悲鳴を上げ、魔石の杖を捨てて尻餅をついてしまう者もいれば。喚きつつ、火の玉や電光を、あらぬ方向へ乱射し始める者もいる。最も多いのは、背を向けて逃走を始めてしまう者たちだ。

「逃げるなよ、虫ケラども……」



表情の失せた顔で微笑みつつ、ダルーハは口を開いた。

噛み合っていた上下の牙が離れて、その隙間からボォッ……と赤い輝きが漏れ始める。

ダルーハの体内で、赤く燃え盛っているもの。それが、迸った。炎、である。ダルーハの口から溢れ出し、攻撃魔法兵士たちを一気に包み込む。

広範囲に渡って燃え猛る赤色の中、攻撃魔法兵が少なくとも十数人。焼死体という段階を一瞬にして通過し、灰に変わった。

ために燃やすものを失い、急速に弱まってゆく炎。を突っ切って来た者たちがいる。

王国正規軍の騎士。6、7騎はいるだろうか。

「この化け物！」

「竜殺しの英雄が、魔物と化したか！」

「地獄へ堕ちろ怪物！」

口々に叫びながら馬を走らせ、その鞍上で、槍を構えたり斧を振りかざしたりしている。

「そうだ……それで良い、逃げるなよ」

迫りつつある騎士たちを励ましながら、ダルーハは軽く、右手を振るった。仲の良い友人の肩でも、叩くようにだ。

人の前腕の形をした、奇怪なる甲殻生物。のような右手が、軍馬の太い首を殴打する。

騎士が馬上から振り下ろす戦斧が、ダルーハの身体のだこかをかすめる、よりも早く。馬の首がパァンッ！と爽快な音を立ててちぎれた。

鼻面に馬具をはめられたままの頭部が、高々と宙を舞う。

首の失せた馬の屍が倒れ、騎士の身体がグシャッと地面に投げ出されて動かなくなる。

そんな様を一瞥もせずに歩みつつダルーハは、

「英雄とはいかなるものか、よく見せてやる。逃げるでないぞ」  
同じように、左手を振るった。

パンツ！　と馬の生首が舞い上がり、騎士が重い甲冑姿のまま落馬して、惨たらしい骨折の音を立てる。

変わらぬ速度でゆったりと歩を進めながら、ダルーハは両手を交互に動かし、馬たちの首を叩き続けた。人間の乗り物にされている彼らを、いたわるように。

3つ、4つと軍馬の生首が宙を舞い、重装備の騎士たちが次々と投げ出されて地面に激突。そのまま首の骨を折って絶命してしまう者もいる。

10頭近くの馬が、首無し of 屍に変わった時点で。騎士たちは、ようやく戦法を変えた。

騎馬での突撃をやめて馬を下り、徒歩で槍や戦斧あるいは長剣を構えつつ、じりじりとダルーハを包囲しようとする。

腑抜けと思っていた王国騎士団を、ダルーハは少しだけ見直す気になった。軍馬を無駄死にさせまいとするのは、騎士として実にまともな判断である。

「褒美だ……英雄たる者の力、もっともって見せてくれよう」

徒歩の踏み込みで突き出されて来た槍を、2本、3本。ダルーハは、蠅でも追い払うように叩き折った。

「竜殺しの英雄とは……」

呟きつつ、右手を無造作に振るってみる。

騎士が1人、甲冑もろともグチャリと原形を失い、吹っ飛んで行った。

「……竜よりも禍々しく忌まわしく、悪しきもの」

軽く左手を伸ばし、指先に触れたものを掴んでみる。

大柄な騎士の身体が1つ、掴み寄せられてきた。その頭部に、ダルーハの左手がメキメキと食い込んでいる。

甲殻類の節足にも似た五指が。喚く騎士の頭を、鋼の兜もろとも凹ませてゆく。

「……それを、思い知るが良い」

痙攣する騎士の身体を左手で引きずりながら、ダルーハは少し大

股に歩を進めた。

外骨格でガッチリと重く固まった足が、逃げようとして転倒した騎士の身体を、踏みつける。

鎧と肉と骨それに臓物を、一緒くたに押し潰す感触。をダルーハがグシャアッ！ と踏み締めた、その時。

右後方で、攻撃の気配が膨れ上がった。

ダルーハを上回る巨体の騎士が1人、高々と戦鎚を振り上げ、襲いかかって来る。

振り向きつつ、ダルーハは左手を振り上げた。掴まれている騎士の屍がブンッ！ と弧を描き、戦鎚を構えた巨体と激突する。

重い甲冑をまとう2つの人体が、激しくひしゃげながら一体化した。

2人分の鋼と肉の残骸が、一緒くたの塊となって転がって行く。

そちらの方向で、豪華な馬甲を着せられた1頭の軍馬が、竿立ちになっていた。

騎手が振り落とされ、無様に尻餅をつく。立派な鎧をまとった、だが中身の体格はあまり立派ではない人物。

先程ダルーハと少しだけ会話をした、司令官である。

「ひ……ひいいい、ままままま」

待ってくれ、とでも言いたいのであろう。歩み寄るダルーハに向かって、しきりに手を振っている。

その手を、ダルーハは掴んだ。そして引き抜いた。まるで雑草のように。

元々ろれつの回っていなかった司令官の悲鳴が、さらに痛々しく、ダルーハの耳には心地良く、響き渡る。

ダルーハは思う。弱い者いじめとは、本当に楽しいものだ。

この楽しみを、かつて独占し大いに堪能していた者がいた。

「見ておれ、我が宿敵……赤き竜よ」

泣き喚く司令官の、身体はどこかを掴んで引きちぎりながら、ダルーハは語りかけた。この場に、この世に、いない者たちだ。

「俺はこの世に、貴様以上の災いをもたらして見せる。全ての弱者を支配し、虐げ、あらゆるものを搾取してくれよう……そして見ておれ、レフイーネよ」

血が、脳漿が、臓物の汁が、噴き上がる。悲鳴はすでに止まっていた。

「お前の夫は、この世で最も忌み嫌われ、恐れられる存在となる。よく見ているがいい……ふ、ふっふふふふ、ふあはははははははははははははははは！」

笑いが止まらない。何故なら、自分は解放されたのだから。

ダルーハが何をしようと、止めてくれる者はもういない。

それは、解放されたという事なのだ。

## 第1話 魔獣人間

森の中、である。

森林地帯を貫いて流れる川の、岸边。

森の中にあつてこの河原一帯は開けており、今は大勢の人間が群れ集まっていた。

ざっと目で数えられる者、だけでも15、6人……いや20人はいるだろうか。

規格統一された鎧を身にまとう男たち。一応は、兵隊である。

だがその実態は、強盗・山賊の類と大して変わりはない。

「へへ……お、追い詰めたああ」

「もう逃げられませんぜえお姫様。庶民の怒りを、受けてもらいましょうかい」

「ああ畜生、綺麗な肌してやがんなあ。身体のお手入れに、どれくらい金かけてやがんだろうなあああ」

「許せねえな、お高くとまった王家のメスガキがよおお」

兵装をまとった荒くれ男たちが、口々に汚い言葉を吐きながら、包囲の輪を狭めつつある。

河原の大岩を背にして佇む、1人の少女に向かってだ。

純白のマントを羽織った、細く小柄な肢体が。ゴロツキ同然の兵士たちに囲まれながらも凛と、毅然と、立って身構えている。

まだいくらかは、発達の余地がありそうな身体ではあった。

青い胸甲に包まれた、小振りな胸。その可憐な双丘を精一杯、強調するかのように、健やかにくびれた腰。うっすらと走る腹筋の線と臍の凹みが、愛らしい。

尻周りに巻き付いたスカート状の腰鎧は小さく短く、可愛らしい尻の肉感を、あまり隠せてはいないようだ。

スラリと惜しげもなく露出した白い太股は、少しの弛みもなく引き締まっており、こうして動かず佇んでいるだけで躍動感を感じさ

せる。

膝から下は、やはり青色の脛当てとブーツ。若いカモシカを思わせる両の美脚を、清楚に活動的に彩っている。

日光を受けて清かな色艶を帯びた金髪が、マントと一緒に風に揺れた。

周囲に群れる兵士たちを油断なく見据える顔立ちには、美しさよりは、まだ可愛さの方が出過ぎているようだ。

頬の曲線は滑らかで柔らかく、顎は小さく綺麗に尖っており、鼻梁もすっきりと愛らしい。

丹念に手入れされた眉の下で、澄んだ大きな瞳が、怯えのない眼光を放つ。

薄桃色の可憐な唇が、兵士らに向かって言葉を紡いだ。

「お退きなさい、逆賊たち」

言い放ちながら少女は、左腰から吊られた物に、右手を伸ばした。青色の鞘を被った、やや細身の長剣。その柄を、繊細な五指がそつと握る。

「私に、人殺しをさせないで……お願いよ」

スラッ……と、鞘から刃が滑り出た。

うかつな斬り方をすると思われてしまいそうな、細く鋭利な両刃の刀身。

その根元、刃と柄の境界といった辺りに、黒っぽい宝石が埋め込まれている。

抜刀と同時に、その宝石が、うつすらと光を発し始める。

魔石である。人間の微弱な魔力を、増幅強化する性質を持った物体。

それが埋め込まれた剣を、少女は右手で構え、兵士たちに切っ先を向けた。

これまで剣士として腕を磨きつつ、攻撃魔法兵士としての修練も積んできた。

突き詰めれば、それは人殺しのため。なのだろうが、積極的に人

を斬ろうとは思わない。

「退きなさい。そしてダルーハ卿に伝えて下さい。このティアンナ・エルベツトを捕えるなり殺めるなりしたいのならば、卿が御自身で来られるようにと」

ティアンナ・エルベツトの下に、本来ならば、ヴァスケリアの王家である事を表す家系名が何区切りか長ったらしく続いている。ティアンナ自身、時々思い出せなくなるほどだ。

「そうはいかねえんですよ王女様」

兵士の1人が、へらへらと笑った。

「あなた様のお身柄をどう扱うかは、俺ら前線の下っ端どもに一任されちまってますからねえ。とにかく王家の連中は皆殺し、つてのがダルーハ様の御命令なもので」

「だけど姫様、アンタの命だけは助けて差し上げねえでもない」

「俺らの穴奴隷としてゲヘヘ、大事に飼ってあげますぜええ」

聞くもおぞましい言葉を発しながら、ダルーハ軍の兵士たちが、にじり寄って来る。

ダルーハ・ケスナー。竜退治の英雄。だが今は、その英雄としての力を、己の野心を満たす方向で振るっている。

そして、ここヴァスケリア王国を大いに蹂躪しつつある。

（ダルーハ卿、貴方にも言い分はありでしょう……）

ここにはいない逆賊の総大将に、ティアンナは心の中で語りかけた。

（私たちヴァスケリア王家の治世が、民衆にとって理想的なものであった、などとは確かに言えません。我々に、私に、貴方を責める資格はないのでしょうか……）

「それでも私は申し上げますダルーハ卿、貴方は間違っていると！」

心中の語りを、肉声の叫びに変えながら、ティアンナはくると細身を踊らせた。艶やかな長い金髪が、宙を撫でる。

と同時に、閃光が走った。

間近に迫っていた兵士が1人、噴水のように鮮血をしぶかせた。

その身体が鎧もろとも、真つ二つになって左右に倒れてゆく。

凜とした眼光を、他の兵士たちにも叩き付けながら。ティアンナは、斬撃の手応えが残る右手で、微かに長剣を揺らめかせた。

その刃が、ぼんやりと白い光を帯びている。

ティアンナの微弱な魔力が、魔石によって増幅強化され、刀身に流れ込んでいるのだ。

魔力の光。それが細身の長剣に、物理を超えた強度と破壊力を持たせ、少女の腕力でも人体の両断が可能となる。

「逃げるのならば追いはしません……だから何度でも言います。退きなさい」

「おっ、おおおおお！ なぁんか生意気なコト言ってるうううう！」

獣同然の兵士たちが、いよいよ本格的に、ティアンナに迫り始めた。

「ぶっブチ込む、その生意気なお口にイッ！」

「お口だけじゃねえ、いろんな穴アぐっちゃぐちゃに抉ってブチ殺す！」

「だアから殺しちゃ駄目だって言ってるんだろオ？ 肉便所だよ穴人形だよオオオ！」

憎悪と劣情の叫び。と共に幾本もの槍や剣が、あらゆる方向からティアンナを襲う。

殺すため、ではない。少女を押さえつけて動きを止める、ために振るわれる武器。

いや、素手で飛びかかって来ている愚か者もいる。

「私を……馬鹿にしないでッ！」

ティアンナは叫び、踏み込み、身を翻した。

それと共に、刃の輝きが閃いた。

一瞬の光の弧が、2つ、3つ。少女の小柄な細身の周りに、生じては消える。

切断された槍先が、何本も宙を舞った。だけでなく、血飛沫も散



った。

兵士たちが5人、6人、次々と倒れてゆく。

倒れゆく身体から、ころころと生首が転げ落ちる。

辛うじて斬撃を逃れた兵士たちが、少女に襲いかかろうとしていた動きを止めて、立ちすくんだ。

彼らにピタリと切っ先を向けて、ティアンナも動きを止めた。そして言い放つ。

「どうあっても退かないのなら……戦うつもりであるならば。つまらない事は考えず、私を殺すつもりで挑んで来なさい」

明らかに怯んでいる兵士たちの群れに、白く輝く長剣をまっすぐ向けながら。ティアンナは言い、そして念じた。

「私も、もはや躊躇いはしません。王家の者として……貴方たちを、処刑します」

刀身の根元に埋め込まれた魔石が、光を発する。

自分の体内の微弱な魔力が一気に膨れ上がり、右手から剣に流れ込んで行くのを、ティアンナは感じた。

ゴォッ！ と炎上の響きが起こった。

ティアンナの緊迫した美貌が、赤く鮮烈に照らし出される。

魔石の剣。その細身の刃が、炎に包まれていた。

松明のようになった剣を構え、ティアンナは再び舞った。

軽やかな踏み込み、と共に、燃え盛る刃が横薙ぎに閃く。

兵士が5人、悲鳴と同時に爆散した。

生首が、手足が、胴体の破片や臓物が、炎に包まれ焼かれながら、火山弾の如く飛び散る。

それを避けるように、ティアンナは跳躍した。

着地と同時に一閃、踏み込みと共にもう一閃。

純白のマントと長い金髪が荒々しく舞い、それに合わせて炎の剣が連続で、斬撃の弧を描く。

兵士たちの生首が、手足が、次々と宙を飛びつつ、灰と化してさらさらと降る。まるで粉雪のように。

森の中から続々と、ダルーハ軍の兵士たちが現れていた。

ティアンナに殺された分が、即座に補充されてゆく。

森林地帯全域に散らばっていたのであろう兵士たちが、この河原に集結し始めていた。

ティアンナ王女を捕える、あるいは殺すために。

「来るといいわ……私は、逃げも隠れもしないっ！」

ティアンナは叫び、念じ、そして身を翻した。半裸に等しい細身がクルリと躍動し、巻き付くように金髪が舞う。

それと共に、炎の剣が弧を描いた。

右下から左上へと、新月の形に火炎が奔る。

その紅蓮の弧が高速で伸び、河原全体を一瞬、駆け抜けた。群れるダルーハ軍を、薙ぎ払いながらだ。

河原のあちこちで兵士たちが、炎上しながら吹っ飛んだ。そして焦げ崩れ、砕け散る。

自分は今、殺戮を行っている。ティアンナは強く、そう思った。

もはや何の綺麗事も言えない。王族たる自分が、ヴァスケリア国民である事には違いがない男たちを斬殺し、あるいは焼き殺しているのだ。

同じような殺戮を、数日前にも行った。

王都城外でダルーハの叛乱軍を迎え撃った際。王国正規軍の一員としてティアンナも戦い、ダルーハ軍の兵士たちを、こうして大いに虐殺した。

自惚れるつもりはないが、味方の士気を多少なりとも高める役には立ったのではないか。とティアンナは思っている。

あの戦は、王国正規軍が圧倒的に優勢だった。

ダルーハ・ケスナー自らが戦場に突っ込んで来るまでは、だ。

（私はあの時、逃げてしまった……大勢の兵士たちを戦場に残して……うん？）

暗い記憶に苛まれかけたティアンナの視界に、奇妙なものが入った。

岸边に、人が倒れている。

兵士の死体、ではない。ティアンナがこの河原に逃げ込んで来る前から、倒れていたようだ。

若い男の、裸体だった。

河岸の岩の上に、漂着物の如く打ち上げられている。どこからか流されて来たようである。

しっかりと筋肉が付いて引き締まった。力強く若々しい裸の身体。その肩や背中に、濡れた髪が貼り付いている。男性にしては少し長めの、赤い髪。

死体、ではないようだった。美しく筋肉の形が浮かんだ肌には、健康的な血色がある。

気を失った、全裸の若者。

まだ大量の敵兵が周囲で生き残っていると言うのに、ティアンナは思わず見入ってしまった。

こんな状況でなければ、落ち着いて介抱してやりたいところである。

「殿方の……裸……」

魔石の剣を振るいながら、ティアンナは呆然と呟いた。  
だが無論、今はそんな場合ではない。

「こおの役立たずども、小娘1匹に何を手間取ってやがるかああ」  
怯む兵士たちを蹴散らすようにして、巨体が1つ。地響きの如き足音を立て、進み出て来ていた。

人間なのかどうか疑わしくなるような、でっぷりと肥えた巨漢である。

頭髮の1本もない頭は瘤状に膨れ、目鼻口の並び方もどこか歪だ。筋肉太りした身体のアちこちに、鎧の切れ端を貼り付けている。

その巨体に見合う甲冑が、なかったのだろう。

兵士たちが、ざわついた。

「た、隊長……」

「よく見てろ。この俺様がよお……オンナの虐め方ってもんを教

えてやつからよお」

どうやら隊長であるらしい禿頭の巨漢が、得物を構えた。

巨大な鉄板のような、両刃の剣。それが、のろのろと振り上げられる。

振り下ろされるのを待つてやる理由もなく、ティアンナは1歩だけ踏み込んだ。

そうしながら炎の剣を、左下から右上へと一閃させる。

魔石が輝き、刀身にまわりついていた炎がゴォオッ！ と激しく空中に燃え広がった。

その紅蓮の荒波が、隊長を一気に包み込む。

大型剣を振り上げた姿勢のまま、巨体が炎に包まれ、肉の焼ける異臭を発した。

炎の轟音に負けぬ悲鳴を発しながら、隊長はしかし死ねずにいた。燃え盛る炎の中で、巨体がまだ原形をとどめながら、苦しげにもがいている。

楽にしてやるべくティアンナは、身を低くして両手で剣を握った。炎の消えた刀身が、雷鳴を発しながらバリバリと光を帯びる。

目に見える、放電現象だった。

電光をまとう刃を構え、ティアンナが踏み込もうとした、その時。隊長の巨体を包む炎の中から、何かが飛び出した。鞭のような、細長い高速の物体。

それが何であるかを目で確認する前に、ティアンナは反射的に剣を振るった。

電光を帯びた刃が、襲い来る何かを打ち据える。

切断は出来なかった。叩いただけだ。

打ち払われ、微量の電光を流し込まれつつ、空中でうねっているもの。

それは、1匹の蛇だった。男性の腕ほど太い、大蛇。炎の中から伸びて来ている。

燃え盛る隊長の身体から、もう1匹。いや2匹。炎を蹴散らすよ



王都城外のあの戦でも、何体か投入されていたという。だが目の当たりにするのは、ティアナは初めてだった。

魔獣人間。ヴァスケリア王国正規軍と比べて圧倒的に兵力の劣るダルーハ軍が、この世ならざる力をもって造り上げた、生ける兵器。その魔獣人間としての正体を現した隊長が、凶暴に嬉しげに叫んだ。

「ゲェヘヘそうよ、俺様こそは栄光あるダルーハ軍最強の魔獣人間サイクロヒドラ……もらったぜ姫様よオオオオオオオ！」

絶叫に合わせて、8匹の大蛇が、高速で空中を泳いだ。

電光の剣を振り上げようとしたティアナの両手に、ビシッ！と衝撃が巻き付いて来た。

大蛇の1匹が、少女の両手首を絡め取り、束ね、そして思いきり持ち上げる。

「くっ……！」

気丈な闘志に満ちていた少女の美貌に、狼狽の表情が浮かんた。頭上で交差した格好のまま、ティアナの両手は、大蛇によって拘束されている。

「へっへへ……ずいぶん暴れてくれたなあ嬢ちゃんよ。ホント可愛かったぜええ」

巨大な1つ目を血走らせて笑う、魔獣人間サイクロヒドラ。その巨体を狙ってティアナは、

「こっ……このッ！」

右足を跳ね上げた。蹴り。だが命中する前に、他2匹の大蛇がシユルツと動いた。

回し蹴りの形に高々と跳ね上がった少女の右足が、そして軸となつた左足が、絡め取られた。青い脛当ての上から、大蛇が幾重にも巻き付いている。

捕えられた両脚が、そのままグイッと左右に開かれた。

「きゃっ……！」

可憐な唇から、黄色い悲鳴が漏れてしまう。

3匹の大蛇が、ティアンナの身体を宙に持ち上げていた。

1匹が両手を縛り束ね、2匹が、じたばた暴れる両脚をゆっくり左右に広げてゆく。

「やっ……やめなさい！ このっ！」

柔らかな感じに引き締まった両の太股が、大蛇の力に抗って、元気に悶えた。

その間では、清楚な白い下着が、愛らしい丘の形に盛り上がっている。

兵士たちが、そこに嫌らしく視線を注ぎながら群がって来た。

「へ……っへへへへ、たまんねえ格好ですなあお姫様」

「よくも散々やってくれやがったなあ……もっもう、ただの犯られ方じゃ済まねえぞお？」

「死んじまった連中の分まで、たっ楽しませてもらうからよおギへへへへ」

「おらああ、寄って来るんじゃねえ役立たずどもがあああ！」

サイクロヒドラが、残り5匹の大蛇を暴れさせて、兵士らを追い払う。

「この姫様は俺がいただく！ テメエらあそれ見て自分でイジってろやああ！」

「そ、そりゃ殺生ですぜ隊長！」

「ねえ触ったり揉んだりするくらいイイでしょお隊長様あ」

「し、しゃぶったり、しゃぶらせたりするくらいなら、いいでしょおおお？」

「へへへ、うえっへへへへお姫様ああ」

捕われの少女に、未練がましく群がりつつある兵士たち。

「嫌………ッ！」

ティアンナの声が、顔が、引きつった。

凜とした闘志に満ちていた美貌が、ほんのりと赤く染まる。初々しい、羞恥の赤みだ。

萎縮しかけた勇気を、ティアンナは必死に奮い立てた。

「……おっ、お前たち……っ！」

群がり迫る兵士たち、を睨みつける瞳から、じわっ……と綺麗な涙が溢れ出す。

その時。

「これは……夢か……？」

声がした。若い、男の声。

河岸の岩に、漂着物のように打ち上げられていた、裸の若者。が、よろよろと身を起こし始めている。

「あまり、良い夢ではないな……ずいぶんと汚らしい者どもが見える……」

美しく筋肉の締まった裸身が、どこを隠す事もなく立ち上がる。自分が裸である事に、この若者は、もしかしたら気付いていないのかも知れない。

「……貴様らの事だよ。わかっているか？」

弱々しく呻くようだった若者の口調が、次第にしっかりしたものになってゆく。

顔が、ようやく見えた。

魔獣人間に捕えられたまま、ティアンナは思わず見入った。

（綺麗……）

そんな、あまりにも単純な思いが、まず胸の内に満ちた。

年の頃は、ティアンナよりもいくらか上。20歳前後といったところであろう。

男性にしては少々長めの赤い髪に囲まれた容貌は、甘美なほどに秀麗で、一見すると女性的である。

だが明らかに男性そのものの、芯の太さのようなものも、間違いないがある。

眠たげだった両目が、鋭い眼光を孕んで、魔獣人間を、兵士たちを、睨み据える。

「何だ、てめえ……」

睨まれた兵士らの何人かが、裸の若者に向かって行った。



「てつきり死体かと思ってたぜ。野郎、おとなしく死んだふりしてりゃいいものを」

「見て見ぬふりして、よく見てりゃいいものをよおお」

「……黙れよ、虫ケラども」

若者の声が1段低くなり、どこか物騒な響きを帯びる。

「俺はどうも、いろいろな事を忘れているらしい。何故こんな所にいるのか、全く思い出せん……が今、1つだけ思い出した」

非武装のまま、裸のまま。若者は逃げようとも、どこか隠そうともせずにいる。

「俺は、残虐なのだ……よって貴様たちを皆殺しにする」

（綺麗……）

魔獣人間に捕えられ、あられもなく両脚を開かれた姿勢のまま。

ティアンナは呆然と、半ば陶然と、心の中で呟いた。

（殿方の裸……とっても、綺麗……）

## 第2話 裸の虐殺者

ガイエル・ケスナー。

という自分の名前だけは、辛うじて覚えている。

その他の何もかも、自分は忘れてしまった。が、思い出すのは後でもいい。

記憶など取り戻す前に、早急にやらなければならない事がある。下腹部から8匹の大蛇を生やした、単眼の魔獣人間。に捕われている少女を、一刻も早く助けなければ。

（魔獣人間……だと？）

1つ、ガイエルは気付いた。

魔獣人間というものを、自分は知っている。

この世で最も忌まわしくおぞましい者たち。

力を求めるあまり人間である事をやめた、生ける殺戮兵器。

その魔獣人間が、言った。

「頭のおかしい野郎が出て来やがったなア……けど男の裸になんざ興味はねえ。やっぱ女の裸だよ女女女オンナ！ ああ全部脱がしちまおうかなー、それとも着せたまんまブチ込んじまおうかなあいろいろな穴によォー」

3匹の大蛇に絡め取られ吊り上げられた少女。の周囲で、他5匹の大蛇が凶暴に嫌らしくうねり、牙を剥く。

「いっ……嫌……ッッ！」

少女が身をよじり、歯を食いしばり、気丈にも悲鳴を呑み込んでいる。

ガイエルは。小石だらけの河岸を裸足で蹴りつけ、駆け出した。

「やめろ……」

「おぉーっと待ちなよ兄ちゃん」

魔獣人間配下の兵士たちが、群がって行く手を阻む。

「そんな格好で正義の味方ぶってんじゃねえよバァーカ」

「男はさつさと殺して、お姫様で楽しませてもらうぜーえ」

「お、俺あどっちかってえと……こっちの兄ちゃんの方がよお、げっへへへ」

「い、いいケツしてんなあ兄ちゃんよオオ」

「たったまんねえー、そのキュッてした感じの腹筋が、フトモモがああ」

「美味そうなモノぶら下げやがってよおお、くくく喰ってやるぜエー兄ちゃん」

口々に世迷い言を吐く兵士たちに向かって、ガイエルは跳躍した。がっしりと筋肉の詰まった右の太股が、脛とふくらはぎと足首が、槍の如く伸びる。飛び蹴り、である。

兵士が1人、真っ二つになった。

宙を舞う上半身と、倒れ伏す下半身を蹴散らし、着地するガイエル。右の裸足に、臓物が絡み付いている。

それを踏みちぎって、ガイエルは駆ける。群れる兵士らの、まったく中へと向かって。

駆けながら、右の拳を突き上げる。

兵士の身体が1つ、殴り倒された。首が、おかしい方向に曲がっている。

歩調を落とさずガイエルは踏み込み、前方の兵士に左肘を叩き付けた。

眼球が2つ、飛び出して宙を舞った。潰れた顔面から血の涙を垂れ流し、兵士が倒れる。

「てめ……っ！」

「野郎！ おとなしくケツ出してりや命だきやあ助けてやったのによおおお！」

「ああああ、やっぱ男は殺さねえと駄目だあなーッ！」

凶暴な怒声と共に、幾本もの槍が、剣が、様々な方向からガイエルに襲いかかる。

左右の素手を、ガイエルは無造作に振るった。まるで蠅でも追い

払うかのように。

様々な方向から降り注ぐ槍が、剣が、ことごとく折れて飛んだ。櫂の長柄や鋼の刃を、両手で無造作に叩き折りながら、ガイエルは裸身を翻した。

すらりと引き締まりガツシリと筋肉の付いた左脚が、後ろ回し蹴りの形に高速で弧を描く。

兵士たちが高々と吹っ飛び、あるいはその場に膝や尻餅をついた。ある者は碎けた下顎をだらりと垂らし、ある者は眼球をぶら下げ、ある者は血を吐いている。

そして皆、弱々しく痙攣しながら、死体へと変わってゆく。

「ふむ……」

自分は今、武器も持たずに人間を殺戮している。

それを実感しつつガイエルは、ある事を思い出しつつあった。

「俺は、どうやら……むっ」

ゆっくりと思い出している場合でもなかった。

魔獣人間が、5匹もの大蛇を、一斉に伸ばして来たのだ。

「てめ、てめえは！ 逆らうかこの俺に、この魔獣人間サイクロヒドラ様に！ そいつあつまりダルーハ様に逆らうって事だぞゴルアわかってんのかあああああああッ！」

超高速で空中を泳ぎながら牙を剥き、襲いかかって来る大蛇たちに向かって、ガイエルの方からも踏み込んで行く。そして両腕を振るう。

左右の前腕が、メキッ……と震えながら周囲を薙ぎ払う。

牙を剥いた大蛇の生首が、5つ。ぼとぼとと落下した。

「ぎゃ……あ……っ」

頭部の失せた5本の蛇体を苦しげにうねらせ、単眼を大きく見開きながら、魔獣人間サイクロヒドラが悲鳴を漏らす。

「……1つ、思い出した事がある」

振り切った両腕を軽く広げ、ガイエルは言った。

広げた両手に、いつの間にか何かが被さっている。

赤い、手甲。節くれ立った五指の先端は尖り、まるでカギ爪のようだ。

手首の辺りから肘にかけて、鋭利なヒレが生えている。左右のそれが、今は大蛇の血でヌラリと汚れている。

……手甲ではない。左右の前腕で皮膚が、筋肉が、赤く甲殻状に変化し、刃物のようなヒレを生やしているのだ。

「俺は、どうやら……人間、ではない」

魔獣人間。自分も、そうなのか。

目の前で少女を捕え虐めている、この醜惡下劣な怪物と。自分は、同類なのであろうか。

そこまでは、まだ思い出せない。

ただ、気になる事はあった。今サイクロヒドラがわめいた言葉の中に、1つだけ、聞き流せない単語があったのだ。

「ダルーハ様、とは一体何者だ」

異形化した右手を軽く掲げ、甲虫の節足に似た五指をカチカチと鳴らして見せながら、ガイエルは訊いた。

「その名には、聞き覚えがある……俺の頭の中で、実におぞましく響く言葉だ」

「聞き覚えがある、なあ？ バカ野郎、ダルーハ様の事知らねえ奴なんかいねえよ今この世にゃあよおお！」

サイクロヒドラが叫ぶ。と同時に5匹の大蛇の頭部が、ニョキニョキと一斉に急速に再生し、牙を剥いた。

そして多方向から襲いかかって来る……のを待たずにガイエルは踏み込み、左腕を振るった。

怪魚のヒレに似た有機質の刃が、一閃した。

少女の両手両足に巻き付いていた3匹の大蛇が、滑らかに切断された。

「きゃっ……」

解放され、落下して来た少女の身体を、ガイエルは両腕で抱き止めた。

そうしながら身を翻す。

力強くしなやかな裸身が、少女を抱いたままギュルツとねじれて回転し、左足が後ろ向きに跳ね上がって弧を描く。

斬撃にも似た、後ろ回し蹴り。

サイクロヒドラの肥えた腹部が、ザツクリと裂けた。

血と脂肪の混ざり合ったものが大量に噴き上がり、臓物が溢れ出して宙を舞う。

表記不能な悲鳴を上げて、サイクロヒドラがのたのたと後退りをした。

魔獣人間の血と脂にまみれたまま、ガイエルの左足がゆったりと着地する。

人間の素足、ではなかった。

たくましく筋肉の締まった太股の下で、膝が、脛が、ふくらはぎが、足首が。刃の生えたブーツでも履いたように、異形化している。赤い、甲殻質のブーツ。長く鋭い爪は、まるで地面を握り潰すかのようだ。

右足も、同じ形状に変化している。

両手両足のみを生体凶器化させた、裸の男。

中途半端に人間の形状を残したそんな怪物に抱き上げられたまま、少女が息を吞んでいた。

細く小柄でしなやかな、どこか仔猫を思わせる柔らかい感触が、ガイエルの両腕と胸の間に満ちている。

しばらくこのまま抱擁していたい、という誘惑を、ガイエルは無理矢理に断ち切った。

「あ、あの……」

「すまないな、こんな手で貴女の身体に触れてしまった」

ガイエルは少女の身体を地面に下ろし、立たせ、背後に庇った。

「……早く逃げろ」

「そうはいかねえ、逃がさねえよ……逃がすわきゃねえだろおおーがッッ！」

サイクロヒドラが単眼を血走らせ、わめいている。

溢れ出した臓物が、腹部の裂傷にズルズルと吸い込まれてゆく。

「ダルーハ様がなアおっしゃったんだよ、王族は皆殺しだってなあ。見つけ次第どうゆう殺し方してもイイってなああ」

臓物を吸い込んだ裂け目が急速に塞がり、叩き斬られた蛇たちも、凄まじい速度で生え変わる。

あっという間に再生回復を終えた魔獣人間が、ぎらついた1つ目で少女を凝視し、8匹の大蛇を激しくうねらせて絶叫した。

「だからそのお姫様はよお、俺様がおーぐちゅんぐちゅんにやり殺す！ 身体じゅうのいろんな穴にコイツらをブチ込んでなああああ！」

聞かず、ガイエルはすでに跳躍していた。

空中で高々と右足を振り上げ、振り下ろす。

刃状の爪を生やした踵が、鉈の如くビュツと空気を裂く。

サイクロヒドラの巨大な単眼が、グチャツと潰れて飛び散った。

ガイエルの右踵が、叩き込まれていた。

一斉に少女を襲おうとしていた8匹の大蛇が、うねりながら硬直する。

よろめいたサイクロヒドラの身体を左足で蹴りつけ、右踵を引き抜き、ガイエルは裸身を反らせて宙返りをした。

そして着地し、硬直した大蛇の何匹かをグシャツと踏み潰す。

原形を失った顔面の上半分をグジュグジュと蠢かせながら、サイクロヒドラが呻く。

「てめ一体何モンだ……魔獣人間か……そのくせダルーハ様に逆らおうってのかああ」

「違うな。俺は魔獣人間ではない」

うねり暴れる大蛇たちを、凶器化した足で踏みにじりつつ、ガイエルは言った。

「そのあたり、まだよく思い出せんのだが。これだけはわかる……今わかった。俺はな、作り物の怪物に過ぎぬ貴様ら魔獣人間などよ

りも、ずっと禍々しく悪しきものだ」

「ほざくんじゃねえ、とにかくそのお姫様はテメエになんざあやらねえよ俺様のだ！俺の肉奴隷だよ穴人形だよ、やり殺して楽しむ生きたオモチャだよおおおおお！」

わめく魔獣人間の口元に、ガイエルは左拳を叩き込んだ。

サイクロヒドラの、上下の顎が一緒くたに潰れた。ちぎれかけた舌が、だらりと垂れ下がる。

魔獣人間の顔面の、下半分は潰れたが、上半分は再生を終えていた。

脳天の奥から盛り上がって来た新たな眼球が、憎悪と劣情に血走って、少女を睨む。

執拗な再生能力を有する巨体に向かってガイエルは、下から上へと右手を一閃させた。

手首から肘にかけて生えた刃のヒレが、その一閃と共にメキッと巨大化する。

臓物の汁と脳漿が、混ざり合いながら大量に噴き上がった。

腹部から脳天まで、サイクロヒドラの身体が、縦一直線に切断されていた。

ほぼ真つ二つになった巨体の断面から、ドプドプツと臓物が溢れ出す。

それらが無造作に引きちぎりながら、ガイエルは語りかけた。

「俺はな、自分のこの馬鹿力の使い方を……どうもまだ今ひとつ思いません」

隙あらば少女に襲いかかろうとする大蛇たちを踏み潰しつつ、手を動かす。

その度に、汚らしいものが飛び散る。体液の飛沫、臓物、肉片。

「もっと上手い使い方が、あるはずなのだ。それさえ思い出せば魔獣人間よ、貴様をもう少し楽に死なせてやれるのだが」

語りかけながらガイエルは、ぼんやりと思いつつあった。

自分は強い。だがそれは、この下等な魔獣人間と比べての事だ。



今の自分の、この程度の強さなど、全く通用しない相手がいた。

（俺は……）

引きちぎり、叩き潰し、蹴り碎く。

半ば作業的にそれらを行いながら、ガイエルは今、ある記憶に辿り着こうとしていた。

（その男に、俺は……負けた……？）

うっすらと甦りかけた、敗北の記憶。自分は一体、誰に負けたのか。

「どうも……な。まだ思い出せん。力の使い方を」

ガイエルは重く暗く、微笑んだ。

「だから罅り殺しになってしまった。すまんなあ……本当に、すまん」

心から謝罪をしつつ、左手を振るう。刃状のヒレが一閃。

サイクロヒドラの、もはやどの部分だかわからなくなった何かが、断ち切られた。

魔獣人間は、完全な細切れと化していた。

肉片か臓物の断片か判然としないものたちが、無数のナメクジの如く地面を這いずり、弱々しく蠢きながら力尽き、干涸びてゆく。

もはや死体とも呼べぬ、萎びた残りカスの集まり。

そんな有り様となったサイクロヒドラを見下ろし、ガイエルは一つ息をついた。そして思う。

（駄目だ……こんな戦い方では）

こんな雑魚同然の魔獣人間1匹を殺害するのに、ここまで時間をかけているようでは。とてもあの男には勝てない。

まだ顔も名前も思い出せぬ、あの男には。

「まあ今は、そんな事よりも……だ」

ガイエルは、周囲を見回した。

魔獣人間の配下であった兵士たち。の最後の1人が、斬り殺されたところだった。

ガイエルが助けた、少女によって。

どうやら魔石が埋め込まれているらしい細身の長剣を、少女がゆつくりと鞘に収める。

「見事なものだ」

ガイエルは声をかけた。

河原のあちこちで死んでいる兵士たちの中には、ガイエルが素手素足で叩き殺した者ばかりでなく、滑らかに斬殺された者や、焼き殺されて灰に変わった者もいる。

魔獣人間がいなかったら自分の助けなど必要なかっただろう、とガイエルは思った。

「剣技と攻撃魔法の融合、か……これだけの技量を身に付けるには、さぞかし血の汗を流した事だろう」

「……他に、打ち込めるものありませんでしたから」

少女が微笑んだ。どこか寂しげな、翳りを帯びた微笑。

こんなふうに微笑む女性を1人、ガイエルは知っている。

思い出せない。だが確かに、その女性はいる。あるいは、いた。

少女が顔を上げ、愛らしく首を傾げた。

「どうか、なさいましたか？」

「いや……」

ガイエルは咳払いをした。

「……貴女は、普通に俺と話せるのか。俺が恐くはないのか？ たった今、反吐が出るような髑髏殺しをやらかした俺が……人間ではない、この俺が」

「私は、貴方よりもずっとおぞましい怪物に、髑髏殺されるところだったのよ？」

少女が微笑んだ。明るい、だがやはり翳りのある笑顔。

「貴方は、私を助けて下さいました。それが全てです……本当に、ありがとうございます」

「……別に、人助けをしたわけではない」

応えつつガイエルは、右手を軽く掲げてみた。

まるで人の前腕の形をした奇怪な甲殻生物のような、赤い生体凶

器。

魔獣人間を惨殺する役には大いに立ってくれたが、ひとまず戦いの終わった今は、特に必要のないものである。

ガイエルがそう思った瞬間、変化が生じた。

「1つ思い出した……俺は、下劣なる者どもを見ると殺戮せずにはいられなくなる性格らしい。だから殺した。それだけだ」

刃状のヒレが、畳まれるように縮まってゆく。

甲殻状に隆起していた前腕が、細く柔らかく変化してゆく。と言うより、元に戻ってゆく。

右腕だけではない。左腕も、両足も。人間ガイエル・ケスナーの、しなやかな素手素足に戻っていた。

この異形化は、己の意思である程度、制御出来るものであるようだ。

「要するに……俺は、残虐なのだ。感謝などしてはいけない」

少なくとも外見上はまともな人間の裸身に戻った身体を、ガイエルはくると翻して少女に背を向けた。

無理矢理に未練を断ち切って、さっさと歩き出す。

自分のような人外の怪物が、こんな美しい少女の傍にいてはならない。

「どこの姫君かは知らんが、さっさと帰る事だ」

「あ、あの……」

そんな声を出しながら少女が、ガイエルの背中を、と言うより尻を、見送っている。

「殿方の、お尻……とっても綺麗……」

「何だと？」

己の耳を疑いながら、ガイエルは思わず振り返った。

少女が、慌てふためいている。

「あっいや、そうではなくて！ 今の私に、帰る場所はありません！」

「……考えてみれば、俺もそうだ」

ここを立ち去って、どこへ行けば良いのか。どこへ帰れば良いのか。それも、ガイエルは思い出せずにいるのだ。

この少女は、いかなる事情があって、帰る場所がないなどと言っているのか。

王家だのお姫様だのと、魔獣人間は言っていた。

武芸にのめり込んだ姫君が、腕試しの家出でもしているのか。

いや。あの魔獣人間は、こうも言っていた。王族は皆殺しだ、と。ダルーハ様と呼ばれる何者かが、その皆殺しを命じているらしい。

(ダルーハ……)

心の中で呟いた途端。とある記憶の断片が、微かな頭痛を伴って甦った。

ガイエルは、頭を押さえた。

たった今ズタズタに惨殺した魔獣人間、など全く問題にならないほど強大な何者かと、自分は確かに戦った。

そして敗れ、断崖から谷川へと叩き落とされた。

どれほどの時間、どれほどの距離を流されたのか、とにかくこの森の中の河原に漂着し、目覚めて今、この少女と出会ったのだ。

「1つ訊きたい……ダルーハ様、というのは一体何者なのだろうか？」

「本当に記憶を無くされているようですね。この王国で、ダルーハ卿の名を知らぬ者はいません」

死んだ魔獣人間も先程、同じような事を言っていた。

この王国。確か、ヴァスケリアというのが国名だ。辛うじてガイエルは覚えていた。

「ダルーハ・ケスナー卿は私にとって、憧れの殿方でした。あの方は、邪悪なる竜を討伐し、捕われていた王女を助け出し、その王女と結婚する……などという今時、吟遊詩人でも謡わないような事を成し遂げられたのです。私が生まれる前の話ですが」

夢見るような口調で、少女は語った。

「正確には、今から19年前と聞いております。私が物心ついた頃

には、ダルーハ卿はすでに、生きながらにして伝説となっておられました。竜退治の英雄ダルーハ・ケスナー。王国内外に響き渡るその名を、民衆は憧れをもって、王侯貴族の者たちは幾らか苦々しい思いで、聞いていたようです」

「なるほど、竜退治の英雄か」

この世界には、魔物とか怪物とか呼ばれる危険な生命体が数多おり、その大部分が人間に害をなす。

中でも、竜。これが現れた国は、1年で滅びると言われている。

魔物・怪物の頂点に立つ存在。一息の炎を吐くだけで武装兵士の数個部隊を焼き払う、巨大なる魔獣。

人間から金銀財宝を奪い、食物を奪い、命を奪い、何の戯れにか時折、若く美しい娘を奪ったりもする。

まさに災厄そのものと言うべき怪物、それが竜なのだ。

これを退治した者が英雄と呼ばれるのは、当然であった。

ダルーハ・ケスナーなる人物は、そんな竜殺しの英雄であるらしい。

19年前と言えば、ガイエルが生まれた年である。

「その英雄が、何かくくでもない事をやり始めたというわけか」

「はい……竜退治から19年を経た今のダルーハ・ケスナーは、逆賊です」

少女の口調と表情が、暗く沈んだ。

「竜をも打ち倒したその力をダルーハ卿は、己の野心を満たす方向で振るい始めたのです……王都エンドウールはすでに陥落しました。3日ほど前、ダルーハ卿の軍勢によって」

「やはり……貴女は、王族なのか？」

「……ティアンナ・エルベツトと申します。ヴァスケリア国王デイン・ザナード3世の第6女……と言っても王都が陥落した今となつては、王家の身分になど意味はありませんね」

「ダルーハ卿とやらは、そうは思っていないようだな。魔獣人間など使ってまで、王家の生き残りを狩り出そうとしている」

言いながらガイエルは、己の側頭部の辺りを軽く掴んだ。

ダルーハ、という名を口にする度に、微弱な頭痛が電流の如く、頭の中を駆け抜ける。

「……貴女はこれからどうするつもりなのか、訊いてもいいだろうか」

頭痛を握り潰すように頭を押さえつつ、ガイエルは言った。

「逆賊ダルーハ・ケスナーを打倒して王国を取り戻す意志があるのか。あるいは王族の身分など捨て去って、ダルーハの手の届かぬ所まで逃げるのか。どちらを選ぶにしても……俺は、ささやかながらティアンナ姫の力になれると思う」

「えっ……」

少女の顔に、戸惑いが浮かぶ。

ガイエルは気恥ずかしさに耐え、微笑んで見せた。

「恩を売るつもりはないんだ。俺は今、記憶を取り戻したい。そのためには、とにかく何かしら行動をしなければならないと思う。その行動が、ティアンナ姫の護衛であっても、俺は一向に構わない……貴女は、構うだろうか？ まあ迷惑だろうな確かに」

「そんな事は……」

「俺は初対面の姫君に、実に図々しい頼み事をしているのさ。記憶を取り戻す手伝いをして欲しい、とな……どうか力を貸していただきたいのだが」

全裸のまま、ガイエルは頭を下げた。

「そ、そんな、そのような」

ティアンナ姫が、慌てふためいている。王家の人間にしては、他人に頭を下げられる事に、あまり慣れていないようだ。

「……私は王族として、ダルーハ卿と戦わなければならないのでしようね本当は。けどもしかしたらダルーハ卿の方が、今までの王家よりも良い政治をしてくれるかも知れません。英雄と呼ばれた、あの御方なら」

そんな事は絶対でない、とガイエルは言っけししまいそうになった。

民衆を虐げる。あのダルーハという男にとっては、それが政治なのだ。

ガイエルは、またしても頭を押さえた。

（何だ……俺は、知っているのか？　ダルーハ・ケスナーを……）

「ヴァスケリア王家による統治は、理不尽なものでした。民衆はダルーハ卿の叛乱を、歓迎しているかも知れません。王家の再興など、誰も望んではないでしょう……それを理由に、このまま遠くへ逃げてしまおうとしている私も、確かにいるのです。そんな私を、貴方は守って下さると？」

「守るとも。貴女のためではなく、俺自身のためにな」

言いながら、ガイエルは気付いた。姫君に名乗らせておいて、自分はまだ名前を教えていない。護衛を申し出ていると言うのにだ。

「……俺は、ガイエル・ケスナーと申す」

「ケスナー……？」

案の定、ティアンナが息を呑む。ガイエルは、にやりと微笑みかけた。

「噂の逆賊ダルーハ・ケスナーと、どういう関係にあるのか……俺自身、よくわからん。何しろ記憶がないのでな」

ケスナーという姓が、ありふれたものか珍しいものであるのかは、よくわからない。

「記憶を取り戻した瞬間、俺は王家の敵に回るかもしれない……そんな俺が、姫君と行動を共にする事は、許されるだろうか？」

「記憶を失っている時。それは人の心がありのままになる時であると、私は思います」

幾らか緊張した面持ちながら、ティアンナはまっすぐに、ガイエルの顔を見つめた。

「目覚めて真っ先に私を助けてくれた、ガイエル様のその心を信じます。私と共に行きましょう……と言っても、まずどこへ行けば良いのか、私にもわかってはいないのですが」

「では俺が決めて良いかな。とりあえず村か町か、とにかく着る物

が手に入りそうな場所へ行きたいのだが」

「えっ……ふ、服を着てしまわれるのですか？」

可愛い口に可愛い拳を当てて、ティアンナがそんな事を言っている。

「……何かおかしい事を、俺は言っているだろうか？」

「いいえ！ そのような事は！」

ティアンナが、赤くなって慌てた。

「そ、そうですね。私が着ている物を、お貸し出来れば良いのですが」

「……勘弁して欲しいな、それは」

「では、せめてこれを」

ティアンナが、ふわりとマントを脱いで差し出してくれた。確かに当面、これで身体を隠しているしかないだろう。

「すまないな、お借りする」

受け取ったマントを、ガイエルは肩から羽織った。少女の残り香が一瞬、漂った。

今までマントの下に隠されていたティアンナの身体の、ほとんど裸に近い曲線が、露わになった。

胸と尻周りのみを覆う、まるで下着のような鎧。

ほっそりとした二の腕に、柔らかくしなやかにくびれた胴。愛らしく凹んだ臍の周囲に、うっすらと浮かぶ綺麗な腹筋。

スラリと引き締まった、左右の太股。

ガイエルは、思わず見入った。

か細くたおやか、に見えて実は過酷なまでに鍛え込まれた肉体である事が、ガイエルにはわかった。

「ガイエル様……あの、私……」

ティアンナが、何やらもじもじと恥ずかしがっている。半裸も同然の姿を見られているから、というわけではなさそうだ。

「……殿方の裸って、とっても綺麗なのですね……私、初めて見ました」



「人間の裸ではない、という事を忘れてはならんぞティアンナ姫」  
苦笑しながらガイエルは、この姫君にも何かもつと着せるべきで  
はないかと思った。

### 第3話 暴竜、君臨す

玉座とは、要するに飾り立てただけの椅子である。

特に座り心地が良い、とも思えないが、いささか疲れたのは確かであるからダルーハは座っていた。

とりあえず人間の外見を取り戻した身体に、今は新しい甲冑をまとっている。

人間ではない姿になって暴れると、やはり少々疲れるものだ。よほどの場合の時、だけにしておいた方が良さそうである。

そう、あの時のような。

精悍な口髭をフツと歪めて、ダルーハは微笑した。

あの戦いを、思い返してみる。

勝って当然の戦いではあったが意外に手こずったのは、父親の情と呼べるものが自分の中に欠片ほどは残っていたせい、であろうか。とにかく、あの戦いに比べたら。その後の王国正規軍との戦など、およそ戦いとも呼べぬものであった。

「よもや、これほど容易く勝たせていただけるとは……」

つい先程までこの玉座に座っていた男に、ダルーハは微笑みかけた。

「お優しい事でございますなあ、国王陛下」

「うっぐ……ひい……」

あまり似合っていない豪華な甲冑に身を包んだ、初老に近い男。

玉座を奪われ、そして奪った者に対して跪く格好でうずくまり、

悲鳴を漏らしている。

ヴァスケリア国王、ディン・ザナード3世。

20年前から全く変わっていない、とダルーハは思った。

強欲で尊大で、しかし国王の権威が通じないほどの暴力に対しては、卑屈にしかねない男。

あの時は王太子候補の1人に過ぎなかったこの人物が、今では正

式な国王である。国王として、大いにこの国を腐らせてくれた。

無論、腐敗しきった現王政を打倒してこの王国を立ち直らせよう、などという理想を抱いてダルーハは叛乱を起こしたわけではない。

ヴァスケリア王国・王都エンドウール。

その中心部を成す王宮の、玉座の間である。

近衛騎士団の一員だった頃にダルーハは、幾度か足を踏み入れた事があった。

その度に、居並ぶ廷臣らも王族の人間たちも、まるで汚らしい野良犬でも見るような目で、ダルーハを見ていたものだ。

山猿。成り上がりの野人。

聞こえよがしに、そんな事を囁く者たちもいた。

その山猿が、成り上がりの野人が。今や玉座に尻を載せて、国王を眼前に這いつくばらせている。

這いつくばる国王を、ダルーハの側近が2名、玉座の左右から冷ややかに見下ろしてた。

右側に立つのは、いささか小太りな身体に豪壮な鎧をまとった髭面の男。

にこにこ笑みの浮かんだその顔には、しかし隠しようもない品性の悪さと残酷さが滲み出ている。

エドン・ガロッサ男爵。戦場では、それなりに役立つ男である。

もう1人、玉座の左側に控えているのは、黒いローブにすっぽりと身を包んだ細身の男だ。

これと言って特徴のない顔は老人のようであり、40歳のダルーハとさほど年齢が違わぬようでもある。

一見、攻撃魔法兵士に近い装いだが、魔石の杖は持っていない。必要としていないのである。

攻撃魔法兵士とは違う……本物の魔術師、であるが故に。

ムドラー・マグラという名前以外、この男に関して詳しい事をダルーハは知らない。

特に知りたいとも思わなかった。役に立つ。ダルーハにとっては、

それだけで良い。

「ディン・ザナード3世陛下の御助命を……」

そのムドラーが、ぼそりと声を発した。

「……とまでは申しませぬがダルーハ様。王家の人間は最低1名、生かしておくのが得策かと存じまする」

「なるほど、傀儡か」

ムドラーの言わんとする事は、ダルーハにも理解出来る。

自分とヴァスケリア国民との間に1人、傀儡の王を置く。面倒な政治は全てその傀儡の王に任せ、ダルーハ自身はただ搾取に励んで税収を吸い上げる。その方が何かと楽で良いのは確かだ。

「……だがな。王族は、こやつがあらかた殺してしまった」

玉座の右に立つエドン・ガロツサ男爵に、ダルーハは親指を向けた。

恐縮する事もなく胸を張り、エドンが言う。

「亡国の王家は皆殺し、というのが世の常でございますからねエうつふふふふ。政治ならアナタがおやりになれば良いでしょうムドラー殿？」

「私には他にやらねばならぬ事がある……魔獣人間はな、おぬしらで完成というわけではないのだ」

「おやおや面白い事をおっしゃるものですねグフフフ。魔獣人間に、私より上の段階があるなど」と

エドンが、耳障りな笑いを混せて言う。

「ンッフッフ無駄、ムダムダ無駄なのですよムドラー殿。いくらアナタが研究・研鑽を重ねたところで私以上の魔獣人間など造れるはずがありません。このエドン・ガロツサこそがゲツヒヒヒ魔獣人間の完成形！最強・至上の魔獣人間なのですからねエーヒヤハハハハハ」

「……出来損ないが」

ぼそりとムドラーが吐き捨てた言葉は、エドンには聞こえなかったようである。

魔獣人間。確かに、あると便利な戦力ではあった。  
デイン・ザナード3世王が、恐る恐る声を発した。

「か……傀儡の王をお求めであるか、ダルーハ卿」

震えながら、ダルーハを見上げる。主に媚びる、奴隷の目だった。  
「余が、傀儡にでも何でもなろうではないか。万事ダルーハ卿にとって御都合良きよう取りはからって御覧に入れるとも。無論、国民どもから搾り取ったものは全て卿に差し上げるから、だっだから、余の命だけは……」

「あれから20年」

いくらか声を大きくしてダルーハは、国王の命乞いを断ち切った。  
「陛下……いや、当時はまだ殿下であらせられましたな。殿下が私を、成り上がりの山猿よ野良犬よと罵倒しておられた頃から、はや20年……早いものでございます」

顎髭をいじりながらダルーハは、震え上がっている国王を隻眼で見据えた。

眼光を燃えたぎらせる右目と、完全な傷跡と化した左目。

竜の爪で挟まれたその容貌を、睨み返す事も出来ず、デイン・ザナード3世が這いつくばる。

「こ……この王国は今や、そなたのものだダルーハ卿……」

奴隷そのものの姿勢で、国王は言った。

「だ、だからどうか余の命だけは……もちろん、助けてくれるのであろう？ 余は、そなたの義兄なのだぞ」

「義兄……にございますか。ふ……ふふっ」

笑いが漏れた。漏れた笑いを、ダルーハは止められなくなった。

「ふはっ、はっははははは、れっレフィーネはな、貴方の妹として……王族の娘として、華々しく私に嫁いで来た、わけではないのですよ国王陛下。レフィーネは、レフィーネはなあ……」

玉座から、ダルーハはゆらりと立ち上がった。

笑い声が、怒りの呻きに変わってゆく。

「……捨てられたのだよ、貴様たちに………ッッ！」

ダルーハは左手で、デイン・ザナード3世の首を掴んでいた。這いつくばった国王の身体を、無理矢理に引きずり起こす。

青ざめ引きつるデイン・ザナード王の顔を、間近から隻眼で見据え、ダルーハは言葉を続けた。

「……貴様たちヴァスケリア王家の者どもはな、あの赤き竜にレフイーネを差し出し、己の保身を図ったのだ」

左手の中で、国王の首が折れた。

だらり、と垂れ下がった屍に、ダルーハはなおも語りかける。

「……貴様に、我が妻を妹と呼ぶ資格はない」

死体が変わったデイン・ザナード3世を、ゴミのように放り捨てる。

ついに、一国の王を殺害してしまった。

これでヴァスケリア王国だけの問題ではなくなった。近隣の諸外国が、間違いなく、何らかの行動を起こすだろう。

いや、すでに動き始めている国もある。

東に隣接する、バルムガルド王国。この王家にはデイン・ザナード3世の娘の1人が嫁いで婚姻同盟が成ったばかりであり、ヴァスケリアが外国に助けを求めるとしたら、まずここであった。

ヴァスケリア王家からの正式な援軍要請を受けたバルムガルド王国軍約3万が現在、ここエンドウールに向かって進軍中である。

残念ながらその援軍は間に合わず、ヴァスケリア王都エンドウールは陥落し、国王デイン・ザナード3世はこうして逆賊の手にかかってしまったわけであるが、バルムガルド軍の進軍速度は全く落ちていないという。

王都陥落の報が、まだ届いていないのか。

あるいは殊勝にも、他国の逆賊を打倒してヴァスケリアの民衆を救おうとでもしているのか。そのついでに国王亡きエンドウールを制圧し、ヴァスケリアそのものを併吞してしまうつもりなのか。

王国正規軍との戦で損耗した今のダルーハ軍なら、3万の兵力で叩き潰せるとでも思っているのか。

再び玉座に身を沈めつつ、ダルーハは命じた。

「ムドラーよ、傀儡の件は貴様に任せる。王家の者が、まだ幾人かは生き残っておろう」

「さようでございますな……第2王子のモートン・カルナヴァート殿下が、近衛兵団の大部分を率いて逃げ回っておられます。ガルバン卿が現在、これを追っておりますが」

「ガルバンか。奴では、生かしたまま捕えるなどという気の利いた事はするまいな……他には」

「ティアンナ・エルベツト第6王女の生死が、未だ確認されておりませぬ」

「……あの元気の良い姫君か」

剣技と攻撃魔法を組み合わせた小賢しい戦闘法で、健気に戦っていた少女の姿。辛うじて、ダルーハの記憶に残っている。

いずれ力尽きて兵士どもの慰みものとなり殺される運命であろう、と思っていたが、あの戦場からはどうにか逃げおおせたのであろうか。

「まあ所詮は傀儡。何なれば、そこいらの有象無象を捕まえて王家の血筋だとでっち上げておけば良からう」

「御意……」

ムドラーが、恭しく一礼した。

兵士が2人、てきぱきと国王の屍を運んで立ち去って行く。

入れ替わるように、別の兵士が進み出て来て告げた。

「ドルネオ・ゲヴィン卿が、お戻りになりました」

「ほう……早かったな」

ほんの少しダルーハが驚いている間に、男が1人、玉座の間に踏み入って来た。重く、それでいて鈍重さを感じさせない、力強い足取りで。

巨漢である。凄まじい量の筋肉を無理矢理、甲冑の中に詰め込んでいる感じだ。

岩を彫り込んだかのような厳つい顔面には、不敵そのものの表情

が浮かんでいる。短く刈り込んだ黒髪は、棘のようだ。

ダル―ハを上回るその巨体が、ずしりと跪いた。

「御大将、ドルネオ・ゲヴィン戻りましてございます。バルムガルド王国軍將兵3万、ことごとく叩き潰し、雑草の肥やしに変えて参りました」

「御苦労。だが3万ことごとく叩き潰し……は嘘であろう？」

ダル―ハが言うと、ドルネオはにやりと笑った。

「……いかにも大嘘。5、6千ほど碎き殺したところでバルムガルドの腰抜けども、いわゆる戦略的撤退に入りましてな。いや、実に見事な逃げっぷりでございました」

吐き捨てる口調で、ドルネオが嘲る。

「やはり人間どもは腰抜けばかりでございます。あのような輩を2万3万と碎き殺したところで、弱い者いじめにしかありません」

「ふむ、弱い者いじめは嫌いか」

ダル―ハが言うのと、ドルネオの眼光がギラリと強まった。

「せっかく人間をやめてまで得た力、やはり強き者を相手に振りたいものでございます……例えば御大将、貴方のような」

その豪快すぎるほど無礼な言葉にダル―ハが反応を示す、よりも早く、ムドラー・マグラが血相を変えた。

「ドルネオ・ゲヴィン……貴様、気が狂ったか！」

「不適切な発言、ですねッフフフフ」

笑いながらエドン・ガロツサが、ドルネオに凶悪な眼差しを向ける。

「ダル―ハ様に対し何たる暴言……フェッへへへ、許すわけにはいきませんよおドルネオ卿」

「やめておけ、2人とも」

押しとどめるように片手を上げて、ドルネオは言った。

「ムドラー殿、貴公は俺にこの力をくれた恩人だ。碎き殺すような事はしたくない……そしてエドン卿。俺と貴殿が戦ったら、それこそ弱い者いじめにしかならぬ。だからまあ、やめておけ」



「私はねえグフフフ、弱いものいじめは大好きなのですよオ」  
エドンの小太りな身体のどこかが、言葉と共にメキ……ツと鳴った。

「いじめ殺される弱い者はどちらなのかギツヒヒヒ、ダルーハ様の御前でハッキリさせよオーじゃありませんかドルネオ卿」

「そこまでにしておけ」

ダルーハは命じた。

「……ドルネオよ、今はやめておけ。貴様が相手では、俺もいくらか本気にならざるを得ぬ。貴様にはまだ役に立ってもらわねばならん。殺したくはないのだ」

「御大将の本気。考えただけで身震いがいたしますな」

ドルネオが笑いながらも、この場での荒事は思いとどまってくれたようだ。

「まあ御大将ではなくとも……せめて若君とは戦ってみたかった、と思います」

「残念であったな。あれはもう、この世にはおらぬ」

あの時こそ本気の戦いだった、とダルーハは思い返した。

数日前の、あの戦い。ダルーハは本気で戦った。本気で、殺しにかかった。

父親の情など、あるはずがなかった。

なのにドルネオが、何やら氣に入らぬ事を言い始めている。

「果たして本当に、そうでありましょうかな……川に叩き落としただけ、とも聞いておりますが」

「ドルネオ貴様、ダルーハ様に対するこれ以上の無礼は許さんぞ！」

「怒るなムドラ殿。俺はな、あの若君のしぶとさをよく知っておる。万一、死に損なっておられるとしたら……我が軍にとって、大変な事となるのだぞ」

「万が一、奴が生きて姿を見せるような事があったら……俺に報告する必要はない。その場で、殺しておけ」

ダルーハは命じ、無言で付け加えた。貴様たちに来れるものなら

ばな、と。

息子であろうが、部下であろうが、強い方が勝って弱い方が死ぬ。それだけだ。

弱い者は、強い者にとっては殺戮、あるいは搾取の対象でしかない。

（それを教えてくれたのは貴様だ。我が宿敵、赤き竜よ……）

ダルーハは隻眼を閉じ、ゆっくりと開いた。

「ドルネオは弱い者いじめが好かぬようだが、俺はそうでもない。自分が強者となれば、他の者は全て弱者となる。これはな……楽しいぞ？」

1つしかない瞳の中で、炎が燃え上がってゆく。

「見ておれ。俺はさらなる強者となり、この世界に生きる者全てを圧倒的弱者として虐げてやる。いかなる王も勇者も……神や悪魔の類でさえも、このダルーハにとっては、弱い者いじめの対象でしかなくなるのだ」

「……それでこそ御大将でございます」

ドルネオが跪いたまま、さらに巨体を屈し、深々と頭を垂れた。

エドン・ガロッサとムドラー・マグラム、玉座の左右で平伏している。

「んっふふふ、素敵ですよおダルーハ様」

「その圧倒的な御力こそ、まさしく我が理想……」  
人間ではない者たちが、恭しく跪いている。

だが人間たちにとってのダルーハ・ケスナーは、拝跪ではなく恐怖と憎悪の対象となってゆくだろう。

（赤き竜よ、貴様のように……否、貴様以上に）

永遠に失われてしまった者たちに、ダルーハは心の中で語りかけた。

（しがない田舎の地方領主で一生を終える、のも悪くはなかった……レフィーネよ。お前が生きていてさえくれれば、な）

どこにでもあるような村である。

そこで、どこでも起こるような事が行われていた。

「おらあ居留守使ってんじゃねえ！」

「おめえらにはなあ、納税の義務ってやつがあるんだよおお！」

ダルーハ軍の兵士たちが多数、あちこちの家に押し入り、隠れていた村人を引きずり出している。

「お母さあん！」

5、6歳くらいの女の子が、1人の兵士に無理矢理、担ぎ上げられて泣いている。

その子の母親と思われる女性が、娘をさらって行こうとする兵士の足にすがりついた。

「お、お願いでございます！ その子は、その子だけは！」

「じゃてめえが来るか？ けどなあ、ババアじゃ高く売れねえんだよっ！」

兵士が思いきり、女性の身体を蹴り飛ばす。

「てめえら、これからはダルーハ様を守って下さるんだからよお。

感謝の意味でも税金はきっちり払わなきゃいかんぞう？ へっへへへへ可愛いお嬢ちゃんよお、ダルーハ様のためにも高あく売ってあげるからねえ」

泣き叫ぶ女の子を運んで行こうとする兵士に、ティアンナはまず声をかけた。

「お待ちなさい」

「ああん？」

その兵士だけでなく、村人らに無法を働いていた他の兵士たちも、ジロリと一斉にこちらを睨みつけてくる。

「何だてめえ……おとおお、こりやまた高く売れそうなお嬢ちゃん」

「そ、そっちの兄ちゃんもよお、イイ身体してんぜええ」

「う、売り飛ばしたりしねえで俺らでいただいたいまおうかああ？」

下着のような鎧しか身に着けていないティアンナと、裸身にマン

トだけを羽織ったガイエル。

そんな半裸の2人に、ダルーハ軍兵士たちのぎらついた眼差しが集中する。

蹴り転がされた女性を助け起こしながらティアンナは、兵士らの無礼な言葉に耐えて、穏やかに言った。

「……今は、徴税の時期ではないはずですが？」

「ダルーハ様が国王におなりになった今、毎日が納税期限なんだよ  
お」

「おめえにも税を払ってもらうぜ嬢ちゃん、かかかカラダでよお  
ーヒヒへへへ」

ティアンナは言葉では応えず、ただ暗い溜め息をついた。

ヴァスケリア王家による支配も、確かにひどいものだった。

その王家から、ダルーハ・ケスナーが政権を奪った。

竜退治の英雄とまで呼ばれた人物が、もしかしたら民衆のための善き政治をしてくれるかも知れない。

そんな希望のような期待のような思いが、ティアンナの胸には確かにあった。

だが、現実として認めなければならない。英雄ダルーハは、暴君となったのだ。

かつての英雄に王国の統治を任せ、自分はこのままひっそりと遠くへ去る。裸で目の前に現れた、この若く美しい殿方と一緒に……そんな夢が、胸の内で膨らみかけていたところだったのだが。

「愚かな小娘の愚かな夢、というわけ……待って！ 貴方は何もし  
ては駄目！」

ティアンナは慌てて怒鳴った。

獣のように駆け出そうとしていたガイエルが、震えながら動きを止める。殺意の震えだった。

隠す事の出来ぬ凶暴性が、ガイエルの秀麗な顔に、声に、露わになっている。

「止めないでくれティアンナ姫……こやつらを皆殺しにしないと俺

は、はらわたが煮えくり返って今夜ぐっすり眠れそうにない」

「おいおいおい、夢見がちなお坊っちゃまがいるぞお？ 皆殺しだったのか今」

女の子を担いだ兵士が、へらへら笑いながら寄って来る。

その汚らしい笑顔に、ティアンナはいきなり剣を突きつけた。

「1つ忠告しておきます……こちらの殿御を、怒らせてはなりません」

引きつり硬直した兵士の顔をまっすぐ見据え、ティアンナは言った。

「ガイエル様が一度、お怒りになれば……この村が汚れます。貴方がたの血と肉と臓物で。村の方々の迷惑になりますから、重ねて言いますが怒らせてはいけませんよ」

「てめ……」

「まずは、その子を解放しなさい」

引きつった兵士の、顔面から首筋へと、ティアンナは剣先を移動させた。半歩でも踏み込めば頸動脈を切断出来る位置だ。

「……ガイエル様が私の言う事を聞いてくれるうちに、です」

兵士が何か言おうとして失敗し、息を呑み、たらたらと汗を流しながら、担いでいた女の子を地面に下ろした。

解放された女の子が、母親に駆け寄って行く。

泣きじゃくりながら抱き合う母子を防護する形に、ガイエルが立った。

あちこちで村の男を蹴り飛ばし、女子供を拉致しようとしていたダルーハ兵たちが、とりあえずはその蛮行を止め、槍や剣を構えてじりじりと群がって来る。

「てめえら、どこの痴れ者か知らねえが……」

「ダルーハ様のお膝元で好き勝手やるたあ、命が要らねえって事だあなあ！」

「そのダルーハ卿に、お話しする事があります」

凜と響く声で、ティアンナは言い放った。

「卿を今すぐ、ここに呼びなさい……と言いたいところですが、まあ貴方たちにも言っておきましょう。生きた人間を税の代わりにするなど、このヴァスケリアにおいては許されていません。許しはしません」

「いかなる場所であろうが、俺の視界の中では許さん」

ガイエルが穏やかに言った。無理をして穏やかな口調を作っているのが、ティアンナにはわかった。

「これ以上何もせず、何も言わず、即刻立ち去れ貴様たち。さもなくば……こちらの姫君に、貴様らの汚らしい臓物やら何やらをお見せせねばなくなる」

「このガキ、おかしい夢見てんじゃねえぞ！」

ダルーハ兵の1人が、ガイエルに槍を突きつける。それをかわしながら、

「俺は、立ち去れと言ったのだが……」

ガイエルは無造作に片手を伸ばし、その兵士の耳を掴んで引きちぎった。雑草でもむしり取るかのようにだ。

「……聞く耳持たぬ、というわけかな」

血を噴き悲鳴を上げて転げ回る兵士、に向かってガイエルは、引きちぎった耳をぴらぴらと揺らして見せた。

「ガイエル様！」

「怒らないでくれティアンナ姫、このくらいで死にはしないよ。死ぬほど痛いだけだ……本当に死ぬ前に、逃げてくれないか貴様たち」拳の関節を鳴らしながら、ガイエルが優しく言った。

「俺はな。頭に血が昇ると、相手が肉片になるまで止まらなくなってしまう。そうなる前に……一刻も早く、俺の視界から消えてくれんかなあ。頼むよ」

「手え、上げやがったな……おっ俺らに、ダルーハ軍に」

せっかくガイエルが殺意を抑えてくれていると言うのに、兵士たちはなおも、つまらぬ事を言い続けている。

「死んだぜ、てめえら……ダルーハ軍が、ダルーハ様が！ この王

国の」

「いやこの世界のどこでも、てめえらを生かしちゃおかねええ！」

「このガキども、命だきゃあ助けてやろうと思ったがもお許さねえ！  
犯り殺す！」

口々にわめき、槍や剣を振り立てるダルーハ兵たち。に対してガイエルは、

「……俺は、逃げろと言ったのだからなあ」

はあああ……っと、重い溜め息をついた。

これほど物騒な溜め息を、ティアナは聞いた事がなかった。

「貴様たちは、逃げる機会を失った。かわいそうに……綺麗な死体には、ならんぞ」

戦場に鳥が群がって来るのは別段、珍しい事ではない。

森を貫いて流れる川の、河原である。

戦場跡と言うか、虐殺の跡か。

ダルーハ軍兵士の死体が、ほぼ1部隊分。ぶちまけられたように散乱し、それらをついばみながら、鳥の群れがやかましく鳴きわめいている。

鳥どころか蠅や蛆さえたかっている屍が、一体だけあった。

それはもはや、死体ですらない。肉の残骸、と言うべきか。

ズタズタに引きちぎられた、肉片か臓物が判然としないものが、広範囲に散らばって腐敗しながら干涸び、異臭を発している。

それらの中には、大型の蛇の死骸、に見えるものもあった。

見下ろしながらムドラー・マグラは、呆然としている己を自覚した。

「馬鹿な……」

現実として認めなければならぬ、と頭では理解しつつも、そんな言葉をつい漏らしてしまう。

「魔獣人間は蛆も食わぬ、というわけですねえンッフッフ」

エドン・ガロッサ男爵が、気味の悪い笑い声を発している。

現実には認めなければならない、とムドラーは己に言い聞かせた。  
受け入れなければならない。

魔獣人間が殺された、という現実を。

エドン・ガロッサ1人を伴ってムドラーは今、この戦場跡と言うか虐殺跡の河原を訪れていた。連絡の取れなくなった魔獣人間1体の行方を追ってだ。

「それにしても何とまあ……美しくない殺し方ですねェ」

原形をとどめていない魔獣人間サイクロヒドラの屍を観察しつつ、エドンが脳天気な事を言う。

「私ならばウッフッフッフ、もっと美しく洗練された死に様を演出して差し上げるのがねええ」

「……冗談でも何でもなく、おぬしらの仕業ではあるまいな」

ムドラーは呻いた。

「攻撃魔法の類は一切用いず、ただ物理的な馬鹿力のみで引き裂かれ叩き潰されている……魔獣人間をこのように殺せる生き物がいるとしたら、それは同じ魔獣人間のみ」

「ですからムドラー殿、私がこのような汚らしい殺し方をするわけがないと申し上げているのですよグッフッフ。ドルネオ卿ではありませんかねェ、このような美しくない仕事をなさるのは」

「……もうよい。おぬしらでなければ誰の仕業か、という事になる。魔獣人間以外で、このような真似が出来るのは……」

心当たりがムドラーには全くない、わけでもない。

しかし、ここまで圧倒的な力の差があるものなのか。

確かにサイクロヒドラは、魔獣人間としては出来損ないだった。

ムドラーが手掛けた作品の中では、最低の出来だったと言っている。それでも、長年に渡る研究・研鑽の産物である事に違いはないのだ。

「この私が、苦心して造り上げた究極生物が……あのような、誰が苦心して造ったわけでもない、ただ間違っただけ生まれてしまっただけ



の怪物に……」

ムドラーは呻いた。呻き声が、震えた。

「敗れた、と言うのか……これほどまでに、圧倒的に……」

「まあまあ、そう真剣に目くじら立てる事ありませんよおゲヒヒヒヒ。所詮こやつは出来損ないであつたという事です」

エドンの口調は、相変わらず脳天気だ。

「どのどなたかは知りませんが、こんな出来損ない1匹を叩き潰したくらいでイイ気になってるお馬鹿さんは、私がいずれきつちりとシメて差し上げますよおグヘヘヘ……最強最高の魔獣人間たる、この私がねエー」

そんな言葉を、しかしムドラーはすでに聞いてはいなかった。

「出来損ないが……」

呻きと共に、体内で魔力が高まってゆく。

攻撃魔法兵士とは違う、魔石を必要としない強大な魔力。それが、

「このっ……！ 出来損ないがあーッ！」

怒りの叫び、と一緒に迸り出る。

炎、と言うよりは爆発そのものが、ムドラーの眼前に生じた。

腐敗しつつ干涸びたサイクロヒドラの死骸が、地面の一部もろとも粉々に吹っ飛んだ。

エドン・ガロツサが、いくらか呆れたような顔をしている。

構わずムドラーは、息荒く呻き続けた。

「出来損ないが……出来損ないがあ……っ」

幼い頃より、魔法を学んできた。

その学究の過程でしかしムドラー・マグラは、魔法そのものよりも、魔法の様々な用途の中でも特に禁忌とされるものの1つに傾倒していた。

魔獣人間の製造である。

魔物・怪物の細胞を人間に植え付け、自然ならざる生命体を造り出す。

自然には決して生まれ得ぬ、強大無比なる生き物を想像する。ま

さに、神の行い。

（そうとも、私は神……究極至高の生命を造り出す創造主。私が造り上げたものは、究極でなければならぬ。完璧でなければならぬ、最強でなければならぬ。と言うのに……）

震え血走った眼球でムドラーは、眼前の爆発跡を睨んだ。

このような場所であのような様を晒していた魔獣人間。

創造主ムドラーの名を汚す、まさしく出来損ないである。

「許さぬ……」

十中八九、間違いはない。

魔獣人間をこのように破壊出来る者は、同じ魔獣人間でなければ、ただ1人……と言うより1体、1匹。

誰が苦勞して造り上げたわけでもない、ただ間違っただけの世に生まれてしまっただけの怪物。

それが、創造主ムドラー・マグラの至高なる作品の1つを破壊したのだ。

「許さんぞ……ガイエル・ケスナー……！」

## 第4話 悪竜転身

「王女様……で、あらせられますか？」

村長と思われる老人が言った。その他にも何人か、村役場の主立った者たちが、ティアンナの話を聞いている。

「ヴァスケリア第6王女、ティアンナ・エルベツトと申します……その身分を証明出来るものを、今は持っておりませんが」

名乗りつつティアンナは、ちらりと周囲に視線を投げた。

村の、広場である。

見渡す限り散乱するダルーハ軍兵士の死体を、男たちがせつせと片付けている。

村で暴虐を働いていた兵士たちは、それを上回る暴虐の餌食となつて、ほぼ1人残らず殺害されていた。

首の折れた者。頭が陥没して、目や耳から脳が流れ出している者。口から臓物を吐き出した者……皆、辛うじて人間の形をとどめた屍と化している。

そんな殺戮をたった1人でやってのけた張本人が今、広場の井戸を借りて、身体を洗っていた。

ガイエル・ケスナー。

力強く美しい全裸の身体に水を浴びて、返り血を洗い流している。老若男女の村人たちが遠巻きに、彼の水浴びを盗み見ている。怪物を、恐れおののきながらも見物する目だった。

ティアンナを助けてくれた時のような、刃のヒレを生やした魔人の姿、を垣間見せる事もなく。ガイエルは人間の外見は完璧に保ったまま、しかし明らかに人間ではないものの力を振るって、ダルーハ軍兵士たちを大いに虐殺した。素手の拳で、素足の蹴りで、兵士らの顔面や臓物を叩き潰した。

ティアンナの足元に1つ、兵士の生首が転がっている。ガイエルが、手刀で刎ね飛ばしたものだ。

それを村の男が、ティアンナに会釈をしながら拾い上げた。会釈を返しながら、ティアンナは溜め息をついた。

結局、ガイエルの暴虐を止める事が出来なかったのだ。

（殿方に、汚れ役を押し付けてしまった……）

結局こうなるのなら、最初から自分で兵士たちを殺すべきだった、とティアンナは思う。

ダルーハ・ケスナーと戦うのなら、この先、ああいう兵士たちを大いに殺戮しなければならなくなるのだから。

「あの……助けて下さった事は、感謝いたします」

村長が言った。

「……貴女が本当に王女様であらせられるのならば、早急に、お逃げになった方がよろしいかと」

「王家の人たちの首には、賞金がかかってるんだ」

村長補佐と思われる男の1人が、続けて言う。

「もちろん、助けてくれた恩人を買ったりしたくはないが」

「……私は売られても構いません。お金を欲しがるのは当然の事です」

村役場の人々の目をじっと見据えて、ティアンナは語った。

「ただ1つだけ、貴方がたには考えていただきたい事があります。

今このままダルーハ卿による支配を受け入れてしまえば、先程のような事は、この先いくらでも起こるでしょう」

「そんな事は言われるまでもない、考えてるさ。だけど私らには戦う力がない……あんただけじゃない、生き残った王家の人たちが大々的に動き出してくれば、協力のしようがないでもないが」

今のティアンナがダルーハ・ケスナーと戦う、となれば。まず、ここだけではない村々や町に住まう人々……とにかく王国全土の民に協力を求める、ところから始めなければならないだろう。

だが王族を名乗るだけで1人の兵士も率いていない小娘が何を言ったところで、武力を持たない市井の人々が立ち上がってくれるわけはない。

武力とは、協力を求める側が、ある程度は持っていなければならぬものだ。

今のところティアンナが持つ力は、ただ1つ。雑魚同然の兵隊とはどうにか戦えても魔獣人間には通用しない、ささやかな個人の戦闘能力のみ……

いや。ティアンナの私有物ではないにせよ、力はある。扱いようによっては1個軍隊に匹敵するであろう、強大な、そして危険な力。その力の持ち主本人が、水浴びを終え、布で身体を拭っている。彼に何か着せてやるために、この村に立ち寄ったのだ。という事を、ティアンナはようやく思い出した。

「すみません。どなたか、殿方のお召し物を……」

言いかけて、ティアンナは気付いた。

村人たちが、妙にざわつき始めている。

王都を追われた姫君と、人間ではない裸の若者。あまりにも奇怪な2人の客人を、これからどう扱うべきか、考えあぐねているのか。……いや違う。馬蹄の響きが、聞こえて来たのだ。それも複数、と言うより無数。武器や甲冑を鳴らす音も聞こえる。

軍隊が、村に入って来たのだ。ダル―ハ軍の逆襲か、とティアンナは思いかけた。

しかし村人らを押しつけるようにして広場に踏み入って来た一団は、ヴァスケリア王家の旗を掲げていた。

少なくとも着用している鎧兜だけは立派な、騎兵・歩兵の集団。その立派な甲冑にも、王家の紋章が刻み込まれている。

ヴァスケリア王室近衛兵団。戦場にあつて、敵への攻撃ではなく王族の身辺警護を任務とする部隊である。

つまり自分以外にも王家の生き残りがいて、その人物が村を訪れたのか。

とティアンナが思った、その時。騎兵の隊長と思われる人物が、馬から下りようともせずに行った。

「村の長は、いずれか」

「わ、私めにございますが……」

村長が、おずおずと進み出て対応する。騎兵隊長が、なおも横柄に告げた。

「まずは村の者どもを拝跪させよ。王家の方がお見えになられる……頭が高いと申しておるのだ」

「いずこの何様だかは知らんが」

ガイエルが裸のまま、負けずに横柄な声を出す。

「他人に頭を下げさせたいと思うならば、頭が下がると思わせるような事を、まず何かして見せろ」

「何だ、この痴れ者……」

近衛歩兵の1人が激昂し、ガイエルに槍を叩き付ける。

その槍が、小枝の如く折れた。ガイエルの手刀だった。

「俺は今、記憶喪失中だな。自分が何者なのかも全く思い出せん。ただ1つ、わかつているのは」

低い、物騒な声を出しながらガイエルが、その歩兵の胸ぐらを掴み寄せる。

「……俺は残虐である、という事だ。貴様たちのような輩の、首をもいだり手足を引きちぎったりしていると、すこぶる良い気分になる。だが悲しいかな、そういう事をする、こちらの姫君があまり良い顔をしてくれん」

怯える近衛歩兵を、物のように放り捨てながら、ガイエルは高圧的に告げた。全裸のままだ。

「つまり貴様らが今、俺に殺されずに済んでいるのは、こちらの姫君のおかげだという事だ。拝跪するべきは貴様たちの方であろう」

「おやめ下さい、ガイエル様」

殺気立った近衛兵たちの眼前に、ティアナは進み出た。

「王族の方がお見えになられる、との事でしたね騎兵隊長殿。私に、会わせて下さい」

「何だ貴様……」

言いかけた騎兵隊長の顔が、引きつった。

「い、いや貴女様は……！」

「私よりも、王族としての格は上の方なのでしょね」

ティアンナは、にっこりと微笑んで見せた。

「貴方がたは、その御方に仕える身。ゆえに私に拝跪する必要などありません。私はただ、お目通りを願っております……第6王女たる、このティアンナ・エルベツトが」

「だ、第6王女殿下……！」

近衛兵たちの動きが、固まった。

そこへ、どこからか、不機嫌そのものの声が浴びせられる。

「何をしておるか、お前たち……」

聞き覚えのある声だった。この高圧的で神経質そうな声を、ティアンナは王宮で、何度も耳にした事がある。

騎兵たちが、一斉に馬を下りた。

そして歩兵らと共に、その場に跪いて頭を垂れる。

現れたのは一際、豪華な甲冑に身を包んだ、1人の騎士だった。否、とても騎士とは呼べないだろう。

1人の兵士に、馬を引かせている。その馬にまたがった姿はふらふらと危なっかしく、いつ落馬してもおかしくない。

勇壮な兜が似合っていない、むくんだ顔。小太りの身体。

今にも鞍からずり落ちてしまいそうな、その甲冑姿の貴人が、なおも言った。

「この私に、下賤なる者どもに直接、声をかけよと申すのか？」

「はっ、も、申し訳ございません……聞け！ 村の者ども！」

騎兵隊長が立ち上がり、大声を出した。

「こちらはヴァスケリア王国第2王子モートン・カルナヴァート殿下であらせられる。我らはこの度、凶悪無道なる逆賊ダルーハ・ケスナーを打倒すべくモートン殿下を総大将に戴き、王都奪還及び臣民救済のための軍を興した。うぬら村人のうち齡15を超えたる男子全員、謹みて我が軍の兵士となるべし。その他の者には、貯えたる物の供出を命ずる」

「……そういうのを世迷い言というのですよ、兄上様」

ティアンナが言うと、モートン王子のむくんだ顔面が強張った。

「お、お前は……生きておったのか」

「お互い、民のために命を捨てねばならぬ身でありながら、無様にも生き延びてしまったという事です……だから兄上、威張るのはおやめなさい。敗れた王族に一体、何の権威がありましょうか」

「だっ黙れ！ 敗れたわけではない！」

馬から落ちそうになりながら、モートン王子が怒りわめく。

「小賢しき逆賊めに、一時的に王宮を騙し盗らただけだ！ この私が百万の軍勢を率いてダルーハ・ケスナーめを討ち滅ぼし、王都と玉座を取り戻す！ ヴアスケリア王家は、少なくともこのモートン・カルナヴァートは、敗れておらぬ！」

「……そうだな。貴様は、敗れたわけではなさそうだ」

ガイエルが言った。黙らせなければ、とティアンナが思った時には、遅かった。

「戦ってすら、いないのだからな。その綺麗な鎧と旗を見ればわかる」

「おっ、おのれは……ッ！」

モートン王子のむくんだ顔が、怒りのあまり赤黒くなっている。なおも容赦なく、ガイエルは言った。

「あと貴様、馬に乗れないのなら下りろ。馬が迷惑をしている」

「だっ黙らせよ！ これなる痴れ者を、無礼者を！」

モートン王子が、周囲の近衛兵団にわめき命じた。

「殺せ！ 私の目の前で処刑せよ！」

「やめなさいッ！」

ティアンナは叫んだ。

凜とした怒声が響き渡り、モートン王子が馬上でビクツと硬直する。

王子の命令通り動こうとしていた近衛兵たちも、固まってしまふ。じっと兄王子を見据え、ティアンナは言葉を続けた。



「ガイエル様がお怒りになれば、1人2人が死ぬ程度では済まないのですよ兄上。貴方の御命令1つで人が死ぬ。どうかそれを、おわかりいただきたいと思いますが」

「きつ貴様、妹の分際で……！」

「そこまでしておけ、モートン王子とやら」

恐いほど静かな声で、ガイエルは言った。

「……どうしたものかな、ティアンナ姫」

「何が、でしょうか……？」

「俺は思うのだがな。ダルーハ・ケスナーと戦うつもりなら、この無能者の王子はここで始末しておいた方がいい。反ダルーハの勢力は、貴女の下で統一するべきだ」

赤黒く染まっていたモートン王子の顔に、さっと青さが加わった。さらなる激怒か、あるいは恐怖によるものか。

その時。バサバサッ！ と羽ばたきの音が、上空から聞こえて来た。続いて、声。

「見つけましたぞ第2王子殿下！ よくお逃げになりましたなアー！」

魔石の剣を抜いて構えながら、ティアンナは見上げた。

ガイエルも、それに近衛兵たちも見上げている。大勢の視線が、空中の一点に集まった。

異形、としか言いようのない生き物が、そこで翼を広げていた。

一对の、皮膜の翼。それが力強く空気を打って羽ばたき、巨体を空中にとどめている。

筋骨隆々の巨体だった。四肢も胴体も、膨れ上がった筋肉と固い外皮とで、まるで岩のようになっている。

首から上も、まるで目鼻口のある岩石といった感じで、その口が大きく裂けて牙を剥き、長い舌を躍らせ、言葉を発しているのだ。

「雑兵を楯にしての、お見事なる逃げっぷり！ 我ら実に感服つかまつってござる！」

言葉と共に、異形の巨体が降下して来る。体格的に、長時間の滞

空は無理なのだろう。

そんな巨体の中で、最も異形の度合いが激しいのは、両腕だった。左腕の肘から先は、一言で表現するならば、鞭である。

背びれを思わせる棘をびっしりと生やした、巨大な肉の鞭。腕から生えたものでありながら、その形状は尻尾のようだ。

左手が尻尾なら、右手は頭だった。

五指は無く、代わりに、牙のある怪物の大口が開いている。2本の角を生やした、爬虫類の、あるいは竜の頭部。

うねる尻尾を左腕から伸ばし、本当に肉食の出来そうな口を右手の先端に開いた、有翼の怪物。

何者であるのか考えるまでもなく、ティアンナは呟いた。

「魔獣人間……」

「いかにも姫君、我が名は魔獣人間ワイヴァートロール！ ダルーハ様の命によりヴァスケリア王家のクソツタレども、ぐっちゃぐちゃにブチ殺させていただき申す！」

名乗り叫びながら、魔獣人間がズシリと着地する。

と同時に彼の左手、尻尾状の肉の鞭が、跳ねてうねった。

近衛騎兵の1人がグシャアッ！ と音を響かせて、空中に舞い上がった。重い甲冑をまとう身体が高々と宙を飛び、ティアンナの近くに落ちて来る。

地面に激突した時には、その騎兵はもう生きていなかった。

原形をとどめていない上半身が、白い煙を発している。

甲冑と肉体がいつしよくたになって潰れ、溶け合い、そこから幾本もの肋骨がでたらめに突き出ているのだ。

さらに2人の騎兵が、同じような状態になりながらグシャッ、バキッ！ と落馬し、鎧と肉の溶け合ったものを地面にぶちまけた。

「さあお逃げなされモートン殿下にティアンナ殿下！ 兵隊どもを、あるいは市井の者どもを楯として！ それが王族というものでござろうがぁー！」

叫びながら、魔獣人間ワイヴァートロールが左腕を振るう。

竜の尻尾に似た鞭が、びちゃびちゃと液体のようなものを飛び散らせながら激しくうねる。背びれ状の棘から、分泌されているようだ。

毒液。それがティアンナにはわかった。鋼の鎧を溶かす、腐食性の猛毒。

それをジュクジュクと滲ませた肉質の鞭が、また1人の近衛兵を打ち据える。甲冑と肉がグシャアツと溶け合い、潰れながら吹っ飛んだ。

「さあさあお逃げくだされ王家の方々！ この拙者が追いかけて、楽しく愉しく狩り殺して差し上げましょうほかに！」

ワイヴァートルの声に合わせ、猛毒の尻尾が超高速で宙を泳ぐ。近衛歩兵が2名、甲冑と肉の残骸に変わりながら飛び散った。

村の広場は、恐慌状態に陥った。

村人たちは逃げ惑い、近衛兵らは辛うじて応戦の構えを取ろうとしながらも、混乱している。

人間よりも、まず馬たちが恐怖に耐えられなくなっていた。軍馬の1頭が、甲高いいなきながら竿立ちになり、騎兵を振り落としてしまう。

落馬した騎兵の腹を、ワイヴァートルが片足で踏みつけた。岩のような足が、甲冑をグシャリと凹ませる。

口から臓物を吐き出しながら、その騎兵は絶命した。

「ああ、人間をやめた甲斐があったというものの……」

屍を踏みにじりつつ、魔獣人間がうつとりと声を漏らす。

「思うがままに人間どもをブチ壊す、愉しきかな悦ばしきかなあーッ！」

快楽の絶叫と共に、肉の鞭が毒液を飛び散らせ、超高速でうねり狂う。

騎兵が1人、歩兵が2人、着ている鎧と溶け合いながらグシャグシャに碎け散った。

村長が、震えながら立ち尽くしている。そこへも、魔獣人間の毒

鞭は容赦なく襲いかかる。

「危ない……！」

声を出しながらも、ティアンナは動けなかった。両足が、震えながら固まってしまっている。恐怖心は、まず足に表れるものだ。

そんなティアンナの代わりに、ガイエルが動いていた。村長に駆け寄り、突き飛ばす。

もちろん彼が本気で突き飛ばしたら命は無い。充分に力加減はしているのだろう。村長は、少し離れた所へ倒れ込んだだけで済んだ。倒れた村長を、村人の何人かが助け起こし、引きずるように連れて行く。

ティアンナが安堵した、その瞬間。ガイエルの身体が宙を舞った。血飛沫と毒液が、飛び散った。

ワイヴァートロルの、左手の尻尾。村長を打ち殺すはずだったその一撃が、ガイエルを叩きのめしたのだ。

「ガイエル様……！」

ティアンナが、叫びながら息を吞んだ。

ガイエルの裸身が、高々と吹っ飛んで行く。

近衛兵たちと違って、原形はとどめている。が、生死を確認している暇はない。

「ほおう、お逃げにならぬとは……よもや拙者と戦うおつもりではありませんすまいなあ、いと可憐なる姫君よ」

ワイヴァートロルが、そんな言葉をかけてきたのだ。

応えず、ティアンナは叫んだ。

「近衛兵団！ 村の人々を守りなさい！」

モートン王子の姿は見えない。早々と逃げたのか、あるいは近衛兵もろとも殺されてしまったのか。

とにかく今は、自分が的確な指示を下して村人らの身の安全を守る時だ。とティアンナは思い定めた。

（ガイエル様……）

彼の安否を無理矢理、頭から追い払いつつ、ティアンナは剣を掲

げた。

魔石が輝き、その光が刀身へと流れ込んで、雷鳴を発する。掲げられた刃から、電光が迸った。そしてワイヴァートルを直撃する。

「むっ……」

異形の巨体が痙攣し、動きを止める。一時的に感電させる、くらいの事は出来た。

ティアンナはやや猫背気味に身を屈めながら、魔石の剣の柄を両手で握り込み、電光の刃を正面に向けた。

刀身の根元で魔石が輝き、少女の弱々しい魔力を一気に増幅する。放電していた刃が、赤く燃え上がった。

轟音を発して燃え盛る、紅蓮の炎。をまとった剣を振り上げながらティアンナは、すくんでいた両足を無理矢理に動かして駆け出し、跳躍した。

「はああっ！」

気合いの叫びに合わせ、魔石の剣が、さらに激しく燃え上がる。

猛る炎に包まれた刃を、ティアンナは空中から思いきり振り下ろした。ワイヴァートルの、太い頸部を狙ってだ。

とてつもなく強固な手応えが、ティアンナの細い両手を痺れさせた。

振り下ろされた炎の剣が、魔獣人間の頑強な首筋を思いきり殴打し、思いきり跳ね返されていた。僅かな裂傷も火傷も、負わせる事は出来なかった。

「きゃっ……」

痺れた手で辛うじて剣を保持したまま、ティアンナは無様に尻餅をついてしまう。小さな腰鎧があられもなく開いて、純白の下着が丸見えになった。

「ぐっふふふ……いと可愛ゆい攻撃をなさる姫君よ」

「うっく……っ」

慌てて左右の太股を閉じながらも、ティアンナは立ち上がれない。

両手のしびれと尻の痛みに耐えるのが、精一杯である。

そんな少女に、ワイヴァートルが右手を向ける。怪獣の頭部の形状をした手首が、牙を剥き、長い舌を躍らせた。

「さあて、どこから喰ろうて差し上げようか……」

愉しげな、その言葉が終わらぬうちに。ワイヴァートルの顔面が、衝撃で歪んだ。

ガイエルの飛び蹴り。長い左脚が綺麗に伸びて、魔獣人間の口元にめり込んでいる。

ワイヴァートルの巨体が揺らぎ、後退りをし、辛うじて倒れずに踏みとどまる。

ガイエルのしなやかな裸身が、空中でくると回転し、ティアナの眼前に着地した。

「ガイエル様……」

尻餅をついたまま弱々しく、ティアンナは呼びかけた。

ガイエルは、無傷ではなかった。肩から背中にかけて、猛毒の鞭による殴打の跡がザックリと刻印され、血を流しながらシューシューと白煙を立ちのぼらせている。

「う……っ」

ガイエルが呻き、軽く頭を押さえた。

傷が痛む、わけではないようだ。もしか、記憶が甦りつつあるのか。

「うぬは……何故、生きておるのか」

ワイヴァートルも、呻いている。

「拙者の一撃を受けて何故、死なぬ。何故、動ける。何故、原形をとどめておる」

「……そんな事、俺が知るか」

言いつつ1歩、ガイエルは魔獣人間に歩み寄った。

ワイヴァートルの巨体が1歩、後退りをする。岩のような顔面が、引きつった。

「うぬは……き、貴殿は……!」

「ほう……貴様まさか、俺を知っているのか」

低く、ガイエルが笑った。

「教えてくれんかな、頼むよ……痛めつけて聞き出す手間を、省きたいのだ」

「教えてやらん。思い出させもせぬ」

ワイヴァートルが右手を上げる。

と同時に。広場を囲む家々の屋根の上に、大量の人影が現れた。黒色のローブをまとい、その下に鎖帷子を着込んだ、部隊規模の男たち。

1人の例外もなく、杖を手にしている。先端に魔石がはめ込まれた杖だ。

「攻撃魔法兵士……！」

ティアンナが息を呑んでいる間に、ダルーハ軍の攻撃魔法兵団は、一斉に杖を構えた。

数十個もの魔石が、屋根の上から広場を囲みつつ、ぼお……つと発光し始める。

その光が赤く、激しさを増してゆく。

「貴様……！」

ガイエルが見回し、怒声を漏らす。

ワイヴァートルはニヤリと笑い、

「ダルーハ様は言われた。貴殿が死に損なっているようであれば殺しておけ、となあ」

言いながら、羽ばたいた。広い皮膜の翼がバサバサッ！と空気を叩き、巨体が高々と空中に舞い上がる。

と同時に。広場を囲む数十本もの魔石の杖が、一斉に爆炎を吐き出した。

攻撃魔法兵士1部隊による、全方向からの火炎攻撃。

だがティアンナは、そんなものを見てはいない。

今、視界の中にあるのは、1人の小さな女の子が泣きじゃくっている様だけである。

先程、ダル―ハ兵にさらわれそうになっていた女の子だ。この混乱の中で、母親とはぐれてしまったのだろう。

村人や近衛兵、とにかく逃げ惑う大人たちに今にも蹴飛ばされそうになりながらも座り込んで、ただ泣いている。

その女の子も、村人たちも。彼らを蹴散らすように逃げ回る近衛兵団も。ティアンナもガイエルも。

全てを焼き尽くす勢いで、炎の荒波が、全方向から降り注いで来た。

ティアンナは立ち上がると同時に駆け出し、泣きじゃくる女の子に覆い被さった。

こんな事をして意味はない。1部隊分もの攻撃魔法が、降り注いで来ているのだ。

いくら庇い合ったところで、ティアンナもこの幼い少女も、一緒に灰と化す運命は免れないだろう。

と、わかっていても。ティアンナの身体は、勝手に動いていた。小さな女の子を、押し倒すように抱きすくめ、もろともに地に伏せる。

そんなティアンナの上から、さらに何者かが覆い被さって来た。ガイエルだった。美しい胸板が、しなやかで力強い両腕が、幼い女の子もろともティアンナを後ろから抱き包む。

（私、抱かれている……裸の、殿方に……）

そんな事をティアンナがつい思ってしまった瞬間。様々な方向から降り注いで来た火炎が、荒々しく広場に満ちて渦巻いた。

凄まじい熱量が、轟音を立ててティアンナを包み込む。

自分もガイエルも、一瞬後には灰に変わる。

そう思いながらティアンナは、名も知らない小さな女の子の身体を、思いきり抱き締めていた。

空耳、であろうか。ガイエルが、何事か呟いたようである。

ティアンナの耳元で、だが何か語りかけてきたわけでもなく。謎めいた呟きを、ガイエルは確かに漏らした。



「悪竜……転身……」

自分の周囲で一体何人、人が死んだのか。

それをガリエルは、ひとまず考えない事にした。冷静でいられなくなるのは間違いないからだ。

村の広場で吹き荒れていた炎の嵐は、ひとまず止んでいた。

ゆつくりと、ガリエルは翼を広げた。

ワイヴァートルルのものとほぼ同じ大きさの、皮膜の翼。背中から、マントの如く広がっている。

同時にガリエルは、巨大な蛇のようなものを伸ばし、うねらせた。棘状の鋭利な突起を多数、背びれの形に生やした、それは尻尾である。

自分に翼と尻尾がある事を、ガリエルは本当について先程、思い出したのだ。

長い尻尾に巻かれ、その上から広い翼に包まれ、炎の嵐から守られていた者たちが、姿を現した。

身を寄せ合う、2人の少女。

ティアンナと、名も知らぬ幼い女の子である。

人の前腕の形をした奇怪な甲殻生物、のような両腕に抱かれ包まれたまま、ティアンナは呆然としている。自分たちが生きている事に、まだ気付いていない様子だ。

「……………ガリエル……様？」

泣いている女の子を抱きすくめたまま、ティアンナが呟く。

ガリエルはゆらりと両腕を広げ、少女たちを抱擁から解放した。

甲殻化し、なおかつ刃のようなヒレを生やした、まさに凶器そのものの左右の前腕。こんな両腕で抱かれていて、少女2人はさぞかし恐い思いをしていた事だろう。

同じく甲殻化し、刃に似た幾本もの爪を伸ばした、外骨格のブーツとも言える両足。今は、地面に片膝をついている。

先程はこの両手両足で、魔獣人間を1体、惨殺してのけた。

あの時とは比べ物にならないほどガイエルの肉体は今、異形化を遂げていた。

赤い。血、よりは炎に近い、真紅の身体。所々に、黒い筋が走っている。

両手両足のみならず両肩、胸板、腰周りまでもが、鎧の如く外骨格化していた。

それ以外の部分……たくましい二の腕、引き締まった腹部、力強い左右の太股は、鎖帷子に似た鱗で覆われており、もはや剣や槍の類では傷を負わせる事が出来そうにない。

少し長めでいくらか女性的でもあった赤い髪は、眩しいほどの黄金色に変色しながら、さらに長く伸びていた。

翼ある背中を撫でて揺らめく、どこか炎にも似た金髪。それと共に4本の角が、後ろ向きに伸びている。

呆然と見上げてくるティアンナの瞳、に映った己の容貌を、ガイエルは観察した。

全体が外骨格化した顔面。まるで、甲殻で出来た仮面である。形整った輪郭に、人間ガイエル・ケスナーの面影が、辛うじて残っていないくもない。

そんな甲殻の仮面の中で2つ、烈しい光が爛々と燃え盛っている。炎、そのものの眼光。

「ガイエル様……なのですか……？」

「そうだ。我が名はガイエル・ケスナー」

改めて、ガイエルは名乗った。外骨格の仮面に覆われた発声器官が、言葉を発する。

「……全て……思い出した……」

## 第5話 拳兵

もはや老若男女の判別すら困難な、人型の焦げの塊。

それらが、ガイエルの世界のあちこちで、ブスブスと黒い煙を発生している。

人間だけでなく馬たちも、黒焦げの肉塊と化していた。

近衛兵も、村人も、馬も。広場にいた者たちは、何の差別もされる事なく、全員が焼き殺されている。たった2人の少女を除いて。辛うじて広場から逃げ出した村人らや近衛兵たちが、あちこちの建物の陰や木陰で、青ざめて息を呑んでいる。ここが広場でなかったら今頃、大火災となっていただろう。

その事態は免れた、とは言え一体、何人の村人が死んだのか。守ってやれなかった、などと思ってしまうのは自惚れか。

考えない事にしよう、と思っても、やはりガイエルは考えてしま

う。

考えても考えなくても、冷静でなどいられない。

「全て、思い出したぞ……俺は、本当に残虐なのだ」

小さな女の子を抱いたまま、まだ立ち上がれぬティアンナ。を取り巻いて守る形に尻尾をうねらせながら、ガイエルは低く、声を震わせた。

「ダルーハ軍、貴様らを皆殺しにする。何故なら、俺が残虐だからだ」

紅蓮の眼光で空を見上げ、睨みつける。

魔獣人間ワイヴァートルが、そこにいた。広い翼を落ち着きなくはためかせ、巨体を空中にとどめている。

「うぬっ……殺せなんだか。やはり攻撃魔法ごときでは」

いくらか狼狽しながら魔獣人間が、焼死体に満ちた広場にずしりと降り立った。

かつて人体だった灰が、大量に舞い上がる。

遺灰の漂う空気の中、2体の人ならざるものが対峙し、睨み合った。

言葉を発したのは、ワイヴァートルの方からである。

「ガイエル・ケスナー……若君よ。貴殿は人間ならざる身でありながら、人間どもの味方をなさるおつもりであるか……お父上に、刃向こうてまで」

「子は親に背くもの、と親父殿は言っておられた」

まさに、あの父親の言った通りになった。自分は、父に刃向かうとしている。

否、1度は本当に刃向かったのだ。そして、叩き潰された。

屈辱が、ガイエルの胸の内で燃え上がった。

「で……魔獣人間よ、その親父殿は元気であらせられるか？」

「すこぶる御壮健よ。ダルーハ様の御身を脅かすものなど、この世には存在せぬ。ヴァスケリアのみならず世界の全てが、いずれダルーハ様の版図となる」

ワイヴァートルが踏み込んで来た。

左腕が振り上がり、猛毒の鞭が高速でうねる。

「愚かなる若君よ、お父上に従順でおれば！ 全世界を支配下に置く王朝の後継者となれたものを！」

「あいにくだがな。親父殿からは、もうすでに充分すぎるものを受け継いでいる」

無造作に、ガイエルは右手を跳ね上げた。まるでハエでも追い払うように。

右手の甲で、バチツと衝撃が弾けた。襲いかかって来た毒鞭が、ちぎれて飛んだ。

「この暴力性、残虐なる心……それだけで腹がいっぱいだ。もう何も要らん」

半分程度の長さになってしまった左手の尻尾から、びちゃびちゃと汚らしい血液を飛び散らせつつ、ワイヴァートルが後退りをする。

ガイエルは踏み込んだ。近付くな、とても叫ぶかのように、魔獣人間が右手を振るう。

その手首である怪物の頭部が牙を剥き、食らいついて来る。

ガイエルは左腕で止めた。前腕から広がるヒレ状の刃が、魔獣人間の右手の牙をガチツと受け止める。

と同時に、ワイヴァートルの顔面が激しく凹んだ。ガイエルが、右拳を叩き込んでいた。

巨体がよろめき、どうにか倒れず踏みとどまろうとする。

そこを狙って、ガイエルは左足を離陸させた。凶器そのものの爪を生やした蹴りが、下から上へと一閃する。

魔獣人間の股間から脳天にかけて、一直線に裂け目が走る。

ワイヴァートルの巨体が、縦真つ二つに両断された。綺麗に等分された両半身が、左右にゆっくりと倒れ始める。

両の断面から、まるで生き物のように臓物が溢れ出す。

断ち切られた臓物同士が触れ合い、融合し、そして引き合った。分たれていた左右の半身がビチャツとぶつかり合い、繋がり、股間から脳天までの一直線の裂け目が急速に消えてゆく。

「ムッ……ムダ無駄、無駄なのでござるよ若君。拙者、不死身ゆえ」そんな口をきけるほどに、魔獣人間の巨体は再生を終えていた。その左手では、切断された肉質の鞭がニョロリと生え変わって、攻撃のうねりを見せている。

「気の毒ながら貴殿の攻撃なんぞア全部無駄！ おわかりかなあー若君殿ブヒヤハハハハハ！ わかったら這いなされ！ 這いつくばって謝りなされい！ 無論許してなど差し上げませんがなアアア……」

耳障りな大声を引きずりながら、ワイヴァートルの生首が高々と宙を舞う。

ガイエルが、左手を振るっていた。前腕から広がったヒレ状の刃が、魔獣人間の太い首を、実に滑らかに断ち切ったのだ。

左手の尻尾が空中へと伸び、舞い上がった生首を絡め取って引き

寄せる。

首無しになっていた魔獣人間の胴体の上に、その生首が載せられる。

頸部の滑らかな断面同士が貼り付き、融合し、醜い顔面が血色を甦らせる。そして笑う。

「無駄だというのが、おわかりいただけませんかアー。まあ現実を受け入れたくないお気持ちはわからんでもなゴブウええええええッッ！」

嘲笑が潰れ、悲鳴に変わった。

ガイエルの蹴り。外骨格のブーツと化した右足が、ワイヴァートルの左脇腹を深々と凹ませている。

右の脇腹がその分、膨張し、そして破裂した。大量の臓物がドビューツと勢い良く溢れ出して宙を舞う。

「ぎゃっグエッ、おっおのれは！ む、むむむ無駄だと申しておるのが」

わめくワイヴァートルの顔面に、ガイエルは左拳を叩き込んだ。醜い顔面がさらに無様に潰れ、左右の眼球がポンッと飛び出しぶら下がった。

「叩き潰しても死なん、叩き斬っても死なん。それがどういう事かわかるか魔獣人間よ」

臓物と眼球を垂れ流しながら尻餅をつくワイヴァートルに、ガイエルは容赦なく歩み寄って語りかけた。

「痛みが、苦しみが、際限なく続くという事だ……可愛いそうに」「ゲッ……ぴ……！」

ワイヴァートルが、潰れた口から滑稽な悲鳴を吐く。

大量に溢れ出した臓物が、ずる……っとっただけ脇腹の傷口に吸い込まれ、止まった。飛び出た眼球も、垂れ下がったままだ。

再生能力が、目に見えて弱まっている。

「お……おやめなされ若君、ほぼ本当に無駄なんだからヒッ！ ひいいいいいっ！」

怯える魔獣人間に、ガイエルは穏やかに語りかけた。

「安心しろ、俺は全てを思い出したのだ。自分の、力の使い方もな」  
語りかけながら、左手を伸ばす。

甲殻生物の節足に似た五指が、ワイヴァートルの潰れかけた顔を、グチャツと掴む。

魔獣人間の巨体を、そのまま引きずり起こしながら、ガイエルはなおも言った。

「……貴様を、楽に死なせてやれるぞ」

「ひいっ……ぐっ、なっ何故だ、何故！ 拙者を殺そうとする！  
そんな事をして何の得があると言うのだ貴殿に一体！」

顔を掴まれたままワイヴァートルが、理不尽を憤る口調で叫ぶ。

「何故ダルーハ様に刃向かう！ 人にあらざる身でありながら、よもや正義に目覚めたなどと」

「はっははは、この世に正義などというものが」

笑いながらガイエルは、左手だけでワイヴァートルの巨体を掴み上げ、振りかぶり、そして投擲した。

宙に臓物を垂れ流しつつ高々と空中を舞う魔獣人間に、

「……まあ、あるのかも知れんが俺にはない」

なおも語りかけながら、ガイエルは思う。

罪のない村人たちを大勢、焼き殺した。それが許せない。

同じような事をダルーハ軍は今頃、王国全土、至る所で行っている。それが許せない。

理由もなく、ただ許せない。

自分の胸の内です、燃え盛っているのは、そんな根拠のない個人的な思いだけである。

正義などではなく、単なる感情の昂りだ。

昂る感情が、憎悪が、殺意が、ガイエルの胸の内で燃え猛る。もはや体内に収めてはおけないほどにだ。

己の顔面に亀裂が走るのを、ガイエルは感じた。

仮面のように口元を覆う顔面甲殻が、ひび割れ、砕け散っていた。露わになったのは、がっちりと噛み合った、白く鋭い上下の牙。唇のないその口を、ガイエルは上空に向けて、思いきり開いた。胸の内で燃え猛っていたものが、一気に迸った。

炎、と言うよりは爆発そのものだった。

凄まじい轟音を伴う爆炎が、ガイエルの上下の顎を押しつけるように吐き出されて空中を灼く。

その紅蓮の爆発の中、ワイヴァートロルの巨体は一瞬にして灰に変わった。

爆炎の吐息は、すぐに消えた。

さらさらと、まるで粉雪のように灰が舞う。

それを浴びながらガイエルは口を閉じ、息をついた。

「ふう……」

顔面甲殻が失われ、牙が剥き出しになった形相。それをガイエルは、ちらりと周囲に向けた。

広場を囲む家々の屋根の上で、攻撃魔法兵士たちが唾然・呆然としている。

皆、起きながら悪夢を見ているような表情をしていた。

ガイエルは軽く片手を上げ、彼らに声をかけた。

「下りて来いよ、虫ケラども……」

微笑みかけた、つもりだが、笑顔になったかどうかはわからない。

「今の俺が貴様らを殺すと、建物まで壊してしまいかねん。だから下りて来い。誰にも迷惑をかけぬよう地上で殺してやる。楽に死なせてやるから、ほら早く」

「ひ……っ」

悲鳴を漏らしながらも、攻撃魔法兵士の1人が、屋根の上から飛び降りて来てくれた。

いや違う。射落とされていた。地面に激突した攻撃魔法兵士の屍には、矢が何本か突き刺さっている。

生き残った近衛歩兵たちだった。屋根の上を狙って弓を構え、矢



をつがえ、次々と放ってゆく。モートン王子の命令に従ってだ。

「射殺せ！ 1兵たりとも逃してはならぬ！」

あの混乱の中で馬を操れるはずのないモートン王子が、己の二本足で地面に立ちつつ、偉そうな声を出している。

魔獣人間には手も足も出なかった近衛兵たちだが、屋根の上で固まっている相手に矢を当てる、程度の技量は持っているようだ。

攻撃魔法兵士たちが、ことごとく射落とされて地面に激突する。

それでも息のある者を、近衛歩兵たちが剣や槍で殺して回る。

残虐なまでの、手際の良さである。

それを村人らが焼き殺される前に発揮して欲しかった、と思いなからもガイエルは、微かな衝撃を身体じゅうに感じた。

いや、衝撃と呼べるほどの強さはない。何やら軽い感触がコン、コココンツと全身の至る所に当たって来る。小石でも投げつけられているかのようだ。

小石ではなく、矢であった。攻撃魔法兵団を皆殺しにし終えた近衛兵たちが、ガイエルに狙いを定めているのだ。

「撃て！ 領民に害をなす魔物を討ち滅ぼすのだ！」

モートン王子が、そんな事を叫んでいる。

ガイエルは苦笑するしかなかった。

魔力の尽きかけた攻撃魔法兵士たちを虐殺して、村を救った顔をする。それはまあ別に構わないにせよ、弓矢でガイエルを殺そうなどというのは、あまりにも考えが足りない過ぎると言わざるを得ない。

「……まあ、気が済むまでやってみる事だ」

ガイエルは軽く、両腕を広げた。広げた二の腕に、胸板に、その他様々な所に、無数の矢がコココココンツと当たり続ける。

いささか鬱陶しいが、まあ矢が尽きるまでの辛抱だ。ガイエルはそう思ったが、

「やめて！ やめなさいっ！」

ティアンナが、魔石の剣を振るいながら飛び込んで来た。

今は炎も電光も帯びていない刃が、降り注ぐ矢をことごとく切り

払う。

近衛兵たちが慌てて、矢の乱射を止めた。ガイエルも慌てた。

「お、おいティアンナ姫、危ないではないか。俺なら大丈夫だから……」

「貴方をお守りしようとしたわけではありません。私が守りたいのは王族の名誉……もうすでに、あつて無きが如しとお思いでしょうが」

細い身体でガイエルを背後に庇う、格好で立ちながら、ティアンナは言った。

「ヴァスケリア王家の名をこれ以上穢すのは、どうかおやめ下さい  
兄上」

「うぬ、王女の分際で！ 王子に意見するか！」

むくんだ顔を赤黒くして、モートン王子がわめく。

ティアンナが守った小さな女の子が、はぐれていた母親と抱き合っている。

その他の村人たちが、モートン王子の見苦しくわめく様を見物している。

哀れみに似たものが、ガイエルの胸中に生じた。

こんな無能な王子は殺してしまうべきだ、と先程は本気で思っていたのだが。

自分が醜態を晒している事にも気付かぬまま、モートン王子はなおもわめき散らした。

「殺せええ！ その魔物もろとも、身の程知らずの小娘を射殺せええええええいっ！」

「……それをやるなら、俺は貴様たちを皆殺しにしなければならなくなるぞ」

そう言つて動こうとするガイエルを制するように、ティアンナが無言で歩き出した。つかつかと力強い足取りで、兄王子に歩み寄って行く。

命令通り射殺す事も出来ぬまま、近衛兵たちがうろたえ始める。

「なっ何をしておる貴様たち、射殺せぬなら斬れ！　槍で突け！  
とにかくその小娘を生かしておいてはならぬ」

などと言い終えぬうちに、モートン王子は鼻血を噴いた。

ティアンナが、拳を叩き込んでいた。ガイエルが思わず呆氣に取られるほどの早技である。

顔を押さえ、わけのわからぬ悲鳴を上げながら、モートン王子が屍餅をつく。

「もうよせ、わかったよティアンナ姫」

苦笑まじりに、ガイエルは声をかけた。

このままでは、兄王子がガイエルに殺される。そう思ってティアンナは先手を打ったのだろう。

「俺はその王子を殺したりはしない。だからもう勘弁してやらないか」

「さぞかし……ヴァスケリア王族は愚物揃いである、とお思いでしょうね。ガイエル・ケスナー殿」

言いながらティアンナが振り返り、じっとガイエルを見つめた。

「それでも私たち王族は、貴方のお父上と戦わなければなりません」

「改めて俺の正体を明かす必要はない、というわけかな」

「19年前の竜退治においてダルーハ卿は、竜の返り血を全身に浴び……人間をおやめになった、と聞いております」

人間ではないものの、の正体を現したガイエルを、ティアンナは、少なくとも恐れているようではなかった。

「ケスナーの姓と、そして人ならざる肉体をお持ちのガイエル様が、ダルーハ卿と無縁であるとは思えませんから。やはり、御子息でしたか」

「いかにも。我が名はガイエル・ケスナー……逆賊ダルーハ・ケスナーが嫡男よ」

ガイエルのその名乗りに、まずモートン王子が反応を示した。

ガイエルを指差し、窒息しそうなほど鼻血を流しながら、わけのわからない叫び声を発している。

逆賊の息子が、などとわめいているのだろう。

ティアンナが睨みつけた。

それだけでモートン王子は、短く悲鳴を詰もらせ、黙り込んでしまふ。

「……ガイエル様は、これからどうなさるおつもりですか」

眼光だけで兄を黙らせながら、ティアンナが訊いてくる。

「父君のもとへ戻られるなら、お止めはしません……止められるはずも、ありませんから」

「ああ戻るとも。あの男を殺しに、な」

応えつつ、ガイエルは広場を見回した。

村人たちが、焼死体の片付けを始めている。

もはや性別すらわからぬ焦げの塊、の傍らで、泣き崩れている者もいる。

一体、何人の村人が親兄弟を、息子や娘を、恋人や友人を、失ったのか。

あの攻撃魔法兵団は、ガイエル1人を焼き殺そうとしていた。

つまりこの惨状をもたらしたのは、他ならぬガイエル自身ではないのか。

そんな思いが、ガイエルの胸中で渦を巻き、燃えたぎってゆく。

「……ダルーハ軍は、皆殺しにする」

ガイエルは呟き、思う。燃えたぎるこの思いは、正義ではない。義憤でもない。

自分はただ、ダルーハ・ケスナー及びその軍勢に属する者ども、全てが許せないだけだ。

許せないから、皆殺しにしたいだけだ。つまり自分は、残虐なのだ。

「改めて申し上げる。俺は、ティアンナ姫に力をお貸しするぞ。たとえ貴女が大いに迷惑がったとしてもだ」

「ガイエル様……」

「姫君はただ、俺の暴力を利用なされば良い。俺は俺で、皆殺しを

楽しむだけだ」

「楽しむ……のですか？」

ガイエルを責めるでもなく蔑むでもなく、ただじっと見つめて、ティアンナが問う。

「そうとも、楽しむのさ」

辛うじて小さな子供とわかる焼死体を抱き締めながら、1人の女性  
性が涙を流している。

同じような光景が、村の広場の至る所にある。

それらを見据え、ガイエルは言った。

「……俺は、残虐だからな」

貴族の正装をした男たちが20人、広大な玉座の間でずらりと一  
斉に跪き、平伏している。

ヴァスケリア王国全土を分割統治する50数名の地方領主、のう  
ち20名である。

玉座の上から、ダルーハが彼らに声をかけた。

「俺に忠誠を誓う……という事で良いのかな？」

「無論でございますダルーハ・ケスナー殿……いえ、国王陛下」

20名を代表して言葉を発しているのは、王国南部ベルムング地  
方の領主、エルコン・ファッド侯爵である。

「我ら地方領主一同、新たなるヴァスケリア国王への忠義と服従を、  
ここに誓うものであります……どうか、今後とも」

「諸侯はご存じであろうか？ 今、このような物が出回っておるの  
だが」

言いながらダルーハが、開いた巻物をぴらりと片手で掲げて見せ  
る。

「逆賊討伐令……モートン・カルナヴァート第2王子の名前で出さ  
れている。布告と言うか、檄文だな」

今までどこに隠れていたのか、とにかくヴァスケリア第2王子モ

ートン・カルナヴァートが突然、己の生存を公にして布告を発したのである。

生存が確認されたのはモートン王子だけではない。ティアンナ・エルベツト第6王女が、兄王子と合流し、行動を共にしている。近衛兵団を中核として敗残兵を集め、ヴァスケリア王国正規軍を名乗っているらしい。

それだけならば取るに足らぬ事だが、もう1人。生存を明らかにした者がいて、しかも王国正規軍に力を貸している。

（おわかりであるか、ダルーハ様……貴方の詰めの甘さが、このような事態を招いたのですぞ……!）

主君に対し、呪詛に近い事を、心の中で呟くムドラー・マグラ。

そんな臣下の思いに気付くはずもなくダルーハは、

「逆賊ダルーハ・ケスナーを打倒し、王国の民に安寧をもたらすべく、諸侯はモートン・カルナヴァート第2王子の下に馳せ参ずるべし……ときたものだ」

檄文の巻物を呑気に読み上げ、笑っている。

「民のための戦、というわけか。まあ王侯貴族という輩はな、民衆のため国民のためと、とりあえず言ってはみるものだ……で、王家の名においてこのような布告が出ているわけなのだが卿らはどうする」

平伏している地方貴族らの面前に、ダルーハは巻物を放り出した。

「それを踏みつけてまで、我が軍門に下ると。そう解釈してよろしいか？」

「申し上げるまでもなき事。我らにとってヴァスケリア王家など、もはや過去のものにございます」

エルコン侯爵が、続いて他の領主たちが、口々に言う。

「私どもはダルーハ・ケスナー陛下に、未来を見たのでございます」

「王家の者どもにこの国を任せておりましては、我らに未来はありませぬゆえ……」

「ヴァスケリアの未来、我らの未来を、新たなる国王ダルーハ・ケ

スナー陛下に委ねとうございます」

それらの言葉を受けて、ダルーハが鷹揚に頷く。

「……わかった。諸侯のそのお気持ち、実に嬉しく思う」

などと言っているダルーハ自身、つい最近まではその諸侯の1人、ここにいる20名と同格あるいはそれ以下の地方領主でしかなかったのだ。

ヴァスケリア王国最北部のレドン地方。19年前、当時の国王デイン・バウエル2世によってダルーハ・ケスナーは、その領主に封ぜられた。

竜退治の恩賞である。厄介払い、とも言える。国王に従順ではない英雄が、体よく王都から遠ざけられたのだ。

それから19年間、一介の地方領主に甘んじていたダルーハに、ムドラーが魔獣人間という戦力を売り込んだ。

レドンなどという田舎でくすぶっていた、かつての竜退治の英雄を、叛乱へと駆り立てるために。

ムドラーが見込んだ通り、魔獣人間を手勢としたダルーハ・ケスナーは、瞬く間にヴァスケリア王制を打倒してくれた。

禁忌とされていた魔獣人間の研究・作製を、ダルーハの庇護のもとで大々的に行えるようになったのだ。

（感謝はいたします、ダルーハ様……ですが）

暗い眼光を燃やすムドラーの目を、ダルーハはちらりと見返し、命じた。

「ムドラーよ、我々も布告を出すぞ」

「はっ……」

いくらか慌ててムドラーは視線を外し、一礼して俯いた。

「エルコン・ファッド侯爵をはじめ、こちらにおられる方々の所領全てを、今よりダルーハ・ケスナーの直轄領とする。税はこれまでの2倍、13歳以上の男子全てに最低3年間の兵役を課す。そして地獄のように鍛え上げる……このダルーハの治世においては弱者の存在を一切許さぬと布告せよ。文面は任せる」

「御意……」

「お、お待ちをダルーハ陛下。我らの領地を没収するとおっしゃられますか」

エルコン侯爵が慌て始めた。他の諸侯もうろたえ驚愕し、ざわついている。

頂点に立つ者がヴァスケリア王家からダルーハ・ケスナーに変わるだけで、自分たちは今まで通り地方領主でいられる。そんなふうを考えていたのだろう。

「そ、それはあまりに御無体……」

「当然であろう。強者による支配とは、そもそも無体なるもの……貴様たちはな、戦う事もせずにそれを受け入れてしまったのだよ。あの赤き竜の暴虐にたやすく屈し、王女を人身御供とした、19年前のヴァスケリア王家のように」

言いながらダルーハが軽く、右手を上げた。

エドン・ガロツサ男爵が、進み出て来た。太り気味の髭面に、にこにこ残忍な笑みが浮かんでいる。

ダルーハは、さらに言った。

「覚えておくのだな。戦わずして敵に降るとは……こういう、事だ」  
エドン男爵が、大きく口を開いた。

その口から、いつものように不快な笑いの混ざった声……ではなく、炎が噴き出した。

ゴォォッ！ と音を立てて燃え盛る、火炎の吐息。それが、エドンの大口から迸り出て諸侯20名を襲う。

エルコン侯爵以下、玉座の間に集う地方領主たちが、ことごとく炎上した。

人肉の焼ける凄まじい臭いを発しながら皆、火だるまになって床を転げ回り、絶叫している。

「んんゝ良い声ですねえギツヒヒヒ、だけど許せませんねえー」

口髭にチロチロと炎をまとわりつかせながらエドンが、転げ回る諸侯20名に向かって踏み込んで行く。



「戦っても戦わなくてもどうせ殺されるんですからあグッフッフ、せいぜい戦って悪あがきしてくれば楽しいものをおおお」

のたうち回るエルコン侯爵の身体に、エドンが蹴りを入れる。太い足が、焼死体寸前の人体をグチャッと蹴り碎く。

生焼け状態の肉が、臓物が、飛び散った。

「許せませんねエ許せません、他人を楽しませようという遊び心に欠ける人たちはあブツヒヒヒヒ、生ゴミに変わってしまいなさあああああいッ！」

わめきながらエドンが、焼け死ぬ間際の地方領主たちを、同じように次々と蹴り碎き踏み潰し、半焼けの肉片をぶちまけ続ける。

そんな光景をダルーハが、玉座の上から楽しげに見物している。

「弱い者いじめとは実に楽しいものだ。特にこのような……初めから戦いを放棄して保身を図るようなクズども。こやつらにはもはや、蹴り殺されて我らを楽しませるくらいしか存在価値というものが無い。そうは思わんか、ムドラーにドルネオよ」

「……まあ、こやつらがクズどもであるのは確かですが」

エドンが繰り広げる虐殺を、いくらか苦々しげに見やりながら、ドルネオ・ゲヴィンが応える。

「やはり、私の性には合いません……おいエドン卿。楽しむのは結構だが、後片付けは貴公がしておくのだぞ」

そんな言葉など聞いていない様子でエドンは、焼けただれた地方貴族の1人を、楽しそうに引き裂いている。大量の臓物が勢い良く飛散し、その一部がムドラーの足元の床にビチャッと広がった。

「出来損ないが……！」

それを片足で踏みにじりつつ、ムドラーは小さく毒づいた。そして思う。

自分が造りたかったのは、こんなエドン・ガロツサのような醜悪な生物ではない。

自然には決して生まれる事のない、高度な知識と技術によってのみこの世に出現し得る、生ける芸術品。

魔獣人間とは、そういう美しいものであるべきなのだ。

この世で最も強く、最も美しくなければならぬ魔獣人間。

だが実際に出来上がってしまうのは、醜悪な上にたやすく殺されてしまう出来損ないばかりである。

自分の技術は完璧だ、とムドラーは確信していた。

(素材だ……素材が、優秀でなければ)

ダルーハが権力を握ってくれたおかげで、魔獣人間の材料となる人体の調達には苦労しなくなった。

だがそれでも、これはと思えるような素材には、なかなか巡り会えるものではない。

(……素材！ 佳き素材さえ手に入れば、あのガイエル・ケスナーなど問題とせぬ魔獣人間を造り出せるものを……！)

「どうなされた、ムドラー殿」

ドルネオが、声をかけてきた。

「何やら、御大将に申し上げる事があったのではないのか？」

「……そうだな。やはり申し上げておくべきであろう」

ムドラーは跪き、報告した。

「ダルーハ様……若君が、生きておられます」

「ほう……」

平静を装っていたダルーハの表情が一瞬、強張ったのを、ムドラーは見逃さなかった。

「モートン・カルナヴァート第2王子を追っておいりましたガルバン卿……魔獣人間ワイヴァートロルが、若君の御手にかかりまして」

「若君がヴァスケリア王家の人間を助けた、という事であるか？」

ムドラー殿」

ドルネオが、嬉しそうな声を出している。

「あの若君が生きていて、なおかつヴァスケリア王家に味方して我らの敵に回ると。そういう解釈で良いのだな？」

「ムドラーよ、はっきりと言ったらどうだ」

左半分が傷跡となっている顔面をニヤリと歪めながら、ダルーハ

が言った。

「俺があやつを仕留め損ねたせいで、大切な魔獣人間が2匹も死んでしまった……とな」

「……死んだ者どもが出来損ないであった。それだけの事でございます」

跪いて表情を隠したまま、ムドラーは応える。

言葉そのものに嘘はない。殺された魔獣人間を惜しむ気持ちなど、ムドラーの心の中には一片もないのだ。

心の内にある思いは、ただ1つ。

（出来損ないどもが……！ 私の作品でありながら、あのガイエルごときに……！）

至高の作品でなければならぬはずの者たちが。誰の作品でもない、ただ間違って生まれただけの怪物に、立て続けに敗れ去ってしまった。

これも素材が悪いせいだ。

（素材だ。佳き素材が、手に入りさえすれば……）

「俺にいささかの甘さがあった、のは認めざるを得まいな」

ダルーハが言った。

「次は殺す……だがその前に、貴様たちの手で殺せるようであれば、殺しておけ」

「無論そうさせていただきます。御大将に、いくら何でも御子息の返り血を浴びさせるわけには参りませんからな」

ダルーハとドルネオの会話など聞かずムドラーは、主君の隻眼の容貌を盗み見た。睨み据えた。

（素材さえ優秀ならば、私は……ダルーハ様！ 貴方をも上回る、最強の魔獣人間を造り出す事が出来る……！）

## 第6話 魔人は戦場に舞う

光が一瞬、真横に奔った。

白く輝く魔石の剣を水平に構えながら、ティアナは着地していた。

こちらに殺到しようとしていたダルーハ軍兵士の群れが皆、時が静止したかの如く、動きを止めている。

彼らの胴体に、甲冑に、横一直線の筋が走った。

それはすぐに裂け目に変わり、兵士たちの上半身がズル……ツと下半身から滑り落ち始める。

上下真つ二つになった屍が十数人分、断面から臓物を吐き出しつつ、崩れ落ちる。

周囲に満ちたダルーハ軍兵士の群れは、しかしあまり減ったようには見えない。

「このクソ小娘、生け捕りにして可愛がってやろうと思ってたがよお……」

「犯り殺されてーみてえだなあああオイ！」

「まずあ手足ちょん切って牝犬みたくしてやらあなああああ！」  
槍や戦斧を振り回し、様々な方向から突進して来るダルーハ兵。

彼らを迎え撃つのは、ティアナ1人ではない。

「姫様をお守りしろ！」

「この下衆ども、姫様には1歩たりとも近付けさせぬ！」

近衛兵たちが、ティアナの周囲で素早く陣形を組みつつ、武器を振るう。

振るわれた槍や剣が、ダルーハ軍の攻撃を受け流し、弾き返す。

魔獣人間には虐殺されるままだった王室近衛兵团だが、精鋭である事に違いはない。人間の兵隊が相手ならば、いくらか数で劣っているようにも充分に戦う事が出来る。

王家の人間がきちんと戦っていれば、の話だ。

そう思いながら、ティアンナは駆けた。

姫様には1歩たりとも近付けさせぬ、と歩兵の誰かが言っていた。その心は嬉しいが、敵に近付けなくては戦えない。

これは逆賊から国を取り戻すための戦いなのだ。王族が率先して戦わなければ、その意義は薄れる。

ティアンナの細い両手に握られたまま、魔石の剣が輝きを増した。刃の根元にはめ込まれた魔石が、白く発光し、その光が刀身に流れ込んでヴン……ッと微かな音を発している。

炎でも電撃でもない、純粹な魔力の輝きを放つ細身の長剣。を振りかざしながらティアンナは、群れるダルーハ軍のまったく中に突っ込んだ。

下着のような鎧をまとう細い身体が翻り、魔石の剣が高速で弧を描く。襲い来る槍を2本、3本と叩き切りながら。

槍を切断されたダルーハ兵の1人が、

「はあっ！」

ティアンナの気合いと共に、真っ二つになった。白色に輝く刃が、下から上へと一閃していた。

股間から頭頂部まで叩き斬られた屍が、グラリと左右に倒れる。

王女のそんな戦いぶりに士気を高められた近衛兵団が、怯みかけたダルーハ軍をさらに押し込んだ。

ティアンナの周囲あちこちで、近衛歩兵がダルーハ兵を槍で突き殺し、剣や戦斧で斬殺し、戦鎚で撲殺する。

近衛騎兵団が縦横無尽に駆け回り、ダルーハ軍の騎兵たちをことごとく馬上から叩き落とす。

そして。近衛兵団の奮闘に触発されたかのように諸侯の軍勢が、戦場の各所で、ダルーハ軍を蹴散らしつつあった。

山間の、岩だらけの土地である。

崖というほど急峻ではないが、少なくとも馬では上り下りの難しそうな高台が、近くで切り立っている。

その上に陣取ってダルーハ軍を迎え撃つ、形が作れば最も良か

ったのだが、そうなる前に戦闘状態に入ってしまったのだ。

王室近衛兵団と諸侯の手勢から成るヴァスケリア王国正規軍は、総勢3500人。総大将はモートン・カルナヴァート第2王子。

この場の敵兵はおよそ5000。率いるは、ダルーハ軍の一部将エドン・ガロツサ男爵。

数で劣る王国正規軍が勝利を収めるには、とにかく王族自らが戦場に出て決死の覚悟を示し、兵の士気を高めるしかない。

モートン王子にそんな事が出来るわけではないので、ティアンナがやるしかないのだ。

打倒ダルーハ・ケスナーの勅命・檄文が発せられてから、そろそろ1ヶ月である。

一般的に諸侯と呼ばれる地方領主が、ヴァスケリア王国全土に現在、50名はいる。

だが予想通りと言うべきか、勅命に応じてモートン王子の下に馳せ参じたのは、そのうち10名にも満たなかった。

残る40数名のうち約半数は、すでにダルーハ・ケスナーに対し恭順の意を示している。残る半数は、日和見だ。

その日和見主義者たちを味方に付けるには、とにかく勝ち続けるしかない。

「姫様、危険でございます！　どうか本陣へお戻りを！」

近衛騎兵の1人が、そんな事を叫んでいる。

ティアンナは耳を貸さず、戦い続けた。

細くしなやかな半裸身が、敏捷に踏み込みながら軽やかに回転する。

長い金髪を舞わせながら躍動する少女の周りに、斬撃の弧が描かれては消えた。

その弧に触れたダルーハ兵たちが、次々と倒れ、生首を転がし、臍物をぶちまける。

その時。実に耳障りな声が、戦場全体に響き渡った。

「お見事！　お見事でございますよォー姫君ヒヤッハハハハハ」

ティアンナも、近衛兵団も諸侯の軍も。逃げ腰になりかけていたダルーハ軍の兵士たちも。一齐に思わず動きを止めてしまうほど、不快な声である。

敗走寸前のダルーハ軍の中から、騎馬の人物が1人、進み出て来たところだった。

派手な馬甲を着せられた軍馬にまたがっているのは、豪華な鎧とマントに身を包んだ、太り気味の男である。

口髭が濃く、目が細い。一見にこやかなその表情には、しかし隠しようもない品性の悪さと冷酷さが滲み出ていた。

そんな太り気味の甲冑姿が、不気味なほどの敏捷さで馬から下り、ふわりと地上に立つ。そして芝居がかった身振りで自己紹介をする。「偉大なるダルーハ・ケスナー様よりこの一軍を賜りたる者、エドン・ガロツサと申しまするウッフフッフ、姫君には御機嫌うるわしゅうう」

そんな言葉に合わせて、濃い口髭が嫌らしく蠢く。いや顔面そのものが、蠢いている。人間の表情筋とは思えぬ、蠢き方である。

それを見ただけでティアンナには、このエドン・ガロツサなる人物の正体がわかった。

「攻撃魔法兵団！」

魔石の剣を振り上げ、叫ぶ。

王国正規軍が、さっと2つに割れた。そして黒いローブに身を包んだ一団が、進み出て来る。

魔石の杖を携えた、攻撃魔法兵士の1部隊。

「おやおや、そんな者たちで一体何をなさるおつもりですかあヒツヒツヒツヒツ」

エドン・ガロツサの身体が、メキッ！と音を発して歪み震えた。豪華な鎧がベキベキと壊れ始める。

変異が完了するのを待たずにティアンナは、魔石の剣を振り下ろした。

それを合図として、攻撃魔法兵士たちが杖を構える。1部隊分も

の魔石が、変異中のエドン・ガロツサに向けられる。

そして一斉に、光を放った。炎と雷、2種類の光。

爆発が、起こった。

燃え盛る火の玉と、煌めく電光の筋が、エドン1人に集中し激突し、轟音を立てて碎け散る。

ダルーハ軍の歩兵や騎兵が多数、炎と雷の爆風に吹っ飛ばされながら碎け散り、灰となった。

その爆発の中心から。完全に人間の姿を捨て去ったエドン・ガロツサが、ゆったりと進み出て来る。

「んー涼しい涼しい。気分爽快ですよウヒヨヒヨヒヨヒヨ」

笑う口は爬虫類の如く迫り出し、でこぼこに牙を剥いて、長い舌を躍らせている。

細かった目は、今や飛び出さんばかりに見開かれ、ひび割れたように血走っている。

そんな顔面の周囲に広がっているのは、獅子のようなたてがみだ。太り気味だった身体は、さらに肥満し、着ていた鎧をちぎり飛ばして、獣毛に満ちた皮膚を露わにしていた。

一応は人間の形に、四肢を備えてはいる。が、両腕の先端にあるのは五指ではない。

右手は、サソリの尻尾の如く湾曲した、大型の針。

左手は、いくつもの棘を生やした球体。

そんなふうに両手を凶器化させた、筋肉質の肥満体。を後ろから包み込むように左右一対、広い翼が背中中で開いている。

まわりつく爆炎を打ち払うように、その翼が羽ばたいた。

「さあさあ、もっと涼しくして差し上げましょうかゲヒヒヒヒヒ、この魔獣人間サラマンティコアがねえええええええええええ」

魔獣人間の口が、名乗りと共にゴォオオッ！と炎を吐き出した。

「くっ……」

とっさに、ティアンナは横に跳躍した。

跳躍した身体のすぐ近くを、凄まじい熱量が走り抜けて行く。



ティアンナほどの身体能力を持っていない攻撃魔法兵士たちが、襲い来る炎をかわす事も出来ぬまま一瞬にして消し炭に変わり、崩れ落ちて灰と化した。

炎の吐息をとりあえず止め、魔獣人間サラマンティコアが笑う。

「ほおーら鬱陶しい人間どもがいなくなってこおんなにスツキリ涼やかにウヒョホホホホホホホ」

歯並びの悪い牙に、長い舌に、チロチロと微かな炎がまとわりつく。

「こ……この化け物が！」

近衛騎兵の1人が、怯えて動かなくなった馬から下りつつ槍を振りかざし、己の足で魔獣人間に突っ込んで行く。

いや1人ではない。3人、5人、10人以上。怯える軍馬から飛び降りて次々と、様々な方向から、剣や戦斧でサラマンティコアに襲いかかる。

「いけない……不用意に戦いを挑んでは駄目！」

ティアンナが叫んだ時にはすでに遅く、魔獣人間は左手を掲げていた。

何本もの棘を生やした、球体状の左手。その棘たちがプシュプシュと音を立て、様々な方向に発射される。

槍を、剣を、戦斧を、振り上げ振り下ろそうとしていた近衛兵たちが、次々と倒れていった。

倒れた時には皆、死体と化していた。

眼球がこぼれ落ちそうなほどに目を見開き、舌を吐き出す感じに口を開いた、惨たらしい死に顔の屍。

彼らの首筋や腕に、深々と棘が突き刺さっている。冷酷なほど正確に、甲冑の隙間を狙って発射された、猛毒の棘。

それらが何本も、サラマンティコアの左手で、新たに生えつつある。

完全に生え変わるのを待たず、ティアンナは斬り掛かった。

踏み込みと同時に魔石の剣が、白い輝きをヴウンツと強める。そ

して一閃。

激しい白色の光を帯びた刃が、魔獣人間の肥えた巨体の、どこかを思いきり殴打した。

それだけだった。固い獣毛と分厚い筋肉に包まれたサラマンティコアの身体は、切り傷1つ負ってはいない。

斬撃を跳ね返され、よろめいたティアンナを庇う形に、近衛兵たちが雄叫びを上げて魔獣人間に突きかかり斬りかかる。

サラマンティコアが、右腕を振り回しながら叫んだ。

「ああん、男どもが群がっても暑苦しいだけでしょーがあグへへへへ、さあさあ涼しくなりなさああああああい！」

サソリの尻尾のように湾曲した、巨大な針。そんな形状の右手が、近衛兵の1人を叩き潰した。

叩き潰された、としか言いようのない死に方だ。兜と頭蓋骨がもとにもに陥没し、脳と眼球が一緒に押し出されている。

その間にも2人目、3人目の近衛兵が、同じような死に様を晒した。

剣や戦斧や槍が、魔獣人間の身体に、命中してはいる。だが全て、傷を負わせる事もなく弾き返されてしまう。

よろめいた近衛兵たちに、サラマンティコアが容赦なく、サソリの尻尾状の右手を叩き付ける。

いくつもの人体が、甲冑もろとも凹みひしゃげて臓物をぶちまけた。

「ゲッヒヒヒヒさあー涼やかなる姫君よ、貴女をんーどーうしましようかねエ。このような殺し方をしてしまうのは何とも勿体なし」

胸から上の原形を失った近衛兵の屍を放り捨て、踏みつけながら、魔獣人間がティアンナの方を向く。

敗走寸前だったダルーハ軍兵士たちが、調子に乗って群がって来る。

「そ、それじゃあエドン男爵様、俺らに譲って下さいよおお」

「そのお姫様を、ちよいと手足動かなくして下さるだけでイイです



「こちらに潜んでいた伏兵どもは皆殺しにしておいた。次は貴様だ、魔獣人間」

言葉に合わせて、ガイエルの赤い髪がザワザワと揺らめき始める。炎のようだ、とティアンナは思った。

すっ……とガイエルが、天空に向かって右手を伸ばす。

「逃げる機会を失った者どもよ……かわいそうに。綺麗な死体には、ならんぞ」

掲げた右手を、ガイエルはゆっくりと下ろしてゆく。下りて来た右掌が、秀麗な顔を、撫でるように隠す。開いた指と指の間で、ガイエルの両目が赤く輝いた。

「悪竜転身……」

赤い髪が、燃え上がるかの如く、ざわめいた。

粗末な歩兵鎧がちぎれ飛び、マントのように翼が広がる。

赤黒く巨大な皮膜の翼。左右のそれが、裸になりかけたガイエルの身体を、背後から包み隠す。

閉じた翼の内側で、メキメキツと変化が進む。

その足元で、赤い大蛇に似た尻尾が跳ねた。そして。

「……はぁッ！」

右手で払いのける感じに、ガイエルは翼を開いた。

溶岩の如く赤い、所々に黒色の入った、外骨格と鱗。

刃そのもののヒレと爪を生やした、凶悪な四肢。

甲殻の仮面と、燃えるようにゆらめく金色の髪。

まさに魔人とも言うべき姿が、高台の上に出現している。

「どうかな、ティアンナ姫」

表情のない顔で、ガイエルは微笑しているかのようだ。

「これでもまだ、殿方の裸は綺麗、などと言えるかな？」

「ガイエル様……」

人ならざるものと化した殿方の裸身を、ティアンナはじっと見上げた。

赤く、禍々しいほどの力強さに溢れた、魔人の裸体。

異形である。だが醜悪であるとは、ティアンナは思わなかった。  
「綺麗……ではないかも知れませんが。でも……」

ティアンナが呟いている間にガイエルは、高台の上から跳躍していた。

「どうあッ！」

かけ声と共にガイエルは、高台を蹴って跳躍し、空中でくるりと両膝を抱え、尻尾で車輪を描きつつ落下して行った。

そして、斜め下方に向けて右足を突き出す。飛び蹴り、である。甲殻質の凶器と化した右足が、ダルーハ軍兵士の1人に叩き込まれた。

人体が1つ、着ていた甲冑もろとも破裂し、飛び散ってゆく。

飛び蹴りの姿勢のままガイエルは1度だけ羽ばたき、滞空状態を維持しながら、螺旋状に身を捻った。

大蛇の如き尻尾がブンッ！　としなつて弧を描き、ダルーハ兵3人を打ち据える。

3つの上半身が砕け散り、残った下半身たちが臓物を大量に噴き上げる。

その尻尾の一撃を、小賢しくも身を沈めてかわした1人のダルーハ兵に、ガイエルは空中から左足を叩き込んだ。

鎧兜と肉体がグシャッと一緒くたに原形を失い、潰れ倒れる。

計5人を殺戮したところで、ようやくガイエルは着地した。

着地直後の低い姿勢のまま、ゆら……っと両腕を広げ、吐息と声を漏らす。

「はああ……駄目だ駄目だ。魔獣人間の頑丈な手応えと比べて、人間どもの何と脆く頼りない事よ。これでは殺した気になれん」

「ははあん、アナタですね。御子息でありながらダルーハ様に刃向かう、愚かな若君というのはシッフフッフ」

怯えるダルーハ兵らを押しつけるようにして、魔獣人間が進み出

て来る。

そして軽く、左手を掲げる。何本もの棘を生やした、球体状の左手。それら棘が、

「いいでしょう、遊んであげましょうねえギツヒヒヒヒヒ……ダルーハ軍最強の魔獣人間、このサラマンティコアがああああああ！」

一斉に、発射された。

まっすぐに、あるいは弧を描き、蛇行し。幾本もの棘が、意思ある飛行生物の如く、ガイエル1人に降り注ぐ。

甲殻状の胸板に、肩に。あるいは二の腕や腹筋、太股の鱗に。棘はことごとく命中し、ことごとく折れて碎けた。

微かな痛みがパチパチと、ガイエルの全身の表面で弾ける。いくらか毒性があるようだ。

毒の棘を発射し終えた魔獣人間サラマンティコアが、固まっている。爬虫類的な顔面は引きつり、飛び出しそうな両眼球は凶暴に血走りながらも、驚愕と怯えの色を浮かべ始めていた。

そこへ、ガイエルは歩み寄って行く。

「……嬉しいなあ、遊んでくれるのか」

声をかけてみるが、サラマンティコアは何も応えない。

声も出せぬまま、硬直した身体を無理矢理に動かし、右手で殴り掛かって来る。

サソリの尻尾のような、巨大な針。

叩き付けられて来たそれを、ガイエルは無造作に左手で払いのけ、右拳を突き込んだ。

人間を叩き潰す、のとは比べ物にならない、強靱な手応えが返って来た。

サラマンティコアの顔面が一瞬、ガイエルの拳の形に凹み、その巨体が揺らぐ。

「お……おやめなさい若君」

揺らぎ、後退りをしながら、魔獣人間が怯えた声を出す。

「あまり私に痛い事をなさらない方が御身のためですよおウッフフッフ、私の背後にはダルーハ様がブグエエッ！」

ガイエルは踏み込み、左拳を叩き込んで、サラマンティコアを黙らせた。

世迷い言を吐いていた口が、血飛沫を噴いて歪み、牙が何本か折れて散る。

肥満気味の巨体が吹っ飛び、地面を跳ねて転がり、だが即座に起き上がる。

「ち……調子に乗りましたねエエエエッ！」

わめきながら魔獣人間が、血まみれの口を開いた。

ゴォツと音を響かせて、炎の吐息が迸り出る。

ガイエルは避けず、マントのような翼を1度だけ身体に巻き付け、すぐにバサッ！ と開いた。

その羽ばたきだけで、魔獣人間の吐いた炎は消え失せた。風に吹かれた灯火のようにだ。

口を開きっぱなしのまま、サラマンティコアが啞然と固まっている。

そこへ、ガイエルは微笑みかけた。

「貴様に、本物の炎を見せてやろう」

その微笑みと共に、顔面甲殻がひび割れ、碎け散る。

「……竜の炎を、な」

唇のない、怪物の頭蓋骨そのものの口元が、露わになった。

「ひ……い……」

サラマンティコアがいよいよ怯えを隠せなくなり、ろくに悲鳴も上げられぬまま背を向けた。そして走り出す。

太った巨体が、滑稽なほどの逃げ足の速さで駆け去って行く。助走をつけて飛ぶつもりか、背中の翼をバタバタと忙しくはためかせながらだ。

そちらに向かって1歩だけ、ガイエルは踏み込んだ。  
胸の内で燃え盛っているものが、込み上げて来る。

踏み込んだ身体が前傾し、噛み合っていた上下の牙が、その熱いものに内側から押されて開く。

燃え猛る熱さを、ガイエルは思いきり吐き出していた。

爆発そのもの、と言うべき紅蓮の炎。それが、横向きの噴火とも言える勢いでドゴオオオンッ！ とぶちまけられる。

ぶちまけられた爆炎の奔流の中、サラマンティコアの巨体が吹っ飛びながら砕け散り、灰に変わった。

のみならずダル―ハ軍兵士たちがほぼ1部隊、こちらは灰すら残さず、一瞬にして蒸発してしまう。

燃えるものが何もなくなった空間で1度だけ渦を巻き、炎は消えた。

その時にはダル―ハ軍全体が、完全な敗走に入っていた。指揮官たる魔獣人間を失った兵士たちが、なりふり構わず逃げて行く。

それに対し王国正規軍が、容赦のない追撃を開始していた。

近衛兵団が、あるいは諸侯の軍勢が。土煙を上げてガイエルの左右を駆け抜け、ダル―ハ兵たちを狩り殺しにかかっている。

恐らく、モートン王子が命令を下したのだろう。

前線で妹を戦わせて自身は本陣から動かず、危険な敵が排除されたと見るや、ここぞとばかりに皆殺しの命令を下す。

総大将とは、そういうものだ。

ガイエル1人でダル―ハ軍を皆殺しにするつもりであったが、まあ残敵の掃滅くらいは味方の兵隊に任せろべきであろう。

ティアンナが、歩み寄って来た。

「……またしてもガイエル様に助けていただいて、何とお礼を」

「別に、貴女を助けたわけではないさ」

少女の方を見ずに、ガイエルは言った。

「……少し、無謀すぎるのではないか。魔獣人間に、正面切って戦いを挑むなど」

「あら、お説教ですか？」

微笑みながらティアンナは執拗に、ガイエルの顔を覗き込もうと



する。

「お説教は、相手の顔をしっかりと見て行うもの……お顔を逸らさないで、ガイエル様」

「俺は……」

じっと見上げてくるティアンナの眼差しから、ガイエルはついに逃げられなくなった。

少女の澄んだ瞳に、人ならざるものの容貌がはっきりと映し出される。

赤く禍々しく眼光を燃やし、悪鬼の頭蓋骨の如く牙を剥き出しにした、魔人ガイエル・ケスナーの素顔。

「……見ての通り、俺は醜い。姫君にはお目汚しではないか、と思つてな」

「私、醜いものは見慣れていますから」

ティアンナが微笑んだ。どこか寂しげな哀しげな、翳りのある微笑。

やはり、ガイエルの良く知る女性にそっくりな笑顔だ。

「王宮は、醜いもので満ち溢れておりましたから……こんなお顔なぞ、可愛いものです」

「おいおい……」

うろたえるガイエルの、頬か口元か判然としない辺りを、ティアンナが片手でそっと撫でる。

優しい感触が、ガイエルの牙と歯茎をくすぐった。

（おふくろ様……）

すでにこの世にいない女性に、ガイエルは心の中で呼びかけた。

あの母も、こんなふうな、人間の皮が剥けてしまったガイエルの顔を、優しく撫でてくれたものだ。

そんな母が。ある時、病に倒れた。

病床で母は、ガイエルの手を握り締め、言った。

あの人を止めてちょうだい。あの方は、何かとても良くない事を始めようとしている。私はもう、それを止める事は出来ない……だ

からガイエル、お前に頼むしかないのよ。あの人を、戦っても止めて欲しいの。ごめんね、こんな事を頼んでしまうなんて……

(……すまん、おふくろ様。俺はあの男を、生かしたまま止める事が出来なかった。本当に、すまん)

よく似た優しさとぬくもりを、頬あるいは口元に感じながら。ガイエルは心の中で、母に呼びかけた。

(だが見ていてくれ。今からでも俺は、親父殿を止めてみせる……殺してでも、な)

エドン・ガロッサは死体すら残っていないが、そんな事はどうでも良かった。

兵士たちが大勢死んだ。それも、大した問題ではない。

指揮官は死に、兵隊も大量に死んだ。

つまり戦に負けたわけであるが、そんな事はムドラーにとって、本当にどうでも良かった。

探し求めていたものを、見つける事が出来たのだから。

「つくづく思うのだが……」

ダルーハ軍兵士の屍で大半が占められた戦場跡、を見回っていたドルネオ・ゲヴィンが、何やら呆れている。

「烏合の衆とは、まさに我が軍の事よな。兵卒どもの鍛錬が、あまりにも出来ておらん。魔獣人間の力に頼り過ぎなのだ」

「当然であろう。本来ならば、兵卒など必要とせぬほどの力が求められているのだよ貴様たちには」

ムドラーが言うのと、ドルネオは苦笑した。嘲笑、かも知れない。馬鹿な事を言う男だ。戦というものを、まるで理解しておらぬ。

などと思われているのかも知れないがムドラーは構わなかった。

探し求めていたものを、ついに見つけたのだから。

「そもそも御大將が急ぎ過ぎなのだ。叛乱を起こすにしても、もう少し兵を鍛えてからにすれば良いものを」

ドルネオが、ぶつぶつと文句を言っている。

ムドラーは、もはや聞いていない。

「御自分があまりにも強過ぎるゆえ、数の力の重要性というものを理解しておられぬ……それで、これからどうするのだムドラー殿」

「敵の本陣へ……私と貴様とで、強襲をかける」

ムドラーが答えると、ドルネオはさらに呆れた。

「ムドラー殿は何を焦っておられる。まあ確かに、魔獣人間が3体も討ち取られて」

「出来損ないどもの事など、どうでも良い」

ドルネオの言う通り、確かに自分は焦っている。それはムドラーも、頭では自覚していた。気が急いて仕方がない。

何しろ、ようやく見つけたのだ。

究極至高の魔獣人間となり得る、最高の素材を。

「一刻も早く、捕えるのだ……あの、ティアンナ・エルベツト第6王女を」

この戦場での彼女の戦いぶりを、ずっと岩陰から盗み見ていた。

ムドラーは思い返した。否、わざわざ思い出さずとも、決して脳裏から消える事はない。

舞うようにダルーハ軍兵士たちを殺戮していった、少女の姿。

あのしなやかな細身に秘められた、強靱な身体能力。そこいらの攻撃魔法兵士を遥かに上回る、あの魔力。

そして、あの美しさ。

ワイヴァートロールやサランティコアといった醜惡な出来損ないども、とは根本的に違う。

最も強く、最も美しい魔獣人間。となるために生まれてきたような少女だった。

「ムドラー殿の言われる事、俺には理解しかねるのだが」

困ったように、ドルネオが言う。

「よもや、俺と貴殿の2人がかりなら勝てると思っておられるわけではあるまいな……あの若君に」

「若君と戦ってみたい、などと大言を吐いておったのは貴様であるが。今更、臆病風に吹かれおって」

ムドラーは言い捨て、ドルネオに背を向けた。

「所詮は貴様も出来損ないという事……良いわ。最高の素材を手に入れるのに、臆病者の手は借りぬ」

「おい待てムドラー殿……」

出来損ない、臆病者、などと言われて特に腹を立てた様子もなく、ドルネオが呼び止めようとする。

無視して、ムドラーは歩き続けた。王国正規軍本陣へと向かって。  
「待っておれ、ティアンナ王女よ……」

脳裏に、心に、強く焼き付いて薄れようもしない、少女の戦う姿。に、ムドラーは熱く語りかけた。

「そなたを、もっと強く、もっと美しくしてやろう……この私の、創造主ムドラー・マグラの手によって……!」

黒いローブの下で、身体のどこかがメキ……ツと震えた。

## 第7話 竜と王族

王宮という場所には本当に、顔の醜い人間たちしかいなかった。外見的な顔立ちは整っていても、それは汚らしい内容物を綺麗な皮で包み隠しているようなもので、端正なだけの顔面には腐臭を放つものが滲み出ている。

王族・廷臣を問わず、王宮に巢食う人々は、誰もがそんな感じだった。

汚いものを包み隠し、それを常に見え隠れさせている、彼ら彼女らの美貌と比べれば。

ただ異形なだけのガイエル・ケスナーの素顔など、本当に可愛らしいとさえ思える。

思いながらティアンナは、広い天幕の中をちらりと見回した。

王国正規軍・本陣の天幕である。

総大将たるモートン・カルナヴァート第2王子を上座に、諸侯が一堂に会している。

今のところ生存が2人しか確認されていないヴァスケリア王族に力を貸してくれている、8名の地方領主たち。

皆、王宮にいた人々と比べると多少はましな顔をしているのだろうか。

「皆、御苦労であつた」

モートン王子が立ち上がり、偉そうな声を発した。

「卿らの勇戦が、憎きダルーハ軍をこの地より敗退せしめたのである。王都奪還の暁にはこのモートン、卿らの所領を大いに加増し、今日の勇戦に報いるであろう」

「いやいや殿下。我ら、そのような報賞のために決起したわけではありませんぞ」

8名の諸侯のうちで1番目か2番目くらいに年嵩と思われる人物が、鷹揚に片手を上げて言った。

小太りのモートン王子とは比べ物にならないほど体格が良く、豪華な甲冑が似合った、初老の男性貴族。

「無道なる逆賊ダルーハ・ケスナーめを討ち滅ぼし、王国の民を安んずるため、我らはここに馳せ参じておるのでございます」

王国西部サン・ローデル地方一帯を所領に持つ、バウルフアー・ゲドン侯爵である。この場に集まった地方領主たちの中では、1番の大物と言っている。

彼の手勢が、今の王国正規軍兵力の4割近くを占めている。だけではない。肥沃なサン・ローデル地方を有するバウルフアー侯爵の財力は、王国正規軍の経済的な要でもあるのだ。

そんな侯爵に調子を合わせて、他の諸侯も口々に頼もしい事を言い始める。

「そうとも。王都奪還後の事など、今はお考えになりませぬよう」

「我らの目的は身の栄達にあらず、逆賊の打倒と王家への忠誠なり！」

「王国の平和と民の笑顔こそが、我らにとって最大の報賞でございます」

などと皆、言っているが。ダルーハ・ケスナー打倒に成功した場合、まさか本当に民の笑顔だけで報賞を済ませる、わけにはいかないだろう。

ヴァスケリア王国全土の地方領主約50名のうち、ダルーハに恭順の意を示した者は、およそ20名。

彼らは所領も財産もことごとくダルーハに没収され、平民同然の生活を強いられると聞く。皆殺しにされた、という噂もある。

そんな目には、遭いたくない。

バウルフアー侯爵以下、8名もの地方領主が王族に味方している理由は、まさにそれだけだ。王家への忠誠心などでは、断じてない。まあ当然であろう、とティアンナは思う。

逆賊に敗れ、王都を追われ、権威も権力も失った王族に、忠誠を尽くせと言う方がむしろ無法である。

そんなヴァスケリア王家に、しかし8名もの地方領主が、曲がりなりにも協力してくれている。

それはダルーハの、諸侯に対するやり方が、あまりにも暴虐過ぎるからだ。

所領を奪う。財産を奪う。何もかもを奪い取る。

それがダルーハのやり方で、諸侯をことごとく味方に引き込んで王家を孤立させる、などといった政治的な手段を、あの童退治の元英雄は決して取ろうとしない。ただ力で奪い取る。それだけだ。

この政治力の欠如がダルーハ軍の弱点である、とは言える。

王国正規軍としては、日和見をしている残りの諸侯を、1日も早く1人でも多く味方に付けて、数でダルーハ軍を圧倒するしかない。数の力。それは兵士の人数だけではない。民衆も、味方にしなければならぬ。

兵糧の供出、新兵の補充、その他諸々。民衆に頼らねばならない事は、数多くある。

民の協力なくして、戦に勝つ事は出来ないのだ。

その事に関して、しかし今の王国正規軍は、1つ問題を抱えていた。

「卿らのその志、実に頼もしく思うぞ」

モートン王子の口調は、相変わらず偉そう、だがどこか媚びへつらうような響きがあるのを、ティアンナは聞き逃さなかった。

にこにこと、本当に必要以上ににこやかな兄王子の表情を見て、ティアンナは苦い気分が襲われた。

明らかな、愛想笑いである。

バウルファー侯爵らに対し、王族たるモートン王子が、毅然とした態度を取る事が出来ずにいるのだ。

これではとても、あの話を切り出す事など出来ないだろう。

「兄上……いえ、第2王子殿下」

だから、ティアンナが口を開く事にした。

「この場で1つ、特にバウルファー侯爵殿に対し、申し上げておく

べき事がありではないかと」

「なっ、何を言うか、このめでたき戦勝の席で」

むくんだ顔を半ば青ざめさせて、モートン王子がうろたえる。

「ほう、特に私に……でございませうかな？ 第6王女殿下」

言いつつ、いくらか横柄な視線を向けてきたバウルファー侯爵に、ティアンナはまっすぐ視線を返した。

モートン王子ほどではないにせよ、バウルファー侯爵は狼狽した。この天幕に籠りっぱなしだった第2王子と違い、前線でダルーハ軍兵士たちを大いに殺戮していた王女の姿を、侯爵のみならず、この場の諸侯全員が知っている。

強い眼差しで彼らを見回し、ティアンナは言った。

「方々には1つ、肝に銘じていただかねばならない事があります。今日の戦において我ら王国正規軍は、決して勝利を収めたわけではない、という事です」

今日ダルーハ軍を退ける事が出来たのは、ガイエルが魔獣人間を倒してくれたからだ。

つまりこれはガイエル・ケスナー1人の勝利であり、王国正規軍がダルーハ軍に勝ったわけではないのである。

「我らは今まで、ただの1度もダルーハ軍には勝っていない、という事です。ご存じのようにダルーハ卿は恐るべき相手、王国正規軍が勝利を得るには……何よりも、民衆の協力が不可欠なのです。故に我が軍は、民に対する略奪・乱暴狼藉を一切禁じてきました。全将兵に、です。例外はありません」

「な、何をおっしゃりたいのですかな、王女殿下は」

バウルファー侯爵が言いながら、たらたらと汗を流す。

皆の面前ではっきり言わねばならないのか、とティアンナが思った、その時。

「失礼する。バウルファー・ゲドン侯爵殿は、こちらにおいでか？」何者かが、ずかずかと天幕に踏み入って来た。

若い男が2人。片方が、もう片方の首根っこを掴んで、引きずっ



ている。

引きずられているのは、着ている鎧だけは立派な、いかにも貴族の馬鹿息子といった感じの若者だ。

青ざめ、今にも泣き出しそうな彼を、物のように引きずっているのは。歩兵用の粗末な鎧を着た、血まみれの若者……ガイエルである。

この人は何故、会う度に返り血にまみれているのだろう、とティアンナは思った。

バウルファア侯爵が立ち上がり、叫んだ。

「セリウス！」

「ち、父上……どうか、お助けをお……」

ガイエルに引きずられた若者が、泣きそうな声を出している。

セリウス・ゲドン子爵。バウルファア侯爵の20名近くいる息子たちの中で、特に出来の悪さで知られた1人である。それゆえにか、父侯爵には最も可愛がられているらしい。

「こ……これは、いかなる……」

「あんたがバウルファア侯爵殿か。いかなる事であるのか聞きたいか？ 大方わかっておられるのではないのか？ わからねば聞かせて差し上げよう」

諸侯の眼前にセリウス子爵の身体を放り出しながら、ガイエルは言った。

「この子爵殿がな、手勢を率いて近くの村に押し入り、ダルーハ軍と対して変わらぬ事をしていた。俺が駆けつけた時には、村の若い娘たちを裸にして踊らせながら、宴会の真っ最中だったな」

「ガイエル様には、ご面倒をおかけしました」

ティアンナは1度ペこりと頭を下げ、すぐに上げながら言った。

「それで……セリウス子爵の手勢の兵士たちも、連行して来ていただけたのでしょうか？」

「いやまあ、それはその……」

ガイエルが頭を掻いた。

その兵士たちがどういう目に遭ったのかは、ガイエルの血まみれの姿を見れば、聞かずともわかる。

「連行して……は、ただけなかったのですね？」

「捨ててきた。あまり綺麗な死体にはならなかったものだから……すまん、申し訳ない」

深々と、ガイエルが頭を下げる。

ティアンナは溜め息をついた。

その場にいたのが自分だったとしても、女の子に裸踊りなどさせていた兵士たちを、少なくとも口頭注意だけでは済ませなかっただろう。

「私もあまり偉そうな事は言えませんが……戦場以外では出来る限り力加減をしていただけだと大変嬉しいです、ガイエル様」

「努力する」

律儀に応える若者の、返り血まみれの姿を、諸侯が怯えた目で注視している。いや、目を逸らせている者もいる。

ダルーハ・ケスナー討伐令の布告に応じて、この地方領主8名が馳せ参じて来た際、ティアンナは迷った。

討伐対象たるダルーハの子息が、王国正規軍に与力してくれている。それを明らかにするべきか、隠すべきか。

ティアンナが迷っているその場で、しかしガイエルは諸侯に対し、己の正体を明かしてしまった。自分は逆賊ダルーハの息子である。

これからいささか派手な親子喧嘩をやらかすので、せいぜいそれを利用してくれれば良い、と。

諸侯8人は驚愕し、当然ながら良い顔はしなかった。その場でガイエルを罵倒する者もいた。

そうした声は、しかし次第に小さくなり、1ヶ月を経た今となつては、陰口すらほとんど聞かれない。

この1ヶ月の間に幾度か起こったダルーハ軍との小競り合いで、ガイエルが常に前線で戦ってきたからだ。

前線で、ダルーハ兵たちを大いに虐殺してきたからである。

そして今日。ガイエルはついに戦場で、人ならざる己の正体を明らかにした。

今や諸侯を含む王国正規軍全将兵にとって、ガイエル・ケスナーは完全に、恐怖の対象となってしまうたのだ。

「さて。この子爵殿を、どう扱ったものかな」

返り血に汚れた美貌を微かに傾け、ガイエルは言った。

「俺としては殺してしまいたい。こやつは俺の目の前で、実に不愉快な事をやらかしてくれたのだから……だがティアンナ王女が殺すなおっしやるならば、我慢しよう」

「助かります。我慢をして下さい」

言いながらティアンナは、腰に吊った魔石の剣をスラリと抜いた。抜きながら、一閃させた。

微かな手応えと同時に、セリウス子爵の首筋から鮮血が噴き上がった。

「セリウス！ おおおおおおおおお」

バウルフアー侯爵が絶叫し、駆け出し、息子の身体を抱き止める。父親の腕の中で、しかしセリウス子爵はすでに絶命していた。

血まみれの息子の屍を抱えたままバウルフアー侯爵は、へなへなと座り込み、嗚咽を漏らす。

「おおお……セリウス……何と、何という……」

「バウルフアー・ゲドン侯爵殿」

ティアンナは、冷ややかな口調と表情を作った。

「私のこの行いを許せぬとお思いならば、今すぐ兵を率いてサン・ローデルへお帰りになるか……あるいは、このままダルーハ卿に与力なされるか。いずれにせよ、お止めはいたしません。御自由に」  
他の諸侯が、モートン王子が、青ざめている。ガイエルでさえ、目を丸くしている。

驚愕の視線を、様々な方向から受けつつ、ティアンナはなおも言う。  
「それとも、この場で御子息の仇をお討ちになりますか？ 受けて

立ちますよ」

「……いえ……」

王女の眼光を正面から受けられずバウルファー侯爵は、息子の屍を抱いたまま俯いた。

「逆賊を討ち、王国の民に安寧をもたらすべく、我らは馳せ参じたもの……その志を穢したるは愚息の方にございます。王女殿下が御手を汚される前に、私が罰するべきでございました……」

「御立派です。御子息の死も、無駄にはならないでしょう」

魔石の剣を鞘に収めながら、ティアンナは諸侯を見回し、言い放った。

「民に害なす者を、王国正規軍は味方として認めはしません。方々も、どうかお忘れなきように」

自分がとてつもなく暴力的な事をしている、という自覚がティアンナにはあった。

自身の力で、ではない。ガイエル・ケスナーを近くに置いて、さりげなく諸侯を威圧しているのだ。

（私……ダルーハ卿よりも、たちが悪いわ……）

自己嫌悪に陥りながらも、ティアンナは思う。

王宮には、醜い顔をした人々しかいなかった。

だが彼ら彼女らに劣らず自分は今、醜い顔をしているのかも知れない。

森林、と言うほどには鬱蒼としていない、まばらな木立の中である。

いつ見ても甲冑の似合っていない小太りな身体が、大木にもたれて座り込んでいた。

モートン・カルナヴァート第2王子。

逆賊ダルーハ・ケスナー討伐を掲げる王国正規軍の、総司令官である。少なくとも名目上は。

兵糧の干し肉を不味そうにかじっているモートン王子に、ガイエルは無遠慮に歩み寄り、声をかけた。

「美食に慣れた口には合わんだろうが、まあ無理をしても食っておくのだな」

モートン王子が、ビクツと震え上がった。

そんな王子から少し離れた大木の根元に、ガイエルは腰を下ろした。

今は人間の姿で歩兵の装いをしているガイエルだが、人間ではない正体をモートン王子も1度は目の当たりにしている。あまり近付いて恐がらせるのも、気の毒というものだ。

「いくらか不用心ではないのか。一軍の総大将ともあろう者が、このような場所で」

同じ干し肉をかじり始めながら、ガイエルは言った。

「ダルーハの放った刺客や暗殺者の類が、うろついているかも知れんのだぞ」

「……私が暗殺されたところで、この軍の指揮権は、あのティアンナが握るだけの事。いや今とて、実質的にはそうではないか」

怯えながらもモートン王子は、まともに会話の相手をしてくれた。

「……誰も、私の言う事など聞きはしない」

「まあ確かに、あんたの妹は実に恐い姫君だからなあ」

諸侯の面前で、有力者の子弟を一刀のもとに斬殺してのけた、先程のティアンナの姿を。ガイエルは、思い返した。

あの冷酷さは、確固たる信念に裏打ちされている。王国の民を救うという、言葉にしてしまうといささか安っぽくなってしまいう信念に。

ただ感情の昂るままに人を殺戮するガイエルの残虐性とは、全く異なるものだ。

「そのティアンナ姫に頼まれて、あんたを探しに来たのだよ第2王子殿下。総司令官たる者が護衛も伴わずに本陣を離れるなど言語道断、と怒っておられたぞ。あの姫君は」

「放っておいて欲しいものだ。どうせ本心では、このような兄王子など死んだ方が良いと思っっているくせに……まあ確かに私など、いなくなったところで王国正規軍には何の不利ももたらさぬ。所詮は飾り物の総大将よ」

「そう思うなら、本当にいなくなってみるか？」

睨むようにモートン王子を見据え、ガイエルは言った。

「その立派な鎧を脱いで、ひっそりと姿を消し、どこかで畑でも耕して慎ましく暮らしてみるか。そうすれば、税を搾り取られて生きる民の苦しみが、少しは理解出来るかも知れんな」

「……それが出来れば、とうの昔にやっておる」

やや上目遣いながらモートン王子は、ガイエルの眼光を受け止めている。

「私はな、齢すでに30近い。30年近く、王族として生きてきた。正確には28年、民から搾り取ったもので贅沢三昧という生活に浸りきってきたのだ。今更、搾り取られる側になど回れるものか……畑を耕して生きる事など今更、出来るものか」

「それも、そうだな」

固い干し肉だ、とガイエルは思った。民衆から搾り取ったもので贅沢三昧、の暮らしに慣れきった人間の口に合うものではなからうが、モートン王子は我慢してかじっている。

その不味そうな食いっぷりを眺めながら、ガイエルはさらに言った。

「王族として生まれてしまったその身は、今更どう変える事も出来んか……搾り取られる農民の家に生まれてしまった者が、農民にしかねれないように」

「貴様はどうなのだ、ガイエル・ケスナー」

木の根元に座ったまま、ほんの少しだけ、モートン王子が身を乗り出した。

「逆賊の子として生まれながら、逆賊になろうとせんのか。何故、父親と袂を分かってまで我々に味方する？」

「親父殿と袂を分かつ、つもりはなかったのだ。最初のうちはな」  
ガリエルは空を仰いだ。少し雲のある、晴れた空。

この晴天の下のどこかでダルーハ軍は今頃、非力な民に対して、また何かろくでもない事をしているに違いない。

「俺も、この度の叛乱には大いに乗り気だった。何しろ、あんた方ヴァスケリア王家の政治はひどかったからな。民衆から大いに税を搾り取っておきながら、それに見合った事を何一つやろうとせん。あれでは、うちの親父殿でなくても誰かが叛乱を起こしていただろう。下手をすれば他国の介入を招き、泥沼の内戦が何十年と続く……そんな事態に陥る前に、ケスナー家の力でこの国を立て直してみせる。と俺は勇み立って親父殿に従い、ダルーハ軍の兵士として戦った。戦い始めて、すぐに気付いた」

まったく、愚かだったとしか言いようがない。

生まれてから19年間、ずっとダルーハという男を見続けてきたのに、実際に戦が始まってしまいうまで気付かなかったのだから。

「ダルーハ・ケスナーを支配者になどしたら、この国は滅ぶ。とな……例えばモートン王子。あんたが国王として即位した方が、まだましだ」

「……誉められている、わけではないようだな」

「それがわかるだけ、あんたは王侯貴族としてはましな方だ。これは、誉めているぞ?」

微笑みながらもガリエルは、おぞましく忌まわしい記憶を甦らせていた。

ダルーハは、兵隊による民衆への暴虐行為を、一切禁じないどころか奨励すらした。

破竹の勢いで勝ち進むダルーハ軍によって、いくつもの町や村が焦土と化し、そこにあった物は奪い尽くされ、住んでいた人々は虐殺された。

犯されかけていた女性や殺されかけていた子供、の何人かを、ガリエルは確かに助けた。そのために、大勢の自軍兵士を殺戮した。

そんなやり方で、しかし軍に蹂躪される人々全員を救えるものではない。

軍の暴虐そのものを止めるには、すなわち総大将ダルーハ・ケスナーを止めるしかなかった。母の遺言通りにだ。

だからガイエルは、ダルーハの本陣に押し入り、言葉による説得を一応は試みた後、父親との戦いに突入した。

そして、敗れた。

完膚なきまでに叩きのめされた挙げ句、川に放り捨てられ、流されながら気を失っている間に王都エンドウールは陥落。叛乱は、成功してしまっていた。

母が危惧した通りダルーハは暴君となり、ヴァスケリアの人民を大いに苦しめている。

ガイエルは思う。自分の責任だ、などと考えてしまうのは自惚れかも知れない。だが最初のほんの一時期とは言え、この叛乱に加担していたのは事実なのだ。そして、父を止める事が出来なかったのも。

「総司令官殿に、1度だけは申し上げておこうか」

干し肉を2枚まとめて食いちぎり、咀嚼し飲み込んでから、ガイエルは言った。

「俺とダルーハは殺し合う間柄だ。あの親父殿は、とにかく俺の気に入らぬ事しかせん……だから俺は、ダルーハを殺す。奴の息子だからと言って、王国正規軍の不利を招くような事はしないつもりだ。まあ信じる信じないは勝手だが」

「……ダルーハの息子、か」

信じるとも信じないとも言わずに、モートン王子は溜め息をついた。

「かつての竜退治の折、ダルーハ・ケスナーは竜の返り血を浴びて人間ではなくなった、と聞く。それは本当の事なのか」

「竜退治の現場をもちろん俺は見たわけではないが、あの男が人間をやめているのは本当だ」



「その息子である貴様も、だから人間ではないというわけだな」

「……………」

ガイエルは黙り込んだ。モートン王子が、いくらか慌てた。

「なっ何だ、よもや気を悪くしたのではあるまいな。だが貴様が人間ならざる者であるというのは本当の事ではないか」

「気を悪くしたわけではないが……」

モートン王子は、1つ間違えている。

ガイエルが人間ではないのは、ダルーハ・ケスナーの息子だから……ではない。

ガイエルの母は、ヴァスケリアの王女だった。

名はレフィーネ・リアンフェネット。モートン王子の、少し遠いが一応は叔母に当たる女性である。

そのレフィーネ王女が、悪しき竜にさらわれ、若き日のダルーハ・ケスナーに助け出された。

だが助け出された時。レフィーネ王女は、すでに子供を身籠っていた。

竜の、子である。

生まれた子供をダルーハは、実の息子として扱ってはくれた。

ガイエルは物心つく頃より、大いにしごかれ、地獄のように鍛え上げられた。

「……単なる虐待だったのかも知れんなあ、あれは」

「何だ？」

「いや、何でもない」

ガイエルは微笑んで見せた。

「あんたの言う通りさ、モートン王子。俺が人間ではないというのは、否定しようもない事実だ」

何の息子であろうともな、とガイエルは心中で付け加えた。

母レフィーネは1度だけ、ガイエルに語った。

あの方には感謝しているわ。私に、お前を授けてくれたのだから……と。

「……つまりは、こういう事か」

1つ咳払いをしてから、モートン王子は言った。

「人は、生まれを選ぶ事は出来ぬと。私が王族に生まれてしまったように、貴様は人間ではないものとして生まれた。生まれてしまった場所で、環境で、人は懸命に生きるしかない。そう説教でもしたいわけかガイエル・ケスナー」

「そんな立派な事を言ったつもりはないが……そう聞こえたのなら、それもいい」

そろそろ、この王子を引きずって本陣に帰ろうか。とガイエルが思った、その時。

轟音が、聞こえた。

禍々しく空気を震わせる、恐らくは爆発音。本陣の方から、聞こえて来ている。

「何事……」

モートン王子が、座ったまま身をすくませている。

どうやら本当に、引きずって行く事になりそうだった。

## 第8話 魔獣人間、強襲

魔法による爆発である事は、音を聞いただけでわかった。

王国正規軍の攻撃魔法兵士部隊が、何かしでかしたのか。ティアナはまずそう思い、即座に否定した。

今の爆発は、攻撃魔法兵士の微弱な魔力によるものではない。もっと強大な魔力を持つ何者か、の仕業だ。

そう直感しつつ、ティアナは駆けた。

走り出してすぐ、その光景は視界に入った。

本陣を囲む柵が、広範囲に渡って失われている。地面の一部もろともだ。

危うく何かにつまずきそうになって、ティアナは立ち止まった。王国正規軍兵士の、屍だった。それも上半身だけである。焼け焦げた断面から、生焼けの臓物が溢れ出して湯気を発している。

同じような死体が、あちこちに散らばっていた。爆殺された、幾人もの兵士たち。

生きている兵士らが陣中のあちこちから集まって来て、おっかなびっくり武器を構えながら、何も出来ずにいる。

「どけ、貴様たちに用はない……」

言いながらこちらに歩み寄って来ているのは、黒いローブに身を包んだ、攻撃魔法兵士のような身なりの男である。だが魔石の類は、身に帯びていないようだ。

「用があるのはそなたにだよ、ティアナ・エルベット第6王女殿……」

攻撃魔法兵士、ではなく魔術師。魔石を必要としない魔力を持つ者。

年齢のよくわからぬ、特徴に乏しい顔が、今は狂人の如く痙攣して目を血走らせ、ティアナの方を向いている。

黒いローブが、妙な感じに波打っていた。

いや。波打っているのは、ローブの下にある肉体だ。

男の細い身体が、めきっバキッと奇怪な音を発し、歩きながら蠢いている。

この男が、とりあえず人間ではない事だけは、明らかだった。

魔石の剣をすらりと抜きながら、ティアンナはまず声をかけた。

「……魔獣人間が、私に何の用がある？」

「おわかりか姫君。この私が、究極至高の生命体……魔獣人間である」と

嬉しそうに声を震わせながら、魔術師がまた1歩、近付いて来る。ティアンナの左右で、兵士たちが動いた。

「お、おのれ化け物……！」

「姫様には、それ以上近付けさせぬ！」

若い歩兵が2人、剣を抜き、槍を構えて、魔術師に襲いかかる。

「駄目！」

ティアンナが叫んでいる間に魔術師が、いよいよ人間ではなくなっていた。

黒いローブがちぎれ飛び、その下で波打っていた肉体の一部が、蛇の如く高速で伸びる。

「見知りおき願おう……私はダルーハ軍参謀、ムドラー・マグラと申す者」

言葉を発してはいるが、口がどこにあるのかは、もはやわからなくなっている。

兵士2人は、じたばたと暴れながら宙に浮いていた。

彼らの身体に、蛇のようなものが幾重にも巻き付いている。全体にびっしりと吸盤のある、2匹の大蛇……と言うよりも、頭足類の触手。

それらは、魔術師ムドラーの身体から生え伸びていた。

「……ティアンナ姫、そなたを迎えに参った。私と共に来い。その美しさを、永遠のものとするために」

おぞましいほど流暢に人間の言葉を喋りながらも、ムドラー・マ

グラは今や完全に、人間ではないものになっていった。

特徴に乏しかった顔面は丸く膨れ上がり、その肉に呑み込まれてしまったかのように鼻も口も見当たらない。灯火のような2つの眼球だけが、赤黒い肉に埋まりつつ禍々しく輝いている。

口元か首か胸元か判然としない部分から、3本。太く長い触手が生えていた。人間の皮膚くらいなら容易く剥ぎ取ってしまいそうな吸盤を無数備えた、まさに生ける凶器と言うべき触手。

同じものが背中からも3本、伸びており、尻尾の如くうねっている。

計6本の、蛸の足。うち2本が、兵士2人を捕えているのだ。

前方3本、後方3本の触手たちに挟まれ、まるで7、8本目の触手のように生えた左右の腕は、枯れ木のように細長く、肥満した胴体と比べて不気味なほど不釣り合いである。

両足はぶよぶよと太く短く、見るからに動きが鈍そうであるが、足など動かす必要はなさそうなほどに、6本の触手がヒュルヒュルと俊敏にうねり続ける。

赤黒い肉で醜く膨れ上がった巨体。どこに発声器官があるのかわからぬ、その異形が、なおも人間の言葉を発した。

「さあ私と共に来いティアンナ姫。さもなくば陣中の兵士全てが、このような死に様を晒す事となる……」

触手に捕えられた2人の兵士が、痙攣した。

彼らの全身あちこちに、いくつもの吸盤がバキバキッと、鎧を食い破り吸い付いている。

吸い付かれた兵士2人の肉体が、痙攣しながら、急速に痩せていった。

無数の吸盤によって、吸い取られている。血を、体液を、水分を。「ああ不味い不味い……姫君よ、そなたの血はさぞかし美味しいのであろうなあ」

ティアンナに向けた眼球をギラギラと欲望に輝かせながら、ムドラーは触手をほどいて兵士2人を解放した。

カサカサに干涸びた屍が2つ、地面に落下して砕け、粉末状に崩れてしまう。

「……だが耐えよう。そなたはなティアンナ姫、私の手によって永遠に生きる存在となるのだ。永遠に美しく、いかなるものより強い……自然には決して生まれ得ぬ、優れた叡智と技術によってのみ誕生し得る、最高の生ける芸術品！ そんな存在に、なりたいよなあティアンナ姫？ なりたいよなああああ」

吸血能力を有する6本の触手が、凶暴にうねる。

それらを掻き分けるようにして、細長い2本の腕が、ゆっくりと掲げられた。

「いや、ならねばならぬ。そなたは、そのために生まれたのだよ……」

突然、空中に炎が生じた。人の頭ほどの大きさに固まって燃え盛る、火炎の球体。

それが5つ、8つ、いや10個。ムドラーの周囲に浮かび、  
「この私の！ 創造主ムドラー・マグラの作品となるためになああーッ！」

一斉に飛んだ。発射された。

10個もの火球が流星のように飛び、あちこちに落下する。

本陣の各所で、爆発が起こった。

いくつもの天幕が吹っ飛び、兵士たちが火だるまになりつつ砕け散って宙を舞う。

「やめなさい！」

ティアンナの凜とした怒声に合わせ、魔石の剣が白い光を帯びる。火球が3つ、こちらに向かって飛んで来ていた。

白く発光する刃を振りかざしながら、ティアンナは踏み込んでいた。

下着同然の鎧をまとう半裸の細身が、くると軽やかに躍動する。その周囲で、魔石の剣が超高速で弧を描く。白色の光が、弧形の軌跡となって空中に残る。

その光の弧に触れた火球が3つとも、弱々しく砕けて火の粉となり、消えた。

「素晴らしい……素晴らしいぞ。その剣技、その魔力、その美しさ……」

吸血触手を嫌らしくうねらせて、ムドラーが興奮している。

「その美しき強さを、至高の領域まで高めてくれようと申しておるのだ。さあ私と共に来い、ティアンナ姫」

「殿方の裸は綺麗、と思っていたけれど……貴方の裸は、とても醜くて無様」

白い光の剣を両手で構えたまま、ティアンナは言い放った。

「そんな無様な生き物が、至高の美しさなどと口にするものではないわ。少しお黙りなさい、魔獣人間」

「ぐっ……そ、それで良い。大人しくついて来られたら物足りない、私も思っていたところなのだよ実は」

怒りか悦びか、よくわからぬ感情で、ムドラーの醜悪な巨体が激しく震える。

「健気に抵抗してみせるが良い。愛らしく暴れ怒り泣き叫ぶそなたを、じつくりと愉しみながら、人間ではないものへと造り変えてくれよう。この私が……この魔獣人間ヴァンプクラーケンがなああ」

「では俺も、そうさせてもらおうか」  
声がした。

一斉にティアンナを襲おうとしていた6本の吸血触手がビクツ！と怯えたように硬直してしまう。

「醜く無様に暴れ泣き喚く貴様を、じつくり愉しみながら鬨り殺してやる」

言葉と共に。1人の若い歩兵が、他の兵士らを押しのけるようにして、この場に歩み入って来た。

「……俺は、残虐なのでな」

ガイエル・ケスナーだった。モートン王子もいる。

「ダルーハ軍の怪物！ 我が陣中でこれ以上の好き勝手は許さんぞ

！」

などと威勢の良い事を言っているモートン王子に、魔獣人間ヴァンプクラークンが、ぎろりと眼球を向ける。

小さく悲鳴を上げながら、モートン王子がガイエルの背中に隠れてしまう。

庇うように軽く片手を掲げ、ガイエルは言い放った。

「親父殿の腰巾着が、たった1人で敵陣に乗り込んで来るとはな。貴様にしては良い度胸であると、まあ誉めておいてやろう」

「ガイエル・ケスナー……間違ってこの世に生まれただけの、呪われし怪物めが」

呻きつつヴァンプクラークンが、細長い両腕をガイエルに向ける。枯れ木のような両手の五指が開き、左右の掌がボォ……ッと赤く発光した。

その赤い光が、

「出来損ないどもを倒しただけで調子に乗るなよ……これが！ 真の魔獣人間の力よ！」

ムドラークンの叫びに合わせ、一気に膨張し燃え上がる。

丸まった人体ほどの大きさの、巨大な火球。それがヴァンプクラークンの眼前に出現していた。

出現と同時に、発射された。ガイエル及びモートン王子を狙って、赤い流星のように。

モートン王子が尻餅をつき、悲鳴を上げる。

そんな王子を守る形に立ったまま、ガイエルは左手で己の顔面を覆った。指と指の間で、両目が赤く輝く。

「悪竜転身……」

眩きと共に、ガイエルの全身から、歩兵の甲冑が飛び散った。

巨大な翼が広がり、長い尻尾が跳ねる。

異形と化してゆく裸身に、巨大な火球が激突した。そして砕け、火の粉となった。

それを払いのけるように左手を振るいながらガイエルは、甲殻と



鱗をまとった赤い魔人の姿を、露わにしている。

「貴様……そう、その姿だ。その、おぞましき姿……」

呟き、いくらか怯えながら、ヴァンプクラーケンが後退りをした。「どこの誰が、私のように苦心して作ったわけでもない……ただ間違っで生まれてしまっただけの化け物……そう、貴様の存在そのものが間違いなのだ！」

「……そうかも知れんな、確かに」

背後で腰を抜かしているモートン王子を、ガイエルはちらりと一瞥した。そして言う。

「ティアンナ姫、貴女の兄君が実に素晴らしい事を言った。人は生まれを選べぬ。生まれてしまった場所で、環境で、精一杯生きてゆくしかない。とな」

この兄が、そんな立派な事を言うはずがない。

それより、この2人が妙に仲良くなっているように見えるのが、ティアンナは気になった。

「間違っで、とは言え俺はこの世に生まれてしまった。だから、出来る事を精一杯やろうと思っている」

言いつつガイエルは、甲殻類の節足のような人差し指をヴァンプクラーケンに向けた。

「……まずは貴様の処刑からだ、ムドラー・マグラ」

少なくとも18年間、レドン地方は平和だった。

竜退治の恩賞としてこの地を与えられてから18年間、ダルーハ・ケスナーは領主として、しっかり地方政治を行ってきたという事である。

……否。18年もの間レドン地方をしっかりと治めてきたのは、領主ダルーハではない。領主夫人のレフィーネ・ケスナー元王女の方である。とガイエルは思っている。

ダルーハは、とにかく暴政をやりたいがった。

税を2倍にするなどと言い出した事もあるし、領民の些細な落ち度に怒って村1つを皆殺しにしようとした事もある。

それらが実行されずに済んだのは、その度に妻レフィーネが止めていたからだ。

我欲と暴力だけで領主の地位にまで上り詰めた男ダルーハ・ケスナーが、この妻の言う事だけは素直に聞いた。

様々な暴虐や搾取を、ダルーハは常に、レドンの民衆に対して行おうとしていた。

それは私腹を肥やすため、と言うより、民衆を虐げる事そのものを目的としている。ようにガイエルには思えたものだ。

民衆、あるいは弱者という存在を、あの父は嫌っていた。憎んでいた。

だからレドンの民に対しては様々な暴虐を試みようとして、その度に妻レフィーネに止められていた。

ガイエルが見たところ、この両親夫婦は18年間ずっとそんな感じだった。

レドン地方の民は、レフィーネ・ケスナー領主夫人に守られていた。と言っていていいだろう。

そのレフィーネが、病で死んだ。

だからダルーハは、戦の、叛乱の、準備を始めた。金で兵士を集め、軍備を整えるのに1年を費やした。

その1年の間の、いつ頃からであっただろうか。このムドラー・マグラという男が、ダルーハの近辺をうろつくようになったのは。

「……覚えているぞムドラー。その醜く無様な正体を晒しながら貴様は必死に、自分を親父殿に売り込もうとしていたな」

ガイエルが嘲笑うと、ムドラー・マグラ……魔獣人間ヴァンプクラークンは、いくらか怯えながらも傲然と言葉を返してきた。

「魔獣人間の研究に理解ある権力者を、私は探していたのだ。まあ持ちつ持たれつといったところであろうよ。ダルーハ様とて、私のもたらした魔獣人間という戦力がなければ、叛乱など起こせなかつ

たのだからな」

「……貴様は、あのダルーハという男を全く理解していないようだな」

そこそこ便利だから使っている。ダルーハ・ケスナーにとって魔獣人間とは、その程度のものだ。

「魔獣人間などいなければいけないで、親父殿はたった1人でも叛乱を起こしていただろう。何しろ奴自身、貴様の作った出来損ないな」と問題にならん力を持っているのだからな」

「がッ……！ ガイエル・ケスナーアアッ！」

怒りの叫びを引きつらせながらヴァンプクラーケンが、6本もの吸血触手を一斉に伸ばして来た。

ガイエルは、踏み込みながらユラリと身を揺らした。2本、3本。高速で襲い来る触手を、紙一重でかわす。

だが4本目をかわした直後、左腕それと右脚にビシビシッ！ と衝撃が巻き付いて来た。

「む……」

吸血触手の5本目が、ガイエルの左の二の腕に。6本目が、右の太股に。それぞれ絡み付いていた。無数の吸盤がバキバキと鱗を破って肉に食い込み、吸い付いて来る。

「けっ汚らしい怪物の血だが、耐えてくれよう吸い尽くしてくれよう！ 干涸び碎けて死ぬが良い……ぎっ、ぎいやあああああああ」

左腕と右太股から血が吸われ始める、のをガイエルが感じた瞬間。ヴァンプクラーケンの声が、悲鳴に変わった。

左の二の腕と右の太股にそれぞれ巻き付いていた吸血触手2本が、煮立ったようにブクブクブクッと泡状に膨れ上がり、破裂した。

悲鳴を上げてよろめく魔獣人間に、ガイエルは歩み寄り、声をかける。

「俺の身体に流れているのは、竜の血だ……」

二の腕と太股に、微かな傷が残った。動きに支障が出るほどの傷

ではない。

「ダルーハ・ケスナーでさえ、浴びただけで死にかけた竜の血液……貴様ごときに、耐えられるものか」

「ひ……！」

表情のない、だが明らかに怯えているとわかるヴァンプクラーケンの顔面が、次の瞬間グシャアツと拳の形に凹んだ。ガイエルが、左拳を叩き込んでいた。

間髪入れずに、右も。節足が5本丸まり固まったような拳が、横殴りに一閃する。

肉を叩き潰す、したたかな手応えを、ガイエルは感じた。

ヴァンプクラーケンの顔面がさらに歪み、2つの眼球が破裂し飛び散っていた。

ぶよぶよに肥えた巨体が、ゆらりと回転しながら倒れ、土煙を舞い上げる。

「ムドラー・マグラ……魔獣人間などというくだらんものを作るのに、今まで一体どれだけの人間を殺してきた？ この先どれだけの人間を殺すつもりだ？」

問いかけながら、ガイエルは左腕を掲げた。刃物状のヒレが、ジヤキツ……と金属的な音を立てる。

「貴様を生かしておく事は出来ん。何故なら俺は」

「残虐だから、でございますか」

声が出た。聞く者の腹にずしりと響く、重みのある男声。

「正義のため、弱き人々のため……と素直に口になされば良いものを。相変わらず心のひねくれた若君であられる」

甲冑姿の、巨漢である。凄まじく高密度な筋肉の付き具合が、鎧の上からでも見て取れるほどだ。

棘のような短い黒髪に、岩を彫り込んだような顔面。眼光は鋭く、表情は不敵そのものである。

いつから、そこにいたのか。どこからどうやって、この陣中に入り込んだのか。とにかくその巨漢に、ガイエルは言葉を返した。

「ドルネオ卿……そうか、あんたも人間をやめたのだったな」

「羨ましかったのですよ、御大將が」

ドルネオ・ゲヴィン。

ガイエルが物心ついた頃には、この男はすでにダルーハの腹心に近い地位にいた。聞くところによると、父の竜退治に同行した戦士の1人であるという。

「この男を助けに来た、というわけか」

何事か呻いているヴァンプクラークを一瞥し、ガイエルは言った。

「まさかとは思うが……こやつと2人がかりならば俺を倒せる、な  
どと思っているわけではあるまいな？」

「御冗談を。2人がかりで若君に勝てるわけがございませぬ……が、  
1対1ならば」

ドルネオの声が1段、低くなった。

筋骨たくましい身体がメキッ、と痙攣する。

「足を引っ張る者がおらぬ、1対1の戦いならば……俺が、勝つ……ッ」

甲冑がちぎれて弾け飛んだ。

さらに隆々と盛り上がった筋肉が、固く、黒っぽく、変質してゆく。新たな鎧が体内から生じつつある、といった感じだ。

石の、鎧だった。

「邪魔する者のおらぬ1対1の戦いで……ガイエル・ケスナー！  
貴公を碎き殺してくれようぞ」

たくましい上半身はそのまま岩石の甲冑と化し、下半身では尻が巨大に膨れ上がって、そこから新たな2本の脚が生えてズシリと地面を踏んでいる。

鎚の如き蹄を備えた、力強い4本脚……ドルネオの下半身は、岩石質の筋肉を有する、巨大な馬体と化していた。

「……この魔獣人間ケンタゴーレムが、な」

岩を彫り込んだような顔面は、本物の岩石細工のようになって表

情が一切失われ、両目だけが青く禍々しく発光している。

そんな岩の兜・仮面と化した頭部が、どこからか声を発しているのだ。

「おいムドラ―殿、くれぐれも手は出すなよ。貴殿の助力など、本当に単なる邪魔にしかならんのだからな」

「ぐっ……ど、ドルネオ貴様……」

倒れたまま呻くヴァンプクラーケンにそれ以上は言葉をかけず、人ならざるものと化したドルネオが、4つの蹄で地面を蹴った。

魔獣人間ケンタゴーレム。その岩石質の巨体が、突進して来る。

ガイエルは跳躍しつつ、背中の翼で1度だけ羽ばたいた。

宙に舞い上がったガイエルの足下を、ケンタゴーレムが凄まじい勢いで通過する。

通過してすぐに、その巨体が立ち止まった。重い蹄で地面を削り、土を舞い上げながら、急停止。

岩の仮面のような顔が、空中に逃れたガイエルを見上げ、睨む。

その顔面に、ガイエルは蹴りを降らせた。

刃そのものの爪を生やした左足が、しかし弾かれる。ケンタゴーレムの巨大な左手が素早く動き、ガイエルの蹴りを跳ね返したのだ。跳ね返されたガイエルの身体が、空中で1度羽ばたいて滞空状態を維持しつつ、回転。右の回し蹴りが、空気を裂いてドルネオを襲う。

そして止まった。止められていた。ケンタゴーレムの右手が、ガイエルの右足をがっちり掴んでいる。

ブーツ状の甲殻の上から、凄まじい握力がメキメキッと食い込んできた。

「ぐ……っ！」

次にガイエルが感じたのは、風だった。強風に吹かれた、と言うよりも、自分の身体そのものが風と化したかのような……

続いて、衝撃。視界が暗転し、意識が一瞬だけ消し飛んだ。

足首を掴まれ、まるで物のように振り回されたガイエルの身体が、

そのまま地面に叩き付けられたのだ。

ケンタゴーレムの巨体が、竿立ちになった。

戦鎚のような両前足の蹄が、倒れたガイエルに向かって思いきり振り下ろされる。

一瞬で意識を取り戻したガイエルが、転がってその場を離脱し、片膝をついて跳ね起きた。振り下ろされた蹄が地面を穿ち、深々と足跡を残す。

片膝をついた姿勢のまま、ガイエルはドルネオと対峙し、睨み合った。

そして気付いた。本陣全体が、騒然としている。

敵襲、という叫び声が、あちこちから聞こえて来る。確かに王国正規軍は現在、魔獣人間2体による襲撃を受けているのだが。

兵士が1人、血を噴いて倒れた。

2人、3人と、首を刎ねられ、あるいは頭を叩き潰されて、死体になる。

ドルーハ軍の1部隊が、本陣に突入して来たところだった。

ドルネオの配下と思われる兵士たちが、槍を、剣を、戦斧や戦鎚を振るい、王国正規軍兵士をことごとく殺戮してゆく。

完璧な、奇襲だった。

「安心なされ若君、我らの一騎打ちに介入させたりはせぬ」

片前足の蹄で地面を引っ掻きながら、ケンタゴーレムが言った。

「見ての通り、今は我が軍が優勢……だが若君よ。貴殿が俺に勝ちさえすれば、たちどころに逆転するであろう」

王国正規軍兵士が、そこかしこで反撃を試みてはいるが、弱々しいものだった。ドルーハ軍兵士の振るう剣に槍を叩き切られ、あるいは鎧迫り合いに負けて転倒したりしている。

この場にいるドルーハ軍部隊は、間違いなく精鋭だ。ドルネオ自らが鍛え上げてきた兵士たちなのであろう。

人数では圧倒的に勝る王国正規軍が、その人数差を、凄まじい勢いで締められつつある。

「ドルネオ、貴様……！」

「非力なる者どもを守れないのが無念か……思い上がりだな、ガイエル・ケスナー」

ずしりと腹に響く口調で、ドルネオが嘲笑う。

「強き者も弱き者どもも、結局のところ己の身は己で守るしかないのだ。己の戦いは、己でするしかないのだよ。戦いもせず、1人の英雄に甘えきって腐ってゆく。戦いもせず、1人の王女を人身御供に保身を図る……そんなクズどもしかおらんのが、この国だ」

1歩ずしりと、ケンタゴーレムの巨体がガイエルに迫る。

「クズどもを守るなど、神でもなければ不可能な事。所詮1匹の怪物に過ぎぬ貴公は、より強大なる怪物に付き従って暴れておるのが、まあ身の程に合った生き方というものよ……共に来い、若君。お父上の下へ帰るのだ。このドルネオが取りなしてやるゆえ、な」



## 第9話 竜の血は怒りに燃える

「親父殿の下へ帰れ、だと……」

ガイエルは露骨に鼻を鳴らし、嘲笑って見せた。

「何もわかっていないようだな魔獣人間。俺はただ、あの男が大嫌いだから、こうして袂を分かってているのだ。神の如く、大勢の人間を守ろうなどと……ダルーハに育てられた俺が、そんな事を考えると思うのか」

「貴殿のこれまでの行動が、全てを物語っているのだよ若君……」  
言いながらドルネオは、4つの蹄で地面を蹴った。

「ヴァスケリアの民を守り救うため、我らダルーハ軍と戦い続ける！  
貴公のその愚かなる意志をなあ！」

魔獣人間ケンタゴールの巨体が、再びガイエルに向かって突っ込んで来た。地響きを伴う、超重量かつ高速の突進。

ガイエルは今度は避けず、身を低くして右腕を後ろに引いた。  
引いた右拳を、グツと握る。

前腕から生え広がった刃状のヒレが、ジャキッ！ と音を立てて大型化した。

斬撃凶器と化した右前腕を構え、ガイエルの方からも踏み込んで行く。そして右腕を振り上げ、刃のヒレを一閃させる。

ケンタゴールが右拳を打ち下ろし、その斬撃を迎え撃つ。

両者が、勢い激しく擦れ違った。

衝撃が起こり、鋭利な破片がキラキラと散る。

刃状のヒレが、粉々に打ち砕かれていた。魔獣人間の、岩石質の拳によって。

「ぐっ……」

ガイエルは左手で、右腕を押さえた。

手甲のような右前腕の外骨格がひび割れ、その亀裂から血がしたり落ちる。

鮮血の雫がジュッ！ と土を溶かして地面を穿つ。

激痛に耐えてガイエルが振り向く、よりも早く、ケンタゴーレムの右の後ろ足が跳ね上がった。重い蹄が、下から上へと一閃する。

「ぐあ……ッ！」

背中に痛撃を喰らいながらも、ガイエルは悲鳴を噛み殺した。

翼が片方折れて、ガイエルの背中から弱々しく垂れ下がる。

「飛ばれては厄介ゆえ……な」

振り上がった後ろ足を着地させつつ、ケンタゴーレムが巨体を振り向かせ、踏み込んで来る。

岩塊の如き左拳がブンッ！ と振り下ろされる。

よろめき、辛うじて倒れず振り返ったガイエルの顔面に、その拳が叩き込まれた。

顔面甲殻が、砕け散った。

直撃の瞬間ガイエルは上下の牙を食いしばったが、それで殺せるような衝撃ではなかった。頭蓋骨の中で脳が激しく揺れ、脳漿がたぶたと波打つ。

自分が倒れている事に、ガイエルは気付いた。

吹っ飛びかけた意識を無理矢理に繋ぎ止めながら、起き上がる。

「お……のれ……っ！」

怒りと闘志の混ざり合ったものが、胸の内で燃え盛る。

それをドルネオに向かってぶちまけるべく、ガイエルは口を開いた。

開いた口を、すぐに閉じた。

自分とケンタゴーレムの周囲では、ダルーハ軍と王国正規軍が乱戦を繰り広げている。どの方向に爆炎を吐いても、王国正規軍兵士を最低でも4、5人は巻き添えにしてしまうだろう。

剥き出しの牙をギリ……ッ と噛み合わせて固まってしまったガイエルに向かい、ケンタゴーレムが、

「恨むなら……味方を巻き込んでしまうような切り札しか持っておらぬ、己の未熟さを恨むのだな」

1歩、ずしりと踏み出した。1歩、ガイエルは後退していた。

（俺は……勝てないのか……敗れるのか……）

噛み合った上下の牙の内側で、ガイエルは呻いた。

（あの時のように……くっ！）

後退した片足をガイエルは無理矢理、前方に踏み出し、駆け出した。

あの時、やはり今のように、容赦なく叩きのめされた。相手はドルネオではなく……ダルーハ・ケスナー。

そう。自分は再び、あの父と戦わなければならない。

父の腹心でしかない魔獣人間ごときを相手に、苦戦などしている場合ではないのだ。

真っ正面から突っ込んで来るガイエル、を迎え撃つ形に、ケンタゴーレムの両前足が跳ね上がる。

攻城鎚にも似た左右の蹄が、高速で襲いかかって来る。のをガイエルは、跳躍してかわした。

そして空中で竜巻の如く身を捻り、左足を振るう。回し蹴り。ブーツ状の甲殻凶器と化した脛と足首が、しかし直後、ケンタゴーレムの巨大な右前腕とぶつかり合った。防御されていた。

その間。魔獣人間の左拳が、下方からガイエルの腹に叩き込まれていた。

「がっ……！」

噛み合っていた上下の牙が開き、血反吐の飛沫が散る。

ガイエルは、宙に浮いていた。高々と吹っ飛んで行きそうになったその身体を、しかしケンタゴーレムが両手で捕まえる。そして。

「……終わりだ、若君」

魔獣人間の首の後ろに、ガイエルの身体は仰向けに担ぎ上げられていた。顎の辺りを右手でガッチリと掴まれ、太股を左手で捕えられ押さえられる。

仰向けに担ぎ上げられたガイエルの胴体が、弓なりに固定された。固定された身体を、ドルネオが両腕で折り殺しにかかる。

岩石質の五指で顎を、首を圧迫され、ガイエルは声を漏らす事も出来なくなった。

ケンタゴーレムの太い首の後ろで、ガイエルの胴体がいきり反らされて背骨がミシミシッ……と悲鳴を発する。力強い腹筋が、ちぎれそうなほどに引き延ばされる。

「ガイエル様！」

白く発光する剣でダルーハ兵の槍を切り払いながら、ティアンナが叫んだ。

彼女の足元付近ではモートン王子が、腰を抜かして座り込み、青ざめ震えている。

「……逃げろ……ティアンナ姫……」

何の拘束も受けていない両腕で、しかし何の反撃も出来ぬまま、ガイエルはようやく辛うじて声を発した。

このまま自分が真っ二つに折り殺されれば、ドルネオ・ゲヴィンを止められる者はもはやいない。この魔獣人間によって、王国正規軍は皆殺しにされる。否、ドルネオ配下の兵士たちだけで充分だ。完全に勢い付いた彼らによって王国正規軍は、諸侯から兵卒に至るまで殺し尽くされる。

ティアンナ姫1人だけなら、血路を開いて逃げる事も不可能ではない。気の毒だが、モートン王子まで助かるのは無理だろう。

「貴女、1人だけでも……ティアンナ姫……ッ」

「ふざけた事を言わないで！」

戦場と化した本陣内に、凜とした怒声が響き渡る。

自分が怒鳴りつけられたわけでもないのに、モートン王子がビクッと震え上がった。

そんな王子に狙いを定めて、ダルーハ兵が3人。それぞれ槍を、剣を、大斧を振り上げ、凶暴に群がって行く。

彼らの眼前に、ティアンナは軽やかに踏み込んだ。

「ガイエル様、貴方は思いついておられます。御自身が討ち死になされたら、王国正規軍が総崩れになるなど……」

言葉と共に、ティアンナは動きを止めた。白く輝く魔石の剣を、ぴたりと静止させる。

槍を、剣を、大斧を振り上げていたダルーハ兵3人の身体が、硬直し、揺らぎ、そして倒れた。倒れゆく3つの胴体から、ころ、ころり、と生首が転げ落ちる。

腰を抜かしている兄王子の眼前で、ティアンナは言い放った。

「ヴァスケリア王国軍の総司令官は、こちらのモートン・カルナヴァート殿下であらせられます。この御方が健在であられる限り、王国正規軍の敗北はあり得ません……そうですね？　兄上様」

「あ……あわわわ……」

怯えた悲鳴を漏らすしかない兄を足元に庇い、ティアンナは周囲を睥んだ。

ヴァスケリア王国軍の中枢たる兄妹を討ち取るべく、ダルーハ軍兵士たちが様々な方向から襲いかかって行く。

「王国軍は、王国軍の……私は私の、戦いをするだけです」

ティアンナは自身の方からも踏み込み、白く輝く剣を、まずは正面に向かって叩き付けた。びゅっ、と空気の唸りが起こると同時に、脳漿が飛び散った。ダルーハ兵の顔面が1つ、叩き割られていた。

「逃げるか否かは、私が決めます。そして私は逃げません」

下着同然の鎧をまとう少女の半裸身が、力強く翻った。白い斬撃の弧が一瞬、生じて消える。

幾本かの槍が、叩き切られて飛んだ。ダルーハ兵の生首が、2つ3つと宙を舞う。

「……ですからガリエル様、貴方は貴方の戦いをなさって下さい」

微かに息を弾ませながら、ティアンナはなおも剣を振るう。

王女の戦いぶりに、王国正規軍の兵士たちが明らかに触発されていた。本陣のあちこちで敵精鋭部隊の猛攻を跳ね返し、形勢逆転とまではゆかぬものの、五分五分の状態にまで持ち直しつつある。

ケンタゴーレムに担ぎ固められたままガリエルは、その戦いを見物し、呻いた。

「逃げて……くれないのか……重圧を、かけられてしまったな……」  
ガイエルがこのまま殺されれば、ティアンナも殺される。彼女を守るには、勝つしかないのだ。

「……認識を、改めねばならんか」

ガイエルの背骨をミシミシと圧迫しながら、ケンタゴーレムは言った。

「あの王女は、危険だ。雑魚の群れに過ぎぬ王国正規軍が、ティアンナ王女1人の力で際限なく強くなってしまおう……生かしては、おけんな」

「ドルネオ……貴様っ……」

「若君の次は、あの王女だ。腑抜けのヴァスケリア王族らからぬ勇戦に敬意を表し、一撃で碎き殺す……女子供であろうが、戦う者を俺は差別せぬ」

ガイエルの身体がミシッ……と、さらに弓なりに曲がった。

「それが許せぬならば、守って見せろガイエル・ケスナー……」

「うぐっ……あ……ッ！」

もはや呻く事すらままならぬガイエルの視界の隅で、その時、何かが動いた。

「……良い様であるなあ……ガイエル・ケスナーアア」

ムドラー・マグラ……魔獣人間ヴァンプクラーケンが、立ち上がったところだった。

ガイエルに叩き潰された顔面の肉が蠢き、その中から2つの眼球がギョロリと現れて憎悪の視線を放つ。

破裂した吸血触手もウニウニと肉を盛り上げ伸ばし、ゆっくりとはあるが元の長さを取り戻しつつある。

サイクロヒドラやワイヴァートロールほどではないにせよ、再生能力は持っているようだ。

そんな再生回復の進むヴァンプクラーケンの身体に、しかし1カ所だけ、新たな傷が生じていた。

でっぷりと肥えた、腹部。そこが縦にザックリ裂けながらも血は

流さず、露わになった肉を左右に開いてゆく。

開きゆく裂け目からやがて、赤い、ぼんやりとした光が漏れ始める。

「貴様は、貴様だけは許さぬぞ、間違って生まれただけの怪物……私が、この世から消してくれる。骨の一片も残さずになあああ」

魔石だった。

赤ん坊ほどの大きさの魔石が、ヴァンプクラーケンの腹の中に埋まっているのだ。そして赤い光を放ち、その輝きを徐々に強めてゆく。

「この私の魔力が、魔石で増幅された時……一体何が起こるのか、とくと見せてくれようぞ。ドルネオ！ そやつを放すでないぞ」

「おい、やめろムドラ―殿……」

ドルネオの言葉は、しかし今のムドラ―には届かない。

「死ねガイエル・ケスナー！ 貴様がこの世から消え失せれば、もはや私の作品を超えるものなど存在しなくなるうああああああ！」  
魔石の放つ赤い光が、ヴァンプクラーケンの腹部から激しく迸った。

炎でも雷でもない、赤色の光。

それは強いて言うなら、ティアンナの剣が放つ白い光と性質が似ている。魔力を、純粹に破壊力へと変換したものである。

そんな赤い光の奔流が、ガイエルの身体を呑み込んだ。ケンタゴ―レムもろとも、だ。

真紅に輝いて猛り狂う破壊力の奔流が、ガイエルの身体を、ケンタゴ―レムの両腕からもぎ取って吹っ飛ばす。

翼が折れて飛べないガイエルの身体が、そのまま地面に叩き付けられた。

少し離れた所に、ケンタゴ―レムの巨体が倒れ込んで地響きを起こす。

その地響きに揺すられ、ガイエルは起き上がった。

全身至る所で、痛みが熱を持ってヒリヒリと疼いている。が、身

体は動く。

「ば……馬鹿な……」

ヴァンプクラーケンが、巨体をよろめかせて狼狽している。

「何故、生きておる……何故、消し飛んでおらぬ……」

「この愚か者……貴様の魔力ごときで、この若君を仕留められる！  
わけがなからうがああああああッ！」

倒れただけで無傷のケンタゴーレムが、怒声を響かせながら立ち上がり、重い蹄で踏み込みながら左拳を振るった。

ヴァンプクラーケンの身体が、錐揉み回転をしながら地面に叩き付けられた。

再生したばかりだった顔面の肉が、眼球もろとも潰れて飛び散る。その一部は、ケンタゴーレムの巨大な拳にこびりついている。

「がっ……ど、ドルネオ貴様……」

潰れた顔面を地面にぶちまけたままヴァンプクラーケンが、それでも声を発している。

「恩人たる……創造主たる、この私に……何たる無礼、何たる反逆……」

「おうよ。貴様は俺にとって、この力をくれた恩人だ」

左拳の汚れをビチャツと払い落としながら、ケンタゴーレムが言い放つ。

「だから殺さずにおいてやる。去ね！」

「お……おのれええ……」

呻くムドラーをそれきり無視してドルネオは、4本脚の巨体を素早くガイエルの方に向き直らせた。そして言う。

「……若君こそ、今のうちに逃げておけば良かったものを」

「逃げんよ、俺も」

応えつつガイエルは、左手で軽く右腕を押さえた。

甲殻のひび割れた右前腕の出血が、先程よりもひどくなっている。

「……ドルネオ卿、あんたは確かに強い。化け物じみている……だが俺はな、あんた以上の化け物と戦わなければならん。こんな所で、



逃げてはいられないのだよ」

大量の血が地面に流れ落ち、ジュージューと土を溶かし続ける。声がした。

「それが、貴方の血……」

涼やかな、若い女の声。そよ風のように、ガイエルの耳元をくすぐる。

ティアンナ、ではない。彼女は少し離れた所で兄王子を庇いながら、勇ましい気合いの声を発して剣を振るい、ダルーハ軍兵士を叩き斬っている。

ティアンナではない若い娘が、姿を現さぬまま、なおも囁く。

「あらゆるものを灼き尽くす、悪竜の血……それが貴方の力。どうか忘れないで……」

周囲で激戦を繰り広げる、王国正規軍とダルーハ軍。両軍兵士らの間をすり抜けるように、何か黒っぽい人影のようなものが踊っている。

ようにガイエルは感じたが、見回して確かめている場合ではなかった。魔獣人間の強固極まる巨体が、眼前でまだ健在なのだ。

「あくまでも、父君と戦われるおつもりであるか」

ケンタゴーレムが、攻撃ではなく無駄な問答を仕掛けてきた。

「……何故だ、若君。そこまでして何故、御大将に刃向かおうとする？ ヴァスケリアの救い難き愚民どもを救い、守るためか。その類い稀なる力を、己のためではなく他者のために振るおうなどと何故、思えるのだ」

「気遣いは要らん。俺はこの力を、自分のためにだけ振るっている」様々なおぞましい光景が、ガイエルの脳裏に甦っていた。

町や村を襲い、人々を蹂躪するダルーハ軍兵士たち。

醜惡な魔獣人間に捕われ、下劣な行いの餌食となりかけているティアンナ王女。

黒焦げの子供を抱いて泣き崩れる母親。

それら不愉快極まる光景を造り出した元凶たる、1人の男……ダ

ルーハ・ケスナー。

竜の爪に左半分を削られた、隻眼の異相。その下に隠された、人間ではないものの素顔。

思い浮かべた瞬間、ガイエルの胸の内で怒りが、憎しみが、殺意が、燃え上がった。

（ダル―ハ……………ッッ！）

だがもう1つ、ガイエルの胸中に甦ってくるものがある。病床にあった、母の言葉。

あの人を止めてちょうだい……………ガイエル、お前に頼むしかないのよ。ごめんね……………

（おふくろ様……………俺が！ 言われた通りに止めていれば……………親父殿が、こんな馬鹿をやり始める前に……………！）

自分は、あの父を止められなかった。

だから今、こうして様々な、不愉快な光景を見せつけられている。

「……………俺はなドルネオ卿。あんたが御大将などと呼んでいる男を、殺したくて仕方がないのだよ。奴は俺を、実に不愉快な気分になせてくれたからな」

胸の内で燃え盛っているものが、ガイエルの全身を激しく駆け回る。

そして、右腕に集まって行く。

「俺は……………俺を不愉快にさせるもの全てを滅ぼすために、この力を振るっている……………」

右前腕からの出血が、激しさを増した。

溶岩のような血液がドビュウッ！ と噴出し、そして、

「全て、俺自身のためだ……………他者のため、でなど……………あるものか……………ッッ！」

発火した。

ガイエルの右前腕から、外骨格をさらにバキバキと砕き破りながら、炎が噴出する。

噴火のようなその炎を、振り回す感じに、ガイエルは右腕を後方

に引いて身を低くした。

体内の血が、右前腕から噴出しつつ発火し、その炎が轟音を立てて燃え延びる。打ち碎かれた刃のヒレ、の代わりのようにだ。

「……くだらん話は終わりだドルネオ・ゲヴィン。不愉快な相手だから殺す、滅ぼす！ 何故なら俺は残虐だからだ！ 文句があるかッ！」

「……お見事でございます、若君」

ケンタゴーレムが、言葉と共に駆け出した。巨体がガイエルに迫り、岩塊のような拳が振り上がる。

「その傲岸不遜にして残虐なる生き様……お見事なれど、ここで終わらせてくれる！」

「やってみろ！ 結局はダルーハに逆らえぬ飼い犬風情が！」

ガイエルも踏み込んだ。踏み込みつつ全身を捻り、右腕を振るう。炎のヒレがゴォオオッ！ と巨大に燃え広がりがながら、一閃した。一方。ケンタゴーレムの拳は、ガイエルの頭部をかすめて空振りをしていた。

右拳を振り切ったケンタゴーレム、と擦れ違ったところで、ガイエルは動きを止めた。前腕でヒレの形に燃え盛っていた炎は、完全に消えている。

ドルネオが、呻いた。

「……………見事……………」

ケンタゴーレムの巨体は、上下真つ二つになっていた。巨馬の下半身から、甲冑のような人型の上半身が、ゆっくりと滑り落ちる。

露わになった2つの断面が、ぼおっと赤く輝いていた。

刃のヒレを成していた炎が、ケンタゴーレムの体内に、残らず流れ込んだのだ。そして上半身を、下半身を、内部から灼いている。

地面に落下する前に、ケンタゴーレムの上半身はひび割れ、砕け、粉末状に崩れて灰と化した。一瞬遅れて、下半身も。

つい今まで巨大な魔獣人間であった大量の灰が、ザァーッと地面にぶちまけられる。

「そう……それが、貴方の血。貴方の力……」

姿なき若い娘が、またしても言った。いや、どこかに姿はあるの  
だろうが、今のガイエルの目では捉えられない。

「それさえ、お忘れにならなければ……負けるはずがないのですわ。  
貴方が、魔獣人間ごときに……」

「……誰だ、貴様……」

問いかけながら、ガイエルは倒れていた。

身体が、うつ伏せに地面にぶつかる。土や砂利の感触が、痛い。

頑強な甲殻も鱗も全て、人間の皮膚に戻ってしまっていた。

## 第10話 黒衣の魔少女

どれほどの血を、燃やして失ってしまったのかはわからない。

血だけではなく、生命力そのものを、半分近くは消費してしまったような感じである。

「う……う……っ」

まるで力尽きたように人間の裸身に戻ってしまった身体を、ガイエルは弱々しく起き上がらせた。

起き上がれなかった。力が、入らない。

あの時と同じである。

父に敗れ、叩きのめされて川に落ちた、あの時も。身体から全ての力が失われて魔人の姿を保てなくなり、気を失いながら人間の姿に戻ってしまったのだ。

魔人への変化が再び可能になるまで、どれほどの時が必要なのか。己の肉体でありながら、ガイエルはまだ今ひとつ把握していない。変化どころか、今は動く事もままならなかった。

（血を、燃やす……炎の刃……）

うつ伏せに倒れたままガイエルは、己の右腕を睨んだ。

血まみれの、右前腕。力が全く入らず、指一本動かす事は出来ない。

が、手応えは感じられる。まだ残っている。炎の刃で魔獣人間を両断した、会心とも言える手応え。

（これを、もっと効果的に使いこなせば……使いこなさなければ、勝てん……あの男には……っ）

ガイエルの上体だけが、腕立て伏せのような形で、ようやく地面から浮き上がった。だがそこへ、

「どっ、ドルネオ隊長が……てめえええ……」

「よくも、よくも隊長を！」

ダルーハ軍兵士が2人、槍を構えて襲いかかって来た。

その2本の槍が、ガイエルに突き込まれる寸前。一筋の、白い光が走った。斬撃の閃きだ。

ダルーハ兵の首が2つとも、ころころと滑り落ちた。頭部を失った2体の屍が、崩れるように倒れてゆく。

彼らの背後に、ティアンナが立っていた。

「ガイエル様！」

駆け寄って来る彼女に、ガイエルは弱々しく微笑みかけた。まったく無様な戦いを、姫君に見せてしまったものである……

ティアンナの身体が突然、宙に浮いた。跳躍したわけではない。すらりと形良い両脚が束ねられ、左右の細腕も後ろ手に縛り固められている。吸盤のある、幾本もの触手によって。

「きやあ……っ」

可憐な美貌を引きつらせながら、ティアンナは微かな悲鳴を漏らした。

その小柄な細身が、何本もの吸血触手によつて絡め取られ、高々と掲げられる。

戦利品を見せびらかすかの如く少女を捕えたまま、魔獣人間ヴァンプクラーケンが声を震わせた。

「もらったぞ、最高の素材……ついに、我が手中に……！」

歡喜・狂喜の、震えだった。

「貴様……！」

力尽きた身体を、ガイエルは無理矢理に立ち上がらせた。力が入らない血が足りない、などと言っている場合ではなくなった。

「動くなガイエル・ケスナアアー！」

潰れた顔をグチャグチャと蠢かせながら、ヴァンプクラーケン  
が喚く。

「無論この姫君を殺したりはせぬ、が手足をへし折つたとしても素材としての価値はそう変わらぬ！ それとも死なぬ程度に血を吸ってくれようか？ 穢れなく健やかなる乙女の生き血、おおお蕩けるように美味であらうなああフェヘヘヘヘヘヘヘヘヘ」

おぞましい笑いに合わせて蠢く顔面の肉、の中から、新しい眼球がギョロリと再生し現れた。そしてガラガラと血走る。

「貴様の父親の如く、目を抉っても良からうなあ。そしてこの美しい顔に、私の濁りきった眼球を移植してやるのも良い……さあ、どのような魔獣人間にしてくれようかのおお」

「ムドラー……おのれは……ッッ！」

全裸の身体を立ち上がらせたまま、ガイエルは1歩も動けなくなった。この魔獣人間が少しでも触手に力を入れれば、少女の手足などたやすく折れてしまう。

危険な吸血触手に四肢を捕えられたまま、ティアンナが叫んだ。

「ガイエル様、戦って！ この場合は私よりも御自身を、それに王国軍の兵士たちを守るために！ お願い！」

叫びながら、暴れる。

しなやかな半裸の胴体が、可愛らしく引き締まった両の太股が、絡み付く吸血触手に抗って元気に悶え、躍動する。

そんな少女の抵抗を愉しみながら、

「こっこの活力よ！ この美しさ愛らしさよ！ これまでの出来損ないどもに欠けていたのわあああああああ！」

ヴァンプクラーケンが、肉体の一部をバサッ！ と隆起させて左右に広げた。コウモリのような、皮膜の翼だった。

それが大きく羽ばたいて空気を打ち、魔獣人間の巨体を空中へと舞い上げる。捕われのティアンナもろとも、である。

「待っておれガイエル・ケスナー！ もう間もなくよ、私の作り上げる最強最美の魔獣人間が貴様を倒す！」

少女を捕えたまま上空へと遠ざかりつつ、ヴァンプクラーケンが叫んでいる。

「間違って生まれた怪物に過ぎぬ貴様を、このムドラーが大いに手をかけたる、究極至高の生ける芸術品がなああああああ！」

「がっガイエル様、私の事などお氣にかけずに！」  
ティアンナも叫んだ。

「自分の身は自分で守ってみせます、それが私の戦いです！ ガイエル様は、ガイエル様の戦いをなさってンムツ……ぐ……っ」

気丈な叫びが、痛々しく潰れた。

吸血触手が1本、ティアンナの可憐な唇を無理矢理に押し開き、小さな口の中へと這入り込んでいる。

ガイエルの声帯が、ちぎれそうなほどに躍動した。

「ムドラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「おっおう、噛み付いておる噛み付いておるう」

悦びながらヴァンプクラークンが、なおも羽ばたき、飛行速度を上げてゆく。

「この気丈さよ、活力よ！ 姫君そなたは佳き魔獣人間となれるぞオオッ！」

暴れ悶えるティアンナの口を触手で塞いだまま、ヴァンプクラークンは不気味なほどの高速で飛行し続けた。

王女を捕えたその異形の姿が、空の彼方、恐らくはヴァスケリア王都エンドウールの方向へと向かって、小さくなってゆく。

「む……どら……あああ……！」

声を潰しながら、ガイエルは駆け出していた。

走ってでも追いついて、ムドラ・マグラを潰し殺す。ティアンナの身体に巻き付いている汚らしい触手を1本1本、引きちぎる。

それしか、頭の中にはなかった。

だが駆け出した瞬間、

「おおっと、逃がさねえぞてめえ……」

「ドルネオ卿の仇……テメエだきゃあ生かしちゃおけねええ」

ダルーハ軍兵士が2人、槍と戦鎚を構えて前方に立ち塞がる。

ガイエルは跳躍し、

「どけよ、虫ケラども……」

空中で、身を翻した。力強い裸身がギュルッ！ と竜巻の如く捻れ、長い左脚が超高速でしなって弧を描く。鞭のような、回し蹴り。ダルーハ兵2人が、吹っ飛んで動かなくなった。2人とも、首が



おかしな方向に曲がっている。あり得ない方向を向いた顔面から、眼球が飛び出している。

着地したガイエルは、しかしすでに取り囲まれていた。

陣中の至る所で王国正規軍兵士と戦っていたダルーハ兵全員が、今やガイエル1人に狙いを定めている。

「どけよ……頼む、どいてくれ……」

ガイエルは呻いた。

「俺を、行かせてくれ……そうすれば、お前たちを殺さずに済む」

「寝言こいてんじゃねえぞバケモノ野郎」

ドルネオ配下の兵士たちが、口々に言う。

「てめえは俺たちの目の前で、隊長を……殺し、やがった……ッ！」

「それがどういう事なのか、わからしてやらねーとなあぁ」

「元より生き残ろうなどと思っではおらん……我らの命は、ドルネオ卿と共にある」

「……死ね！ 隊長の仇！」

様々な得物を振り立てて、兵士たちが全方向から一斉に襲いかかって来る。

そんな襲撃の輪の中で、ガイエルは空を睨んだ。

ティアンナを捕らえた魔獣人間の姿は、もはやどこにも見えない。

「貴様ら……」

ガイエルは呻いた。呻きが、絶叫に変わっていった。

「……綺麗な……死体には、ならんぞ……きつ………ッッさ  
まらアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

殺し尽くす。そのためだけに今、ガイエルの身体は動いていた。

自分は今、八つ当たり等に等しい事を行おうとしている。

それをガイエルは、頭では理解していた。

どれほどの時間、暴れていたのか。ティアンナが連れ去られてから、どれほどの時間が経ったのか。

わからぬままガイエルは、とりあえず目を開いた。自分が今まで意識を失っていた事に、ぼんやりと気付きながら。

夜だった。すぐ近くで、焚き火が燃えている。

その周囲は、死体だらけだった。

ドルネオの仇討ちに命を燃やしていた兵士たちの、屍。

どれも首が折れたり顔面が陥没していたりと惨たらしい様ではあるが、人間の原形は充分にとどめている。

破壊力が弱い。やはりドルネオとの戦いで力を消耗し過ぎたのだ、とガイエルは思った。

「……駄目だ……あんな戦い方では……」

倒れたまま、ガイエルは呟き、呻いた。

「奴に、勝てない……それに貴女を救う事も……ティアンナ……」  
「おい」

声がした。横柄な、それでいて優しさのようなものを感じさせなくもない、男の声。

「ここだガイエル・ケスナー……まったく、貴様ときた日には」  
焚き火の向こう側に1つ、小太りの人影が座り込んでいる。

「ティアンナ以外の王族など、どうでも良いのだな。まあ仕方あるまいか」

「モートン王子……生きて、おられたのか」

ガイエルは上体を起こし、そしてようやく、己の身体の有り様に気付いた。

裸身のあちこちに、包帯が巻かれている。

巻かれた包帯の下が、ひりひりと微かに痛む。ドルネオ配下の兵士たちに、何力所か浅手を負わされたようである。

特に嚴重に包帯でぐるぐる巻きにされた右腕を、ガイエルは軽く掲げてみた。腕は動く。だが手首から先、五指の動きが、いくらか鈍い。

そして、やはり血が足りていない。どうしようもない気怠さのようなもの、全身にまとわりついている。

動きが鈍っているのが、身体を動かさなくともわかる。

今、この場を魔獣人間に襲撃されたら、かなり苦しい戦いを強いられそうだ。

ガイエルは、とりあえず訊いてみた。

「……王国正規軍は、壊滅か？」

「解散だ。生き残った諸侯が各々、兵を率いて領地に帰ってしまった。ティアンナの身柄が敵の手に落ちた途端、そんな様だ」

モートンが嘲笑った。諸侯をか、あるいは己自身をか。

「諸侯などという輩は所詮そんなもの。旗頭として担ぎ上げる存在がいなければ、戦う事も出来ん。そしてこの第2王子には、担ぎ上げる価値すらないというわけだ……もつとも、あのような役立たずな軍など、私の方から願ひ下げだがな」

「まさかとは思うが……俺を手当てしてくれたのは、あんたか？」

「包帯を巻くのを少し手伝っただけだ。貴様を手当てしたのは、ほれ、そこにおる」

モートン王子に言われて、ガイエルはようやく気付いた。

少し離れた所で、うず高く積まれたダルーハ兵たちの屍。その上に腰掛けている、ほっそりとした小柄な姿。

「本当に、駄目駄目な戦い方でしたわねえ。ローラは呆れてしまいました」

先程の戦いの最中に囁きかけてきた、あの声だった。

「ですが、誰もが1度は無様な戦いを経験し、強くなってゆくもの。あまりお気になさらないで……ね？」

「貴様……」

寒気に近いものを、ガイエルは感じた。

自分に全く気配を感じさせずに、この少女は一体いつから、そこにいたのか。

ティアンナとほぼ同年齢と思われる少女である。

あの姫君よりはいくらか凹凸の豊かな身体を、ヒラヒラとした黒く短いドレスに包んでいる。

長い髪もまた黒く、夜闇の中にあって、得体の知れぬ幻想的な光沢を有している。

対照的に、顔は白い。白いが決して病的ではなく、瑞々しい生命力を感じさせる、白い肌。

美貌そのものはティアンナよりも上ではないか、とガイエルは思った。

屍の椅子の上で、すらりと形良い両足を組み替えながら。その黒衣の少女は、訊かれる前に名乗った。

「ブラックローラ・プリズナと申します。お見知りおきを……長いお付き合いとなる予定ですので」

「……どうかな、それは」

ガイエルは立ち上がった。よろり、と貧血の眩みが来たが、耐えた。

「手当てをしてくれた事は感謝する。いずれ借りは返そう……俺が生きていられたら、な」

「……死に行くおつもりですか？」

耳元で、声がした。

少し離れた所で死体の山に腰掛けていたブラックローラが、いつの間にか、まわりつくようにしてガイエルの傍らにいる。

「頭では、わかっておられるのでしょうか？ そんなお身体でダルー

ハ・ケスナーに勝てるわけではない、と」

「どけ……」

押しのけようとするガイエルの手を、黒衣の少女はフワリとかわした。

「ただティアンナ王女様をお助けに行かれるだけ、ダルーハと戦うわけではない……とでも？」

ブラックローラの涼やかな声が、耳元から這入り込んでガイエルのあらゆるものを逆撫でする。

「貴方が王宮へと殴り込んで、ダルーハと戦わずに……ダルーハに見つからずに、済むとでも？」

「どけ、と言っている……………ッッ！」

怒鳴りつけようとしたガイエルの声が、詰まった。一瞬、呼吸が止まった。

呼吸が止まるほど奇妙な感触が突然、首筋から喉の辺りをヒンヤリと走り抜けたのだ。

ブラックローラの繊細な指が、ガイエルの首を優しく撫でていた。詰まっていた呼吸が回復した、その時には。ガイエルは再び、地面に倒れ伏していた。

(なっ……………に……………ッ?)

起き上がれない。先程までの貧血による脱力感とは、似ているように異なる。

血ではなく、生命力そのものを、ブラックローラによって首筋から抜き取られてしまった。そんな感じだ。

「お、おい……………」

モートン王子が、氣遣わしげな声を出している。

ガイエルの首筋を撫でた己の指に、ブラックローラが唇を触れ、何やら切なげに吐息を弾ませた。

「あ……………ンッ……………何て濃厚な、熱い生命力……………ローラこんなの初めて……………」

「……………貴様……………」

倒れたままガイエルは、辛うじて声を発した。

「俺に……………一体、何をした……………」?

「貴方の熱い生命力を……………あんっ、本当は全部欲しい……………の我慢して、ほんの少しだけ、いただきましたのよ。あぁ大丈夫、一晩ぐっすりお休みになれば回復いたしますわ」

ブラックローラが、にっこりと笑う。

愛らしい笑顔……………だが人間の少女の笑顔ではない、とガイエルは感じた。いや、そんな事よりも。

「一晩……………だと……………」

一晩も眠っていたら、その間にティアンナがどういう目に遭うか

わからないのだ。

それを叫ぶ事も、しかしガイエルは今、出来なくなっていた。身体が、意思に反して、眠りに落ちつつある。

「今の貴方ではダルーハどころか、ローラにも勝てない。という事ですわ」

少女の声が、まるで子守唄のように、耳から脳裏へと優しく染み込んで来る。

「どうかお忘れにならないで。今この世でダルーハ・ケスナーを倒せるのは、貴方だけ。無駄死にをさせるわけには、まいりませんのよ？ 今は休んで、どうか力を回復させて……憎いダルーハを、倒すために」

「……何者だ……貴様、一体……」

声を出すのも、ガイエルは億劫になりつつある。

目蓋の重さに抗する力もなく、今や何も見えないが、ブラックローラが微笑んでいるのはわかる。

「ダルーハ・ケスナーを誰よりも憎む者、とだけ申し上げておきますわね。ローラはあの男が、本当に大っ嫌い……だけどローラが弱いから、貴方のような強い殿方におすがりするしかありませんの」  
か弱いはずの少女に、しかし強い殿方であるはずのガイエルが、こうして倒され這いずっているのだ。

この可憐なる外見の下に、とてつもない正体を隠し持った少女。であるのは間違いない。

「貴様……魔獣人間か……？」

「ひどいわ……」

ブラックローラは、泣き出したようだ。

「あんな出来損ないのバケモノたちと一緒にされてしまうなんて、ローラはとってもかわいそう……くすん」

嘘泣きかどうかを判断する思考力も、失せつつある。

今ガイエルが知覚出来るのは、ブラックローラの子守唄のような声だけだ。

「かわいいそうなローラのために……ダルーハを倒すために……今はゆっくり、お休みなさい？」

（ダルーハ……）

憎悪を燃やして覚醒すべく、ガイエルは必死に、父の姿を思い浮かべようとした。だが。

「お休みの間にティアンナ姫が殺されたら……仇を討って差し上げれば、良いではありませんか」

眠りに落ち行く脳裏に浮かんだのは、ダルーハではなく、1人の少女の笑顔だった。どこか翳りのある、寂しげな笑顔。

「もちろん生きておいでなら助けてあげる。生きて……魔獣人間にされてしまったら、貴方の手で楽にして差し上げれば良いのですわ。ダルーハと戦うというのは、そういう事。何もかもを守りながら勝てる相手ではないと、貴方こそが誰よりもご存じのはず……」

（ティア……ン……ナ……）

ゆっくりと、ガイエルは意識を失っていった。

## 第11話 王族たち

ティアンナのみならず大勢の少女たちにとって、英雄ダルーハ・ケスナーは憧れの的であった。

その憧れの英雄が今、凶悪極まる逆賊・暴君として、目の前にいる。

「この王宮は、かつてはヴァスケリア王族の住まいであった。が、今は我が居城である」

跪きもせず挑戦的に突っ立ったままのティアンナ、を咎めるふうもなく、ダルーハが言う。

甲冑姿でどっしりと玉座に座るその姿には、まるで今までもずっと国王であったかの如き風格があった。

「ゆえに貴女を、客人として迎えよう……ティアンナ・エルベツト王女。よくぞ来られた」

「王宮など、いくらでも差し上げます。貴方がその玉座にふさわしい政を、なさっているのであれば」

ティアンナはまっすぐに、視線と言葉を返した。

猛々しい隻眼の容貌をニヤリと興味深げに歪めてダルーハは、睨む王女の眼差しを受け止めている。

だが続いて発せられた言葉は、ティアンナに対してのものではなかった。

「ムドラーよ、さぞかし苛立っておろうな。本当は今すぐにでも、この姫君の身体を弄り回したくてたまらんのだろうが」

「は……いい、いえ……」

ティアンナのすぐ近くで、魔獣人間ヴァンプクラーケンが、引きつった声を出した。

その顔面の肉は、潰れかけたまま瘡蓋のように固まってしまっている。

拉致した王女を伴って、王宮に到着した途端。ムドラーはティアン



ンナ共々、ダルーハに呼び出されたのである。

「まあしばし待て、興味が湧いたのだ。王族の男どもがクズばかりである中、たった1人の王女だけが小賢しくも健気に戦っている……一目、会ってみたいと思うではないか」

「ダルーハ卿。ヴァスケリア王家による悪しき体制は、貴方によって破壊されました」

これは謁見と言うべきであろう。今やダルーハ・ケスナーが国王であり、ティアンナの方が目通りを許される立場なのだから。

謁見が許されている間に、言うべき事は言っておかなければならない。

「卿には、新たな体制を築く義務があります。民のための、善き政治体制を」

「民のため、か」

ダルーハは嘲笑った。

「……曲がりなりにも地方領主という地位にまで上り詰めた結果、俺は1つ思い知ってしまったのだよ姫君。民衆という輩は、甘やかせば際限なくつけあがり腐ってゆく。とな」

「……だから、民衆を虐げていると?」

「はっははは、こんなものは虐げているうちに入らんよ」

笑いながらもダルーハは、1つしかない目をギリリと獐猛に光らせた。

「あの赤き竜がしでかした大殺戮と比べれば……俺が今やっている事など、暴君の真似事に過ぎん。王女よ、そなたは知るまいが20年前のここヴァスケリア王国は本当に地獄であった。王国とは名ばかりで国王には何の力もなく、赤き竜とその配下の魔物どもに、人々はただ蹂躪されるがままであったのだ」

「ダルーハ卿が、その地獄から王国の民をお救いになったのでしょう?」

「その通り。俺が少数の仲間と共に、あの赤き竜と戦う羽目になった。何故かわかるか、ティアンナ王女」

「……貴方が、1番の武勇の士であられたから……？」

少数の仲間がいた、というのは、ティアンナは初耳だった。

「違う、他に誰もやろうとしなかったからだ。どいつもこいつも魔物どもの悪行を見て見ぬふり、だけではない。竜の怒りを恐れて、俺たちの邪魔をする者どもまでいた」

ダルーハの隻眼が、燃え上がった。憎悪の炎だった。

「本当に……腑抜けばかりであった。あの頃のヴァスケリアは、王侯貴族も民衆も。まあ今も大して変わるまいが、な……想像してみろティアンナ姫。あの時のレフィーネは、今の貴女と同じ年頃の娘であった。それが生け贄として、まるで物のように……あの赤き竜に、捧げられたのだぞ。うら若き王女を人身御供として、ヴァスケリアの腑抜けどもは己が身の安全を確保せんとしたのだぞ」

「レフィーネ・リアンフェネット王女……私の、叔母に当たる方です」

「違うな。レフィーネ・ケスナーは我が妻であって、王家の娘などでは断じてない」

ダルーハの声が、重く、低くなった。

地獄の底から響く声。そんな陳腐ですらない表現しか、ティアンナには思い浮かばない。

近くでヴァンプクラーケンが、巨体をすくませ、震え上がっている。

「ヴァスケリア王家の者どもは、レフィーネを捨てたのだからな。

まるで餌を与えるかの如く、あの赤き竜に……」

ダルーハの精悍な口髭が、唇もろともめくれ上がった。真っ白な牙が剥き出しになり、ギリツ……と噛み合う。

「そのせいで、レフィーネは……竜の子などを……ッ！」

「何ですって……」

ティアンナは息を呑んだ。

「では……まさか、ガイエル様は……」

「……奴の事など、どうでも良い」

「とにかくだ。民衆など支配者にとっては、弱い者いじめの対象に  
 かならんのだよ。民のための政治などと最初のうちは気にかけて  
 いても、いずれは必ずそうなる」

言いつつティアンナは、魔石の剣を抜き放った。

「忠告など必要ありませんダルーハ卿……私は今から、貴方に殺されるのですから」

ヴァンプクラークンが、触手を震わせて怒り狂う。

それだけで、怒り狂う魔獣人間がピタリと硬直した。

「全力で抗いなさい。ドルーハ・ケスナー。さもなくば、私が貴方の

構えられた刃の根元で、魔石が白く激しく発光する。

「卿が全力で抗えば、私など一瞬にして跡形もなくなるでしょう。」

「……本当に命が要らぬようだな、この姫君は」

見つめ返し、ティアンナはなおも言う。

[illegible]

殺意の炎を隻眼の中で燃やしたまま、ダルーハは笑った。

これほど凶暴で禍々しく、そして哀しい笑顔を、ティアンナは見  
た事がなかった。

「言わねばわからぬか小娘！ 死んだ者はなあ、悲しみなどしない  
！ 喜びもせぬ！ 何も、何もしてはくれんのだよ死んだ者は！」

「ダルーハ卿……」

このダルーハ・ケスナーという男の心が、ほんの少しだけ、ティ  
アンナはわかったような気がした。

民衆を、憎んでいる。

かつて命を賭けて悪しき竜と戦い、救った、このヴァスケリアと  
いう国を。ダルーハは、憎んでいる。

憎しみと暴力に満ち溢れたダルーハ・ケスナーという男が、しか  
し竜退治の後20年近くは特に暴虐的な事はせず、貧しいレドン地  
方の田舎領主という身分に甘んじていたのだ。

レフィーネという妻が、いたからだ。

彼女が生きている限りダルーハは、溢れんばかりの憎悪を眠らせ  
ておく事が出来た。田舎領主で穏やかに一生を終える運命を、ダル  
ーハは受け入れただろう。レフィーネ・ケスナーが生きて傍にいて  
くれるならば、だ。

その妻が、死んでしまった。

溢れんばかりの憎悪を、眠らせておかねばならない理由を、ダル  
ーハは失ってしまったのだ。

「……奥方のもとへ送って差し上げます、ダルーハ卿」

ティアンナは床を蹴り、斬り掛かった。

半ば跳躍に近い踏み込み、と同時に、魔石の剣を振り下ろす。バ  
リバリと電光を帯びた刃が、ダルーハのたくましい首筋に向かって  
一閃し……

そして、止まった。ダルーハの左手。人差し指と中指が、放電す  
る刃の切っ先をピタッと挟んでいる。

そのまま軽く、ダルーハは左手首を捻った。

それだけで、斬撃に用いた全ての力と勢いが、ティアンナの身体へと逆流した。

「あ……っ」

自分の身体がグルリと回転し、床に投げ出されるのを、ティアンナは呆然と感じた。頭を打たぬよう受け身を取るのが、精一杯だった。

「真っ正面から、俺に斬り掛かるとはな」

ダルーハの声が聞こえた時、ティアンナは、玉座の近くで無様に転倒している己の姿に気付いた。

「あの頃のヴァスケリア王族に、貴女の10分の1でも気概があれば……」

「……甦るのですか、ダルーハ卿」

ティアンナは立ち上がりながらも、呻くしかなかった。

「全力で抗え、と言ったはずです……さあ、私を殺しなさい」

「ムドラーよ、先送りになっていた傀儡の件だな」

とりあえずティアンナの言葉は黙殺してダルーハは、すくみ上がっている魔獣人間に隻眼を向けた。

「この姫君で良からう。ティアンナ・エルベツト第6王女に、即位していただく。くれぐれも……女王陛下を魔獣人間に作り変える、などという無礼を働いてはならんぞ」

「何を……！ 仰せられますか……！」

ヴァンプクラーケンが、悲鳴じみた声を発する。瘡蓋状の顔面がピキッとひび割れ、微かな血がしぶいた。

「ダルーハ様、それは……それは、あまりにも……」

「ムドラーよ、俺は同じ事を何度も言わされるのが大嫌いだな」  
「だが貴様には功績があるゆえ、もう1度だけは言ってお聞かせてやろう。こちらのティアンナ姫を……否、ティアンナ・エルベツト女王陛下を、魔獣人間になどしてはならぬ。俺はな、非力な人間が無様にあがく様を見たいのだ。魔獣人間があがいたところで、面白く

も何ともないではないか」

「しっ、しかしダルーハ様」

「……ムドラーよ、3度は言わぬぞ」

ダルーハのその言葉だけで、ヴァンプクラーケンはもはや何も言わなくなった。6本の吸血触手を震わせながら、巨体を平伏させて黙り込む。

ティアンナも震えていた。屈辱の震えだ。

「傀儡政權として……この私を、擁立しようと言うのですか……っつ！」

「嫌とは言うまい？ 傀儡政治とは言え政治が出来るのだ。貴女の立ち回り方次第では、俺を上手く押さえ込む事が出来るかも知れぬ」  
ダルーハは、本当に愉しそうである。

「……俺の暴虐から王国の民を、いくらかでも救えるかも知れんぞ？」

「ダルーハ卿……やはり私を、黽っておられるのですね……」

「その通り。俺は弱い者いじめが大好きでなあ」

本当に愉しそうに、ダルーハは嘲笑った。

「弱者が懸命に、無様に、健気に、蠅螂の斧を振り立てる。その様を見るのが愉しくてたまらんだ。まさに強者にのみ許された悦楽よ」

「ダルーハ・ケスナー……ッ！」

ティアンナは唇を噛んだ。

自分は今この男に、飼い犬のように扱われている。その屈辱を、噛み潰した。

とりあえず、殺されなかった。ムドラー・マグラのおぞましい研究の餌食にも、ならずに済んでいる。

今は、この幸運を活かすべき時だった。

ガイエルに向かって偉そうに言い放った通り。己の戦いを、する時なのだ。

この父親が死んでも自分は全く悲しまないだろうな、と常日頃モートン・カルナヴァートは思っていたが、本当にその通りになった。ヴァスケリア国王ディン・ザナード3世の死が、公式に布告されたのだ。

モートンにとっては、月に2、3度会話があったかどうかの父の死である。どうでも良かった。

第1王子のマナック・バルナードは王都エンドウル陥落時に殺されているから、次期国王は、順当にゆけばモートン・カルナヴァート第2王子である。

が、今が順当とは程遠い状況である事はモートン自身、嫌になるほど身に染みている。仮に国王になれたとしても、喜ぶ気持ちなど欠片ほども湧いては来ないだろう。

今、この国の真の支配者が、誰であるのか。それはヴァスケリア国民であれば、子供でも知っている事だ。

こういう時の王族というものが、いかに惨めな存在であるかも、モートンは身に染みていた。

そんな時に間髪入れず、もう1つの布告が発せられた。

その内容はモートンにとって、父親の死などよりもずっと衝撃的なものだった。

「あのティアンナめが……女王として即位した、だと」

とある町の、酒場である。2階が宿屋となっており、今日はここで宿を取ろうと思っていたところだ。

ダルーハ軍による被害が、奇跡的に少なかった町である。酒場も普通に営業しており、夕飯時の今は客で賑わっている。

いや。賑やかなのは、中央のテーブルを占領しているダルーハ軍兵士の一団だけだ。

5人いる。うち4人は鎧姿の歩兵。1人はローブを着て魔石の杖を携えた、攻撃魔法兵士だ。

どちらもゴロツキ同然の輩である事は疑いようもなく、やかまし

く騒ぎながら派手に飲み食いをしている。

5人とも金は払わないのだろうか、とモートンは思った。

店内には、普通の町民と思われる客も、いる事はある。だが皆、中央のダルーハ兵5名からは出来るだけ離れた隅の方の席で、居心地悪そうに安酒をすすり、あるいは手早く食事を進めている。

そんな町民たちに紛れ込むようにして、旅人が2人。店の壁際の席で、目立たぬようにしていた。

2人とも、薄汚れたフード付きのマントで、顔も身体もすっぽりと覆い隠している。片方は小太りで、もう片方は背が高く体格が良い。

モートン・カルナヴァート王子と、そしてガイエル・ケスナーである。

「ダルーハめ、一体何を考えておるのか……」

「傀儡政權、という奴だろう」

ガイエルが嘲笑った。

「……くだらん事をするものだ、実に」

貴様は少し、安心していいのではないのか。そう、モートンは口に出してしまいたいようになっていた。

ダルーハが傀儡として擁立する、のだとしたら、ティアンナ・エルベツトは少なくとも殺されてはいないという事だ。

あの妹とガイエルが、どこまで親密な関係にあるのか、モートンにはよくわからない。

仮にこの2人が男女として結ばれる、などという事態が起こったら。逆賊ダルーハの血を引く、この人間ならざる若者が、自分の義弟という事になってしまう。

そこまで考えて、モートンはある事に思い至った。

「……今気付いたのだがガイエル・ケスナー。レフィーネ王女の息子である貴様もまた、ヴァスケリア王家の血縁者という事に一応なる」

「兄上、とても呼んでやろうか」



「それは御免こうむるが……お前、下手をすれば王位を狙える位置にいるのではないか？ 腐るほどいた王族は、何しろダルーハがあらかた殺し尽くしてくれたのだからな。私とティアンナ以外にも、1人か2人は生き残っておるかも知れんが」

「……あんたはどうなのだ、モートン王子」

半ばフードで隠されたガイエル的美貌が、モートンに向かって少しだけ眼光を強めた。

「妹君がダルーハに擁立されてしまったわけだが……正当性というものを考えれば、第2王子の方が王位に近いのではないのか？ 何なら俺があんたを擁立してやろうか。ティアンナ姫も、傀儡の王位など要らんだろうからな」

「……擁立されたところで何も出来はせん。私の名前では、諸侯も兵も集まりはせんよ。すでに実証済みであろうが」

モートン・カルナヴァート第2王子を総大将とする王国正規軍は、ダルーハ軍によって完膚なきまでに打ち砕かれ敗退した。結果として、そういう形になった。

事実、王都エンドウルの奪還も果たせぬまま王国正規軍は解散してしまっただから、勝ち負けで言えば、明らかに敗北である。国民の目には、そうとしか映っていない。

ヴァスケリア王族の威光は、今度こそ完全に、地に墜ちた。

もはや頼みの綱は、モートンの眼前にいる、この人間ではない若者だけだ。彼に、何としてもダルーハ・クスナーを殺してもらわなければならない。

あのブラックローラという少女も、そう言えば同じような事を言っていた。ガイエルを助けて、ダルーハを倒させようとしていた。

「……あのブラックローラとかいう小娘、一体何者だったのだろうか」

ぽつりと、モートンは口に出した。

「実にかいがいしく貴様の手当てをしていたが……おい、そう言えば傷の具合はどうなのだ」

「問題ない」

ガイエルは、マントの下から右腕を出して見せた。

包帯の巻かれた右前腕が、拳を握ったり開いたりしている。

一時は指を動かすのもままならなかった右手が、確かに回復してはいるようだ。

「……まさか俺の心配をしてきているのか？ 兄上殿」

「よせと言っておる。貴様のような怪物が弟などと」

この男と妹の仲がどう進展するかは本人同士の勝手だが、とにかく兄などと呼ばれるのは我慢ならない。

「あのブラックローラという娘も言っていたがな。ガイエル・ケスナーよ、貴様には万全の状態でダルーハと戦ってもらわねばならぬのだ。当然、勝ってもらわねばならぬ。そして私が王族として安穩と暮らせる日々を、取り戻してもらわねばならぬのだよ。以前も言ったが、どこかでひっそりと畑を耕す生活など、私には出来んのだからな」

王位など、あの妹にくれてやる。

仲の良い兄妹ではないが、それでも兄が安穩と生活出来るくらいの捨て扶持はくれるだろう。

ガイエルが、右の拳をグッと握った。

「そうか。俺がダルーハに負けて殺されるような事があれば……モートン王子は、迷惑するか？」

「大いにする」

力強く、モートンは頷いて見せた。

ガイエルは微笑した。いや、苦笑か。

「……では、負けられんな」

その時。酒場の中央で、騒動が起こった。

「おらおら、酌をしろお酌をお。あと下着なんか穿いてんじゃねえよ」

「俺らダルーハ軍がこの町を守ってやってんだからよお、俺らへの接客を最優先させなきゃいかんぞう？」

店の給仕の女の子に、ダルーハ兵5人が絡んでいる。5人がかりで女の子1人を捕まえ、スカートに手を突っ込んだりしている。

「やっ……やめて下さあい……」

「かか可愛い声出すじゃねえかよ、んん？ もっとイイ声出させてやんぜえおうおうおう」

当然、止めようとする者はいない。居心地悪そうにしている町民の客たちも、店の主人や他の従業員も。

ガイエルが、物騒な溜め息をついた。わけのわからぬ質問を口にしながらだ。

「……モートン王子、臓物はお好きか？」

「……好きなわけがなからう」

「では、しばらく目をつむっている事だ」  
言いつつガイエルが、席から立ち上がった。

「俺は、臓物も血も脳漿も大好きなのだよ。何しろ俺は」  
残虐だからな、とでも言おうとしたのだろう。

だがもう1人、すでに立ち上がっている客がいた。

「征服者ダルーハ軍も、被征服者たる町の人々も……」

灰色のローブに身を包んだ、中年の男である。40歳前後、であろうか。

「酒や食事の場では仲良く出来るはず、だと思ふのだが。どうかかな？」

髭のない穏和な顔立ちは、しかし一癖ありそうなものを感じさせるもする。

「何だ、てめえ……」

ダルーハ兵たちは、しかし当然ながら穏和でなどいられない様子だ。

「誰に向かって偉そうな口きいてんのか、わかってんのかテメエ……」

「偉そうに聞こえたのなら謝る、すまなかった。もちろん君たちがダルーハの兵隊である事は承知の上で、物を言っている」

灰色のローブの男が言いながら、ちら……と視線をこちらに向けた。ガイエルの方を、見たようだ。

「私はただ、君たちを助けたいのだよ。わからないかな……このままでは君たち、1人残らず殺されてしまうぞ」

「何だあ？」

女の子を捕まえていた兵士の1人が、そんな凶暴な声を発しながらも。男の視線を追って、ガイエルに気付いたようだ。

「……おう何だテメエ。俺らの事、睨んでる？　もしかして」

兵士が、とりあえず給仕娘から離れて、ガイエルの方に向かって来る。腰に吊った長剣を、ギリリと抜き放ちながら。

その剣をガイエルに突きつけ、兵士はなおも命知らずな言葉を吐いた。

「男のクセに綺麗な顔しやがってよお、鼻ちよん切ってマヌケ面にしてやろうか？　んん？」

ガイエルは何も応えず、ただ右手を動かした。

包帯を巻かれた右手が、一見無造作に、しかし凄まじい速度で振り下ろされる。その速度で、包帯がちぎれ飛んだ。

と同時に。兵士の長剣が折れて、床に突き刺さった。

「……よし」

手刀の形に振り切った己の右手を、ガイエルは満足げに見つめた。傷の癒えた、完全に力を取り戻した右手。

「……な……」

半分ほどの長さになってしまった剣を呆然と持ったまま、兵士が間拔けな声を出す。

「何……しやがった？　てめえ今……」

「何だ、わからなかったのか。仕方がないな、もう1度しかやらんからよく見ておけ」

言いながらガイエルが、またしても右の手刀を振るった。

兵士の首が、刎ね飛ばされた。

「ああ、だから言わない事ではない……」

高々と舞う生首を見送りながら、灰色のローブの男が、嘆かわしそうな声を発する。

頭部の失せた兵士の屍が、尻餅をついた。そこへガイエルが声をかける。

「こちらの第2王子殿が、臓物は苦手だと仰せられた。だから生首で勘弁してやる」

その生首がモートンの眼前に落下し、テーブル上に転がった。目が合った。

「ひっ……ひい……」

「何だ、生首も駄目なのか」

ガイエルが呆れている。

店内は、静まり返っていた。

ダルーハ軍兵士もそうでない者たちも、啞然または呆然としている。

そんな中、1人がようやく言葉を発した。

「てめ……刃向かいやがったな……」

ただ1人の、攻撃魔法兵士だった。

魔石の杖をガイエルに向け、喚いている。

「俺たちに……刃向かいやがったなあああああ！」

その魔石が、赤く輝き始めた。攻撃魔法が、放たれようとしている。

まずい、とモートンは思った。ガイエルは無傷でも、近くにいるモートンは無事では済まない……

「これだから、まったく……」

灰色のローブの男が、何やらぶつくさと文句を漏らしつつ、軽く片手を掲げた。

途端。魔力を迸らせる寸前だった魔石が、杖の一部もろとも砕け散った。破片と火花が、攻撃魔法兵士の顔面を直撃する。

悲痛な絶叫を響かせながら床に倒れ込み、転げ回る彼に、灰色のローブの男が声をかけた。

「攻撃魔法兵士という人種は、これだから好きになれんのだ。魔力を、破壊と殺傷の手段としてしか見ておらん……魔法というものを、根本から学び直してみるのだな。そうすれば魔石など用いずとも、このくらいの事は出来るようになる」

「あんたは……」

ガイエルが、興味深げな声を発した。

「攻撃魔法兵士、ではない……本物の、魔術師か」

「ゾルカ・ジェンキムと申す者……よろしく、ガイエル・ケスナー殿」

灰色のローブの魔術師……ゾルカ・ジェンキムが、ガイエルに向かって恭しく身を折って見せる。

魔術師らしからぬ物品をゾルカが身に帯びている事に、モートンはようやく気付いた。

蛇、いや細長い竜の姿が、巻き付くように彫り込まれた鞆。に収まった、一振りの長剣である。

それが、灰色のローブ姿の、腰の辺りに吊られているのだ。

顔に火傷を負った、あるいは失明しているかも知れない攻撃魔法兵士に、感心にも肩を貸してやりながら。ダルーハ軍の兵士たちが、捨て台詞も吐かずに店から逃げ出して行く。モートンが思った通り、金を払わずにだ。

店の主も、それを咎めようとしなない。どころか、咎める相手を間違えている。

「あ……あんたたち、とんでもない事してくれたな！」

モートンよりも小太りの度合いが著しい店主が、その身体を暑苦しく揺らしながら、ゾルカとガイエルに詰め寄っている。

「ダルーハ軍の兵隊を、よっよりによって殺すなんて！ それも店の中で！ いい事をしたつもりなんだろうがな、これでこの店もダルーハ軍に睨まれる事になっちまったぞどうしてくれる！」

「すまん、申し訳ない」

ガイエルが、素直に頭を下げた。

この男がおとなしいうちに店主は怒りを鎮めるべきだ、とモートンは思った。

「良い事をしたつもり、というわけではないんだ……この店は、俺が責任を持って守る。俺がダルーハを殺せば、無法を働く兵隊もいなくなるだろう。あと少し、我慢して待っていて欲しい」

「だ……ダルーハを……殺す……？」

店主の肥満体から、へなへなと力が抜けてゆく。頭のおかしい客を店に入れてしまった、という絶望感が、丸出しである。

気を取り直したかの如く店主は、咎める相手を変えた。ガイエルから、彼に助けられた給仕の女の子へと。

「お前、そもそもお前が悪いんだぞミリム！ お前が嫌がったりせずにおとなしく、兵隊の慰みものになってれば！ こんな事にはならなかった！」

「……何だその言い草は」

ガイエルの口調が、一変した。フードの下の秀麗な顔立ちが、メキ……ッと危険な歪み方をする。

長剣を折り首を刎ね飛ばす右手が、店主の胸ぐらを掴み寄せた。

「貴様……女子供を生け贄にして、保身を図ろうと言うのか」

「……………」

店主が、息を詰まらせ青ざめる。

その傍で、ミリムと呼ばれた給仕の女の子は、ただ泣くだけだ。

「お……おい、そこまでにせんかガイエル・ケスナー」

控え目に、モートンは止めに入った。

この男が本気で暴れたら、町の1つや2つは容易く滅びる。そこそこは税収を見込めそうな町が、廃墟と化してしまう。

店主の胸ぐらを掴むガイエルの右手を、ゾルカが優しく叩いた。「怒りをぶつける相手を……間違えてはならんぞ？ ガイエル殿」

「……貴様は何故、俺の名を知っている」

放り捨てるように店主を解放しながら、ガイエルは訊いた。「名乗った覚えはない……いや、以前どこかで会ったのか？」

「君が赤ん坊の時に、な」

ゾルカが微笑んだ。

「あの頃のダルーハは、どこにでもいる子煩悩な父親だった。君の誕生を祝う宴席に、私を招いてくれたのだよ」

「ダルーハ・ケスナーの旧知の者か」

いくらか責めるような声を、モートンはつい出してしまった。

竜退治の英雄による、この凶行とも言うべき叛乱に、もしかしたら多少なりとも関わっている人物。なのかも知れない。このゾルカ・ジェンキムという魔術師は。

「いかにもその通り、第2王子殿。あの大馬鹿者を止められなかった無能者の1人でございますよ」

ゾルカの微笑が、モートンに向けられる。心の中を見透かすような、眼差しと笑顔だった。

「まあ座り直しましょう、お二方……ああ店主殿、ご迷惑でしょうが今しばらく店に居座らせて欲しい。ダルーハの兵隊が仕返しに来るような事があれば、追いついて差し上げるゆえ」

青ざめ尻餅をついたままの店主に、ゾルカはずしりと重い小袋を押し付けた。銀貨が詰まっている、のだろう。

モートン、ガイエル、それにゾルカ・ジェンキムの3人で、同じテーブルを囲む事となった。

「……要するに、こういう事だ。ガイエル殿」

まずは、ゾルカが口を開いた。

「人間とは、こういうもの。強い者に人身御供を捧げて、己だけが生き延びようとする。善いか悪いかではなく、そういうものなのだ。ダルーハは、それが許せなかった……息子である君も、そうか？」

「……親父殿に、聞いた事がある」

ゾルカの問いには答えず、ガイエルは言った。

「19年前の竜退治……その過酷な戦いの日々を共に過ごした、4人の仲間の話をな」

「ほう、ダルーハがそんな話を」



ゾルカが、嬉しそうな声を出した。

「吟遊詩人たちは、何しろダルーハ1人の事しか謡おうとしないからなあ。私たちだって、多少は役に立ったと言うのに……でもまあ、ダルーハ自身がそれを忘れずにいてくれたというのは喜ばしい事」  
「ダルーハの……竜退治の、仲間だど？」

19年前であるから、モートンも知ってはいる。

悪しき竜が率いる魔物の軍勢に、ダルーハは単独で立ち向かったわけではない。

配下と言うか仲間と言うか、そういう者たちによって、一時は部隊規模の戦闘集団を構成していた。最終的には4、5人にまで絞り込まれたようだが、どういう面々であったのか、まではモートンも知らない。

ゾルカが言うように、ダルーハ個人の武勇だけが語り継がれてしまっているからだ。

「4人の、旅の仲間……その1人はドルネオ・ゲヴィンだな？ 俺が殺したが」

「知っている。彼は最後までダルーハに付き合ったという事だ……私と違ってな」

「あんたはダルーハを見限ったか。まあ、あの通りの男だからな」  
ガイエルが笑うと、ゾルカもいくらか哀しげに微笑んだ。

「確かに、昔から傲岸不遜にして傍若無人な男ではあった。そんな男でも、しかし王国の民を本気で救おうとはしていたのだよ」

実際、救ってくれた。悪しき竜を倒し、王国の民を救ってくれたのだ。

当時9歳の少年王子だったモートンも、竜退治の英雄ダルーハ・ケスナーには、本気で、純粋に、憧れたものである。

「それが何故、今は……自分で救った王国の民を、こうして苦しめておるのか」

思わずモートンは、疑問を口にしていた。

「……まるで、己が倒した悪しき竜の魂を、そのまま受け継いでし

まったかのようにはないか」

「あながち間違っではおりませんよ殿下。ダルーハは竜の返り血を浴びて1度、死にかけております。どうか一命を取り留めて目覚めた時には、人間ではなくっておりました……あの赤き竜の悪しき力を、確かに受け継いでいるとは言えます」

「そんなものが原因ではないだろう。あの男が、ここまで王国の民を憎むようになったのは」

ガイエルが言いながら、腕組みをした。

「……要するに、先程のような事があったからだな？ ゾルカ殿」

「いかにも、そうだ。あの兵士たちを赤き竜に、絡まれていた娘をレフィーネ王女に、店主殿をヴァスケリア国民に、それぞれ置き換えてみれば……ほぼ当時と同じ状況となる」

ゾルカが、遠くを見つめた。

「あの頃のヴァスケリアの民は、赤き竜を恐れるあまり、我々に非協力的な事この上なかった。情報はくれない、宿を貸してくれない、物も売ってくれない。私たちの隠れ場所を、竜の配下の魔物に密告する。途方に暮れている我々に、毒入りの食物を差し入れる。挙げ句、ダルーハと恋仲であった王女を、竜への生け贄としてしまう」

「復讐、というわけか……」

モートンの声が、震えた。

「だがな……そんなもの全て帳消しにして余りあるほどダルーハは今、王国の民を殺戮しているのだぞ……!!」

怒りだった。腹の底から沸き起こる怒りの念が、モートンの全てを震わせる。

「どれだけの人間が死んだと思っている！ どれだけの税収が失われたと思っている！ 自分らも19年前は辛い目に遭った、などと言って全て正当化するつもりではあるまいなあゾルカ・ジェンキムとやら！」

「もちろん、そのようなつもりはありませんよ」

モートンの怒りを受けても、ゾルカの笑みは穏やかなままだ。

「……良き怒りです、第2王子殿下。民の苦難を憤る、王族の怒り……貴方のような御方がヴァスケリア王族におられる事、本当に嬉しく思いますぞ」

「……聞いていなかったのか貴様。私はただ、税收の激減を憤っているだけだ」

ヴァスケリアの国民には、とにかく税を納めて、モートンの王族としての安穩とした暮らしを支えてもらわなければならないのだ。畑を耕す、などという惨めな生活をしないためにも、1人でも多くの国民に生き残ってもらわなければならないのである。

「まあ、そういうわけだゾルカ殿。モートン王子のためにも、俺はダルーハを殺さねばならん」

ガイエルが言った。

「……かつての仲間だからと言って、止めたりはするまいな？」

「もちろん。殺してでも止めなければならぬのは、ダルーハの方……私とて、奴を見限ったきり傍観に徹していたわけではない」

答えつつゾルカが、腰の長剣を鞘ごと外し、テーブルの上に置いて見せた。

「ダルーハを止めるべく、私なりの事を試みてはきた。その成果が、この剣なのだが……まずは抜いてみてくれないか、ガイエル・ケスナー」

というゾルカの言葉に従って、ガイエルがその長剣を手にとった。細長い竜の姿が、巻き付くように彫り込まれた鞘。そこからスラリと、白い刃が滑り出す。

両刃の、厚さと鋭さを兼ね備えた、実に見事な刀身である。その刃を、ガイエルがじっと観察している。

ゾルカが、さらに言った。

「先程のように、その剣をへし折って見せて欲しい」

「……いいのか？」

「君に素手で折られるようでは使い物にならない、という事さ」

ゾルカの言葉を受けて、ガイエルは立ち上がった。長剣を左手で

構え、右手を手刀の形にしてユラリと揺らす。

揺れた、と見えた時には、振り下ろされていた。

抜き身の刀身が、ガイエルの手刀に打たれて震えた。微かに震えた、だけだった。

「これは……！」

震えの止まった長剣を、ガイエルは目を見開いて、じっと見つめた。

その刀身は、少しも曲がらず、傷1つ付いていない。

ガイエルの右腕が突然メキッ！と痙攣した。刃のようなヒレが、ジャキッと広がる。

右の前腕だけが、あの魔人のそれに変化していた。

そのヒレ状の刃を、ガイエルはいきなり、眼前の長剣に叩き付けた。

魔獣人間の肉体をも叩き斬る斬撃を受け、両刃の刀身がまたしても震える。震えただけで、またしても無傷だ。刃こぼれ1つない。

「これは……何なのだ、この剣は」

ガイエルが、息を呑んでいる。

「ゾルカ殿……あんたが、作ったのか？」

「金属を精製する際に、いくらか魔法的な手段を用いてみたのさ。別の物質を混ぜてみたり、元素の配列を少々いじってみたりと」

自慢するふうもなく、ゾルカが語る。

「その製法で、剣だけでなく鎧も作ってみようと思っている。腕が良く魔法にも理解のある鍛冶師が何人も、私に力を貸してくれているからね」

「魔法の剣に……魔法の鎧、か」

ガイエルが呟く。そんな陳腐な呼び名しか、思いつかないようだ。もっと何か洒落た名付け方はないものか、とモートンが考えている間にも、ゾルカとガイエルは会話を続ける。

「ガイエル殿、率直な意見を聞きたい……その剣でダルーハを殺す事は、出来るだろうか？」

「長剣一振りだけでは、もちろん無理だ。あんたの言う通り鎧と一揃いになったものを、それも大量に生産し、精鋭戦士の一部隊に装備させる。そのくらいは必要だろうな」

「ふむ……やはり、数を揃えなければならぬか」

「その剣を」

モートンは口を挟んだ。

「貴様が使えば良いのではないのか、ガイエル・ケスナー」

「俺は、素手で叩き潰す戦い方が、身に染み付いてしまっているからな」

右前腕で刃のヒレを畳み、筋肉と皮膚の下へと収納しながら、ガイエルは応えた。

「剣というものは、例えばティアンナ姫のように正しい技量を身に付けた剣士が正しく使わないと、たやすく損耗する……この剣は切り札だ。俺ごときが振るうべきではない」

ガイエルは長剣を、竜の巻き付いた鞘へと刺し戻し、恭しくゾルカに返した。

「喜ベモートン王子。俺がダルーハに敗れ殺されたとしても、まだ希望がある。こちらのゾルカ殿には、王家の名において最大限の援助を行うべきだ」

「……援助するような力など、だから私にはないと言っている」

無然と応えながらモートンは、もう1人の王族の事を思った。

自分は自分の戦いをする。そんな偉そうな事を、ティアンナは言っていたものだ。

だが今この王国は、人間など虫ケラ同然に扱う、もはや魔王と呼ぶべき怪物2体の、殺し合いの場と化しつつあるのだ。

（そんな中で、己自身の戦いなど……一体何が出来ると言うのだ、ティアンナよ……）

## 第12話 魔王の道

蝶よ花よ、と育てられた。

何の苦勞もなかった、と言っていいだろう。自分も、妹も。

「痛いよう……お姉ちゃん……」

か細くすりなく妹を、そっと抱き締める。そうしながら走る。何故、走っているのか、時折わからなくなる。

逃げているのだ。それは、辛うじてわかる。

何から逃げているのか、どこから逃げ出したのか、それが今ひとつ思い出せない。最初からわかっていない、のかも知れない。

「痛いよう……」

妹が泣いている。あれからずっと、泣き続けている。

エンドウールで1、2を争う豪商の家に生まれ、本当に何の苦勞もなく育ってきた。

王都で最も美しい姉妹と言われ、皆にちやほやされてきた。

いい気になっていた、のは確かだろう。美貌や財力を鼻にかけた驕慢な振る舞いも、今思えば少なくなかった。

だが、こんな目に遭わなければならぬほど悪い事はしていない。自分も、妹も。

「お姉ちゃん……痛いよう……」

泣き呻く妹を、ひたすら抱き締めてやる。それしか今の自分には出来ない。

王都城外で、王国正規軍が大敗したらしい。という話は聞こえていた。

聞こえたその日のうちにダルーハ軍が城壁を破り、エンドウールに攻め入って来た。

両親は殺され、使用人たちも殺され、自分と妹は兵隊に捕えられた。

それからどんな目に遭ったのかは、覚えていない。思い出せない。

思い出したくない。

「痛いよう……お姉ちゃん……」

あれから妹は、これ以外の言葉を一切失ってしまった。思い出したくもない目に遭わされ続け、気が付いたら、姉妹揃ってこんな所にいた。どんな所なのかは、未だによくわからない。

とにかく、逃げ出した。

失敗作、出来損ない、廃棄処分。あの男が、そんな事を口走っていたからだ。

意味するところは不明だが……殺される。自分も妹も。それだけは間違いなかった。

「痛いよう……」

泣いている妹を抱き締めながら、走り続ける。

前方に、兵士たちが立ち塞がった。

「待て、バケモノ！」

そんな意味不明な事を言っているが、意味を考えている場合ではない。

腕を振るった。いや、もしかしたら脚かも知れない。

とにかくそれだけで、立ち塞がっていた兵士2人が吹っ飛んで壁と床に激突し、絶命した。

あの時。ダルーハ軍の兵士たちが屋敷に押し入って来た、あの時に、この力があれば。妹を、守れたのに。

そんな事を思いながら、立ち止まる。

外に出ていた。

目が潰れそうなほどに、太陽の光が眩しい。日差しを浴びるのは、一体どれくらいぶりであろうか。

思った瞬間、身体の一部が破裂し、飛び散った。

痛みはない。痛みなど、もはや感じない。だが倒れていた。

「痛いよう……お姉ちゃん……」

泣きじゃくる妹を、倒れたまま抱き寄せる。

「出来損ないの分際で、まだ自我を残しておるのか」

声がした。あの男の声だ。

「うぬらのような失敗作が、そこかしこで無様に敗れて私の名を貶めておるのだよ……もはや出来損ないは1匹たりとも外へは出さぬ。全て廃棄処分だ」

またしても、身体のごくところが破裂した。

「いた……い……よう……」

やめて、妹をもう虐めないで。そう叫ぼうとしたが声が出ない。

最後にまともな言葉を発したのはいつだったか、もはや忘れてしまった。

「ほう……？ まだ生きておるとはな」

あの男が、何か言っている。

「生命力には、いささか見るべきものがあるのかも知れん……が出来損ないに違いはあるまい？ 見苦しい、早く死ななか」

身体の2、3カ所が、一斉に破裂した。飛び散った肉片が、さらさらと焦げ崩れてゆく。

「痛い……よお……お姉ちゃあ……ん……」

やめて、お願い。私はどうなってもいいから妹は、妹だけは。もうこれ以上、傷付けないで。

叫んだが、やはり声にはならない。

代わりのように、誰かが言った。

「……何をなさっているのです、ムドラール・マグラ殿」

女性の、と言うより少女の声だった。聞いただけで美しい容姿が想像出来る声。

危ない、こんな所にいては駄目。女の子がこんな所にいたら、私たちのような目に遭わされる。だから早く逃げて、出来れば妹を連れて。

いくら叫んでも、やはり言葉にはならなかった。

王宮の、楼閣と楼閣を繋ぐ渡り通路である。



まるで巨大な橋のようなその上で、ダルーハ軍兵士たちが群れていた。

また誰か虐められているのだとしたら、放ってはおけない。

魔獣人間に拉致されて、という形にせよティアンナがここエンドウル王宮に戻って来てから、2日目である。

この2日間、こんな場面を幾度となく城内で目にしてきた。

ティアンナが歩調強く歩み寄って行くと、渡り通路の中央に群れている兵士たちがギョツとしたように振り向いて、うろたえた。

城中に生き残っている小役人や宮女といった人々に、ダルーハ兵が危害を加えている。そんな場面にティアンナが近付いて咎めると、咎められた兵士らは舌打ちをしながらも大人しく退散して行く。

この2日間、そんな事の繰り返しだった。

ダルーハに気に入られた。ダルーハの妾となり、寵愛を受けている。

ティアンナに関しては今、そんな噂が城内に広まっていた。

実際のダルーハ・ケスナーは、ティアンナに手を出すどころか、1人の女性も身边には置いていない。

配下の兵隊にはあらゆる性犯罪を許可する一方、自身は全く女を近付けようとしていないのだ。

やはり、とティアンナは思う。ダルーハにとっては、レフィーネという妻だけが全てであったのだ。

渡り通路に群れて通行の妨げをしている兵士たち、の中に1つ、見知った人影がある。

黒いローブに身を包んだ、細身の男。

フードに囲まれたその顔面は、潰れかけた状態のまま固まっていた。巨大な瘡蓋の中で、2つの眼球が血走っている。

そんな顔面が、ティアンナの方を向く。

「何だ……貴様か、ティアンナ王女」

「……何をなさっているのです、ムドラー・マグラ殿」

ティアンナは、とりあえず訊いた。誰かを虐めている、のは間違

いないようだが。

「ダルーハに気に入られたからとて、大きな顔をするでないぞ。お前という素材を、私は諦めたわけではないのだからなあティアンナ姫……そなたならば、あのダルーハをも打ち倒せるほどの魔獣人間に」

そんなムドラーの言葉を、ティアンナは聞いてはいない。

あまりにも惨たらしいものの姿が、見えたからだ。兵士たちが、やや遠巻きに取り囲んでいるもの。

「これか……これが、気になるのか」

舌打ちと共に、ムドラーが言う。

「醜かろう、おぞましかろう。だから外には出たくなかったのだ。私の名を辱める事になるからなあ……この出来損ないがッ！」

ムドラーの、怒りと魔力が高まった。

小さな爆発が起こり、肉片の飛沫が飛び散りながら灰と化す。

出来損ない、と呼ばれたものが吹っ飛ばされ、ティアンナの足元でビチャッと石畳に激突し、広がった。

そして、声を発する。

「痛いよう……お姉ちゃあん……」

「ええい、まだ人間のつもりでおるのか」

ムドラーが、苛立たしげに語り始める。

「そやつは魔獣人間のなり損ないよ。1人では体力が保ちそうになかったゆえ2人、一緒くたの肉塊として繋ぎ合わせてやったのだ。

仲の良い姉妹であったようなのでなあ。慈悲深き扱いであろうが？」

ティアンナの足元で、ぶちまけられたように倒れているもの。

それは、人間だった。

言葉では表現し得ぬほど醜悪で痛ましい物体と成り果てていながらも、どこかに人間の原形を感じさせるもの。

それがティアンナの足元で、蠢いている。痙攣している。まるで泣いているように。

ティアンナは、崩れ落ちるように膝をついた。その「姉妹」の傍

らで、跪くような格好となった。

跪いたまま、押し潰されそうになった。ティアンナの、身も心も。

「……………何…………？」

そんな眩きが漏れた。

これは一体、何なのか。どういう事なのか。一体、何が起こっているのか。

ヴァスケリア王家がダルーハに敗れたせいで一体、何が行われてしまったのか。

「安心するが良いぞティアンナ姫。そなたは、そのように無様にはならぬ」

ムドラーが何か言っている。黙らせなければ。ティアンナはまず、そう思った。

この男を、永遠に黙らせなければ……殺さなければ、ならない。このような事を、これから先、2度とさせないために。

(…………それが、私の戦い…………)

ガイエルに向かって偉そうに言い放った通り、今は己自身の戦いをするべき時…………その最初の戦いが今、ここにある。

「そやつらは所詮、劣悪な素材であったという事だ。だがティアンナ姫、そなたは違う。そなたこそ最強最美、究極至高の魔獣人間に」

「ムドラー・マグラ」

自分でも意外なほど、ティアンナは落ち着いた声を出せた。

「このような事を続けている限り、貴方はいつかガイエル様に殺されるでしょう…………が、それを待ってはいられません」

魔石の剣を、ティアンナはすらりと抜いて構えた。

細い刀身の根元に埋め込まれた魔石が、ぼんやりと赤く輝き始める。

「…………私が、貴方を殺します」

「やれやれ…………やはり少しばかり血を吸って、大人しくさせねばならぬかああア」

ムドラーの声が一瞬ヒクツと裏返った。その細い身体が痙攣し、

膨張し、黒いローブがちぎれ飛ぶ。

6本の吸血触手が、大蛇の如く躍りうねる。

「もはやダルーハが何を言おうと構わぬ。そなたをダルーハ以上の最強生物に生まれ変わらせてくれようぞおティアンナ姫、あの逆賊めを討ちたいのであるーがああああ！」

瘡蓋の塊のようになった顔面だけは、それほど変化していない。

とにかく魔獣人間ヴァンプクラークの姿を露わにしたムドラーが、2本の吸血触手をティアンナに向かってニョロニョロと伸ばす。弱々しくのたうち震える「姉妹」の傍らで身構えつつティアンナは、伸びて来るものたちを、じっと見据えた。

これまで何度も、魔獣人間を力任せに叩き斬ろうとして、失敗してきた。だからティアンナは今、見極めようとしている。

2本の吸血触手が、どれほどの速度で、どの角度から襲いかかって来ているのか。

どの角度で、どれほどの力で、どの瞬間に、剣を振るえば良いのか。

上手くゆくかどうかは、わからない……否。上手くいかせなければ、ならないのだ。

ガイエルは今、近くにいない。ティアンナが独力で、戦わなければならない。

それが、己自身の戦いというものなのだ。

赤く輝く魔石が、燃え上がるように光を強めた。

細身の刀身が、松明の如く燃え上がった。その炎が、ティアンナの凜とした美貌を、赤く激しく照らし出す。

1歩だけ踏み込みながらティアンナは、燃え盛る炎の剣を一閃させた。

下着のような鎧をまとう半裸身が、しなやかに躍動する。その周囲で、炎が弧を描く。

切断の手応えを、ティアンナは確かに感じ取った。これまで魔獣人間たちにことごとく弾き返されてきた無様な斬撃とは、明らかに

違う。会心とも言うべき、手応えである。

切断された吸血触手が2本、渡り通路の外側へと落下していった。  
「ぎゃ……」

悲鳴を漏らしながら、ヴァンプクラーケンが後退りをする。半分ほどの長さになってしまった2本の触手に、焼けただれた断面が残っている。

「ばっ馬鹿な……そんな、このような……」

「私だって伊達に、貴方たち魔獣人間に……危険な目に遭わされ続けてきた、わけではないわ」

振り切った炎の剣を構え直しつつ、ティアンナは言い放った。

「力任せの攻撃しか能のない魔獣人間の動き、すでに見切らせていただきました。少なくとも貴方には負けません……そして、貴方を許すわけにはいきません」

仲の良い姉妹、であつたらしいものを、ティアンナは見下ろし、見つめた。

目を逸らせたくなる惨たらしさに、耐えた。自分が目を逸らす事は許されない。民を守る事が出来なかった王族として、しっかり見つめなければならぬ。

「お姉ちゃん……痛いよう……」

「……………」

ごめんなさい、という言葉ティアンナは呑み込んだ。  
軽々しい謝罪の言葉など、口にするべきではなかった。

「このような事……これからも続けたいのであれば、全力で抗いなさい魔獣人間」

構えられた炎の剣が、さらに激しく燃え上がった。細身の刀身そのものが、赤く巨大化したかのようにだ。

「私も全力で、貴方を処刑します。覚悟なさい」

「うっぐ……そ、素材の分際で……創造主に刃向かうか……」

ヴァンプクラーケンが怒り狂い、だがそれ以上に怯えている。

兵士たちは、すでに逃げ始めていた。

「うぬっ、待たぬか貴様ら！」

ムドラーの怯えた怒声に会わせ、残り4本の吸血触手のうち3本が跳ねた。そしてティアンナではなく、逃げ行く兵士らに襲いかかる。

最も逃げ足の遅い者3名、の後頭部に、吸血触手の太い先端がズブ、グサツ、ずぶり、と突き刺さる。

血と脳漿をしたたらせながら、その3人の兵士が痙攣し、のけぞり硬直し、そしてクルリと振り返って槍を構える。

操り人形の動き、だった。

裏返った眼球を血走らせ、ベロリと舌を垂らしながら。傀儡と化した兵士3人が石畳を蹴り、ティアンナに襲いかかる。

魔獣人間という戦力に頼り切って鍛錬の足りぬダルーハ軍兵士、とは思えぬ、動きの速さと鋭さである。頭に刺さった触手から、何らかの力を注入されているかのようだ。

ティアンナは跳ぶように駆け出し、踏み込んだ。燃え盛る炎の剣を、横薙ぎに振るう。

右から左へ一閃、左から右へともう一閃。少女の細い半裸身の周りで、炎の弧が2つ、ほぼ同時に描かれる。

傀儡の兵士が3人とも、構えた槍もろとも真っ二つになった。大量の臓物が3人分、空中にぶちまけられながら焼け焦げて崩れ散り、灰となる。

その時には、ヴァンプクラークンの姿は空中にあった。皮膜の翼を広げてはためかせ、半ば飛行に近い跳躍をしている。

空中からの襲撃、の動きではなかった。

傀儡3体が倒されている間にティアンナの頭上を飛び越えたヴァンプクラークンが、巨体に似合わぬ不気味さで身軽に着地する。「姉妹」の近くにだ。

「う、動くな！」

倒れていた「姉妹」の身体が、石畳から引き剥がされる。痛ましいほど醜悪なその肉体が、吸血触手に絡め取られ締め上げられてい

た。

捕われた「姉妹」の近くで、ヴァンプクラーケンの腹部が縦に裂けてカーテンの如く開き、うっすらと赤い光を漏らしている。

「動くでないぞティアンナ姫……そなたが大人しくしてくれるなら、廃棄予定であったこやつらの、命だけは助けてやっても良い」

「ムドラー……ッ！」

怒りの声を噛み殺し、ティアンナは固まった。

「その剣を捨てよ。さもなくば予定通り、この出来損ないの廃棄処分を実行する。今この場でなあ」

魔獣人間の腹部に埋め込まれた、巨大な魔石。それが、赤い輝きを強めてゆく。

「痛いよう……お姉ちゃあん……」

「た……すけ……て……」

一固まりの「姉妹」が、2つの声を同時に発した。

「わ……たし、は、いいか……ら……いもうと……だけは……たすけて、おね……が……い……」

「いい加減に黙らぬか……出来損ないの貴様らに！ 言葉を話す資格などないのだよッ！」

太い吸血触手が「姉妹」を締め上げる。痛ましいほど醜いその肉体が雑巾の如く搾られ、体液がビチャビチャと大量にしたたり落ちた。

「やめなさい！」

ティアンナは叫び、炎の剣を構え、しかし斬り掛かる事は出来なかった。

ヴァンプクラーケンの腹部から破壊の光が迸り出る、よりも早く踏み込んで、魔獣人間を一撃で斬殺する。その自信がなかったから……だけではない。

凄まじい気配が、背後から、荒波の如く押し寄せて来たのだ。力強く石畳を叩く、足音と共に。

ティアンナは振り向かなかった。人質を取っている魔獣人間から、

視線を外すわけにはいかない。

それに、振り向かずともわかる。この圧倒的な気配の主が、誰であるのかは。

ヴァンプクラーケンが硬直し、声を引きつらせた。

「だ……ダルーハ……様……」

「無理に敬称を付ける事もあるまい……それはそれとして、人質とは感心せんな」

ティアンナの横で、甲冑姿のダルーハが立ち止まる。

隻眼が、ヴァンプクラーケンを射すくめる。

精悍な口髭からギリリと白い牙をのぞかせながら、ダルーハは言った。

「我らダルーハ軍は、暴力で弱者を蹂躪する軍団よ。人質などという平和的な手段に頼らず、ただ純粋な暴力のみで……な」

言葉と共に、炎が迸った。

燃え盛る、火炎の吐息。それがダルーハの口から溢れ出して迸り、ヴァンプクラーケンの巨体をゴォオッ！ と包み込む。

捕われの「姉妹」もろとも、である。

一瞬、ティアンナの頭の中が真っ白になった。何が起こったのか、わからなくなった。

そんなふうにティアンナが呆然としている、一瞬の間に。「姉妹」の醜く痛ましい肉体が、

「痛いよう……お姉ちゃん……」

弱々しい悲鳴を漏らしながら、灰に変わった。

その遺灰をまき散らしながらヴァンプクラーケンが、石畳の上でのたうち回っている。

悲鳴を垂れ流して暴れる巨体は、ブスブスと煙を発して焼けただけ、今やその醜悪さは凄惨なほどだ。

「ひぎっ、ぐぎゃあああああああだっダルーハ様、なななな何をなされますかアアアアアアアアアア！」

「ムドラーよ、戦いとは暴力のみで行うもの。人質など使うな。己



の持つ純粹なる暴力のみで弱者を圧倒し、強者勝者となれ。それが  
ダルーハ軍、唯一の軍規である」

形良い口髭を焦がす事もなくダルーハが、微かな炎をチロチロと、  
蛇の舌の如く揺らして言った。

呼吸が止まるほどに息を吞みつつ、ティアンナは声を發した。

「ダルーハ卿……貴方は……ッッ」

「俺の事などよりも、ほれ。まだ戦いは終わっておりませんぞ女王  
陛下」

ダルーハの言う通りではあった。

おどましく焼けただれたヴァンプクラーケンが、それでも力尽き  
てはおらず、立ち上がるうとしている。

「ゆ……許さんぞ、ティアンナ・エルベツトそれにダルーハ・ケス  
ナー……まとめて灼き殺してくれる、消し飛ばしてくれる……」

憎惡の呻きと共に、魔獸人間腹部の魔石が、赤い輝きを強めてゆ  
く。

ティアンナは避けず、ただ踏み込んだ。

炎の剣を、渾身の勢いで突き込んでいった。

燃え盛る切っ先が、ヴァンプクラーケンの腹を……そこで真紅に  
輝いている魔石を、直撃する。

爆発しそうなほどに赤く激しく輝いていた大型魔石が、碎け散っ  
た。

発射寸前だった魔力光が溢れ出し、ヴァンプクラーケンを体内か  
ら灼く。

「ぐっ……ぎゃ……あああああだっダルーハ、私を助けぬか！  
魔獸人間という戦力を与えてやった恩を忘れたのかああああアア  
アアアアアアアアア！」

爆発にも似た赤い光が膨張し、魔獸人間の巨体を、内側から呑み  
込んでゆく。

やがて渡り通路の上に、巨大な火柱が生じた。

その真紅の爆炎の中で、魔獸人間ムドラー・マグラは灰すら残さ

ず、消滅していった。

爆発の輝きを全身で受けながらティアンナは、紅蓮の炎をまとう剣をゆっくりと構え直した。ダルーハ・クスナーに向かってだ。

「ダルーハ卿……御自身が何をなさったのか、おわかりですか……」  
自分が今どんな表情をしているのか、どんな口調で言葉を発しているのか、ティアンナはわからなくなっていた。

一切の冷静さが、自分から失われつつある。それは辛うじて自覚出来たが、止められはしない。

「何の罪もない……救われなければならない者たちを、貴方は……」

「女王陛下よ、俺はただ道を歩いているだけだ」

何でもない口調で、ダルーハは言った。

「……歩いていれば、蟻を踏み潰す事もあるう？」

「……ダルウーハアアアアアッ！」

喉が潰れそうな怒りの絶叫が、迸った。

声帯をヒリヒリと痛めながらティアンナは、猛然と踏み込んで行く。激しく燃え上がる炎の剣を、叩き付けるように振り下ろす。

ダルーハの身体が揺らいだ。

かわされた、とわかった瞬間、ティアンナの右腕に激痛が走った。炎の失せた魔石の剣が、石畳に落下して音を立てる。

ティアンナの右腕は、後ろ手に捻り上げられていた。

少女の細腕を左手でギリギリとへし曲げつつ、ダルーハが言う。

「強者が道を歩けば、弱者は踏み潰される。そういうものですよ、女王陛下」

「……ならば踏み潰さない……私を……ッ」

痛みに耐えて、言葉を発する。ティアンナに出来る事は、それだけになってしまった。

「これ以上、私を撈る事は……女王として、許可しません……っ！  
さあ殺しなさい！」

「……そうだな。潰れて飛び散ってみるか、ティアンナ女王」  
ゆらり、とダルーハが右手を掲げた。

「美しい乙女も、無様な虫ケラも、そうなってしまえば大して違いはない」

かつて王都城外の戦で、大勢の王国正規軍兵士を殴り殺し引きちぎった、力強い右手。少し強めに振り下ろされるだけでティアンナの肉体は、まさに踏み潰された虫ケラ同然の有り様となるだろう。

（ガイエル様……どうか後はっ）

「もっ、申し上げます！」

声がした。

ダルーハ軍の兵士が1人、どたばたと渡り通路を駆けて来たところである。

「いいいいい一大事にございますダルーハ陛下！」

「……何事だ」

ギロリと隻眼を向けられて、その兵士が、押し潰されたように膝き、頭を垂れる。

「も、申し訳ございませぬ！ 取り次ぎの方がおられませぬゆえ、じじじ直に声をおかけするなどという御無礼を」

「直答を許す。さっさと報告せよ」

ダルーハがそう苦笑すると、まだかなり若いと思われるその兵士が、いくらかは口調を落着けた。

「で、では申し上げます。元レドン侯ダルーハ・ケスナー、王都エンドウールにて無様にも討ち死に遂げたる由！」

「ふむ、それは確かに一大事であるな」

言いながらダルーハが、ティアンナを粉碎する寸前だった右手を、軽く跳ね上げる。

跪いていた若い兵士がいきなり跳躍し、空中から左足を打ち込んだところだった。

その飛び蹴りと、ダルーハの右手が、激突する。

蹴りを弾かれた若い兵士が、くると鮮やかに後転しつつ着地。しながら、荒々しく兜を脱ぎ捨てる。

男性にしては少し長めの赤い髪が、溢れ出した。

「ガイエル様……あつ」

いきなり、ティアンナは解放された。へし折られる寸前だった右腕を左手で軽く押さえながら、尻餅をついてしまう。

そんなティアンナなど眼中にない様子で、ダルーハが左手を振るい、ガイエルの右拳をはたき落とした。

「残念だったな親父殿！ あんたの詰めの甘さのせいで、俺はまだ生きています！」

ダルーハ軍の兵装をまとったガイエルの身体が、言葉と共にギョルギョルツ！ と竜巻のように回転した。左右の長い脚が連続で跳ね上がり、超高速で弧を描く。

巻き起こった風に煽られるが如く、ダルーハの身体がふわりと後退して、ガイエルの連続蹴りをかわした。

空振りした両足を軽やかに着地させてガイエルが、ティアンナの眼前に立つ。少女を背後に庇い、父親と対峙する。

「ガイエル様……」

「逃げろ、ティアンナ姫」

いくらか距離を隔ててダルーハと睨み合ったまま、ガイエルが言う。

「ここから先は、単なる親子喧嘩だ。人に見せるものではない」

「見せて差し上げれば良いではないか。貴様の無様なる死に様を、女王陛下になあ」

左半分潰れたダルーハの顔面が、ニヤリと凶猛に歪む。

「あがいて見せるガイエルよ。あの時以上に、無様に、滑稽に……健気に抗う弱者を、虫ケラの如く踏み潰す。強者のみに許されたる悦楽よなあ。そうは思わんか」

「おふくろ様に死なれて本格的におかしくなった、とは思っていたが」

対照的に端正なガイエルの顔にも、笑いが浮かんだ。不敵だが、どこか暗い、翳りのある微笑。

「……まさか、これほどとはな」

「弱者どもが、どいつもこいつも軽々しくレフィーネの事を口にする」

ダルーハが、口髭の奥から牙を剥いた。

「……生かしては、おけんなあ」

「俺はな親父殿。おふくろ様に、あんたの事を頼まれているのだよ」  
ガイエルが、翳りある微笑。その根底にあるものを、ティアンナは垣間見たような気がした。

寂しさ、悲しみ、に似ている。そのどちらでもあり、どちらでもない。そう思えた。

「あんたを生かしたまま取り押さえ引ッ立てて、おふくろ様の墓前で詫びさせてやるつもりだった……が、俺の力では無理だった」

「貴様まさか……俺を殺すつもりで戦えなかったから負けた、などと言うつもりではあるまいな」

「言わんよ、そんな事は。俺が言える事は、ただ1つ……」

すつ……とガイエルは右手を掲げた。

その右掌が、ゆっくりと下がり、顔を隠す。

「貴様を殺す。それだけだ……随分と俺の気に入らぬ事をしてくれたなあ、ダルーハよ」

「若造が……」

ダルーハがさらに牙を剥き、笑顔なのか怒りの形相なのか判然としない表情を見せた。

開かれた隻眼が、燃えるように光を放つ。

力強い両腕が、息子に対して親愛の情を示すかのように広げられ、分厚い胸板が上向きに突き出される。

微かに反り返ったその身体が、メキ……ッと震えた。

「ティアンナ姫、やはり逃げてくれ」

ガイエルの右手の五指の間で、両眼が赤く光った。

「これは親子水入らずの……殺し合いだ」

「ガイエル様……」

ティアンナは、後退りをするしかなかった。

今から、鎧の破片が飛んで来るからだ。

「悪竜転身……」

「悪竜……転身……ッ」

ガイエルとダルーハの声が、重なった。

### 第13話 竜王の道

どちらが正体、という事もない。

いや、やはり醜悪な魔人の方が、本来の姿であるのか。

右の拳を、軽く握ってみる。手首から肘にかけて広がった刃状のヒレが、ジャキッと金属的に鳴った。

ドルネオ・ゲヴィンとの戦いで碎かれたこの武器が、今や完全に再生復元を完了している。

同じくドルネオとの戦いで折られた翼も、元に戻っている。

マントの如く背中から左右に広がった翼を、ガイエルは軽くはためかせてみた。動きも、問題ない。

魔人ガイエル・ケスナー自身にも、人間を遥かに超えた肉体再生力があるのは間違いない。

が、やはりブラックローラによる丹念な手当てが効いたのだ。

あの黒衣の少女の思惑通りに、という事なのか。再びこの魔人の姿で、父と戦う時が来た。

ダルーハも、やはりこちらの方が正体と言うべきか、異形のものゝ姿を露わにしていた。

重厚なほど黒く、所々に溶岩のような赤色が走った、火山帯の岩石を思わせる外骨格。

そんなものに全身を包まれていながら頑強な内骨格をも有している、凶悪なくらいに力強い肉体。

牙を剥き出しにした、まるで悪鬼の頭蓋骨のような顔面が、左右の眼窩の片方だけで、赤い光を爛々と燃やしている。

竜の血を引く、赤色の魔人。

竜の血を浴びて人間ではなくなった、黒色の暴君。

2色の異形が今、エンドウール王宮の巨大な渡り通路の上で睨み合っていた。

「……1つ、確認しておく」

剥き出しの牙を開いて、ダルーハが言う。

「ドルネオが死んだ、と聞いた。貴様の仕業か」

「そうだ。安心しろ親父殿、すぐに後を追わせてやるっ」

ガイエルの方から、踏み込んだ。

左の拳を打ち込む。が、かわされた。続いて右拳。ダルーハの左手で、弾かれた。

間髪入れずに跳ね上がった左足。これは、ダルーハの腹部に命中した。凶器そのものの爪を生やした蹴り。それも、この父の肉体に外傷を負わせる事は出来ない。が、

「む……っ」

呻かせ、怯ませる事は出来た。

よろめくダルーハを追い詰めるように、ガイエルはさらに踏み込み、立て続けに拳を喰らわせた。右、左、右。全て命中し、拳の方が碎けてしまいそうなほど強固な手応えが返って来る。

揺らぎ、倒れかけ、辛うじて踏みとどまるダルーハ。に向かってガイエルは、左手を一閃させた。刃状のヒレ。

ガギインッ！ と、斬撃ではなく殴打の感触が弾ける。

斬る事は出来なかったが、微かながら血飛沫が散った。

ダルーハの身体が大きくよろめき、またしても倒れそうになる。

ガイエルは右手を振りかぶった。刃のヒレがジャキッと広がり、構えられる。よろめいたダルーハの首筋に、狙いを定める。

その間に、しかしダルーハは踏みとどまって体勢を直していた。

右前腕の刃を振り下ろそうとして、ガイエルは動きを止めた。止められていた。

とてつもなく重い衝撃が腹にめり込み、ガイエルの行動力を麻痺させたのだ。

ダルーハの左拳。ガイエルの鳩尾に、叩き込まれていた。

「ぐっ……え……ッ」

仮面に似た顔面甲殻の内側で、ガイエルは吐血した。血反吐の飛沫が、霧状に飛び散った。



その霧を断ち切って、ダルーハの右拳が飛んで来る。

ガイエルは視界が暗転し、その中で火花が散った。

間髪入れず、ダルーハの左手が襲って来る。拳ではなく平手。凄まじい衝撃が、顔面に貼り付いて来て脳を揺さぶる。

ガイエルの身体が回転しながらよろめき、渡り通路の欄干にぶつかる。

「ふん……」

微かに嘲笑いながら、ダルーハが歩み寄って来る。

ゆったりとした歩み、と見えた瞬間、その左足が石畳から離れた。ブンッ、と重々しく空気が裂ける。

その音が聞こえた時には、ダルーハの蹴りが、ガイエルの胴体に叩き込まれていた。

呼吸器官が一瞬、全て麻痺した。息の詰まったガイエルの背中で、渡り通路の欄干が砕け散る。

その破片と共に、ガイエルの身体が宙を舞う。

渡り通路の外、空中に、ガイエルは蹴り出されていた。

止まっていた呼吸を辛うじて回復させつつ、ガイエルは羽ばたいた。翼を広げて空気を打ち、己の身体を空中にとどめる。

渡り通路の上ではダルーハが、欄干の壊れた部分から、僅かに身を乗り出していた。口を開きながらだ。強固かつ鋭利な上下の牙を押しつけて、炎の吐息が迸る。

巨大な火柱が、横向きに発生し、空中のガイエルを直撃した。

「ぐわっ……あ……！」

とてつもない衝撃と熱量に包まれ、ガイエルは落下した。

庭園の石畳にガイエルの身体が激突し、土煙が大量に舞い上がる。石畳の破片を跳ねのけて、ガイエルは即座に起き上がった。

全身が、ひりひりと痛む。火傷の痛みだった。鱗の部分があちこち焼け焦げ、じつとりと血が滲んでいる。

そんな事よりも、とガイエルは狼狽した。自分1人、落とされてしまった。渡り通路の上にはティアナが、ダルーハと一緒に残さ

れている。彼女の命が危ない。

が、ティアンナなど眼中にない様子で飛び降りて来たダルーハが、ずしりと庭園に着地していた。

「貴様がドルネオを倒したなどと……信じられんな、とても」

牙剥き出しの口元にチロチロとまとわりつく炎、を指で拭いながら、ダルーハが言う。

「何か、あるはずだ。奴の油断について貴様が叩き込んだ、切り札がな」

言いながら、歩み寄って来る。

「……見せてみる、それを」

「貴様……っ！」

ガイエルの呻き、と共に。ひび割れていた顔面甲殻に、さらなる亀裂が走る。

怒りが、闘志が、胸の内で燃え上がる。そして込み上げて来る。

顔面甲殻が、砕けて散った。

露出した牙をガイエルが開こうとする、よりも早く。ダルーハの黒い重量級の身体が、滑るように踏み込んで来た。

重い一撃が、ガイエルの腹にズン……ッと打ち込まれる。ダルーハの拳だった。

ガイエルは口を開き、爆炎、ではなく大量の鮮血を嘔吐した。

それを拭う間もなく、ダルーハの分厚い平手が、ガイエルの顔面を殴打・往復する。激しく揺さぶられる頭蓋骨の中で、何本もの毛細血管が破裂した。

血まみれの牙を食いしぱりながらもガイエルは立っていられず、よろめいた。踏みとどまろうとしたところへ、

「おい……いくら何でも、もう少し頑張れぬか」

ダルーハの、蹴りが来た。無造作に障害物を押しのけるような蹴り。

それだけでガイエルの身体は吹っ飛び、庭園を飾る彫像の1つに激突した。

美しい、貴婦人の石像。それが無惨にも碎けて崩れ落ちる。  
破片に埋もれて倒れたガイエルに、ダルーハがゆっくりと歩み迫る。

「これでは、あの時と同じではないか。否、あの時と違って放り込んでやる川もない……殺すしかないぞ？」

起き上がりかけたガイエルの腹に、ダルーハの右足が打ち込まれた。

鳩尾にズドッ！ と衝撃がめり込んで来る。ガイエルは腹を抱え、うつ伏せに倒れた。

「……貴様の真の父親のもとへ送ってやる、しかなくなってしまふぞ。ほれ、もう少し気張って見せんか」

後頭部を踏まれた。ダルーハの片足が、脚力が、体重が、頭蓋骨を容赦なく圧迫する。

顔面を石畳に押し付けられたまま、ガイエルは呻いた。

「お……俺の、真の父親……だと……」

先程、吐き出し損ねたものが、また込み上げて来る。それをガイエルは、口を半開きにして少しだけ解放した。

顔面の周りで石畳が大量に碎け散る、のをガイエルは感じた。

半開きの口から爆炎を噴射しながら、ガイエルの頭部が跳ね上がり、ダルーハの片足を押しのける。

「ぬっ……」

よろめくダルーハに向かって、ガイエルは思いきり口を開き、体内に残っていた爆炎を全てぶちまけた。

火炎、と言うより爆発そのものが噴火の如く吐き出されて、ダルーハの身体を灼きながら吹っ飛ばす。

大量の石畳が碎けて舞い上がり、幾つもの彫像が粉々に飛び散った。

「……親父殿は、言っておられたな」

爆炎を吐き出し終えて息をつきながら、ガイエルは言った。

「男にとって父親とは、最大の障害である。己の道を往こうと思

うならば、殺してでも打ち倒さねばならぬ存在であると」

父に聞こえているのかどうかわからぬ言葉と共に、歩き出す。

「そういう意味で、俺の真の父親は……すでに死んでしまった怪物などではなく、あんただよダルーハ・ケスナー」

めくれ上がって砕けた石畳、崩れた石像。そんな破壊の痕跡が、まるで道路の如く続いている。

その半ばで、ガイエルは立ち止まった。

道路状に伸びた破壊の痕跡の、その先で、ダルーハが立ち上がったからだ。

「己の道を……往こうとする、我が子を……」

瓦礫を押しつけて立ち上がったダルーハの全身で、黒い外骨格がひび割れ、所々が剥離して肉の赤さが露出している。体内が発熱・発光しているかのような、鮮やかな赤さだ。

「力で、叩き潰す……それが父親よ」

彫像の生首を踏み碎いて、ダルーハが歩き出す。

ガイエルの胸の内で、またしても熱いものが燃え盛る。

それが爆炎として吐き出せるほどに高まる、のを待っていてくれるはずもなく、ダルーハが踏み込んで来る。すでに眼前にいる。

拳で、ガイエルは迎え撃った。右拳。ダルーハの顔面に、命中した。

一方、ガイエルの口元にも、ダルーハの右拳が叩き込まれる。

牙を食いしばって耐えながらも、ガイエルはよろめいた。ダルーハの身体も、揺らいでいる。

双方、辛うじて倒れずに踏みとどまる。

次の動きに入るのは、ガイエルの方がいくらか早かった。ダルーハの首筋を狙って、左前腕を振るう。

刃のヒレが一閃し、だが止まった。恐ろしく固い手応えが、ガイエルの腕の骨をも震わせる。

刃のヒレが、ダルーハの首筋に、ほんの少しだけ食い込んでいた。筋肉で止められている。微かな鮮血が、小さな噴水の如くプシュー

ツと噴き出しているが、致命傷には程遠い。

「この……ッ！」

父の首筋に食い込んだ刃に、ガイエルは腕力と体重をかけていった。が、強固な筋肉の感触が返って来るだけである。食い込んだ刃で、押し斬る事も引き斬る事も出来ない。

頸部の傷口でガイエルの刃をガッチリとくわえ込んだまま、ダルーハは笑った。

表情筋のない、悪鬼の頭蓋骨そのものの顔面が、ガイエルの眼前で確かにニヤリと歪んだのだ。

「弱者が懸命に振るう刃……心地良きものよなあ」

言葉と共に、衝撃が来た。ダルーハの左拳。喰らう瞬間だけ目視出来たが、かわせるものではなかった。

ギュルルルッ！ と豪快な錐揉み回転をしながら、ガイエルの身体が庭園に叩き付けられる。石畳が碎けて舞い上がり、降ってくる。

それを浴びながら、ガイエルは弱々しく上体を起こした。それが精一杯だった。

下半身が痺れ、痙攣している。立ち上がれるようになるまで、いささか時間がかかるか。

「ダ……ルーハ……ッ」

呻くガイエルにダルーハが、親愛の情を示すかのように両腕を広げて歩み寄る。

「もつとだ、息子よ……もつと健気に無様に、蟪蛄の斧を振り回せ。そして父を楽しませるのだ」

首筋から流れ出す鮮血は、今にも止まってしまいそうだ。出血を、首の筋力で無理矢理に止めている感じである。

「それが貴様に出来る、せめてもの孝行よ……」

「……………」

ガイエルは牙を食いしばりながら、見上げた。ダルーハではない何者かの視線を、感じたからだ。

渡り通路の上から、ティアンナが、じっと見下ろしている。

目が合った。

怯えを押し殺した、強く清冽な眼差し。可憐な唇を微かに嚙んだ表情。ガイエルは視力で、はっきりと見える。

（逃げて……くれんか、やはり……）

この場から逃げてくれない。それはつまり今ここでガイエルが殺されれば、ティアンナも殺されるという事だ。

「本当に、この姫君は……要らん重圧を、かけてくれる……！」  
力の入らぬ両脚で、ガイエルは無理矢理に立ち上がった。下半身が痺れて立てない、などと言っている場合ではなかった。

「それが貴女の言う、己自身の戦いというやつか……ええい、たちが悪いっ！」

父に対する殺意と闘志、それにティアンナへの腹立たしさが幾分混ざり込み、全で一緒くたになって胸の内では燃え盛る。

激しく体内を駆けるその熱さを、ガイエルは右前腕へと凝集させていった。

ダルーハが、すでに踏み込んで来ている。人ならざる父の姿が、視界の中で巨大に膨れ上がる。

しっかりと見据え、ガイエルもまた石畳を蹴り碎いて駆け出し、ダルーハへと向かった。

父の拳が、視界を占める。

先程は、ここまで見えてかわせなかった。2度目ともなれば、見える、以上の反応が出来なければならない。

踏み込みながら、ガイエルは身を低くした。

ダルーハの右拳がブウンッ！ と重い唸りを発して、ガイエルの頭をかすめる。

微かな衝撃があった。角を1本、折られていた。

と同時にガイエルは、父と擦れ違う形に、右腕を振るっていた。刃のヒレが、ジャキィッ！ と音を立てて大型化しつつ、燃え上がる。

炎、と言うより高熱そのものが目に見える輝きとなって発現したかのような、真紅の光。

それを帯びた大型の刃が、横薙ぎに一閃する。

「ぐっ……………ッ！」

ダルーハが呻き、後退りをした。

その腹部に横一直線、赤く輝く筋が刻み込まれている。

ガイエルは間髪入れず、右足を離陸させた。蹴りで切断するための爪が、高々と天空を向く。

その爪が、右前腕の刃と同じく、赤く熱く発光している。

踵落としての形に、ガイエルは右足を振り下ろした。縦一直線の、足による斬撃。

ダルーハの頭頂部から股間にかけて、赤い光の線が走った。

赤色に輝く、横線と縦線……………赤熱する光の十字を刻まれたダルーハの身体が、揺らぎながらも声を発する。

「ぐっ……………く、つくくくく、無駄だ若造。貴様がいくら蠅螂の斧を振るったところで、俺を……………楽しませこそすれ、殺す事など……………」

最後まで言わずガイエルは、右足の着地と共に踏み込んでいた。そして身を捻り、左の拳を叩き込む。父の鳩尾、光の十字の交差点にだ。

決定的な手応えを、ガイエルは感じた。一瞬、時が止まったようにも感じた。

低い姿勢で、ダルーハの鳩尾に拳をめり込ませたまま。ガイエルは声をかけた。

「……………おふくろ様に、詫びてこい」

「ふ……………死ねば、レフィーネに会える……………などと、思っておるのか……………」

ダルーハが呻き、笑う。

「死んだ者には、どうやっても会えはせんよ……………死ねば一緒になれる、などというのは女子供の夢想到過ぎん。だから俺は生きた。口うるさいレフィーネから解放されて、やりたいように生きたのだ……………」

…おい、勘違いするなよ小僧。俺はな、レフィーネに死なれてトチ狂ったわけでは断じてないぞ」

「……わかっている。おふくろ様は、あんたを束縛していた」

そしてダルーハは、その束縛を暴力で振りちぎろうとは決してしなかった。暴力も憎悪も、眠らせておく事が出来たのだ。

レフィーネが、生きている限りは。

ガイエルは拳に中心を押されて、赤色光の十字が輝きを増した。

光る真紅の十字が、そのまま裂け目になってゆく。

そんな状態で、ダルーハは無理矢理に笑った。

「……ガイエルよ。貴様がその馬鹿力で、何か……大いに残酷な事をしでかす、のを俺は見る事が出来ん。それが、いささか未練ではある」

「……あんたのように、か」

ガイエルは、己の脇腹に肘を打ち付けるようにして拳を引いた。

「俺以上の事を、だ……何しろ貴様は、俺よりも……あの赤き竜すら問題にならぬほど……残酷、だからな……」

ダルーハの身体が、4つに割れた。計8つの断面に、赤い光が塗り広げられている。

もはや声など出せる状態ではない。だがガイエルは、父の言葉を確かに聞いた。

「この世に災厄をもたらしながら……まあ、己の道とやらを往くがいい……」

4つの断片が、赤い光に灼かれて爆発した。

4カ所からの爆発光に照らされながら、ガイエルは振り向いた。

ティアンナが、いつの間にか渡り通路から下りて来て、そこに立っていた。

「ガイエル様……」

「礼を言わなければならんかな。貴女が重圧をかけてくれたおかげで、俺は勝てた」

「……お礼を言わなければならぬのは、私の方です」



「そんな事より、これからどうするのかを訊いても良いだろうか」  
ガイエルの方は完全に、これからやる事を失ってしまった。

「ティアンナ姫は、王族としての務めを充分に果たした。玉座などモートン王子に譲って、これからは自由に生きてみてはどうだ。もし望むなら」

ある期待を込めて、ガイエルは言ってみた。

「……貴女が欲しがる物は全て、俺が集めて差し上げる。俺のこの力があれば姫君よ、富貴栄華は王族以上、それでいて王族の責任義務などは伴わぬ生活を、貴女にさせてやれるぞ」

「……それでは、ダルーハ卿と同じではないですか」

ティアンナが苦笑した。

幼い頃のガイエルも、よく馬鹿な事を言っては、母レフィーネにこんなふうに苦笑されたものだ。

「殿方のそういう単純な思考を私、時々本気で羨ましく思います……まあ、それはそれとして」

こほん、とティアンナは咳払いをした。

「この度の戦で、ヴァスケリア王国は大いに荒れ果てました。王位をどうするかはともかく……私には、生き残った王族として為さねばならない事があります」

「……そうか」

ガイエルは、ティアンナに背を向けた。

「では俺は……もはや、貴女の傍に在るべきではないな。権力の近くに、俺はいない方がいい」

「……そうですね」

沈んだ口調で、ティアンナが同意する。

「私はきつと、ガイエル様に頼り過ぎてしまいます。貴方はきつと、何でも暴力で解決して下さるでしょうから……」

「するとも。俺は、残虐だからな」

ガイエルは歩き出した。とりあえず今は、ここにいる理由は何もない。

「俺は当分、この国にはいる。政情を見て、暴力でしか解決出来る事態であると判断したら……また貴女のもとへ馳せ参ずるとしよう。迷惑であろうが、な」

「正直言って、貴方を野放しにしてはならないという気もしますが……くれぐれも、どうか血生臭い事はなさらずに」

ティアンナの、声だけが追いかけて来る。

「心穏やかにお過ごし下さい、ガイエル様。貴方のその力で、平穏な暮らしを手に入れる事も出来るはずです」

「俺は平穏な暮らしなど望んでいない。俺が望むのは」

1度だけ、ガイエルは振り返った。

「今はこんなふうに格好をつけて立ち去ろうとしている俺だが……いつか気が変わって、貴女を奪いに来るかも知れんぞ」

ティアンナが傍にいてくれれば、自分はいくらでも平穏に暮らせる。荒ぶる残虐性を、いくらでも眠らせておける。

「……竜は姫君をさらうもの、だからな」

「ガイエル様……」

何か言おうとする少女の方をもはや見ず、ガイエルは歩き続けた。馬鹿な事しか言わない男だ、などとティアンナは思っているに違いなかった。

庭園にティアンナ女王を残して1人、歩み去るガイエル・ケスナ1。

こうして楼閣の上から見下ろし見送る1人の少女の姿になど、気付いてはいないようだ。

ひらひらとした黒い薄手のドレスを風にはためかせて佇む、黒髪の少女……ブラックローラ・プリズナである。

「ローラは今……猛烈に、感動しております……」

微笑みながら、ブラックローラは涙を拭った。

こんなふうに心の底から嬉し泣きをしたのは、何百年ぶりである

うか。否、生まれて初めての事かも知れない。

「滅びました……ダルーハ・ケスナーが滅びたのですわ……若君が、貴方様の御子が、やり遂げて下さいましたのよ……」

死んだ者は、何もしてくれない。悲しみもしないし、喜びもしない。

最も憎むべき敵ダルーハ・ケスナーがこうして滅びたところで、あの偉大なる御方が喜んでくれる事など、もはや有り得ないのだ。

それでもブラックローラは語りかけていた。永遠に失われてしまった偉大なる存在に向かって、熱っぽく。

「どうか御覧になって。ローラは必ず、御子様を導いて差し上げます。貴方様と同じ……貴方様以上の、災厄と混沌の道へと……まずはダルーハの最期をお喜び下さいな。そして御子様をお誉めになつて……我が主、赤き竜よ……」

## 第14話 再会

身体を鍛えた事など、なかった。

まともに剣を振るった事もなく、馬にも乗れない。

だからまず、自分の足で走る事から始めた。

少し走っただけで心臓と肺が悲鳴を上げ、脚が動かなくなった。

城の近くを流れる川のほとりに今、リムレオン・エルベツトは倒れている。

「ひい、はあ……はあ……あー……情けない」

運動のため薄い衣服を着た身体を、弱々しく川辺に投げ出し、どうにか呼吸を整える。

筋肉の薄い、痩せた脆弱な身体。肥満していないのが、せめてもの救いと言える。

リムレオン・エルベツト。17歳。金髪碧眼の整った顔立ちが、余計に弱々しさを感ぜさせる。

祖父レミオル・エルベツト侯爵は、こんな孫とは似ても似つかぬ、勇猛な騎士として知られた人物だった。若い頃に戦功によってここメルクト地方の領主となり、妻を娶って2人の子をもうけた。

息子のカルゴと、娘のマグリアである。

仲の良い兄妹だった。近親相姦を疑われるほどにだ。

不安を感じたのであろうレミオル侯爵は、半ば強引に嫁を迎え入れてカルゴと結婚させ、マグリアの方は国王デイン・ザナード3世に、側室として捧げてしまった。今から18年前。ヴァスケリア王国全体が、赤き竜による災禍から立ち直りつつあった時期である。

別離を強いられた兄妹が、父のこの仕打ちを酷いものと感じたのかどうかは、定かではない。

とにかくその1年後。カルゴと、強引に娶らされた妻との間に、リムレオンが生まれたのだ。

さらにその翌年には、マグリアが王宮で娘を生んだ。リムレオン

にとっては従妹に当たる、王女である。

地方領主以上の家格を持った貴族の女性が、王家へ輿入れした場合。その女性の旧姓は失われる事なく、生まれた王子や王女にも受け継がれてゆく。その王子なり王女なりが、どういう家柄の血を引いているのか。それを明確にするためである。

マグリアの産んだ王女は、ティアンナ・エルベツトと名付けられた。

十把一絡げな王族の1人として、いずれ政略結婚にでも使われるのだろう、と思われていたこの王女が。16歳の今は、ヴァスケリア1国を統治する女王である。

彼女がエル・ザナード1世として即位してから、そろそろ2ヶ月。今や女王陛下の従兄となったリムレオンは、しかし特にそれによる恩恵らしきものを受ける事なく、地方貴族の息子として相変わらず安穩とした日々を過ごしている。

ようやく呼吸が整ったのでリムレオンは上体を起こし、静かな川面を見つめた。

本当に、安穩としていた。

祖父レミオル侯爵はとうの昔に他界し、その子カルゴが侯爵となって跡を継ぎ、領主として現在メルクト地方を治めている。

息子であるリムレオンの目から見て、父カルゴ侯爵は、まあ名君と呼んでも良い領主ではあった。

ここメルクトでは、他の地方のように、少なくとも民が飢えて死ぬような事はない。領民の生活も税収も、安定している。領主の息子であるリムレオンも、実に安穩と暮らしていられる。

2ヶ月前、ダルーハ・ケスナーによる叛乱の際も、王国南西部のメルクト地方には何の戦禍が及ぶ事もなかった。ダルーハが挙兵したのは王国最北端のレドン地方においてであるから、蹂躪されたのは王都以北の諸地方だけなのである。

モートン・カルナヴァート第2王子の名において逆賊ダルーハ・ケスナー討伐令が布告された時にも、メルクト領主カルゴ・エルベ

ット侯爵は1歩も動かず1人の兵も派遣せず、日和見に徹した。

父がもし布告に応じていたら、馬にも乗れず剣も使えないリムレオンが、下手をしたら戦場に立たなければならなかったところだ。

草を踏む、柔らかな足音が聞こえて来た。明らかに、こちらに近付いて来ている。

「リム様」

声をかけられた。女の子の声だ。

いやしくも領主の息子であるリムレオンに、こんな親しげな声をかける少女など、1人しかない。

「こんな所にいたんだ……あんまりお城の外、出ない方がいいよー？ リム様、弱っちいんだから」

などと言いながら、その少女が、馴れ馴れしく隣に腰を下ろす。ふんわりとした明るい茶色の髪が、微かに揺れた。

10代の娘らしい、柔らかく瑞々しく起伏した身体を、黒いローブに包んでいる。その下には、鎖帷子を着込んでいるようだ。

右手で携えているのは、身長ほどの長さの杖である。その先端には、魔石が埋め込まれている。

シェファ・ランティ。17歳。1年ほど前から領主の城に仕えている、若手の攻撃魔法兵士である。その1年ほどの間に、リムレオンとはいつの間にか親しくなっていた。どちらかと言うとシェファの方から、一方的に。

愛らしく整った顔立ちが、少々いたずらっぽく微笑み、領主令息の顔を覗き込む。

「いくら世の中、平和になったからって……リム様、弱っちい上に可愛いんだから。襲われちゃうよ？」

「世の中平和に……か」

とりあえず微笑み返しつつ、リムレオンは呟いた。

地理的な理由でダルーハの叛乱に巻き込まれる事なく、ここメルクト地方は確かに平和だった。

が、あの叛乱がまだ続いていたとしたら、どうであったか。

メルクト地方は今頃、凶猛なダルーハ軍に蹂躪され尽くしているであろうか。

そうなる前に父カルゴ侯爵はダルーハに恭順の意を示していたか、あるいは遅ればせながらモートン王子の布告に応じて王国正規軍に与していたか。

何にせよ、のんびりとした日和見など許される状況ではなくなっていただろう。

結局カルゴ侯爵がいずれかの道を選ぶ前に、ダルーハは討たれ、叛乱は終息した。

エル・ザナード1世ことティアンナ女王自らの手で、逆賊ダルーハを討ち取った。という話になっている。

その真偽はともかく。メルクト地方の兵力など必要とする事もなくヴァスケリア王家は、かつての英雄による叛乱を鎮圧した。

となると、問題はその後。カルゴ侯爵をはじめ、ダルーハ討伐に協力しなかった日和見諸侯を、新女王エル・ザナード1世が扱うか。という事である。

「……いつもにも増して、景気の悪い顔してるわねえ」

リムレオンの顔をじっと見つめたまま、シェファは言った。

「悩み事？ 心配事？ まあ悩んでる若君ってのも絵になるとは思うけど」

「……まあ確かに、心配は心配かな。僕なんかが心配しても、仕方ないとは思うけど」

一瞬だけシェファと目を合わせ、リムレオンは答えた。

「エルベット家の……これからの事を考えると、ね」

「あたしは……間違ってたと思うわ、領主様のやり方。日和見して、正解だったと思う」

シェファの口調は、力強い。自分を元気づけてくれようとしているのかも知れない、とリムレオンは思った。

「だって結局、メルクトの戦力なんて必要なかったって事でしょ？」

「まあ、結果的にはね……」

「もし領主様が日和見してなかったら、必要ない戦争で犠牲が出たかも知れないのよ？ それにリム様だって戦場に出なきゃいけなくなってたかも知れない。弱っちくて可愛いリム様がよ。兵隊に襲われちゃったらどうするの」

「ど……どうしようかな」

「……ま、その時はあたしが守ってあげるけどね。リム様の事」

シェファは微笑み、リムレオンはただ曖昧な笑顔を返した。

そうしながら、思う。

（守ってあげる……か）

同じ事を、自分も言った事がある。

今はここにいない、もはや手の届かぬ存在になってしまった、1人の少女に対してだ。

10年近く前……リムレオンが8歳の時だから、9年前か。

叔母マグリアが王宮で病に倒れ、療養のためメルクト地方に里帰りして来た。7歳になる娘のティアンナを伴って、である。

マグリアは側室として、国王ディン・ザナード3世から、それなりの寵愛は受けていたようだ。

ゆえに正王妃や他の側室たちの妬み恨みを買い、様々な嫌がらせを受け、心労から病を得た。もともと身体の弱い女性であったようだ。

そして療養のための帰郷を国王に命ぜられたわけであるが、それが事実上の離縁に等しい事は、ティアンナが一緒である事からも明らかだった。

要するに母子共々、王都から追い出されたのである。後宮に波風が立つのを、ディン・ザナード王は嫌ったのだ。

とにかく。里帰りして来た妹と姪を、カルゴ侯爵は優しく迎え入れ、本当に慈しんだ。

叔母マグリアの、確かに田舎での療養が必要と思えるほど痛々しくやつれた、儂げな美貌もさる事ながら。リムレオンは初めて対面する従妹ティアンナの、美しい、という言葉すら軽くなってしま



ほどの美しさに、まず息を呑んだものだ。

母親と同じく儂げで寂しげな、それでいて頑ななほどの芯の強さを感じさせる、眼差しと顔立ち。

小さくたおやか、に見えて確かな強靱さを秘めた身体つき。

聞けば、その頃からすでに、剣士としての鍛錬を始めていたのだという。

ティアンナ・エルベツト。当時7歳。リムレオンより1つ年下でありながら、田舎で安穩と暮らしている従兄などとは比べものにならない苦難を王宮で味わい尽くし、芯の強さを育んできた少女だった。

そんな従妹の王女と、リムレオンは一緒に、メルクトの野山を駆け回って遊んだ。

戯れに剣の手ほどきを受けたりもした。もちろん相手になるはずもなく、リムレオンは容赦なく打ち負かされたものだ。

あの頃のティアンナは、本当に楽しそうだった。

儂げで寂しそうだった従妹の表情が、日に日に明るくなってゆく。それだけで、リムレオンは幸せだった。

体力のない従兄を引きずり回すようにして野山を駆ける娘の姿、を見守りつつ、マグリアも幸せそうにしていた。

そう。あの頃は本当に、皆が幸せだったのだ。

「ねえ、リム様」

シェファの声がリムレオンを、思い出から現在へと引きずり戻した。

「今の女王様……エル・ザナード1世陛下、だっけ？ 一体どんな人なの」

「……僕に訊くの？」

「だって、従兄妹同士なんですよ？ 女王陛下と」

シェファが、じっと見つめてくる。睨まれているように、リムレオンは感じた。

「領主様が、おっしゃってたわ。本当に仲のいい、従兄妹同士だっ

たって」

「また父上はいい加減な事を……」

仲が良かったと言っても、それはお互い幼かった頃の、ほんの一時期……1年、いや半年にも満たぬ短い間だけの事だ。女王として多忙を極める今のティアンナに、リムレオンの事など思い出している暇はないだろう。

里帰りから4ヶ月目、くらいであろうか。叔母マグリアが、療養のかいもなく帰らぬ人となったのだ。

彼女は、生まれ故郷であるメルクトの地で、永遠の眠りについた。最愛の妹を亡くしたカルゴ侯爵は、いささか見苦しいほどに嘆き悲しみ、葬儀の時には参列者の目もはばからず号泣していたものだ。対照的に1滴の涙も流さなかったのが、ティアンナ王女である。母を失ったその日から彼女は、元気に野山を駆け回る事もなく、1人でじつと遠くを見つめるようになった。

涙の1滴も見せず、誰のどんな慰めの言葉も拒絶して、ただ沈み行く夕日を見つめているだけのティアンナに。リムレオンは、声をかけた。

あなたは、ぼくが守る。何があっても守ってあげる、と。

(……何を言ってるんだろうなあ、僕は)

リムレオンは苦笑した。あの時の自分を、嘲笑ってやりたい気分だった。

「どんな人かと言えば……強い人さ」

リムレオンが守ってやる必要などないくらいに、だ。

ダルーハ・ケスナーの叛乱を鎮圧し、今やこの国を大いなる復興へと導きつつある女王ティアンナ・エルベツト……エル・ザナード1世。リムレオンごときが一体、いかなる力を貸してやれると言うのか。

あなたを守る、などと言ったところで結局、何も出来はしなかった。

マグリアの葬儀から数日後。王宮からの使者がメルクトを訪れ、

国王の命令を告げた。

第6王女ティアンナ・エルベツトは速やかに王宮へと帰還し、リグロア王国王太子のもとへ嫁ぐべし、と。

後宮に波風立たぬようにと追い出した7歳の王女を、国王デイン・ザナード3世は、政略結婚の道具として呼び戻したのである。

リムレオンは憤った。憤る以上の事を、しかし何も出来なかった。あなたを守る、などと言ったところで、所詮はそんなものなのだ。かくしてティアンナ王女は、使者に連れられて王都エンドウールへと帰って行った。

幼い従兄妹同士の至福の日々は、大人同士の、国同士の政治的な都合で、無惨にも断ち切られて終わりを告げたのだ。

それからしばらくリムレオンは、心にぽっかりと穴が空いたまま、虚ろな日々を過ごした。

が、ある時。心躍る知らせが届いた。

ティアンナ王女の輿入れがいよいよ翌日に迫った日の事である。彼女の嫁ぎ先であったリグロア王国が、隣国バルムガルドの侵攻を受けて滅亡したのだ。

これでティアンナは外国へ嫁になど行かず、またメルクトへ帰って来てくれる。

国が1つ滅びたと言うのに、あの頃のリムレオンは、そんな喜び方しか出来なかったのだ。

だが結局ティアンナは、その後も王都にとどまり、リムレオンの所へ戻って来てくれる事はなかった。

目の前を流れる川を、リムレオンはじっと見つめた。

お互い8歳と7歳だった幼き日々。この川で、一緒に水浴びをした事もある。

ティアンナの裸を初めて見た男は自分だ、などという、いささか情けない自慢が胸の中にはある。

「ふうん……リム様ってば、やっぱり強い女がお好みなんだ」

そんな自慢を見透かしたかのような口調で、シェファが言う。

「弱っちい男って、そんなもんよねっ」

「な……何を怒ってるんだ？」

「別に怒ってない」

ぷいっ、とシェファが横を向いてしまう。腹立たしげな横顔が、可愛らしくはある。

その愛らしい表情が突然、引き締まった。

緊迫した顔で左右を見回しながらシェファは、魔石の杖を構えて立ち上がっていた。

「シェファ？ どうしたの……」

間拔けな声を出しながら、リムレオンはようやく気付いた。

幾つもの人影が、2人を取り囲んで立っている。

15、6人であろうか。いや、人ではなかった。人の体型をした、だが明らかに人間ではない生き物たちである。

粗末な腰布を巻いただけの、筋肉太りした男の身体。だが首から上は、豚である。牙を剥き、目を血走らせた、肉食の豚。

各々、何かしら得物を手にしている。大半は棍棒の類だが、剣を帯びた者も3、4匹はいる。戦場跡で拾ったもの、であろうか。

この世界には、魔物とか怪物とか呼ばれる危険な生命体が数多おり、その大部分が人間に害をなす。

そんな有害な生き物たちの中でも、特に低級でありふれた存在なのが、この豚の頭の男たち……オーク、と呼ばれる生物である。

彼らが人間に対し、どのような悪事を働くのかと言えば、まあ少し前のダルーハ軍と同じような事だ。殺し、奪い、女は犯す。

そんな凶行の餌食に、リムレオンとシェファは今、なろうとしているのだ。

「こいつらっ……こんな、お城の近くに出て来るなんて……！」

シェファが息を呑んだ。

確かにオークなど、メルクト地方でもめったに見なくなっている。リムレオンも、2、3匹が畑の作物を荒らして兵隊に捕えられたのを見た事があるくらいだ。

聞くところによると20年前、かの赤き竜が健在であった頃には、オークたちはその尖兵として、大いに人間を殺戮していたらしい。赤き竜がダルーハに討ち取られると同時に、オークのみならず怪物・魔物の類は勢力を失い、今に至るまで20年近くもの間、完全に鳴りを潜めていた。

それが今このように、領主の城の近くで徒党を組むほどに、動きが活発化しつつある。

原因があるとするれば、考えられるものは、ただ1つ。

(ダルーハ・ケスナーが、死んだから……?)

などと考えている場合ではなかった。

10数匹ものオークが、一斉に襲いかかって来る。

「ブヒッ! ブキヤアアアアッ!」

「ブキキキッ、ギヒイーッ!」

鼻息荒く喚き、目を血走らせ、棍棒やら剣やらを振り上げる。そしてリムレオンに、シェファに向かって、殺到する。

殺到して来るオークの群れに、シェファが魔石の杖を向けた。

「リム様、逃げて!」

叫びと共に、杖の先端の魔石が赤く発光し、その光が火炎に変わり、球形の塊となって撃ち出される。

1つ、2つ。流星のように飛んだ火球が、オークたちを直撃し爆発する。

3、4匹のオークが、吹っ飛びながら焦げて碎けて灰に変わった。が、3つ目の火球は出なかった。杖の先端の魔石が、赤い輝きを弱めてゆく。

「あ……れ……? そんな……」

その杖にしがみつきながらシェファが、へなへなど地面に座り込んでしまう。魔力が尽きた、ようである。

そもそも人間の持つ魔力などたかが知れており、攻撃魔法兵士というのは数を揃えてこそ真価を発揮する兵科なのだ。大勢を並べての火球や電撃の一斉射で、敵部隊を短時間で殲滅する。それこそが

攻撃魔法兵士の正しい運用である。

……というのは全て書物から得た知識であり、リムレオン自身が戦場に出て確かめた事ではない。戦場になど、出た事はない。

戦いなど、した事はないのだ。

怯んでいたオークたちの中から、特に大柄な1匹が、ニタニタと笑いながら進み出て来る。

劣情に血走ったその目は、シェファに向けられていた。

ローブの上から見て取れる瑞々しい曲線を、オークが視線で舐め回す。

「な……何よ、ちょっと……」

座り込んで立てないまま、シェファが後退りをする。

可愛らしく怯えたその声が、リムレオンの身体を、勝手に動かしていた。

「やめろ……お……!」

精一杯の声を絞り出し、大柄なオークへと突進して行く。戦った事のない自分に出来る戦いなど、これしかない。

貴族の少年の細い身体が、オークの巨体に激突する。

いや。リムレオンの体力では、激突などという激しい形にはならず、何やら抱きついたようにしかない。

あっさりと、引き剥がされた。オークが馬鹿力でリムレオンの細身を、衣服を掴んで振り回し、放り捨てる。

掴まれた衣服が、破けた。

上半身裸になったリムレオンの身体が、草むらに倒れ伏す。

「リム様!」

シェファが悲鳴を上げた。

彼女を襲おうとしていたオークが、とりあえずそれを中断し、リムレオンの方に歩み寄って来る。筋肉の薄い少年の、ほっそりした裸の上半身に、ギラギラと見入りながらだ。

先程までシェファに向けられていた欲情の眼差しが、今はリムレオンに向けられていた。

「お……男でも、いいのか？　僕でも、いいと言うのか……」

リムレオンは草むらの上でなよなよと上体を起こし、薄い胸板を、小さな乳首を、オークの劣情の視線に晒した。

「それなら僕を……す、好きにするといい。その代わり、シェファに手を出すな」

「ちよっと何言ってるの！」

座り込んだままシェファが叫ぶ。が、彼女とて他人の心配をしている場合ではなかった。

他のオークたちが、いくらかは攻撃魔法を警戒しつつも、じりじりとシェファに群がりつつある。豚の顔面に、下卑た欲望の笑みを浮かべながらだ。

「やめろ！」

リムレオンは叫んでいた。

「僕が、お前たち全員の相手をしてやる！　その……満足、させてやるから！　シェファに手を出すな！」

「駄目！　そんなの！　絶対ダメええええっ！」

シェファの絶叫に応えるかの如く、その時。

馬蹄の響きが、近付いて来た。

しゃっ……と刃が鞘走る音も、聞こえた。

聞こえた、と思った瞬間。白い光が一閃した。

リムレオンに迫っていた大柄なオーク。その首が、高々と宙を舞った。

小柄な人影を乗せた白い馬が、この場に突っ込んで来たところである。

2つ、3つと、オークの生首が宙を舞う。首の失せた屍たちが、よろめき倒れてゆく。

馬が白ければ、騎手も白い。純白のマントに、小柄な細身をすっぽりと包んでいる。

そのマントが馬上で軽やかにはためく度に、同じく白いものが、弧を描いて閃いた。

長剣だった。細い両刃の刀身が、白く発光している。その白色光が、たやすく折れてしまいそうな細身の長剣に、人間大の生物を叩き斬れる強度を与えているようだ。

光り輝く斬撃。オークたちが棍棒を振るう暇もなく1匹また1匹と倒れ、倒れた身体からコロコロと生首が分離する。

「あの光……攻撃、魔法……？」

シェファが呆然と呟いた。

尻餅をついた彼女の近くで、白馬が蹄を止める。

オークたちは、もはや1匹残らず死体に変わっていた。

白衣の騎手が、ふわりと馬上から下りて着地した。純白のマントが舞い広がり、隠されていた身体が露わになる。

若い娘だった。少女、と言っていていいだろう。

青い、まるで下着のような鎧を、胸と腰に巻き付けた半裸身。細い。が、ただ痩せているだけのリムレオンとは違う、しなやかに鍛え込まれた女剣士の肉体だ。

白く輝いていた長剣から、ゆっくりと光が失せる。

単なる細身の刀身に戻ったその刃を、少女剣士がスラリと鞘に収めた。柄と刀身の間に、魔石がはめ込まれているようだ。

「弱いのに無茶をする……のは相変わらずね、リムレオン」

そんな言葉と共に、フードの中からサラサラと光が溢れ出す。

金髪だった。光をまき散らすかのような、金色の髪。

見た事がある、とリムレオンは感じた。この幻惑的な金髪を、自分がかつて見た事がある。

フードの下から現れた、眼差しと顔立ちもだ。

儚げで寂しげな、それでいて頑なほどの芯の強さを感じさせる美貌。

今はそこに、一筋縄ではゆかぬ、したたかさのようなものも加わっている。

「……ティアンナ……？」

この国の女王である人物を、リムレオンは思わず、呆然と呼び捨



てにしてみました。

そうしてから、自分の姿に気付いた。たくましさの欠片もない、貧弱な裸の上半身。

あなたを守る、などと言っておきながら、鍛えてもいない身体。

細い両腕で肩を抱くようにして、リムレオンは己の裸身を隠した。9年ぶりに会う従妹と目を合わせる事が出来ず、俯いた。

「隠す事はないでしょう、リムレオン」

ティアンナは微笑んだ。

非力な従兄を引きずり回して野山を駆けていた頃と、全く変わらない笑顔だった。

「誰かを守ろうとする、殿方の裸……とっても素敵よ？」

## 第15話 竜の指輪（前編）

メルクト地方は、ダルーハ・ケスナーの叛乱にも巻き込まれず、そしてそれ以前から、平和で治安の良い土地として知られていた。が。やはり若い娘が人気のない場所を1人で歩いていれば、こういう輩が現れるものだ。

「いよう、姉ちゃん。いくらだい？」

「おお、尼さんじゃねえか。って事あ……へっへへへ、哀れな子羊どもにタダで、そのたまんねえーカラダ恵んでくれるってワケだあなあ？」

「子羊っつーか狼だけどなあゲへへへ」

風体の悪い、5人の男。

山賊や強盗、ですらない。町から町へとうろついている、ゴロツキどもだ。

メルクト地方の、少々さびれかけた街道である。

ゴロツキどもに囲まれているのは、まだ少女とも言える年頃の娘だった。

たまらない身体と評された、確かに凹凸のくつきりとした魅惑的な肢体を、唯一神教の法衣で禁欲的に包み込んでいる。

ベールから溢れ出した長い髪は、眩い銀色で、光の当たり方によつては白髪にも見えてしまう。

が、美貌は若々しい。滑らかな頬は瑞々しさに満ち、眼差しは強く、顔立ちの整いようは、しかしどこか冷たいものを感じさせる。

名はメイフェム・グリム。

王都エンドウールの唯一神教会中央大聖堂で、かつて聖職を務めていた。

今は、こうして旅をしている。そして確かめている。

人間という生き物が、いかに神の慈悲を受けるに値せぬ存在であるのかをだ。

「狼……ですって？」

メイフェムは、とりあえず微笑んでやった。

「せいぜい野良犬ね、お前たちは。もう少し日の当たらないところで、残飯漁りでもしていなさい」

「……つくうゝ、来た来たキタあああ！ 俺こーゆう女イジメんの大好き！」

ゴロツキの1人が、掴みかかって来る。

掴みかかって来たその手に、しゅるっと何かが巻き付いた。ミミズあるいはヒルに似た、奇怪な虫……いや、触手である。

「な……んだっ、コレ……！」

同じ触手が3本、5本と、ゴロツキの全身に絡み付く。

がんじがらめに拘束されたゴロツキの身体が、じたばたと暴れながら、やがて宙に浮いた。浮かべているのは、

「やっぱダメだあ……男の身体にコイツを巻き付けたって、面白くも何ともねェー」

甲冑に身を包んだ、騎士姿の男である。

その全身鎧の、あちこちの隙間から、大量の触手がニョロニョロと溢れ出して伸び、ゴロツキ1人をぐるぐる巻きに束縛し、宙に持ち上げているのだ。

明らかに人間ではないものの肉体を全身甲冑で隠した、その男に。メイフェムは、冷たい視線と言葉を投げた。

「……ついて来い、と命令した覚えはないわよ？」

「ついて行かって命令されちゃったんでさあー、ゴルジ様によォ」  
答えながら男が、触手の拘束力を強めたようだ。

宙に浮いたゴロツキが、潰れた悲鳴を漏らす。その全身に、触手が食い込んでゆく。

首が、ちぎれた。手足が、ねじ切られた。胴体が締め潰され、内臓を噴出させる。

肉の残骸と化したゴロツキの屍が、びちゃびちゃと落下する。  
血まみれの触手を、男は、残り4人に向けた。

「ああーやつぱ男をイジメ殺したって面白くも何ともねエー。ちやつちやと皆殺しにさせてもらうぜええ」

「わわ……ひいっ……」

「な、何だこのバケモノ……」

逃げ腰になりつつも、ゴロツキの1人が短剣を構えた。

構えたその手が、ちぎれて飛んだ。悲鳴を上げようとした顔面が、潰れて散った。

触手が何本か、鞭のようにヒュヒュンツと一閃したのだ。

残り3人となったゴロツキたちは、すでに背を向けて逃げ出している。

「待てやあーコラア！」

鎧の男が、ひゅん……っと触手をうねらせ振るう。

最も逃げ足の遅い1人が、転倒した。首から下の身体だけがだ。

ちぎれた生首は、高々と宙を舞っていた。

残る2人のゴロツキは、立ち止まっていた。と言うより捕獲されていた。いつの間にか眼前に立ち塞がる、1人の男によってだ。

巨漢だった。大型のフードと広いマントで、顔も身体もすっぽりと覆い隠している。

そのマントがばさりと広がり、ゴロツキ2名を包み込んでいた。

人間2人をマントの内側に抱き隠したまま、巨漢はくると背を向けた。

彼の肉体の前面で何が起こっているのか、メイフェムの方からは見えない。

とにかく、くぐもった絶叫が2人分、聞こえてきた。ジュクジュクと、湿っぽいものが蠢くような音と一緒に。

男の肉体がマントの下で蠢く音、だった。

ゴロツキたちの悲鳴が、その音に吞まれ、消えてゆく。

「まっ……ずううい、コレ……」

男の巨体が、メイフェムの方を向いた。人体2つを包み込んで膨らんでいたマントが、平らになっている。

「男、まづうい……生ゴミの味がするう……」

「そう……蠢く生ゴミのようなものね、この世の人間たちは」

口調冷たく、メイフェムは同意してやった。

そうしながら、ゴロツキたちの屍を見下ろし、眺め回す。

（こんな連中を守るために、私たちは死ぬ思いで戦った……ケリスは、本当に死んだ……こんな連中を、守るために……っ！）

「んー……でもなア。こいつらの気持ち、わからねエーでもねえんだなあコレがよおー」

鎧の男が、ゴロツキの生首を1つ、触手を巻き付けて拾い上げた。  
「こいつらあよー、本当にあんたとやりたがってたんだよメイフェムさん……だだだからコイツらの代わりに俺がよおーゲへへへへへ」

「アンタ、美味そう……おっ俺もアンタの、いろんなトコしゃぶりたいいいい……」

甲冑姿の男とマント姿の巨漢が、左右からメイフェムに迫ろうとする。

この者どもも、同じだった。守る価値も救う価値もない人間たち。人間をやめる事で、その救いような下衆ぶりが、究極の域にまで達してしまったようである。

使い捨ての手駒として、それなりに有用な者どもではあるが、あまり無礼を働くようであれば別に殺してしまっても構わない……

メイフェムがそれを実行に移す、よりも早く、気配が生じた。そして声。

「やめておけ……人間ではないものに生まれ変わった、ばかりで死にたくはなからう？」

大量の血を思わせる、暗い赤色のローブ。両目と口にだけ裂け目の入った、白い仮面。

そんな奇怪な出で立ちの男が、いつの間にかそこに立っている。

鎧の男が、触手をビクツと震わせて硬直し、恐れおののいた。

「ご……ゴルジ様……いい、いつからそこに居たんスカあー」

「その気になれば私はいつでも、どこにでもいる。悪口を言う時などは気をつけるのだな」

仮面の男……ゴルジ・バルカウスが、冗談にしては愛想のない口調で言う。

この男に関する詳しい事を、メイフェムは知らない。知ろうとも思わない。

思惑がどうであれ、自分に力を貸してくれている。今は、それだけでいい。

「……あまり、お1人で出歩かぬ方が良い。メイフェム殿」  
ゴルジが言った。

「無論、1人で歩いている貴女をどうこう出来る者など、そうはおるまいが……今は怪物がうろついておる。我々など問題にならぬほど、恐ろしい怪物がな」

「……ダルーハを殺した、怪物……」

メイフェムは呻いた。

現女王エル・ザナード1世が直々にダルーハを討ち取った、などという話を無論メイフェムは信じていない。あの男が、人間の小娘などに殺されるわけではないのだ。

腑抜けのヴァケリア王国軍に、ダルーハ・ケスナーを倒せるほどの戦士がいるとも思えない。

ダルーハを戦いで殺せる者が、いるとしたら。

「そう……怪物だ」

ゴルジが言った。

「先頃の戦においてエル・ザナード1世女王が、怪物……としか呼びようのないものを使役していたのは、どうやら間違いないようだ。ダルーハの使っていた魔獣人間が、その怪物によってことごとく倒されている」

問題は1つ。その恐るべき怪物が、今もまだエル・ザナード1世に力を貸しているのか。彼女の身に危険が迫れば、また現れるのか。ダルーハを殺すほどの怪物を、エル・ザナード女王は今もまだ配下

に従えているのであろうか。

それを、まず確かめなければならない。メイフェムは訊いた。

「ゴルジ殿……エル・ザナード1世がメルクト領主の館に滞在しているというのは、確かな情報なのでしょね？」

「単身、お忍びのような形でな。何を考えているのかは知らんが無謀な事だ。あの女王に、試しに危害を加えてみるのであれば、今が好機とは言える。メイフェム殿が自らおやりになる、つもりであったのだろうか……まあ、そんな事はこやつらに任せておくのだな」

「そ……その女王様っての、ヤツちゃっていいんスカあー？」

鎧の男が、マントの巨漢が、おぞましく悦び始める。

「お、俺、見たコトあるうう……今この国の女王様あ、すっげえ可愛いオンナの子おお……」

「おおおお、オッパイちっちゃーのがたまんねえよなあああああ」  
「しししゃぶる、俺しゃぶる、可愛いおっぱいも何もかもジュールジュールしてしゃぶるうう……」

メイフェムは思う。

人間の、醜悪なる本性が、目に見える形となったもの……それが、この魔獣人間という存在であると。

唯一神に見放された、この人間という下劣でおぞましい生命体には、魔獣人間という生き方こそが最もふさわしいと。

「人間など……片っ端から、魔獣人間に造り変えてしまえばいいのよ」

「無茶を言っては困るなメイフェム殿。魔獣人間には適性というものがある。誰でも彼でも成れるわけではないのだよ」

言いつつゴルジが、仮面の内側で、熱っぽく溜め息をついた。

「それにしても、ダルーハ・ケスナーを倒した怪物……複数の魔獣人間を、ことごとく狩り殺した怪物。一体いかなるものであるのかに興味が尽きぬ。やはり魔獣人間であるのか？ であるならば、どこ何者が造り上げたものか……会いたい。怪物にも、それを生み出したる創造主にも」

魔獣人間ではないだろう、とメイフェムは思っている。魔獣人間  
ごときに、ダルーハが殺されるはずはない。

もともと人間離れしていた男が、あの戦いの最後の最後、竜の返  
り血を浴びる事で人間ではなくなり、魔獣人間など問題にならぬほ  
どの怪物に生まれ変わったのだ。

そのダルーハを、戦いで打ち負かし、殺せる者。

思い当たるものがメイフェムには、ないでもない。

あの時、救出されたレフィーネ王女が、その身に宿していた命。

（お前の血が……この世に残ってしまった、という事なの？）

かつて最大の敵であった存在に、メイフェムは心の中で語りかけ  
た。

（それも良いかも知れないわね。私も、今なら……人間を憎み虐げ  
た、お前の気持ち……今なら、わかるわ。最強にして最凶なるも  
の……赤き竜よ）

メルクト地方領主カルゴ・エルベツト侯爵は、現在38歳。

金髪碧眼の頼りなく整った顔に、あまり似合っていない髭を生や  
している。

息子リムレオンと比べて体格はいくらか立派だが、武芸の類には、  
やはりあまり縁のない人物である。

そんなカルゴ侯爵が、城の門前広場で、身を投げ出すように平伏  
している。

「こっ……これは女王陛下、突然に……よもや、このような突然な  
るお越しを」

声が震えている。舌も、うまく回っていないようだ。

無理もあるまい、とリムレオンは思う。

逆賊ダルーハ・ケスナー討伐の戦に、メルクトからは結局、1人  
の兵士も出さなかったのだ。

女王直々に日和見の罰を与えに来た、などと父は思っているのだ



ろう。

ティアンナは片膝をつき、そんな侯爵の肩に優しく手を触れた。  
「お顔を上げて下さい伯父上。本日は女王としてではなく、貴方の姪として帰って参りました。この懐かしいメルクトの地に」

「へ、陛下……この度は、このたびはあ……」

畏れおののくカルゴ侯爵に、それ以上は言わせず、ティアンナは口調をさらに優しくした。

「ダルーハ卿にあそこまでの暴虐を許してしまった、ヴァスケリア王家の無能・無力……それを棚に上げて、誰かを責めようとは思いません。ですから、お顔をお上げになって？ 伯父上」

「陛下……」

カルゴ侯爵が、ようやく顔を上げた。泣き顔だった。

「ティアンナ様……ご立派に、なられて……」

かつて近親相姦を疑われるほどに仲の良かった最愛の妹、の面影をカルゴ侯爵は、姪である女王に見出しているのかも知れなかった。城から飛び出して来た侯爵を追うように、もう1人、こちらへ歩み寄って来ている人物がいる。

「……あまり感心しませんわね、陛下」

いささか太り気味で健康そうな、中年女性である。

「お1人で、このような所に来られるなんて。今や大切なお身体なのですから、軽はずみな行いは謹んでいただきませんと……誰よりも、国民が迷惑いたしますわ」

カルゴ侯爵の妻でリムレオンの母親、ヴァレリア・エルベツト侯爵夫人である。

メルクトの前領主レミオル侯が、息子カルゴのために半ば無理矢理、迎え入れた嫁。実家はメルクトの北に隣接するサン・ローデル地方で、その現領主バウルフアー・ゲドン侯爵が、ヴァレリアの兄である。

「ごめんなさい。伯母上のお叱りが懐かしくて、帰って来てしまいました」

ティアンナは1度、微笑んだ後、表情と口調を重くした。

「……伯母上には直接、申し上げなければならぬ事があります。私は」

「おやめなさいな陛下。女王ともあろう御方が、お気になさる事ではありません」

ヴァレリアも微笑んだ。苦笑、に近い笑みだった。

「愚かな甥でしたわ……甘やかして育てた、兄が悪いのです」

ダルーハ・ケスナー討伐戦の際。バウルファー・ゲドン侯爵の息が、王国正規軍の陣中において、軍規違反の罪で処刑された。という話はリムレオンも聞いている。手を下したのがティアンナ自らである、という話も。

「……それより、お気をつけ下さい陛下。兄は、根に持つ人間ですから」

「御子息の仇を、討とうとなされる？　でしたら直接、お相手して差し上げたいところですが……」

言いながらティアンナは軽く、天を仰いだ。

人を殺す、というのがどういう事なのか、リムレオンには想像もつかない。

人の上に立つ者となれば、命令1つで誰かの命を奪わねばならぬ事もあるだろう、と理屈ではわかるのだが。

先程、オークの群れから自分たちを救ってくれた時のティアンナの戦いぶりを、リムレオンは思い返した。

木偶人形でも切り倒すようにオークたちを殺戮してのけた、少女剣士の姿。

あんな事が出来るなら人間も殺せるだろう、とは思える。

（僕が安穩としている間……ずっと戦ってきたんだ、ティアンナは……）

「領主様……」

リムレオンの隣からシェファが、ふらふらと進み出て言った。泣きそうな声だった。

「あたしを……クビに、して下さい……」

「急に何を言い出すのだシェファ」

カルゴ侯爵が、続いてヴァレリアが言った。

「リムレオン……お前が何か、意地悪をしたのではないでしょうね」

「ぼ、僕は何も」

「リム様のせいじゃありません！」

シェファは叫び、泣き出した。

「あたし役立たずです、リム様を守れなかったんです……リム様が、あたしのせいで危険な目に……」

「ど、どんな目に遭ったと言うのだ」

「言えませんかそんな事！ 言えるワケないじゃないですかああああ  
！」

カルゴ侯爵の問いに答えられぬまま、シェファは滝のように涙を流した。

「な、泣くなよシェファ」

リムレオンはとりあえず、なだめに入った。

「結果的に2人とも助かったんだから……何事もなかったんだから、いいじゃないか」

「……一体何があったのだ、リムレオン」

カルゴ侯爵が訊きながら、息子の上半身裸の姿を、まじまじと見つめた。

「お前……まさか男に襲われたのではあるまいな？ いつか、そんな事が起こるような気はしていたが」

「まあ、似たようなものですけど」

リムレオンは1度、咳払いをした。そんな事よりも、領主に報告しておかなければならない事がある。

「……父上、領内にオークが入り込んでおります」

「オークだと……」

「ここだけではありませんよ、伯父上」

ティアンナが言った。

「赤き竜の残党と思われる魔物たちが、王国各地で勢力を盛り返しているのです。恐らくは、ダルーハ卿の死に呼応して」

一瞬だけ、ティアンナの目がリムレオンの方を向いた。

「リムレオンは勇敢に戦いました……戦わなければならない時なのです、伯父上」

「軍備の増強を、という事ですわね陛下」

言ったのは侯爵ではなく、ヴァレリアだった。

「領内に魔物が現れてしまう以上、もはや先の戦のような日和見は許されないと……ですが陛下、軍備にはお金がかかるのですよ？メルクトも決して豊かというわけではありません。先代の陛下が、お金遣いの荒い御方でしたからねえ」

前国王ディン・ザナード3世は、ダルーハでなくとも誰かが叛乱を起こしていただろう、と言われるほどの重税を、王国全土に課していた。

過酷な徴税の命令と、苦しむ領民との間で、カルゴ侯爵はずいぶんと苦勞を強いられていたものだ。

そのディン・ザナード3世の後継者である若き女王が、それでもあまり悪びれた様子もなく応える。

「もちろん王家としても出来る限りの事はいたします……今ヴァスケリア王国を脅かしているのは、お金がないからと言って手心を加えてくれるような、優しい敵ではありませんから」

こんな事を言いに来たのではないだろう、とリムレオンは思った。確かに大事な事なのだろうが、多忙な女王が直々に足を運んで地方領主に伝えなければならぬ、ほどのものでもない。軍備増強の命令なら、布告で済む。

「……おっしゃる通りですわね。泣き言を申し上げても意味はありません、か」

言いつつヴァレリアが、泣きじゃくるシェファの背中を優しく撫でた。

「というわけだから泣くのはおやめなさい、シェファ。貴女が気に

病む事ではありません。リムレオンは少し、危険な目に遭った方が  
良いのだから」

母の容赦ない言葉と眼光が、リムレオンに向けられる。

「お前もお前。男なのだから、自分の身はそろそろ自分で守れるよ  
うになりなさい」

「は、はい」

頼りない返事をしつつもリムレオンは、別の事を考えていた。

女王エル・ザナード1世は一体何のために、こうして2度目の里  
帰りを、単身で決行したのであろうか。

（僕を助けに来てくれた……というわけではないだろう？ ティア  
ンナ……）

王宮という場所には本当に、顔の醜い人間たちしかいなかった。  
どちらかと言うと、男よりも女の方が醜かった。とティアンナは  
思う。

あらゆる女たちが、母マグリアに対する嫌がらせしかなかった。  
物心ついたティアンナがまず思ったのは、母を守らなければ、と  
いう事だった。

母に嫌な事をする女たちを、懲らしめてやりたい。ティアンナは、  
そう思った。

そんな時、1人の、王宮に勤める人間にしては顔の醜くない男性  
に出会った。年配の、近衛兵だった。

ティアンナは彼に、剣技の基本を教わった。

母に嫌がらせをする女たちを懲らしめるには、まず自分が強くな  
るしかないと思ったからだ。

今にして思えば、それはまさに暴力への渴望だった。

母上を守りたい、それは立派なお心です。幼いティアンナに剣を  
教えながら、その近衛兵は言った。

しかし姫様。母上に嫌な事をする女性たちに剣で仕返しをしよう、

などと思っではいけませんよ。そんな事をしたら貴女が、それに母上が、さらなる仕返しを受けてしまいます。そうなったら貴女はまた仕返しをしたいとお思いになるでしょうね。きりがなくなってしまう。それはとても悲しい事なのです、姫様。

同じような事を、母マグリアにも言われた。ティアンナ、お前はとても強くて勇敢な子。そして優しい子。だけど私のために強くなりたい、などと考えては駄目よ？ 私のために誰か他人を傷付けようなんて、考えては絶対に駄目。そんな事をしたら私も悲しくなるし、お前も悲しくなるわ。悲しい思いをしてから、では遅いのよ……

2人のそんな言葉の意味を、ティアンナが何となく理解したのは。マグリアを特に目の敵にしていた正王妃が、馬車の事故で亡くなった時である。

母に嫌がらせをする女性たちの中でも1番の有力者が、死亡したのだ。ティアンナにとっては喜ぶべき事、のはずだった。

喜ぶ前にティアンナは、見てしまった。正王妃の屍にすがりついて痛々しく号泣する、1人の少女の姿を。

正王妃が生んだ、ティアンナにとってはろくに口もきかぬ姉の1人に過ぎない、王女だった。

もしも死んだのがマグリアであつたら、自分もあんなふうに大泣きするのだろう。その時は、ティアンナはそう思った。

だが結局、1滴の涙も出なかった。

ただ、何を食べても味がしなくなった。か弱いリムレオンを引きずり回して野山を駆けても、楽しくなくなった。

「久しぶり……お母様」

こぢんまりと可愛らしい墓石に、ティアンナは声をかけた。

メルクト領主の城、その庭園の片隅に立てられた、小さな墓である。

ティアンナは微笑みかけ、声をかけた。

「信じられる？ お母様。私……今、女王なのよ。この国の」

後宮の一角で母子2人ひっそりと暮らしていた頃には、全く思っ

てもいなかった事態である。

いずれ政略結婚にでも使われるのであろう、とは思っていた。

平民の子供とは違う。少なくとも食べるのに不自由はない、そこそこは着飾る事も出来る生活をさせてもらっているのだから、せめて自由のない結婚くらいは我慢して受け入れようとティアンナは思っていた。

どこかの国の王に嫁ぐ、事にはなるかも知れないにせよ。自分が王になる事など、全く考えてはいなかったのだが。

私たちは王国の民が納めてくれるもので安穩と生きていられるのだから、自由のない結婚くらいは我慢しなければ駄目よ。

そう語っていたのは母マグリアで、彼女自身、父レミオル侯爵に命ぜられるまま国王ディン・ザナード3世の側室となった。

そこそこの寵愛は受け、そのため他の女たちの嫌がらせを受けたわけであるが、それだけが原因ではないだろう。王侯の暮らしというものが、そもそも身体に合っていなかったに違いない。

マグリアは病に倒れ、療養を命ぜられ、娘ティアンナを連れてメルクトへと帰郷した。

そして療養のかいもなく今こうして、生まれ育った小城の庭園で眠っている。

「あれから、いろいろな事があったわ……私もね。お母様と同じで、お嫁に行かされそうになったの」

母の死後、数日も経たぬうちに7歳のティアンナは、隣国リグロアの王太子のもとへ輿入れする事になった。

が、輿入れの前日。リグロア王国は、大国バルムガルドの侵攻を受けて滅びた。ティアンナの夫となるはずだった王太子の生死は、今なお不明である。

ともかく。リグロアを併呑したバルムガルド王国の次なる標的はこのヴァスケリアで、国境での小規模な戦が何年も続いた。

だが最近ようやく和平が成立し、お決まりの政略結婚が行われた。ヴァスケリアから王女が1人、バルムガルド王家に嫁いだのである。

る。指名されたのはティアンナではなく、第4王女のシーリン・カルナヴァート。第2王子モートンの、同腹の妹だ。

こうしてヴァスケリアと血縁を結んだバルムガルドは、先頃のダルーハ・ケスナー叛乱の際にも、忠実に同盟を守ろうとはしてくれた。ダルーハ討伐のため、3万もの援軍を派遣してくれたのである。その3万が、ダルーハ軍の猛将ドルネオ・ゲヴィンによって撃退され、同盟のいかにもなくヴァスケリア王都エンドウールは、ダルーハの手に落ちた。

ティアンナ自らが軍勢を率いてダルーハを倒し、王都を解放した。世間では、そんな話になっているらしい。

「私もね、思っていた時期があったわ。お母様みたいに殿方の言いなりになって生きるのは嫌だ、なんて……」

母の小さな墓標に、ティアンナは苦笑を向けた。

「だけどね、思い知らされたわ……強い殿方にすがって生きるのが、どれほど楽か。どれほど便利で、何の苦労もなくいられるか」

それを教えてくれたのは1人の、人間ではない若者だった。

ダルーハの叛乱は、ほとんど彼が1人で鎮圧してくれたようなものだ。ティアンナは、何もしていない。

（ガイエル様……）

心の中で、そっと名を呟いてみる。

母も、それにあの年配の近衛兵も、幼い頃のティアンナに優しく教えてくれた。力で何かやり返しても悲しいだけだ、と。

ケスナー家の父子は、今のティアンナに、強烈に教え込んでくれた。力による暴虐は、力による逆襲で叩き潰すしかない、と。

左手に握り込んでいるものを、ティアンナはじっと見つめた。

指輪である。蛇、いや細長い竜が、環を成している意匠だ。

これをはめると、指に小さな竜が巻き付いている感じになるだろう。

この指輪もまた、力である。ダルーハ・ケスナーとの戦いには結局間に合わなかった力。



幸か不幸か、この力が無駄になる事はなさそうな状況に今、この国はある。

ふと、ティアンナは気配を感じた。

気配を隠そうともせず、その少年は、近くの木陰から姿を現した。

「……ごめん。邪魔をしてしまったかな、母子水入らずの」

「私は、独り言を言っていただけよ」

ティアンナは振り向いた。

リムレオン・エルベツトが、いくらか遠慮がちに歩み寄って来る。

この従兄は昔から、何をするにも遠慮がちだった。そのくせ、先程のような無茶をやらかす事もある。

幼い頃から本当に、危なっかしくて目が離せなかった。

だからティアンナは、どこへ行くにも彼を引きずり回していたものだ。

「……立派になったわね、リムレオン」

1つ年上の従兄に、ティアンナはまるで姉のような言葉をかけていた。

「そんなに立派になるまで……本当、よく無事に生きていてくれたわ。弱いくせに死にそんな無茶ばかりする貴方が……ねえ、覚えてる？」

「な、何をかな」

「私を助けに来てくれた事があったでしょう。水遊びしている私を、溺れていると勘違いして……泳げない貴方が、川に飛び込んで溺れて」

ティアンナは笑い、リムレオンはうろたえた。

「おっ、覚えているわけがないだろう。そんなつまらない事」

「水死寸前の貴方を、私が助けてあげたのよね」

「……はいはい、感謝しておりますよ女王陛下」

いささか荒っぽく、リムレオンが己の頭を掻いた。そして息をつく。

「そんな他愛ない昔話をするためにメルクトへ帰って来た、のなら

嬉しいよ。昔話の相手くらいなら、僕にも出来るからね……だけど違うんだろう？ ティアンナ」

マグリアの墓前に跪きながら、リムレオンは言った。

「叔母上のお墓参り、とも違うような気がする。父上も母上も訊かなかったから、僕が訊くけど……ティアンナ、一体何をしに帰って来たの」

「……………」

ティアンナはすぐには答えず、ただ左手の中の指輪を見つめた。9年ぶりにこの地を訪れて、1つわかった事がある。それはリムレオンが全く昔のままだ、という事だ。

この従兄は、ティアンナが何か頼み事をすれば、絶対に無茶をする。凶暴なオークたちの面前に己の身を晒した、先程のように。

（……それを承知の上で帰って来たのでしょうか、ティアンナ・エルベツト）

己に、言い聞かせる。

そう。放っておけば平穩に生きてゆけるであろう1人の少年を、過酷な戦いへと引きずり込むために、自分はここに来たのだ。

「リムレオン、私は……」

ティアンナは口籠った。リムレオンは黙って、言葉の続きを待っている。

マグリアの墓前の空間が、重い沈黙に支配された。

それを、何者かが破った。

「……おおいいたいたあ。オッパイの可愛い女王様1人、どうでもいいの1」

騎士のような全身甲冑に身を包んだ男が1人、やかましく鎧を鳴らしながら、歩み寄って来ている。

この城に仕える騎士、ではない。どころか人間ですらないのは明らかだった。

全身鎧のあちこちの隙間から、何本ものおぞましい触手が溢れ出し、伸びうねっているからだ。

「だ……誰かな、君は」

間拔けな事を言っているリムレオンを背後に庇いながら、ティア  
ンナは魔石の剣を抜いた。

何者なのか、などと問う必要もない。これと同種の生き物を、何  
体も見てきたのだ。

「お前たちが……まだ王国内を歩き回っているとはっ！」

「おおー怒ってる睨んでる、そっそんな恐カワイイ顔で睨まれたら  
よォー、俺もお辛抱たまんねえーツつううううううの！」

男の全身で甲冑が壊れ、その破片がちぎれ飛ぶ。

大量の触手が暴れ出し、皮膜の翼が羽ばたいた。

石のような外皮に包まれた、一応は人型の生き物である。

カギ爪のある四肢、の他に一对の翼を背中から広げ、そして全身  
いたる所から、肉体を食い破った寄生虫のような触手を生やしてい  
る。

醜く歪んだ顔面の下半分を占める口が、牙を剥きながら言葉を発  
した。

「ヤツちゃっていいって、ゴルジ様もメイフェム殿も言ってたから  
よォー。やややややってやんぜえー女王様ああ！ こっこの魔獣人  
間ローパーゴイルがおめえをズツポズツポぐちゅぐちゅってよ  
おおおおおおお！」

「そう……ゴルジ殿にメイフェム殿、とおっしゃるのね。お前を造  
り出した方々の、お名前は」

それ以上の事は、どうやら戦って痛めつけて聞き出す、しかなさ  
そうである。

## 第16話 竜の指輪（後編）

ティアンナは、確かに胸が小さい。

その可愛らしい膨らみを精一杯、強調するかの如くキュツとくびれた胴の曲線が、本当に美しいとリムレオンは思う。

群がる触手を軽やかにかわしながら躍動する左右の太股も、すらりと引き締まって、健康的な色香を発散させている。

これで少しでも胸が大きくなったりしたら、この美しい均整が台無しになってしまうだろう。ともリムレオンは思った。

そんな従兄の、いささかよこしまな視線を受けながら、ティアンナが細身の長剣を振るった。

刀身の根元に埋め込まれた魔石が白く光り輝き、その光が細身の刃にまとわりついてバチバチッ！ と音を発する。

電光だった。

稲妻と雷鳴を発する斬撃が、マントのはためきに合わせてティアンナの周囲を薙ぎ、嫌らしくうねる触手の群れを片っ端から切断してゆく。

あちこちに切り飛ばされた触手たちが、パリパリと感電しながら弱々しくのたうち、干涸びて碎ける。

「ぎゃ……ヒッ……！」

魔獣人間ローパーゴイルが悲鳴を漏らし、後退りをした。

切られた触手の断面からバリバリと電光を流し込まれ、その異形の肉体が感電・痙攣している。

苦しげに四肢を震わせ、背中の翼をバサバサと暴れさせながら、ローパーゴイルは叫びた。

「ぐっ……ゴルジの野郎……メイフェムのクソ女……こっこんなに強えー嬢ちゃんだなんて聞いてねえぞおお……」

「その方々に関して、もう少し詳しい話を……ね？」  
にっこりと微笑みながら、ティアンナが踏み込む。

帯電する刃が突き込まれ、ローパーゴイルの身体のどこかを直撃する。

電光と火花を散らせて魔獣人間が後方によるめき、大木にぶつかり、ずり落ちて尻餅をついた。

そこへティアンナが、微笑みながら歩み迫り、電光をまとう魔石の剣を突きつける。

「お前のような、おぞましいものを造り出す研究と実験……一体どこで行われているのか話さない魔獣人間。黙秘は認めません」  
微笑みながらティアンナは激怒している、とリムレオンは気付いた。

にっこりと可愛らしい笑顔が、しかし思わず怖気立つほどの怒りの生気を孕んで、凄惨なまでに美しい。

魔獣人間というものを、リムレオンは名称だけは聞いた事がある。人間の肉体に、様々な怪物・魔物の細胞を植え付けて造り出す、生ける兵器とも呼ぶべき存在。

魔法と呼ばれる一連の技術の使用法の中で、特に禁忌とされるもの。であるらしい。

シェファなら、もう少し詳しい事を知っているかも知れない。

そのシェファが、叫びながら駆け寄って来る。魔石の杖を構えてだ。

「リム様！ 危ない！」

何が危ないのか、わかったのは直後だった。

「男……にしちゃあ、おめえ美味そう……」

ねっとりとし臭い息を、リムレオンは耳元に感じた。背後から、何者かが囁きかけてきている。

恐る恐る、リムレオンは振り向いた。

腐った顔と、目が合った。

グジュグジュと蠢く肉の中から、眼球がギョロリと現れ、黄色い歯がニヤリと剥き出しになっている。

大柄な腐乱死体が、フードを被ってマントを着ている。

そんな姿の怪物が、生臭い息と共に言葉を吐く。

「う、美味かったら全部食う……マズかったら捨ててブチまけるう……ち、ちょっと、しゃぶらせろやああ」

「リム様、思いつきり伏せて！」

シェファが叫びながら、魔石の杖をこちらに向けている。

向けられた魔石が赤く輝き、燃え上がる。

言われた通りリムレオンは、頭を抱えてその場に伏せた。

直後。シェファの構えた魔石から、球体状の炎が撃ち出される。

その火球が、伏せたリムレオンの頭上を通過し、マント姿の怪物を直撃した。

直撃を喰らった怪物の巨体が、激しく燃え上がりながら後方へと吹っ飛ぶ。

「コンのっ……！ リム様にっ！ 手を出すなああーッ！」

駆け込んで来たシェファが、リムレオンの横を走り抜ける。そして炎上しうずくまる怪物に、至近距離から魔石の杖を向ける。

「し、シェファ……あまり近付いたら」

危ない、というリムレオンの言葉も耳に入らぬ様子で、シェファは2発目の火球を怪物に撃ち込んだ。

燃焼、と言うより爆発に近い火力で、怪物の肉体が焼き払われる。灰が、舞い上がった。

それら灰を、炎もろとも押しのけながら、何かが立ち上がった。

「ああああ……ぬくい、ぬくい……」

大柄な、裸の腐乱死体である。

頑強な骨格にまわりついた赤黒い腐肉が、グジュグジュと、それ自体が不定形の生き物であるかのように蠢いているのだ。

灰になって飛び散ったのは、着用していたフードとマントだけだった。

「この……ッ！」

怯えながらもシェファは、気丈さと魔力を振り絞った。

至近距離から怪物に向けられた魔石が、真紅に輝き、3発目の火

球をぶっ放す。

爆発が起こった。凄まじい爆炎が、大柄な腐乱死体を包み込み、だがすぐに弱々しく消えてしまう。

蠢く腐肉が発する大量の湿り気が、火を消してしまったかのようだ。

「いたあ……ここにも、美味そうなオンナのおお……」

その腐肉が、荒波の如く巨大に膨れ上がって広がり、シェファを襲った。

「しっしやぶる、いろんなトコからジュルジュルしやぶるう……こここの魔獣人間スライムゾンビがあウジュジュジュジュ」

「きゃあああああああ！」

シェファが捕えられた。

ぐじゅぐじゅと汚らしく蠢く腐肉が、ローブの上から少女の全身にまわりつき、細い手足を絡め取る。

そしてティアンナより一回りは豊かな胸を苦悶に揺らす胴体へと、嫌らしく貼り付いてゆく。

「いっ嫌！ いやいやいやッ！ リム様あああああ！」

波打つ腐肉の中で、シェファの身を包むローブが、ぐっしよりと湿っていった。

瑞々しい身体の曲線が、濡れた布地をピッタリと密着させて際立った。

濡れたローブが、少女の身体からトロリと流れ落ちる。

シェファの全身で、服が溶けていた。ローブも、鎖帷子も、下着も。

「ひい……っ！」

シェファが青ざめた。

華奢な肩の丸みが、ほっそりとした脇腹が、柔らかな太股が。とろろ流れ落ちる衣服の下から、露わになってゆく。

「やめろ……！」

腐肉でシェファを捕える魔獣人間に、リムレオンは殴りかかった。

殴りかかる以外に、出来る事など考えつかない。こういうところが、ティアンナに「弱いくせに無茶をする」などと言われてしまう原因なのだろう。

そのティアンナが、叫んだ。

「リムレオン、これを！」

何かが放り投げられた。キラ……ツと光る、小さなもの。

殴りかかる動きを中断して、リムレオンはそれを掴み止めた。

指輪だった。細長い竜が環を成した意匠、である。

それを放り投げる際にティアンナが一瞬、迷ったのを、リムレオンは見逃さなかった。

その一瞬が、隙となった。

ローパーゴイルの触手が1本、高速で跳ねてティアンナを襲う。

「……！」

一瞬、反応が遅れたティアナの手から、魔石の剣が打ち飛ばされて宙を舞い、庭園のどこかに落ちた。

「うっしやしやしや調子ぶっこいてくれたなア女王様よおお！」

得物を失ったティアンナに、ローパーゴイルが調子づいて迫る。

襲いかかる何本もの触手を、ティアンナはとりあえず避けるしかなく、魔石の剣を探す暇もないまま後方へ跳びすさる。その足元を、ローパーゴイルの触手たちが、かすめて跳ねる。

魔獣人間の攻撃を自力でかわせるティアンナよりも、まず優先して助けなければならぬのは。

「うえへへへ……ま、まず服だけ溶かしてとお……」

「やめて……やめて！ やめてっ、やめてえええええええ！」

絡み付き蠢く、腐肉の群れの中。可愛らしく暴れるシェファの身体から、溶けた衣服がトロリと流れ落ちる。

白い果実のような瑞々しい胸の膨らみが、溶解した布地の飛沫をプルンツと跳ね飛ばしながら元気に揺れる。

「シェファ……！」

リムレオンの身体は、勝手に動いていた。



おかしな指輪を受け取ったリムレオンが、これをどう使えば良いのか。ゆっくり説明している暇もなくティアンナは、魔獣人間の触手を必死にかわし続けている。

指輪なら、とりあえず指にはめるものだろう。

リムレオンは右手の中指を、その竜の指輪に差し込んだ。小さく細長い金属の竜が、中指に巻き付いている感じになった。

全くの素手で殴るよりも、少しは相手に痛みを与えられるようになっただろう。

指輪をはめて、殴る。他に、出来る事などない。

リムレオンは踏み込んだ。そしてシェファを虐めている魔獣人間に、思いきり右拳を叩き付ける。

叫びながらだ。腹の底から怒りの叫びが迸り、喉が痛くなった。

これほど大きな声を発したのは、生まれて初めてかも知れない。

無論こんなふうに叫びながら殴ったところで、非力なりムレオンの拳が、魔獣人間に痛撃を与えられるわけがなかった。だが。

腐肉の飛沫が、飛び散った。

白い光が、リムレオンの眼前に広がっていた。

魔獣人間スライムゾンビの醜悪な肉体が、後方に吹っ飛ぶ。

腐肉がちぎれ、解放されたシェファが、草むらに倒れ込んで上体だけを起こす。裸身に溶けた布地が貼り付いた、あられもない姿のまま、呆然と見入っている。

右拳を突き出した姿勢で固まっている、リムレオンの今の有り様に。

突き出した拳の中指にはめられた、竜の指輪。から白色の光が発生し、空中に何かを描き出していた。

人間1人を包み込んでしまえるほどの、大型の真円。

その中で、様々な図形・記号・文字が、整然と円形に並んでいる。白い光をインクとして空中に描かれた、そんな奇怪な紋様が、何やら得体の知れぬ力を発してスライムゾンビを吹っ飛ばしたのだ。

「リム様……」

とりあえず助かったシェファが、己の裸身を隠す事も忘れ、呆然と呟いている。

何が起こったのかわからずにいる、のはリムレオンも同じだ。右拳を突き出した格好のまま、動けずにいる。

その拳を中心に空中へと広がった、円形の光の紋様が、白い輝きをパァッ……と強めてゆく。

「な……っ……」

息を吞むリムレオンを、白色の光が襲う。

竜の指輪から発生した、奇怪なる円形の紋様。それがリムレオンに覆い被さり、少年の全身を包み込んでいた。

白い光が、消えた。

円形の紋様が、リムレオンの身体に吸収される感じで、消え失せていた。

代わりに。右拳を突き出した姿勢の、騎士の姿が生じている。

白銀色の全身鎧が、リムレオンの身体を包み込んでいた。

頭から爪先に至るまで、肉体の露出は1カ所もない。

顔面も、裂け目の入った面頬で覆われている。

「こ……これは……」

拳を突き出した姿勢を、リムレオンはゆっくりと解き、己の全身を見下ろした。

がっしりと力強く豪壮な、金属製の全身甲冑。

屈強な騎士でもなければ着こなせないであろう、そんなものが。

屈強さとは程遠い少年の細身を、隙間なく鎧っているのだ。

そして、それが幻影であるかの如く、重さが全く感じられない。

その軽さは、不気味なほどだ。

腰には、長剣が吊られている。

指輪と同じく、細長い竜が巻き付いている感じに彫り込まれた鞘に、両刃と思われる刀身が収まっている。

完全武装の、騎士の出で立ちである。

「何……なんだ、これは……」

リムレオンのそんな疑問に、答えてくれる者はいない。

答えではなく、小さな悲鳴が聞こえた。

「きゃ……あッ」

ティアンナだった。

ローパーゴイルの触手が一閃し、彼女の胸元を打ち据えたところである。

下着のような胸鎧が、ちぎれて飛んだ。

小さいながら形良く丸みを保った左右の膨らみが、一瞬だけ露わになる。

ティアンナが、両腕で己の胸を隠した。

気丈な闘志に満ちた美貌に、初々しい赤みが昇る。

ローパーゴイルが狂喜した。

「おおおおオッパイおっぱい、夢にまで見た可愛いオッパイ！ 先  
つちよクリクリッとしてやんぜええええ！」

狂喜に震える触手の群れが、一斉にティアンナを襲う。

……よりも早く、リムレオンは駆け出していた。

地面を蹴った、その直後には、ローパーゴイルの顔面に拳を叩き  
込んでいた。

醜い顔に拳の跡を刻印された魔獣人間が、ギョルギョルツと何回  
転もしながら派手に倒れ込む。

叩き込んだばかりの己の拳を、リムレオンは呆然と見つめた。

力強い、甲冑の拳。

だがその中身は、人を殴った事もない、細く非力な片手なのだ。

甲冑の重さを全く感じられない、どころではない。

戦闘訓練などした事もない身体が、信じられないほど軽やかに動  
く。それでいて、とてつもなく重い攻撃を放つ事も出来る。

目のやり場に困る姿になってしまった従妹の方を見ず、リムレオ  
ンは訊いた。

「ティアンナ……これは、何……？」

「魔法の鎧と、魔法の剣……本来ならばダルーハ卿に対する戦力と

なるはずだった装備よ」

羽織っていたマントを、自分も裸であるにもかかわらずシェファに着せかけてやりながら、ティアンナが答える。

「ダルーハ卿との戦いには間に合わなかったけれど、無駄にはならずに済んだようね……無駄に終わった方が良く、それを造った方は言っておられたけれど」

「何故……僕に？」

女王という身でありながらティアンナが単身、この地を訪れたのは。魔法の鎧とやらをリムレオンに着せるため、なのであろうか。非力な貴族の少年などよりも、ずっと屈強な兵士や戦士が、王国正規軍にはいくらでもいるであろうに。

何故、リムレオンでなければいけなかったのか。

ティアンナがそれを語り出す前に、ローパーゴイルがむくりと起き上がった。

「こオのガキ……男なんざあイジメ殺しても面白くねえから生かしといてやろおーと思ったけどよオオ！」

怒声に合わせて、何本もの触手が鞭の如く宙を裂き、リムレオンの全身を殴打する。

魔法の鎧の表面あちこちが、ぺちぺちと鳴った。

中にあるリムレオンの肉体には、痛みどころか、微かな衝撃すら伝わって来ない。

「なっ……何だテメエ……！」

ローパーゴイルが、怯え始める。

上半身にシュルシュルと巻き付いて来る触手たちを、無造作に引きちぎりながら、リムレオンは踏み込んだ。

何はともあれ今は、ティアンナを脅かす魔獣人間を排除する、のが先決である。

(ティアンナを……)

心の中で呟きながら、拳を叩き込む。

ローパーゴイルの顔面がグシャリと歪み、折れた牙が血飛沫と共に

に舞い散る。

(守っている……のか？ 僕は今……)

あなたは、ぼくが守る。

幼き日の、今なら齒の浮くようなその言葉を今、自分は実行しているのだろうか。

(……違う……！)

否定しながらもリムレオンは、片足を蹴り上げた。

脆弱そのものの脚力が、魔法の鎧によって別人あるいは別生物の如く強化され、ローパーゴイルを打ちのめした。

魔獣人間が、まるで競技の球のように蹴り飛ばされて大木に激突し、ずり落ちた。

(違うよ、これは僕じゃない……今ティアナを守っているのは、僕……じゃない……)

ローパーゴイルが、よろめきながら背を向ける。

その背中中、皮膜の翼が忙しなくはためいた。空を飛んで逃げるつもりか、あるいは空中からの攻撃を企んでいるのか。

どちらもさせずリムレオンは踏み込み、手を伸ばし、羽ばたこうとする翼を掴んだ。

「こんなものは……僕じゃない……！」

心の中の呟きを口に出しながらリムレオンは、ローパーゴイルの身体を掴み寄せ、左膝を叩き込んだ。

魔獣人間の肉体が苦しげにへし曲がり、汚らしく血反吐を吐き散らす。

へし曲がったままのローパーゴイルを、リムレオンは物のように、両手で頭上に持ち上げた。

もう1体の魔獣人間……スライムゾンビが、のたのたと起き上がってシェファを狙っている。

「ああああ……な、何だあ、何が起こったあ、おおおおお」

座り込んで、マントにくるまって怯えるシェファ。の前にティアナが立ち、両の細腕で己の胸を抱き隠しながら、スライムゾンビ

を睨み据える。

「おおおお俺もらう、2人とももらうしゃぶるう！ ハダカの女の子2人まとめてジュルジュルぬっぷぬっぷってウジュジュジュジュジュジュ」

狂喜した魔獣人間が、全身で腐肉を波打たせ、裸の少女2人に迫って行く。

そこへリムレオンは、ローパーゴイルの身体を、思いきり投げつけた。

2体の魔獣人間が激突し、一固まりになって倒れ込む。

少女たちを襲うはずだった腐肉が、ローパーゴイルに貼り付いてジューツと白い煙を発した。

「ぐっ！ ぎゃあああああ溶ける、溶けるううう！ なな何しやがんだテメエー！」

「うじゅ……ま、不味うい……オマエ何やってんだよおお」

一緒くたに転がりながら罵り合う、2体の魔獣人間。に向かって、リムレオンは駆けた。

重厚な甲冑姿が、軽やかに地面を蹴って、風の如く疾駆する。

疾駆の最中リムレオンは、腰の長剣に手をかけた。左手が鞘を、右手が柄を握る。

竜の巻き付いた鞘から、両刃の刀身が走り出す。発光しているかのように白い、眩しいほどに鋭利な刃。

それが、リムレオンの疾駆・踏み込みに合わせて一閃した。横薙ぎの斬撃。

ローパーゴイルとスライムゾンビが、2体まとめて真っ二つになった。

「違う……！」

リムレオンは振り返りながら、魔法の剣を斜めに振り下ろした。

血飛沫と腐肉が、噴き上がり、飛び散った。

魔獣人間の肉体を、2つまとめて叩き斬る。それは、異様としか表現し得ない手応えだった。

「これは……こんなものは、僕じゃない……!」

もう一閃。左下から右上へと、魔法の剣を振り抜きながら。リムレオンは全身で、少女たちの方を向いた。

背後で、細切れの肉の残骸に変わった魔獣人間2体が、ビチャビチャと降り注いで地面に広がる。

叔母マグリアの墓前を、人間ではないものの屍などで汚してしまっただ。

裸の少女2人が、身を寄せ合いながら息を呑んでいる。

「リム様……」

シェファの口調も表情も、何か良くない夢を見ているかのようにである。

リムレオンを恐れている、のは間違いないだろう。

魔法の剣を腰の鞘に収めながら、リムレオンは、もう1人の少女に問いかけた。

「ティアンナ、僕に……こんなもので、何をしろと……?」

「……まずは貴方に、お礼を言わなければね」

はぐらかすように、ティアンナは言った。

「助けてくれて、ありがとう」

「僕は、何もしていない……」

「いいえ、貴方が助けてくれたのよ」

目のやり場に困る格好のままティアンナは、じっとリムレオンを見つめた。恐ろしい力をもつ魔法の鎧、に取り込まれた従兄の姿を。

「魔獣人間を倒し、私たちを守ってくれたのは、紛れもなく貴方なのよ。リムレオン・エルベツト」

「僕であるものか……!」

眼前で、リムレオンは右の拳をグッと握った。

全身が、淡く白く輝いた。

魔法の鎧と魔法の剣が、白い光に戻り、リムレオンの全身から剥離して、指輪の中に吸収されてゆく。

「やっと、僕に戻れた……」

恐ろしい力をもった鎧と剣が封じ込められた、竜の指輪。

己の右手の中指で禍々しく輝くそれを、リムレオンはティアンナに向けた。女王に拳を突き付ける、ような形になってしまった。

「そろそろ本当に、教えて欲しい。ティアンナ……こんなもので僕に、何をさせたい？ 何故、僕でなければならない？」

「赤き竜の残党勢力、だけではないわ。魔獣人間を造り出すような者たちまでもが、動き始めている……ダルーハ卿の死後も、この国の民は、まだ様々なものに脅かされているのよ」

じつと見つめてくるティアンナの瞳が、憂いを帯びた。

「お願い……戦って、リムレオン。この国の平和のために」

「僕は……」

平和のために戦う。そのための力が、この指輪……魔法の鎧と、魔法の剣。

こんな恐ろしい力を持つ者が何故、リムレオンでなければならいいのか。その問いには、ティアンナはまだ答えてくれない。

「貴女が何と言おうと、僕は今……僕では、なかった。魔法の鎧が僕を、完全に呑み込んでいた……僕を、操っていた」

もはや死体とも呼べぬ有り様で散らばりぶちまけられている魔獣人間2体を、リムレオンはちらりと見やった。

「ティアンナ、貴女は僕に……恐ろしい力の、操り人形になれと……？」

「……合格」

突然の声。と共に、近くの本陰から男が1人、姿を現した。

父カルゴ侯爵と同年代と思われる、中年の男。父よりはすっきりと引き締まった身体を、灰色のローブに包み込んでいる。

穏やかな顔に、しかし何か一癖ありそうなものを感じさせるその男が、なおも言った。

「女王陛下のお目に、狂いはなかった。この少年こそ魔法の鎧の装着者にふさわしいと、私も思います」

「誰……ですか、貴方は」



リムレオンの問いに答えたのは、本人ではなくティアンナだった。  
「ゾルカ・ジェンキム殿。魔法の剣と魔法の鎧を、お造りになった方よ」

「リムレオン・エルベツト殿、でしたか」

魔法に関係する技術者なのであろう、そのゾルカという男が。穏やかな、しかしやはり何か油断のならない笑みを浮かべる。

「王国の平和のために戦って欲しい、という女王陛下のお言葉に、貴方は迷いを示された。迷わず安請け合いをなさるようであれば……貴方を殺してでも、その指輪を取り戻さねばならなくなるところでしたよ。軽々しく正義の英雄になってしまうような方に、力を託す事は出来ませんからね」

生身に戻った今のリムレオンなら、簡単に殺せるだろう。

「強大なる力の所有者とは、強大なる力を恐れる者でなければなりません。リムレオン殿、貴方のように」

「重ねてお願いするわ、リムレオン……この国の平和のために、戦って」

「ティアンナ……」

この国の平和のためになど戦えない、とリムレオンは思った。

魔法の鎧を着て、国の平和のためになど戦ったら。それこそゾルカの言うような、軽々しい正義の英雄になってしまう。

力に溺れて英雄気取りの殺戮を行う……魔獣人間と大して変わらぬ存在に、なってしまう。

（国ではない、貴女のためになら……僕は、いくらでも戦うのに……）

私のために戦って、とティアンナは何故、言ってくれないのか。

その一言だけで自分は、力の操り人形となる事であっても、受け入れられると言うのに……

シェファが、裸身にマントを羽織ったまま、こちらを見つめている。

リムレオンを、ティアンナを、じっと見つめている。

睨んでいる、ようでもあった。

## 第17話 武装転身

庭園の木陰から、誰に気付かれる事もなく、戦いを観察していた者たちがいる。

「呆気ないものであったな、実に」

仮面の内側で苦笑する男と、冷たい美貌をニコリともさせない若き尼僧。

ゴルジ・バルカウスと、メイフェム・グリムである。

「魔獣人間2体が、ああも容易く倒されるとは……魔法の鎧に、魔法の剣か。ダルーハ・ケスナー討伐戦の際にエル・ザナード1世が使役していた怪物というのは、あれの事であろうか？」

「それはないと断言出来るわ。あんなもので、ダルーハは殺せない」  
即答しつつ、メイフェムは思考した。

魔獣人間2体にエル・ザナード女王を襲わせてはみたものの。ダルーハを倒した怪物は結局、姿を現さなかった。

その怪物は、少なくとも今現在は、女王の近くにいない。と見ていいだろう。

「どうしましょうかゴルジ殿。エル・ザナード1世を……今なら、簡単に始末出来ると思うのだけど」

「やめておこう。あの女王は、私が思っていた以上の英傑だ。生かしておいた方が良い」

ゴルジの口調が、熱を帯びた。

「英傑とは、戦乱をもたらしてくれるものだからな。ダルーハ・ケスナーがそうであったように」

「……エル・ザナード女王は、ダルーハと違って平和を望んでおられるようだけど？」

「その通り。あの女王は、平和のためならいくらでも戦争を引き起こしてくれる……まあ本人にその気がなくとも、周りが放ってはおかんさ。女王の死を願う者は、多いからな」

先代国王を含めヴァスケリア王族は、ダルーハ・ケスナーがあら  
かた殺し尽くした。16歳の小娘が何事もなく女王でいられるのは、  
そのためだ。

その小娘の女王が、身の程知らずにも様々な改革を断行しよう  
としている。

まずは税制。簡単に言えば、王侯貴族の取り分を減らして民の負  
担を軽くする。

地方貴族が、国王の目が届かぬ所で不正搾取を行わぬよう、王都  
から徴税監査官を派遣する。

貴族とは基本的に搾取が本能のような生き物であるから当然、反  
発は多い。改革に心から賛同している地方貴族など、いるとすれば、  
女王の伯父であるカルゴ・エルベツト侯爵くらいであろう。

「メイフェム殿は、バウルファー・ゲドン侯爵をご存じか？」

「サン・ローデル地方の領主でしょう。今の女王を快く思っていな  
い地方貴族の中では、一番の大物よね」

「あの侯爵の息子が1人、先の戦で、エル・ザナード女王自らの手  
討ちに遭っておる……上手く焚き付ければ、何かやらかしてくれる  
かも知れん」

「何か……ね」

他に王族が1人でも生き残っていれば、その者を擁立しての内乱  
に、もっていけない事もない。

無能で名高いモートン・カルナヴァート元第2王子が、捨て扶持  
をあてがわれて不遇をかこっている。という話は、メイフェムも聞  
いていた。

「バウルファー侯は、密かに国外との接触を試みている……という  
噂もある。バルムガルド王国だ」

「バルムガルドが……ヴァスケリア侵攻を企てていると？」

そのため、新女王に不満を抱く地方領主を、調略で抱き込もうと  
している。というのは、考えられなくもない話ではある。だが。

「……バルムガルドには、ヴァスケリアから王女が1人、嫁いでい

るはずよ。血縁同盟を踏みにじってまで、戦争をやろうとするかしら？」

そんな事をしたら、ヴァスケリアだけではない近隣の各国に、バルムガルドを攻撃する理由を与えてしまう。

血縁同盟など、いずれは破って戦争を仕掛けるにしても。何か対外的な言い訳をする必要がある、という事だ。

「その血縁関係がな、強欲なバルムガルド国王にとっては開戦の理由となり得るのよ。まあ見ておると良い、いずれ目の離せぬ事態となる」

「戦争が起こる、というわけ？」

「さよう。エル・ザナード1世は、ヴァスケリアの平和を脅かすものとは全力で戦うであろうからな。だからあの女王を死なせるべきではないのだ。彼女が亡き者となれば、ヴァスケリアはたちどころに侵略・併吞され、そこで戦乱は終わってしまう。女王が生きて戦い続けてくれる限り、戦乱はいくらでも続き……魔獣人間の需要も、生ずる」

「なるほど、ね……魔獣人間を、戦力として売りつけようというわけ」

確かに人間相手の戦争であれば、そこそこ使い物にはなるだろう。魔獣人間で、商売をする。それが、このゴルジ・バルカウスという男の目的。

メイフェムにとっては、どうでも良い事だ。

愚かで醜い人間どもが戦乱で苦しむのなら、ゴルジの真の目的が何であろうと、一向に構いはしない。

人間という種族を、苦しめる事が出来るのなら。

（ケリスが死んでも……愚かで醜いまま、一向に変わるとしない人間ども……！）

白く美しい歯を、メイフェムはギリ……ッと噛み鳴らした。

（そんな生き物を、貴方は……どこまでも守ろうとするのね、ゾルカ）

あまり立派ではないメルクト領主の城を、丘陵の上から見下ろしてみる。

リムレオンは今頃、両親にどのような話をしているだろうか。

何も話さず、部屋にでも籠って1人、考え込んでいるかも知れない。

新しい鎧を身に着け、白い馬にまたがったまま。ティアンナは、幼い頃のほんの一時期を過ごした小城を、じっと見つめた。

「お名残惜しいところでありましょうが……」

傍らで栗毛の馬にまたがるゾルカ・ジェンキムが、声をかけてくる。

「なさるべき事が、王宮に山積しております。お忍びはここまですぞ、女王陛下」

「ええ……わかっております」

ダルーハの死後、女王エル・ザナード1世の名において、王国全土から広く人材を募った。

それに応じて集まった者たちの中でも、このゾルカ・ジェンキムは、間違いなく一番の大物であろう。

彼の造り上げた、魔法の剣と魔法の鎧。その装備者としてふさわしい人間に、ティアンナは2人ほど心当たりがあった。

いや、1人は人間ではない。それに彼は、外付けの力など必要としてはいないだろう。

もう1人を、試し、見定めるために、ティアンナは9年ぶりにメルクト地方を訪れた。

あなたは、ぼくが守る。

そう言ってくれた時と同じ心を、あの少年が、今もまだ持ち続けてくれているか。それを確かめるために。

笑いたくなるほどに、悲しいほどに、リムレオンはあの頃から全く変わっていなかった。

己の非力を考えず、誰かのために無茶をする。

「魔法の鎧は誰にでも、魔獣人間と同等以上の戦闘能力を与えます」  
ゾルカが語る。

「したがって、装着する者が屈強であるか非力であるかは、さほど問題ではありません。装着者に求められるのは、肉体的な力ではなく、心です。強大なる力を恐れ、危険視し、それに呑み込まれまいとする心……人は力を手にすれば、大抵の場合は暴力に溺れてしまいますからね。あのリムレオンという少年には、それが無い。これはある意味、とてつもなく得難い才能です。装着者の人選を貴女に委ねて、本当に正解だったと私は思っておりますよ女王陛下」

3日、考えて欲しい。ゾルカはリムレオンに、そう言った。3日後に再び来る。その時まで、心を決めておいて欲しい。力の所有者たる運命を、受け入れるか否か。

受け入れるだろう、とゾルカは確信しているようだった。

「国内で蠢く魔物やら魔獣人間やらは、リムレオン殿にお任せいたしましょう……問題は国外です」

「バルムガルド王国が不穏な動きを見せている、との事でしたね」  
バルムガルドが、ヴァスケリアとの国境付近に軍を集結させてつつある。それが確かな情報として伝わって来たのは、昨日である。

「姉が嫁いでいると言うのに……血縁同盟を踏みにじって戦端を開くつもりでしょうか、バルムガルド王は」

「その血縁が今回はいささか問題です、エル・ザナード陛下。お忘れかも知れませんが……貴女は、擁立された身であらせられます。暴虐無道の叛乱者ダルーハ・ケスナーによって」

他の王族は、ダルーハがあらかた殺し尽くしてくれた。

だから次期王位をめぐっての内紛が起こる事もなく、ティアンナがそのまま女王であり続けている。

王位継承順位としてはティアンナよりずっと格上であるはずのモートン王子も、妹の即位戴冠を認める意思を公にしていた。まるで自身は王位から逃げるように。

したがってヴァスケリア王国内には、新女王エル・ザナード1世の統治に、少なくとも表立って異を唱える者はいない。

だが、国外では。

「バルムガルド国王は、言いがかりをつけてくるでしょう。叛乱者が擁立した女王など、外交的にも認めるわけにはいかない」と

ゾルカが言った。

「かの王家に嫁がれたシーリン・カルナヴァート元第4王女様を……こちらこそが正当なるヴァスケリア女王である。と担ぎ上げて戦争を仕掛けてくる腹つもりでしょうな。バルムガルド国王は」

「擁立、傀儡政権……王族の宿命と言うべきもの、なのでしょーうね」自身も擁立された身であるティアンナは、呟いた。

擁立者であるダルーハ・ケスナーはすでにこの世になく、傀儡の女王だけが残った。

操者のいない操り人形。それが、ダルーハ死後のエル・ザナード1世なのだ。

傀儡の王から真の王者へと、自分は成らなければならない。

思い定め、ティアンナは空を見つめた。

ゾルカが、なおも語る。

「自国の民、あるいは外敵……何にせよ、人間を相手に政や戦をなさるのが女王陛下のお役目です。人間ではないものの相手は、あのリムレオン殿に任せておきましょう」

「そうね。私の相手は、人間……」

人間という、ある意味では魔獣人間よりも難儀な生き物が、様々な厄介事を引き起こす。それを何とかするのが、王の使命なのだ。

空を見上げながらティアンナは、同じ空をどこかで見つめているかも知れない若者に、心の中で語りかけた。

（貴方なら……たとえ人間相手の厄介事であろうと、容赦なく暴力で解決してしまうのでしょうね……）

あの強大極まる暴力に、自分はきつと甘えてしまう。

あの暴力を後ろ楯にして、自分は間違いなく、好き勝手な事をし



てしまう。

ダルーハよりも悪質な暴君に、自分はなってしまう。  
だからガイエル・ケスナーが自分の傍にいないのは、正しい事なのだ。

と、ティアンナは頭ではわかっていた。

子供たちが、水遊びをしている。

3人。うち1人は、女の子のようだ。

男女仲良く裸になって川に入り、無邪気に泳いだり水をかけ合ったりしている。

幼き日の自分とティアンナも、こんなふうに裸で遊んだものだ。  
ぼんやりと思い出しながらリムレオンは、川辺に座り込んでいた。  
子供が、こんなふうに野外で、裸で遊んでいられる。それほどメルクト地方は平和だった、という事だ。

祖父レミオル・エルベツト侯爵は勇猛苛烈なる人物で、領主となった際、兵を率いてメルクト地方全域を回り、山賊・野盗その他、犯罪者の類を殺し尽くしたらしい。

その後を継いだカルゴ侯爵が民政に心を砕き、民の生活を安定させたので、食い詰めて犯罪に走る者も激減した。

エルベツト家の親子2代で、メルクト地方の治安向上は達成されたのである。

が、いくら人間の生活が安定したところで、人間ではないものたちがそれを脅かすようでは、平和とは言えない。

この川辺では昨日、オークの群れが出現し、領主令息を脅かしたばかりである。

そんな場所で、子供たちが裸で水遊びなどしているのだ。

領主の名において人々の外出を制限するべきだと、リムレオンは父に一応、進言はしたのだが。

柔らかく草を踏む足音が、近付いて来た。

「こんな所に、いたんだ……」

魔石の杖を携えた、1人の少女……シェファ・ランティだった。

「いくら平和だからって……あんまりお城の外、出ない方がいいよ

？ リム様、弱っちいんだから」

言いながら、リムレオンの隣に腰を下ろすシェファ。

「あたし、守ってあげられないよ……あたしも、弱っちいんだから……役立たずなんだから……」

「シェファ……」

そんな事はないよ、という安易な慰めの言葉を、リムレオンは呑み込んだ。

安穩と暮らして何の鍛錬もしていない、貴族の若君とは違う。

攻撃魔法兵士として血の滲む修行を積んできた少女が、実戦で己の力の程度を思い知ってしまったのだ。

軽々しい慰めなど、出来るわけがなかった。

己の右手を、リムレオンは見つめた。中指にはめられた、竜の指輪。

修行も鍛錬もせずに手に入ってしまった、力。

その力で昨日、魔獣人間という、元は人間であつた生き物を殺害した。人を殺した、ようなものである。

たやすく人を殺せる力をリムレオンに預けて、ティアナはまた王都へ帰ってしまった。

3日後に、意思を確かめに来る。あのゾルカ・ジェンキムという魔術師は、そう言っていた。

あと2日である。それまでに、心を決めておかねばならないらしい。

リムレオンを、リムレオンでなくしてしまう、この力を。所有するのか否か。

暗い口調で、シェファが訊いてくる。

「リム様、それ……どうするの」

「どうしようか……」

「わけわかんないよ、あの女王様……リム様に、そんなもの押し付けて」

シェファのこんな暗い声を、リムレオンは聞いた事がなかった。

「リム様、あたし……今から、嫌な事言うから。氣い悪くしたかったら、してもいいよ」

「どうしたの、いきなり……」

「あたし、あの女王様……信用出来ない。変な鎧着て怪物と戦うなんて、自分でやればいいのに。リム様よりも全然、強いんだから」  
ティアナは、今や一国の王である。怪物との戦いに専念する事など、許されるわけがない。

シェファとて、頭ではわかってるはずだ。

「リム様なんて、代わりはいくらでもいるって……別に死んじゃってもいいって、思ってるに決まってるわ」

男女問わず王とはそういうものだろう、とリムレオンは思う。

国を、民を守るため、誰かに犠牲を強いなければならない時もあるだろう。

「そう……だね」

リムレオンは微笑んだ。

ゾルカ・ジェンキムが健在である限り、魔法の鎧などいくらでも造る事が出来るだろう。

装着者がいない、という事もあるまい。何しろ、リムレオンでも務まるくらいなのだ。

「確かに、僕の代わりなんて、いくらでもいる……」

「やめてよ!」

シェファが大声を出した。

水遊びをしている子供たちが、きよとん、とこちらを見つめる。

「あたしに……何か言う資格なんて、ないのよね」

シェファが、いくらか声を小さくした。

「だってあたし、何の役にも立たなくて……結局、リム様に助けてもらっちゃって」

「僕は何もしていない。シェファを助けたのは……この、鎧さ」  
リムレオンは軽く右手を上げて、シェファに指輪を見せた。

「……捨てちゃいなよ、そんなもの」

呻くように、シェファが言う。

「戦ったり、殺したりなんて……リム様、嫌いでしょ？」

「……………」

そういう事とも少し違う、とリムレオンは思う。

自分はそんな、心の優しい人間ではない。

あんな魔法の鎧を身にまとい、魔法の剣を振り回しているうちに。  
自分はきつと力に溺れ、呑み込まれ、戦う事も殺す事も平気になっ  
てしまう。

自分が、自分ではなくなってしまう。

否。力に溺れて殺戮を行う、それが本当の自分になってしまう。

それをシェファに、他人に、わからせる事が出来るとは思えな  
かった。

水音が聞こえた。

水遊びをしている子供たちに、何者かがバシャバシャと近付いて  
行く。川の中から、だ。

「ギッ！ ギシャッ！」

「ギッシシシ、ギシャアアアアア！」

明らかに人間ではないものの、声。

シェファが立ち上がった。リムレオンも、立ち上がった。

川の中から現れたものたちに取り囲まれ、裸の子供3人が悲鳴を  
上げる。

取り囲んでいるのは全身、鱗に覆われた、人間の体型をしている  
が人間ではない生き物たちだった。

所々にヒレを生やし、槍か鉾か判然としない武器を携えている。

首から上は、凶暴な肉食魚そのもので、鋭い牙と蠢く舌が、人間  
の子供たちの新鮮な血肉を求めているのは明らかだ。

「ギルマン……！」

書物で得た知識を、リムレオンは口に出していた。

昨日のオークと、同じような生き物たちである。棲む場所が陸上か水中か、違うのはそれくらいだ。

そのギルマンが3匹、いや5匹、などと数えている間に7匹10匹と、子供たちだけでなくリムレオンそれにシェファをも標的に入れて、川辺に上がって来ている。

子供らの悲鳴が、高まった。

ギルマン3体が、裸の子供3人をそれぞれ1人ずつ、水掻きのあ  
る手で捕え、高々と掲げている。得物を見せびらかすようにだ。

「やめなさい！」

リムレオンが動こうとする前に、シェファが叫んでいた。

魔石の杖がギルマンの群れに向けられ、ぼおっ……と赤く輝き始  
める。

子供たちを捕えている3体が、いくらかは怯んだようだ。

「その子たちを放しなさいよ……放さないとお」

焼き殺すわよ、とシェファが言い終えるよりも早く、多数の足音  
が押し寄せて来た。鎧の鳴る、物々しい響きと一緒にだ。

「若君、お逃げ下さい！　ここは我々が！」

領主の城に仕える、兵士たちの一部隊である。

カルゴ侯爵も、領内の警備の強化くらいはしてくれたようだ。

「魔物どもを討ち尽くせ！」

「待て、その前に子供たちを！」

日頃の訓練通りに連携し、ギルマンの群れに襲いかかる兵士たち。  
の何名かが突然、血飛沫を上げて倒れた。

頭が兜もろとも潰れたり、眼球が飛び出したりしている。首の折  
れている者もいる。

何かの群れが、彼らを背後から攻撃していた。棍棒や斧を振るつ  
て兵士らの頭を陥没させ、首を叩き折っている。

オークだった。

ギルマンと同じく十数匹、どこからか猛然と現れて、兵士たちに

奇襲を喰らわせたところである。

その奇襲を辛うじてかわした兵士に、ギルマンが襲いかかる。  
槍だか銛だかよくわからぬ武器に、兵士が1人また1人と刺し殺されてゆく。

声がした。

「長かった……束の間とは言え、長かったぞ人間ども……」

オークの群れの中から、巨体が1つ。ずしりと進み出て来た。

「束の間、貴様らに大きな顔をさせておいてやったが……それも、ここまでだ。我らの偉大なる帝王の御子が今、新たなる帝王として君臨なされる！」

人間の言葉を流暢に喚く、だが人間ではない、オークやギルマンでもない生物である。

全身で巨大に盛り上がった筋肉と皮膚は、まるで岩石だ。

衣服や防具は着けていないが、腰に大型の剣を佩いている。あの魔法の剣をも叩き折ってしまいそうな、巨大な剣だ。

岩石の大男、とても表現すべきその怪物を、リムレオンは書物で見た事があった。

「トロル……」

本来ならば、もう少し山深い場所の、洞窟などに棲んでいるはずの怪物である。

その岩石のような肉体は、並の戦士が振るう武器では傷1つ負わず、仮に負傷したとしても、その傷はすぐに塞がり癒えてしまう。

とてつもない再生能力を持ち、手足の1本くらいなら切り落とされても生えてくる、らしい。

このようにオークなど下等な怪物を、兵隊として引き連れている事が多いという。

全て、書物で得た知識である。自分にはこれしかないのだと、リムレオンは昨日から思い知らされ続けている。

「ダルーハ・ケスナーは死んだ！ 帝王の御子が、我らの怨敵を滅ぼして下さったのだ！ 今宵はその祝いの宴よ、うぬらも招いてく

れようぞ……ぐっふふふ、我らの胃袋の中へとなあ！」

トロールが叫び、笑う。岩石が目鼻口を成したような顔面が、狂笑に歪みながら牙を剥き、シェファの方を向く。

「この近隣の女子供は全て我らの晚餐よ。血はすすり肉は喰らい、魂は竜の御子へと捧げ奉る！ 新たな帝王への生け贄となる榮譽！ 悦ばぬかあああ！」

「こいつ、わけわかんない事をつ……！」

シェファの構えた魔石の杖が、ドンッ、ドン！ と火球を発射する。2発。トロールの巨体に命中し、砕け散って火の粉と化する。

岩石のような皮膚は、火傷1つ負っていない。

「駄目……？ やっぱり……」

へなへなど、シェファが座り込む。

「……わかったわ、生け贄にでも何でもなるから……その子たちは、放してあげて」

「……何を言うんだ、シェファ……」

呻きながら、リムレオンは。

足元に倒れ込んで来た、1人の兵士の死体。その傍らに跪いた。

顔を斧で叩き割られた、惨たらしい屍。

だが、誰なのかは辛うじてわかる。領主の城に勤めていて、リムレオンとも時折話す、若い兵士。

確か、子供が生まれたばかりのはずだ。

「僕は……何を、やっているんだ……」

右の拳を、リムレオンはグ……ッと握った。

細い非力な拳が、震える。中指に巻き付いた金属の竜が、禍々しく光る。

「力に溺れる……力の、操り人形になる……僕が、僕でなくなる……そんな心配をしている間に人が死ぬ！」

「何を喚く、小僧」

トロールがせせら笑いながら、こちらに向かって来る。

岩のような巨体が、リムレオンに、シェファに、迫る。

「聞こえておらんか？ 生け贄として宴に招くは女子供のみ、と言ったのだ。男は要らぬ、ここで死ぬ」

「……わかったよ、ティアンナ」

眼前に迫るトルルに、ではなく、ここにはいない少女に語りかけながら。リムレオンは、兵士の屍の傍らで立ち上がった。

「力があるなら、戦うしかない……そういう事なんだな」

「駄目……」

シェファが、草むらに座り込んだまま青ざめ、息を呑み、髪を揺らして首を横に振る。

「駄目よ、リム様……あの女王に、いいように利用されちゃう……」

「シェファ、僕を見ていて欲しい」

こんなに強い口調で、この少女に話しかけたのは、初めてかも知れない。

「僕が、力に溺れたりしないかどうか……見ていて欲しい。君に、

頼むしかない」

「リム様……」

「僕は、今から僕ではなくなる……君に、見てもらうしかないんだ」

殴れば折れてしまいそうな脆弱な拳の、中指で。竜の指輪が、淡く白く輝いた。

「何だ、その指輪は……財物を貢ぐゆえ命だけは助けてくれると、そういう事か」

トルルが笑いながら、腰の大型剣を、威嚇するかのように仰々しく抜いて構えた。

「無論、財物はもらう。命ももらう。女子供も、何もかももらう……うぬら人間どもの全てを奪い尽くし、偉大なる竜の御子様に捧げてくれよう！」

トルルのずしりとした足取りが、速まった。

大型剣が振り上がり、岩のような巨体が踏み込んで来る。

リムレオンは逃げず、かわさず、その場で思いきり身を屈め、地



面に右拳を叩き付けた。

「武装……転身……！」

自然に、声が出た。

右の拳を中心に、地面に白い光が広がり、紋様を描き出した。様々な図形・記号・文字を内包した、光の真円。

それが、白く燃え上がるように光り輝き、リムレオンを下から照らす。

照らしただけでなく、包み込む。地中から噴き上がるような激しい白色光が、屈み込んで地面を殴る少年の全身を。

「ぬっ……」

光に圧されたトルルが、大型剣を振り上げたまま、よろめいた。

猛然と踏み込む動きが、とりあえず止まった。

光が消えた。白く輝く紋様も、消え失せた。

地面に右拳を打ち込んだ、白い騎士の姿が、そこに出現している。脆弱な細身を、豪壮な全身甲冑で包み込んだ、リムレオン・エルベツト。

（やつぱり……僕、じゃない……こんなものは……）

全身に漲る力を感じながら、リムレオンはゆらりと立ち上がった。リムレオンのもの、ではない力……魔法の鎧の、力。

「僕が、僕ではなくなる……それが、どうしたって言うんだ……」

もはや1人も生き残っていない兵士たちの屍を、リムレオンは1度だけ見回した。

ここで自分が戦わなければ、子供たちが、シェファが、同じ事になる。

「人が、死ぬ……それに比べたら！ 何だって言うんだ！」

## 第18話 魔少女たちの暗躍

左、右、左と、リムレオンは立て続けに拳を叩き込んだ。

子供たちを捕えているギルマン3体の、顔面にだ。

凶暴・醜惡な肉食魚類の顔面が3つ、グシャッ、バキッ！　ボグッ……と拳の形に陥没する。

倒れゆく3つの屍から、裸の子供たちを引き剥がし、足元に庇いながら。リムレオンは左右の手を、虫でも追いつくように振るった。周囲に群がるオークやギルマンが、猛然と振り回し叩き付けて来る武器……棍棒、剣、戦斧、槍あるいは鉋。

魔法の鎧に包まれた両手が、それらを片っ端から打ち弾く。

棍棒が砕け、剣が曲がり、斧が壊れ、槍か鉋かよくわからぬ武器がへし折れる。

武器を失ったオークの1匹を、リムレオンは蹴り飛ばした。

生きた怪物を、まるで足元のゴミのように蹴り飛ばす事が出来る。

魔法の鎧の爪先をズドッ！　と腹に打ち込まれ、そのオークは身を折りながら吹っ飛んで、川面で1度跳ねた。

そして大量の血反吐を水面にぶちまけ、汚れた水中へと沈んで動かなくなる。

裸の子供3人が、身を寄せ合って怯え、泣いている。

怪物たち、ではなく自分を恐がっているのだろう。とリムレオンは思った。

「まあ今の僕は……怪物、だからなっ」

面頬の内側で苦笑しつつ、リムレオンは身を捻り、左足を振るった。

魔法の鎧を履いた蹴りがブンツと唸り、ギルマンの1匹を二つ折りにへし曲げる。内臓を蹴り潰した感触を、リムレオンは確かに感じた。

血の塊を吐き散らしながら水中に没するギルマン、の近くに、リ

ムレオンの左足が着水する。

間髪入れず右足が、水飛沫を飛ばして跳ね上がる。

重厚な全身甲冑をまとう身体が、旋風の如く軽やかに回転し、右の後ろ回し蹴りが斬撃のように一閃した。

オークとギルマンが1匹ずつ、吹っ飛んで倒れた。

2匹とも、首がおかしな方向に曲がり、眼球が飛び出して垂れ下がっている。

着水した右足で、リムレオンはそのまま踏み込んだ。

左拳が弧を描いて唸り、ギルマンの1匹を殴り倒す。

破裂した眼球を噴出させ、川面に激突するギルマン。を一瞥もせずリムレオンは、続いて右の手刀を思いきり振り下ろした。

斧を振り上げて襲い来るオーク。その顔面が、斧と一緒にぐたにグシャアツと潰れ散った。

「この役立たずどもがああ！」

怒声と共に、衝撃がリムレオンを襲った。魔法の鎧の表面から、火花が散った。

「うっ……」

リムレオンはよろめいた。

オークやギルマンを蹴散らすように踏み込んで来たトルルが、大型剣を振り下ろしたところである。

その巨大な刃が、即座に振り上がり、別方向から襲いかかって来る。

「人間風情が！ そのようなもので我らと同格の力を得たつもりかああッ！」

凄まじい剛力と技量で振るわれる大型剣が、魔法の鎧を激しく殴打する。またしても火花が散り、リムレオンの身体がよろりと回転してトルルに背を向けた。

その背中へ、大型剣の第3撃が振り下ろされる……よりも早く、リムレオンは踏みとどまって振り返った。

腰から、魔法の剣を抜き放ちながらだ。

竜の巻き付いた鞘から、光の如く白刃が滑り出し、トロルに向けられる。

「うぬ……！」

大型剣を振り上げたまま、トロルが後退りをした。

「そうさ、こんなものの力を借りないと僕は戦えない……それを笑いたければ、笑うといい」

魔法の剣を突き付けながら1歩、リムレオンは近付いた。2歩、トロルの巨体が下がった。

「何にしても、お前たちを許してはおけない……！」

「ぬっぬかせ、それはこちらの台詞よ！」

さらにもう1歩、後退して距離を取った後、トロルが一気に踏み込んで来た。

大型剣がブーンツと重々しく唸ってリムレオンを襲う。

「非力なる生き物の分際で、地上を我が物顔でのさばり歩く人間ども！許しておけると思ふかああーっ！」

「別に……」

リムレオンは魔法の剣を斜めに振るい、トロルの重い斬撃を受け流した。

「お前たちの許しを得よう、なんて思っていないっ」

受け流された大型剣が、すぐさま別角度から振り下ろされて来る。真っ正面から魔法の剣を叩き付けて、リムレオンは応戦した。

刃と刃が激突して火花を散らし、金属の焦げ臭さを漂わせる。

それが2合、3合と繰り返される。

4合目で、トロルの大型剣が折れた。と言うより切れた。分厚い鉄板のような刀身に、金属とは思えぬほど滑らかな断面が残る。

「何っ……うぐ」

微かな悲鳴と共にトロルが、首筋から血を噴いた。

リムレオンの斬撃。首を斬り落とすつもりだったが、踏み込みが少し足りなかった。魔法の剣は、トロルの太い首筋を、ほんの少し切り裂いたにとどまった。

その微かな傷の内側で、筋肉が盛り上がり、出血を止めてしまう。血の止まった傷口に、岩のような皮膚が被さってゆく。

リムレオンが書物でしか知らなかった再生能力を発揮しつつ、トロルが笑う。

「ぐっ……ふ、ふふふ無駄よ無駄。人間の武器で俺を殺す事など出来はセンググッ！」

リムレオンは踏み込み、魔法の剣を横薙ぎに一閃させていた。慌てて後退りしつつ、トロルが悲鳴を漏らす。

その巨体の腹部が横一直線に裂け、大量の臓物がドパアアッと溢れ出した。

「……その傷も、塞がってしまうのかな」

リムレオンは歩み寄り、声をかけた。

「傷が塞がらなくなるまで、ひたすらに斬り苛む……再生しようがないほど斬り刻む。そんな罅り殺し同然の事を……するしかないのか？」

「ひっ……ぐ……ま、待て」

溢れる臓物を、懸命に己の腹へと押し戻しながら、トロルが逃げ腰になり始める。

逃がすわけには、いかなかった。

たとえ罅り殺し同然に斬り刻む事になろうとも、この怪物はここで仕留めておかなければ。領内で、また人が殺される。

同様の理由でオークやギルマンも、1匹たりとも逃がすわけにはいかない。

とリムレオンが思った、その時。

「り……リム様あ……」

声が聞こえた。シェファだった。裸の子供3人を庇いながら、魔石の杖を落ち着きなく揺らめかせている。どの方向に攻撃魔法をぶっ放すべきか、迷っている様子だ。

生き残っているオークやギルマンが計10匹前後、シェファと子供たちを包囲し、全方向からじりじりと武器を近付けつつある。

「させるか……！」

リムレオンは地面を蹴った。跳躍、に近い疾駆。それと共に、魔法の剣を縦横に振るう。

群れるオークが、ギルマンたちが、片っ端から細切れに変わって宙を舞い、肉片や臓物を大量にぶちまける。

その間にトルルは、腹を抱えたまま背を向け、逃げ出していた。

リムレオンは追おうとして、足を止めた。

トルルも、立ち止まっていた。まるで凍り付いたように。

溢れ出す臓物を一生懸命、腹に押し戻そうとするトルル。の眼前に、その少女は立ち塞がっていた。

「……何をしておられるの？ トルル族の方」

可憐な唇が、涼やかな声を紡ぎ出す。

ぞっとするほど、美しい少女だった。

艶やかな黒髪と、ひらひらとした感じの黒い薄手のドレス。闇そのものとも言えるそれらの黒色が、白い美貌と鮮烈な対比を成している。

そんな黒衣の少女に逃げ道を塞がれたトルルが、腹を押さえたまま後退りをした。

「ぶ……ブラックローラ殿……あつ貴女こそ、このような所で何を」

「はあい、質問を質問で返さないよおーにっ」

ブラックローラという名前らしい少女が、トルルの顔面に、優しく片手を触れた。繊細で美しい指が、怪物の固く醜悪な顔を、優しく撫でる。一見、慈しむように。

「……で、何をしておられるの？ こんな所で、ローラに断りもなく」

「いっ……生け贄を……」

トルルの声が震え、裏返った。

「竜の御子様に、生け贄を……わ、悪い事ではあるまい？」

「そんな事してお喜びになる御子様ではないと、貴方たちトルル族やオーガー族の方々には、特に念入りに申し上げておいたはず」

微笑みながらブラックローラが、トロルを見つめる。睨んでいる。暗黒の色をした両の瞳が、怯えきった怪物の顔を映し出す。

「貴方たちは、御子様のお名前を使って、己の欲望を満たそうとしているだけ……」

少女の言葉に合わせ、トロルの巨体が痙攣した。

顔を撫でる、その綺麗な手から、何か毒気のようなものを注入されている感じである。

「こんな事をしていたら、御子様がお怒りになるわ。貴方がたトロル族はもちろん、オーガーやオーク、ギルマンも。リザードマンやゴ布林族に至るまで、皆殺し……とばっちりでローラまで殺されてしまうわ。ねえ、どうしてくれるの？」

いや違う。注入されている、のではない。むしろ奪い取られているのだ。

少女の可憐な片手によって、トロルの体内の、何かが。

岩のような巨体が、見てわかる速度で痩せ細ってゆく。

干涸び、ひび割れてゆく。

「まっ……ずうい……」

可憐な美貌を心底、嫌そうに歪めながら。ブラックローラは、トロルの顔面から手を離した。

ひび割れた乾燥死体と化したトロルが、ザー……と粉末状に崩れ落ちた。

「量がひたすら多いだけの、不味い生命力……ああんもう。こんな食べてたら、お肌の張りが悪くなっちゃう」

「……君は？」

美貌だけならシェファやティアンナを上回るかも知れない、黒衣の少女に。リムレオンは、とりあえず問いかけた。

「何者……なのかな」

「今のところは貴方たちの、敵……ではない者。とだけ申し上げておきますわね」

にこやかに答えながらブラックローラは、魔法の鎧をまとう少年

の姿を、興味深げに見つめた。

「人間の方々は、ローラたちと敵対する気満々みたいですわねえ。そんなものまで造っちゃって……ふふっ、可愛い」

「君が何者かわからなければ、敵対のしようがない」

何者なのか、を教えてくれる事もなくブラックローラは、怪物たちの屍を見回しながら言った。

「ローラからのお願い。こんな輩を見ただけで、竜の御子様を判断なさらないで……ね？ 人間の方々。御子様は、ちょおつと残虐だけど心清らかで正義を愛される御方。もちろん貴方がた人間たちの事も、守って下さるし助けて下さいます」

可愛らしい笑顔が、さらにニツコリと歪んだ。

「貴方たちが……見ててムカつく事さえなさらなければ。ね？」

「竜の、御子……」

リムレオンは呟いた。

跳梁跋扈し始めた怪物たちの、元締めのような存在。それが、その竜の御子なる何者かであるようならば。自分は、それと戦わなければならぬのか。そのためにティアンナは、この力をリムレオンに託したのであろうか。

ブラックローラは、すでに背を向けて歩み去り始めている。その軽やかな足取りからは、体重や実体といったものが今ひとつ感じられない。

自身が一体何者であるのかを、彼女はついに教えてくれなかったが、ただ1つ……人間ではない。これだけは、確かであろう。

「……化け物だよ、今の女」

怯え泣きじゃくる裸の子供たち、と身を寄せ合いながら、シェファが呻く。

「ねえリム様、わかってる？ そんなの着てたら……そのうち、あんなのとも戦わなきゃいけなくなっちゃう、かも知れないんだよ」  
「わかってるさ……」

サラサラと風に舞う、粉末状の屍……先程まで巨大なトロールであ



ったもの、を見つめながら、リムレオンはそれだけを言った。

今この場で、あの黒衣の少女と戦っていたら。自分も、同じような死に様を晒していただろうか。

大型の怪物を、触れただけで粉々の乾燥死体に変えてしまう、彼女の力を。この魔法の鎧で防ぐ事は、出来ただろうか。

すでに姿の見えない、あのブラックローラという少女が、一体何者であるのか。

それについてリムレオンが今のところわかっているのは、1つだけだ。

「本物の、怪物……」

昨日戦った魔獣人間など、彼女と比べれば、作り物の怪物でしかない。

そして自分など、作り物の力を身にまとうていい気になっている、非力な人間でしかない。

3日後に意思を確かめに行く、とは言った。あと2日である。

が、その必要はなかうとゾルカ・ジェンキムは思った。

リムレオン・エルベットの戦いをこうして木陰から見守っていて、確信出来た。

彼は、戦ってくれる。魔法の鎧の力を、恐れながら使いこなしてくれる。

それはそれとして、気がかりな事が1つ生じた。

「あら……覗き見ですか？　ゾルカ・ジェンキム殿」

ブラックローラ・プリズナが歩み寄り、微笑みかけてくる。

19年前の戦いでは結局、彼女の命を奪う事までは出来なかった。あの時から……いや、恐らくはそれよりもずっと前から若々しさの変わらぬ、黒衣の美少女。

ゾルカはとりあえず、会話に応じた。

「……驚いたよ。まさか君が、人間を助けるような事をするとは」

「助けたわけではありませんわ。御子様の名を汚すおバカさんにお仕置きをしてあげただけ。人を助ける行動を取ったのはほら、あの白い鎧を着た御方」

言いながらブラックローラが、くすくすと笑う。

「……あれ、貴方がお造りになったのでしょうか？ 竜の御子様と、健気にも戦うために」

「結果的にそうならぬよう、祈ってはいるがね」

竜の御子、と魔物たちが呼ぶ若者に、ゾルカは1度だけ会った。

あの時、救出されたレフィーネ王女が、その身に宿していた命。それが19年を経て、若き日のダルーハと見紛うような若者に成長していた。

腐ったもの醜いものを許せない。醜く腐らねば生きてゆけぬ人間の弱さに、理解を示そうともしない。自身があまりにも強過ぎるゆえに。

あれでは、いつ父親と同じ道を歩み始めても、おかしくはないだろう。生まれの親と育ての親、2人の父親と。

「……勝てはしないよ。魔法の鎧と剣ごときでは、あのガイエル・ケスナー殿に」

正直なところを、ゾルカは語った。

「だが彼が父親と同じく、人間の世を脅かそうとするならば……戦わなければ、ならなくなる。本当にそうならぬよう、祈るしかないのだが」

「ご安心を。御子様は貴方がた人間たちにとっても、強大にして偉大なる守護者でいて下さいますわ」

涼やかな声が、ゾルカの耳元を優しく撫でてゆく。

ブラックローラが、すぐ横を擦れ違うように歩いて、立ち去りつつあった。

「貴方たちが、心優しく慎ましやかで分際をわきまえた……ローラの大好きな、可愛い人間たちであり続ける限りは。ね？」

「何故……」

心臓が凍り付いたような寒気を感じながら、ゾルカは辛うじて声を発した。

擦れ違うように、すぐ近くを通られた。ブラックローラがその気であつたら今頃ゾルカも、あのトロルのような死に様を晒していたところだ。

「この場で私を、殺そうとしない……？」

不覚としか言いようがない。19年間も実戦から遠ざかって自分は、思った以上に鈍っている。

19年間も王国最強の戦士であり続けたダルーハやドルネオとは、雲泥の差だ。

「私もまた、君たちの偉大なる帝王……赤き竜の、仇の1人ではないのか」

「うふっ……ふふふふ、あっははははははは」

足を止めず振り返りもせず、ブラックローラは本当に楽しそうに笑った。

「我が主・赤き竜は、ほとんどダルーハ・ケスナーが1人で倒したようなもの！ 他の方々なんて、ほとんど何の役にも立ってなかったでしょう？ まあ聖騎士ケリス・ウェブナー殿くらい、ですわね。多少なりともダルーハの手助けが出来ていたのは」

あの戦いでケリス・ウェブナーは、赤き竜の炎を浴びて、灰すら遺さず燃え尽きた。

ゾルカは、仲間を助けられなかった。

自分の魔法など、あの赤き竜に対しては、何の効果も見せなかったのだ。

「ほとんど空気だったゾルカ殿が、仇の1人だなんて。おこがましくってローラ笑っちゃう」

「……はつきりと言ってくれるものだな」

ゾルカのその呟きは、もう聞こえてはいないだろう。ブラックローラの姿は、もはや見えない。

ゾルカは息をついた。

元々はダルーハ・ケスナーを討つために造り始めた、魔法の剣と魔法の鎧である。

ダルーハを倒すためには、部隊規模の数を揃えるべきだ。そう助言をくれたガイエル・ケスナーを倒すには、しかし部隊程度の数で足りるかどうか。

木陰からゾルカは、戦いの行われていた川辺を見やった。

リムレオン・エルベットの全身で、魔法の鎧が光に戻り、竜の指輪へと吸収される。

生身に戻った少年が、攻撃魔法兵士の少女と裸の子供3人を促し、立ち去ろうとしている。

「ガイエル・ケスナーと戦え……とまで無茶を言うつもりはない」  
聞こえぬ小声で、ゾルカは語りかけた。

「だが、蠢き始めた魔獣人間どもの相手くらいはお任せしたい……頼むぞ、リムレオン殿」

「5公5民、だと……」

サン・ローデル地方領主バウルフアー・ゲドン侯爵は、思わず、領主の椅子から腰を浮かせてしまった。

5公5民とは字の如く、領民の収穫物のうち5割を税として徴収、5割を民の取り分とする税率で、前国王ディン・ザナード3世の健在なる頃は6公4民、7公3民が当たり前であった。当然その6公あるいは7公には、地方領主の取り分も含まれる。

「馬鹿な……女王陛下は我ら地方貴族に、飢えて死ねと仰せられるか」

「民が飢えて死ぬようでは国が成り立たぬ。陛下は、そのようにお考えです」

王宮からの使者が、バウルフアーの面前で跪きながらも、挑戦的な口調で述べる。

「お隣メルクト地方のカルゴ・エルベット侯爵様は、実質4公6民

の暮らしをなさっておられます。メルクトよりも豊穡なるサン・ロ  
ーデルの御領主に、それがお出来にならぬはずはございますまい」  
貴族とは、領民に威光を示さなければならぬ。そのため、生活  
にも金をかけなければならぬ。

あの愚かな義弟はそれを全く理解せず、ただ民を甘やかしている。  
18年前に妹のヴァレリアを嫁がせたは良いが、あの柔弱な割に  
頑固なところのあるカルゴ・エルベツトは今ひとつ、義兄バウルフ  
アーの思い通りになろうとしない。

エル・ザナード1世の即位によって女王の伯父となってしまった  
カルゴが、この先も何かと義兄の意に反した行動を取るであろう事  
は、容易に想像がついた。

「御返答はいかに？ バウルフアー・ゲドン侯爵様」

跪いた使者が、まっすぐにバウルフアーを見上げ、言った。

「4公6民、将来的には3公7民。それが国としてあるべき姿であ  
ると女王陛下は仰せです。この度の戦災からの復興も行わねばなり  
ませぬゆえ5公5民。地方領主の方々にもぜひ御理解と御承諾をい  
ただきたいと」

「承諾……以外の選択肢など、ないのであろう」

バウルフアーは呻いた。

あの女王が、己の正しいと思った事のためならば殺戮をも辞さぬ  
性格である事は、身に染みている。

息子を1人、眼前で殺されているのだ。

末子のセリウスは、確かに愚劣極まる息子だった。先のダルーハ・  
ケスナー討伐戦において、民にいくらか迷惑をかけた。

それはしかし金で補償なり何なりをすれば済む話であって、弁明  
の機会すら与えず斬り殺すなど、王族の暴虐以外の何物でもない。  
あの場でバウルフアーがそう声を上げる事が出来なかったのは、  
女王……その時はまだ第6王女であったが、とにかく彼女の近くに  
ガイエル・ケスナーがいたからだ。

どうせ美貌と肉体で手懐けたのであろう。ダルーハの息子である

怪物を傍らに置いて、あの小娘はとにかく好き放題に振る舞っていた。

それは、女王となった今も同じだ。

5公5民などという、地方貴族への嫌がらせとしか思えぬ政策に、一言でも異を唱えたが最後。ダル―ハ軍を単独で圧倒していた、あの怪物がやって来て、バウルフアーもゲドン家の一族も皆殺しにされてしまう。

「賢明なるバウルフアー・ゲドン侯爵様の、国と民を思いやるその御心……女王陛下も御喜びになるでしょう。それでは」

使者がそんな事を言いながら、領主の間から退出して行く。

言葉もかけず見送りつつバウルフアーは、ただ暗い思いを胸中で渦巻かせていた。

（小娘が、好き勝手な事を……！）

エル・ザナード1世女王自らがダル―ハ・ケスナーを討ち取った。などと愚かな民衆は騒いでいるようだが、そんな事はまず有り得ない。

あの怪物にダル―ハを殺させて、手柄と名声は自分のもの。

それが、王女であった頃からの、あの小娘のやり方なのだ。

「あの化け物……ガイエル・ケスナー！ あやつさえ、いなければ……！」

バウルフアーの独り言に、何者かが応えた。

「その怪物は、今は女王の傍にはおりません」

若い女、の声である。

領主の椅子の傍らに、いつの間にか、その尼僧は立っていた。

「が……女王の身に何事かあれば、再び姿を現さないとも限りませんわ」

凹凸の見事な身体を、唯一神教の法衣で禁欲的に包み込んだ、若い娘。

被り物から溢れ出した銀色の髪は、光の当たり方によっては白髪にも見えてしまう。が、美貌は若々しい。冷たく鋭く整ったその顔

立ちは、人形のようにもある。

衛兵たちが、慌てふためいた様子で槍を構えた。

彼らに気付かれる事なく領主の間に侵入し、バウルフアーの近くに立った、その若い尼僧が。人形めいた冷たい美貌を、ふっ……と微笑ませた。

「お静かに……私が領主様に害意ある者であれば、わざわざお声をかけたりはしません」

「……では、何者であるか」

バウルフアーは、どうにか声を出す事が出来た。

この尼僧が、あの女王の放った暗殺者か何かであったなら。確かに自分は今頃、生きてなどいない。

「私どもといたしましても、逆賊ダルーハ・ケスナーに擁立されたる女王を認める事は出来ません……同じ心をお持ちの方々が、地方貴族の中には大勢おられます」

その豊麗な肉体を、椅子の上の領主に寄せて、尼僧が囁く。  
形良い唇から紡ぎ出される声が、バウルフアーの耳元を涼やかにくすぐる。

「例の怪物の事でしたら、どうか御心配なさいませぬように。貴方様のような真に王国を憂える方々のために、私どもは戦力を用意しております。怪物には、怪物……魔獣人間という、戦力をね」

「魔獣人間だと……」

先の戦で、ダルーハが使っていた怪物たちである。

その中には、ガイエル・ケスナーをかなりの所まで追い詰めた者もいた。とバウルフアーは聞いている。

「そなた……一体、何者なのだ」

2度目の問いかけに、その尼僧はようやく答えた。

「メイフェム・グリムと申します……以後、お見知りおきを」

## 第19話 戦乱胎動

ゾルカ・ジェンキムの言った通りになった。

バルムガルド王国が、ほぼ宣戦布告に等しい事を言ってきたのだ。前国王による正式な指名と臣民の支持を得たわけでもなく、ただ逆賊に擁立されたまま玉座に居座っている女王など、バルムガルドとしては認める事が出来ない。エル・ザナード1世は即刻退位し、正当なる王位継承者シーリン・カルナヴァートに王冠と玉座を返還すべし。血縁国ヴァスケリアに正義と秩序をもたらすため、我が国は武力の行使をも辞さぬであろう。

などと偉そうに告げたバルムガルドの使者に、ティアンナは出来る限り高圧的にならぬよう言葉を返した。

誰に擁立されたものであれ、国王をそう容易く替える事は出来ない。ヴァスケリアにはヴァスケリアの事情がある。他国の事情を一顧だにせず武力を振りかざし、自国の都合を押し付ける。それが本当に正義と秩序をもたらす事になるのかどうか、今一度の御賢慮をバルムガルド国王にはお願い申し上げる。と。

それと同じ内容の書簡を使者に持たせ、バルムガルドへと帰した。どのような返答をしたところでバルムガルド側は、最終的にはなすりわり構わず、ヴァスケリアの侵略併吞を強行しようとするだろう。現王エル・ザナード1世の政権を武力で打倒し、シーリン・カルナヴァート元ヴァスケリア第4王女を傀儡の新女王として擁立する。あくまでもヴァスケリア王国のため、という立て前を押し通すために。

エンドウール王宮の城壁に立ち、王都の街並を見下ろしながら。ティアンナは、幼い頃に王宮の一角で目の当たりにした、ある光景を思い起こしていた。

母マグリアに様々な嫌がらせをしていた後宮の女たちの、筆頭とも言うべき正王妃が、馬車の事故で死んだ。



その正王妃の棺にすがりついて痛々しく号泣していた、1人の若い王女。

ティアンナにとってはろくに口もきかぬ姉の1人に過ぎなかった、あの少女が、第4王女のシーリン・カルナヴァートであった。それを知ったのは、かなり後になってからだ。

政略の道具としてバルムガルド王家に嫁いだあの姉が、傀儡の女王としてヴァスケリアに帰って来る、かも知れないのだ。

足音が聞こえて来た。あまり武術武芸とは縁のない人間の、足運びである。

「復興も、だいぶ進んでおるようすな。女王陛下」

モートン・カルナヴァート元第2王子だった。

ティアンナと並んで城壁に立ち、王都を見下ろしている。

「……が、おかげで王宮の財政は火の車です。その上、税が5公5民などと」

ダル・ハ軍によって半ば廃墟となった街のあちこちで、民たちが忙しく活発に動き回っている。

それを眺めながらモートンが、ぶつくさと漏らした。

「せめて6公4民にとどめておけば良いものを……」

「それでは民が、やる気をなくしてしまいます」

最終的には3公7民くらいに税を安定させたい、とティアンナは思っている。

民がやる気を出して働いてくれなければ、国が保てなくなる。

そうなった時に最も困窮するのは、民ではなく、まず王侯貴族なのだ。

「それより兄上には1つ、お訊きたい事があります」

母親の異なる兄の方を、ティアンナはちらりと向いた。

「私の姉上……シーリン・カルナヴァート元第4王女とは、どのような人だったのでしょうか。傀儡として担ぎ上げられての王位を、喜ぶような方なのでしょうか」

「あれは本当に気だての良い妹であった。お前と違ってな」

モートンの口調が、兄としてのそれに戻った。

彼とシーリンは同腹の兄妹。馬車の事故で死んだ正王妃の、息子と娘である。

「シーリンがこの国の王位を望んでいるのか否か、そんな事は問題ではあるまい。あれの意思など考慮する事もなくバルムガルドは、国を挙げて担ぎ上げようとしているのだから。下りたくても、下ろしてはもらえまいよ」

「……でしようね、確かに」

女王として政治を始めてから1つ、ティアンナが気付いた事がある。

それはこの兄が、世間で言われているほど無能者ではなかった、という事だ。

とりあえず国王補佐のような仕事をやらせている。

伊達に王族として自分より長く生きてはいないな、とティアンナに思わせるような助言を、本当に時折にだが、してくれる事がある。「まったくバルムガルドと言い、あのダルーハと言い、世の者どもは面倒事ばかり引き起こしてくれる……私は捨て扶持をもらって安穩と暮らしたいと言うのに」

「そのように、なめた事をおっしゃらず……兄上が王位を継いでさえ下されば、バルムガルドが妙な難癖を付けてくる理由も無くなりますのに」

ダルーハ討伐の後から、この兄はずっと王位から逃げ回っている。「なあティアンナよ。一国を統治する者にはな、わかりやすさというものが必要なのだ。特にこういう大変な時期においては」

モートンが、それらしい逃げ口上を述べ始めた。

「逆賊ダルーハ・ケスナーを自ら討伐した武勇の姫君が、女王となつて自分たちを導く……民衆にとって、これほどわかりやすい話はあるまい？ 私では駄目だ。ヴァスケリア国民から見たモートン・カルナヴァートとは、諸侯と王国正規軍を率いてダルーハを攻めながら無様に敗れた、無能王子でしかない。そんな者が国王になった

ら、民は不安で仕方なからうが」

「兄上、ダルーハ卿を討ち取ったのは私ではなく」

「真実がどうであるかは問題ではないのですよ、女王陛下」

モートンの言葉遣いが、臣下のそれに変わった。

「国民の目にどう映ったかが全てなのです。政治とは、そういうものでありましょう……ダルーハ軍との戦において、常に陣頭に立っておられた貴女の姿を、民衆は見ております」

常に陣頭に立って戦い、魔獣人間には勝てずに無様な姿を晒し続けてきたティアンナ。

と同じくらいには先頭に立って戦い、その圧倒的な力でダルーハ軍を圧倒していた1人の若者。

彼に関して、民衆は不思議なほど騒ごうとしない。

ダルーハを討ち取ったのはティアンナである、などという話にもなっている。

情報操作のようなものを、ティアンナは感じずにはいられなかった。何者かが、そのような噂を、王国全土に流布している。

とすれば、それは誰か。

いくら何でもモートンに、そのような事をする政治能力があるとは思えない。

(……貴方ですか、ゾルカ殿)

ゾルカ・ジェンキムは今、王宮にはいない。しばしメルクト地方にとどまる、と言っていた。

自分の作品である魔法の鎧の力を、もう少し見届けたいのだろう。とティアンナは思っていたが、そのついでに何かしら政治的な暗躍をしているのかも知れない。

が、仮にゾルカがそのような情報工作をしているのだとしても。

民衆や兵士たちの中には、あの人間ではない若者の戦いぶりを直接、目の当たりにした者もいる。

女王エル・ザナード1世は、魔物を飼っている。女王の背後には、怪物がいる。などという噂になってしまうのは、止められない。

モートンが1つ、咳払いをした。

「……つまりらぬ事を考えておられますな、女王陛下」

「つまりらぬ事……とは？」

「陛下を快く思っておらぬ者たち……特に地方領主どもは、陛下ではなくガイエル・ケスナーを畏れております。この肝心な時に行方知れずな馬鹿怪物の、幻影を」

ティアンナは思う。もし今、ガイエル・ケスナーが傍にいてくれたら。

自分は間違いなく、彼の力を後ろ楯として、地方領主たちに無理難題を押し付けていただろう。それこそ2公8民くらいの税制改革を強行していたかも知れない。無論その2公の中に、地方貴族の取り分などはない。

文句を言う者がいたら一族皆殺しの上、財産は没収し、戦災の復興に充てる。

（貴方なら、そのくらいの事……頼んでもいないのに、して下さるかも知れませんね。ガイエル様）

幸か不幸か彼は今、王宮にはいない。

にもかかわらず地方貴族たちは、いない者の影に怯え、ティアンナの命令に従っている。

女王の命令に逆らったら、あの人間ではない若者を差し向けられる。

特にバウルファー・ゲドン侯爵などは、そんなふうにいる事だろう。

皆、女王エル・ザナード1世ではなく、ガイエル・ケスナーを畏れている。

女王自身には、何の威光も力も、ありはしないのだ。

「御自身には何の威光も力も無い。などと思っておられるのでしよう。そんなつまりらぬ自尊心・自立心など、この城壁から投げ捨ててしまいなさい」

妹に張り倒されて鼻血を流していた人物とは思えぬほど、モート

ンの口調はしっかりと力強い。

「利用出来るものは、徹底的に利用なされば良いのです。この場にいる者の、幻影であろうと」

「ガイエル様の、幻影を……」

「女王陛下に従わぬ者は、あの怪物に殺される……勝手にそう思っ  
てくれるなら、思わせておけばよろしい。腹黒い地方領主どもが、  
それで言う事を聞いてくれるのなら安いもの。いない者を役に立  
て、くらいのしたたかさは、お持ちになるべきですぞ」

「……私、思います。やはり国王にふさわしいのは、兄上の方であ  
ると」

皮肉ではなく本心から、ティアンナは言った。

ふん、とモートンが鼻で笑った。

「馬鹿を言うな。私はただ、安穩と暮らしたいだけ……お前には一  
日も早く王国を立て直して税収を安定させ、私がのんびり生活出来  
るだけの捨て扶持を捻出してもらわねばならんのだ」

「兄上は有能な副王であられます。捨て扶持で楽隠居など、させは  
しませんよ」

にっこりと、ティアンナは苦笑した。

そう言え。この兄を女王補佐の地位へと強く推薦したのも、ゾ  
ルカ・ジェンキムだった。

メルクト地方、領主の城。

練兵場の方から、何人かの兵士が、担架を担いで和気あいあいと  
歩いて来る。

皆、笑ってはいいるが。カルゴ侯爵が途中で見ていられなくなるほ  
ど過酷な軍事訓練を終えた、直後なのだ。

担架で運ばれているのは、死体、のようにも見える。死者が出る  
ほどの訓練など、許可した覚えはないのだが。

「おう、これは侯爵閣下」

特に大柄な壮年の兵士が、カルゴに気付いて敬礼をした。筋骨たくましい裸の上半身には、幾本もの細かな傷跡が、縦横に刻み込まれている。

首から上は、まるで獅子だった。頭髮と頬髭と顎髭が全て繋がって、たてがみのように顔面を囲んでいるのだ。

その獅子のような厳つい顔面にも、一筋の古傷が走っている。

メルクト地方守備軍司令官、ブレン・バイアス兵長である。35歳。先代レミオル侯の頃から、エルベツト家に仕えている。

彼の部下である兵士たちも、担架を担いだままビシッと敬礼をした。

カルゴは、とりあえず片手を曖昧に掲げて応えた。

「いやあ、若君は思いのほか頑張っておられますぞ」

嬉しそうな声を出しながらブレン兵長が、兵士たちに身振りで指示をする。

それに従って兵士たちが、担いでいた担架を、そっと石畳の上を下ろした。

横たわっているのは、死体……ではなかった。死体寸前といった様子の、1人の少年である。

見るからに鍛え方の足りぬ、か細い身体のあちこちに、包帯が巻かれている。

娘のようでもある柔和で繊細な顔は、痛々しく腫れ上がっていた。リムレオンである。

死体の如く気絶して動かぬ息子を見下ろしながら、カルゴは言った。

「……訓練の邪魔になるようであれば、放り出してくれて一向に構わんのだぞ」

「何の、邪魔なものですか。いやはや実に鍛えがいのある若君であらせられます」

ブレンの口調も表情も、明るい。その明るさの根底に、しかし重い何かがある。

十数名もの部下を、彼は失っているのである。

数日前、城の近くの川で水遊びをしていた子供たちが、オークとギルマンの群れに襲われた。

そこへブレンの配下の兵士たちが駆けつけ、勇敢に戦って子供たちを守り抜いたものの。自分たちは怪物の群れと刺し違える形で全滅し、1人も生き残らなかったという。

リムレオンはそう語り、その場にいながら何も出来なかった事を恥じていた。

その前日にも、似たような事があった。

何と、城の庭園に怪物どもが侵入し、母の墓参をしていたティアンナ女王を襲ったのだという。

ティアンナが自力でその怪物たちを倒し、リムレオンは傍にいながら何も出来なかった。

リムレオン自身が、そう語っていた。

息子の話には少々、怪しいところがある。とカルゴは思っているが、十数人もの兵士が怪物どもに殺害されたのは事実だ。

死んだ部下たちに関して、ブレン兵長は何も語らない。

ただ生き残っている兵士たちに、以前とは比べ物にならないほど厳しく過酷な戦闘訓練を課すようになった。

ここ何日かの間、守るべき領内で怪物どもに跳梁跋扈され、配下の兵隊からも犠牲者が出た。

部下を死なせないためには、訓練を厳しくするしかない。とでも思い込んでいるのだろう。

その訓練に、リムレオンが参加を志願したのだ。

「若君は、お強くなれますぞ」

勇猛苛烈なる前領主レミオル侯爵に対してすら、お世辞や追従を言う事のなかったブレン兵長が、はつきりと言った。

「いかなる過酷な訓練をも、ひたむきに受け入れる強さを、若君はお持ちです。やはりレミオル侯のお孫であられますなあ」

それに比べてレミオル侯の息子である貴方は、少しばかり頼りな

い。

そう言われているような気分、カルゴはなった。まあ、事実なのだが。

「……御苦勞であつた。リムレオンなど、この場に置き晒しで良い。そなたらは休め」

「いえ、これより領内の見回りに参ります。怪物どもがどこから湧いて出るのか、つきとめねばなりませんゆえ」

猛訓練の疲れも見せぬまま兵士たちが、ブレン兵長に率いられて整然と立ち去って行く。

見送るカルゴの足元で、

「う……ん……」

リムレオンが、ようやく意識を取り戻した。

「ブレン兵長……じゃなくて、あれ……父上？」

「兵長は忙しい。お前の面倒など、見ておれぬそうだ」

担架の傍らにカルゴは屈み込んで、息子と目線の高さを近付けた。

「……なあリムレオンよ。お前、やはり強くなりたいのか？」

愚問である事は、カルゴとて百も承知だ。

男が、身体を鍛える。そこに、強くなりたい、以外の理由などあるわけがない。

「お前の祖父レミオル・エルベツト侯爵のように……強くなりたいか、やはり」

「お爺様の事は、よく知りませんが……」

リムレオンの腫れ上がった顔に、いくらか困ったような表情が浮かんだ。この息子が物心つく前に、レミオル侯は亡くなっている。

メルクト地方先代領主レミオル・エルベツト侯爵は、武勇の騎士として知られた人物だった。

物事を全て武勇で解決する傾向のある父レミオルを、カルゴは幼少の頃から、どうにも好きになれなかったものだ。

好きにはなれないという感情が、憎悪に近いところまで深化したのは、やはり妹マグリアが貢ぎ物同然に、国王の後宮へと入れられ



た時である。

とにかく、横暴な父親だった。

「お前にはな、私の父のようにだけは、なって欲しくなかった。だから武勇とは出来る限り縁のない育て方をしてきたが……」

語りながら、カルゴは溜め息をついた。

懸命に身体を鍛えようとして包帯だらけになっている息子の姿を見ると、本当に、何とも言えない気分になる。

「今になって、お前のそんな有り様を見る事になるのなら……やはり幼い頃から無理矢理にでも、武芸の鍛錬をさせておくべきだったのかも知れんな。お前がそんなに、強くなりたいと思っているなら」  
「僕は……強くなりたい、というのは、ちよつと違うかも知れません」

痛そうに辛そうに、リムレオンは担架の上で上体を起こした。

「ただ……もう1人の僕に、あまり大きな顔をさせておきたくないだけです」

「……何を言っている？」

「僕ではなくなってゆく、もう1人の僕が……何だか偉そうにしているから」

わけのわからぬ事を言いながら、リムレオンは苦笑した。

「……すみません父上。何言ってるのか、よくわかりませんよね」

「全くわからんな」

それでもいい、とカルゴは思う。

この年頃の少年は、親には決してわからないものを、見たり感じたりするものだ。

息子の右手の中指が、キラ……ッと微かな光を反射した。

指輪、である。小さな細長い竜の形をした指輪が、リムレオンの中指に巻き付いているのだ。

ティアンナから贈られたもの、であるらしい。従妹である女王陛下からの、賜り物というわけだ。

仲の良い従兄妹同士、以外の感情が、息子と姪の間にあるのかど

うか。カルゴには、わからない。

ただリムレオンが、こんなふうにして懸命に身を鍛えようとしている。その根底には、ティアンナを守りたい、という青臭い思いが、全くない事はないだろう。

自分は、妹を守れなかった。

あの身も心も弱いマグリアが、父に命ぜられるまま後宮に入り、健康を損ねて帰郷し、そして死んだ。

自分は、あの妹のために、何もしてやれなかったのだ。

召使いの1人が、おずおずと声をかけてきた。

「領主様に若君様。御昼食の用意が、整いましてございます」

「うむ、御苦労」

応えてから、カルゴは立ち上がった。

リムレオンは担架の上で、まだ上体だけを起こしたままだ。

構わずカルゴは背を向け、歩き出した。一言だけ、息子に声をかけながら。

「自力で立って、歩いて来い」

「……這いずって行きますよ」

などと言いつつもリムレオンは、どうにか立ち上がったようだった。

カルゴは、足を止めた。息子を、やはり待っていてやろう。と思ったわけではない。

男が1人、前方で跪いている。恭しく、だが明らかにカルゴの行く手を阻む形に。

粗末な服を着た、近隣の農民。に見える。勝手に城に入り込んでまで、何か陳情にでも来たのであろうか。

跪いて頭を垂れているので、顔はわからない。若者か、中年か。

「カルゴ・エルベツト侯爵様……伝言でございます」

拝跪したまま、その男が言った。とりあえず、カルゴは応じた。

「……誰からの、どのような伝言であらうか？」

「我が主君バウルフアー・ゲドン侯爵より」

義兄の名が出た。

妻ヴァレリアの兄。だからと言って義弟の治めるメルクトを属領扱いするような言動が多く、カルゴとしては、あまり好きになれない人物である。

その義兄が、また何か無理難題を押し付けようとしているのか。勝手に城内に忍び込んで来るような使者を放って。

「メルクト地方の生産力を、速やかに提供すべし……逆賊に擁立されたる僭王エル・ザナード1世を討ち、ヴァスケリアに正当なる秩序を取り戻すべく……義兄と共に、戦うべし……」

声帯をおかしな具合に痙攣させながら、その使者はようやく顔を上げた。

人間の顔、ではなかった。

血走った両眼は赤く燃え上がり、顔面の下半分は、獣の鼻面の如く張り出して牙を剥いている。

その牙の間からは、目に見える赤色の吐息がチロチロと漏れ出していた。

炎、である。

犬のようにハッハッと息荒く炎を漏らす、その口が。牙を剥き出しにしつつも、流暢な人間の言葉を吐く。

「女王の伯父たる貴方であれば、担ぎ上げるに申し分なし……」

「侯爵閣下、お下がりを！」

兵士たちが、どこかかと駆け戻って来ていた。

先頭に立つブレン兵長が、カルゴを押しつけるようにして突っ込んで来る。

そして、大型の戦斧を振り下ろす。巨体の兵長にふさわしい、豪快な武器だ。

その重く鋭い一撃を、しかし獣の顔をした男は、跳躍してかわしていた。

くるくると宙返りをしながら、その身体が空中で一回り近く膨れ上がり、衣服をちぎって飛び散らせる。

着地した時、その男はもはや完全に、人間ではなくなっていた。全身、ザラザラとしていながらも滑り気を帯びた、爬虫類的な皮膚に覆われている。

脚は2本だが腕は6本、それぞれ鋭いカギ爪を生やしており、人間など容易く引き裂いてしまえそうだ。

首から上だけは、爬虫類ではなく、哺乳類の猛獣。両眼を爛々と赤く輝かせ、炎の吐息を漏らし続ける、魔獣の頭部である。

6本腕のその巨体は、いくらか前屈みで猫背気味だ。その体型は、蜘蛛のようでもある。

食事の時間を告げに来た召使いが、腰を抜かして悲鳴を上げた。リムレオンがよろよろと立ち上がり、彼を背後に庇おうとする。何も出来ないのに、無茶をする。この息子には昔から、そういうところがあった。

怪物が、名乗った。

「我が名は魔獣人間バジリハウンド……バウルフアー侯の義弟殿、貴公をお迎えに参った」

「魔獣人間、だと……」

その名は、カルゴも聞いた事があった。先の戦でダルーハ・ケスナーが使っていたと言われる、怪物である。

それが何故か、バウルフアー・ゲドン侯爵の名を口に出しているのだ。

「私を旗頭に担いで、女王陛下に反旗を翻そうと。そのようなおつもりか、義兄上は」

「専横を極めたるエル・ザナード1世女王のために、忠心を持って戦う者などおらぬ……バウルフアー侯と貴殿が力を合わせ、我ら魔獣人間を率いてお起ちになれば、必ず勝てる。さあ、共に来られよ」

「怪物風情が、世迷い言を！」

ブレン兵長が再び戦斧を掲げ、魔獣人間に挑みかかる。

バジリハウンドがそちらを向き、口を開く。

漏れ続けていた炎の吐息が、膨張し、迸った。

筋骨たくましいブレンの身体が、戦斧を構えたまま石畳に転がり込み、炎をかわす。

巨体に似合わぬ敏捷さでブレンが再び立ち上がった、その時には。兵士たちが槍を構え、長剣を抜き、魔獣人間バジリハウンドを取り囲んでいた。

「鬱陶しくも群れおるわ……いくら鍛えたところで、大して強くもなれぬ！ 脆弱な人間どもがあーッ！」

わめき声と共に、バジリハウンドは炎を吐いた。

全方向に吐き散らされた火炎の息を、兵士たちが巧みにかわす。かわしながらも猛然と踏み込んで行く者がいる。

「もはやメルクトで好き勝手はさせぬ！ 怪物どもがあああああっ！」

ブレン兵長だった。

熊を思わせる重量級かつ高速の踏み込み。と共に、大型の戦斧が振り下ろされて魔獣人間の頭を殴打する。

ガスッ……と、微かな血飛沫が散った。人間であれば脳漿が飛び散るであろう一撃でだ。

「うぬ……っ」

バジリハウンドが怯み、よろめきつつも踏みとどまり、ブレンに逆襲して行く。

6本腕の魔獣人間と、巨漢の兵長。2つの巨体が、ぶつかり合った。

ぶつかり合った瞬間、バジリハウンドは投げ飛ばされていた。

6本腕の巨大な異形が、豪快に宙を舞い、真っ逆さまに石畳へと叩き付けられる。

人間であれば、首の骨が折れているか、頭蓋骨が割れているであろう。魔獣人間は、ただ倒れて呻くだけだ。

そこへブレンが、思いきり戦斧を振り下ろす。

兵士たちも、倒れた魔獣人間に容赦なく殺到し、槍や長剣を突き込んでゆく。

めった刺し、めった斬りが行われようとした、その時。

仰向けに倒れたバジリハウンドの、赤く輝いていた両眼が。色を青に変えつつ、さらに激しく輝いた。

青く燃え上がる眼光が、魔獣人間の顔面から溢れ出し、迸り、殺到する兵士たちに浴びせられる。

今まさに戦斧を振り下ろす寸前で、ブレン兵長が動きを止めた。

兵士たちも、槍や長剣を振りかざし振り下ろそうとする姿勢のまま、硬直した。

皆、凍り付いたように固まってしまった。

いや、凍り付いたのではなく……石化、している。

ブレンも兵士たちも、石像と化していた。得物を振り上げた姿の、猛々しい戦士たちの石像だ。

「……と、まあ。このような事でございますよカルゴ侯」

石の戦斧や槍、長剣をくぐり抜けるようにして、バジリハウンドが起き上がる。

青く燃え上がっていた両目の色は、落ち着いたように赤色に戻っていた。

「人間ごときが我ら魔獣人間に刃向かうとは、すなわち！　こういう事……おわかりいただけたなら、さあ共にバウルフアー侯のもとへ参りましょうぞ」

「義兄上が……」

声が、表情が、震え引きつってゆくのを、カルゴは止められなかった。

ブレン兵長と兵士たちは、石像となって絶命したのか。生きたまま元に戻す事は、出来るのであろうか。

「お前たちのような怪物を……配下にしておられる、と言うのか……」

「……数日前……叔母上の墓前に現れたのも、この魔獣人間という者たちです」

よろよろと立ったまま、リムレオンが言う。

「ティアンナとシェファを脅かした、怪物たち……その背後に、まさか伯父上が……」

そんな事はどうでも良い、何故さっさと逃げておらぬか。

そう怒鳴ろうとするカルゴに、リムレオンが、苦しそうに微笑みかける。

そうしながら、右の拳を握る。竜が巻き付いたような指輪を中指にはめた、華奢な拳。

その指輪が、キラリと光った。

「見せたくないけど……お見せしますよ、父上。偉そうに大きな顔をしている、もう1人の僕を」

「何を……言っておる……」

息子が恐怖のあまりおかしくなってしまった、とカルゴは思った。構わずリムレオンが、わけのわからぬ事を言い続ける。

「僕ではなくなってゆく……もう1人の、僕を」

「ふむ、御子息か」

魔獣人間の注意が、ついに息子にも向けられてしまった。

「すなわちエル・ザナード女王の従兄……利用価値があるかも知れぬ。貴公にも御同道願おうか」

「僕になんか……何の、価値もない……」

弱々しく微笑みながらリムレオンは、がくりと膝から崩れた。

崩れ落ちるように身を屈めながら……右の拳を、足元の石畳に打ち下ろす。

「……武装転身……ッ」

リムレオンの、謎めいた呟きと共に。竜の指輪を中指に巻き付けた拳が、石畳を殴る。

その拳から、指輪から、光が広がった。

白い、光のインク。それが、石畳の上に、円形の紋様を描き出す。よくわからぬ文字・図形・記号などを内包した、光の真円。

それが、燃え上がるように白色の輝きを強めてゆく。

片膝と拳をついたリムレオンの身体が、下方から強烈に照らされ

ながら、白い光に包まれる。

「む……？」

魔獣人間バジリハウンドが、その光に圧されて、少しだけ後退りをした。

白い光は、すぐに消えた。石畳の上に出現していた。光の紋様もだ。

そして、リムレオンの姿も消えていた。

代わりに。1人の騎士が、その場に跪いて、右拳を地面に打ち付けている。

白い、豪壮な全身甲冑に身を包んだ、仮面の騎士。

「お前たち魔獣人間に、1つ訊いてみたい……与えられた力を振るかざすのは、そんなに楽しい事か？」

面頬の内側から発せられる声は、紛れもなく、息子リムレオンのものだった。

「僕も、この力を振るっているうちに……お前たちのように、なってしまうのか？」



## 第20話　ダーク・プリーステス

人間の持つ魔力など、たかが知れている。

幼い頃から、魔術師としての修行に打ち込める環境にある者ならばともかく。金も人脈も無い普通の人間が魔法関係の仕事をすると思うったら、攻撃魔法兵士になるしかない。

そして攻撃魔法兵士になった者が、まずやらされるのは。たかが知れている人間の魔力を地道に高めてゆく修行ではなく、魔石という便利な道具の使い方に習熟する事。それと、発射した攻撃魔法を標的に命中させる訓練である。

火の玉が当たれば焼け死んでくれる人間相手の戦いならば、それでも良かった。

が、人間ではないものを相手に戦うには。

メルクト領主の城、庭園の一角で。シェファ・ランティは魔石の杖を、突き込む寸前の槍のように構えていた。

城の関係者であれば、ある程度は自由に歩き回っても良い事になっている。

シェファの前方、いくらか距離を隔てた所に、巨大な岩がある。

それに魔石の杖を向けたままシェファは、己の乏しい魔力を、杖の先端の魔石へと収束していった。

ただ気合いにまかせて火球をぶっ放したところで、人間ではないものに痛撃を与える事は出来ない。

少ない魔力ならば、せめて絞り込むべきなのだ。細く、鋭く、そして固く。

魔石が、ぼんやりと赤く輝き始めた。その輝きが、

「……はっ！」

シェファの気合いに合わせて一瞬、激しく燃え上がる。

燃え上がった真紅の光が、ピ……ッと筋状に細く束ねられて、宙を奔った。

炎、と言うよりは高熱そのもの。

それが、一筋の線となって魔石から走り出し、まっすぐに伸び、そして大岩に突き刺さる。

赤い光は、すぐに消えた。

岩に、小さな穴が穿たれていた。そこから細かな亀裂が、何本か広がっている。

拍手が聞こえた。

「見事……なかなかのものだ。ほんの僅かな修行で、それを出来るようになるとは」

はっ、とシェファは振り返り、睨んだ。

木陰から、1人の男が姿を現したところである。

灰色のローブを着た、穏和だが一癖ありそうな中年男……確かゾルカ・ジェンキムとか名乗っていた、魔術師である。

「覗き見……してたの……」

魔法に関しては大先輩である人物を、しかしシェファは睨みつけていた。

「あんた方、本物の魔術師から見ればゴミ、みたいな攻撃魔法兵士が。一生懸命、修行の真似事してるとこ……覗いて、面白がってたわけ」

「そんなつもりはない。たまたま通りがかって視界に入ってしまっただけだよ」

「たまたま通りがかった？ 領主様の、お城の中を？」

シェファは思わず魔石の杖を、ゾルカに向けてしまっていた。むやみに人に向けてはいけない、と教わってはいるのだが。

「あたし一応、このお城で働かせてもらってるから……侵入者は取り締まんなきゃいけないのよね、おじさん」

「侵入しやす過ぎなのだよ、この城は」

図々しく見回しながら、ゾルカが言う。

「ダーハが死んだからとて平和になったわけではないという事、御領主には申し上げておかねばならんかな」

「何しに來たの……」

敵意剥き出しで訊きながらもシェファは、何となくわかっていた。この魔術師が、何用あってこの城に不法侵入を働いたのか。誰に用事があるって、メルクトにとどまっているのか。

「何で……リム様の周り、うろついてんのよ……」

「心配かね、彼が」

無遠慮な事を、ゾルカが訊いてくる。

シェファは思わず、怒鳴っていた。

「一体何なの！　どういうつもりよ！　リム様を変な事に巻き込んで！」

強制したわけではない、彼が自分で選んだ道だ。などとゾルカ・ジェンキムは言うつもりだろう。

このところリムレオンは、無謀にもブレン・バイアス兵長の訓練に参加している。そして毎日、ぼろ雑巾のようになっている。

あの脆弱で可愛い若君が、戦いなど始めようとしている。

彼がこんな道を歩み始めるよう仕組んだのは、このゾルカという男であり、あの腹黒い女王なのだ。

「彼が自分で選んだ道……などと言うつもりはない。仕組んだのは私なのだから」

悪びれもせず、ゾルカは言った。

「許せぬなら、あれを……私に向かって、試してみると良い」

穴の穿たれた大岩を、ゾルカはちらりと見やった。

「やはり攻撃魔法というものは、人を殺さなければ、本当には身に付かないからな」

「あんた……」

「何の抵抗も防御もしない。私を、殺したまえ……それでリムレオン殿が、あの指輪を捨てて平穏な暮らしに戻ってくれれば、本気で思うのならばな」

戻ってくれる、わけがなかった。

何も出来ずにいるシェファに、ゾルカが、腹立たしいほど優しく

語りかけてくる。

「君がこうして修行をしているのは、リムレオン殿を助けたいからか？ そのための力が、欲しいからかな」

図々しいのを承知の上で、ゾルカは訊いているようだった。

「だが魔獣人間と戦えるような力は、修行や鍛錬では、なかなか身に付かないもの……戦う力など身に付けるよりも、出来る事があるとは思わないか」

優しく教え諭すような口調が、シェファは気に入らなかった。

「リムレオン殿を、近くにいて支えてやる……それだって、彼を助ける事になるだろう」

「……戦う力もないのに、どうやって支えろってのよ……」

シェファは呻き、そして叫んだ。

「リム様はねえ、あんたたちのせいで戦いなんか始めちゃったの！ わかる？ 戦う人の近くにしようと思ったら、戦う力がなきや足手まといにしかなんないでしょうが？ 足手まといになりながら支えてあげるなんて出来るわけないでしょうがッ！ そこまで考えてもの言いなさいよね！」

「ふむ……」

気を悪くした様子もなく、傷付いたふうでもなく、ゾルカはただ考え込んだ。

その時。城の方から、物音が聞こえて来た。穏やかならざる喧噪が、伝わって来た。

聞き慣れたブレン兵長の怒声も、聞こえて来る。

歩兵と攻撃魔法兵士の合同訓練の時も、あの巨漢の兵長は、男女差別をする事なくシェファを怒鳴りつけるのだ。

城の方から聞こえて来るこの騒ぎは、しかし訓練によるものではない。

ここ何日かの間、シェファが立て続けに経験させられた……実戦の、喧噪だ。

「……侵入者は、私だけではなかったようだな」

ゾルカの穏和な顔立ちが、引き締まった。

「君とはもう少し話をしたいが、それも後だな……行こう。城内を守る君の仕事を、手伝いたい」

思った通りである。

立ち上がるのも辛い状態だったと言うのに、魔法の鎧を装着した途端、まるで別人の如く身軽に力強く、身体が動く。

否。別人の如く、ではなく完全に別人なのだ。魔法の鎧を、着る前の自分と着た後の自分は。

が、そんな事は関係無しに魔獣人間は現れてしまう。そんな事を気にしている間に、人が殺される。

今回も、また。

魔獣人間バジリハウンドを左拳で殴り倒しながら、リムレオンは見やった。

石像と化した、ブレン兵長と兵士たち。

元に戻す手段はあるのか。ないとしたら、またしてもリムレオンがぐずぐずしている間に人が死んでしまった、事になる。

「僕のせい……なんて思うのは、うぬぼれなんだろうな」

呟きながらリムレオンは、裂け目の入った面頬越しに睨み据えた。よろりと起き上がりつつある、6本腕の魔獣人間を。

「うぐ……わっ若造めが、バウルファー侯に逆らうか」

炎の吐息を口元で揺らめかせながら、バジリハウンドが呻く。

「懦弱なる父親を庇って、偉大なる伯父君に刃向かおうてかあああああああ！」

揺らめいていた炎がゴオッ！ と膨張し、吐き出され、リムレオンの全身を包み込む。

魔法の鎧がほんの少しだけ暖まるのを、リムレオンは感じた。

「……って、駄目だな。まともに浴びてるようじゃ」

こんな炎は、かわせなければならぬ。ブレンや兵士たちが、そ

うしていたように。

かわせなかった炎を突っ切って踏み込みつつ、リムレオンは魔法の剣を抜き放ち、一閃させた。

「ぐがッ……！」

短く悲鳴を漏らしながら、バジリハウンドが後退りをする。

その巨体が斜め一直線に裂け、臓物がドパアッと噴き上がった。人間ならば生きてはいないだろうが魔獣人間は死なず、後退りをしながらもカッ！ と両眼を見開き、リムレオンを睨む。

燃え上がるような赤い眼光が、青く変色しつつ、バジリハウンドの両目から迸ってリムレオンを直撃した。

ブレン兵長らを石像に変えた、邪眼の光。

微かな衝撃のようなものを、リムレオンは全身に感じた。

魔法の鎧が、邪眼の光を弾き散らせた、その衝撃だった。

赤色に戻った両目を見開いたまま、バジリハウンドは愕然と固まった。

そこへリムレオンは、容赦なく斬り掛かって行く。魔法の剣が、バジリハウンドの首筋に向かって振り下ろされる。

そして、跳ね返された。

「な……っ」

ガギインッ！ と固いものに激突し跳ね上がった魔法の剣を、リムレオンは辛うじて握り直した。

目の錯覚、でなければ。魔獣人間の首筋に触れる前に、魔法の剣は跳ね返されていた。目に見えない楯にでも、ぶつかったかのように。

バジリハウンドが何か特殊な防御を行った、わけではないようだ。6本腕のうち4本で腹を押さえ、臓物の噴出を懸命に止めようとしながらも魔獣人間は、何が起こったのかわからぬ様子で左右を見回している。

「魔獣人間1匹の力など、その程度のもの。という事よ」

軽やかに石畳を叩く足音、と共に声がした。

涼やかで耳に心地良い、それでいて聞く者の腹を冷たく決るような、氷の刃物を思わせる女の声。

「それもわきまえず、単独で抜け駆けをしようなどと……おかげで私たちの動きを、女王陛下の伯父君に知られてしまったわ。本来ならば死んで償って欲しいところ」

歩み寄って来たのは、1人の尼僧である。

若い。まだ少女と呼べる年頃、であろうか。

黒いベールと白銀色の髪に囲まれた美貌は、非の打ち所なく整って、どこか人形めいてもいる。

凹凸のくつきりとした身体は、唯一神教の法衣で禁欲的に包まれてはいるが、どこか禍々しいほどの色香は、そんなもので閉じ込める事は出来ずに溢れ出し、漂っている。

戦いを見守っている父カルゴ侯爵に、リムレオンはとりあえず進言した。

「父上……このお城は不法侵入され放題です。もう少し何とかするべきでは」

「そのようだな……」

「お気になさる事ありませんわカルゴ・エルベツト侯爵様。人間の造る城などで、私たちの侵入を阻めはしないのですから」

エルベツト親子にそんな冷たい笑みを向けつつも、その尼僧は、魔獣人間に向かって片手を掲げている。

優美で繊細な五指と掌が、淡く光を発していた。

唯一神教の司祭僧侶の中には、修行を積み、神の力を物理的現象として発現させる技能を身に付けた者が、稀にいるという。

バジリハウンドの身体を、目に見えぬ防壁で守ったのは、どうやらこの尼僧だ。

守られた魔獣人間は、しかし怯えていた。

「め、メイフェム・グリム殿……これは抜け駆けではないぞ。私はバウルファー侯の、正式なる命令を受けて」

「あの御方にも困ったものね。私たちが貸してあげている力を、御

自分のものと勘違いなさって……」

メイフェムと呼ばれた若い尼僧が、そう言いながら、何か念じたようである。

掲げられた織手が、バジリハウンドに向かって、ぼお……つと輝きを強める。

斜めに切り裂かれて臓物を垂れ流していた魔獣人間の肉体に、異変が起こった。

臓物がズルズルと、体内に吸い込まれてゆく。吸い込んだ傷口が、端から塞がってゆく。

神の力、による癒し。魔法の剣による斬撃が、全くなかった事にされてしまった。

「おお、これは……」

完全に傷の癒えた己の肉体を見下ろし、バジリハウンドが感嘆する。

そこへメイフェムが、冷ややかに声を投げる。

「とりあえず、やれるところまで戦って御覧なさい。ゾルカ・ジェンキムの造った魔法の鎧……どれほどのものか、もう少し見極めてみたいから」

彼女が見極めようとしているのは、魔法の鎧の力である。装着者たるリムレオン・エルベットの力ではなく。

そんなものは見極めると言うか、一見の価値すらない、といったところであろう。

「まあ、当然かな……」

苦笑しつつリムレオンは再び、魔獣人間に斬り掛かった。

魔法の剣が、しかしバジリハウンドの身体に達する事なく、不可視の防壁に跳ね返されてしまう。

跳ね返った剣を、リムレオンはいきなり投げつけた。魔獣人間に、ではなくメイフェム・グリムに向かって。

若い尼僧の人形めいた美貌が、ほんの少しだけ緊迫した。

バジリハウンドに向かって掲げていた片手を、メイフェムはとつ



さに己の眼前で構え直す。

目に見えぬ防壁が、メイフェムの面前に出現していた。投擲された魔法の剣が、それに激突し、石畳に落下して空しい音を立てる。

よりも早く、リムレオンは踏み込んでいた。

魔法の手甲をまとう右拳。その一撃が、バジリハウンドの左胸にズン……ッ！ と叩き込まれる。

思った通り、だった。メイフェムが、魔獣人間の援護よりも自身の防御を優先させた結果。バジリハウンドの周囲から、不可視の防壁が消え失せたのだ。

魔獣人間の頑強な胸板を凹ませ、肋骨を砕き、そして心臓を殴り潰す。その手応えをリムレオンは、魔法の手甲の上からハッキリと感じた。

バジリハウンドの口から、ゴボツと大量の血反吐が溢れ出し、くすぶっていた炎の息を消してしまう。赤く燃え上がっていた眼球から、光が失せる。

己の脇腹に肘を打ち付ける感じに、リムレオンは右拳を引いた。

左胸に拳の跡を刻印された魔獣人間の巨体が、崩れるように倒れ、動かなくなる。すでに、絶命していた。

「あら……死んでしまったの？ 魔法の鎧の力、まだよく見ていないと言うのに」

優雅に呆れながらメイフェムが、魔法の剣を拾い上げ、リムレオンに向かって放り投げた。投擲攻撃、ではなく単に放り投げただけだ。

リムレオンの足元で魔法の剣が、石畳の隙間にザクツと突き刺さって立つ。

「仕方がないわね……私が少し、試してみるとしましょうか。ゾルカの作品が、どれほどのものか」

人形のようなだったメイフェムの美貌に、生氣ある表情が浮かんだ。笑み、なのであろうか。

冷たく整った顔立ちが、とてつもなく暗く、禍々しく、歪んだのだ。

「どれほどの力でゾルカが、私たちの邪魔をしようとしているのか……」

そんな邪悪な表情さえもが、ぞっとするほど美しい。

リムレオンは直感した。

少なくとも、あのブラックローラという少女と同じくらいには……あるいは、それ以上に。このメイフェムという女性は、怪物だ。

「貴女は一体、何者……そして一体、どういうつもりなのか」

メイフェムがわざわざ投げ返してくれた魔法の剣を拾い、構えながら、リムレオンは訊いていた。

「僕と戦うつもり、だと言うのなら何故、これを僕に返したりする？ 正々堂々の勝負のつもりか、あるいは……僕を、馬鹿にするのか」

「気のせい、かしらね」

メイフェムが、禍々しくも優雅に嘲笑った。

「魔法の鎧が、何やら口をきいているような……空耳よね、きっと」  
「……………」

改めて、リムレオンは気付いた。

このメイフェムという女は、魔法の鎧の力を試そうとしている。装着者たる非力な少年など、眼中にないのだ。

（何だ……僕は……）

生まれて初めて、に等しいものを、リムレオンは感じていた。

（僕は……屈辱を感じている、のか……？）

優美でしなやかな尼僧の姿が、ユラリと前傾した。

踏み込んで来た、とリムレオンが気付いた時には、攻撃が来た。いかなる攻撃なのかは、全く見えなかった。

とにかくリムレオンは今、吹っ飛んでいる。

魔法の鎧に包まれた身体が、石畳に激突し、だが即座に起き上がった。

「く……っ……」

起き上がり、魔法の剣を構えつつ、リムレオンは見回した。見回して探すまでもなくメイフェム・グリムは、すぐ近くにまで迫っていた。邪悪な美貌が、リムレオンの眼前でニヤリと歪む。

禁欲的な法衣が、あられもなく割れた。かなり際どい高さまで、裂け目が入っている。

そこから、白く長い右脚が、優雅にしかし高速で跳ね上がっていた。

蹴り。信じられない角度からリムレオンを襲い、兜を打ち据える。脳漿がたぶたと波打つ音を、リムレオンは聞いたような気がした。

視界が暗転しかけたが、リムレオンは辛うじて倒れず、踏みとどまった。倒れそうな身体を、魔法の鎧が支えてくれている。

だがリムレオンが必死に踏みとどまっている間、メイフェムの右足がもう1度、離陸していた。

法衣の裾を払いのけるように躍動した美脚が、鞭のようになつて唸り、リムレオンの腹に叩き込まれる。

「ぐっ！ ……ええ……っ……」

面頬の内側で、リムレオンは血を吐いた。

魔法の鎧は無傷である。が、その中にある脆弱な人体は、無事ではいられない。

リムレオンの身体が、蹴り折られた感じに屈んだ。兜に守られた頭が、お辞儀をするように下がる。

それを迎え撃つ形に、メイフェムの右足が跳ね上がる。

白い、しなやかな美脚が、法衣を割って下から上へと、斬撃の如く一閃する。

首をちぎり飛ばすかのような蹴り。魔法の兜から、火花と血飛沫が飛び散った。

前屈みに倒れかけていたリムレオンの身体が、後方にのけ反りながら吹っ飛んでいた。

そして1度、石畳にぶつかって一転し、立ち上がる。

魔法の鎧が、倒れる事を許してくれない。

無傷の兜の中で、しかしリムレオンの顔面は血まみれだった。

たぶん、たぶん……と波打つ脳漿の中で、意識が溶けて無くなりかけている。

(僕……生きてる……のか……?)

溺れている、とりムレオンは思った。深い深い水の底へと、自分は今、沈みつつある。

小さな白い姿が、こちらに向かって、泳いで来ていた。

眩しいほどに白く、可憐な……幼い、裸の女の子。

(……ティアンナ……?)

あの時と同じだ。

水遊びしているティアンナを、溺れていると勘違いして川に飛び込み、助けようとして自分が溺れてしまったリムレオンを。ティアンナが、助けに来てくれた……

「……さすがに頑丈ね。私の蹴りで、凹ませる事も出来ないなんて」  
現実に近い付いて来ているのは、裸のティアンナではなく、メイフェム・グリムだ。

「気に入ったわゾルカ。貴方の作品、もらって行くわね……中身を潰してから」

「や……やめてくれ」

カルゴ侯爵が、おずおずと進み出て、おずおずと言った。

「どうか、息子の命だけは……わ、私の命を差し上げる。領主の地位も、差し上げるから」

「……本当に殺されながら、同じ事を言えますかしら? 侯爵様」

メイフェムの禍々しい笑みが、カルゴに向けられる。

(や……めろ……)

リムレオンは叫んだつもりだが、ゴボッ! と込み上げてくる血反吐が、声を潰してしまう。

突然、メイフェムが左手を掲げた。そしてバチツと何かを受け止

めた。

赤い、線。

一筋の赤色の光が、宙を裂くように奔ってメイフェムを襲い、そして片手で受け止められてしまったのだ。

冷たく禍々しい美貌が、微かに歪む。掌に軽い火傷くらい、負ったかも知れない。

「リム様！」

シェファが叫んでいる。魔石の杖を、メイフェムに向けながら。

そしてシェファの傍らに1つ、見覚えある人影が立っていた。灰色のローブをまとった、穏和だが一癖ありそうな中年男。

ゾルカ・ジェンキムである。リムレオンのこの無様な戦いぶりを、いつから見ていたのだろうか。

(まいった……な……)

魔法の鎧の中でリムレオンは、意識を失いつつあった。

(魔法の鎧も、剣も……没収されて、しまうかな……)

気を失う瞬間。ほんの一瞬だけ、ティアンナの裸が見えた。

呼びかけても、リムレオンが返事をしてくれない。

シェファは、嫌な予感に胸を押し潰されそうだった。

リムレオンは倒れていない。立っている。

だがそれは魔法の鎧が立っているだけで、リムレオンはその中で、返事も出来ぬ状態であるようだ。

「リム様……！」

駆け寄ろうとするシェファを、さりげなく阻んで止めながらゾルカが、

「君は……」

法衣を着た尼僧姿の若い娘と、見つめ合っている。あるいは睨み合っている。

「メイフェム・グリム……の娘？　なのか？」

「ケリスは私を、1度だけ抱いてくれたわ。だけど子供は出来なかった」

美しいが禍々しい笑みを浮かべながら、その尼僧が、のろけ話のような事を言い始める。

「ケリス以外の、誰かの子供……なんて、私が生むわけではないでしょう？」

「では私の、目の錯覚なのか……君が、19年前と全く変わっていないように見えてしまう」

ゾルカは、息を呑みながら喋っていた。

「……一体どんな若作りをしているのか、参考までに教えて欲しいものだ。私でも出来る方法だろうか？」

「簡単な事よ。人間を、やめればいいだけ」

どうやらメイフェム・グリムという名前らしい尼僧姿の女が、にっ……こりと笑った。

人間の笑顔ではない、とシェファは思った。

「そうすると副作用で、少なくとも外見は若返る……事がある。らしいわよ？」

「人間を……やめる、だと……」

ゾルカの声が、震えた。

「……魔獣人間……なのか、君は……」

その言葉を肯定も否定もせず、メイフェムは、ただ言った。

「……私はもう、誰の子供も生んであげられない身体よ」

「愛する者を失って道を踏み外すのは、ダルーハ1人で充分だと言うのに……」

「ダルーハは死んだ。ドルネオも……ケリスも、死んだわ。生き残っているのは、貴方と私だけ」

メイフェムの美貌から、笑みが消えた。いくらかは、真摯と言える表情になった。

「ねえゾルカ、私と一緒に来て……は、くれないわよね」

「当然だ。ドルネオやダルーハ、それに君が、いくら人間に絶望し

ようとも。私は」

あるものにシェファは気付き、見入った。

武器を振り上げた戦士たち、の石像。実に良く出来ている。そして似ている。ブレン・バイアス兵長ら、シェファと顔なじみの兵士たちに。

まるでブレン兵長の部隊が、石像と化したかのようである。

そんな石像たちに向かって、ゾルカが片手を掲げた。

「私は、人間を……やめたりはしない」

掲げられた魔術師の片手から、キラキラと光が走り出し、宙を漂い、石像たちにまわりつく。

その光が消える、と同時に。戦士たちの石像が、倒れた。

倒れた時には皆、石像ではなくなっていた。

「……むう……っ、い、一体何が……」

「……全員、無事か？」

「たっ隊長！ 我らと戦っていた怪物が、倒れております！」

「一体、誰が仕留めたのだ……」

生身の兵士たち。生身の、ブレン兵長。

彼らを一瞥もせずにメイフェムが、

「……貴方なら、そう答えると思っていたわ」

くるりと背を向けた。

その優美な背中に、ゾルカが声をかける。

「1度くらいは考えてみたのかメイフェム……今の君を見たら、ケリスがどれほど悲しむか」

「ねえゾルカ、覚えている？ ダルーハは本当に傍若無人、人を人とも思わない最悪な男だったけれど……1つだけ、正しい事を言っていたわ」

語りつつ、メイフェムは歩み去って行く。

「死んだ者は、悲しみなどしない。喜びもしない。何もしてはくれない……そうでしょう、ゾルカ」

「メイフェム……」

もはや何を語りかける事も出来ずゾルカは、メイフェムを見送っていた。

彼女が何者であるのかは、よくわからない。わかった事は、1つだけ。

(……化け物……!)

シェファは唇を噛んだ。

火力を収束した、岩をも穿つ攻撃魔法が。あの女には、片手であつさりと弾かれたのだ。

(どうして……リム様の周りに、あんな化け物ばかり……!)

「君の」

メイフェム・グリムの小さくなってゆく後ろ姿を見送りながら。ゾルカが、シェファに問いかけた。

「名前を、まだ聞いていなかったな」

「シェファ・ランティ……」

「……君の言う通りだ、シェファ」

メイフェムを見送っていたゾルカの眼差しが、ようやくシェファの方を向いた。

「戦う者の傍にいたいと思うならば、戦う力がなければならぬ。足手まといになりながら支える事など、出来はしない」

左手で、ゾルカはそつとシェファの右手を取った。貴婦人をダンスにでも誘うかのように。

右手でゾルカは、シェファの掌に、小さな何かを載せた。そして握らせた。

「リムレオン殿を助ける、事しか考えていない君ならば……力に溺れる事も、ないだろう」

などと言いながらゾルカが手を離し、背を向ける。

「ちよつと……」

シェファが呼び止めようとした、その時。

立ち尽くしているリムレオンの身体が、白く輝いた。

その白い光が、彼の右手、中指にはめられた竜の指輪へと吸収さ



れてゆく。

魔法の鎧から解放された、血まみれのリムレオンが。がく……つと膝を折り、ゆっくりとその場に倒れる。

「リムレオン……！」

「若君！」

カルゴ侯爵が、ブレン兵長が、駆け寄って行く。

倒れそうになった息子の細身を、侯爵が抱き止めた。

ブレンが、兵士たちが、気遣わしげに領主親子を取り囲む。

「リム様……」

死体、寸前のリムレオンを直視出来ずにシェファは、顔を逸らせながら見回した。

メイフェムの姿もゾルカの姿も、もはやどこにも見えない。

右手に握らされた、小さな固いものを、シェファは見つめた。

細長い竜が環を成した意匠の、指輪だった。

## 第21話 解放されし者、その2

聞くところによると。この謁見の間では、かつて大虐殺が行われたという。

先の戦において、ダルーハ・ケスナーに恭順を誓った地方領主およそ20名が、誓ったその場で皆殺しにされたらしい。

戦わずして敵に降るとは、要するにそういう事なのだ。

どういう扱いを受けても文句は言いませぬ、と宣言してしまうようなもの。なのである。

戦わぬ人間には、それがわからない。

わからないだけなら良いが、こうして難癖に等しい事を言うてる。

「どうか、お考え下さい女王陛下」

廷臣たちの居並ぶ中。唯一神教の法衣をまとった、どこか神経質そうな中年の男が、玉座上のティアンナに語りかける。頑固な子供に教え諭すような、偉そうな口調でだ。

「民を守るために戦う、それは確かに美しい言葉です。しかし守るための戦いが激化し長引けば、結局のところ民たちが、苦しみ血を流す事となるのですよ」

「だから戦うなど……バラムガルド王国の要求を受け入れ、私に退位せよと。そうおっしゃるのですね、大司教猥下」

クラバー・ルマン大司教。

ヴァスケリアにおける唯一神教会の、最高位に立つ人物である。

前任の大司教は、先の戦でダルーハ軍に殺された。

王都の中央大聖堂は、略奪と破壊の限りを尽くされた。

ヴァスケリア国内においては、教会という組織そのものが、壊滅に近い状態に陥っていたのだ。

それに乗じるようにして頭角を現し、教会の再建において指導力を発揮してきた聖職者が、このクラバー・ルマンである。

自然な流れで大司教に就任し、今や一国の王に対して物申す立場にある。宗教家としてはともかく政治家としては優れた人物なのだろう、とティアンナは思うのだが。

「他国の侵略を、抵抗する事なく受け入れよと。それが民衆のためであると……ローエン派の方々は、本気でそうお考えなのですね」

この世界の唯一神教会は、大きく3つの宗派に分かれている。

排他的・攻撃的で、時には他宗教に対する迫害・虐殺なども行ってきたアゼル派。

それとは逆に、ひたすら平和主義を掲げるローエン派。

両者の中間たるディラム派。

唯一神教会の歴史とは、すなわちアゼル派とローエン派の抗争の歴史である。と言っても過言ではなかった。

抗争の中、両派の分別ある者たちによってディラム派が結成された。彼らはアゼルとローエンの仲裁をしながら巧妙に立ち回り、やがて唯一神教会の主流となった。

現在、主流から離れた所でローエン派は細々と信者を保ち、アゼル派はほとんど消滅に等しい状態にある。

ヴァスケリアにおいても、ここ100年近く、大司教の地位はディラム派の聖職者たちによって占められてきた。

クラバー・ルマンは、およそ100年ぶりに現れた、ローエン派の大司教という事になる。

「陛下、お考え下さい。いえ、お考えになるまでもなく明らかな事でございます。平和とはすなわち戦わない事。戦争とは、抵抗をするから続いてしまうのです」

「汝の隣人を愛せ。右の頬を打たれたら、左の頬を差し出すべし……唯一神教ローエン派には、そのような教えがあるそうですね」

思わず怒鳴ってしまいたくなるのを懸命に堪えながら、ティアンナは言った。

この場合の隣人とは、すなわちバルムガルド王国である。かつてリグロア王国を侵略併吞し、ヴァスケリアと国境を接する事となっ

た、軍事大国。

すでに、一国を滅ぼしているのである。

このような相手に左の頬を差し出したら、頬を打たれるどころか、骨までしゃぶり尽くされる。それが、ローエン派の聖職者たちには本当に理解出来ないのか。

そう言えば、リグロアは自分が嫁ぐはずだった王国である。

ちらりとだけ思い出しつつ、ティアンナはさらに言った。

「平和主義は、とても素晴らしい事……ですが平和主義とは、平和な時に唱えるものです。お引き取り下さい大司教猥下。そして今が平和な時であるのかどうかを今1度お考え下さい」

「平和ではないからこそ、一刻も早く平和をもたさなければならぬのです。まだ1滴の血も流れていない今こそが、その機会なのですよ」

退出せよ、という女王の命令に平然と逆らいつつ、クラブー大司教が言い募る。

「1滴でも血が流れれば、そこに憎しみが生まれてしまいます。憎しみが報復を、報復がさらなる憎悪をもたらし……戦が、際限なく続いてしまうのです。民が苦しむのですよ女王陛下。今ここでバルムガルド国王の要求を受け入れ、シーリン・カルナヴァート様に王位をお譲りになれば、憎しみの連鎖は未然に防げるのです。戦争が、起こらずに済むのです」

「そしてバルムガルド軍がヴァスケリア国内に入って来て、我が物顔に振る舞う事になりますね。そうなれば民がどのような目に遭うか、お考えになった事がありますか？」

様々な光景が、ティアンナの脳裏に甦った。

ダルーハ軍に襲われた村。兵士に、殴られ蹴り倒される男。さらわれる女子供。焼き殺される村人たち。

人間としての全てを否定され蹂躪され尽くした、無惨なる「姉妹」。

あれらと同じ事をバルムガルド軍が行わないという保証が、一体

どこにあるのか。

戦わずして国を明け渡す。それは敵軍による、あのような行いを、黙認してしまうという事なのだ。

クラバーの神経質そうな顔が、いくらか引きつった。

「民を言い訳に使うのはおやめなさい女王陛下。貴女は民を守るためと言いつつその実、御自分の王位を守ろうとしておられます。戦争に勝つ事で守られるのは、民ではなく政権の命なのですから……古来、戦争とはそのようなもの。権力者が、民衆を守るためと言いつつも己の保身のために」

「無礼ですぞ大司教猥下！」

ティアンナではなく、居並ぶ廷臣たちが怒鳴った。

「女王陛下に対し何たる物言い！　いかに大司教と言えど、許されるものではありませんぞ！」

「民の生活と安全を守るため、女王陛下がどれほど心血を注ぎ！　心を砕いておられるか！」

ティアンナは片手を上げ、廷臣たちを黙らせた。

民のため、などという言葉がこれほど繰り返されると、やはり安っぽく煩わしいものである。

「……大司教のおっしゃる通り。確かに私は、ダルーハ卿からいただいたこの玉座に未練があります。今は私がこの国を立て直さなければならぬと少々うぬぼれてもおりますし、王位を失った私がバルムガルドからどのような扱いを受けるのかと、怯えてもおります」  
言いつつ、ティアンナは微笑んで見せた。

「……と、私が正直に申し上げたところで。大司教猥下、貴方も正直におなりなさい。包み隠さず、おっしゃって下さい」

「な、何をですか……」

「バルムガルド国王ジオノス2世から、一体どれほどの餌を与えられたのですか？」

クラバー大司教の顔が、さらに引きつった。恐怖、に近い表情だった。

間違いない、とティアンナは思った。自分は今、先の戦においてバウルファー・ゲドン侯爵の子息を斬り殺した時と、同じような顔をしている。

自覚しつつもティアンナは、表情と口調を変える事は出来なかった。

「バルムガルド国内の唯一神教信者をも統べる権利……2国にまたがる大司教の地位。そんなところでありましょう？ 落ち目のローエン派を唯一神教主流に押し上げるには、良い機会かも知れませんね」

「な……何たる……女王とは言え許し難き暴言妄言……」

恐怖と屈辱が、クラバーの神経質そうな顔面に満ち、何とも言えぬ滑稽な形相が出来上がっている。

少し変だ、とティアンナは思った。

これほど容易く頭に血を昇らせ、それを隠す事も出来ない人物が、教会組織の再建を行うような政治的能力を持っている、ものであるうか。

（……と、今の私も感情的になりかかっているわね。気をつけなければ）

内心で、ティアンナは咳払いをした。

と同時に。玉座の傍らに立った人物が、現実的に咳払いをした。

「真実がどうであるか、は問題ではないのですよ大司教殿下」

モートン・カルナヴァート副王だった。

「この国の教会の頂点に立たれる御方が、今この時期に無条件降服論を口になされる……バルムガルド王国と裏で繋がっている、と思われて当然でありましょう。真実がどうであるかに関わりなく、周りの者はそうとしか見ません」

滑稽な顔をしたままクラバー大司教が、息の詰まったような声を漏らした。

モートンは、さらに言う。

「ここは大司教殿下、一言の捨て台詞も吐かずに退出なさるべきで

す。この場で何か喚き散らしたところで、無様な事にしかなりませんぞ」

モートン自身、かつて大勢の村人の前で無様に逆上し、喚き散らし、ティアンナに殴り倒され、ガイエルに同情された。

無能王子と呼ばれた兄が、しかし経験を活かしてはいるようだ。

女王に対する様々な罵詈雑言を、噴火寸前のまま辛うじて呑み込みながら。クラブー大司教が、退出して行く。

見送りつつティアンナは、溜め息をついた。

「……感謝いたします兄上、いえ副王殿」

ここで兄が何か言ってくれなかったら自分は、廷臣らの面前で大司教を斬殺していたかも知れない。そして王国内外の唯一神教徒全員を、敵に回していたかも知れない。

「あの大司教は、北に勢力基盤を持っております」

モートンが言った。

「ダルーハ・ケスナーの叛乱によって荒廃した、王都以北の各地方で、ローエン派の者どもは大々的に布教を行っていたようですな。

復興のあまり進んでおらぬ地方の、もはや神にすぎるしかないほど困窮した人民の心を……まあ、上手く掴んだという事です」

ディラム派を主流とする王国内の教会勢力が、ダルーハによって一掃された後だからこそ、出来た事であろう。

この度の戦災に上手く乗じてローエン派は今、台頭しつつある。

にしてもそれは、あのクラブー・ルマン1人の力によるものなのだろうか。

あの大司教がそこまで政治的な大人物であるとは、ティアンナには思えなかった。モートンも、同じ疑念を抱いているようだ。

「クラブー大司教の背後には、何者かがおります。ヴァスケリア国内のローエン派教会を、女王陛下の敵対勢力として育て上げようとしている、何者かが」

「バルムガルド王国……」

他に、考えられなかった。

思い通りに動かせる人間をヴァスケリアの大司教に就任させ、宗教方面からエル・ザナード1世の政権を攻撃する。その一方で、シリィン・カルナヴァート元王女を新国王として擁立しようとする。「バルムガルドのジオノス2世王は、権謀術数に長けた人物であると聞いてはいましたが……あの手この手で仕掛けるもの、なのですね。国同士の争い事とは」

ティアンナは呟いた。

「政治力というものが根本から欠如していたダルーハ卿よりも……ある意味、恐ろしい相手かも知れません。ジオノス2世国王は」

「私は、そうは思いませんな」

モートン副王が、即座に否定した。

「小賢しい政治的手段に頼る必要なく、暴力だけで我欲を満たせるケスナー家の怪物父子の方が、私に言わせればずっと剣呑です」

「暴力だけで……ですか」

ケスナー家の父子はティアンナに、本当に強烈に教え込んでくれた。

暴力を振るわなければ守れないものがある、と。

暴力という言葉が悪ければ、戦う力、でもよい。

戦わずに守れるものなど、ありはしないのだ。

ゴルジ・バルカウスの言う通り、魔獣人間には適性というものがあるようだった。

広大なサン・ローデル地方全域から、大量の人体を集めてはみたものの、その全てが魔獣人間になれるわけではない。

1人いた。とある豊かな村の村長で、領主バウルフアー・ゲドン侯爵に昔から賄賂を贈り続けていた男である。それが発覚して村人たちに追い出され、領主に泣きついて来たところ、ゴルジの実験室へと回された。そして、めでたく魔獣人間となった。

それをバウルフアー侯爵が勝手に使い、死なせてしまった。



「本当に……困りますわ侯爵閣下。あのような事をなされては」  
言いながらメイフェムは、槍で突きかかって来た衛兵に、蹴りを叩き込んだ。

すらりと長く白い左脚が、白刃の如く一閃し、槍を叩き折りつつ衛兵の腹にズンッ！と重くめり込む。

血、ただけではなく潰れた臓物の汁気をもゴパァーッと嘔吐しながら、その衛兵は絶命した。

「魔獣人間はまた新しく造ればいい、にしても……私たちの動きが、女王陛下の伯父君に知られてしまいました」

言葉が続けながら、メイフェムは後ろを向いた。背後からも1人、衛兵が襲いかかって来ている。槍が、メイフェムの背中に突き込まれようとしているところだった。

1人蹴り殺したばかりの左足を、メイフェムは後ろを向きながら振り下ろした。振り下ろされた左足が、衛兵の槍を踏み折った。

その左足を軸として、メイフェムの身体がギュルツと回転する。凹凸の見事な胴体が螺旋状にねじれ、美しく引き締まった右太股が、法衣を割って跳ね上がる。

跳ね上がった右膝が、衛兵の側頭部を直撃した。

眼球がポポンツと飛び出し、眼窩から大量の血が噴出する。血の涙を流しているような状態で、2人目の衛兵も絶命した。

否、2人目ではない。

十数人もの衛兵たちが、同じような屍となって、領主の間のあちこちに転がっている。

彼らが命がけで守ろうとした人物が豪華な椅子の上で震え上がっていた。

サン・ローデル地方領主、バウルフアー・ゲドン侯爵。

立派な体格を縮こまらせ、青ざめている彼に、メイフェムは優しく声をかけた。まだ辛うじて、優しい口調を保つ事が出来た。

「今頃は、女王陛下のお耳にも入ってしまったでしょうね。サン・ローデル領主が、魔獣人間を使つての叛乱を企てていると……」

まだろくに準備も出来ていないと言うのに、もう発覚してしまいました。ねえ、どういたしましょうか？」

「ぐっ……お、大きな口を叩くでないぞメイフェム・グリム。貴様らのもたらした魔獣人間とて存外、役に立っておらぬではないか」  
震えながらもバウルフアーは、言葉を返してくる。

「カルゴの身柄を押さえておけば、人質として女王に揺さぶりをかける事も出来たのだ。それがどうだ、非力な地方領主の1人も拉致出来ぬとは」

「そうね。魔獣人間1匹の力など、所詮はそんなもの……」  
衛兵たちの死体を、メイフェムはちらりと見回した。

「それでも、この程度の事は出来るわ。今ここで貴方の、その愚かな頭を蹴り潰してあげる事も……ね」

優しい口調を、メイフェムは保てなくなり始めていた。

「……勘違いしない事ね。魔獣人間の素材を集めるのに領主の権力があつた方が便利だから、私たちは貴方に力を貸してあげているだけ」

「ひ……い……」

怯えるバウルフアー侯の胸ぐらを、メイフェムは思わず掴んでいた。大柄な領主の身体が、尼僧の細腕で、椅子から引きずり立たされる。

「担ぎ上げる地方領主なんて、いくらでもいるのよ……大人しく担当されていて下さる方なら、私たちは誰でもいいの。おわかりかしら侯爵様？ 私たちはねえ、御自分では何も出来ない貴方だからこそ担いであげているのよ？ 何も出来ない人が私たちに断りもなく何かやったら、邪魔にしかなんないに決まってんでしょがねえちよつとコラ」

「そこまですておけ、メイフェム殿」

仮面を着けたローブ姿の男……ゴルジ・バルカウスが、いつの間にか領主の間に入って来ていた。

そして衛兵たちの死体を見回し、いくらか嘆かわしそうな声を出

す。

「もったいない……皆殺しにするくらいなら私に譲ってくれば良いものを」

「魔獣人間造りも大切だけどゴルジ殿。バルムガルドとの連携は、上手くいきそうなのかしら？」

ゴルジ・バルカウスが一体何者であるのか、メイフェムはよく知らない。

ただ、この男の自宅と言うか本拠地がバルムガルド国内にあるのは間違いないようだ。軍や王家とも、何らかの繋がりを持っているらしい。

「ジオノス2世王は、いよいよ力押しを決行するつもりのようなのだ。国境近辺で、軍が本格的に動き始めている」

ジオノス2世。権謀術数に優れた野心家として名高い、バルムガルド現国王である。

「もはや力押ししかないという段階であろうよ。エル・ザナード1世は、1歩も退かぬ構えだ。宗教方面からの揺さぶりも、あの女王にはどうやら全く効果がなかった」

「例の、ローエン派の大司教ね」

「まったく平和主義者という輩は、何の役にも立たぬ。やはり教会関係者で頼りになるのはメイフェム殿、貴女たちアゼル派の方々よ」  
宗派など、どこでも良かった。

アゼル派が古来、秘伝としてきた、神の力の戦闘的使用法。赤き竜との戦いにそれが必要だったからメイフェムは、ディラム派からアゼル派へと改宗した。ただそれだけの事である。

ゴルジが、仮面の下で笑った。

「……まあジオノス王の計略などで容易く潰れるような女王では、我らも困る。エル・ザナード1世には、とにかく戦乱を起こし、長引かせてもらわねばならんのだからな」

「戦乱……そうね」

メイフェムは思う。

人間という生き物が、ケリス・ウェブナーの言っていたような、強く心優しく賢明な素晴らしい存在、であるならば。自分たちやジオノス2世が何をしようと、戦乱など起こるわけがないのだ。

（いよいよ本当に試させてもらおうよ、人間ども……ケリスが一体、何のために命を捨てたのかを）

「それにしても……興味深いのはカルゴ・エルベツト侯爵の御子息よ。3体もの魔獣人間を、立て続けに打ち破るとは」

あの魔法の鎧の中身、の事をゴルジは言っているようだ。

「ゴルジ殿。魔獣人間を倒したのは、あの鎧よ。誰が着ても、そのくらいの事は出来る……厄介な代物であるのは確かね」

中身を潰して持ち帰る、つもりであったが、ゾルカ・ジェンキムが直々に現れたので断念せざるを得なかった。あの男が本気になって攻撃魔法を使ったら、人間をやめた自分でも、少なくとも無傷ではいられない。

「戦災の復興、それにバルムガルド相手の政略やら戦争やらで、エル・ザナード1世女王は今お忙しい」

楽しそうにゴルジが言う。仮面の下にどのような笑顔があるのか、メイフェムには想像もつかない。

「人間ではない者どもの相手は、魔法の鎧の装着者に一任するおつもりのようなのだ。つまり我々の正式なる敵、というわけだな。カルゴ侯爵の御子息殿は。果たしてどれほどの敵であるのか、次は私が確かめてみようと思う」

「……では、私も一緒に」

メイフェムの言葉を、ゴルジは片手を軽く上げて遮った。

「メイフェム殿には、バウルファー侯のお傍にいていただきたい。侯爵閣下が、また何か困った事をなさらぬように」

バウルファーは床に尻餅をついて青ざめ震えており、2人の会話が聞こえているのかどうかも疑わしい。

「メイフェム殿の力をもってしても傷1つ付かぬ、魔法の鎧……実に興味深い。一体どれほどの敵となりうるものか。我らの手に余る

ようであれば、ゼノス王子をバルムガルドから呼ばねばならぬが」  
「……暇そうにしているから、呼べば来てくれるでしょうけど」

あの男の力を借りるほどの事ではないだろう、とメイフェムは思う。所詮は、鎧だ。

要注意なのは魔法の鎧よりも、その制作者である。

「……ゾルカ・ジェンキムにだけは気をつけてねゴルジ殿。はつきり言うけど魔術師としては、貴方はあの男の足元にも」

「及ばぬという事はわかっているとも。竜退治の英雄の1人に、攻撃魔法で正面から挑もうとは思わんよ」

竜退治の英雄の1人。一応、メイフェムもそうだ。赤き竜との最終決戦においては、攻撃の要であるダルーハの治療を担当し、そこそこは役に立った。

が。自分の治療魔法などでは、一瞬にして灰も遺さず燃え尽きたケリス・ウェブナーを助けてやる事は出来なかった。

（ケリス……貴方が生きていてさえくれれば、私もこんな……）  
脳裏に浮かぶ面影に語りかけようとして、メイフェムは軽く、頭を横に振った。

語りかけたところで、死んだ者は、何も応えてはくれない。喜びも悲しみもない。何をしてくれる事もない。

自分がゾルカに対し、偉そうに語った事である。

……わかっていながらも、しかしメイフェムは語りかけてしまう。  
（貴方が生きていたら絶対に許してはくれない事を、私は知っている……でもねケリス、それは貴方のせいよ。貴方が死んだりするから、悪いのよ……ケリスがいないから、私はもうやりたい放題……ふふっ）

メイフェムが何をしようと、止めてくれる者はいない。

それは、解放されたという事なのだ。

## 第22話 青き光の少女（前編）

女王エル・ザナード1世が直々に率いるヴァスケリア王国正規軍・総勢約5000人が、王都エンドウールを出立し、東国境へと向かった。親征である。

対するバルムガルド王国軍は、2万とも3万とも言われている。自分が王都の兵士であるならば当然、女王の親征に加わって、バルムガルドと戦ったところだ。

が、幸か不幸か自分は地方軍の一員で、メルクト地方領主エルベツト家に仕える身である。まず第一に、メルクトの領民を守らなければならぬ。

民を守る。その心は、この若君も同じだろう。

と思いながらブレン・バイアスは、後方にちらりと視線を投げた。ぼろ雑巾のようになった1人の少年が、杖にすがりついて歩いている。今にも死にそうな、まるで敗走中の傷病兵のような足取りである。

領主令息リムレオン・エルベツト。

傷も癒えぬまま今日もまた訓練への参加を志願して来たので、ブレンはいつも通りに相手をしてやった。戦場では、負傷したまま戦わなければならぬ時もあるのだ。

その訓練を終えた後の、練兵場からの帰り道。ブレンは、少年の死にそうな歩調に合わせ、ゆっくりと歩いていた。

振り返り、声をかける。

「御自分の足で歩いて帰れるようになりましたなあ、若君」

「……実戦なら、僕は……何回、殺されていたでしょう……」

以前は担架で運んでやらねばならなかった若君が、今はこうして歩きながら会話も出来る。

やはりレミオル・エルベツト侯爵の孫だ、とブレンは思う。

自分もまた少年の頃、あの剛勇無双で知られた前領主に、死にか

けるまで鍛えられしごかれたものだ。

「若君は、すでに実戦を経験なされているではありませんか」

杖を握るリムレオンの、細い右手。その中指にはまった指輪を、ブレンは見やった。

この指輪の中に、あの魔法の鎧とやらが封じ込められているらしい。

それを身に着けたリムレオンが、ブレンたちを石像に変えた怪物を、1対1の戦いで殴り殺したのだという。

信じられない話ではある。が、自分が無様にも石像に変わってしまっている間に、あの怪物が仕留められていた。のは事実なのだ。

「あんなもの……実戦、とは言いませんよブレン兵長……」

俯き加減に、リムレオンは言った。

「戦ったのは僕、ではなく魔法の鎧……僕はただ、それを中から見ていただけです」

「恥じておられますか？ 若君」

俯き加減なリムレオンの目を、ブレンはまっすぐに見据えた。

「便利な道具を使わなければ自分は戦えない、などと思っておられるようですね。まあ、悪い事ではありませんが」

「……………」

リムレオンが、微かに唇を嚙んだようだ。痛々しく腫れ上がった顔に、苦い表情が浮かんでいる。

ブレンは、なおも言った。

「若君、戦場ではまず何よりも力が求められます。卑怯なほどに便利な道具であろうと、邪悪で禍々しいものであろうと、力は力です。力を振るって勝利をもたらし、守るべきものを守る。それが出来なければ、自身の力のみで勇敢に戦ったとしても意味はありません」

「……開き直れ、と言うんですか……どんな力であれ、勝てば良いのだと……」

「若君のように考え過ぎる御方は、少し開き直るくらいでちょうど良いですよ」

タテガミのような頭髮と髭に囲まれた、厳つい顔で、ブレンは微笑んで見せた。

リムレオンも、控え目に笑ったようである。  
もう一言二言、何か言葉をかけようとして、ブレンは顔を引き締めた。

とてつもなく嫌な空気が、漂って来たのだ。

「……若君、御無礼を！」

今にも倒れそうなリムレオンを、ブレンは左手で突き飛ばし、右手で戦斧を構えた。防御の形にだ。

その戦斧に、光がぶつかった。

リムレオンを狙って一直線に伸びて来た、光の筋。

それはすぐに消えたが、同時にブレン愛用の戦斧も消え失せていた。一瞬にして錆び付き崩れてしまったかの如く、サラサラと塵に変わり、ブレンの手からこぼれ落ちる。

「無駄な事あやめた方がいいぜええ、人間が俺と戦おうなんてよお  
お」

嘲笑う声と共に、ズシリと重い足音が響く。

人間ではない大男が、そこに立っていた。重い足音を響かせる両足は、蹄だ。

筋肉が破裂しそうに膨れ上がった全身、のあちこちに眼球が埋まっている。太股、腹筋、脇腹、両肩に前腕、胸板、恐らくは背中でも。凄まじく分厚い筋肉が、目蓋のように開いて、ギラギラと血走った眼が現れているのだ。

首から上は、鋭い2本の角を生やした雄牛。その角と角の間でも1つ、眼球が見開かれている。本来の両目と合わせて計3つの眼を凶暴にぎらつかせた、猛牛の頭部。

全身に埋まった眼球の中で、胸板中央のものが最も巨大である。突き飛ばされたリムレオンが、よろよろと身を起こして杖にすがりつつ、呻く。

「魔獣人間……」



「ほう。俺らの事を知ってるって事あ、ここの城主の息子ってのあ  
おめーだなああ」

目が3つある雄牛の頭部が、人間の言葉を吐いた。  
魔獣人間。先の叛乱でダルーハ・ケスナーが使役していたという  
怪物。

ダルーハの死後も何者かによって使われ、こうして領主の城に侵入して来る。

城の防備が、やはり甘いのか。あるいは。人間の造った城で、人間ではないものの侵入を防ぐ事など、そもそも不可能なのであろうか。

「おめーをちっとブツ殺してこいって命令されてんからよおお……  
この魔獣人間ミノホルダー様の必殺破壊光線！ ジタバタせずに喰らつとけや楽に死ぬるからよおお！」

名乗り喚いた魔獣人間の、分厚い胸板で、巨大な眼球がカツ！と見開かれる。

先程の光は、そこから発射されたのだろう。と落ち着いて分析している暇もなくブレンは、身に着けた甲冑から短剣を引き抜き、投げた。剛力と技量を兼ね備えた、投擲。

疾風の如く飛んだ短剣が、魔獣人間ミノホルダーの胸板の中央、破壊の光を放つ寸前の眼球に深々と突き刺さる。

「ぎゃ……………！」

悲鳴を上げようとする魔獣人間に、ブレンは姿勢低く突っ込んで行った。

体当たり、と同時に捕まえる。眼球だらけの怪物の巨体に、がちりと両腕を回す。

そのままブレンは身を反らせ、全身の力で、魔獣人間を後方に投げ飛ばした。

後頭部から真っ逆さまに、ミノホルダーは石畳に激突した。人間ならば、生きてはいない。

「受け身の取り方が、全くなっておらん……」

頭を抱えて苦しげにのたうち回る魔獣人間。その牛型の頭部をブレンは両腕で捕まえ、抱え込んで捻り上げた。

捻られた首が支点となって、ミノホルダーの巨体が弧を描いて舞い、石畳にビターンと叩き付けられる。

「ぐええ……っ」

苦痛に呻く魔獣人間の首を、頭部を、両腕でガッチリと捻り押さえたまま、ブレンは語りかけた。

「ろくに戦闘訓練も受けず、身体も鍛えず、魔道の類で安易に馬鹿力を身に着けた輩……それが魔獣人間というわけか」

「へ……か、身体を鍛える奴あバカだ……戦闘訓練だあ？ んなメンドクせええ事やなくなつたってなああ……」

ミノホルダーが、首を極められながらも世迷い言を呻き続ける。

「ごつゴルジ様に、ちつとカラダいじってもらえりゃ簡単に強くなれるんだよおお」

ミノホルダーの全身で、いくつもの眼球が怪しく輝き始める。

先程の破壊の光、と同じようなものが発射されようとしている。

構わずブレンは魔獣人間を、首を抱え捕えたまま振り回した。

筋肉太りした巨体が、またしても石畳に叩き付けられる。太い首に、ブレンの力強い腕が、さらに容赦なく食い込む。

猛牛の頭部を抱え捕えて捻り上げつつ、ブレンはさらに言った。

「目からおかしなものを出すのが貴様の戦い方……だがそれには、魔力やら気力やらを眼球に込めなければならんのだろう。首をへし折られようとしている状態で、それが出来るか？」

「あがつ……！ ぐ……っ」

ミノホルダーはもはや答える事も出来ず、悲鳴を漏らすだけだ。

「眼光を武器とする化け物に、そう何度も不覚をとるわけにはいかんからな……」

一方的に締め上げながら、ブレンは言葉を続けた。

「良い機会だ。貴様には、若君のための生きた教材となってもらおう……若君、ようく御覧なされませ。いかに馬鹿力の怪物と言えど、

生き物とは、こうして首を押さえてしまえば何も出来なくなります。いかなる馬鹿力も、発揮出来なくなるのです。何故か？ 生物の動きというものは、大きなものであれ小さなものであれ、まずは首の微かな動きから始まるからです。その微かな初動を、こうして封じ込んでしまう事。素手の戦いにおいては、それが肝要ですぞ」

「すごい……ブレン兵長は、やはり最強の戦士です……」  
リムレオンが、息を呑みながら感心してくれている。

「けれど……その戦い方は、1対1……限定、ですよ」  
1対1、ではなくなりつつあった。

魔獣人間に劣らぬほど不快な気配が、のたのたと這いずるように周囲を満たしつつある。

ローブやマント、というほど上等なものではない。衣服と言えるかどうかとも疑わしいボロ布で全身を覆い隠した、人影。

それが5体、10体、いや20体近く。城内に侵入し、ブレンに、リムレオンに、歩み迫って来ていた。猫背気味に立って歩きながらも這いずるような、ベタ、ベタツ……とした足取りでだ。

「何者……！」

ミノホルダーの首を抱え極めたまま、ブレンは短く問いかけた。  
答える事もなく、ボロ布をまとった人影たちは、ただ呻いている。人間の声、であるのは間違いない。が、それを発しているのは人間……ではない。

ブレンは直感した。あまりにも、おぞましい直感だった。

ボロ布に身を包み、表記不能・意味不明な呻き声を発し続けている、この生き物たちは。間違はなく今、締め上げている魔獣人間などよりも、ずっと禍々しく忌まわしい存在だ。

声がした。これは、聞き取れる言葉だ。

「何ともはや……私も、人より長く生きているつもりではあるが」  
禍々しい生き物たちの中から1人、男が進み出て来た。

ローブに身を包み、のっぺりとした仮面を顔に貼り付けた、声か  
らして恐らく若くはない男。

「よもや、魔獣人間を素手でねじ伏せる勇士に出会えるとは……人の道を踏み外してまで長生きをした甲斐があったというもの」

「何者だ、貴様……」

ミノホルダーの巨体をもう1度、首を捕えたまま振り回し、石畳に叩き付けながら、ブレンは微笑んで見せた。

「こんな格好だが一応、礼儀は守っておこうか。俺はブレン・バイアス。この城で、兵隊を束ねている」

「ゴルジ・バルカウスと申す者……ブレン・バイアス殿。貴公もまた、人の道を踏み外してはみぬか」

仮面の下で、男の目がギリリと光った。

「貴公ならば、最強の魔獣人間となれる……かのダルーハ・ケスナにも劣らぬ怪物となれるぞ」

「ブレン兵長は、エルベツト家の大切な人材……つまらない事に使うのは、やめて欲しいな」

リムレオンが言いながら、杖を放り捨て、右拳を握った。中指で、指輪が光る。

「ゴルジ・バルカウス……魔獣人間たちを差し向け、この城でいろいろと悪さをさせていたのは、貴方なのか？」

「だとしたら、どうなさる。若君」

ゴルジの言葉と共に、彼の引き連れて来た20数体もの禍々しい生物が、まどっているボロ布をはためかせ、様々なものを振り立てた。

ある者は、長剣のような爪。ある者は、鞭のような触手。ある者は、毒針を生やした尻尾……

やはり思った通り、この者たちは人間ではない。人ならざる異形の姿を、ボロ布で包み隠しているのだ。

「これだけの数の魔獣人間を、メルクト領内に持ち込むとは……」

リムレオンの声が、震えている。恐怖。いや怒り、であろうか。この若君が怒ったところなど、ブレンは1度も見た事がない。

「ここへ来るまでに……領民に、何か危害を加えてはいないだろう

な。ゴルジ・バルカウス」

「さあ、どうでありましょうかな」

ゴルジが笑う。リムレオンを挑発している、とブレンは感じた。  
「……我々はこのような怪物どもを、いくらでも造り出す事が出来る。おわかりか？　メルクトの領民など殺し放題という事なのだよ若君。我らがその気になれば、なあ」

「伯父上の……バウルファー・ゲドン侯爵の、命令か」

リムレオンの言葉に合わせ、彼の細い拳が……いや、その中指に巻き付いた竜の指輪が、白い輝きを増してゆく。

リムレオンが、この脆弱なる若君が、戦おうとしているのだ。

「だとしたら……どうなさる？」

ゴルジが、先程と同じ答え方をした。

「若君よ、そうやって言葉で問い詰めるだけでは何にもならぬ。悪しきものをどうにかしたいと思うならば、言葉ではなく力を振るわねば。その力……貴方は、お持ちのはずだ。私に見せてはいただけまいか」

リムレオンは戦おうとしており、ゴルジは彼を戦わせようとしている。

ブレンは、思わず叫んでいた。

「なりません若君！　そのお身体で」

「心配御無用です。今の僕の状態に関係なく……魔法の鎧が、勝手に戦ってくれますから」

リムレオンが、微笑んだ。

これほど苦い微笑みを、ブレンは見た事がなかった。

「そんな力でも、力は力……戦場では、まず第一に必要とされるもの。ですよ？　ブレン兵長」

「若君……」

「今は、どんな力でも振るって勝たなければならない時……魔獣人間に、メルクト領内で勝手な事はさせない……！」

光り輝く拳を、リムレオンは高々と掲げた。

ボロをまとった、人間ではない者たちが、5体。爪を、触手を、蟹のようなハサミを振り上げ、リムレオンに襲いかかる。這いずるようだった動きが、猛獣を思わせる高速の襲撃に変わっていた。

「若君……！」

ブレンは呻くだけで、ミノホルダーを捕えたまま動く事は出来なかった。自分の力では、魔獣人間1体の動きを、こうして止めておくのが精一杯である。

リムレオンには、自力で身を守ってもらうしかない。そのための力を、彼は確かに持っているのだから……

禍々しいものたちによる襲撃の中、リムレオンは思いきり身を屈め、掲げていた右拳を石畳に叩き付けた。

「……武装転身！」

白い光が、少年の拳から石畳に広がり、得体の知れぬ紋様となり、さらに激しく輝いて、リムレオンの全身を下から包み込んだ。

襲いかかって行ったものたちが5匹とも、その光に弾き飛ばされ、倒れ込む。

彼らの身を包んでいたボロ布がちぎれ飛び、人間ではないものの姿が露わになっていた。

醜悪、としか言いようのない肉体が5つ。石畳の上で、おぞましく苦しげに、のたうち蠢く。

それらに囲まれながら、1人の騎士が、石畳に右拳を打ち付けた姿勢で片膝をついていた。

白い、壮麗なる全身甲冑に身を包んだ、堂々たる騎士姿。力に溢れている。

リムレオンのものではない力が、リムレオンを包み込んでいる。仮面そのものの面頬の下で、少年は今、どのような顔をしているのか。

先程の苦い微笑みが、ブレンの脳裏に甦った。

（……強くなりたいのですな、若君）

心の中から、ブレンは語りかけていた。

（本当に、強くなりたいのですな……その力に、負けぬほど……）

違う、とりムレオンは感じた。魔獣人間ではない。何かが違う。  
ダルーハ・ケスナーの死によって勢力を取り戻した、あのオーク  
やトロルといった怪物たちでもない。

これまで書物で目にしてきた、いかなる生き物とも異なるもの  
たちが、5体。のた……と身を起こしながら、触手を、尻尾を、揺  
らめかせる。刃物のような爪や角を、震わせる。

どれも四肢を備えた、辛うじて人間に近いと言える体型をしてい  
た。

何とも表現しようのない肉塊が、人型を成しつつ、触手やら角や  
らを生やしているのだ。

そして、呻いている。

「あ……う……あうあう……い……たああい……」

「いたいよう……お母ちゃああん……」

「が……がまん、するんだよおお……がまん、すれば……領主様が、  
お父ちゃんを……牢屋から、だして……くれるからねえ……」

「あっ……あああ……痛い、イタあい、くるしいいいい……」

明らかに人間ではないものたちが、しかし人間の言葉を発しながら、  
一斉に襲いかかって来る。

長剣のような爪が、鞭のような触手が、その他様々な有機的凶器  
が、あらゆる方向からリムレオンを襲う。

かわし、踏み込みながら、リムレオンは左右の拳を振るった。  
ぐちゃ、ビチャ……ツと、肉質の飛沫が散った。

肉塊、あるいは臓物の塊のようでもある身体に、拳の跡を刻印さ  
れた怪物たちが、弱々しくよろめいて倒れる。そして石畳の上を這  
いずり、のたうち、脳漿のようなものをドロドロと垂れ流しつつ、  
起き上がって来る。

「いっ……たあい……よおお……」

「我慢……がまん、だよお……ガマンすればあ、税を払わなくてイ  
って領主様がああ」

「りようしゅ、さまあ……ボク、いうこと……ききますから……パ  
パとママを、かえして……」

後退りをしながらリムレオンは、己の左右の拳を見下ろした。  
握り固められた魔法の手甲が、よくわからぬ体液でドロリと汚れ  
ている。

あまりにも嫌な手応えが、魔法の鎧で遮断する事も出来ず、素手  
に染み入って来る。

何だ、とリムレオンは思った。自分は今、何を殴ったのか。

この者たちは一体、何者なのか。

「答えろ……ゴルジ・バルカウス……」

リムレオンは思わず、命令をしていた。他人に命令をするなど、  
生まれて初めての事かも知れなかった。

「これは一体、何だ……お前は何を……メルクト領内にまで、引き  
連れて来たんだ……？」

「聞きたいか若君。はっきり言わねば、わからぬか」

仮面の下で、ゴルジはおぞましい笑みを浮かべた。おぞましい笑  
顔であろう事は、仮面を剥ぎ取ってみるまでもなくわかる。

「これらは魔獣人間のなり損ないよ。残骸兵士、と名付けてみたの  
だがな……広いサン・ローデル全土から人間を掻き集めてみて、  
佳き素材にはなかなか巡り会えぬ。どうにか出来上がった魔獣人間  
も若君よ、貴殿にたやすく倒されてしまう粗悪品ばかり。というの  
が現状でなあ」

嘆かわしそうに頭を横に振りつつゴルジは、ブレン兵長の方を見  
た。

「……ブレン殿、であつたな。貴公は実に素晴らしい素材だ。私と  
共に来い。戦士であるならば強くなりたかろう？ 修行や鍛錬では  
決して辿り着けぬ領域に、私ならば貴殿を導いて差し上げる事が出  
来る」



「……たとえ悪魔に魂を売っても、力を得る。強さを求める。確かにそれは、戦士として1つの在り方なのだろうな」

魔獣人間ミノホルダーの首を絞め捕えたまま、ブレンは応えた。低く、そして重い声で。

「俺も今……貴様のような輩をこの世から消し去る事が出来るなら、悪魔に魂を売ってもいい。そう思い始めているところだ」

「大変お気の毒とは思いますが……貴公の力で私をこの世から消す事は、出来んよ」

本当に気の毒そうに言いながらゴルジは、ブレンに向かって両手を掲げた。ローブの袖から枯れ枝の如く伸び現れた、細く青白い、死人のような両手。

それがバチッ！ と光を発した。電光、である。

「何故なら私は、貴殿と違い……これ以上、上り詰める事の出来ぬ高みへと達してしまったのだ。努力や修行では決して辿り着けぬ領域へと、な」

その電光が、雷鳴を立てて迸った。

その時にはブレン兵長は、捕えた魔獣人間を引きずり起こし、振り回し、ゴルジに向かって物の如く投げつけていた。

ブレンを直撃するはずだった電撃光が、投擲されたミノホルダーの巨体にバチバチバチッ！ と絡み付いた。

奇怪な悲鳴を上げる魔獣人間。その肉体のあちこちで、眼球が破裂する。筋肉が、血管が、破裂する。噴出した臓物が、やはり破裂する。飛び散った体液が、電熱に灼かれて蒸発する。骨格が、碎け散る。

「……私はもはや、これ以上は強くなれぬという事だ」

電光が消えた。魔獣人間ミノホルダーも、消滅に近いところまで粉碎されて屍も残っていない。

「だが貴公ら人間たちは、無限の可能性を秘めておる。私はそれを、こうして試している最中なのだよ」

呻き蠢く残骸兵士たちを、ぐるりと見回しながら、ゴルジは語る。

「わかつてはもらえぬか？ 人間という存在を、より高みへと導くのが私の使命……」

「……すまない、そろそろ黙ってもらおうかな」

腰から魔法の剣を抜き放ちながら、リムレオンは踏み込んだ。

「いくら聞いても僕には恐らく、お前の話は理解出来ない……！」  
踏み込もうとした足が、止まった。

ボロボロを脱ぎ捨てた残骸兵士たちが、ゴルジを護衛する形に群れ、リムレオンの行く手に立ち塞がっている。

「いたあい……よお、お母ちゃあん……」

「どこ……あたしの、手……あたしの、足……あたしの、おっぱい……どこに、あるのよお……」

「約束、だ……早く、俺の娘を……牢屋から、出して……」

口々に痛々しい呻きを漏らし、立ちながら這いずるように、のたのたと迫り来る残骸兵士たち。

リムレオンは、踏み込む事が出来なくなった。

（何を……ためらっている、もう1人の僕……）

自分の意思に関係なく戦ってくれるはずの魔法の鎧が、1歩も動こうとしない。

（元は人間だった生き物を、お前はもう……何体も、殺しているんだぞ……）

元は人間だった者たちが今、ゴルジを警護しながら、触手を揺らし、爪や角を振り立て、脳天や腹部で口を開いて牙を剥いている。

あの触手で、爪や角、牙で、どれほど人間を殺傷出来るのか。

とにかく。この残骸兵士たちはゴルジの命令には逆らえぬまま、放っておけばメルクトの領民にも危害を加えるかも知れない。

ゴルジ共々、ここで皆殺しにしておかなければならない。

そのための、魔法の鎧と剣なのだ。

と頭ではリムレオンもわかっている。

身体は、しかし動かない。魔法の鎧も、動いてくれない。

「戦うのです、若君！」

叫びながらブレン兵長が、残骸兵士の1体を投げ飛ばしていた。

「痛いよう……」

石畳に叩き付けられた残骸兵士が、幼い女の子の声で悲鳴を漏らす。腹の辺りで開いた、割れた瘡蓋のような口でだ。

その口をグシャリと容赦なく踏み付けながらブレンは、

「戦場で相手を選ぶ事など、出来はしませんぞ！」

襲いかかって来た残骸兵士2体、の片方を掴んで振り回し、もう片方と激突させた。痛ましいほど醜悪な肉体が2つ、グチャ……ツと一体化し、様々な飛沫を飛び散らせる。

まるで手本を見せてくれるかのように、ブレン兵長は己の手を汚し、戦っている。

なのにリムレオンは、やはり動けなかった。

（動け、もう1人の僕……！ お前なら、どんな残虐な戦いも出来るはずだ！）

動かぬ魔法の鎧を動かそうとする、のに精一杯で、リムレオンは気付かなかった。

残骸兵士たちの後方からゴルジが、こちらに向かって片手を掲げている事に。

その枯れ木のような片手が、光を発した。電光だった。

「ぐあっ……あああああッッ！」

絶叫を痙攣させながら、リムレオンは倒れていた。

全身にバリバリッ！ と電撃光が絡み付いている。

衝撃が、魔法の鎧の内部にまで流れ込んで来る。

魔獣人間を一撃で粉碎した電光。魔法の鎧がなければリムレオンも、先程のミノホルダーと同じ死に様を晒しているところだ。

「ふむ……戦いを躊躇うような者に、戦う力を託すとはな。ゾルカ・ジェンキム、一体何を考えている」

倒れ、のたうつリムレオンに、帯電する片手を向けたまま、ゴルジが呟く。

「まあ良い、こうなればメイフェム殿がやり損なった事をやるまで

よ……魔法の鎧はいただいてゆく。中身を潰して、な」

「ぐっ！　ぐえええ……ッ」

バチバチと執拗に絡み付く電光に苛まれ、リムレオンは石畳の上を無様に転げ回った。魔法の鎧が、起き上がってくれない。

立ち上がれぬリムレオンの傍らに、人影が立った。ほっそりと可憐な、頼りない人影。

「無理です、ブレン兵長……」

シェファ・ランティだった。いつものように、魔石の杖を携えている。

だが身に着けているのは攻撃魔法兵士のローブではなく、健康的な太股を剥き出しにした短衣である。

「こんな連中と戦うなんて、リム様に出来るわけありません。無理に戦って、こいつら皆殺しにでもしちゃったら……リム様、後悔して立ち直れなくなります。うじうじ悩んで何にも出来ない駄目人間になっちゃいます。あたしは別に、それでもいいんですけどね」

「シェファ……」

駄目だ、来るな。逃げろ。そう叫ぼうとしてリムレオンは失敗し、珍妙な悲鳴を漏らした。絡み付く電流で、声帯がおかしな感じに痙攣してしまう。

代わりにブレンが、残骸兵士の1体を殴り倒しながら叫んでいた。

「何をしているシェファ！　帰れ、逃げろ！」

「逃げるくらいなら、最初から出て来ませんよ……」

言葉を返しながらシェファは、軽く右手をかざした。

リムレオンは、己の目を疑った。

少女の繊細な中指に、小さな竜が巻き付いている。ように見えたのだ。

自分が中指にはめているものと同じ、竜の指輪……いや、そんなはずはない。自分は今、電撃に苦しめられて幻覚を見ているのだ。

「ほう、それは……」

ゴルジが、興味深げな声を出す。

ゴルジの興味が、シェファに向けられてしまった。

感電・痙攣する喉から、リムレオンは絶叫を絞り出した。

「だ……めだ、シェファ……にしろおおおおおッ！」

「それはこっちの台詞。戦えない人には、とっと逃げちゃって欲しいのよね」

竜の指輪が、シェファの右手で、淡く光を発し始める。

「逃げないんなら、せめて目えつむって……それか、見て見ぬふりして見てなさいよ。あたしが今から、ちょっと残虐な事やらから」

「シェファ……！」

リムレオンは悟った。

この少女は今から、手を汚そうとしている。

手を汚す勇気のない、臆病な若君に代わってだ。

自分はシェファに、とてつもない汚れを押し付けようとしているのだ。

「駄目だ……そんな……！」

「よく見ててね。残虐な事をやるのは、リム様じゃなくてあたし……軽蔑したかったら、してもいいよ」

軽蔑されるべきは僕だ。

そう叫ぼうとするリムレオンを背後に庇い、シェファは立った。

ゴルジ、それに残骸兵士たちと、対峙した。

少女の右手の指輪が、輝きを強めてゆく。清かな、青い光だった。「勘違いしないでね。リム様のために汚れ役を引き受ける、なんてのは全然違うから……あたしはただ、お城のゴミ掃除をするだけ。領主様から、お給料いただいちゃってるからね」

苦笑めいた言葉と共にシェファは、舞うように身を翻し、愛らしい右手を振るった。

竜の指輪から青い光がキラキラとこぼれ出し、軽やかに舞い回る少女の細身にまわりつく。

その煌めきの中で、一言だけ、シェファは呟いた。

「武装転身……」

## 第23話 青き光の少女（後編）

ティアンナ女王と比べて一回りは豊かな乳房の形そのままに、胸甲はふつくと美しく膨らんでいる。

薄手の金属鎧が、シェファの全身にぴったりと貼り付いて、凹凸の瑞々しい体型を際立たせていた。

首から上は細面の面頬と兜で、少女の愛らしい顔立ちが完全に隠されてしまっている。

シェファの全身を包む、ほっそりとした魔法の鎧。青い。その青さは、空のようでも海のようでもあり、そして赤い炎よりも高熱の青い炎、のようでもある。

そんな青色の全身甲冑の所々に、宝石状に加工された魔石が埋まっていた。腰の左右、両乳房の間、左右の肩。それに兜の、額の部分にも。

踵の高い足甲でコツ、コツ……と規則正しく石畳を叩きながら、シェファは歩み寄って行った。ゴルジ・バルカウス、及び彼を護衛する形に群れた残骸兵士たちに向かって。

「痛いよう……いたあい……よう……」

「領主様……バウルフアーこう爵さまあ……」

口々に呻きながら残骸兵士の群れが、長剣のような爪を振り上げる。鞭のような触手を揺らめかせる。甲殻類を思わせる大型のハサミを鳴らす。

「早く……私の息子を、返して……」

「ママ……ぼくはここだよ、ママあ……」

「あは……くつついてる、あたし……おにいちゃんと、くつついてるよお……」

様々な器官を蠢かせ、様々な言葉を漏らしつつ。魔獣人間のなり損ないたちは、襲いかかって来た。

「あんたたちを、元に戻してあげる方法……」

襲い来るものたちに語りかけながらシェファは、魔石の杖を振り上げた。

その先端の魔石からバリバリッ！と電光が溢れ出し、杖全体に絡み付く。

「もしかしたら、あるのかも知れないけど。あたしじゃわかんないから……殺すね？」

稲妻の塊と化した杖を振るいながら、シェファは踏み込んで行った。

ほっそりと優美な甲冑姿が、舞うようにクルリと躍動する。と同時に電光の杖が、雷鳴を発して縦横に唸り、左右の残骸兵士たちを殴打する。

打撃と電撃を同時に叩き込まれた残骸兵士が、2体いや3体。ぐしゃっバキッと凹みひしゃげながらバチバチバチッ！と感電し、硬直する。痛ましいほど醜悪な肉体のあちこちが、絡み付く電撃光の中で瘤状に膨れ上がり、破裂してゆく。

「あっあああ、いいいいっ痛い、いたいイタイ痛いよおおお」

「ママ……まま……あ……」

「一緒……おにいちちゃんと、ずうっといっしょ……」

断末魔の悲鳴が、最後の言葉が、ボン、ポボンッと肉の爆ぜる音に変わった。

（駄目……）

3体もの残骸兵士が、電光に灼かれて破裂し、跡形もなくなっゆく様。を見つめながら、シェファは強く思った。

（絶対ダメ……こんな事、リム様にさせられない……）

思いと共に、稲妻の杖を振るう。

ブンッと空気を切る音と、バチッ！と電光の鳴る音が、同時に響いた。

残骸兵士が2体、歪み潰れながら電撃に灼かれ、粉々に破裂した。ブレン兵長率いる歩兵隊との合同訓練で、確かに身体はよく動かす。



が、そんなもので身に付くはずのない身体能力を今、自分は発揮している。

まるで武芸の達人のように、身体が動くのだ。

「あんたたちを殺すのはリム様じゃなくて、あたし……」

叩き潰す対象に語りかけながら、シェファはさらに踏み込んで行く。

そして、電撃の杖を振るう。

雷鳴を伴う打撃が横殴りに一閃し、また数体の残骸兵士を叩きめす。

元々は人間であつたものたちが感電・帯電しながら吹っ飛び、倒れ、起き上がる事なく破裂して石畳にぶちまけられる。

リムレオンが、ブレン兵長に助け起こされながら、こちらを見ていた。

可愛い顔が、面頬の下で呆然としている。のがわかる。

シェファの戦いぶり、と言うより殺しぶりに、呆然としているのだろう。こんな残酷な女だとは思っていなかったに違いない。

(ま……そりゃ引いちゃうよね、リム様……)

心の中で苦笑しながらシェファは、電光の杖を高々と掲げた。

魔法の鎧の所々に埋め込まれた魔石が、淡く光を発した。

シェファの周囲、空中5カ所で炎が発生し、燃え上がりながら球状に膨れ上がる。

まるで小さな太陽のような火球が5つ、魔法の鎧を着た少女を取り巻いて浮遊する。

それらに号令を下すかの如くシェファは、電光の杖を振り下ろした。

5つの小さな太陽が、一斉に発射され、飛んだ。そして群れる残骸兵士たちに向かって、隕石のように降り注いで行く。

周囲5カ所で爆発が起こり、轟音と共に5本の火柱が生じた。

元は人間であつた者たちが、碎け散り、噴き上がりながら焦げ崩れ、灰と化する。

5つの火球が消えた時、残骸兵士はもはや1体も生き残ってはいなかった。全て灰に変わり、漂い、石畳にうつすらと降り積もっている。

魔力の消耗を、シェファはほとんど感じなかった。

攻撃魔法兵士の乏しい魔力が、反則的な比率で、破壊力に変換されたのだ。

「これが……魔法の、鎧……」

呆然と、シェファは呟いた。

大した消耗を感じる事もなく、大量殺戮をやったのける。これが、魔法の鎧の力なのだ。

（確かに……こんなもの持たされたって困っちゃうよね、リム様……）

あの女王から竜の指輪を押し付けられて以来ずっとリムレオンが、何やら鬱々としていた、その理由がシェファは今やっとわかった。大量殺戮のための力など手に入ったところで、彼が喜ぶはずはないのだ。

「……よもや、このような事になっていようとはな」  
声がした。

残骸兵士は皆殺しにしたが、その巻き添えを上手く避けたゴルジ・バルカウスが、少し離れた所に佇んで、仮面越しにシェファを見つめている。睨んでいる。

「魔法の鎧……その装着者を、きちんと複数用意しておくとはな。

ゾルカ・ジェンキム、さすが抜かりのない事よ」

「ねえ、あんた……」

シェファは、とりあえず会話を試みた。

「御両親とか、奥さんや子供とかって、いる？」

自分がたった今、皆殺しにした者たちには、きつといたに違いがない。両親が、兄弟が、子供が。友達や恋人が。

そういった人々の泣き叫ぶ顔を、シェファは思い浮かべた。  
泣き叫ぶ彼ら彼女らに、シェファは心の中で語りかけた。

（殺したのは、あたし……リム様じゃなくて、あたしだから）

「……あんたも、殺すから」

電光の杖を、シェファはゴルジに向けた。

「あんたの子供とか親御さんが、今ここにいて泣いてたとしても……ね」

「ふん、力に溺れて外道に堕ちるか……それもまた良し！」

ゴルジの両手が、シェファに向けられる。枯れ枝のような、青白い両手。

それが、電光を発した。

魔獣人間を一撃で粉碎する稲妻が、雷鳴を伴い、迸る。

一方、シェファの全身では、幾つもの魔石が輝いていた。

乏しい魔力が、ほんの少しだけ体外に吸い出されてゆくのを、シェファは感じた。

目に見えぬ何かが、眼前に生じた。

そこにゴルジの電光が激突し、飛沫の如く飛び散って消える。その激突の瞬間、楯のような壁のようなものが浮かび上がる。

魔力の、防壁だった。

「ぬ……」

微かに怯みを見せる仮面の男に、魔石の杖を向けたまま、シェファは魔力を絞り込んだ。貧弱な魔力を精一杯、魔石の杖へと集束させていった。

杖の先端で、魔石が赤く激しく、輝きを強める。そして。

「……はあッ！」

シェファの気合いと共に。その赤い光が、魔石から奔り出した。火炎、と言うよりも高熱そのものの凝集体。それが真紅の光の束となってドルルルルッ！と宙を裂き、駆ける。

そしてゴルジの眼前で、目に見えぬ何かに激突した。たった今、シェファが発生させたものと同じ、魔力の防壁。

それが、しかし次の瞬間には碎け散っていた。

微かな魔力の破片を蹴散らしながら、真紅の光の束が、ゴルジの

身体を貫いた。

魔術師の薄い胸から背中へと走り抜け、消えた。

「ぐっ……が……」

ローブに包まれた細い胴体に、見てわかる大穴が穿たれている。

その大穴の内部が、赤く輝き、燃えている。

燃え盛る赤色が、大穴から溢れ出し、ゴルジの全身を包み込んだ。ローブも仮面も、一瞬にして焦げ砕け、灰になった。

結局どのような素顔であったのかわからぬまま、ゴルジ・バルカウスは今、炎に包まれている。大穴の空いた人体が、燃え盛る炎の中で、消し炭に変わってゆく。

そんな有り様で、しかしゴルジは言葉を発した。

「な……るほど、な。やはり私は、魔術師としては劣等……まともに攻撃魔法で勝負など、してはならぬという事か……」

消し炭になりかけた肉体が、炎の中で膨れ上がった。

500年に1度、己の身を焼き尽くし、灰の中から新たに生まれ変わるという不死鳥の伝説を、シェファは思い出した。

だが今、炎の中から現れつつあるのは、神々しい不死鳥ではなく、おぞましい怪物である。

まず、翅が見えた。

それが激しく振動し、羽ばたき、炎を吹き飛ばしてしまう。

微かな灰と火の粉を飛び散らせながら、それは姿を現していた。

枯れ木のようなだった身体は、ブレン兵長をも上回る巨体へと膨張しつつ、甲虫のような外骨格に覆われている。

力強い四肢を備えた、人型のカブトムシ。といった感じの姿だ。

が、角は生えていない。首から上は、まるで甲殻で出来た頭蓋骨だ。眼窩の奥で爛々と光を燃やし、唇のない口で牙を剥いている。

その口が、言葉を発した。

「やれやれ……醜い馬鹿力を振るって戦わねばならぬ、か」

「魔獣人間……なのか？」

リムレオンが呻く。

肯定も否定もせずゴルジは、牙が剥き出しの口元を微かに歪めた。笑った、のであろうか。

「……違うわね」

根拠も理由もなく、ただ感じた事を、シェファは口に出した。

「あんた、魔獣人間……じゃないでしょ」

「ほう。何故そう思う？」

「何となくだけど……出来損ない、って感じがするのよね。今あたしが皆殺しにした連中と同じで」

残骸兵士たちの遺灰がうつすらと降り積もる光景を、シェファはちらりと見回した。

「あんた、自分を魔獣人間にしようとして失敗しちゃったんじゃない？　それで他人を魔獣人間にするのに、躍起になってる」

「ふん。当たらずとも遠からず、という事にしておこうか……私のこの身が失敗作であるのは、受け入れねばならぬ事実だがな」

ゴルジの口調が、ねっとりとした嫌な熱気を帯びる。

「だからこそ私は……成功作品を、造りたいのだよ」

「そんな事のために……どれほどの人間を、お前は……！」

リムレオンの声が震え、詰まる。

まるで嗚咽を漏らすように、しかし彼は怒っていた。ここまで怒ったリムレオン・エルベツトを、シェファは見た事がなかった。

その怒りをゴルジが、挑発的に受け流す。

「若君よ、言葉で怒ってみても何にもならぬぞ。先程も言ったが……力を、見せてみよ。気に入らぬ事があるならば、力でどうにかするしかないのだよ。このようになあ！」

ゴルジが、シェファに向かって突進して来た。

巨体に似合わぬ速度で突っ込んで来る、人型の甲虫。

その異形に向かって、シェファは片手を掲げた。

全身で、いくつもの魔石が輝きを発する。

魔力の防壁が、前方に出現した。そこに、ゴルジの巨体が激突する。

空間に亀裂が走った、ように見えた。

続いて、微かな光の破片が飛び散り、消えた。

魔力の防壁が、ゴルジの体当たりで粉碎されていた。

「うそ……！」

息を呑みながらもシェファは、とっさに後方へと跳んだ。

が、遅かった。

ゴルジの右手が、斜め下から、すくい上げるように襲い来る。5本の長剣のような爪が、シェファの細身を打ち据えた。

魔法の鎧から、火花が散った。

「あう……ッ！」

一瞬、呼吸を詰まらせながら、シェファは転倒していた。魔法の鎧がなかったら、内臓をぶちまけていたところであろう。

魔石の杖にすりついて立ち上がったシェファを、ゴルジの左手が襲う。

5本の刃そのものの金属的な爪が、しかしシェファに叩き込まれる寸前で、斜め上方に跳ね上がった。ゴルジがとっさに、防御の構えを取ったのだ。

防御の形に跳ね上がった左手の爪に、魔法の剣が激突した。

リムレオンの斬撃だった。

壮麗な白い甲冑姿が跳躍し、空中から魔法の剣を振り下ろしたのだ。

その刃が、ゴルジの左手の5本爪と、ぶつかり合ったところである。

斬撃を弾かれるや否や、リムレオンは空中で身を翻した。

重厚な魔法の鎧をまとう身体が、軽やかに回転しつつ右足を振るう。竜巻にも似た後ろ回し蹴り。

それが、ゴルジの顔面を直撃した。

「うぬ……！」

甲虫のような巨体が揺らぎ、頭蓋骨そのものの顔面から、鮮血と思われるものの飛沫が散る。

リムレオンはそのまま着地しつつ、魔法の剣を、真上から真下へと一直線に振り下ろした。

ゴルジの巨体から、大量の火花と微かな血飛沫が飛び散った。

カブトムシのような甲殻に、外傷は見当たらない。

それでも、自ら失敗作と言いながら、これまで現れたどの魔獣人間よりも頑強なゴルジの肉体が、よろめき揺らいでいる。

「ゴルジ・バルカウス……ッ！」

リムレオンの怒りの呻きに合わせ、魔法の剣が、左下から右上へと一閃した。

火花を散らせ、ゆらりと倒れそうになりながら辛うじて踏みとどまるゴルジの巨体。

そちらへシェファは魔石の杖を向け、魔力を絞り込んだ。

「はああ……ああああああっ！」

気合いと共に、集束した真紅の魔力光が、杖の先端から迸った。

ドギョルルルルッ！ と宙を裂いて直進した太い赤色光が、ゴルジの胴体に激突する。

甲虫のような巨体が、吹っ飛んだ。かなり飛んだ所で石畳にぶつかって跳ね、そのまま背中の甲殻を開いて翅を広げる。

「……ここまで、にさせてもらおう。ゾルカ・ジェンキムの作品……その力、充分に確かめさせてもらった」

いくらか苦しげに捨て台詞を吐きつつ、ゴルジは翅を震わせ、上空へと舞い上がって行く。

その全身で外骨格に亀裂が走り、血と思われる体液が、僅かながら滴り落ちている。

「ふ……ふふふ、魔法の鎧をまとう者たちよ。貴公らもまた英傑、世に戦乱をもたらす存在よ。せいぜい戦うが良い。おぬしらのような者どもが勇敢に戦えば戦うほど、魔獣人間の出番も増える」

ヴーンッ！ と翅を鳴らし、ゴルジは一気に、空の彼方へと飛び去って行った。言葉を残し、引きずりながら。

「サン・ローデルへ来られよ若君殿！ 伯父君が待っておられる！」

甲虫のような巨体は、あっという間に見えなくなった。

その方向……サン・ローデルの方角をじっと睨みながらリムレオンが、

「……伯父上と、戦いに行け……という事、なのか……」

声を漏らし、そして石畳に膝をついた。

弱々しく崩れゆくその身体が、ぼんやりと白い光に包まれる。魔法の鎧が、光に戻ってゆく。

少年の右手、竜の指輪に、白い光は吸い込まれ、生身のリムレオン・エルベットの姿が露わになる。

細い身体の所々に包帯が巻かれ、可愛い顔を痛々しく腫らした若君。

シェファは溜め息をつき、軽く右手を掲げた。

全身が、青い光に包まれる。

光に戻った魔法の鎧が、右手の指輪に吸収される。リムレオンとお揃いの、竜の指輪。

嬉しい気分にもなれぬまま、シェファは訊いた。

「ねえ……何やってんの？ リム様」

笑っているような怒っているような、震えた口調になった。

「そんな、ボロボロになるまで戦って……そうまでして、いい格好見せたいわけ？ あの女王様に」

「……ティアナは関係ないさ、もう。ここまで来たら」

ブレン兵長に肩を借りながら、リムレオンが答える。

ティアナ、などと呼び捨てにしているのが、シェファは気に入らなかった。そんな自分が、情けなくもあった。

「何でよ……何でリム様が、バケモノと戦わなきゃいけないの……？」

満足出来るような答えなど得られないであろう問いを、シェファは口にしていた。

「弱っちくて、可愛いだけを取り柄のリム様が……可愛い顔そんなボコボコにしてまで……何で？」



「戦う理由なんて、もうどうだっていい」

風が吹いた。もともと人間だった者たちの遺灰が、ぶわ……と舞い上がって渦を巻く。

それを見つめながら、リムレオンは言った。

「戦いが始まってしまった以上……戦い続けるしか、ないんだ」

「……ならば、殺さなければなりませんぞ」

細身の若君を支えながら、ブレンが言葉を挟む。何を殺さなければならぬのか、までは言わない。

「……わかっていますよ。どう綺麗事を言ったところで、戦うというのは要するに殺すという事……僕はそれを、シェファに押し付けてしまった」

「やめて。やめてよね」

冷たい口調を、シェファは作った。

「言ったでしょ。別にリム様のために汚れ役をやらうとか、そんなんじゃないって……あたしが、あいつらをゴミ掃除みたく殺しまくったのは……」

一瞬だけ、シェファは考えた。思いつく理由など、1つしかなかった。

「ただ単に……あたしが、残虐だから」

メルクト地方前領主レミオル・エルベツト侯爵には結局、恩を返す事が出来なかった。

19年前。ヴァスケリア王国全体が、赤き竜への隷属の道を歩みつつあった頃。

その流れに逆らって赤き竜の軍勢と戦い続けるダルーハ・ケスナ1とその仲間たちを、レミオル侯は地方領主という立場から、いろいろと助けてくれたものだ。

王家からも民衆からも迫害されて居場所をなくしたダルーハ一行を、この城にかくまってくれた事もある。

赤き竜の配下の魔物たちとは、ここメルクト地方を拠点として戦ったものだ。

思い出しつつゾルカ・ジェンキムは、城郭の露台から見下ろしていた。先程まで激戦が行われていた、城内の一角を。

リムレオン、シェファ。それに魔獣人間を1対1で圧倒していた、巨漢の勇士。

彼らによる激戦に、今回はゾルカが手出しをする必要はなかった。シェファ・ランティは、ほぼ期待通りの力を発揮してくれた。リムレオンも、未完成の試作品に近い魔法の鎧で、実によく戦っている。

「御子息にこのような戦いをさせているのは、私です」

同じ露台に立つ2人の人物に、ゾルカは振り向いて言葉をかけた。一組の、中年貴族の男女……メルクトの領主夫妻。リムレオン・エルベットの両親である。

「どうか、お恨みいただきました……」

「それは違いますわ、ゾルカ殿」

リムレオンの母、ヴァレリア・エルベット侯爵夫人が、微笑んだ。「息子は、自分の意志で戦っております。ゾルカ殿は、それに力を貸して下さっている……そういう事なのでしょう？」

「あの魔法の鎧というものが、リムレオンを守ってくれているのでしよう。ゾルカ殿には感謝こそすれ、恨みなど」

彼女の夫、カルゴ・エルベット侯爵も、穏やかな笑みを浮かべて言う。

立派な領主になったものだ、とゾルカは思った。19年前、自分たちがこの城にかくまわれていた時には、本当に弱々しい若君だったものだが。

妹を溺愛し、妹と一緒にでなければ何も出来ない少年だった。

それを心配した父レミオル侯によって無理矢理、娶らされた妻が、このヴァレリア夫人である。

とは言えゾルカが見たところ、夫婦仲に問題はなさそうだ。

問題があるのは、夫人の実家。サン・ローデル地方領主のゲドン家である。

「あなた……リムレオンには、領主としてお命じなさいませ」  
ヴァレリアが言った。

息子に何を命じよと言われているのか、カルゴにも、わかつてはいるようだ。

「し、しかしお前……義兄上を」

「兄が何をしているのか、あなたも御覧になったでしょう？」

自分の兄であるサン・ローデル領主バウルファー・ゲドン侯爵を……息子に討伐させろ、と言っているのだ。この侯爵夫人は。

「あの男は、人ならざるものを使つての叛乱を企んでいるのですよ？ その手始めに、メルクトを属領化しようとしているのです。そうなれば領民がどのような目に遭うか……それも、御覧になったばかりではありませんか」

「うむ……ゾルカ殿、あれらは本当に」

言いつつカルゴが、息を吞んでいる。思い返しているのだろう。

ゴルジ・バルカウスと名乗った男が引き連れていた、おぞましくも痛ましい者たちの姿を。

「本当に……サン・ローデルの領民であつたですか、あのよう……」

「間違いない、と思われます」

魔獣人間の、なり損ないの群れ。

このメルクト地方がバウルファー侯の手に落ちれば当然、メルクトの民衆も、同じ目に遭うだろう。

「もはや、生きて償う事など出来ない罪……」  
ヴァレリアが、天を仰いだ。

「あの男はもはや、私の兄でも、あなたの義兄でも、リムレオンの伯父でもありません。討ち滅ぼすべき逆賊です」

逆賊。少し前まではダルーハ・ケスナーが、そう呼ばれていた。人間ではないものどもを率いての、叛乱。バウルファー侯爵は今、

同じ事を行おうとしている。

否。彼は、担ぎ上げられているだけだ。

担ぎ上げている者たち。それはメイフェム・グリムと、ゴルジ・バルカウス。

甲虫のような怪物に変化し、飛び去って行った、あの男が。ゾルカの知るゴルジ・バルカウスと同一の人物であるとしたら。

これは地方領主の叛乱としては片付かぬ、ヴァスケリア・バルムガルド2国を巻き込んだ、とてつもない動乱になるかも知れない。魔法の鎧の1つや2つでは、いかんともし難いほどの動乱に。

そうなれば、彼が動く。

動乱を鎮圧する代わりに破滅をもたらしかねない、あの若者が。

この場にはいない、今はどこにいるのかわからない彼に、ゾルカは心の中から語りかけた。

（頼む、貴公は何もしてくれるなよ……ガリエル・ケスナー殿）

## 第24話 侵攻と信仰

ダルーハ軍に蹂躪・破壊され尽くした、王都以北の各地方。その復興が、今ひとつ進んでいない。

それは言い訳のしようもなく自分の落ち度であるとティアンナは思う。

戦禍の跡で困窮そのものの暮らしを強いられている民衆が、女王エル・ザナード1世による統治に不満を抱くのは当然だ。

それに乗じる形で、唯一神教会ローエン派が、王国北部で信徒を増やし、一大勢力となりつつあるという。エル・ザナード政権に対し批判的・敵対的な勢力だ。

調べ上げたところによると。ローエン派の聖職者たちは、戦災を被った人々に、まず食べ物や水それに仮の住まいを提供しつつ、破壊された町や村の再建にも力を尽くしているらしい。

言葉で神による救いを語るだけでなく、物質的な支援をも実行しているという事である。

クラバー・ルマン大司教ら、ローエン派の主だった人々の思惑はどうあれ。現実的に、民衆が助かっているのだ。

それは良い、とティアンナは思う。

問題は、そのような現実的な支援を行うだけの財力を、ローエン派がどこに隠し持っていたのか。という事だ。

教会の富は、ダルーハ軍による略奪に遭うまでは、ディラム派に独占されていた。ローエン派には銅貨の1枚も流れてはいないはずだ。

唯一神教の主流から外れたところで細々と信者を保っていたローエン派が、突然、戦災復興の大盤振る舞いを始めた理由。そのような事が可能となった原因。

考えられるものは、1つしかない。

「バラムガルド……」

馬上で、ティアンナは小さく呻いた。

間違いない。バルムガルド王国が、ヴァスケリア国内のローエン派に、金銭的な援助を行っている。エル・ザナード1世に敵対する勢力を作り上げるために。

それで我が国の戦災復興が進んでおるのは事実です、と兄モートン副王は言っていた。

もらえるものは、もらっておきましょう。だからと言って国をくれてやる事はありません。とも言っていた。

言われるまでもない事である。

ローエン派が、バルムガルドの金を使って復興を進めてくれるのであれば、しばらく任せておけば良い。

要は、戦に勝てば良いのだ。

勝ちさえすれば、敵の政治的な調略など全く意味がなくなる。

東国境へと向かって街道を進む、ヴァスケリア王国正規軍総勢5000人。

その中央に、女王エル・ザナード1世ことティアンナ・エルベツトの姿はあった。下着のような鎧の上から純白のマントを羽織り、白馬にまたがった姿。

ティアンナ自身は先陣を希望し、真っ先に戦場に突入するつもりでいたのだが、他の者たちに猛反対された。

仕方なく今こうして、5000もの兵士に護衛された、最も安全な場所にいる。

男女問わず国王たる者、危険な場所に軽々しく身を置くべきではない。それはティアンナも、頭ではわかっている。

だが。王族自らが剣を振るって戦わねばならない局面というのは、確かにあるのだ。それもまた先の戦で、ティアンナが学んだ事である。

近衛騎兵が1人、馬を寄せて来て告げた。

「陛下、斥候が戻って参りました」

「報告を聞きましょう。これへ」

目通りを許す、という偉ぶった形になってしまふのは仕方がない。目通りを許された斥候が、ティアンナの馬の近くで跪いた。

「申し上げます、バルムガルド軍総勢約4万！ 現在、国境にてガログ城塞を取り囲んでおります。ラウデン侯爵が兵2000を率いて城塞を守っておりますが、このままでは落城は時間の問題かと」

ラウデン・ゼビル侯爵は、ヴァスケリア最東部すなわち対バルムガルド最前線地域であるレネリア地方の領主で、先の戦においてダルーハ軍に対し、最も頑強に抵抗した将の1人だ。

結果、レネリア地方は完全にはダルーハ軍の手に落ちる事なく、王都以北の各地と比べて、戦災と呼べるような害も被っていない。

ラウデン侯爵のこの手腕に着目したのが、ダルーハ・ケスナーの片腕とも言うべき猛将ドルネオ・ゲヴィンであった。

彼は独自にラウデンと接触・交渉し、自身を含むダルーハ軍最精鋭部隊がレネリア地方に駐屯する事を了承させてしまった。

バルムガルド王国が、ヴァスケリア救援を名目に、軍事行動を起こしていたからである。3万の軍勢が、レネリアへと攻め寄せて来たのだ。

ラウデン侯はやむを得ず、一時休戦のような形でドルネオ部隊の領内駐屯を認め、共にバルムガルド軍3万を迎え撃った。

いや、共に戦うという形にはならなかった。

ドルネオ率いるダルーハ軍精鋭部隊が独力で、バルムガルド軍を蹴散らしてしまったのだ。

この時ドルネオは魔獣人間としての正体を現す事なく、人間の枠内に抑え込んだ武勇と巧みな用兵で、3万の敵軍を撃退した。

こうしてダルーハ軍の力をラウデン侯爵に見せつけ、無言の恫喝とした後、ドルネオは悠々と王都エンドゥールへ引き返したのだ。

総大将の武勇と魔獣人間の力が全てのダルーハ軍にあって唯一、まともに軍事というものを考える事の出来た将が、このドルネオ・ゲヴィンであった。

あの叛乱が今しばらく長引いていたら、剛直なラウデン侯爵も、ダルーハの軍門に降っていたかも知れない。

幸いそんな事にはならず彼は今、東国境の要たるガロググ城塞で、バルムガルドの侵攻を止めてくれている。が、兵は2000人。王国正規軍がこのまま合流したとしても、7000人。対するバルムガルド軍は、4万である。

ティアンナの周囲で、近衛兵団が微かにざわついた。

このざわつきがヴァスケリア軍全体に広がれば、5000の兵が戦わずに逃走する事態にも繋がりがねない。何しろ1万にも満たぬ兵力で、4万の大軍に挑もうと言うのだ。

この場で斥候に大声で報告をさせたのは、もしかしたら失敗だったかも知れない。

が、ティアンナは言った。

「全軍に伝えて下さい。バルムガルド軍は総勢4万……ただし全て人間の兵士です。魔獣人間の類は、1匹もいません」

ざわつく近衛兵団を見渡し、ティアンナは微笑んで見せた。

「ダルーハ卿との戦いを生き抜いた貴方がたにとって、どれほど楽な戦であるか。それは考えるまでもないでしょう？」

「……そうでした。戦は、兵の数ではありません」

近衛騎兵たちが、口々に言う。

「我らはダルーハ・ケスナーをも打ち破った御方に率いられているのです。何の、数ばかりのバルムガルド軍ごとき！」

「エル・ザナード1世陛下がおられる限り、ヴァスケリアには勝利あるのみ！」

歓声に近い騒ぎを始めた近衛兵たちを、ティアンナは片手を上げて静ませた。

彼らとて頭ではわかっている。4万の敵との戦いが、楽な戦であるはずはないのだ。

勝てるかどうか。それ以前に、生きて終えられるかどうかもわからない戦いになる。



だからこそ皆、エル・ザナード1世の名にすがりつかずにはいられない。ダルーハ・ケスナーを倒した、救国の女王の名に。

真実がどうであるかは関係ない、と兄モートンは口癖のように言う。

真実を隠したまま、人々のすがりつく対象であり続ける。

玉座に座り王冠を戴くとは、そういう事なのだ。

(これが、私自身の戦い……)

ティアナは、馬上から空を見つめた。

同じ空をどこかで見つめているかも知れない1人の若者に、かつて偉そうに語ったものである。

今は自分自身の戦いをするべき時だ、と。

サン・ローデル地方領主バウルフアー・ゲドン侯爵の居城。

その城壁の上をとぼとぼと歩きながら、メイフェム・グリムは思う。人間とは、哀れなほどに醜く腐敗した、もはや唯一神ですら救う事の出来ぬ存在である。と。

神に仕える者たちですら、そうなのだ。

ヴァスケリア国内のローエン派が、バルムガルド王国と結託し、女王エル・ザナード1世に敵対しようとしている。

長年に渡って綺麗事ばかり言っていたローエン派が、ついに世俗の権力と結びついてしまったという事だ。

かつてはアゼル派がそうであった。唯一神の威を借りて大いに権力を振るい、弾圧や虐殺を行った。

そんな教会の腐敗・暴虐を憂える人々によって立ち上げられたはずのローエン派が、アゼル派と同じ道を歩み始めてしまった。

今でこそ戦災復興に尽力して民衆の機嫌を取ってはいるが、この度の戦で、女王率いるヴァスケリア軍がバルムガルド軍に敗れでもしたら、どうなるか。

ローエン派はバルムガルドによる後ろ楯を得て、唯一神教主流の

地位を揺るぎないものとするだろう。

やがては大司教クラバー・ルマンの意に従わぬ者を、平和主義の名の下に弾圧・迫害するようになる。

宗教とは、そういうものなのだ。

神の教えがどれほど崇高なるものであっても、それを掲げているのが人間である以上、宗教というものは腐ってゆく。

「唯一神よ、人間どもは腐っております……」

城壁から空を見上げ、メイフェムは祈りを呟いた。

「貴方様はきつと、人間どもがどれほど汚れ腐っても、お許しになるでしょう。が、私は許せません……貴方の最も忠実なる下僕ケリス・ウェブナーの死を穢した者どもを」

悲鳴が聞こえた。若い娘の、悲鳴である。

天空を見つめていた瞳を、メイフェムは地上に向けた。

城内の一角で、騒動が起こっている。

「いやっ、離してお願い、きゃあああああ！ 戻りたくない、もどりたくないよおおおッ！」

「つとと、そういうワケにゃいかねえのよお嬢ちゃん。かわいいそうになあ」

「おめえらを1人でも逃がしたら俺らの責任になっちゃうっての。ほれ、暴れるんじゃねえよ」

城兵たちが3人がかりで、女の子1人を取り押さえている。

十代後半の、そこそこは美しい少女。ボロ布よりはましといった程度の、粗末な服を着せられている。

その服を兵士3人が無理矢理、脱がせにかかっている。

「おおい、けっこうイイ身体してんぜえこの嬢ちゃん」

「もったいねえよなあ、この可愛い顔もオッパイも太股も、あーんなバケモノになっちゃうんだからよお」

「そっその前に、俺らでいただいまおうぜええ」

地下牢に捕われている領民たちの中から、逃げ出して来た娘であろう。

それが今、城兵に捕まり、獣欲の餌食となりつつある。

「やっ！ やめて、やめてッやめてーっ！ 助けて誰か、だれかあああっ！」

悲鳴が、甲高く哀れっぽく響き渡る。

メイフェムは1つ溜め息をついてから、城壁の石の欄干に立ち、ゆらりと身を躍らせた。

そして軽く法衣の裾を押さえながら、城兵たちの近くに着地する。ほとんど裸に剥かれた少女を3人がかりで押し倒す、その動作の途中で、兵士たちはギョッと固まった。

「め、メイフェム殿……あついや、これはその」

「にっ逃げた奴にや、お仕置きしなきゃでしょうがああ」

「わかるっしょ？ この嬢ちゃんもどうせバケモノになっちまうんだからさあ、人間としての最後の思い出ってやつをよオ」

少女を解放しようともせずニタニタと、卑屈な、それでいて凶々しい、劣情丸出しの笑顔を浮かべる城兵3人。

メイフェムも、とりあえずは笑って見せた。

「ふ……こんな、こんな輩を守るためにケリスは……ふっ、ふふ、うっふふふふ」

もはや、笑うしかなかった。笑いと共に、身体が勝手に動いていた。

法衣の裾があられもなく跳ね上がって開き、美しく引き締まった右脚が荒れ狂うように躍動して、兵士たちをめった打ちにする。

3つの醜い笑顔にグシャぐしゃグシャッ！ と足跡が刻印された。その足跡から、眼球が脳漿もろとも飛び出して噴き上がり、折れた歯やちぎれた舌がこぼれ落ちる。

城兵3名が、顔面の潰れた屍と化し、少女の周囲でドシャドシャッと倒れた。

もともとボロ布に近かった服をズタズタに破かれ、ほとんど裸同然となった少女が、3つの死体に囲まれ、座り込んだまま怯えている。

人間の頭蓋骨3つを粉碎したばかりの右足を、着地させずユラユラと舞わせたまま、メイフェムは少女に微笑みかけた。

「地下牢では大勢の人たちが苦しんでいると言うのに……あなた、1人で逃げて来たのね？」

「……あ……あ……あ……」

応えられぬほど怯えきっている少女に向かって、メイフェムは右足を振り下ろした。

男ならば心動かされるであろう、可愛らしく怯えた表情に、ぐしや……つとメイフェムの右踵がめり込んだ。

そこそこ美しかった娘が、兵士たちと大して変わらぬ惨さの死体となったまま、裸で座り込んでいる。

この少女のような、いわゆる無辜の民という人々が、追い詰められると平気で他人を裏切り保身を図る。自分たちは弱いから仕方がない、という理由でだ。

19年前も、そうだった。

赤き竜と戦うダルーハ一行を、村人総出で歓待する。ふりをして毒を盛る。

ダルーハたちをかくまう、ふりをして、その居場所を赤き竜配下の魔物たちに密告する。

そんな事が続いたある日、ダルーハは言った。俺はもう我慢がならん、と。

弱者という輩は、己が弱者であるという理由だけで、何をしても許されると思っている。実際許されてしまうのだとしても、俺は許さん。見ていろ、俺は赤き竜を倒してこの国を支配する。そして全ての弱者を大いに虐げてやる。弱い者いじめを、してやるぞ。

ダルーハはそう語り、そして実行した。

レフィーネ王女と結ばれて20年近く骨抜きとなっていた男が、妻の死と共に、かつての凶猛さを取り戻し、弱者への復讐を見事やってのけたのだ。

「貴方は凄いわ、ダルーハ……」

尊敬の念を禁じ得ぬまま、メイフェムは呟いた。

有言実行。あのダルーハ・ケスナーという男の、数少ない人間的美点の1つである。

ブーン……と、重い羽音が聞こえて来た。

巨大な虫が、上空から近付いて来ている。いや、虫ではなかった。着地か墜落か判然としない形で、巨体が1つ。メイフェムの近くにドシャア……ッと降下して石畳に這いつくばる。

ローブも仮面も、そして人間の姿をも脱ぎ捨てた、ゴルジ・バルカウスだった。

カブトムシのような外骨格は全体がひび割れ、所々が剥離して、赤黒い体液が滴っている。

「戻ったぞメイフェム殿……見ての通り、いささか不覚をとった」「貴方が、その姿で？　あの魔法の鎧を相手に？」

この形態のゴルジに、ここまでの負傷をさせるなど、メイフェムとしてそう簡単な事ではないのだが。

あの魔法の鎧の力によるもの、であるならば、装着者が変わったのか。あるいはゴルジが、よほど手を抜いて戦ったのか。

「まったく、残骸兵士の10や20では準備不足であった。ゾルカ・ジェンキムの作品を相手に……よもや2対1の戦いを強いられようとはな」

「2対1……魔法の鎧が、もう1つ？」

言ってからメイフェムは、内心で否定した。1つではなからう。

魔法の鎧が、あと2つか3つは用意されているかも知れない。

ゾルカならば、そのくらいの手は打ってあって当然だ。

「あの男が本気で、私たちの妨害を始めたのだとしたら」

言いつつメイフェムは、軽く片手をかざし、念じた。

淡い光が、ゴルジの巨体を包み込んだ。

「……冗談ではなく、ゼノス王子の力が必要になるかも知れないわね」

「ヴァステリアで面白い事が起こっている、と声をかけてはおいだ。

気が向いたら、来てくれるそうだ」

光の中、ゴルジの全身で亀裂が、拭い取ったかの如く消えてゆく。甲殻の剥離した部分で肉が盛り上がり、表面が固まって、新たな甲殻と化す。

無傷の状態に戻った己の全身を、ゴルジは満足げに見回した。

「世話になってしまふな、メイフェム殿には」

「貴方には、借りがあるから……」

人間ではないものの力と、その副作用たる若返り。

それだけでメイフェムは、このゴルジ・バルカウスという男の正体や真の目的といったものへの興味を一切失った。

こうして自分の役に立ってくれる。それ以外の事など、一切がどうでも良かった。

「……それにしても、不思議なものよ」

頭蓋骨のような顔で、ゴルジは笑ったようだ。

「メイフェム殿に、まだこのような癒しの力があるとは……人間をやめて魔道を歩む貴女に、唯一神の力が使えるとは」

光を爛々と燃やす眼窩が、顔の潰れた少女の屍に向けられる。

「どれほど人の道を踏み外そうと、信仰心さえ本物ならば、唯一神はいくらでも力を貸して下さるという事か……まさにメイフェム殿はアゼル派の鑑よ。今時のローエン派の者どもと違って世俗の権威など求めず、純粋なる信仰心を抱きながら殺戮を行う。まったく頼もしい限り」

「純粋な信仰心……ね。どうかしら」

メイフェムは天空を見つめ、心の内で語りかけた。

（唯一神よ、下僕メイフェム・グリムは確かに貴方様を信仰し、敬い奉ってございます。その一方……深く深く、お恨み申し上げてもおります）

天を見つめる瞳が、暗く燃え上がってゆく。

（何故なら唯一神よ、貴方は私に……ケリスを、返して下さらないから……）

大切な事は、ただ1つ。

戦災を被った人々が、救われる事。それだけである。

実際それが出来ているのだから、何の問題もない。クラブ・ルマン大司教のやり方は、何も間違っていないのだ。

エミリイ・レアは、そう思った。思い定めた、つもりである。

いくら思い定め、自分に言い聞かせても、しかし結局あの大司教のやり方を受け入れる事は出来なかった。

だから今こうしてサン・ローデル地方にいる。

ゼピト村。エミリイはここで生まれ、12歳になるまでを過ごした。

12歳の時に、両親が病で死んだ。

家は貧しく、教会の墓地に埋葬してやる事も出来なかった。サン・ローデル地方の唯一神教会は、ディラム派らしくと言うべきか、貧乏人の弔いなどしてはくれなかったのである。

両親の亡骸を前にエミリイが途方に暮れていた時、とある旅人の一団が、ゼピト村に立ち寄った。

細々と布教の旅を続ける、ローエン派の僧侶たちだった。

彼らは事情を聞くと、何を要求する事もなく、唯一神教式の葬儀と埋葬を執り行ってくれた。

それをきっかけにエミリイはローエン派に入信し、その一団に同行して3年間、旅を続けた。

3年目にダルーハ・ケスナーの叛乱が起こり、王国北部の各地方が戦火に焼かれた。

大勢の人が殺され、生き残った人々も、戦災の跡地で苦しい生活を強いられる事となった。

苦しむ人々を救うべく、ローエン派の信徒たちは志を1つにして王国北部へと集い、食べ物や水を振る舞い、町や村の再建に尽力した。

無論ローエン派の財力で、そんな事が出来るわけではない。

金を出してくれた者たちがいる。

それがどういう者たちであるのかは、しかし深く追及するべきではない。

金の出所がどうあれ、その金で実際に救われている人々がいるのだから、それだけで良しとするべきなのだ。人を救う事を、本当に第一に考えるのならば。

「……わかつては、いるのよね」

呟きながらエミリイは、村はずれの小さな森の中を、とぼとぼと歩いていた。

ゼピト村を出てから3年、15歳である。

少しは背も伸びて、身体つきもふっくらと娘らしくなった。唯一神教の法衣が、少しは似合うようになったのだろうか。

「いやはや……大変な時に帰って来たものだ」

いくらか太り気味の初老の男性が、エミリイと並んで歩きながら言う。

ゼピトの村長である。両親が亡くなった時も、エミリイにいろいろと良くしてくれた。

「ともあれ、無事で何よりだった。ダルーハ軍に出くわさずには済んだようだな？」

「逃げ回っていましたから」

エミリイは苦笑した。

いくら平和主義を唱えたところで、ダルーハ・ケスナーを相手に何か出来るわけもなかった。

ローエン派が大きな顔を始めたのは、ダルーハの死後である。ヴァスケリアの敵国から金を受け取り、その金を使って派手に施しを行い、救世主のような顔をする。

それに耐えられなくなってエミリイは、北の戦災地を去り、こうしてサン・ローデル地方へと帰って来てしまった。

逃げて来た、と言ってもいいだろう。



が、人々のために使う金は充分にある。その金で人を集めるから、労働力も足りている。

エミリイ1人の力など、あってもなくても違いはない。だから帰って来た。3年ぶりの里帰りである。

真っ先にエミリイを出迎えてくれた村長が今、何やら気になる事を言った。

「あの……大変な時、ってどういう事ですか？」

「……おかしい、とは思わなかったか」

村長が声を潜め、立ち止まった。

森の中の、少し開けた場所である。

小さな墓石が2つ並び、夕刻の木漏れ日を浴びていた。

3年前にローエン派の旅の僧侶たちが作ってくれた、両親の墓。

あの僧侶たちは北の戦災地で、クラバー大司教の派閥に取り込まれたり、逆に遠ざけられたりで、いつの間にかエミリイの周囲からいなくなってしまうていた。

村長が、さらに言う。

「お前が帰って来たと言うのに、アサドもケイトも、ロックもカーシャも出迎えに出て来ない……おかしいとは思わなかったのか、エミリイ」

「……みんな、畑の仕事とかに出てるんじゃないんですか？」

そうではない事を、村長の表情が物語っていた。

「……皆、領主様のお城へ連れて行かれた。アサドもカーシャも、ケイトもロックも」

「連れて行かれた……って、何か悪い事でも？」

両親の墓前で帰郷の報告をするのも忘れ、エミリイは訊いていた。代わりのように村長が、2つの墓石の前で跪き、重々しく語る。

「ケイトは親父さんの病気が重くなってな。しばらく税を免除してやるから城へ来い、と言われて……他の皆も同じようなものだ。領主様の城で一体どういう扱いを受けているのか、それとなく伝わっては来るが」

「……どういう扱いを受けてるんですか、みんな」

エミリイの問いには答えず、村長は言った。

「とにかく、お前の両親に帰って来た挨拶をしろ。それが済んだら、すぐサン・ローデルを出て行った方がいい……今この地方では、人が狩られているのだよ」

「人が……狩られて……？」

この村長は何を言っているのだ、とエミリイは思った。冗談だとしたら、面白くなさ過ぎる。

ケイトもカーシャも今頃どこかに隠れていて、久しぶりに帰って来たエミリイを驚かそうとしているだけだ。そうに決まっている。

足音が複数、聞こえて来た。

両親の眠る、この静かな場所に、ずかずかと横柄に踏み入って来た者たちがいる。

鎗と鎧で武装した、5人の男。兵士である。うち1人は、いくらか身分が高そうだ。

「探したぞ村長。このような場所に、まさか隠れようとしたわけではあるまいな？」

「……何用ですか、マルズ隊長」

エミリイを庇うように立ちながら、村長が低い声を出す。

「言っておきますが、ゼピト村からはもう人は出せませんぞ。これまでに連れ去られた者たちが、1人でも帰って来ない限りは」

「連れ去られたなどと人聞きの悪い。皆、領主様のもとで元気に奉公しておるとも」

マルズ隊長と呼ばれた、身分の高そうな兵士が、高圧的に告げた。

「ついては、あと5、6人。若く壮健なる男女を奉公人として差し出せと、領主様のご命令だ。うち1人は、うむ、その娘で良からう」  
下っ端の兵士4人、のうち2人が、左右からエミリイを捕えた。

「ちよっと、何するんですか……」

「お城で働かせてやるつつつてんだよ。おおお、けっこうカワイイなあこの嬢ちゃん」

兵士たちが下品な笑みを浮かべながら、意味不明な事を言う。

「もったいねえよなあー。こんな可愛い嬢ちゃんも、あんななっちまうのかあー」

「ど、どういう事ですか……」

図々しく腕を掴んでくる男たちの力に、懸命に抗いながら、エミリーは叫ぶように訊いた。

「ケイトやロックは……ねえちょっと、アサドとカーシャは？　どこにいろの、どういう事になってるんですか！」

「来ればわかる……村長、こうして一応は話を通してやったのだ」マルズ隊長が言った。

「村人をもう4人ほど、こちらで選んで連れて行くぞ。文句はあるまい？」

「もはや1人も連れて行かせんと言っておる！」

エミリーを捕えている兵士たちに、村長が挑みかかった。そして殴り倒された。

「てめえのようなジジイやオヤジに用はねえよ。若い奴を連れて来いって言われてるんでなあ」

「へへ、若えオンナだけ連れてってよお、何人かは俺らでいただきますちまおうぜえ？」

「まっまず手始めに、この嬢ちゃんをよお……」

兵士が4人がかりでエミリーを捕え、ニタニタと獣のように笑う。  
(父さん……母さん……)

弱々しく抵抗しながらエミリーは、男たちの醜い笑顔で占められつつある視界に、小さな2つの墓石を必死にとどめた。

(何？　どういう事……？　何が起こってるのか、教えてよ母さん……助けてよ、父さん……)

「……すみません、道を教えていただきたいのですが……」

何者かが、控え目に声をかけてきた。

旅人、であろう。マントとフードで身を覆った人影が3つ、近くの木陰に立っている。

その3人のうち、声をかけてきた1人が、おずおずと進み出て来てさらに言った。

「この近くに、ゼピトという村が……」

「……何の御用ですか」

殴り倒されていた村長が、口元の血を拭いながら言う。

「御覧の通り今、我らの村は大いに難儀しております。旅の方々をおもてなし出来るような状況では」

「そろそろ日も暮れますし、一夜の宿をと思ったのですが……」

困ったように言いながら、その細身の旅人がフードを脱いだ。

エミリイは、思わず息を呑んだ。

（綺麗……！）

としか言いようのない美少年の容貌が、フードの下から現れたのだ。

その美しい少年が、兵士たちに、恐れげもなく声をかける。

「事情は知りませんが、貴方がたが何か乱暴な事をしているのはわかります……やめて下さい」

「んッッだこのガキはよおおおお！」

兵士の1人が少年を、いきなり槍で殴り倒した。微かな血飛沫が散った。

悲痛な呻き声を漏らしながら、地面に倒れ込んだ少年。その痛々しいほど細く頼りない身体に、2人の兵士がガスガスと蹴りを入れる。

「事情知らねえんなら出て来んじゃねえよクソが！ 正義の味方のつもりかあ？ おう！ おう！ おう！」

「ああー顔の綺麗な男ってのあム力つくなあ、掘っちまうかあ？ んん？」

聞くに堪えない罵声と共に、兵士2人分の蹴りと踏みつけが、容赦なく際限なく少年を襲う。

もう2人の兵士に左右から押さえられたまま、エミリイは叫んでいた。

「やめて！ やめて下さい！」

「……そうだな。そろそろやめておけ」

重みのある男性の声。

と同時に、エミリイの左右で兵士たちが倒れた。

何が起こったのか全くわからぬまま、エミリイはとりあえず解放された。倒れた兵士2人は、微動だにしない。

「何だ、一撃で気を失うとは」

木陰にいた、もう2人の旅人。その片方が、いつの間にかエミリイの傍に立っていた。

偉丈夫である。

マントの下にあるのは、大柄で力強い、鍛えられた肉体。フードの下から現れたのは、頭髮・頬髭・顎髭がタテガミの形に繋がった、獅子の如く精悍な容貌。

その厳つい顔には傷跡が走っており、見るからに凶暴そうではある。だが、

「隊長は貴公か。部下の鍛え方が、まるでなっていないようだな」  
マルズ隊長に話しかける、その口調は穏やかで物腰も柔らかい。

「統制も取れていない。こんな兵隊では、いざ戦となれば略奪に走るばかりで戦おうとせん。使い物にならないという事だぞ」

「……何だ、貴様」

マルズが、獅子のようなその男に槍を突き付ける。

その槍が、掴まれた。

マルズの身体が、ぐらりと前方に傾く。獅子のような男に、掴み寄せられていた。

「うかつに槍を突き付けるのは、やめた方が良い。こうして掴まれ……捕獲される」

軍事教練か何かのような口ぶりと動作で、獅子に似た男が、マルズ隊長を捕まえて転がす。

転がされたマルズが、起き上がれずに倒れたまま、片腕を押さえて悲鳴を上げる。その腕が、おかしい方向にねじ曲がっていた。

骨が折れた、ようであるが、どのように折られたのか、エミリイには全く見えなかった。

「なっ……」

「何だ、てめえ……」

残る兵士2人が、少年を蹴り転がす動きを中断し、怯えたじろぐ。そこへ獅子のような男が歩み寄り、何かをした。何をしたのか、エミリイの動体視力では、やはり捉えられない。

とにかくその兵士2人が、悲鳴を上げた。1人は右腕を、1人は左腕を、だらりと変な感じにぶら下げている。折れた、ようである。「バウルフアー侯の軍勢は弱兵揃いと聞いてはいたが……これほどとはな」

獅子のような男が呆れつつ、小さな2つの墓石を見やった。そして言う。

「おい、やめておけシェファ。ここはどうやら、血で汚してはならん場所のようだ」

「血なんか出ません……灰になるだけです」

3人目の旅人が木陰で、そんな物騒なことを言っている。

エミリイと同じ年頃の、女の子だった。

先端に魔石が埋まった杖を、構えている。その魔石がぼんやりと、赤く発光している。

攻撃魔法兵士、のようである。

フードに囲まれた顔立ちは、可愛い。が、険しい。兵士らを睨む眼差しには、本物の殺意がある。

エミリイは、ぞっとした。この攻撃魔法兵士の少女は今、本気で、兵士たちを殺そうとしていた。

獅子のような男が苦笑し、なだめる。

「灰もやめておけ……なあ、貴様たち」

その苦笑が、倒れ泣き喚くマルズ隊長に向けられた。

「ここはどうやら誰かの墓前、戦場にしてはならぬ場所よ……お互い、ここまですておこうではないか」

「うつぐ……き、貴様あ……」

逃げるようにマルズは起き上がり、折れた腕を押さえて後退りをした。

「こっこのような、バウルフアー侯爵閣下の直属たる我らに！　このような無礼を」

「……腕ではなく首を折ってやる事も出来た。それは、わかるな？」獅子のような男が、牙を剥くように言う。

マルズ隊長が、それに腕の折れた兵士2人が、捨て台詞も吐かずに逃走して行く。

気を失った2人の兵士が、残された。

「置いて行かれても困るのだが……」

一言ぼやいてから、獅子に似た男は、暴行されていた少年に声をかけた。

「……いや、それにしても若君。殴られ蹴られるのが実にお上手になられましたな。受け身の取り方、急所の庇い方、申し分なしでございましたぞ」

「……ブレン兵長の拳に比べれば、ね」

大して痛みを感じている様子もなく、少年は起き上がった。

綺麗な顔が、それでも少し腫れ上がっている。微かな流血と痣で、痛々しく彩られた美貌。

エミリイの胸の奥で、心臓がトクン……ッと跳ねた。

（やだ……もっと綺麗……）

「墓前を騒がせてしまって、申し訳ない」

呆然としているエミリイに、少年が頭を下げる。

「このお墓……赤の他人である僕たちが祈りを捧げる事は、許されるだろうか？」

「あ……は、はいっ。父も母も、喜ぶと思いますっ」

両親の墓参を、エミリイはすっかり忘れていたのだった。

それを咎めるかのような視線を、エミリイは感じた。

シェファと呼ばれた攻撃魔法兵士の少女が、こちらをじっと睨ん

で  
いた。



## 第25話 残虐なる者たち

ゴロツキ同然の兵士たちによる暴行など、ブレン兵長のしごきに比べれば何という事もない。

それでも、口の中がいくらか切れて痛い事は痛い。

その痛みが、急速に薄らいでゆく。

リムレオンは、己の口の中を舐め回してみた。傷が、消え失せている。

「ごめんなさい、こんな事しか出来なくて……」

片手をかざしていたエミリイ・レアが、申し訳なさそうに言う。

唯一神教の僧侶たちの中でも、特に修行を積んだ者だけが持つ事の出来る、癒しの力。

以前メイフェム・グリムが、魔獣人間に対し使っていた。

あれよりは劣るものの、このエミリイというローエン派の少女にも、唯一神の力を癒しという形で発現させる能力がある。

「こんな事だなんて……ありがとう、助かったよ」

リムレオンが微笑みかけると、エミリイも控え目に微笑み、俯いた。顔が微かに赤い。体調でも悪いのだろうか。

「ヴァレリア様の御息、であらせられますか」

ゼピトの村長が言った。

村はずれの、小さな森の一角である。ここで今、ちよつとした荒事があった。

村長も殴られ、流血していた。リムレオン共々、エミリイの治療を受けたところである。

「母を、ご存じのですか？」

サン・ローデル地方の領民であれば、領主バウルファー・ゲドン侯爵の妹が、メルクト地方のエルベツト家に嫁いだという事くらいは当然知っているだろう。

この村長から見ればリムレオン・エルベツトは、自分たちの仕え

る領主の甥という事になる。

「ヴァレリア様は、我ら下々の者とも親しく接して下さる御方でした。心優しく、そして英明な姫君であられました。あの方がおられた頃はバウルフアー侯爵閣下も、このような無法はなさらなかったもの……」

そこまで言って、村長は口をつぐんだ。

バウルフアー侯が領民に対し、どのような無法を働いているのかは、まあ詳しく聞くまでもない。

伯父バウルフアーとは、リムレオンは幼い頃に2度3度、会った事がある程度だ。挨拶的な会話くらいは、交わしたような気がする。その時は、特に良い印象も悪い印象も、伯父に対しては抱かなかった。

リムレオンは詳しく知らないが、その後、父カルゴと伯父バウルフアーとの関係は、険悪というほどではないにせよ、少なくとも親密にはならなかった。エルベツト家とゲドン家は疎遠となって交流も乏しくなり、リムレオンがサン・ローデルを訪れる事もなかった。それが今、こうしてサン・ローデル領内に侵入し、とりあえず身を潜める村を探している。

父カルゴ侯爵から、領主としての命令を受けたのである。

逆賊バウルフアー・ゲドンを討伐せよ、と。

「……ともあれヴァレリア様に、このような立派な御子息がおられた事は、嬉しい限りでございます」

「やめて下さい村長。見ての通り僕は、何も出来なかったんです」  
リムレオンに出来た事と言えば、兵士たちに殴り倒され、蹴り転がされた事くらいである。

リムレオンを、そして村長とエミリイを助けたのは、ブレン・バィアス兵長だ。シェファと共に、補佐として付いて来てくれたのである。

そのブレン兵長が、気絶していた兵士2人を叩き起こして訊問をしている。

「貴様たちは、御領主の命令で人狩りなどを行っているそうだな？」  
「よ、よそ者に話す事なんざあ何にもねえよ」

ぷい、と横を向いた兵士の頭を、ブレンは優しく撫でた。撫でるように兵士の頭をガッシと掴み、無理矢理に自分の方を向かせ、正面から見据える。

「そう言わずに話してくれんか。お前たちとて領主の命令だから逆らえず、嫌々ながら、こんな無法を働いているのだろう？ 俺たちは、それを止めてやりたいのだよ。だから教えて欲しい……狩り集めた領民を、どこに集めてどのように扱っている？」

「そつ外から来た奴が首突っ込んでんじゃねえよ！」

もう1人の兵士が、そう吐き捨てながら、ブレンに捕まっている仲間を見捨てて逃げようとする。

そして立ち止まった。立ちすくんでいた。

シェファが、ぼんやり赤く発光する魔石の杖を、その兵士に突き付けている。

「ブレン兵長……拷問なら、あたしがやります」

「間違えるなシェファ。俺が今やっているのは、拷問ではなく訊問だぞ」

「どうせ痛めつけて聞き出す事になるんでしょう？ あたしがやります……あたし、残虐ですから」

「残虐……」

エミリイの声が、微かに震えた。怯えているようだ。

「あのひと、同じような事を……」

「何か言った？」

シェファが、ちらりとエミリイの方を見る。眼差しが、いささか険しい。

エミリイが、さらに怯えた。

「いえ、何も……」

「ふうん……どうでもいいけど、何か言う時はハッキリ口に出してよね」

「お、おいシェファ。そんな言い方は」

言いかけたリムレオンを、同じような目で睨みながら、シェファは言う。

「悪いけどあたし、今すぐくピリピリしてるから。だってここ敵地みたいなもんでしょ？」

「……まあ、そうかな」

自分たちは、この地の領主と戦うために来たのだ。

「とにかく、こいつらから情報を引き出さなきゃいけません。ここ  
の領主様が、あとどれくらいのパケモノを飼ってるのか……」

「し、知らねえな。ななな何だよパケモノって」

兵士たちの顔色が、明らかに変わった。

ブレン兵長が、傷跡のある厳つい顔をニコニコとねじ曲げる。

「俺たちもな、拷問などやりたいわけではないんだ。正直に話してもらえると助かるんだがなあ……バウルファ―侯爵の配下には、あ  
と何匹の魔獣人間が」

精一杯にこやかな笑みを浮かべていたブレンの顔が突然、緊張し  
引き締まった。

「御無礼を！」

叫びながらブレンがいきなり、リムレオンを、シェファを、村長  
とエミリイを、まとめて突き飛ばした。

何者かの襲撃が来たのだろう、と思いつながらリムレオンは、息苦  
しさと柔らかさを同時に感じた。信じられないほど柔らかく心地良  
い圧力が、顔を包み込んでいる。

エミリイの胸だった。

まるで押し倒すように、重なり合って倒れ込んでいた。

「こ、ごめん！ 大丈夫？」

「はい……」

慌ててリムレオンは起き上がり、エミリイも上体を起こした。可  
愛い顔を赤らめ、俯いている。

その胸の膨らみは、唯一神教の法衣の上からでは目立たない。が、

リムレオンの顔面に残る柔らかな感触は、その見た目以上に圧倒的なものである。

いわゆる着痩せする女の子なのだろう、とリムレオンが思った瞬間。思いきり、耳を引っ張られた。

「隅に置けないわねえ、リム様も」

近くで同じように起き上がったシェファが、にこにこ笑いながら、リムレオンの片耳をつまんで引っ張っている。

「初対面の女の子を、いきなり押し倒しちゃったりして……可愛い顔してケダモノなんだから、もうっ」

「いっ痛い、痛いよシェファ、僕は別に痛たたたた」

「や、やめて下さい……」

エミリイが、怯えながら控え目に、シェファをなだめようとしている。

そんな3人を庇う形にブレン兵長は立ち、マントの下から戦斧を取り出して構えている。

彼に突き飛ばしてもらえなかった2人の兵士が、のけぞり痙攣し、硬直していた。固まった全身の所々に、小さな白いものが幾本も、短剣のように突き刺さっている。

白い、羽だった。

何本もの羽に全身を穿たれた2人の兵士が、のけぞったままビキビキッ……と硬直の度合いを強めてゆく。

似たようなものを、リムレオンは見た事があった。

ブレンとその配下の兵士たちが、魔獣人間バジリハウンドの眼光を浴びて石像と化した、あの光景。

それと同じ現象が起こっている。

苦しげにのけぞり、苦痛と恐怖で顔面を歪め引きつらせたまま、2人の兵士は石化していた。

何者の仕業であるのかは、すぐにわかった。

睨み据えるブレン兵長の視線の先に、それは立っている。

白い、大男だった。

ふさふさと真っ白な羽毛。その所々から、岩のような筋肉が、盛り上がり突き出ている。

「あんた……人間のくせに強そうだな」

ブレンに話しかけるその口は、上下の顎の結合部まで裂けており、肉食しか出来そうにない牙を大量に生やしている。

両眼をギラギラと輝かせた、怪物そのものの顔面は、しかし辛うじて人間の面影を残してもいた。

頭髪はなく、その代わりのように大型の鶏冠が立っている。

羽毛と鶏冠を備えた、人ならざる大男が、ブレンと睨み合いつつ流暢な人語を発し続ける。

「けどまあ俺と白兵戦やろうなんて考えない方がいい。見ての通り、こいつは」

語りながら彼は左手で、脇腹の辺りから一掴み、白い羽を引き抜いた。石像と化した兵士2名の全身に突き刺さっているものと同じである。

「触れたものの全てを石に変える、コカトリスの羽毛よ……俺は魔獣人間オーガートリス。余計な事しゃべりそうな奴らを始末しに出て来ただけで今あんた方とやり合おうって気はないんだ」

求められてもいない自己紹介をしながら魔獣人間が、右手に持ったものをジャラツと鳴らす。

束ねられた鎖、である。

棘状の突起を何本も生やした、巨大な鋼鉄の球体を、彼は右肩に担いでいた。鎖で振り回す、大型の鉄球。

得物を持った魔獣人間というものを、リムレオンは初めて見た。

「やり合う気はない、ね……魔獣人間って、殺る気満々な奴ばっかりだと思ってたけど」

シェファが、敵意丸出しな声を発した。

「あんたのお仲間が何匹もねえ、勝手にメルクトに入り込んで、やりたい放題やってくれてるわけよ。おかげでリム様が……こんな、やんなくてもいい戦いをやる羽目に」

まずい、とりムレオンが思った時には遅かった。自分たちの正体と目的を、バウルファ―侯爵配下の魔獣人間に知られてしまった。

「メルクトだと？ まさか、あんた方がゴルジ殿の言っていた」

「魔獣人間は1匹も生かしておかない……！ 武装っ、転身！」

マントを脱ぎ捨てながらシェファが荒々しく、右の細腕を振るった。

繊細な中指に巻き付いた竜の指輪がキラキラと青い光をこぼす。

鱗粉を思わせるその輝きが、シェファの全身を包み込む。

魔石の杖を携えた細身の女騎士が、そこに出現していた。全身の所々に魔石が埋まった、たおやかな甲冑姿。

「なるほど。そいつがゴルジ殿の言っていた……魔法の鎧、というやつか」

興味深げな声を出す魔獣人間オーガートリスに、魔石の杖が向けられる。その魔石が、燃え上がるように急速に、赤い輝きを強めてゆく。集束しつつある魔力の輝き。それが迸り出るよりも早く、魔獣人間の巨体が動いた。

「ここでぶっ放すのは、やめてもらおうか……！」

ジャラツと鎖が鳴り、ブウンツと空気が裂け、グシャアッ！ と衝撃が起こる。

「う……………ッ」

微かな悲鳴と共に、シェファの身体が宙を舞った。

流星の如く飛んだ鉄球の、直撃。

吹っ飛んだ少女の細身が、大木に激突し、ずり落ち、動かなくなる。

魔法の鎧には、凹みの1つもない。が、中にある少女の身体はどうなのか。

「シェファ……！」

リムレオンが呼びかけても、シェファは返事をしてくれない。動きもしない。

石像と化していた兵士2人が、同じく鉄球の直撃を受けて粉々に

砕け散った。

が、リムレオンにとっては、どうでも良かった。

シェファが動かない。それ以外の事は一切、どうでも良かった。

「武装転身……………っ！」

片膝をつき、右拳で地面を殴る。

中指にはめられた竜の指輪から、光の紋様が広がり、リムレオンの全身を下方から激しく照らす。

少年の細身を包むその白色の輝きが、魔法の鎧に変わった。

騎士の姿となったリムレオンが、駆け出し、踏み込むと同時に魔法の剣を抜き放つ。そして叫ぶ。

「う……………あああああああああああッッ！」

殺意が絶叫となって、喉の奥から、身体の奥から、迸っていた。殺す。それだけが、リムレオンの心に満ちた。

シェファに鉄球など喰らわせた怪物を、魔法の剣で叩き斬る。斬り刻む。

それ以外の何もかもが、リムレオンの心の中から消え失せた。

魔獣人間オーガートリスが、己の眼前で鎖を引き伸ばす。そこへリムレオンの斬撃が激突する。

殺意を宿した魔法の剣が、鎖に弾き返されて跳ね上がる。

構え直そうとしたリムレオンの胴体に、オーガートリスの左足がズドッ！と叩き込まれた。魔法の鎧がなかったら、臓物を叩き潰されていたであろう蹴り。

鎧は相変わらず無傷だが、中のリムレオンは、面頬の内側で血を吐いていた。

「う……………ぐウ……………ッ」

懸命に血反吐を呑み込みながらリムレオンは、自分の身体が地面に激突したのに気付いた。

蹴り飛ばされていた。鎖鉄球を叩き込むのにちょうど良い距離が開いてしまっている。

リムレオンは慌てて立ち上がり、魔獣人間の次なる攻撃に備えた。



鉄球が、どの角度から飛んで来るのか。かわすしかないのか、かいくぐって反撃する事は可能か……

だが、鉄球の一撃は来なかった。

鎖を握る右手ではなく、オーガートリスは左手を動かしていた。投擲の動き。凶悪なほど力強い左手が、いくつもの白く小さなものを投げつけたのだ。

直後、リムレオンの身体は動かなくなった。

全身に、白い短剣のようなものが突き刺さっている。

羽だった。魔法の鎧の各関節の隙間に挟まって、まるで突き刺さっているかのようなのだ。

「くっ……?」

リムレオンの肉体には、何の異変も起こっていない。

が、魔法の鎧はビキビキ……と石になりかかっていた。元々の白色と、黒っぽい石の色がせめぎ合って、リムレオンの全身は今、灰色を帯びている。

「なるほど……中身はともかく、その魔法の鎧は大したもんだ。俺の石化能力を、その程度で止めちゃうとは」

感心しつつも魔獣人間が、ジャラ……ッと鎖を持ち上げる。

巨大な鉄球が、オーガートリスの頭上でブウンッと回転した。

「もったいない気もするが、叩き潰しといった方が良さそうだ……」

その回転が、止まった。鉄球が、オーガートリスの足元にドスンと落下する。

エミリイが、リムレオンの眼前に立って、魔獣人間と対峙していた。

「やめて……やめて下さい……」

「駄目だ……ッ!」

吐血の味が残る口で、リムレオンは呻いた。

オーガートリスも、呻いていた。

「エミリイ……なのか?」

「え……?」

細い両腕を広げてリムレオンを庇いながらエミリイが、いくらか間拔けな声を出す。魔獣人間に知り合いなどいない、といった様子だ。

構わず、オーガートリスが呟く。

「エミリイ……そうか、帰って来ていたのか」

「……アサド……だな？」

名を呼んだのは、村長である。

「何だ、その姿は……領主様のお城で、お前は一体……何を、されていた？」

「見ての通りだよ村長。ゴルジ殿いわく、俺はそこそこの成功作品らしい」

アサド、という人間名を持つらしい魔獣人間が、若干は人の原形を残した顔で苦笑した。

「久しぶりだが、つめる話をしようって気はない……当初の予定通り、このまま退散させてもらうぜ」

「アサド……？」

エミリイが、呆然と呟いた。

「……なの……？」

「……悪かったなエミリイ。ここで荒っぽい事をやらかすつもりは、なかったんだ」

エミリイの両親の墓を一瞥しつつ、オーガートリスは背を向けた。動けぬまま、リムレオンは叫ぼうとした。

「待て……！」

「安心しなよ、メルクトの若君。俺がぶちのめした女の子は、そんな大した怪我はしてないと思う。ぶっ殺した手応えじゃなかったかな……ほんと大したもんだよ、その魔法の鎧は。中身はともかく、な」

「……我々を見逃して立ち去るのか、貴様」

歩み去ろうとする魔獣人間の背中に、ブレン兵長が声を投げる。

「こちらの若君や魔法の鎧の事を、聞いているのなら……我々の目

的も、わかるのではないのか？ 放っておくのか」

「うちの領主様を殺しに来たんだろう？ そんなもの勝手にやればいいさ……ただな」

オーガートリスは立ち止まり、顔だけで振り向いた。

「……ゴルジ・バルカウスとメイフェム・グリム。この2人にだけは、手を出さない方がいい。余計なお世話だろうが言っておく」

「……もう遅い」

リムレオンは呻いた。ゴルジともメイフェムとも、すでに戦い始めてしまっている。

動かなかったシェファが、ブレン兵長に抱き起こされ、微かに身じろぎをした。

悪くとも、死んではいない。

殺意に満ちていたリムレオンの心に、いくらかは会話をする余裕が生まれた。

「……あの2人の目的は、一体何なんだ。伯父上を利用して、何をしようとしている？」

「知らんよ、そんな事は。俺にわかる事は、ただ1つ……奴らは頭がおかしい。それだけだ。頭がおかしい連中の目的なんて、わかるわけがない」

吐き捨てるように、オーガートリスが答える。

エミリイがリムレオンの方を向き、片手をかざした。

先程、傷を癒してもらった時と同じく、淡い光がリムレオンの全身を包み込む。

魔法の鎧から、拭い落としたかのように灰色が消え失せた。各関節に挟まっていた白い羽が、抜け落ちてゆく。

半ば石像になりかけていた魔法の鎧が、元に戻っていた。

「あ……りがとう」

「あの、リムレオン様……魔獣人間って、何なんですか……？」  
エミリイが訊いてきた。絶叫になる寸前の、震える呻き声だ。

「アサドが……あたしの知り合いが、魔獣人間とかいう怪物で……」

メルクトの若様が、こんな鎧を着て戦って……わけ、わかんないです……」

「見ての通りだよエミリイ。俺は、人間じゃなくなった……それだけの事だ」

オーガートリスが言った。

「人間をやめるしかなかったんだ。この村を守るためには……力が、必要だからな」

「何言ってるの、アサド……」

「わからなくていいよエミリイ、それに村長。これから先、何が起こっても見て見ぬふりしていてくれ。メルクトの若君、あんた方も余計な事はするな」

鉄球を担いだ魔獣人間の後ろ姿が、言葉と共にのしのしと遠ざかって行く。

「俺はこの力で、とにかくゴルジとメイフェムに気に入られなきゃならん。俺が奴らのお気に入りになれば……少なくとも、この村だけは守れる」

「ケイトはどうした……」

村長が呻き、怒鳴った。

「ロックとカーシャはどうなったのだ、おい！」

「そいつは聞かない方がいい……」

その返答を最後に、魔獣人間オーガートリスは、木立の向こうへと姿を消した。

「アサド……」

もはや届かぬ言葉を、エミリイが呟いている。リムレオンは、声をかける事が出来なかった。

視界の隅で、青い光が生じた。

ブレン兵長の腕の中でシェファが、武装を解いていた。青い光に戻った魔法の鎧が、少女の中指、竜の指輪へと吸収される。

生身に戻ったシェファが、ブレンに支えられたまま、弱々しい声を出す。

「リム様……」

「シェファ、大丈夫……なのか？」

リムレオンの身体の周りでも、魔法の鎧が光に戻っていた。指輪に吸い込まれゆく白い光をキラキラと引きずりながら、リムレオンが駆け寄って行くと、シェファは顔を逸らせた。目を合わせられない、といった様子だ。

「ごめんなさい……あたし、バカやって……あたしらの目的、リム様の目的、バケモノどもに知られちゃいましたね……ほんと、何やってんだろ。あたし……」

嗚咽に近い声を漏らすシェファの唇が、ゴホッ！ と吐血で汚れた。

「肋を3、4本ばかり、やられたようだな」  
ブレンが言った。

「エミリイ殿、すまんが治してやれんかな」

「あ……は、はい」

知り合いが魔獣人間となってしまうた。その衝撃からひとまず逃れるように、エミリイが治療に取りかかってくれた。愛らしい片手を、そっとシェファに近付ける。

その可憐な五指と掌が、ぼお……と光を発し、ブレンの腕の中で死にかけている少女を優しく照らす。

「痛……っ」

シェファが悲鳴を漏らした。

「痛い、いたい痛あい……ッッ！ 肋骨がゴリゴリ動いてる……っ」

「まあ、無茶をやらかした罰だと思え」

容赦ない事を言うブレン兵長に引きずり立たされるような格好のまま、シェファは泣きそうな顔で微笑んだ。エミリイに向かってだ。

「……ありがとう」

弱々しかった声に、少しずつだが生気が戻りつつある。

「何か、めっちゃくちゃ痛いけど……ほんと、助かった」

「ご、ごめんなさい……あたしの力じゃ、ちょっとずつしか治せなくて……」

申し訳なさそうにしているエミリイと、微笑むシェファ。

この2人は仲良くなれそうだ、とリムレオンは思った。

最初はシェファが何故かエミリイを敵視していたようにも見えたので、少し心配していたのだが。

斥候を何人放っても、同じ報告しか返って来なかった。

戦場に到着し、己の目で見渡しながらティアンナは、自分が斥候でも同じ報告をせざるを得ない、と実感した。

バルムガルド軍壊滅、と。

「これは……一体……」

そんな声しか、出て来ない。

ガロググ城塞の周囲は、まさに死屍累々とししか表現し得ぬ有り様だった。

人間の原形をとどめている屍は、1つもない。

死体というよりは、人体の残骸である。こびりついている鎧の破片から、バルムガルド軍兵士であった事が辛うじてわかる。

肉も臓物も脳髓も一緒に潰れてぶちまけられ、今は黒ずんで腐敗臭を発している。

剣、槍、戦斧、弓矢、戦鎚……といった武器では、ここまでの人体破壊は出来ないだろう。

人間の武器では、あるいは人間の力では不可能な殺し方をされたバルムガルド兵たちが、見渡す限り、戦場全域にぶちまけられているのだ。

「残念ながら、と申し上げるべきでしょうか……我が軍の力によるもの、ではございません」

ティアンナと馬を並べる壮年の騎士が、重々しい口調で言った。  
レネリア地方領主、ラウデン・ゼビル侯爵。

兵2000という小勢でガロググ城塞に籠り、バルムガルドの大軍を止めてくれていた指揮官である。

過酷な籠城戦で頬はこけ、両眼は獣の如く炯々と輝いている。

その猛々しい眼光が、しかし怯えに近いものを孕んでもいる。

ラウデン侯に付き従っている兵士たちも、同じような顔をしていた。ギラギラと獣じみた、しかし何かに怯えてもいる表情。

間違いない、とティアンナは思った。ガロググで籠城戦を行っていたヴァスケリア兵たちは、何かとてつもなく恐ろしいものを見たのだ。

その恐ろしい何者かが、ガロググ城塞の周囲に広がる、この大虐殺の光景を作り出したに違いない。

戦場だが、これはもはや戦とは言えない。一方的な虐殺だ。

「我が軍は助かったのです。それは、紛れもなき事実……」

ラウデン侯の言う通り、ガロググ城外一面にぶちまけられているのはバルムガルド兵ばかりで、ヴァスケリア軍兵士の屍は見当たらない。籠城戦で1人の戦死者も出ていないという事はないだろうが、少なくともこの大虐殺は、バルムガルド軍のみに対して行われたようだ。

行ったのは、何者なのか。

ティアンナには心当たりが全くない、わけでもなかった。

「その意図があったのかどうか……ともかく、あれは結果的に我々を助けてくれました」

「あれ、とは……」

ティアンナは問いかけたが、答えを聞くのが恐ろしくもあった。

「……貴方がたが見たものを、私に聞かせて下さい」

「女王陛下、我々にもわからないのです。あれが一体、何者であるのか」

剛将として名高いラウデン侯爵の口調が、助けを求めているかのようにもあった。

「あのような……怪物が、この世に存在するなど……」

「怪物……ですか」

半ば無理矢理、ティアナは微笑んで見せた。

「怪物ならば、先の戦で嫌になるほど見てきました。だから、どのような話でも信じられます……ありのまま、見たままの事を、どうか話して下さい」

「ゼッド……」

ラウデンが呼ぶと、1人の若い歩兵が進み出て来て拝跪した。

「城壁の上で戦っていた兵士の1人です。陛下、どうかこの者に直答をお許し下さいますよう……」

「ゼッド殿、とおっしゃられますか。まずは、お顔を上げて下さい」  
ティアナは声をかけた。

「そして、私にお聞かせ下さい。貴方が前線で目の当たりになさったものを、ありのままに」

「お……お許しを得て申し上げます」

ゼッドという名前らしい若い歩兵が、跪いたまま顔を上げた。

「あれは突然、空から舞い降りて来たのです。城壁に群がるバルムガルドの大軍、そのまったただ中に……赤い、悪魔……とても申せましようか」

「……赤かった、のですね」

ティアナは呟いた。

赤色の、若き魔人。人間を、それに魔獣人間を、掃除でもするか如く殺戮してゆく、猛々しく禍々しい姿。

それがティアナの脳裏に甦る。忘れられる、わけがない。

「たった1人、いや1匹の、赤い怪物に……バルムガルドの軍勢は、削り取られていきました。削っている、としか言いようがないのです。奴が、腕や尻尾を1振りする度に、バルムガルド軍が少なくとも2人か3人、砕け散って赤い削りカスの如く」

「……わかります、手に取るように」

ティアナは、片手で頭を押さえた。この場で行われた大殺戮の光景が、見たわけでもないのに脳裏に浮かび上がって消えてくれない



い。

「バルムガルド軍の反撃は……剣も、槍も、攻撃魔法兵団の炎や稲妻さえも、奴に傷を負わせる事はありませんでした」

恐怖か、興奮か、ゼツドの口調が熱っぽい震えを帯びる。

「そして奴は、口から炎を吐きました。まるで竜のように……その炎で、バルムガルド軍の数個部隊が一瞬にして消え失せました。あれが我が軍に向かって吐かれたものであったら、ガロググ城塞など今頃、跡形も残ってはいないでしょう」

「女王陛下がお生まれになる前に、私は同じようなものを見た事がございます」

ラウデンが言った。彼が何を見たのか、ティアンナにはすぐにわかった。

「赤き竜、ですか……」

「はい。王国正規軍の精鋭部隊を、一瞬で焼き払い消滅させた、赤き竜の炎……あの頃からこのヴァスケリアという国は、何やら人間ではない者どもに魅入られている。そんな気がして、なりません」

「そう……なのかも、知れませんか」

ティアンナは空を睨んだ。

虐殺を行った後、何も言わずにこの場を立ち去ったのであろう若者に、心の中で語りかけた。

（私を……助けてくれた、おつもりですか……！）

実際、助かった。それは、紛れもない事実なのである。

## 第26話 魔將軍の胎動

4万の軍勢が、全滅したわけではない。実際に殺された兵は、2000か3000といったところだ。

それだけ殺されれば充分だった。

たった1人の敵に……と言うより、たった1匹の怪物に、3000人近くが虐殺されたのである。

総司令官であるレボルト・ハイマン將軍が退却命令を下す前に、バルムガルド軍は総崩れとなった。

あの時、ヴァスケリア軍がガログ城塞から打って出て、追撃を仕掛けて来ていたら、犠牲は3000では済まなかっただろう。

敵将ラウデン・ゼビル侯爵がその命令を下さなかったのは、ヴァスケリア軍にとっても想定外の事態であつたからに違いない。それがバルムガルド軍にとって、不幸中の幸いと言えない事もなかった。とにかく、逃げた。

退却などという格好の良いものではない。逃走、あるいは敗走だ。敗走し、辛うじて生き残った兵士たちは、死人のように青ざめ、あるいは起きながら悪夢を見ているかの如く視線を宙にさまよわせ、弱々しく隊伍を組んでよろめき歩いている。バルムガルド王都ラナンディアへと向かつてだ。

まるで亡者の行進だ、とレボルト將軍は思った。生き残った兵士たちは1人の例外もなく、生きながら死んだようなものだ。

そんな亡者の行軍を馬上から指揮しながらレボルトは、あの戦とも呼べぬ戦を思い返してみた。

思い返すほどのものなど、何一つなかった。

怪物が現れ、バルムガルド軍兵士を大量虐殺した。ただそれだけである。

レボルト・ハイマン。42歳。その人生の半分以上を、軍人として過ごしてきた。

兵を指揮する身分となつてからは、戦で負けた事がない。人間相手の戦ならばだ。

「どうしろと言うのだ、あのようなものを相手に……」

レボルトは、呆然と呟いていた。

「どのように用兵し、いかなる戦術を組み立てろと言うのだ……」

戦とは、数の力をいかに巧みに用いるかが全てである。

数の力こそが最強であり、それを上回る個体の力など、あるはずがないのだ。あつてはならないのである。

あつてはならないはずのものが今日、いきなり天空より舞い降りて、バルムガルド軍を直撃した。

数の力を圧倒する、個体の暴力。戦術兵法の類が一切、通用しない怪物。

「終わった……終わったよう、俺らの国……」

声が聞こえた。

ぶつぶつと何事か呟きながら歩いていた兵士の1人が、その呟きを叫びに変えていった。

「あのバケモノが、今度はバルムガルドに攻め込んで来る……殺される、みんな殺されちまう！俺の親父もおふくろも、女房もガキどもも！みんなブツ殺されちまうグチャツてビチャアツてブチブチツてドグシャアアアごぶっ」

レボルトは即座に馬を駆って剣を抜き、その兵士を斬り殺した。

こういう狂気というものは、放っておくと他の兵士にまで伝染しかねない。

叫んでいた兵士が、もの言わぬ屍となって倒れる。

他の兵士たちは相変わらず、青ざめ呆然としたまま、その屍を踏み越えて歩き続ける。

亡者の行進は続いた。

あの赤い怪物は、3000人近い兵を殺戮しただけではない。こうして生き残り逃げ延びた兵士全員を、生ける屍に変えてしまった。この兵士たちは当分、戦の役には立たないだろう。

形としては、バルムガルド軍の大敗である。

両国の民は、そのようにしか見ない。怪物が現れてヴァスケリア軍に味方した、などという言い訳を、聞いてくれる者はいないだろう。

戦に負けた。バルムガルドの將軍レボルト・ハイマンは、4万の大軍を率いながら、1万にも満たぬヴァスケリア軍を相手に大敗を喫した。そういう事にしかない。

シーリン・カルナヴァート元ヴァスケリア王女を擁立し、こちらこそが正当なる女王であると声高に叫んだところで、戦に負けてしまえば意味はないのだ。大義名分とは、勝った戦にこそ正当性を与えるものなのだから。

ヴァスケリア国内の唯一神教ローエン派を、かなりの金で飼い馴らしてはある。そちら方面から政治的に、地道に陰湿に、女王エル・ザナード1世の政権を攻撃する。バルムガルドがヴァスケリアに対して行える事は、当面それしかなくなってしまった。

それとて、あの怪物が一暴れしてローエン派を皆殺しにしてしまえば終わりである。

怪物に対しては、人間が用いる政治的策略など、全く意味を成さないのだ。

「エル・ザナード1世女王が、魔物を飼っているという噂……どうやら本当でしたな」

声がした。

騎馬のレボルトを護衛する形に徒歩で隊列を組んだ、將軍直属の歩兵隊。そこに歩兵ではない者が1人、いつの間にか混ざっていた。攻撃魔法兵士のようなローブに身を包み、顔面には仮面を貼り付けた、奇怪な男。

「ゴルジ・バルカウス……貴様、いつからそこにいた？」

「その気になれば私はいつでも、どこにでもおります」

「……わざわざ、私を嘲笑いに来たのか」

少しでも気を抜くと怒声になってしまいそうな声で、レボルトは

呻いた。

「さぞかし勝ち誇っておろうな？ 出撃前に貴様が言った通りになったわ。ヴァスケリアという国は、20年前から人ならざる者どもに魅入られている……怪物によって守られた国であるから、うかつに攻めるのはやめた方が良い。などと」

「勝ち誇っている場合ではございませぬ。かの女王が陰で使役している噂の怪物、1度は見てみたいなどと呑気な事を私も考えておりましたが……よもや、あれほどのものとは」

陰気くさい仮面の男が、さらに陰気な声を発している。

「少なくとも1度は、はっきりと申し上げておきますぞ將軍。この度の侵攻への正当なる報復措置と称して、エル・ザナード女王があの怪物を引き連れ、攻め込んで来たら……我が国は、滅びます」

「20年前のヴァスケリアと、同じような事になるわけだな」

あの頃のヴァスケリアは、赤き竜によって滅びの寸前まで追い込まれていた。寸前で滅びを免れたのは、英雄ダルーハ・ケスナーの偉業によるものである。

バルムガルドに、ダルーハはいない。

あの赤い怪物と戦えるような英雄が、都合良く現れてくれるはずもない。

そこまで考えてレボルトは、ある事に思い至った。

「ダルーハ・ケスナーの叛乱を鎮圧したのはエル・ザナード女王自らの手によってである、とヴァスケリア人どもは喧伝しているようだが」

「十中八九、あの赤き怪物でございましょう。ダルーハを討ち取ったのは」

確信を込めて、ゴルジは言った。

「女王の切り札というわけですな」

「……一体何なのだ、あれは」

もはや、このゴルジのような魔道の者の知識に頼るしかないのかも知れなかった。

「貴様が常日頃言っている、魔獣人間というものか？」

「現時点では何とも……ただ魔獣人間でなければ、あれと戦う事など出来はしません。それだけは確かです」

この男の言いたい事は、レボルトにもわかつている。

馬鹿げた事だ。

たちの悪い夢物語としか思えないような事を、このゴルジという男は考えている。

今はしかし、その夢物語に可能性を見出すしかないであろうか。

「……魔獣人間の製造に、ぜひともレボルト將軍のお力添えを」

「貴様の馬鹿げた研究に、国の金を注ぎ込める環境を作る……その手助けをしろというわけか」

この戦が始まる前であつたら、一笑に付していた話である。

「無論それが理想ではありますが、とりあえず現段階においては……私が行ういくつかの事に対し、見て見ぬふりをして下さるだけで充分でございます」

「貴様……我が軍の兵士を、魔獣人間とやらの実験に使うつもりか」  
馬上からレボルトは、亡者の行軍そのものの兵士たちの有り様を、ちらりと見渡した。

兵としては使い物にならなくなってしまったこの者たちを、人間ではない兵として再生させる。それも1つの手段であろうか。いや、あの怪物と戦う、もはや唯一の手段と言うべきか。

どれほど精強であろうと人間の兵隊では、あの赤い魔物に傷を負わせる事すら出来はしないのだ。

「怪物には怪物でございます、將軍」

仮面の内側で怪しく眼光を燃やし、ゴルジは言った。

「いかにおぞましい形であれ、何かしらの結果をお出しになる事です。そうすれば陛下も、將軍をお認め下さいます」

「陛下が……」

バルムガルド国王ジオノス2世は、こうして無様な敗北を喫したレボルトを、果たして許すであろうか。

ダルーハ・ケスナーの叛乱の際も、ヴァスケリア救援の名目でバルムガルドは3万もの大軍を派遣した。そして負けた。ダルーハ配下の猛将ドルネオ・ゲヴィンの卓抜した武勇と用兵によって、3万ものバルムガルド軍は大いに翻弄されたのだ。

あのドルネオ・ゲヴィンも実は人間ではなかった、などという不確かな噂が流れたが、その真偽が判明する前にダルーハ軍は滅び、ドルネオ本人も死亡した。それもやはり、エル・ザナード女王の切り札たる赤き怪物の仕業なのであろうか。

ともかく。あの時バルムガルド軍3万を率いていた將軍は、ジオノス2世に死刑を宣告され、獄中で自害した。

同じ罰が、レボルトにも下されるかも知れない。命は助かるにしても、將軍という地位にいられるかどうか。

「……ゴルジよ、私は戦に負けたのだ。貴様のやる事を見て見ぬふりして黙認出来るような地位になど、いられるかどうかかわからんだぞ」

「御心配なく。ジオノス2世王は英明なる御方……この度の敗戦、レボルト將軍が責めを負うべきものであるのか否か。そのあたりの事は、おわかりになりました」

「負けは負けだ。いきなり怪物が現れたなどと、言い訳にもならぬ」「不可抗力というものごさいますよ。その不可抗力に、抗するためにも」

魔獣人間が必要だ、とゴルジは言いたいのであろう。

確かに、あの赤い怪物がバルムガルドに攻め込んで来たら、現時点では打つ手がない。

人間の軍隊で防げるものではない以上、人間ではない戦力を作り上げておく必要がある。のかも知れない。

それがジオノス2世に認められたら、どうなるか。ゴルジによる魔獣人間造りが、国の援助を得て大々的に行われるようになったら。そしてそれが軌道に乗り、人間ではないものたちによって軍と呼べるようなものが構成されるほどになったら。

（人間の軍は、必要とされなくなる……）

心を折られて生ける屍となった、この兵士たちだけではない。レボルトのような将軍もまた不要となる。

戦術戦略を必要としない怪物たちによって、国同士の戦が行われる事となる。

（わかっておるのかエル・ザナード1世。人間ではないものに戦を一任するという事は、いずれは戦以外の分野も、そやつらに乗っ取られてしまうという事なのだぞ）

戦を担当する怪物たちが、戦の出来ない人間たちを、やがて暴力で支配するようになる。人間が、それに対抗する事は出来ない。なししろ戦いが出来ないのだから。

だが今は、そんな遠い未来の事よりも、隣国に存在して目前の脅威となっている赤き魔物を、どうにかしなければならぬ。

ほんの一瞬だけだが深く、本当に深く、レボルトは思案した。そして言った。

「ゴルジよ、貴様のやる事を見て見ぬふりして黙認してやる。役立たずとなったこの兵隊どもを、魔獣人間にでも何でもするがいい……ただし1つ、条件がある」

「うかがいましょう……」

「貴様の馬鹿げた研究と実験には、まず最初に私を使え」

「ほう」

仮面の下からゴルジが、ギラリと強く、眼光を向けてくる。

馬上から睨み返し、レボルトは言った。

「あの赤き怪物めに勝てるのなら、人間である事になど未練はない……この私を、魔獣人間とやらにして見せろ」

東国境でヴァスケリア軍が大勝した、という話は、その日のうちに王国全土を駆け巡った。

国境のガロググ城塞を2000の兵力で守っていたラウデン・ゼ



ビル侯爵に、女王エル・ザナード1世自らが率いる王国正規軍5000が合流し、押し寄せる4万のバルムガルド軍を鮮やかに撃退したのだという。

いくら誇張はあるだろうが、勝った事は間違いない。

人間が引き起こす厄介事を片付ける。女王としての仕事を、ティアンナはきっちりこなしているという事だ。

となれば自分としては、人間ではないものたちが引き起こしている厄介事を、早急に何とかしなければならぬ。竜の指輪を、預かってしまった以上は。

「バルムガルドの人たちはひどいです。ヴァスケリアは今大変な時なのに、それにつけ込んで攻めて来るなんて」

エミリイ・レアが、悲しそうに憤っている。

「そのせいで、人が……たくさん、死んでしまいました……」

「それが戦争というものだ。敵国が弱っている時に攻め入って、人を大勢殺す。攻め入った方も、大勢死ぬ」

ブレン兵長が、言いつつ苦笑する。

「戦とは、なりふり構わず人を殺すもの。ローエン派の方々からすれば許せぬ事であろうがな。なかなか人の世からは無くならん、戦というものは」

「……あたしたちも、綺麗事ばかり言っているわけじゃありません。現実はこちらと見ている、つもりです」

ゼピト村の、村長の家である。勧められるままリムレオンたちは、ここに今夜の宿を借りる事になっていた。

エミリイの家は、3年間の留守の間に権利が失われ、他人の手に渡ってしまっていた。彼女も、しばらくは村長が面倒を見る事になるようである。

揃って先程、夕食を振る舞われたところだ。

食事の終わったテーブルを囲んでリムレオンたちは今、あまり明るくない会話をしていた。

「それに……今のローエン派に、綺麗事を言う資格はないと思うん

です」

言いながら、エミリイは俯いた。

「いくら人々を救うためとは言っても、あんな……あんな事を……」

「ふむ……復興のための資金がバルムガルドから出ているという、例の噂か」

ブレンが腕組みをした。

「……だが戦災を被った民衆が、実際にそれで助かっているのだろうか？ 金の出所はどうあれ、ローエン派の方々は北で立派な事をしていると、俺などは思うのだがな」

「そう思っ下さる人は、多いでしょうが……」

ブレンの言う「立派な事」に耐えられなくなって、エミリイは北の戦災地からサン・ローデルへと帰って来たのだ。

ヴァスケリア国内のローエン派に、バルムガルド王国が金を流し、復興の手助けをしている。その話は噂として、リムレオンも聞いてはいた。

何のためにバルムガルドがそんな事をするのかと言ったら、まず第一に、エル・ザナード1世と敵対する勢力をヴァスケリア国内に作り出すため。第二に、人心をエル・ザナード1世から引き離すため。

言ってみれば、ヴァスケリア侵略併呑のための下準備である。が、この度の大敗によって、台無しに近い状態になったようだ。

何だかんだと言ったところで結局、戦争に勝つ事で国が守られるのは確かなのだ。

そこまで考えてリムレオンは、ふと思った。

今は自分もシェファも、人間ではないものたちとの戦いに専念している。だがティアンナが方針を変え、人間相手の戦への参加をリムレオンに命じてきたら。

人間に対して魔法の鎧の力を振るう事が、自分には出来るだろうか。

今後バルムガルド軍が勢いを盛り返してヴァスケリア軍を圧倒し、

魔法の鎧を戦線投入しなければならなくなるような事態が、起こらないとは限らないのだ。

（お前は、人間相手でも平気で戦うだろうな……もう1人の、僕よ）  
他人が聞いても理解出来ないであろう事を、リムレオンはつい口に出して呟いてしまっているように思っていた。

魔法の鎧を着て魔法の剣を振り回し、その力に溺れかけているもう1人の自分は、しかし最近はまだ大きな顔をしていない。

メイフェム・グリム、ゴルジ・バルカウス、それに魔獣人間オーガートリスと、一筋縄ではゆかぬ強敵が続いているからだ。特にメイフェムには、全く歯が立たなかった。

「それに、バルムガルドと繋がってるだけじゃありません。クラブー大司教は、恐ろしい事を……」

エミリイの声が震えた。

クラブー・ルマン大司教。現在のヴァスケリア唯一神教会の頂点に立つ人物で、およそ100年ぶりに現れたローエン派の大司教であるらしい。

その大司教が何か恐ろしい事をしていると、エミリイは言っているようだ。

「いくら人々を助けるためでも、あんな……恐ろしい人と……」

「エミリイ……？」

村長が怪訝そうな声を出す。エミリイは、黙り込んでしまった。

無理に話の続きをさせるべきではないかも知れない、とリムレオンは思った。

このエミリイ・レアという少女は、北で、何かとてつもなく恐ろしいものを見たのだ。

忘れてしまいたいという思いと、誰かに話したいという気持ちと、彼女の中では、せめぎ合っているのだろう。

ともかく北で恐ろしい目に遭った少女が、サン・ローデルへ帰って来て、そこでもまた魂が潰れるような目に遭った。

幼い頃から仲の良かった者たちがいなくなり、その1人が魔獣人

間となって姿を現したのだ。

夕食の席では誰も触れしようとしなかったその事に、今になって触れようとする者がいる。

「……ま、北のお話はとりあえず置いといて。あのアサドって奴の事なんだけど」

今まで黙っていた、シェファである。リムレオンは思わず慌てた。  
「シェファ……！」

「触れないようにしてたって意味ないでしょ。あたしたち、あいつと戦わなきゃいけないのよ？」

恐いくらいに真剣な目で、シェファが睨み返してくる。

「リム様とあたし、2人がかりでも勝てなかった……あのバケモノと」

エミリイのいる所で容赦なくシェファは、そんな事を言っている。

「ねえ村長さん。あのアサドって奴、親御さんとかはいますか？」

この村に」

「……おりません。父親も母親も、アサドを助け出し連れ戻そうとして、領主様の兵隊に殺されました」

「ひどい……！」

エミリイが青ざめた。

「どうして……サン・ローデルは、こんな事になっちゃったんですか……？」

「わからん……バウルファア侯爵様も以前は、領民をそれなりには大切になさる御方であつたのだが」

そんなバウルファア侯に悪しき変化が起こったのは、メイフェム・グリムとゴルジ・バルカウスが原因であろう。あの2人にそそのかされ、担ぎ上げられているのだ。

魔獣人間や残骸兵士で人ならざる軍団を組織し、女王エル・ザナード1世に反旗を翻す。その叛乱の総大将として、バウルファア・ゲドンは擁立されている。

「ふうん……それじゃエミリイさん」

青ざめ俯いているエミリイに、シェファは容赦なく告げた。

「あなたにだけ断っておけばいいわけね。あたしたち、あのアサド君を殺すから」

「シェファ……」

自分が言わなければならなかった事ではないのか、とリムレオンは思った。

自分はまた、シェファに汚れ役を押し付けてしまったのではないのか。

「あたしには、何も出来ません……だから何を言う資格も、ありません」

俯いたまま、エミリイは言った。

「……アサドを……楽にして下さる、んですよね……？」

「そういうのじゃないから。リム様はどうか知らないけど、あたしはね……あの魔獣人間って奴らが気に入らないから、皆殺しにする。ただそれだけ。あたしは、そういう奴だから」

待ってくれ、とリムレオンは叫んでしまいそうになっていた。

魔獣人間を人間に戻す手段が、全くないと確定したわけではない。例えばゾルカ・ジェンキムならば、その方法の手がかりくらいは知っているかも知れない。

だからアサドを殺すのはやめよう。

その言葉を、リムレオンは辛うじて口には出さず、呑み込んだ。

これまで何体もの魔獣人間を殺害して来た自分に、言える事ではなかった。

魔獣人間オーガートリスが、なかなか器用な事をしていた。

兵士が3人、怯え青ざめながらも、その場から逃げられずにいる。3人とも、両脚が石化していた。ズボンや軍靴の隙間に、何本もの白い羽が突き刺さっている。

下半身のみが石像と化した3人の兵士に、オーガートリスは重々

しく語りかけている。

「調べはついているんだよ……俺の親父とおふくろを殺したのは、お前らだろう？」

「ヒッ……あうわわわ……」

「た……助けて、メイフェム殿……」

1人がメイフェムに気付き、助けを求める。

バウルファー侯爵の居城、その中庭である。すでに夜分遅く、あちこちで篝火が焚かれている。

半石化した3人の兵士に、メイフェムはとりあえず歩み寄った。

「……何をしているのかしら？」

「み、見ての通りですう……俺ら殺されちまう、助けて……」

「放っておいてもらおうか」

人間であつた時は単なる村人の少年に過ぎなかつたオーガートリスが、恐れげもなく言つた。

「あんたに俺を止める資格はないよメイフェム殿。そうだろうか？」

「そう……ね」

メイフェムは苦笑した。確かに自分も、この城で何人もの兵士を殺している。大した理由もなしにだ。

魔獣人間となれば、その程度の無法は許されてしまうものである。

「まあ、そんな事はどうでもいいけれど……アサド・ラグ。貴方には1つ、訊いておきたい事があるのよね」

この魔獣人間が人間であつた時の名を呼びつつメイフェムは、少し強めに睨みつけてみた。

「貴方……あの魔法の鎧と戦つたそうね？」

「戦い、ってほどのもんでもなかったけどな」

答えつつオーガートリスは、動けぬ兵士の頭部を1つ、右手で果物のようにもぎ取った。

魔法の鎧の装着者たちが、バウルファー侯の命を狙ってサン・ロードルに入り込んで来ているらしい。という話は、メイフェムも聞いている。

「あれは一応、私たちの敵という事になっているのだけど……仕留め損ねた、という解釈でいいのかしら」

自分にそれを咎める資格がない事くらいは、メイフェムにもわかっている。魔法の鎧を、中身を潰して持ち帰る事に、自分も結局は失敗しているのだから。

「私たちの敵を、貴方がわざと仕留め損ねて帰って来たのか……それとも実力で負けて撃退されて来たのか、それだけでも教えてくれないかしらねえアサド・ラグ殿」

「奴らと戦う前に、あんた方の言質を取っておきたかった」

2人目の兵士の腹にズブリと左手を突っ込み、無造作に臓物を引きずり出しながら、アサドは言った。

「俺が奴らを倒したら……ゼピト村にはもう一切、手を出さないでもらいたい」

「あら……」

メイフェムは、少しだけ驚いた。なかなか新鮮な驚きだった。魔獣人間が、これほど真摯な眼差しと口調で物を言う事が出来るとは。「あの村から人狩りでさらった奴が、俺の他にもまだ生きているのなら全員、帰してもらいたい。あんた方がこの先何をしたいのかは知らんが、何をやらかすにしても……俺以外のゼピト村出身者は、1人も巻き込まない事。それを約束して欲しい」

「貴方……自分の村を守りたいのね？ 魔獣人間になってまで」

懐かしい、とメイフェムは思った。このアサドという少年は、人々を助け守ろうとしている。かつてのダルーハや自分たちのように。「そう、守りたいの……ふ、ふふっ、守りたいのねえ。うっふふふふ」

「何がおかしい……!」

オーガートリスの、右手で生首が、左手で臓物が、グチャグチャと握り潰され破裂した。

どろりと汚れた両拳を震わせて、アサドは呻き、叫ぶ。

「……俺が！ どれだけ！ 貴様らをぶち殺したいか！ わかって

んのかあああッ！」

「まあまあ落ち着いて。気持ちわかるけれど、それは無理なのだから……ね？」

にこやかに、メイフェムはなだめた。

「そう、せめて自分の村だけは守りたいのねえ貴方……そのお願い、私は別に聞いてあげてもいいけれど。ゴルジ殿は何と言うかしらねえ」

「……良からうアサド・ラグ。魔法の鎧の装着者たちを、倒して見せろ」

篝火の明かりが届かぬ闇の中から、ゴルジ・バルカウスが歩み寄って来た。

「それが出来たら、貴様の願いを全て叶えてやる。ゼピトの出身者は全て村に帰し、今後一切手は出さぬ。何かあれば、我らの力である村を保護してもやる。パウルフアー侯に掛け合い、ゼピト村からはもはや税も取らせぬ……メルクトの若君たちとの戦いで、貴様が充分に手柄を立てさえすればな」

ゴルジの様子がおかしい、とメイフェムは感じた。

死にかけて逃げ帰って来た時でさえ、どうにか精神的な余裕を保っていたこの男が、今は何やら焦っている。

「……何かあったの？　ゴルジ殿」

「現れたぞメイフェム殿……エル・ザナード1世の飼っている、怪物がな」

1度は見てみたい、と言っていたものを、ゴルジは見てきたのであろうか。その割には、少なくとも嬉しそうではない。

「私は、人間には無限の可能性があると思っていた。それを時間にかけて見極め、追求してゆくつもりであったが……今やそんな悠長な事はしておれん。人間の持つ可能性というものを、一刻も早く、魔獣人間という形で開花させなければ」

一刻も早く1人でも多くの人間を魔獣人間にしなければ、とゴルジは言っているのだ。



「人間は、滅びる……奴らに、滅ぼされてしまう」

「ゴルジ殿……？」

この男が何を言っているのか、メイフェムにはよくわからない。が、何となくわかった事が1つだけある。

戦乱を起こして魔獣人間の需要を増やし、自分の研究で商売をする。それがゴルジの目的であるとメイフェムは今まで思っていた。が、その裏にもう1つ何かがある。ゴルジ・バルカウスなりの、高尚な目的と言うべきものが。

それを聞き出してみようとは、しかしメイフェムは思わなかった。この男の真の目的など、どうでも良い。

そんな事よりも興味深い何かを、アサド・ラグが見せてくれるかも知れないのだ。

「ぐずぐずしてはおれん。我らの邪魔をする者は、早急に滅ぼさねばならぬ。ゾルカ・ジェンキムの作品であろうと何であろうと」

ゴルジのその言葉に、グチャリと凄惨な音が重なった。

魔獣人間オーガートリスが、3人目の兵士の顔面に拳を叩き込んだところだった。

「早急に滅ぼせばいいんだな、あの魔法の鎧を着た奴らを……鎧はともかく、中身を潰すのは難しい事じゃない」

潰れた眼球が貼り付いた拳を震わせ、アサドは言った。

「さっきの言葉……忘れるなよ、ゴルジ殿」

「アサド・ラグ。お前は人間の可能性を大いに開花させた、言わば選ばれし者だ。これからも役に立ってもらわねばならん……約束は、守るとも」

「頑張ってね」

メイフェムは、魔獣人間の少年に微笑みかけた。

「応援しているわ……本当に」

「馴れ馴れしくするな、くそ魔女が」

ひどいことを言われたが、メイフェムは気にならなかった。

このアサドという少年は、人間ではないものになってしまっ

まで、自分の村を守ろうとしている。

（魔獣人間こそが、人間の本性の露わなる姿……なのだとしたら）  
メイフェムの心は震えていた。感動、に近いものだった。

（美しいものを見られる、かも知れない……ケリス、あなたが命を  
捨てて守ろうとしたものが……）

## 第27話 救世主ゴルジ・バルカウス

こうして見ると、リムレオンはずいぶんと痩せた。

元々か弱い若君が、ブレン兵長にしごかれ鍛えられ、たくましくなるどころかゲッソリと肉が落ち、余計に細く弱々しくなってゆく一方である。シェファには、そのようにしか見えなかった。

（そりゃ、肥満は論外だけど……）

そんなリムレオンが、剣を構えている。訓練用に刃引きされたものではない、当たれば斬れる本物の長剣だ。ブレン兵長の持ち物の1つで、魔法の鎧を着ていない生身のリムレオンには今ひとつ似合わない得物である。

「さあ若君、どこからでも斬り掛かって来られませい。シェファ、お前もだ。いつでも殴り掛かって来るがいい」

ブレンが、リムレオンとシェファ両名に向かって、下から上へと手招きをした。それぞれ長剣と魔石の杖を構えた少年少女に対し、この兵長は素手である。背中に大型の戦斧をくくり付けてはいるが、訓練で振るうつもりはないようだ。

早朝。ゼピト村の広場の片隅を借りてブレンとリムレオンは、城にいる時と同じような訓練を始めていた。そこに今日は、シェファも参加させてもらっている。攻撃魔法兵士として、ではない。魔石の杖を殴打用の武器として扱う、白兵戦の訓練である。

魔法の鎧を装着すれば、どうしても白兵戦の機会が増える。

攻撃魔法にばかり頼った戦い方では、昨日のように、魔力を収束している間に敵の攻撃を喰らってしまうのだ。

巨大な鉄球を思いきり喰らわされた、あの衝撃を、シェファは思い返した。

痛くはなかった。痛みなど感じる前に、全身の感覚そのものを破壊されてしまったかのようにだった。

（駄目、あんなんじゃない……リム様の足、引っ張るだけ……！）

魔石の杖をグッ……と強く握り込み、構え、ブレン兵長を睨み据える。

隙だらけ、に見えた。

何の武器も持っていない両腕をいくらか広げ、ブレンは無造作に立っている。

獅子のタテガミを思わせる頭髪と髭に囲まれた顔は、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべており、その笑顔を断ち切るように走った傷跡を不敵に歪めている。

対するリムレオンは、緊張しているようだ。抜き身の長剣を構えたまま、微動だにしない。

いや、微かに震えている。

可愛らしい顔は引きつり、強張り、青ざめてすらいた。

長剣1本くらいでは戦力差の埋まらぬ相手に、リムレオンはすでに気迫で負けている。

(いつもそうやって……リム様の事いじめてっ!)

心の中で怒り叫びつつ、シェファは踏み込んだ。振り上げた魔石の杖を、兵長の不敵な横面に思いきり叩き込む……

その瞬間、わけがわからなくなった。何が起こったのか、何をされたのか、シェファはすぐには把握出来なかった。

わかるのは、凄まじく痛い、という事くらいである。

「痛……ったたたたた!」

ブレンの力強い手が、シェファの細腕を容赦なく掴み、捻り上げていた。

魔石の杖が地面に転がっているが、それを拾い上げる事も出来ない。

「いつ痛いッ、痛いい! 痛いよオーツ!」

「シェファ……!」

泣き叫ぶシェファを助けるべく、リムレオンが踏み込んで来てくれた。素手のブレンに対し、ためらいなく長剣を突き出す。

かわそうともせずにブレンは、シェファの腕にさらなる微かな捻

りを加えた。

「いっ………ッッ！」

激痛に操られるようにシェファの身体は勝手に動き、ブレンとリムレオンの間で立ちすくんだ。楯、の格好である。

ブレンを狙って突き込まれて来た長剣が、シェファの胸に触れる寸前で止まった。リムレオンが、辛うじて止めてくれた。

息を呑んでいる若君をシェファの肩越しに見据え、ブレンは言う。  
「こういう手を使う輩も当然おります。お気を付けなされ」

突然、シェファの腕から痛みが消えた。ブレンが手を離れたのだ。まるで放り捨てられたように解放され、よろめきながら、シェファは見た。

ブレンの左足が跳ね上がり、リムレオンの腹にズン……ッ突き入れられる様を。

「うぐう……え……っ」

後方に吹っ飛びながらリムレオンは細身を折り曲げ、腹を抱えるようにして倒れ込んだ。

その様を、ブレンが満足げに見やっている。

「当たる瞬間に後ろへ跳んで、直撃を殺す……ようやく出来るようになりましたな、若君」

「……それでも、充分に痛いですが」

倒れたリムレオンが、しかし意外に平気な様子で、上体だけを起こす。地面に座り込んだ格好となった。

シェファは恐る恐る、声をかけた。

「大丈夫……なの？ リム様……」

「大丈夫、我ながら上手く避けたよ。ブレン兵長の蹴りがまともに入ったら、僕なんか生きてはいないさ」

尻餅をついたまま、リムレオンが微笑む。

シェファは、捻られていた腕を軽く動かしてみた。痛みもなく、普通に動く。あの激痛が、嘘のように消え失せている。

シェファは思わず、ブレンを見つめた。この兵長は昨日のように、

たやすく人の腕を折る事が出来る。一方このように、ただ痛みを与えるだけの捻り方も自在に出来るのだ。

おまけに、生身で魔獣人間と戦える。

シェファは溜め息をついた。半ば、呆れていた。

「あたし思うんですけど……ブレン兵長が魔法の鎧を着たら、最強なんじゃないですか？ そりゃもう、あたしもリム様も要らないくらいに」

「……そう見えるか？」

「見えますとも」

答えたのは、地面に座り込んだままのリムレオンだ。

「……試してみませんか？ ブレン兵長の、魔法の鎧姿。僕は見てみたい」

己の中指から、竜の指輪を抜き取ろうとするリムレオン。ブレンは片手を上げ、それを止めた。

「やめておきましょう。その力、私にはふさわしくない」

「努力をしないで強くなってしまいうような力は……やっぱ、許せませんか？」

「そうではありませんよ若君。軍人や戦士といった人種は、とにかく力を求めるものです。面倒な修行鍛錬もなしに強くなれる力なら、むしろ喉から手が出るほど欲しいところ……私はね、強くなれるのなら魔獣人間になっても良いとすら思っているのですよ」

ブレン兵長が魔獣人間となったら、それこそ魔法の鎧の1つや2つではどうにもならぬ怪物が出来上がるだろう。

「そのような私が魔法の鎧など身に着けたら、間違いなく力に溺れて何かるくでもない事をやらかします。あのダルーハ・ケスナーのように」

力に溺れる、という感覚が、シェファには今ひとつ理解出来なかった。

「魔法の鎧の力は、若君が責任を持って管理なさるべきです。シェファ、お前もだぞ。魔法の鎧に振り回されない程度には、強くなっ

てみせろ」

「……今のあたしじゃ、全然駄目ですか」

確かに全然駄目なのだろう、とシェファは思った。

リムレオンは先程、シェファを楯にされて動きを止め、ブレンに蹴り飛ばされた。

今のお前は若君の足を引っ張る存在でしかない、と、ブレンは言葉ではないもので教えてくれたのだ。

「やあ、お客人方。精が出ますのう」

広場を通りかかった何人かの村人が、声をかけてきた。皆、農具を携えている。早朝の農作業に、これから向かうところか。終えて帰って来たところか。

先程のシェファの無様な悲鳴も、この農夫たちに聞かれてしまったであろうか。

シェファの代わりに、ブレンが詫びた。

「朝早くからお騒がせして、申し訳ない」

「何の何の。あんた昨日、あのクソツたれなマルズの野郎を痛めつけてくれたんだってなあ」

「久しぶりにスカツとする話を聞いたもんだ……何しろ嫌な話ばかりだからなあ、ここ最近のサン・ローデルは」

この村人たちの中にも、いるかも知れない。息子や娘や兄弟を、残骸兵士に変えられてシェファに殺されてしまった者が。

「その嫌な話というのは……御領主のバウルファー侯が人狩りをしておられるという？」

ブレンは訊いた。少し情報を集めてみるつもりのようなだ。

「うん……実は俺の甥っ子も、こないだ連れて行かれちゃってな」

その甥御も、ここにいる攻撃魔法兵士の少女によって、すでに殺されているかも知れない。

「無事でいてくれると思いたいが……どうだかなあ」

「……連れ去られた人々が、どこでどのような扱いを受けているのかは、何かご存じであろうか」

残酷な質問だとわかっていながら、ブレンは口に行っているようである。

「あんた、もしかして、さらわれた連中を助けてくれようってのかい？」

村人の1人が、ブレンの太い腕を馴れ馴れしく叩いた。

「やめとけ。あんた確かに強そうだが、ここの領主はバケモノを何匹も飼ってやがるんだ」

その化け物が具体的にあと何体くらいいるのか、を知る事が出来れば最良なのだが。

「なあに、あとちよつとの辛抱だ。もう少しすれば、女王陛下が何とかして下さるさ」

「そうだな。バルムガルドの連中も追い払った事だし」

村人たちが、楽天的な事を言い始める。

「ダルーハもやつつけた、あの女王様なら、領主んとこのバケモノどもくらい何て事ないさ」

「そうだな。本当に……あと少しの、辛抱なんだ」

否。楽天的と言うより、もはや女王にすぎりつくしかなくところまで、この村人たちは追い詰められているのだ。

女王エル・ザナード1世はすでに手を打っている、とは言える。

リムレオンに魔法の鎧を与え、人間ではない者どもと戦うように仕向けた。結果こうしてサン・ローデルの領民を救いに来る事にもなった。

リムレオンがこういう無茶をする事を知った上で、あの女王は、竜の指輪を持ってメルクトを訪れたに違いないのだ。

(……そのくらい腹黒じゃなきゃ、きっと務まんないのよね。女王様ってのは……)

思いつつもシェファは、己の腹の中でも何やらドス黒いものが渦巻いているのを自覚した。

「リムレオン様あ」

柔らかな足音と共に、声が聞こえた。



唯一神教の法衣をまとった1人の少女……エミリイ・レアが、いそいそと走り寄って来る。

腹の中のドス黒いものが、さらに激しく渦巻き燃え上がるのを、シェファは感じた。

そんな少女の醜い心根に気付くはずもなくエミリイが、無邪気に声をかけてくる。

「ブレン兵長にシェファさんも。そろそろ朝ごはんの支度が」

「おお、エミリイじゃないか。帰って来てたのか」

村人たちが懐かしげに、エミリイを囲んだ。

「昨日、帰って来たとは聞いてたが。いやあ懐かしいなあ」

「3年ぶりか？ 北の方は大変なんだってなあ」

「はい。いろいろあって……逃げ帰って来ました」

エミリイが頭を下げた。

「ごめんなさい、昨日のうちに御挨拶出来れば良かったんですけど……昨日もまた、いろいろあって」

「知ってるよ。マルズのくそ野郎が、また絡んで来やがったんだってなあ」

「こちらの御方が、あのクソツタレ野郎をぶちのめしてくれたんだろう？ いやあ世の中まだまだ捨てたもんじゃないな」

「はい、昨日は本当に、どうもありがとうございました」

こちらに向かってペコリと礼儀正しく頭を下げながらエミリイは、地面に尻餅をついたままのリムレオンに気付いたようだ。

「リムレオン様……どうかなさったんですか？ お身体の具合でも」

「ああ何でもない、全然大丈夫だから。ね？ リム様」

歩み寄り助け起こそうとするエミリイを、シェファは明るい大声で遮った。腹の中で燃え盛るドス黒いものは、無理矢理に抑え込んだ。

そうしながら、リムレオンの片耳をつまんで引っ張る。

「ほらあ大丈夫なんだから自力で立たないと駄目でしょう？ まったくリム様ってば、女の子に甘えるのが上手いんだからっ」

「いつ痛いよシェファ。立つから、ちゃんと立つから」

「あ……あのシェファさん、乱暴な事は」

「大丈夫よエミリイさん。ちょっと乱暴にしたくらいじゃリム様、壊れないから。鍛えてるもん。ね？ ブレン兵長」

「いくら身体を鍛えたところで、女難の苦勞まで凌げはしないが……」

ブレンは苦笑し、話題を変えた。

「……それよりエミリイ殿。今の話を聞いて気になったのだが、北の戦災地から1人で歩いて帰って来たのか？ この時勢に、若い娘が」

「あ、いえ、腕の立つ剣士様が1人おられました。傭兵としてローエン派に力を貸してくれていた方なんです、その人があたしを護衛して、ゼピトの近くまで一緒に来てくれたんです」

「ふむ、ローエン派が傭兵を雇うか。復興が進んでいるとは言え、北も決して情勢が安定しているわけでは……」

言いつつブレンは、厳つい表情を緊迫させた。

何者かが襲って来たのだ、とシェファは思った。同じような事が昨日もあった、とも思った。

「危ない！」

叫びながらブレンが、鬼気迫る表情で突進して来る。

猛然たる体当たりが、シェファを、エミリイとリムレオンを、まとめて突き飛ばした。

それまで3人が立っていた辺りで、爆発が起こった。大量の土が、火柱と共に噴き上がる。

何者かによる攻撃魔法。それから、ブレン兵長は自分たちを守ってくれたのだ。

それは良いとして、エミリイとリムレオンが重なり合って倒れ込んだ。リムレオンが下になって、女の子を抱き止めてあげている感じである。

抱き止められたエミリイの身体が、少年の上に柔らかくのしかか

る。法衣に包まれた胸が、リムレオンの可愛い顔をムニユツと圧迫している。

（あれ……あたしより、大きい……？）

ドス黒いものを相変わらず腹の中で燃やししながらシェファは、少し離れた所に1人で倒れ込みつつ、身を起こした。

重なり合った少年少女も、起き上がっている。

「あ……ご、ごめんなさい！ リムレオン様」

「……僕は、大丈夫だから。それより君は」

大丈夫かい？ などと言いかけたリムレオンの、耳ではなく頬を、シェファは思いきりつまんで引きずり起こした。妬ましくなるくらい、滑らかで柔らかな頬である。

「い、痛いよ、ひえふぁ……」

「ちよつとブレン兵長、わざとやってるんですかつ！」

「何の話だ。それより敵が来たぞ」

少年1人と少女2人を背後に庇い、ブレンは戦斧を構えている。確かに、敵としか言いようのない者たちが、広場に歩み入って来てはいた。

3つの人影。

うち1つは、すでに人間の姿を脱ぎ捨てている。頭に鶏冠を立て、全身の羽毛の所々から岩のような筋肉を露出させた大男。右肩に、鎖鉄球を担いでいる。

「アサド……」

エミリイが小さく、名を呼んだ。

アサド……魔獣人間オーガートリスは、何も応えない。

とりあえず人間の姿をまだ保っている残り2名のうち、片方は軍装をまとった兵士である。明らかに正気を失った表情で、何やらブツブツと呟いている。

昨日エミリイの両親の墓前でブレンに腕を折られた、マルズとかいう名の隊長だ。折られた右腕は治療を受けた様子もなく、だらりと垂れ下がっている。

3体目の人影が、そんなマルズに片手の親指を向けた。枯れ枝のような指だ。

「一夜漬けの急ごしらえ、にしては上出来の仕上がりであると自負しておる」

ローブに身を包んだ仮面の男、ゴルジ・バルカウスである。今の攻撃魔法は無論、この男の仕業であろう。

「だが、このような者は問題にならぬほど……やはりブレン・バイアス兵長、貴公は素晴らしい素材だ。私の下へ来い、そして最強の魔獣人間となるのだ。それに魔法の鎧をまとう者たちよ、お前たちも私と共に戦え。これが最後通告だ」

ゴルジが何やら焦っている、ようにシェファには思えた。

「共に戦ってくれぬとあらば……我々は貴殿たちを、この場で皆殺しにしなければならぬ」

「ひい……ば、バケモノ……」

村人たちが腰を抜かして尻餅をつき、怯え始める。

同じく怯えつつも座り込んだりはせずに、エミリイが声を発する。

「ま、待って下さい。あれは化け物じゃなくてアサド……」

「余計な事を言うな、エミリイ」

魔獣人間オーガートリスが、少女の言葉を断ち切って言う。

「説得なんか無駄だぜゴルジ殿……って言うか、戦わなきゃ俺が手柄を立てられないだろうが」

「……聞いている通りだ、メルクトの若君。こやつは貴公らを倒す事で私に気に入られ、この村を守ろうとしておる」

魔法の鎧の装着者を討ち取れば、お前の村には今後一切手を出さない。などとアサドは言われているのであろうが、このゴルジという男が果たしてそんな約束を守るだろうか。

「もしも貴公らがこの私に味方してくれるのであれば、我らは今後一切この村には……そしてメルクト地方にも手は出さぬ。若君よ、

貴殿が我々と戦うのは要するにメルクトの防衛が目的であろう？  
その目的が、戦う事なく果たされるのだ。悪い話ではあるまい」

「仮にお前がその約束を守って、メルクトに手を出さなくなったとしよう……メルクト以外の、どこに手を出すつもりだ？」

会話の相手をしながらリムレオンは、右拳を握った。

中指で、竜の指輪が光を発した。

「どこであろうと、お前のくだらない実験や研究のせいで人が死ぬ。それを見過ごせると思うのか」

「メルクトの若君が、メルクト以外の地を……よもや王国全土を守ろうなどという気になっているのではあるまいな」

ゴルジの仮面、その視界確保用の裂け目から、邪悪な眼光が漏れた。

「……いささか思い上がってはおらぬか、若造」

「力があるなら戦うしかない。それを思い上がりと言いたければ言え。何もしないよりは、ずっとましだ」

「共に戦え、とか言ってたわよねゴルジさん」

シェファが、会話に加わってきた。

「何と戦うつもりなのか、ちょっと興味本位で聞いてみたいんだけど」

「若い者たちは知らぬか。このヴァスケリアという国はな、人間ではない者どもに魅入られておるのよ。20年前からな」

赤き竜、の話をゴルジはしているようだ。

「ブレン・バイアス殿。貴公ならば、おわかりであろう……思わぬか。あの頃、王国軍に魔獣人間という戦力があれば、赤き竜にあそこまでの暴虐を許す事はなかったと」

「……………」

ブレンは応えない。

ゴルジは、調子に乗ったかの如く語り続ける。

「幸いにして赤き竜は滅びた。が、その配下であった魔物どもの勢力が、この世から一掃されたわけではない。ダルーハ・ケスナーの

死後、あやつらが勢いをむしろ取り戻しつつある事は、おぬしらも薄々は感付いていよう」

ある1つの名前が、リムレオンの脳裏に甦った。

竜の御子。

メルクトに現れた魔物たちが口にしていた、どこか禍々しい固有名詞。

勢力を取り戻しつつある魔物たちの、恐らくは元締めのような存在。

それに関して、このゴルジという男は何か知っているであろうか。だとしても友好的に聞き出してみようという気に、リムレオンはなれなかった。

「私はな、見てしまったのだよ。貴殿らの魔法の鎧、それに私の魔獣人間、とにかく人間のあらゆる叡智と可能性を開花させねば対抗し得ぬ、恐るべき怪物をな……あのようなのが現れてしまった以上、もはや一刻の猶予もない。我らが争っている場合ではないのだよ若君、王国全土を守ろうとするならば私に協力しろ。赤き竜の再来とも言うべき事態が、ヴァスケリアのみならずバルムガルドその他近隣諸国をも襲いつつあるのだ。人間という種族そのものが、人ならざる者どもによって存亡の」

「……もういいだろう、シェファ」

聞くに耐えず、リムレオンは言った。

「この男の話をいくら聞いても、僕たちはきつと何一つ理解出来ない」

「あたしは、もうちょっと聞いていたんだけどなあ。面白いし」  
言いながらもシェファは、己の眼前で軽く右手を揺らめかせた。愛らしい中指にはまった竜の指輪が、キラキラと青い光をこぼす。

「お茶でも飲みながらの、無駄話の種くらいにはなりそうじゃない？  
ならないかな」

「貴様ら……」

ゴルジの両目が仮面の内側で、怒りの眼光を燃やす。

「……なあゴルジ殿。確かに俺は、力を得るためなら魔獣人間になってもいいと思っている」

ブレンが言った。

「貴様のような輩を、この世から消し去る……そのための力が手に入るのならな」

「……交渉は決裂、というわけだな。愚か者どもが……！」

言葉に合わせ、ゴルジの細身がメキツ！ と痙攣する。

竜の指輪を右拳で輝かせながら、リムレオンは言葉を返した。

「何が交渉だ。お前の誇大妄想を、僕たちが一方的に聞かされただけじゃないか」

「若造……ッツ！」

「僕たちは、お前が何をしているのかを知っている……」

あの残骸兵士たちの、痛ましいほど醜悪な姿が、リムレオンの脳裏に甦る。

右の拳で竜の指輪が、白い輝きを増してゆく。

「充分に、見せてもらった。くだらない話も聞いた……あとはゴルジ・バルカウス、お前をこの世から消すだけだっ」

白く輝く右拳を、リムレオンは地面に叩き付けた。

青く輝く右手を振るい、シェファが細身を翻す。

「……武装転身！」

「武装、転身……」

2人の声が重なり、2色の光が少年少女を包み込む。

リムレオンは白、シェファは青。

それぞれ魔法の鎧を装着し、人間ではない者たちと対峙した。

「ふん……そう来なくっちゃな」

オーガートリスが、鎖を鳴らしながら言う。

「物事ってのは結局、戦って解決するしかないんだよなあ……人間やめちまうと本当、それがよくわかるよ」

「そうだ……俺は、人間ではなくなった……」

ブレンに折られた腕をぶらぶらさせながら、マルズがようやく聞

き取れる声を出した。

どんよりと濁った、ギラギラと血走った目が、ブレンに向けられる。

「貴様だよ……貴様が、俺から奪ったのだ……人間として栄達する道を、俺から貴様がああああ！」

折れたはずの腕が、ブラブラと激しく揺れながら跳ね上がり、メキッ！ と異形化した。

指が、伸びた。

マルズの右手の五指が、蛇あるいは鞭のように伸びつつ高速でうねり、ブレン兵長に襲いかかったのだ。

ブレンは避けず、1歩ずしりと踏み込みながら戦斧を振るった。

兵長の周囲5ヵ所で、衝撃が弾けた。

大型の戦斧が一閃し、マルズの五指を全て切断していた。飛び散ったのは、しかし人間の指ではない。

木の枝、いや根であろうか。

マルズの右腕は、木製の義手と化していた。叩き斬られた五指が、しかし即座にニョキニョキと生え変わり、空中をうねる。5匹の蛇のように揺らめく、木の根。

木製の義手ではなく、腕そのものが樹木と化しているのだ。根を蠢かせて人を襲う、自然ならざる樹木。

そんなものに右腕を変化させたマルズを、ブレンが笑う。

「……良かったな、骨折が一晩で治ったようではないか」

「疼く……貴様に折られた、この腕が……うぐごごごああああああああ」

右腕だけではなく、マルズの右半身が軍装を破り、皮膚を樹皮に変えてバキバキと盛り上げてゆく。

一方、左半身は見る見るうちに腐敗し、ただれた皮膚と肉が混ざり合ってグジュグジュと音を発する。

顔面も、右半分が樹皮に覆われて木製の仮面のようになり、左半分は腐り溶けて眼球や歯が剥き出しとなった。



そんな顔面が、どうにか聞き取れる人語を発する。

「貴様は殺す！ 俺をバカにしている、この村の者どもも殺す！  
どいつもこいつも引き裂いてブチまけてくれるああ！ この魔獣人間グールトレントがなああああ」

「……なあゴルジ殿。この戦いが終わったら、まずこの野郎を真っ先にぶっ殺させてもらうぜっ」

言いながらオーガートリスは、まずこの戦いを終わらせるべく、こちらに向かって左手を振るった。

何本もの、白い短剣のようなものが投擲された。石化能力を有する羽。

それらがリムレオンの全身に突き刺さる寸前、シェファが魔石の杖を振るっていた。

青く華奢な、魔法の鎧。その所々にはめ込まれた幾つもの魔石が、赤い光を発する。

炎が出現し、リムレオンを取り巻いてゴォオッ！ と渦を巻いた。飛来した白い羽が、全て焼き払われて焦げ砕けた。

「リム様、剣を抜いて」

渦巻く炎に護衛されたままリムレオンは、シェファの言葉に従い、魔法の剣を抜いた。

防壁の形に渦巻いていた炎が、リムレオンの周囲から、その抜き身の刀身へと流れ込んで行く。

「それなら、あいつを叩ッ斬っても、剣が石になったりする事はないから……」

「……ありがとう、シェファ」

松明の如く炎をまとった魔法の剣を、リムレオンはオーガートリスに向かって構え直した。

もう1体の魔獣人間グールトレントとは、ブレン兵長が対峙している。

成り行きのシェファが、ゴルジと向かい合う形となった。

「猪口才な小娘がああ……ッッ！」

ゴルジの全身でローブがちぎれ、その下から甲殻がメキメキッと盛り上がって来る。仮面が割れ、牙を剥いた頭蓋骨が露わとなる。

眼窩の奥で炯々と光を燃やす、巨大な人型の甲虫。そんな奇怪な正体を現しながら、ゴルジが叫ぶ。

「刃向かうと言うのだな！ 人間という種族そのものを救わねばならぬ、この私に！ それは結果として、あの凶猛なる赤き魔物に味方し、災禍の片棒を担ぐ事となるのだぞ！ それがわからぬ愚か者どもがあああああああ！」

「お前の味方をして、おぞましい研究やら実験やらの片棒を担ぐよりはましだ……そろそろ黙れ、ゴルジ・バルカウス」

言いながらもリムレオンは、赤き魔物とやらが何者なのか、気にならない事もなかった。

が、それを友好的に聞き出してみようという気には、やはりならなかった。

## 第28話 決別

人間が修行や鍛錬で身に付ける事の出来る力には、限界がある。

魔獣人間と戦う度に、ブレン・バイアスはそう思わざるを得ない。もちろんブレン自身、限界と呼べるような領域にはまだ達していない。35歳である。鍛え続ければ、まだ多少は強くなれるだろう。

だが人間、いくら努力して身体を鍛えたところで、人間をやめる事など出来はしない。人を石像に変える能力など身に付かない。目からおかしな光を出せるようにもならない。炎も吐けない。指を鞭のように伸ばせるようになど、なりはしない。

こんなふうに戦斧で頭をぶん殴っても死なない肉体など、絶対に手に入らない。

「うぐう……っ」

昨日まではマルズという名の無能な隊長だった魔獣人間グールトレントが、微かな木片と腐肉の飛沫を散らせながら、よろめいている。脳天に思いきり戦斧を喰らわせてやったと言うのに、よろめかせる事しか出来ていないのだ。

右半身が人型の樹木、左半身が腐乱死体。そんな姿の魔獣人間が、よろめきながらも倒れず、ブレンの方に向き直り、左手を振り上げる。腐肉から指の骨が露出してカギ爪のようになった左手。

それが襲いかかって来るよりも早く、ブレンは戦斧を振り下ろした。人間ならば確実に殺している手応えが、強烈に返って来た。

腐った肉片と木屑を飛び散らせ、グールトレントが半ば吹っ飛ばすように後退し、距離を開きつつ右手を振るう。

「きっ……さま……だけは殺すうう！」

木の根のような五指が、蛇の如く一斉に伸びる。

いや、伸びかけたところでブレンは踏み込み、戦斧を叩き込んだ。腐肉と木片がグシャアッと大量に飛散する。

グールトレントがようやく倒れ、だがすぐに起き上がって来る。

憎悪の呻きを発しながらだ。

「殺す、クロス……貴様だけはああ……」

「俺1人で済ませてくれる、わけでもあるまいが」

ブレンは苦笑した。

「その力、もう少しマシな事に使えば良いものを……殺す事しか考えられなくなるのが、魔獣人間か」

もう1体の魔獣人間オーガートリスには、魔法の鎧を着たリムレオンが斬り掛かっている。

炎に包まれた魔法の剣が、轟音を立てて振り下ろされ、しかし空振りをした。ひらりと最低限の動きでかわしたオーガートリスが、間髪入れずに鉄球を振り上げる。

白い魔法の鎧が、激しく火花を散らせた。直撃。だが当たった瞬間にリムレオンが自ら後ろに跳んで衝撃を最小にとどめたのが、ブレンにはわかった。傍目には、まともに鉄球を喰らって吹っ飛んだようにしか見えないが。

倒れたリムレオンが、しかし倒れながらも地面を転がり、鉄球の第2撃を回避しつつ起き上がる。

リムレオンを仕留め損ねた鉄球が、深々と地中にめり込んだ。それを引き抜きながら、オーガートリスが驚き呆れている。

「あんた……ぶちのめされて倒れるのが、めっちゃくちゃ上手いな」  
当然だ、とブレンは思った。

敵の攻撃を、まず喰らわないのが理想なのだが、喰らってしまったとしても衝撃をまともには受けない事。そのための身ごなし、何としても庇うべき急所、受け身の取り方。

それらを、この若君には徹底的に叩き込んである。

リムレオンの次の課題は、自身の攻撃をまともに敵に命中させる事、であろう。

一方、シェファはどうか。

「はあっ！」

元気なかけ声と共に、小さな雷鳴が轟く。

魔石の杖が、電光を帯びつつ横薙ぎに振るわれ、ゴルジ・バルカウスの巨体を打ち据えたところだった。

人型甲虫の巨大な身体が、打撃と電撃を同時に叩き込まれて揺らぎ、感電する。

「ぐっ！ こ、小娘が！」

バリバリと電光に絡み付かれながらも、ゴルジが反撃をした。長剣の如き5本の爪を生やした手が、右、左と続けざまにシェファを襲う。

ほっそりと華奢な青い甲冑姿が、くるくると舞うような回避をしながら、魔石の杖を振るった。

ゴルジの両手が空振りをする、と同時に電撃の杖が一閃し、巨大な人型の甲虫を殴打する。

絡み付く電撃光にバチバチッと灼かれながら、ゴルジは苦しげに後方へとよろめいた。

いきなり大規模な攻撃魔法を叩き込もうとして失敗した昨日の戦いを、シェファはきちんと教訓にしているようであった。小刻みな攻撃で敵を徐々に弱らせる戦い方が、出来るようになっていく。実戦で学んでゆく事が、この少女には出来るようだ。

べた……つと這いずるような足音が聞こえた。それも複数。

とてつもなく嫌な気配を、ブレンは先程から感じてはいた。覚えのある気配である。

出来れば2度と見たくはなかった者たちが、立ったまま這いずるような足取りで、いつの間にか姿を現していた。

「おおあ……あうあう……」

「い……たあい……あついよおう……」

「さむい……よう……」

どうにか人型と言える、肉塊あるいは臓物の塊。それらが、角やカギ爪や触手を振り立てうねらせながら、部隊を成している。

「残骸兵士……！」

オーガートリスの鉄球をかわしながら、リムレオンが息を呑み、

呻く。

「ゴルジ・バルカウス……！ お前はまだ……！」

「使うとも。失敗作とは言え、こやつらもまた人間の可能性を追及した結果の1つ、粗略には扱わん。大切に……使い捨ててやるとも」

「ゴルジ……！」

静かに怒り狂うリムレオンを、オーガートリスの鉄球が襲う。

ブウンッ！ と重々しく唸る一撃を、リムレオンは辛うじてかわした。かわすのが精一杯で、ゴルジに怒りをぶつける事は出来ずにいる。

その間、残骸兵士たちは、戦ってはいない者たちへと歩み迫って行く。エミリイ・レアを中心に身を寄せ合いながら怯えている、村人たちへと向かって。

「おとうう……ちゃああん……オイラだよおう……」

「お……おおエミリイ……帰って来たのかああ……」

「あなた……私よ……私はここよ……」

口々に悲痛な声を発しながら、残骸兵士たちが突然、炎に包まれた。

シェファが、魔石の杖を振るっていた。

少女の全身で、魔法の鎧に埋め込まれた幾つもの魔石が、赤い光を発している。

それと共に炎が発生し、渦巻いて奔り、残骸兵士たちを片っ端から呑み込んでいた。

荒れ狂う炎の渦の中、元々は人間であった者たちが、焦げ崩れて灰と化する。

シェファが、面頬の内側でどのような表情をしているのかは、わからない。

確かな事は1つ。残骸兵士たちに魔力と意識を向けた、それがゴルジに対する隙となってしまったという事だ。

長剣のような両手の爪を振り立てて、ゴルジがシェファを襲う。

そして、吹っ飛んだ。

甲虫に似た巨体が、必殺の爪をシェファに叩き付ける寸前で、目に見えぬ壁にでも激突したかのように後方へと勢い激しく倒れたのだ。

その鳩尾の辺りに、白い、大型の槍のようなものが、外骨格を破って深々と突き刺さっている。

氷だった。槍の形に固まった巨大な氷塊が、ゴルジの胴体を貫通しているのだ。

「が……ぐ……っ」

悲鳴を上げるのもままならぬ様子で、ゴルジが弱々しく巨体を蠢かせる。突き刺さった氷の槍の周囲で、ひび割れた甲殻がパキパキ……ッと白く凍り付きながら、さらに亀裂を走らせてゆく。

シェファの攻撃魔法、ではないようだった。魔石の杖を中途半端に構えたまま、彼女は立ちすくんでいる。目の前で何が起こったのか、わからずにいる様子だ。

男が1人、村の広場に歩み入って来たところだった。

「貴方が本当に、私の知るゴルジ・バルカウスと同一人物であるとしたら……もうすでに、生きていてはならない年齢のはずだ」

灰色のローブを着た、細身の中年男。穏和そうな顔立ちは、しかしどこか一癖ありそうで、今は緊迫した戦意を漲らせている。

「老いさらばえるよりも醜い生き様を晒しながら、何を企む？」

「ぞ……ゾルカ・ジェンキム……」

ビキッ、ビキビキッと白く凍り、ひび割れてゆく身体で、ゴルジは辛うじて立ち上がった。

「貴様……竜退治の英雄、の1人ともあろう者が……赤き竜の再来とも言ふべきこの事態を迎えながら何故、私に敵対する？ 私に味方して人間を救おうとは、思わぬのか……！」

「魔獣人間を大量生産して彼に戦いを挑もう、などと考えているのなら愚か過ぎる。やめた方がいいな」

ゾルカ・ジェンキム。ダルーハ・ケスナーの、旅の仲間の1人。

不覚にも石像と化してしまったブレンを、助けてくれた人物。彼が、穏やかに苦笑している。

「考えてもみたまえゴルジ殿。彼はダルーハ・ケスナーを倒しているのだよ？ 竜の血を浴びた、竜殺しの英雄をね」

ブレンは身震いをした。いくらか肌寒い。

だが魔獣人間たちは、寒いどころではない目に遭っていた。

「こ……これは……」

「う……ぐ……ひい……っ」

オーガートリスもグルトレントも、それぞれリムレオン・ブレンの眼前で、全身にうつすら白いものをまといながら硬直している。霜、である。

その霜がビキビキッ！ と急速に厚みを増して氷となり、魔獣人間2体の動きを封じてゆく。

「……凄まじいものだな、本物の魔術師とは」

ブレンが声をかけると、ゾルカ・ジェンキムは微笑を返してきた。「貴殿こそ。生身で魔獣人間と渡り合える戦士など、ダルーハやドルネオくらいしかない私は思っていた……ブレン・バイアス兵長殿でしたな。お見事なものです」

「あのお二方と並べていただけるとは、光栄だ」

ダルーハ・ケスナー。ドルネオ・ゲヴィン。ゾルカ・ジェンキム。ケリス・ウェブナー。メイフェム・グリム。

赤き竜と戦い続けたがために王家からも民衆からも迫害され、居場所を失っていた、この5人の英雄を、当時のメルクト領主レミオル・エルベツト侯爵が自城へと迎え入れかくまっていた頃。ブレンはまだ見習いの少年兵士でしかなく、こんなふうに対等な口をきく事など出来なかったものだ。

「いっつぞやは……無様にも石ころに変えられてしまっていたところを助けていただき、かたじけなく」

「魔獣人間には、あのような能力を持つ者が少なくありませんからな。素手で掴み合うような戦いは、出来る限りは避けられた方がよ



ろしい」

語りながら、ゾルカが片手を掲げた。

冷たい風が吹いた。

冷気が、空中の何カ所かで凝集し、白く固体化してゆく。

やがて氷の槍が何本も、ゾルカの周囲に生じて浮かんだ。

「赤き竜に対しては全く無力であった、我が魔法……だが中途半端に人間をやめた者たちを、粉碎するくらいの事は出来るぞ」

ゾルカの声に、力がこもる。

氷の槍たちが、一斉に飛んだ。

白く固まり、ひび割れ、今や碎ける寸前のゴルジ。氷に閉じ込められつつある、2匹の魔獣人間。

計3体の人ならざる者たちに、槍状の氷塊が何本も、雨の如く降り注ぐ。

そして碎け散った。氷の槍だけが、である。

「む……」

ゾルカが、ほんの少しだけ驚きを見せた。

淡い光が、凍死寸前のゴルジを、氷像と化しつつある魔獣人間2体を、包み込んでいた。

「邪魔をしないでよ、ゾルカ……」

若い女の声。柔らかな足音と、気配。

エミリイと同じく唯一神教の法衣に包まれた、優美な姿が、そこに現れていた。

「……………メイフェム・グリム……?」

ブレンは思わず名を呟き、そんなはずはない、と思い直した。

メイフェム・グリムは、少なくともブレンより3つか4つは年上のはずである。

だが今、視界の中央にあるのは、19年前と同じ、若く瑞々しく力に溢れたメイフェム・グリムの姿だった。

「貴方ね。ゴルジ殿の言っていた、生身で魔獣人間と戦える勇者と  
いうのは」

メイフェムが微笑み、軽く首を傾げた。その仕草から、ぞっとするほど冷たい色香がこぼれ出す。

「……どこかで会ったのかしら？」

「覚えてはおるまいな。俺はあの頃、とにかくダルーハ卿が恐ろしくて、あんた方を物陰から見ているのが精一杯だった」

ブレンは呻いた。

「だが、あんたは……貴女は、本当に……？」

「メイフェム・グリムだよ。間違いはない」

疑問に答えてくれたのは、ゾルカである。

「……少し無理のある若作りを、しているだけさ」

「貴女は……」

怯える村人たちを庇うように立ちながら、エミリイが声を発した。

「もしかして……アゼル派の方、ですか……？」

「見ただけでわかるものねえ、ローエン派のお嬢さん」

人間ではない者たちを包んでいた光が、メイフェムの言葉に合わせて薄れ、消えてゆく。

ゴルジが、それに魔獣人間2体が、無傷の姿を現していた。

凍り付いていない、ひび割れてもいない、刺さっていた氷の槍も消え失せて穴も残っていない、完全に元通りとなった巨体を誇示しつつ、ゴルジが笑う。

「見よ、大いなる癒しの力を……今やアゼル派こそが本物の唯一神教よ。世俗の権力と結びつき腐敗の道を歩み始めた、ローエン派の者どもとは違う。真の聖女が、我らに味方をしてくれているのだ」

魔獣人間2匹の身体からも、氷が全て碎け落ちていた。

解放された2つの異形が、リムレオンに、ブレンに迫る。

「ふん……このクソつたれ魔女に助けられちまうとはな」

オーガートリスの鉄球が、豪快に空振りをする。リムレオンが身を屈め、かわしていた。

「ふ……ひひひひ、みみ見たか俺は無敵なのだァーッ！」

グールトレントが、ゾルカの凍結魔法を自力で破ったかのように

威張りつつ、右手の五指を伸ばそうとする。

伸びて来るよりも早く、ブレンは駆け出し、踏み込み、戦斧を叩き付けていた。

細かな腐肉と木片を飛び散らせ、グールトレントが後方によるめく。

ブレンは舌打ちをした。やはり自分の力では、魔獣人間を絶命させるところまではいかない。絶命するまで、ひたすら地道に殴り続けるしかないのか。

「きゃ……っ」

微かな、息の詰まったような悲鳴が聞こえた。

振り向いたブレンの目に映ったのは、宙に浮いたエミリーの姿だった。その身体が、法衣もろともギリギリッ……と締め上げられている。地面から生えて蛇の如く伸びた、何本もの木の根によってだ。

「馬鹿な……！」

ブレンはグールトレントの方に、ぎろりと視線を戻した。

魔獣人間の、人型の樹木とも言うべき形状の右半身。その足の部分から、何本かの木の根が生え、地面に突き刺さっている。

「動くな……武器を捨てろお……」

腐乱死体の左反面をニヤリと醜くねじ曲げながら、グールトレントが言う。

「さもなくば、この小娘の首をへし折る……ふ、ぐふへへへ尻から口まで抉り貫いてやっても良い……」

何本もの根が、エミリーの全身をなおも容赦なく縛り締め付ける。うち1本は、少女の細い首に巻き付いていた。

「……………ッッ！」

悲鳴を上げる、どころか呼吸も出来ず、エミリーは表情を歪めた。愛らしい顔立ちが、恐怖と苦悶で痛々しくねじ曲がる。

そんな少女の、たおやかな両脚を縛り束ねていた根の1本が、法衣の裾の内側へと嫌らしく忍び込んで行く。

「ぐふ、ふへへへ尻から口までえ」

「やめろ……！」

ブレンは言われた通り、戦斧を放り捨てた。そうするしかなかった。

途端、熱い激痛が体内に打ち込まれて来た。胸と腹から入り込んで、臓物に達した。

グールトレントの右手から伸びた木の根が5本、ブレンの胴体に突き刺さっていた。分厚い胸板を、強固な腹筋を、穿ち貫いていた。「ぐ………ッッ！」

ブレンは悲鳴を呑み込み、その代わりに血を吐いた。

木の根の先端が5つ、体内で蠢いて臓物を抉っているのが、感触としてわかる。

「苦しいか……ふ、ふへへひひひ苦しいかあ？ 悲鳴を解放すれば少しは楽になる、そおーら泣き喚けえええええええ」

グールトレントの狂喜の叫びに合わせて、木の根が5本、ブレンの体内で暴れた。

（若君……！）

肺が引き裂かれるのを感じながら、ブレンは念じた。

（おさらばで、ごさいます……どうか、お強くなれませ……）

視界が暗転する寸前、ブレンは見た。狂喜していた魔獣人間が突然、粉々に砕け散った様を。

死に際の幻覚、ではない。腐乱死体の左半身と木製の右半身が、一まともにグシャアッ！ と叩き潰され、飛び散ったのだ。

折れた木の根を5本、胸板と腹に突き刺したまま、ブレンは仰向けに倒れた。

エミリイが、尻餅をついている。村人たちが慌てて駆け寄り、少女の身体から、折れて萎びた木の根を引き剥がす。

何かが宙を舞っていた。腐肉と木屑をこびりつかせた、鉄球である。それをゆったりと振るいながら、

「ゴミクズがっ……！」

魔獣人間オーガートリスが、吐き捨てている。

「こういうクソゴミ野郎に、人を殺せる力を持たせちゃう……そんなやり方で世界を救える気になってるんだから本当おめでたいよゴルジ殿、あんたって人は」

「貴様……！」

シェファの振るう電光の杖を、巨体に似合わぬ動きで回避しながら、ゴルジが怒りを見せる。

怯む様子もなく、オーガートリスは言い放った。

「おめでたい奴らのイカれたお遊びに……これ以上この村を巻き込むのは本当にやめてもらうぜ？　クソゴミ野郎の分まで、俺が戦ってやるからよ」

（魔獣人間の手から……魔獣人間によって、助けられるとはな……）  
思いかけて、ブレンは苦笑した。オーガートリスは別に、自分を助けてくれたわけではない。

この魔獣人間が仲間割れをしてまで救った少女が、ブレンの傍らに膝をついた。

「あ……あたしの、せいで……」

泣き声と同時に、微かな痛みが、ブレンの体内で疼いた。

抉られ、掻き回され引き裂かれた内臓が、動いている。疼くようなその痛みが、急激に高まっていった。

「うぐっ……！」

悲鳴を嘔み殺しながらブレンは、薄れつつあった意識が激痛によって覚醒してゆくのを感じた。

己の身に何が起こっているのかもわかった。昨日はシェファが、これと同じ目に遭っていた。

「本当、ごめんなさい……あたしの力じゃ、少しずつしか治せなくて……」

泣き謝りながらエミリイが、ブレンの胸板に優しく片手を触れている。

ちぎれた臓物が、体内でグジュグジュと蠢きながら繋がり、修復されてゆく。内側から塞がりつつある傷口が、刺さっていた木の根

を5本とも、体外へと押し出す。エミリイの言う通り、本当に少しずつだ。

口を開いた途端、礼の言葉よりも先に悲鳴が出てしまいそうなので、ブレンは歯を食いしばったまま微笑んで見せた。

自分の凶悪な顔が、上手く笑顔になったかどうかは、わからなかった。

「俺の仲間、なわけはないが……ま、あんた方から見りゃ仲間みたいなもんだよな」

エミリイを助けるついで、とは言えブレン兵長を助けてくれた魔獣人間が、鉄球をジャラツと構え直しながら言う。

「とにかく、そいつが見苦しい真似をした。ま、死んじまったんだから許してやってくれ」

「君は……」

炎をまとった魔法の剣を同じく構え直し、だが斬り掛かりはせず、リムレオンは言った。

「この村を、救いたいんだろう……それなら僕たちと」

「協力して戦おう、なんて言わないよなあ若君様」

オーガートリスの左手がシュツと高速で動く。投擲。

飛来した何本かの羽を、リムレオンは炎の剣で薙ぎ払った。白い羽が、黒く焦げ崩れた。

その灰を蹴散らすようにブウンッ！ と鉄球が襲い来る。

魔法の鎧から火花を散らせ、リムレオンは倒れた。直撃の瞬間、自ら後ろへ倒れ込んだのだ。それで鉄球の衝撃を半分以上は殺せたが、それでも全身が痺れた。

痺れに耐え、リムレオンは起き上がった。即座に横へ跳んだ。鉄球が、魔法の鎧をかすめた。

その鉄球が鎖で引き戻されて行く間に、リムレオンは踏み込んでいた。炎をまとう魔法の剣を、魔獣人間に向かって一閃させる。

一閃した炎の刃が、オーガートリスの引き伸ばした鎖に激突した。震える鎖と、炎上する刀身。ぶつかり擦れ合うそれらを挟んで、リムレオンとオーガートリスが睨み合う。

「聞いたよ……あんだ、くそ魔女のメイフェム・グリムと1度戦ったんだってなあ」

嘲笑うように牙を剥き、魔獣人間が言う。

「……何にも出来ないでボッコボコにぶちのめされたって話じゃないか、ええおい？」

「……………」

面頬の内側で、リムレオンは唇を噛んだ。

確かに、何も出来なかった。メイフェムには、まるで足元のゴミのように蹴り転がされたものだ。

「それでわかっただろう、あの女は頭がおかしいだけじゃない……正真正銘の、化け物だ。俺とあんたらが手を組んだくらいで、勝てる相手じゃないんだよ」

「聞こえよがしに言うものねえ、アサド君」

メイフェムが笑った。

彼女と対峙しつつ、ゾルカも言う。

「要するに、私が彼女を仕留めて見せれば何の問題もなくなるわけだな？ アサド殿とやら」

「仕留める……ゾルカが、私を？」

メイフェムの微笑が、にやあ……つと歪みを増した。

「……結局、戦わなければならぬの？ 貴方と私は」

「私の役目だ」

ゾルカの周囲、何か所かで、空気が白く固まった。氷の槍が生じていた。

「ダルーハもドルネオも止められなかった私だが……君だけは、ここで止めてみせる」

「そう……ダルーハがいて、ドルネオがいて。貴方やケリスがいて」  
無邪気な美少女のように、メイフェムは笑っている。

「本当に楽しかったわ、あの頃は。人間は守るべき美しいものだと、心の底から信じていられた……」

魔獣人間と得物を押し付け合ったまま、リムレオンはぞっとした。これほど邪悪で、それでいて純真無垢な笑顔を、見た事がなかった。「潔癖なのだな、君もダルーハも……人間に美しいものを期待し過ぎるから、こういう事になるっ」

ゾルカの声に、気合いが宿る。

浮揚していた幾本もの氷の槍が、メイフェムに向かって一斉に飛んだ。

かわしもせず、メイフェムが何かを念じた。

氷の槍が全て、彼女の身体に触れる寸前で、粉々に砕け散った。

癒しの力と同じく、唯一神の加護の具現化とも言うべき、不可視の防壁。

魔道に堕ちた尼僧に、しかし唯一神が見離しもせずに力を貸しているという事なのか。

「仕留める……だと、あの魔女を……！」

オーガートリスが牙を噛み合わせ、怒り呻く。その右足が、跳ね上がった。

「そんな事……出来るもんなら俺がとっくにやっている！」

怒声と共に襲い来る蹴りを、リムレオンは後ろに跳んでかわした。着地し、炎の剣を構え、斬り掛かろうとするリムレオンの身体に、ベタベタッ……と何かが貼り付いて来た。

「助けて……痛い……あつうい……」

「来てよ……誰だか知らないけどお、僕らと一緒においでよお……」

2体の残骸兵士。リムレオンに左右からしがみつき、魔法の鎧に何本もの触手を貼り付けている。

「まだ残ってた……!？」

ゴルジの爪を危うくかわしながら、シェファがこちらを向こうとしている。彼女の全身で、いくつもの魔石が光を発しつつある。



自分はまた、シエファに汚れ役を押し付けてしまうのか。

「……駄目だ！」

リムレオンは叫んでいた。

鎖鉄球を振るおうとしていたオーガートリスが、いくらか怯んだように動きを止める。

左右の残骸兵士を、リムレオンは思いきり振り払った。魔法の鎧に貼り付いた触手がちぎれ、痛ましいほど醜悪な2つの肉体が弱々しくよろめく。

哀れ、という言葉すら空々しくなってしまう、この生き物たちに対し、するべき事は1つしかない。

それは、リムレオン自身が行うべき事だ。

自分に出来なくとも、もう1人の自分なら、やってくれる。魔法の鎧の力に溺れていい気になっている、もう1人のリムレオン・エルベツトなら。どれほど痛ましい生き物であろうと、ためらいなく片付けてくれる。自分はそれを、面頬の内側から見ていれればいい……

「違う！」

叫びながらリムレオンは、炎の剣を振るった。

横薙ぎに一直線。燃え盛る斬撃の弧が、2体の残骸兵士を薙ぎ払う。

魔獣人間を叩き斬った時と比べて、あまりにも弱々しい手応えを、リムレオンはしっかりと握り締めた。

「戦っているのは、僕だ……殺戮をしているのは、この僕なんだ……」

残骸兵士が2体、リムレオンの左右で、ほぼ真っ二つになりながら炎に包まれ、焦げて崩れて灰となり漂う。

魔法の鎧にまわりつく遺灰を振り払わず、リムレオンは炎の剣を構え直し、言い放った。

「もう1人の僕なんて、いないんだ……！」

## 第29話 狂人たち

「うおおおッ！」

獣じみた気合いと共に、炎の剣が一閃する。

こんな声を出すような若君ではなかった。リムレオンの心が、荒んできている。

（無理するから……っ）

魔法の鎧の面頬の内側で、シェファは唇を噛んだ。

残骸兵士の虐殺など、自分に任せておけば良いものを。女の子に汚れ役を押し付けるわけにはいかない、などとリムレオンは考えたのだろう。

魔獣人間オーガートリスの身体が、炎に包まれた。リムレオンの斬撃を、完全にはかわせなかったようである。一見すると派手に燃えているが、よく見ると全身の白い羽毛がいくらか焼けたただけだ。

黒焦げになった羽が、魔獣人間の巨体から剥がれ落ち、だがすぐに新しい羽が生え変わって来る。無限に引きちぎって投げつけるための武器であろうから、この程度の再生力は持たされていて当然ではある。

そんな能力を魔獣人間に与えた張本人が、

「ぬう……やはり残骸兵士では駄目か。足止めの役にも立たぬかった」  
長剣のような5本の爪をシェファに向かって振るいながら、何やら憤っている。

「あの赤き魔物に対する戦力とは成り得ぬか……となれば、やはりその魔法の鎧をいただく！ 中身を潰してなあ！」

左、右と襲い来るゴルジの両手をかわしながら、シェファは思う。この男が言っている事を理解しようという気には、やはりなれない。が1つだけ、わかってしまった事がある。

このゴルジという男は、どうやら本当に心の底から、人間という種族そのものを守ろうとしている。救おうとしている。そんな事が

出来ると、本気で信じている。

「微笑ましい……って言うか、痛々しいって言うか」

兜と面頬の中で、シェファは嘲笑った。笑ったつもりだが、怒りで声が震えた。

「……あんたの、そんな救世主気取りのせいで……リム様は……っ！」

（バケモノ相手の戦いなんか、する羽目に……！）

その叫び声を、シェファは噛み殺した。自分はリムレオンのために戦っているなどと、大声で叫ぶ事ではなかった。

「だから彼と戦うなど、やめておけと言っているのだゴルジ殿」

この場での恐らく1番の強敵・メイフェム・グリムと睨み合いつつ、ゾルカ・ジェンキムが言う。

「魔獣人間の軍勢であろうと、魔法の鎧を着た精鋭兵士の一団であろうと……あるいは魔獣人間に魔法の鎧を着せたところで、あの若者には勝てはしないよ。彼は、そっとしておくしかないのだ。怒らせぬよう気をつけて、な」

「ふん、怪物の機嫌を取って平穏を保とうと言うのか」

牙を剥いた頭蓋骨そのものの顔で、ゴルジは嘲笑した。

「王女を人身御供としていた頃から、貴様らヴァスケリア人は全く変わってはおらぬようだな。赤き竜と戦っていながら理解出来ぬかゾルカ・ジェンキム……魔物や怪物の類はな、滅ぼさねばならんだよ。さもなくば人間が奴らに滅ぼされる」

「ならまずアンタが滅んじやいなさいよっ！」

語りに夢中になり始めたゴルジの顔面に、シェファは思いきり魔石の杖を叩き込んだ。バリバリと電光をまとう杖が、甲殻の頭蓋骨を激しく殴打する。

ゴルジの巨体が、感電・帯電しながら後方へと揺らいだ。

電光の杖をブンツと回転させつつ、シェファはなおも踏み込んで行く。

この男さえ滅びれば。そもそも最初から存在しなければ。いや、

存在するくらいならば良い。魔獣人間や残骸兵士などを使って、くだらない事をやり始めなければ。

リムレオンは、可愛くて優しいだけを取り柄の若君として、平穩無事に暮らしていられたのだ。

その平穩な暮らしの中には、シェファもいる。

無論ずつとではないだろう。リムレオンは領主令息。いずれはどこかの姫君を娶って、シェファになど見向きもしてくれなくなる。貴族とはそういうものだ。結婚すら、政治の一部なのである。

リムレオンも17歳。そういった縁談が、いつ持ち上がったもおかしくはない。

それまでは、彼の傍にいる。リムレオンと一緒に、平穩な日々を楽しく過ごす。そのくらいは、身分の低い攻撃魔法兵士の少女にも許されていいはずだ。

なのに、それを邪魔する輩がいる。メルクトの領民を脅かし、リムレオンとシェファの平穩な日々を乱す者どもが。

サン・ローデル領主バウルフアー・ゲドン侯爵と、形としてはその手下である2名の怪物。

その片方が、喚きながら襲いかかって来る。

「小娘、貴様は！ 魔法の鎧という力を持ちながら一体何のために戦っている！」

長剣のような5本の爪が、凶暴な勢いで振り下ろされる。

軽く跳んでかわしたシェファを、ゴルジが叫びながら追う。

「いや答えずとも良い、どうせ私情であろう！ 小娘らしい身勝手な私的感情と欲望！ 私はな、人間という種族そのものを守らねばならんだぞ！ 救わねばならんだぞ！ そのために恐ろしい敵と戦わねばならぬ私を、私欲まみれの小娘ごときが邪魔をする！ これを許しておけると思つかああああ！」

「……見てわかったろうメイフェム。いや、君ならすでにわかっているはずだ。ゴルジ・バルカウスが、単なる狂人に過ぎないという事が」

何本もの氷の槍を周囲に浮かべながら、ゾルカが言う。

「このような狂人と手を組んで、君は……一体、何をしようとしている？」

問いかけに合わせて、氷の槍たちが一斉に飛び、メイフェムに降り注ぐ。

「私は確かめただけよ、ゾルカ……」

答えながら、メイフェムは舞った。そのようにしか、シェファには見えなかった。

もはや嫉妬する気にもなれぬほど美しい脚が、法衣の裾を割って荒々しくあられもなく跳ね上がり、氷の槍をことごとく蹴り碎いたのだ。

「人間という生き物を、試したいだけ……知りたいのよ、私は」

氷の破片が舞い散る中、凹凸の見事な尼僧の肢体が、踊るような回転を止めずに左右の細腕を振るう。

「ケリスが一体、何を守るために死んだのか……19年経っても私、全然わからないのよね」

メイフェムの両手は、優雅に舞いながらも微かな光を帯びている。

先程の不可視の防壁と、同質の力。唯一神の力の発現だ。

「ゴルジ・バルカウスと行動を共にすれば、それがわかるとでも言うのか……」

呻くように、ゾルカが問う。

「魔獣人間による戦乱……そんなものを起こさなければ、わからないのか。ケリスが命を捨てて守りたかったものを、君は」

「わかるわけがないでしょう？ 赤き竜が死んで平和になったと言うのに、人間たちは……私に、汚いものしか見せてはくれない……」

光が、メイフェムの両手から放たれた。発射された。

球形の、光の塊。それが2つ、氷の槍の返礼といった形に飛んで、ゾルカを襲う。

そして爆発した。ゾルカに命中する寸前で、何か目に見えぬ壁か楯のようなものに激突したのだ。

魔力の防壁。

それを眼前に発生させたまま、ゾルカが後退りをする。

追うようにユラリと前進しながら、メイフェムはなおも言った。

「教えてよゾルカ。汚いものを守るために、ケリスは死んだの？」

……なあって訊いたところで貴方は教えてくれないでしょうから私が試しているの。少なくとも赤き竜の時と同じくらいの混乱と災いを引き起こして、人間どもを追い込んでみるのよ。今それが出来そうなのはゴルジ殿くらいだから」

ゾルカにさらなる攻撃を、すぐには加えようとせず、メイフェムは微笑みかけた。

まだ起き上がれぬブレン兵長に癒しの力を施しているエミリィ・レアと、彼女を中心に身を寄せ合って怯えている村人たちに。

「あの頃の人間たちは本当に、汚いものしか見せてはくれなかったわ……でも貴方たちは大丈夫よね？　これからどんな混乱や災いが起こっても、強く心清らかでいられるわよね？」

メイフェムの美貌が、にっこりと禍々しくねじ曲がる。

「ケリスが命を捨てて守った貴方たちだもの……清らかで綺麗なものを、私に見せてくれるのよね？」

「頭のおかしいバケモノばかり……！」

ゴルジの爪をかわしながら、シェファは罵った。

「こんな奴らのせいで、リム様は戦わなきゃいけない……あんなたちみたいないカレぽんちのせいで！」

魔石の杖が、ひとときわ激しくバリバリバリッ！　と電光をまとい、棒状の稲妻と化す。

それをシェファは、ゴルジの身体に思いきり叩き付けた。

「うぬっ……！」

人型甲虫の巨体がよろめき、細かな外骨格の破片を飛び散らせる。ゴルジの全身で甲殻がひび割れており、その亀裂からしぶいて溢れ出す体液が、電熱に灼かれて異臭を発した。

が、この怪物の動きそのものは全く衰えていない。

「私情私欲でしか戦えぬ小娘が！」

怒りと憎悪を宿し振り下ろされる5本爪を、シェファは上空へと跳んでかわした。

ブンッ！ と激しく空振りをするゴルジの手。その風圧に煽られるかの如く、少女の細身が空中を舞い、しなやかに宙返りをする。

着地と同時に、シェファの背中が何かにぶつかった。

魔獣人間の鉄球を、同じく後方へと跳んでかわした、リムレオンの背中だった。

「シェファ……」

「リム様……」

背中合わせの体勢で各々、炎の剣と雷の杖を構える少年少女に、オーガートリスとゴルジが迫る。

頭上で鎖鉄球を振り回しながら、オーガートリスは無言だ。

両手の爪をジャキツと威嚇的に鳴らしながら、ゴルジは相変わらず喚いている。

「私情でしか戦えぬ小僧小娘！ 貴様らに力を持つ資格はない、魔法の鎧は我らがもらい受けるゆえ潰れて死ね！」

もはや会話の相手をしてやる気にもならずシェファは、背中合わせのまま、リムレオンに声をかけた。

「頭のおかしい奴しかない、こんな戦い……早く終わらせてメルクトへ帰ろう？ リム様」

「……そうだね」

答えながら、リムレオンが踏み出す。

背中が弾け合ったかのようにシェファも駆け出し、そして跳躍した。ゴルジの巨大な手が、足元を横殴りに通過して行く。

その回避と同時にシェファは、魔石の杖を空中から突き込んでいた。ゴルジの口の中へ、である。

電撃を発し続ける魔石が、甲殻の頭蓋骨の上顎と下顎を容赦なく押し開き、ねじ込まれる。

「アッ……が……っ」

「あんたの話、ちょっとだけ笑えた……けど、そろそろ黙ろっか」  
シェファは杖にしがみついたまま、全身を捻った。

電撃の杖がさらにグリッ……とゴルジの口中へ、体内へと抉り込まれる。

甲殻のひび割れた巨体が、悲鳴を押し潰されたまま苦しげに反り返った。口に突き刺さった魔石の杖が垂直に立ち、それにしがみついたシェファの身体が、細い両足の爪先を天空に向ける。

倒立状態のまま、シェファは魔力を絞り込んだ。杖の先端、今はゴルジの喉を塞いでいる魔石へと向かって。

その魔石からドギョルルッ……と力が奔り出し、怪物の体内に流し込まれるのを、シェファは杖からの振動で感じた。

人型甲虫の巨体が、硬直した。その全身を走る亀裂から、赤い光が溢れ出す。

炎、と言うより高熱そのもの。赤熱する輝きによって、亀裂が押し広げられてゆく。

もはや声も出せぬ状態のゴルジが、音にならぬ断末魔の絶叫を張り上げながら、破裂した。

溢れ出した赤色光が、飛散した肉を、ちぎれ飛んだ臓物を、砕け散った甲殻を、灼き尽して灰に変える。

赤い、光の爆発が起こっていた。

それを避けるようにシェファは、空中で柔らかく身を捻り、軽やかに着地した。

その時には爆発は消え、ゴルジ・バルカウスの肉体も、跡形すらなく消滅していた。

それを確認してから、シェファは後ろを向いた。

ブーンッ！ と唸りを発する鉄球をかわしながらリムレオンが、魔獣人間にぶつかって行ったところである。

空振りをした鉄球が、落下して地面にめり込んだ。

燃え盛る炎の剣が、オーガートリスの左胸に突き刺さり、背中へと抜けていた。



手足が動かない。

そもそも手足があるのかどうか、それすらもわからない。

己の肉体が今どのような状態にあるのか、レボルト・ハイマンは全く把握出来ずにいた。

目も見えない。が、耳は辛うじて聞こえる。

「む……」

ゴルジ・バルカウスが微かな声を漏らしたのを、レボルトは聞き逃さなかった。

「どうした……よもや、手元が狂ったのではあるまいな……？」

声も、どうにか出せる。

「御心配なく……私が1人、死んだだけでございます」

ゴルジは微笑んだようだ。

「いささか手元が狂った程度では揺るがぬ段階に、將軍はもはや入っておられます……貴方は最強の魔獣人間と成られますぞ、レボルト・ハイマン殿」

「そうか……ゴルジ・バルカウスの1人が、死んだのか……」

レボルトも笑ってみたが、表情と呼べるようなものが今の自分にあるのかどうかは不明である。

「……貴様は一体、何人いるのだ……？」

「数えた事はございませんが……今、動いているのは3人か4人とあったところでありましょうか。うち1人はたった今、死にました  
が」

「……大勢の貴様が、1つの目的のために動き回っているというわけだな……」

この男の目的は、人間という種族そのものを守る事である。

魔獣人間などという手段でそれが出来ると、ゴルジ・バルカウスというこの狂人は、本気で信じているのだ。

今はしかし、狂人でも何でも利用するしかない。あの赤き魔物と

戦うためには、この男の力が必要なのだ。

足音が聞こえた。

その足音の主に向かって、ゴルジが恭しく跪いたのが、気配でわかった。

レボルトも跪こうとしたが、身体が動いたのかどうかもわからない。

「……そのまま良い、レボルト将軍」

いくらか息を呑みながら、その人物は言った。

「ゴルジよ、貴様は……我が国になくってはならぬ大將軍を、切り刻んで遊んでいるわけではあるまいな」

「レボルト将軍は今、生まれ変わっておられる最中でございます」

「陛下……お見苦しい様を……」

拝跪も平伏も出来ぬ身体を、レボルトは今、主君の眼前に晒している。

バルムガルド国王、ジオノス2世。

この人物が、ゴルジの今している事に、過剰な興味を示したりしたら。魔獣人間の製造に国の金を注ぎ込もう、などという気になったりしたら。バルムガルド王国は、人間ではない者どもに乗っ取られる、その第一歩を踏み出す事となる。

そんな事態が起こる前に、やっておかねばならない事が、レボルトにはある。

「敗戦の罰は、必ずやお受けいたします……その前に陛下、私にどうか雪辱の機会を……」

「軍監より報告は受けておる。人の力では抗えぬ者が出現したのであろう？ それでレボルト将軍を罰する事など出来はせぬ。そんな事をしていて勝てる相手ではない……かの、赤き魔人は」

「陛下……よもや……」

国王の口ぶりから、レボルトはある事実を感じ取った。

「あの魔物めを、ご存じ……なので、あらせられますか……？」

「ダーハ・ケスナーを倒した怪物であろう？ あの叛乱に関して

は、私なりに情報を集めて分析している最中なのだよ」

ダルーハの叛乱に乗り、3万の軍勢でヴァスケリアを併呑する。それは失敗したものの、あの国にはまだジオノス2世の放った間者や密偵が多数、潜んでいるはずであった。情報は逐一、国王の元へ届けられるのであろう。

「レボルトよ、そなたが出会った怪物は恐らく……ダルーハの、息子だ」

「何と……」

「赤き竜の返り血を浴びて人間をやめた英雄……その血を受け継いだ、生まれながらの怪物というわけだ」

ダルーハ・ケスナーが竜の血を浴びて人間ではなくなったという話は、バルムガルドにおいては、伝説・風聞の域を出なかった。

竜の血液は、この世のあらゆるものを灼き尽くす。

それを全身に浴びて死なずに耐えた者は、竜の力を受け継ぐ魔人となり、もはや人間の手で殺す事は不可能になるという。

その魔人の息子が、あの赤き怪物であると言うのなら。まさにそれは、赤き竜の再来とも言えるべき事態ではないのか。

（そんなものを国同士の戦に介入させたら……事はバルムガルド・ヴァスケリア2国間においてだけの問題ではなくなるのだぞ……！

近隣諸国どこもかしこも、魔獣人間の類を造り始める。人間の軍事が、やがては政治が、人間ではない者どもに乗っ取られる……！）

炎にも似た思いが、レボルトの胸の内で燃え上がる。

身体のだこかがメキッ！ と震えた。

いよいよ自分は、人間ではないものに変わりつつある。それを、レボルトは感じた。

（ダルーハの息子とやら、貴様を倒せるのであれば構わん……人間ではない者に、人間の世界への介入など……させんぞ、もはや）

心臓を焼き砕いた手応えが、魔法の鎧の手甲の中まで伝わって来る。

それをしっかりと握り締めながらリムレオンは、オーガートリスの左胸から魔法の剣を引き抜いた。

その刀身から、炎が消え失せている。全て、魔獣人間の体内へと流れ込んだのだ。

「ぐっ……ち、畜生……ッ」

呻き、よろめくオーガートリス。その左胸から背中へと貫通した傷が、ブスブスと内側から焼けて黒煙を発している。

「こ……こうなった以上、あんた方に頼むしかない……こっ、この村を」

「守るさ。それは頼まれなくてもやる」  
リムレオンは断言した。

「見ての通り、ゴルジ・バルカウスはシェファが倒した。あとはメイフェム・グリムさえ倒せば、この村を脅かす者は」

「ゴルジを倒した、だと……馬鹿野郎！ あんた何にもわかつちゃいないな！」

オーガートリスが、何故か怒り出した。

左胸と背中からの傷口から、黒煙だけでなく炎が噴き出す。

怒りに呼応するかの如く燃え上がった、その炎が、魔獣人間の全身を包み込んだ。

「アサド……！」

エミリイが、呻きか叫びかよくわからぬ声を発した。

自分は彼女の眼前で、アサドを殺害した。それだけを、リムレオンは強く思った。

炎の中、オーガートリスは黒くボロボロと焦げ崩れながらも、言葉を絞り出している。

「わかれよ、少しは……自分らの戦ってる相手が、どれだけバケモノかって事……」

消えゆく命そのものを絞り出すかのような声、と共にアサドは、

「頼むぜ、本当……もう少し気合い入れて……戦って……この村、守ってくれよ……」

ゆっくりと崩壊し、灰に変わった。

「アサド君……！」

ゴルジの死にも心動かさなかったメイフェムが、微かに、だが確かに、動揺を見せた。

直後。その優美な法衣姿が、腹を抱える形にへし曲がった。抱えられた腹から背中へと、白いものが貫通している。

一瞬の隙についてゾルカが発射した、氷の槍である。

「ゾ……ルカ……ッ！」

穿たれた腹を抱えて身をよじるメイフェム。その身体がビキビキ……ッと白く固まってゆく。

氷の槍から尼僧の全身へと、霜が広がりつつあるのだ。

その霜が厚みを増して氷と化し、メイフェムの身体を白く覆い固めて包み込む。

やがて、巨大な繭のような氷塊が出現した。その中に、身を折ったメイフェムが閉じ込められている。

ゾルカが、疲労した様子で片膝をついた。

魔法の鎧を装着したまま、シェファが面頬越しに声をかける。

「……大丈夫？　ゾルカさん」

「ああ……魔力が尽きただけだ」

ゾルカは微笑んだ。どこか悲しげな苦笑だった。

かつての仲間を氷の槍で刺し殺してしまった事に、やりきれぬ思いを抱いているのか。

リムレオンは、ブレンに歩み寄った。

「兵長……大丈夫ですか？」

「お気遣いなく、エミリー殿が治して下さいましたゆえ」

ブレンが立ち上がり、微笑んだ。こちらは明るい、頼もしい笑顔だ。

「いやはや……無様を晒した私と違って、実にお見事な戦いぶりだ

ございましたぞ若君。それにシェファも。明日以降の訓練は、もう少し過酷なものにしても大丈夫でありますな」

「……本当に、もう少しで済むのなら」

曖昧に笑うリムレオンに、村人たちが声をかけてくる。

「……いやあ、よくわからんが凄いな、あんたたちは」

「本当によくわからんが、ありがとうなあ。領主んとこのバケモノどもを、やつつけてくれて」

俯いているエミリイの肩が、微かに震えた。バケモノ、という言葉葉に反応したようだ。

そのバケモノたちが……魔獣人間だけでなく残骸兵士の何体かが、かつてこの村の住人であった事を、村人たちは知らない。知らせるべきでもない。

何も知らず、村人たちはなおも言う。

「それにしてもエミリイの奴、アサドとか言っていたようだが？」

「ははは、あんなバケモノがアサドのわけないじゃないか」

「……何よ……その言い種は……」

声がした。女の声。エミリイでも、シェファでもない。

繭のような氷塊が、ひび割れていた。声は、その亀裂から流れ出ている。

「アサド君はねえ、この村を……貴方たちを守るために、戦ったのよ……人間じゃなくなってまで……それを何よ、何なのよ……ありがとうの一言もなく、そんな言い方……」

「メイフェム……!」

魔力が尽きたはずのゾルカが立ち上がり、何かしら攻撃魔法を放とうとしている。

その時には、氷の繭は碎け散っていた。

キラキラと舞う破片を蹴散らして、何かが伸び、空中を泳いだ。

超高速で宙を裂く、鞭のようなもの。蛇のようなもの。

それが、ゾルカの細い身体を貫通していた。先程のメイフェムと同じく、腹から背中へと。

そのメイフェムが、ゆらりと立ち上がっていた。翼をはためかせ、氷の破片を叩き飛ばしながら。

左右それぞれ形の異なる、一対の翼。右は黒い皮膜、左はふっさりとした羽毛。

コウモリの翼と、猛禽の翼だ。

それらがメイフェムの背中から広がり、氷の破片だけでなく、法衣も下着もちぎり飛ばしていた。

欲情するよりもまず美しさに圧倒されてしまうような神々しい裸身が、そんな異形の翼を生やし、佇んでいるのだ。

氷の槍で穿たれていたはずの身体。だがその細く美しい腹部には、傷跡すら残っていない。癒しの力を、自身に施したのだろう。

「やっぱり駄目……人間は私に、汚いものしか見せてはくれない……」

声を震わせながらメイフェムは、左手を前方に掲げている。

白く優美な細腕が、しかし肘から先は黒くゴツゴツと甲殻状に変化していた。鋭利に硬質化した五指は、まるで節くれ立った刃物である。

その掌の根元、掌か手首か判然としない部分から、蛇のような鞭は生えていた。細かな刃に似た鋭い突起を、根元から先端に至るまで背ビレの如く並べた、生体の鞭。

それが、ゾルカの身体を刺し貫いている。

穿たれた腹と背中からの出血は、驚くほど少ない。その代わりのようにゾルカの口から、大量の鮮血が溢れ出す。

かつての仲間の、そんな様を見つめながら、メイフェムは呻く。

「ケリスが命を捨ててまで守ろうとした、美しいもの……今度こそ、見られると思ったのに……特にそこ！ そのあんた！ アンタがもっと悲しんであげなきゃダメでしょうがあああああああッッ！」

呻きが叫びに代わり、眼光がゾルカからエミリイへと向けられる。呆然としているエミリイを、ブレンが背後に庇った。

「やめろ……もうやめてくれ、メイフェム……」

血を吐きながらゾルカが、辛うじて聞き取れる声を発する。

「その狂気おもむくままに、これまで大勢の人間を殺してきたのだろうが……私で、最後にしておけ。そして引き返せ……今なら、まだ君の……一生をかけて、罪を償う事が出来る……」

「ねえゾルカ、こうなる事はわかっていたのでしょ？」

左右形の異なる翼を広げ、左手からは鞭を生やし……人ならざるものとしての正体を少しずつ露わにしながら、メイフェムは笑っている。

「悔しいけれど魔法の勝負は、私よりも貴方がほんのちょっと上……でも私は」

「もちろん、わかっていたさ……もともと素手の戦いならダルーハにもそう引けを取らなかつた君が、人間をやめてしまったのだからな……こんなふうに魔法以外の戦い方をされたら、私なんかが君に勝てるわけがない……」

「それがわかっていながら、貴方は……こんな人間どもを守るために、私と戦って……」

笑いながら、メイフェムは涙を流していた。

「私……ダルーハやドルネオを見て、男って本当バカな生き物だっと思ってたわ……だけどゾルカ、貴方はましな方だとも思ってた。なのに……実は、貴方が一番おバカさん………ッッ！」

泣き笑いながら、メイフェムは左腕を動かした。背ビレの生えた鞭が、荒々しくうねった。

ゾルカの身体は真っ二つにちぎれ、血よりも大量の臓物をぶちまけた。

下半身はそのまま膝をつき、少し離れた所に上半身が落下する。

「さようならゾルカ……貴方の仲間だったメイフェム・グリムは、ここでお終い……」

涙に濡れた尼僧の笑顔が、白く神々しい聖女の裸身が、左右形の異なる翼でフワリと覆い隠される。



皮膜の翼と、羽毛の翼。

それらがバサッ！　と開いた時、そこに人間メイフェム・グリムの姿はなかった。

形良く膨らんだ胸と、美しく引き締まった胴。そこから尻・太股にかけての魅惑的な広がり……その曲線に、名残はある。

だが体格は一回り大型化して筋肉を盛り上げ、胸も尻も太股も、たくましく肉感を増している。

白い美肌は、黒く滑らかな外皮に変わっていた。所々が、羽毛で衣装的に飾り立てられている。

左右の前腕は、指で物体を切断出来そうな甲殻の手甲と化しているが、鞭を生やしているのは左手だけだ。

力強い両の美脚の末端は、地面を掴み裂いてしまいそうな爪を伸ばした、まさに猛禽の両足である。

首から上も、猛禽類の頭部だった。

顔面の上半分では、大型のクチバシが庇の形に張り出している。

下半分は、口元と顎の綺麗な人間の美貌で、そこにも聖女メイフェム・グリムの面影が残ってはいる。

その美しい唇が、言葉を紡いだ。

「これからの私は、アサド君の言っていた魔女……化け物……魔獣人間、バルロックよ……」

### 第30話 金剛の獅子

シェファの全身で、魔石が赤く輝いた。

周囲に炎が生じ、渦巻きながら空中あちこちで球形に固まり、幾つもの火球となった。

「汚い人間が、そんなに嫌なら……さっさと死んで！ 天国へも行っちゃいなさいよ！」

シェファに怒りに呼応して、魔石の杖が激しく電光をまとう。

棒状の稲妻と化した杖を、シェファは思いきり振るった。

それを合図として、周囲の火球たちが一斉に飛翔し、襲いかかる。いよいよ人間の姿を脱ぎ捨てたメイフェム・グリム……魔獣人間バルロックへと。

かつて竜退治の英雄の1人であった牝の魔獣人間が、無造作に左手を振り上げた。

掌の根元から生えた鞭がヒュンッ……と一閃し、周囲を薙いだ。

火球が全て打ち払われ、爆発し、人外のものと化した尼僧の姿を全方向から激しく照らす。

そこへ、リムレオンが斬り掛かっていった。

魔法の剣の斬撃。それを、バルロックが右足で迎え撃つ。猛禽の爪を生やした蹴りが、リムレオンの手元を高速で打ち据える。

魔法の剣が、高々と蹴り飛ばされた。

それが落下して来るよりも早く、バルロックの右足が、着地せぬままリムレオンの腹に突き込まれる。猛禽の爪が、槍の如く、魔法の鎧の腹部を激しく突いた。

リムレオンの身体が、後方へと吹っ飛んだ。

直撃の瞬間、自分から後ろへ跳んだのだ。それで魔獣人間の蹴りの威力が、かなり減殺されたはずである。

ブレンが教えた通りに、リムレオンの身体は動いている。とは言え、それで勝てる相手なのか。

「……それなりに鍛錬を積んではいるようねえ、メルクトの若様」  
軽く腹を押さえて着地したリムレオンに、バルロックが微笑みかける。庇のようなクチバシの下で見え隠れする端正な口元が、妖しく不敵に歪む。

「貴方たちも、ゾルカと同じね。汚らしい人間どもを守るために一生懸命、戦う力を鍛え上げて私に喧嘩を売ってくる。微笑ましいわあ……あの赤き竜から見た私たちも、こんな感じだったのかしらねえ」

「……知るわけないだろう、そんな事」

リムレオンが呻き、腹を押さえたまま片膝をつく。威力を減殺したはずの蹴りが、それでも効いている。

立ち上がれずにいたリムレオンの身体が突然ビシッ！と宙に浮いた。

背ビレの生えた鞭が、一閃していた。

打ち据えられた魔法の鎧は無傷だが、血飛沫が点々と飛び散っている。

「若君……」

「リム様！」

ブレンが呻き、シェファが叫んだ。叫びながら彼女が、リムレオンの落下地点に駆け寄って行く。

地面に激突し、手足を投げ出したまま、リムレオンは動かなくなっていた。

動かぬ若君を背後に庇い、魔石の杖を魔獣人間に向けながら、シェファが絶叫する。

「こッ………ンのオオオオオオオオオオオオオッ！」

血を吐くような、怒りの絶叫。

それに合わせて魔石が、杖の先端で、赤い光を燃え上がらせる。シェファの魔力が、収束されているのだ。

先程ゴルジ・バルカウスを一撃で灼き碎いた赤色光。それがドギユルルルッ！と迸り出て宙を奔り、そして止まった。バルロ

ツクの眼前で、目に見えぬ何かに激突し、止まってしまった。

不可視の防壁。

この魔獣人間は、人ならざる身でありながら尼僧としての信仰心を失ったわけではなく、こうして唯一神の加護を発現させる事が出来るのだ。

その不可視の防壁と、シェファの放った赤色光の束が、同時に碎け散った。相殺。赤と白の光の飛沫がキラキラと美しく舞い散り、消えてゆく。

それらを蹴散らすように鞭が跳ねた。刃のような背ビレを生やした、怪物の尻尾にも似た鞭。

それが、シェファの全身にビシビシッと絡み付いていた。

「きゃっ……う……ッ」

少女の悲鳴が、詰まった。

シェファの細身に蛇の如く巻き付いた鞭が、ミシミシ……ッと締め付けを強めてゆく。魔法の鎧を、内部の人体にまで圧迫が及ぶほどに締め上げているのだ。

「シェファ……！」

ようやく上体を起こしたリムレオンの眼前から、シェファは連れ去られていた。バルロックが、左手で鞭を引いたのだ。

引きずり寄せられたシェファの細身が、魔獣人間の左腕にガツシリと抱かれ、捕えられる。

「生意気なお嬢さん……貴女、私と同じね」

捕えた少女に、メイフェムが優しく微笑みかけた。

「あの若様が、例えば世界を救うために命を投げ出したりしたら……貴女、絶対に許せなくなるわよ？ 世界中の人間たちをね」

「一緒に、しないで……あんたみたいなバケモノとっ……！」

魔獣人間の鞭と腕力で締め上げられながらも、シェファは気丈な言葉を発している。

その気丈さを、メイフェムは明らかに楽しんでた。

「……貴女もバケモノになってみない？ 何か、面白い魔獣人間に

なりそうな気がするのよねえ」

「放せ……」

言ったのはシェファではなく、リムレオンだった。どこかへ落下した魔法の剣を探そうともせず、魔獣人間に殴り掛かって行く。

「シェファを……放せええええッ！」

白い魔法の鎧に包まれた身体が、バルロックに向かって突進し、そして再び宙を舞った。

魔獣人間の、蹴り。

たくましく肉感を増した美脚が、下から上へと一閃し、リムレオンの身体を打ちのめしたのだ。

高々と吹っ飛び、地面に激突したリムレオンが、しかし即座に一転し、立ち上がる。

立ち上がって、すぐに片膝をついてしまう。

「放せ……シェファを……っ！」

面頬からゴボッ……と血反吐の飛沫が飛び散った。

（俺は……何をしている……）

ブレンは、戦斧を握り締めた。こんなもので、少なくともグールトレントあたりとは格の違う魔獣人間に対し、どれほどの事が出来るのかはわからない。が、そんな事は問題ではなかった。

（若君が戦っておられる、シェファも戦っている……なのに年長者たる俺は、何をしている！）

左腕でシェファを捕えているバルロックに向かって、ブレンは駆け出そうとした。

弱々しい声が、それを止めた。

「待て……ブレン殿……」

弱々しいが、聞き流す事の出来ない何かを秘めた声。

ゾルカだった。

真っ二つにちぎり殺されたはずのゾルカ・ジェンキム。その上半身が、消えゆく命を声として絞り出している。

エミリイが近くに座り込み、ゾルカの腹部の断面に向かって片手

をかざしている。震えるその手が光を発しているが、黒ずみ始めた臓物をただ照らすだけだった。

「駄目……あたし、こんなの治せない……」

「ありがとう……いいんだ。戦いに敗れた者が、死ぬ……それだけの事……」

血色の完全に失せた、蠟人形のような顔で、ゾルカは無理矢理に微笑んでいる。

「……それよりブレン殿……早まっては、いけない……無駄に命を捨てたところで、あの2人を救う事など……」

魔獣人間の左腕が、シェファの身体を、鞭から解放しつつ放り投げていた。青い鎧をまとう少女の細身が、まるで物のように投擲され、リムレオンに激突する。

リムレオンが、シェファを抱き止めようとして失敗し、もろともに重なり合って倒れていた。

そちらに、バルロックが微笑みを向ける。

「ねえ貴方たち……どちらかが殺されそうになっても、守ってあげられる？ 逃げずにいられる？ 一緒に、死んであげられる？」

少年少女に歩み寄るその足取りが、急速に速まった。

「試してあげるわ……」

魔獣人間の、右足が踏み込み、左足が蹴り上がる。

「く……っ」

シェファが、リムレオンを庇って上体を起こし、眼前に両手をかざす。その全身で、魔石が輝く。

目に見えぬ魔力の防壁がそこに出現し、だが蹴り碎かれた。光の破片が一瞬だけキラキラと生じ、消えた。

それを蹴散らして一閃したバルロックの左足が、シェファとリムレオンを一緒に叩きのめし、吹っ飛ばす。

無傷の鎧から血飛沫をまき散らし、2人は宙を舞った。

「やめろ……！」

激昂し、戦斧を構え、魔獣人間に斬り掛かろうとするブレンを、

上半身だけのゾルカがなお呼び止める。

「だから待て……命を、粗末にするなど言っている……ここは恥を忍べ、ブレン殿……」

「逃げろと言うのか……」

ゾルカがこのような状態でなければ、ブレンは間違いなく、胸ぐらを掴んでいたところである。

そんなブレンに、ゾルカは右拳を向けていた。細い、死にかけの右手が、何か小さな物を握り込んでいるのだ。

その右拳が、震えながら開いた。

「恥を忍んで……外付けの力に頼ってみろと、言っているのだよ……」

ゾルカの右掌の上で、小さな金属の竜が環を成していた。指輪、である。

ブレンは息を呑んだ。

「これは……!」

「魔獣人間と、生身で互角以上に渡り合う……貴殿の戦いぶりを、一目見た時から……私は、ずっと思っていた。この勇士に魔法の鎧を着せてみたら、一体いかなる事になるものかと……」

死にかけの手で差し出された竜の指輪を、ブレンはとりあえず受け取るしかなかった。

ゾルカの眼差しと口調に、最後の力が籠る。

「ブレン・バイアスという人間を、出来ればもう少し見極めたかった。強大な力を手にした貴公が……ダーハ・ケスナーのように、なってしまうという保証は……どこにも、ないからな……」

「だろうな。俺自身にもわからん、それは」

「だが私は……最強の戦士に魔法の鎧を着せてみたいという誘惑に、ついに打ち勝てなかった……」

ゾルカの両目から、眼光が失せてゆく。

「もはやブレン殿に頼むしかない……メイフェムを、止めてくれ……私は、誰を止める事も……出来なかつ……た……」

「ゾルカ殿……」

ブレンの呼びかけに、ゾルカはもう応えない。

少年兵の頃、物陰から盗み見ていた英雄の1人が、死んだ。

その英雄の形見の品を、グッ……と握り込みながら、ブレンは目を閉じた。

どれほど便利で卑怯なものであろうと、力は力。戦場では何より必要とされるもの。

力を用いて戦いに勝ち、守るべきものを守る。それが出来なければ、己の力のみで正々堂々戦ったところで意味はない。

ブレン自身が、リムレオンに向かって偉そうに語った事である。

リムレオンは起き上がろうとしたが、その前にシェファが、よろよろと立ち上がっていた。魔石の杖にしがみつきながらも魔獣人間の方を向き、リムレオンを背後に庇っている。

「シェファ……逃げて……」

込み上げる血反吐を飲み込みながら、リムレオンは呻いた。

振り返りもせず、シェファが応える。

「リム様が一緒に逃げてくれるんなら……それと、あいつが逃がしてくれるんならね……」

起き上がるのが精一杯の少年少女に、優雅な歩調で迫りつつある魔獣人間バルロック。

聖女メイフェム・グリムの面影を残した唇が、嬉しそうに言葉を紡ぐ。

「庇い合っているのね、貴方たち……素敵っ……もっと見せて」

魅惑的な女の曲線を失ってはいない、異形の裸身。その周囲を、背ビレのある鞭が海蛇の如く泳いだ。

「美しいものを、もっと見せて……お願いよ……」

「……うちの若君を玩具にするのは、やめてもらおうか」

力強い、声と足音が聞こえる。



誰なのかは確かめるまでもなく、リムレオンは叫んでいた。

「ブレン兵長……！ 駄目です、村の人たちを連れて早く逃げて！」  
うぬぼれに等しいという事は、リムレオンも承知の上だ。よりもよって自分が、ブレン兵長を守ろうとしている。これほど身の程知らずな事があるうか。

「若君も無茶をおっしゃる。その怪物から逃げる事など、出来るはずがありません」

傷跡のある厳つい顔に苦笑を浮かべながら、ブレンは右手で拳を握っている。

その太い中指で、何かがキラ……ツと光を放っている。

「……うそ……」

シェファが呆然と呟いた。リムレオンは、声も出なかった。

竜の指輪。間違いはない。自分やシェファと同じものを、ブレン兵長が手にしてしまった。

「……なるほど、そういう事……」

少年少女に対する攻撃を、バルロックはとりあえず中断し、ブレンと向かい合う。

「やっぱりゾルカね。魔法の鎧の装着者を、あと2人か3人はどこかに隠していると思っていたわ」

「愛人のような言い方は、やめてもらおうか」

ブレンの右拳で、竜の指輪が輝きを増す。

「この力の使い方に関しては、若君の方が先達であられます。至らぬ所が見えたなら、遠慮容赦なく御指導願いますぞ」

「ブレン兵長……」

「まずは真似をするところから始めさせていただく……武装、転身っ」

光り輝く右拳を、ブレンは天空へと向かって突き上げた。

その拳から投影されたかの如く、光の紋様が空中に生じた。様々な記号や図形を内包した真円。

光をインクとして空中に描き出されたそれが、轟音を発して輝き、

稲妻に似た光を放つ。どこか異なる世界から、電撃を召喚したかのような様である。

その電撃光が、ブレンを直撃した。

力強く拳を突き上げた巨体が、激しい電光に包まれた。

電光が実体を得て、ブレンの全身に固着してゆく。

空中に描かれた光の紋様が、いつの間にか消えていた。

天に向かって拳を突き上げた、勇壮なる騎士の姿が、そこに出現していた。

黄金に似た、だが金よりは落ち着きのある黄銅色の全身甲冑。その所々が、パリパリと微かな電光を帯びている。

傷跡のある獅子のような顔も、今は厳めしい面頬の内側だ。

腰に取り付けられているのは、やはり黄銅色の、大型の戦斧である。

魔法の鎧と、魔法の戦斧。

黄銅色に武装したブレン・バイアスが、帯電する右拳をゆつくりと下ろし、魔獣人間を睨み据える。面頬の外からでも闘志のきらつきが見て取れる、烈しい眼光だ。

「なるほど……これは確かに良くありませんな、若君」

腹に響くような重い低音で、ブレンは笑っている。

「修行や鍛錬では絶対に得られない力が、全身に漲って……今の私は、何でも出来そうな気になっております。下手をすると癖になりますな、これは……魔獣人間になってしまった時というのは、こういうものなのだろうなあメイフェム・グリムよ」

「さあ、どうかしらね……」

会話は、そこまだった。

バルロックの左手が動いた。と見えた時には、背ビレのある鞭が、ブレンの身体にビシビシッと巻き付いていた。黄銅色の魔法の鎧に、容赦ない締め付けが加わってゆく。

ブレンがそれに抗い、両腕を広げた。

魔獣人間の肉体の一部である鞭が　ブチブチッ！　とちぎれて飛

び散り、肉片と化する。

「うっ……」

微かな苦痛と動揺の呻きを漏らし、バルロックが半歩ほど後退りをした。

その間にブレンは、魔法の戦斧を右手に持って構えながら、踏み込んでいた。黄銅色の力強い甲冑姿が、猛然と魔獣人間に迫る。

バルロックの右手に一瞬、光が生じた。その光が実体を得て、棒状に物質化する。

抜き身の、長剣だった。

まっすぐに突進し、戦斧を振り下ろすブレン。身を翻し、右手で長剣を一閃させるバルロック。

左上から右下へと閃いた長剣が、魔法の戦斧をガキィッ！ と受け流す。紙なら燃やせてしまいそうな火花が散り、ブレンの巨体が前方へとよろめき泳ぐ。

そこへ、魔獣人間の左足が襲いかかった。右手で剣を振るいながらの、左後ろ回し蹴り。

泳いだ身体を即座に踏みとどまらせ、振り返りながら、ブレンは左腕を掲げた。防御の形に掲げられた左前腕に、猛禽の爪を生やした蹴りが激突する。

強固な魔法の手甲と魔獣人間の左足が、鏝迫り合いの如く交わり、弾け合うように離れた。

いくらか距離を隔ててバルロックは着地し、ブレンは魔法の戦斧を両手で構え直し、睨み合う。

睨み合いは一瞬で終わり、双方同時に踏み込んだ。

魔法の戦斧が横薙ぎに唸り、豪快に空振りをする。

バルロックは、上空へと回避していた。跳躍しつつ、左右形の異なる翼をはためかせて空中にとどまり、地上のブレンに左手を向ける。

鋭利な五指に囲まれた掌が、白く発光した。癒しの力や不可視の防壁と同じ、唯一神の力の発現。

その白い光が球形に固まり、魔獣人間の左掌から発射されてブレンを襲う。

「ぬ……っ」

兜に命中した。黄銅色のたくましい甲冑姿が、微かに揺らぐ。

倒れず踏みとどまって立つブレンを、バルロックは容赦なく空中から狙撃し続けた。3発、5発と、魔獣人間の左掌が連続で光球を発射する。

降り注ぐそれらを、ブレンは魔法の戦斧で、片っ端から打ち碎いた。白い光の飛沫が、粉雪のように舞い散っては消える。

十数発、正確には14発目で、光球の発射は止まった。

15発目は、狙撃ではなく斬撃だった。バルロックが、右手の長剣を両手で握り、空中からブレンに斬り掛かる。

急降下と共にまっすぐ振り下ろされゆく刃が、白い光を帯びていた。今の光球と同じ性質の、聖なる光。

落雷にも似たその斬撃を、ブレンは戦斧を掲げて受け止めた。魔法の斧と光の剣が、激しくぶつかり合って甲高く音を発する。

その残響が消えぬうちに、魔獣人間の肢体が、空中で竜巻の如く捻転していた。猛禽の爪を生やした美脚が、後ろ回し蹴りの形に弧を描く。

直撃。黄銅色の魔法の鎧が、火花を散らせる。

後方に吹っ飛んだブレンの巨体が、大型肉食獣の如く地上でしなやかに一転し、何事もなく起き上がって戦斧を構えた。

直撃を喰らったように見えて、本当には喰らっていない。この兵長が、さんざんリムレオンに教え込んでくれた回避技術である。自分ならそんな事をする暇もなく直撃を受けていたであろう、とリムレオンに思わせるほどの蹴りだったが。

地上に降り立ったバルロックが、着地したその足で地面を蹴り、ブレンに斬り掛かる。

白い光をまとう長剣を、魔法の戦斧が弾き返す。弾き返された刃が、即座に別方向からブレンを襲う。

それが、幾度か繰り返された。

舞うように激しく躍動する牝の魔獣人間と、腰を落としてどっしりと身構えた黄銅色の甲冑姿。両者の間で、白く輝く長剣と魔法の戦斧が、激しく何度もぶつかり合う。5合、10合。

20合近くになって、2つの武器がガキッ……と噛み合い、止まった。

魔獣人間の長剣にギリギリッと戦斧を押し付けながら、ブレンが言う。

「噂に聞く、アゼル派の聖なる武術か……他宗教に対する攻撃・弾圧のため、古の唯一神教司祭たちが開発し磨き上げたという」

「攻撃と弾圧……それが宗教というものよ。特に唯一神教はね」

「嘘です！」

叫んだのはエミリイだった。

「人々に平和と安らぎをもたらすのが唯一神教です！ 安らぎと救いを求める人々の心から生まれたのが、元来の唯一神教ではないのですか！」

「ローエン派のお嬢さんが、そんな綺麗事を言っていられるのも……アゼル派の先人たちが、返り血にまみれながら唯一神の教えを広め、定着させたからよ」

喋りながらもメイフェムは、魔法の戦斧に押し込まれ、いささか苦しげに身を反らせている。やはり単純な力の押し合いでは、魔法の鎧を装着したブレンの方に分があるか。

と思えた瞬間、バルロックの全身が螺旋状にグリッと捻れた。

光を帯びた長剣が、魔法の戦斧を受け流していた。受け流されたブレンの身体が、魔獣人間と擦れ違う形に泳ぐ。

その擦れ違いざまに、バルロックは右足を高速離陸させていた。跳ね上がった蹴りが、ブレンの腹に叩き込まれる。

「ぐうッ……！」

魔法の鎧で守られた巨体が、腹を押さえて倒れ込む。だがすぐに起き上がりつつ、戦斧を跳ね上げる。

とどめ、とばかりに振り下ろされた長剣がガキーン！ と弾き返され、火花を散らせた。火花と一緒に、キラキラとした金属片が飛び散ってゆく。刀身そのものが、砕けていた。

魔法の戦斧が、さらなる勢いを得てバルロックを襲う。

徒手空拳となった魔獣人間が、それを左足で迎え撃った。力強い脚線が鞭の如くしなって一閃し、猛禽の爪が鋭く高速で弧を描く。

その爪が、白い光を帯びている。先程まで長剣にまわりついていたものと同じ、唯一神の聖なる力。

白く光る軌跡を空中に残しながら、バルロックの蹴りが、ブレンの手元を打ち据えた。魔法の戦斧が打ち飛ばされ、くるくる回りながら広場のどこかへと落ちて行く。

もちろん探して回収する暇など与えるはずもなく、バルロックがさらなる蹴りを放つ。左右それぞれ1発ずつ。白く光る猛禽の爪が、ブレンの身体を高速で打ち据える。黄銅色の魔法の鎧が2度、火花を散らせた。

直撃のように見えて、しかしブレンは微かに巨体を揺らし、甲冑の内部に衝撃が流れ込むのを避けている。それがリムレオンにはわかった。

もう1つ、わかった。傍目には一方的に蹴られながらも、ブレンは反撃を狙っている。

「……………ッ！」

魔獣人間にも、それがわかったようだ。息を呑みながら蹴りを止め、後方へと跳び退っている。あと1発か2発、蹴りを放っていたら、ブレンの何らかの反撃を喰らっていただろう。

「危ない危ない……貴方に組み付かれたら、私たぶん何も出来なくなるわね」

「……………」

たくましい両腕を軽く左右に広げ、ブレンは巨体を前傾させている。

生身の戦いで魔獣人間を投げ飛ばし、首を押さえ、動きを封じて

見せた彼の戦いぶりを、リムレオンは思い出していた。

光球の射撃や、異形の美脚による蹴り……間合いを開いての戦いならば、メイフェムの方が圧倒的に有利だ。が、それらの攻撃をかくぐって組み付く事に、ブレンが成功すれば。

睨み合い対峙する両者を、息を呑んで見つめるリムレオン。

その近くでシェファが、魔石の杖を構えている。魔力が集中しつつある先端の魔石は、まっすぐバルロックに向けられている。

リムレオンは、ようやく気付いた。1対1の戦いについて見入ってしまったが、これは武術の試合ではない。

実戦の、殺し合いなのである。

蹴り飛ばされた魔法の剣は、少し離れた所で地面に突き刺さっていた。魔獣人間に気付かれず回収する事は、出来るであろうか……いや。メイフェムは、すでに気付いているようだった。

「……ここまで、にさせてもらうわ」

じり、じりっ……と油断なく後退りをしながら、バルロックは言った。

その左手が、白い光を発している。癒しの力。ちぎれた鞭が、光の中から生え変わり、宙を裂いた。

とっさに、リムレオンは後ろへ跳んだ。足元で、魔獣人間の鞭がビシッ！と地面を打つ。

魔法の剣を回収しようとするリムレオンへの、牽制だった。

「……覚えておきなさい。私は、ケリスの死を汚す者どもを許さない。そいつらを守ろうとする貴方たちもね」

「別に、許してもらおうとは思わんよ」

いつでも踏み込める前傾姿勢を崩さぬまま、ブレンが言う。

「立ち去るならば去れ。この場で息の根を止めておきたいところだが……俺たちが3対1の戦いを派手にやらかせば、この村に迷惑がかかる。もうかかっているかな」

「あくまでも守ろうとするのね、弱い人間を……」

メイフェムは跳躍した。そうしながら皮膜と羽毛、2種類の翼を

羽ばたかせる。

「貴方たちは本当に、あの頃の私たちにそっくり……いずれ絶望するわよ、人間という生き物に」

「俺はなメイフェム殿。若作りをしているあんたよりは年下だが、それでも30何年かは人間として生きてきた。人間がどれほど薄汚くて度し難い生き物であるかは、よく知っているつもりだ」

ブレンは言った。

「あんた方と違って、人間に望みなど抱いてはいない。だから絶望など、しようがない」

「……愚かなところまで、ダルーハやゾルカにそっくり……!」

それだけを地上に向かって吐き捨ててから、メイフェムは一気にその場を飛行離脱した。

左右形の違う翼をはためかせる魔獣人間の姿が、上空へと遠ざかって行く。

人間ではない者たちが、とりあえずは全員、ゼピト村からいなくなった。

メイフェム・グリム1人は取り逃がしたものの上々の結果だろう、とリムレオンは思う。村人からは、1人の犠牲者も出なかったのだ。元村人の魔獣人間が1人と、助っ人に現れた魔術師が1人、計2名の死者が出ただけだ。

アサドは燃え尽き、微かな灰しか残っていない。

ゾルカの方は真つ二つにちぎれ、先程まではゴミのように放り出されていたが、今は上半身・下半身共に、村人らによって丁寧に横たえられている。

その傍らにエミリイが跪き、唯一神への祈りを呟いていた。

リムレオンも、跪いていた。

いや、跪くつもりはない。恭しく跪いて死を悼むような相手ではないのだ。

何しろシェファに竜の指輪など持たせて、戦いに巻き込んだ人物なのだ。



次に会ったら一言二言は責め立ててやらなければ、と思っていたところ、その前に死んでしまった。

リムレオンに戦う力を貸してくれた、言わば恩人でもある。その礼を1度くらいは言わねばならないか、と思っていたところ、その前に死んでしまった。

ゾルカ・ジェンキムに対して、リムレオンには複雑な思いがある。少なくとも、跪くような相手ではない。

にもかかわらずリムレオンは、地面に両膝をついていた。

全身からキラキラと、何かが散って行くのがわかる。魔法の鎧が、光に戻っていた。

続いてリムレオンは、顔面に生暖かい液体がぶちまけられるのを感じた。

己の、血反吐だった。

口からゴボゴボと大量に溢れ出して地面に広がった鮮血の中に、リムレオンは顔から倒れ突っ伏していた。

魔法の鎧の上から、さんざん叩き込まれた魔獣人間の攻撃が、今になって本格的に効いてきたようである。

痛みはない。痛覚が、破壊されている。

村人たちが、騒ぎ立てていた。若君、と叫ぶブレンの声も聞こえた。女の子の悲鳴も聞こえる。シェファか、エミリイか。

1つ、リムレオンは理解した。

せつかく3対1の状態に持ち込めたのに、ブレンが魔獣人間バルロックをあつさり見逃してしまった理由。それは村人たちを戦いに巻き込んでしまうのを恐れたため、ではない。いや、それが全く念頭になかったわけではなからうが、真の理由はたった1つ。

（僕が、もう……使い物に、ならないから……）

あのまま3対1で戦っていたら、バルロックを仕留める前に、リムレオンが力尽き殺されていただろう。現に今、こうして力尽きているのだ。

シェファは自力で、ゴルジ・バルカウスを倒した。

ブレンは、敵の最大戦力であるメイフェム・グリムと互角に戦い、追い払った。

リムレオンはと言うと、シェファの力を借りて、ようやくアサドの殺害に成功しただけである。

（僕1人が……足手まとい……）

その思いに押し潰されながら、リムレオンの意識は、血反吐に溶け込むように失われていった。

### 第31話 北の嵐

バウルファー・ゲドン侯爵の城に、魔獣人間はもはや1匹も残っていない。

残っているのは、魔獣人間まであと少しというところで止まってしまった残骸兵士たちと、クズとしか言いようのない人間の兵隊だ。そのクズたちが、城内で何やら騒いでいるようである。

メイフェムは、とりあえず城壁の上に降り立ち、見下ろしてみた。ボロ布同然の服を着せられた、10人ほどの男女がいる。城の地下牢に捕えられていた、領民たちだ。

どうやら脱走を企てたらしい彼ら彼女らを、30人近い兵士たちが取り囲んでいる。

「てめえらよオ、逃げ出したら死刑って俺らちゃんと言ったよなあ？　なあ？　なあ？」

「1人でも逃げ出したら俺らの責任になっちゃうんだっつうーの！」

「俺らに迷惑かけんじゃねえよ、クソボケがっ」

兵士数名が、領民たちの中から男を1人、引きずり出して槍で叩きのめし、殴る蹴るの暴行を加え始める。

「や、やめ……どうか、お許しを……お見逃しをお……」

懇願する男の顔面に、容赦のない蹴りが入る。

他の領民たちは今のところ暴行を受けてはいないものの、全方向から槍や剣を突き付けられ、身を寄せ合って怯えている。

その中から1人が、殴られ蹴られている男に向かって駆け出した。

「やめて……お父ちゃんを、いじめないで……」

7、8歳くらいの、小さな女の子である。

暴行を受けている父親に弱々しく駆け寄ろうとする彼女を、兵士の1人が嫌らしく抱き捕えた。

「おおおお、可愛い嬢ちゃんがまだ生き残ってんじゃーかよ」

「おおう、女も14歳過ぎちまうと脂肪がつく一方だしなあ。こ

っこのくれえが食べ頃ってかぁー」

おぞましく笑う兵士たちに捕われ群がられ、女の子が悲鳴を漏らす。

「やっ……やだぁ……たすけて、お父ちゃん……」

助けを求められた父親が、兵士たちにガスガスと踏み付けられながらも顔を上げ、声を発する。

「あの、もし……うちの娘を、気に入っていただけましたら……差し上げますからぁ……」

醜く腫れ上がった顔が、醜い愛想笑いを浮かべた。

「だ、だから私だけは見逃して……ここから、逃がしちゃくれませんかねえ」

その男の身体の上に、メイフェムは思いきり着地していた。

グシャアッ！ と様々なものが足元に広がり、ぶちまけられる。

猛禽の爪でそれらを踏みにじりながらメイフェムは、

「何で……どうして……」

声を震わせ、左腕を振るった。

背ビレの生えた鞭が、兵士たちを片っ端から打ち据える。

首が飛び、頭蓋骨が破裂した。腕がちぎれ、上半身そのものが原形をなくして心臓や肺を露出させる。

大量の鮮血を浴びながら女の子が解放され、呆然と尻餅をついた。彼女の父親の臓物を踏みちぎりながらメイフェムは、

「どうして貴方たちは……私に、汚いものしか見せてくれないの……?」

他の領民たちと、そして彼らに槍を突き付けている兵隊に、微笑みかけた。

「お願いよ、いい加減に自覚して？ 貴方たちが、ケリスに守られて生きているという事……」

血まみれの鞭が、メイフェムの周りをゆったりと泳ぐ。

凶暴な海蛇に似た凶器を、左手から生やした魔獣人間。その姿に、兵士も領民も仲良く怯えている。

ならば、仲良く皆殺しにするまでだった。生きている限りケリスの命を穢し続ける、このような生き物たちは。

血まみれの鞭を振るおうとするメイフェムの片足に、その時、「やめて……」

女の子が、しがみついていた。

「たすけてくれて、ありがとう……みんなも、たすけてあげて……みんなを、ころさないで……」

自分の父親の臓物がこびりついた、猛禽の爪。そんなものを生やした足に、女の子は恐れげもなくすがりつき、子供らしい愚かな事を言っている。

「助けた……私が、貴女を？　ふざけた事を言う子ねえ……」

左腕だけで、メイフェムは女の子を抱き上げた。

抱き上げられた小さな身体に、血まみれの鞭がシュルツと絡み付く。

「あんまりふざけた事言ってる……殺しちゃうわよ？」

「……………」

可愛い顔を引きつらせ、青ざめさせながらも、女の子は懸命な眼差しでメイフェムを見つめている。そして噛み締めた唇から、か細い言葉を紡ぐ。

「みんなを……たすけて……」

「……………」

メイフェムは待った。

左手の鞭にほんの少し力を込めれば、幼い少女の身体など一瞬にしてズタズタの肉塊と化す。

それを、すぐには実行せず、メイフェムは待った。

いくら待っても、しかし兵士らも領民たちも動かない。ただ固まって、怯えているだけだ。

「……どうして誰も、この子を助けようとしらないの……？」

女の子を抱き捕えたままメイフェムは1歩、踏み出した。踏み出したら、止まらなくなった。

「1人でも助けに出て来たら……貴方たち全員、許してあげる……逃がしてあげる……つもりだったのに……」

領民と兵士が何人かずつ、一緒にたに潰れて飛び散った。

「やっぱり駄目……貴方たちに、ケリスが命を捨てただけの価値はない……」

自分の手足がどのように動いているのか、メイフェムはわからなくなっていた。

とにかく女の子を左腕に抱いたまま、右手を動かす。右足を、左足を動かす。

その度に兵士の生首が、領民の臓物が、舞い上がり噴き上がる。

血や脳漿、臓物の汁……様々な体液を浴びながら、メイフェムは叫んでいた。

「だから、ねえ返して……ケリスを返してよ……返さないよねえちよっとおおおっ！」

領民も兵士も、すでに1人も生き残っていない。

屍を、メイフェムは右手で振り回し、叩き付けていた。両足で踏みにじり、猛禽の爪で引き裂いていた。

肉も臓物も体液も、一緒にたに泥のような飛沫に変わり、飛び散り続ける。

泥沼で水浴びをしているような様を晒しながら、メイフェムは絶叫していた。

「ケリス！ ケリスッ、ケリスうううううッッ！」

「やめて……」

女の子が、メイフェムの左腕と鞭に拘束されたまま、泣きじゃくっている。

「もうやめて……おねがい……」

すでに遅い。領民も兵士も1人残らず、もはや死体とも呼べぬ有り様となって、辺り一面にぶちまけられている。

メイフェムは、とりあえず殺戮の動きを止め、荒く息をついた。汚らしい生き物たちが、汚らしい死に様を晒している。ただそれ

だけの光景を見回しながら、思う。

こんな、汚らしい連中をも守ろうとするのだろう。あの魔法の鎧を着た者たちは。

「……どうして？」

女の子が、泣きながら問う。

「あたしを、たすけてくれた人が……どうしてこんな、ひどいことをするの……？」

「それはなお嬢ちゃん。そのお姉さんが、見ての通り人間じゃねえからよ」

答えたのは、メイフェムではない。

少し離れた所で城壁にもたれている、1人の若い男だ。

「人間が気まぐれに、捨て猫か何かを拾う。それと同じようにお嬢ちゃんを助けた……人間がムカついて、蟻んこの群れか何かをガンガン踏み潰す。それと同じように、そのクソどもをぶち殺した」

若者、と言うより少年であろうか。

それほど大柄ではない、無駄なく引き締まった身体を、薄汚い旅装に包み込んでいる。腰には長剣。旅の剣士、といった装いである。「人間じゃねえ奴ってのは人間に対して、そーゆう事が出来るのよ。何しろ人間じゃねえからな」

不敵に微笑む顔立ちは、整ってはいる。短めの黒髪に、鋭いがどこか人懐っこさのある眼差し。どこか品格のようなものも、感じさせなくはない。

メイフェムは息を整えながら、とりあえず会話に応じた。

「ゼノス王子……久しぶり、というほどでもないかしらね。しばらく姿をくらませていたようだけど」

「ちよつと北の方にな」

北。ダルーハ軍によって蹂躪され尽くした、ヴァスケリア王国北部の各地方。今はバルムガルド王国を後ろ楯に得た唯一神教ローエン派が、戦災復興の大盤振る舞いをして幅を利かせているという。

「ダルーハ軍の残党が、破れかぶれになって暴れ回っていたらしい

んでな。ちよいと用心棒稼業の真似事をしに行ってみたのよ」

ダルーハの死後、その残党が王国北部に集まり、戦災を被った民衆を脅かしている。そんな噂を、メイフェムも聞いた事はある。

その残党たちが改心し、ローエン派に帰依して、今では復興のために働いている。そんな話も聞いたが、これは恐らくローエン派の法主たるクラバー・ルマン大司教あたりが流した噂だろう。

本当のところ、ダルーハ軍の残党がどうなったのかは不明である。

「……だけど俺が北に着いた時にゃあ、ダルーハ軍の残党なんざ1人も生き残っちゃいなかった」

城壁にもたれて腕組みをしたまま、ゼノスは語る。

「改心してローエン派に入ったってのは嘘だ。証拠があるわけじゃねえが……ダルーハ軍の残党はな、間違いなく皆殺しにされてる。血の臭いみてえなもんが、まだ残ってやがったのよ」

「……少し興奮しているようね？　ゼノス王子」

「まあな」

牙を剥くように、ゼノスは微笑んだ。

「軍か何かが動いた様子もねえ。とにかく少人数で……下手すると1人で、ダルーハ軍の残党を皆殺しにした奴がいる。少なくとも、俺やあんたと同じくらいのバケモノだ」

メイフェムの頭にまず思い浮かんだのは、昨日ゴルジ・バルカウスから聞いた話である。

女王エル・ザナード1世が寡兵を率いてバルムガルド軍4万を撃退した、と言われている東国境の戦い。

ゴルジの話によると、かの女王が密かに使役している怪物がついに現れ、たった1匹で、バルムガルド軍兵士を少なくとも3000人近く虐殺したのだという。

ダルーハを討ち取った怪物ならば、人間の兵士3000人ごとき、殺し尽くすのは容易い事であろう。

そんな怪物を、エル・ザナード女王が秘密裏に操って、王国の治安を乱す輩を片っ端から狩り殺している。それは、充分に考えられ



る話だった。

「会ってみてえよ、そのバケモノに……もしかしたら、俺らの仲間になってくれるかも知れねえぜ？」

「……どうかしらね、それは」

その怪物の正体が、メイフェムの想像通りであるとしたら。

今は人間の女王に力を貸しているようだが、いずれ間違いなく人間の敵に回るだろう。だからと言って、ゴルジやメイフェムに力を貸してくれるとは限らない。

（赤き竜……お前の血が、この世に残ってしまったのだとしたら……）

「……ま、そんなわけで俺がやる事もなくなっちゃったんでな。ちようどサン・ローデルへ帰りたいがってる女の子が1人いたんで、その子と一緒にここまで来たわけなんだが。ちよつと何か面白そうな事になってんじゃねえか？　おい」

「確かに厄介事は持ち上がっているけれど……貴方に手を貸してもらうほどのものではないわ」

この男を介入させたくない、と思っている自分に、メイフェムは気付いた。いや、何者も介入させたくない。

（これは、私の戦い……！）

あの魔法の鎧を着た3人。

メルクトの若君は、信じられないほど戦いの技量を上げた。その従者のようなものであろう攻撃魔法兵士の少女も、なかなかの曲者である。

そして、確かブレン兵長とか呼ばれていた、獅子のような男。

あの3名が、3対1の戦いにもう少し専念出来るような状況であつたら、メイフェムも危なかった。生きてゼピト村を出る事が、出来たかどうか。

ケリスの死を穢し続ける人間どもを、どうあっても守ろうとするあの輩のおかげで、結局このサン・ローデルでは、ゴルジもメイフェムもほとんど何も出来なかった。

領主バウルファー・ゲドン侯爵を担ぎ上げて起こすはずだった戦乱は、今や準備段階で潰されかかっている。魔獣人間はことごとく始末され、ゴルジ・バルカウスも1人殺されてしまった。

無論メイフェム1人が責任を負うべき事ではない。

が、あの3色の魔法の鎧を着た者たちだけは、ここで片付けておかなければならないだろう。

何故ならあの3人は、メイフェム・グリム……魔獣人間バルロックと戦って、生きているからだ。

メイフェムが、仕留め損ねているからである。

(倒す……貴方たちだけは、この私が……！)

慌ただしい足音が複数、聞こえて来た。慌ただしい声と共にだ。

「こ、これは何事であるか！」

バウルファー・ゲドン侯爵が、衛兵数名を引き連れて、この場に踏み入って来たところである。

もはや死体とも呼べぬ有り様の兵隊や領民たち、それに魔獣人間バルロックの姿を目の当たりにして、侯爵も衛兵らも青ざめている。

「き……貴様はメイフェム・グリムか……」

「いかにも領主様。こんな姿でも貴方への忠誠心は変わりませんか、どうか安心なさって？」

人間の原形が辛うじて残る口元で、メイフェムは微笑みかけてみた。が、バウルファー侯は安心してくれない。

「きつ貴様は、また兵士を殺したのか！」

体格の良い侯爵が、まるで子供のように見苦しく喚き散らす。

「一体どうなっておる！ 貴様たちが来てからというものの、兵士の数が減るばかりで叛乱の準備など一向に整わぬではないか！ おまけにあの愚か者のカルゴめが、事もあるうに私に対して刺客を放ったそうな！ その刺客どもに貴様らの魔獣人間がことごとく討ち殺されておるとも聞く！ 申し開きをしてみせよメイフェム・グリム、貴様ら一体何の役に立っておると言うのだああああああ！」

喚くバウルファー侯の周囲で、衛兵たちの頭が片っ端から破裂し、

眼球や脳の飛沫を噴出させる。

「殿方が、あまり騒がしくなるものではなくってよ……」

脳漿にまみれた鞭を、侯爵の周囲で揺らめかせながら、メイフェムは言った。

「どっしりと構えていなさい……あんた自分じゃ何にも出来ない人なんだから。ね？」

「ひ……い……」

首から上が吹っ飛んだ衛兵たちの屍に囲まれて、バウルフアーが無様に尻餅をつく。

その様を嘲笑うように、ゼノスが言った。

「メイフェム殿に、ゴルジ殿からの伝言だ……こんな使えねえオヤジは捨てて、バルムガルドへ来てくれとよ」

「あら……ゴルジ殿は、サン・ローデルに見切りをつけたのかしら？」

「バルムガルドって国そのものを魔獣人間の実験に使えそうな状況に、なりつつあるらしい」

バルムガルドという国名を口にした、その一瞬だけ、ゼノス王子の不敵に整った顔立ちが微妙に歪んだ。

怒りや憎しみの表情に似ているようで、少し違う。哀れみ、のようでもある歪み方だ。

「バルムガルドが、ゴルジ殿の実験場に……このサン・ローデルのようになってしまうとしたら、貴方は満足？」

怒らせてしまうかも知れない質問を、メイフェムはゼノスにぶつけてみた。

「国民が片っ端から人狩りに遭って、残骸兵士に変えられてしまう。まあ1000人に1人くらいは魔獣人間になれるかも知れないけれど……とにかく国としては終わりね。そうなったとしたら、ゼノス王子は御満足かしら？ 貴方の目的は、バルムガルドへの復讐なのでしょう？」

「復讐ってのは自分の力でやるもんだぜ」

ゼノスは別に怒らず、苦笑した。

「本当に殺したい奴を、自分の手でブチ殺す。それが復讐<sup>てめえ</sup>ってもんだ。まわりくでえ事しなくても、今の俺なら出来るぜ？ バルムガルドのクソつたれどもを1人1人、丁寧**に**ぶっ殺す……ちよいと時間さえかけりゃ難しい事じゃねえ」

確かに、メイフェムが行っている程度の殺戮であれば、この男にも出来る。

バルムガルド王宮に単身押し入って、国王ジオノス2世以下、国の主だった者たちを皆殺しにするくらいは造作もない事であろう。だがゼノスは、それを実行しようとしない。

「簡単に出来る、となったら急にやる気が失せちまってな……よくローエン派の連中が言う、復讐は何も生まねえってのは、要するにこういう事なんだろうなあ」

「少し違う気もするけれど、まあいいわ。それよりゼノス王子、使い走りのような事をさせて申し訳ないけれど、ゴルジ殿に伝えてくれるかしら。メイフェムはもうしばらくサン・ローデルにとどまるとね」

「あんた……まさか、その使えねえ領主様に義理立てしてんじゃねえだろうな？」

座り込んで震えているバウルファー侯を、ゼノスは軽く睨んだ。確かに、メイフェムがサン・ローデル地方を去れば、この領主はメルクトの若君に捕えられるか殺されるしかない。

あの若君を含む、魔法の鎧の装着者3名を、このまま放ってはおけない。かつてのメイフェムやダルーハに似た、愚かなる者たち。

（貴方たちを倒すのは、この私……！）

その思いは、しかしゼノスに語って聞かせるようなものではない。だからメイフェムは言った。

「私が決着をつけないといけない戦いがある……ただ、それだけよ」

「……ま、好きにするさ。ゴルジ殿も急ぎってわけじゃねえだろう

しな。ところで」

メイフェムの足元で泣きじゃくっている小さな女の子に、ゼノスの目がちらりと向いた。

「その嬢ちゃんはどうするよ？　捨て猫を拾ったみてえに面倒を見るつもりかい」

「……ゼノス王子に差し上げるわ」

蟻の群れを、踏み潰した。1匹だけ潰し損ねた。その1匹だけを今さら、むきになって踏み殺す気にもなれない。

「何年か大切に飼っていれば、そこそこは綺麗な娘さんになりそうじゃない。今のうちに自分のものにしてしまっただろう？」

「……勘弁してくれ。俺にやもう結婚する相手がいるんだ。あんただって知ってんだろうが」

「片や一国の女王、片や滅びた国の王太子……まるで吟遊詩人の歌みたいな話よね」

「俺あもう王太子でも王子でもねえよ」

ゼノスは、暗く微笑んだ。

「……リグロア王国は、もう滅びちゃったんだ」

ゾルカ・ジェンキムに、本来ならば遺体を引き渡すべき親族がいるのかどうかはわからない。

わからぬまま、埋葬してしまった。

ゼピト村のはずれの、小さな森の中。エミリイの両親の墓の、近くである。

3年前にこの墓を作ってくれたローエン派の僧侶たちのやり方を模倣して、エミリイが唯一神教式の葬儀を執り行った。大勢の村人が参列し、村を守るために戦って命を落とした魔術師の、魂の安らぎを祈った。

もう1人、ゼピト村を守るために戦って命を落とした者がいる。それを知るのは、村人たちの中では、村長とエミリイだけだ。

「アサド……」

名を呟きながら、エミリイは見上げた。両親とゾルカ・ジェンキム、3名の墓を見下ろすようにそびえ立つ檜の巨木を。

その根元に、魔獣人間オーガートリスの遺灰を、可能な限り集めて埋めた。もちろん葬式など行っていない。

こうして自分1人、ひっそりと祈る。それ以外の何をしてやれると言うのか。人間をやめてまで村を守ろうとした、少年のために。

幼い頃は、この檜の木の周りを走り回って、よく一緒に遊んだものだ。

エミリイにとってのアサド・ラグは、そんな幼なじみの1人でしかない。

それ以上の思いが芽生えたりする前にエミリイは、あのローエン派の僧たちと一緒に、旅に出てしまったのだ。

帰って来た時には、アサドは人間ではなくなっていた。そして死んだ。誰に感謝をされる事もなく。

感謝をするだけならば、簡単だ。

いくら心の底から感謝をしたところで、しかしそれは決してアサドに届く事はない。

死んだ者に何かを届ける事など、出来はしないのだ。

両親の葬儀を行ってくれたローエン派の僧侶の1人が、旅の最中、エミリイに語った。

我々は宗教的儀式として弔いを行う。だけどエミリイ、君も心のどこかで気付いているだろう？ 死んだ者に対し、生きている者がしてやれる事など、本当は何もないんだ。大切な誰かの死というもの、生き残った者がただ受け止めるしかない。決して忘れられぬまま、心に抱き続けるしかないんだ。だから辛いのだ。生きるという事は、死ぬよりもずっと。

北の戦災地で出会った1人の若者も、言っていた。

生きている者が何をしたところで、死んだ者は喜んでくれない。悲しみもしない。何もしてはくれないのだ、と。

寒い時季でもないのに、エミリイは身震いをした。

あの若者の事を思い出す度に、身体が震える。恐怖が甦る。

恐怖だけではない、忘れ難いものをも、あの若者はエミリイの心に刻み込んでくれた。

己の父親を殺してきたばかりだ、と彼は言っていた。両親は本当に愛し合っていたが、まず母が病気で亡くなり、そのせいで父がおかしくなり、自分が殺さなければならなくなった、とも。

そして父がやらかした事の後始末まで、自分がする羽目になった。そう言いながら、あの若者は、エミリイの眼前で人を殺した。大勢の人間を殺した。

ダルーハ軍の残党を、彼はまるで掃除でもするかのように殺し尽くしたのだ。

アサドのように、人間ではないものへと変わりながら。

ローエン派による戦災復興活動が本格的に始まったのは、その直後からである。

あの人間ではない若者が、ダルーハ軍の残党を皆殺しにした後だからこそ、ローエン派の聖職者たちは全く手を汚す事なく、救世主のような顔をしていられるのだ。

とにかく北の戦災地は、ダルーハ軍の残党によって無法地帯と化していた。

そこへ、あの人間ならざる若者が現れ、戦災を被った人々を守るべく、ダルーハ軍残党と戦った。復興に微力を尽くそうとするエミリイたちをも、彼はついでに守ってくれた。

大勢の人間を守るため、あの若者は己の身を、返り血で大いに汚したのである。

ダルーハ軍残党を虐殺し尽くした後、彼は怯えるエミリイに向かって言った。

あとは、お前たちローエン派の出番だ。もはや神にすぎるしかなくなってしまった者たちを、せいぜい救ってやれ。

そう言い残し、あの若者は北の戦災地を去った。

入れ替わるように現れたのが、クラブー・ルマン大司教ら、唯一神教ローエン派の中核たる人々である。

彼らはドルーハ軍の暴威が完全に消え失せた北の地で、バルムガルド王国から与えられた金を民衆にばらまき、何の苦勞もなく危険な事も血生臭い事も一切せずに救世主面をしている。

ある1つの疑念を、エミリイは捨てられずにいた。

あの人間ではない若者は、クラブー大司教が金で雇った、汚れ役だったのではないか。

ローエン派の中枢にある人々が、自分たちの手は汚さず平和主義の建て前を保ったまま戦災地の救世主となるため、代わりに手を汚してくれる者を雇った。それが、あの若者だったのではないだろうか。

仮にそうであるにしても彼は、暴虐を働いていたドルーハ軍残党を一掃し、戦災地の人々を救ったのだ。それだけは、紛れもない事実なのである。

戦わなければ、そして殺さなければ守れないものが、確かにある。それを、あの若者は教えてくれた。

ローエン派の聖職者たちが綺麗事を言っている間にも、この世では大勢の人々が、綺麗事では決して守れないものを守るべく、戦っている。血まみれになっている。

リムレオン・エルベツトもそうだ。彼は、ゼピト村を守るために戦ってくれた。

その戦いで力尽き、血を吐いて倒れた。

エミリイがとりあえず癒しの力で傷を治しはしたが、彼の意識はまだ戻らない。

（リムレオン様……）

胸の内で、彼の名を呼んでみる。

無論、返事などあるわけではない。

エミリイの脳裏でリムレオンは今、己の血反吐に沈むが如く、倒れ伏している。



戦い、傷付き、倒れた少年の、血まみれの美貌。

思い浮かべる度に、エミリイの胸が切なく、狂おしく、高鳴る。  
心の中の弦きが、つい声に出てしまった。

「リムレオン様あ……」

「……リム様なら、まだ寝込んでるわよ」

高鳴る心臓が、そのままビクツと止まりかけた。

近くの木陰にシェファ・ランティが佇み、エミリイを見つめている。  
あるいは睨んでいる。

この少女も、リムレオンとほぼ同時に倒れ、気を失っていたのだ  
が。

「あ……し、シェファさん……良かった、気が付いたんですねっ」

「おかげさまでね」

応えつつシェファが、じっとエミリイを見据える。

「……で、リム様に何か用？ 何なら、あたしが言伝しておくけど」

「いえそんな、ただリムレオン様が心配で……すいません、勝手に  
心配させていただいてます」

シェファは懸命に、愛想笑いを浮かべた。そうしながら、心の中  
で詫びた。

（ごめんなさい、お父さん、お母さん……）

自分は今、墓前で、この上なくよこしまな妄想に浸りかけていた  
のだ。

（ごめんなさい、ゾルカ様……ごめんね、アサド……愚かなる下僕  
エミリイ・レアを、どうかお許し下さい唯一神よ……）

「……ありがとうね、エミリイさん」

軽く溜め息をつきながらシェファが、何やら礼を言っている。

「あたしの怪我も、治してくれたんでしょ？」

「癒しの力、くらいですから。あたしが自慢出来るのは」

唯一神の加護を発現させる技術を教えてくれたのも、あの僧侶た  
ちである。

「エミリイさんにも、この村の人たちにも……厄介になりっぱなし

よね、あたしたち」

「シェファさんたちは、この村を守ってくれたじゃないですか」

「……下手したら昨日のバケモノどもにこの村、皆殺しにされてたかも知れないのよ」

化け物、皆殺し。そういった単語を耳にすると、エミリイはやはりあの若者を思い出してしまう。

「あいつらだって、あたしたちがいるから来たわけだし」

「そんな、シェファさん……」

「……ま、迷惑だろうとは思うけど。せめて明日まで、この村に居させてくれると嬉しいな」

シェファが遠くを見つめた。領主バウルフアー・ゲドン侯爵の居城の方角をだ。

「明日になったら、あたしたち、ここの領主様と話つけに行くから……間違いなく殺し合いになるとは思うけど。あのバケモノ女もいる事だし、あたし生きてられるかわかんないから今言っとく。本当に、ありがとうねエミリイさん」

「……あたし、何もしてません。癒しの力は、あたしじゃなくて唯一神の御業です」

シェファもまた、戦おうとしている。戦わなければ守れないものを、守るために。

リムレオンを、守るために。

彼とシェファが、どういう関係にあるのか、どこまでの関係であるのか、大いに興味はあるがエミリイは考えない事にした。

少なくとも、自分が入り込む余地などない事だけは明らかだからだ。

### 第32話 狂乱の聖女と黒き魔少女

ゾルカ・ジェンキムが死んだ。

事もあるうに、メイフェム・グリムに殺害されたのだという。

（見てて恥ずかしくなるくらい結束の固かった貴方たちが……仲間割れの殺し合いとは、ね）

ブラックローラにとっては、しかしそれほど信じられない話ではなかった。

ダルーハ・ケスナー。ゾルカ・ジェンキム。メイフェム・グリム。ドルネオ・ゲヴィン。ケリス・ウェブナー。

どれほど巧みな離間の罠を仕掛けようと決して揺らぐ事のなかった、この5人の結束は、赤き竜という巨大なる目的があつてこそのものであったのだ。

その目的が失われてしまえば、何しろ英雄などと呼ばれるほど我の強い5名である。殺し合いの1度や2度くらいしても不思議はないと、ブラックローラは常々思っていたところだ。

5人のうち最も人格者であつたケリス・ウェブナーは、赤き竜との最終決戦で命を落とした。

メイフェムの狂気を止められる者がいなくなり、結果としてゾルカの命も失われた。

ドルネオ・ゲヴィンそしてダルーハ・ケスナーは、竜の御子が討ち果たした。

文句の付けようがない実績と言つていいだろう。

新たな帝王が血筋だけですんなり決まるほど、魔物の世界は甘くない。

だが御子は、自力でダルーハを倒し、父たる赤き竜の仇を討ったのだ。

新たな帝王として充分過ぎる実績を示した竜の御子を、しかし認めようとする者たちもいる。

「御子は一体、何をしておられる……！」

闇の中で蠢く者どもが、口々に不満を吐く。

「ようやくダルーハ・ケスナーを討ち取ったというのに、何の行動も起こさず……いや、人間どもを守るような行動ばかり取っておられる。いくら何でも酔狂が過ぎようぞ」

「その酔狂を手助けしている者がおる……ブラックローラ・プリズナ。貴様一体いかなるつもりであるか」

「いかなるつもり、とは？」

闇の中に、ブラックローラは微笑みかけた。

「ローラはただ、御子様にはお心のままに振る舞っていただきたいだけ。お心のまま我がままに振る舞う資格を、御子様はお持ちですわ……あの方は、貴方たち誰もが怖じ気づいて手も出せなかったダルーハ・ケスナーを、お1人で討ち取ってしまったのだから」

微笑みが、嘲笑に変わった。

「19年間ただ闇の中に引きこもって恨み言を並べているだけ、何の行動も起こさなかった方々が、御様を非難なさるなんて……あんまりにも滑稽で、無礼を咎める気にもなれませんわ。ローラ笑っちゃう」

「……言うものだな、元は人間の小娘風情が」

闇の中から聞こえる声に、殺意が籠る。

「そもそも何故こやつがここにいて、我らと対等に口をきいておるのだ」

「竜の御子に媚び入って大きな顔をしておるつもりなのであろう。

人間であった時の卑しさが、消えておらぬようだな」

「ええい、見ているだけで虫酸が走る。殺してしまおうか、このよくな小娘もどきは」

「……それは、おやめになって？」

ブラックローラは、にこやかさを保ち続けた。

「貴方たちは、とつても不味そう……人間の何倍もの長寿をダラダラ生きて費やすだけの、粗悪な生命力。そんなの食べたら、お肌の

艶が悪くなっちゃう。だから、おやめになってね」

「貴様……！」

闇に蠢く者たちが、いよいよ殺意を抑えられなくなり始めた、その時。

「そこまで……今は、我らこそ結束を固くせねばならぬ時よ。かつてのダルーハたちのようにな」

重い声が、ずしりと闇の中に響いた。

この場における1番の大物が、発した声だ。

「ブラックローラ・プリズナが人間であったのは、今より500年以上も昔の、それもほんの一時期であろう。今は我らの同志として立派に魔道を歩んでいる。それがわからぬか」

「ああん、ひどいわデーモンロード様。年齢としがバレちゃう」

かつて赤き竜の腹心であった魔物に対し、ブラックローラはおどけてみた。

闇の中で、デーモンロードは鷹揚に苦笑したようである。

「おぬしが500年以上を経た人外の者である事は、ここに集う全員が知っておる……ブラックローラだけではないぞ。人間という生き物は、意外に容易く人間ではないものへと変わる。ダルーハ・ケスナー然り、メイフェム・グリム然り、ゴルジ・バルカウス然り」  
ゴルジ・バルカウスという名を、闇の中に集う者たちは、すぐには思い出せずにいた。

「ゴルジ・バルカウス……とは、はて何者でありましたかな」

「どこぞで聞いたようでもあり……」

「あれよ。300年ばかり前に我らが滅ぼしたレグナード魔法王国の、生き残りではなかったかな」

「おう！ 思い出したわい。あの出来損ないの魔術師か」

「なけなしの魔力と知識を絞り出して、100年200年と生き長らえておったようだが……何と、まだ生きておったとはなあ」

「デーモンロード様ともあろう御方が、よもやあのような者を警戒しておられるなど」

闇の中に、いくつもの嘲笑がこだまする。それらが、

「……人間の執念を侮ってはならぬぞ。19年前、我らはそれで大いに不覚を取ったのだからな」

デーモンロードの一声で、ぴたりと静まった。

「特にあのゴルジ・バルカウスは、レグナード魔法王国の遺産を、そのまま受け継ぎ利用しておる」

「魔法王国の遺産……例の、魔獣人間製造の技術設備その他諸々ですな」

魔物たちが闇の中で、控え目に反論する。

「しかしデーモンロード様。出来損ないという言葉は、まさにあの魔獣人間とやという者どものためにこそあるようなもの。我々の力を中途半端に複製しただけの、粗悪な紛い物でございましょう？ あやつらは」

「その粗悪なる複製品の1つがな、竜の御子にとてつもない苦戦を強いたのだ。ブラックローラよ、おぬしは見ていたのであろう」

「……ドルネオ・ゲヴィン殿、ですわね」

ダルーハ配下の魔獣人間ケンタゴーレムとなったドルネオが、竜の御子を大いに叩きのめした、あの戦い。ブラックローラは鮮明に覚えている。

大して目立たなかったとは言え、赤き竜との戦いを最後まで生き抜いた戦士が、魔獣人間となった。その力はブラックローラの見たところ、ダルーハと比べてもさほど見劣りするものではなかった。

「魔獣人間の強さは、素材となる人間次第……デーモンロード様は、そうおっしゃりたいの？」

「そこまでわかっておるなら理解出来ようブラックローラよ。少なくともドルネオ・ゲヴィンと同格と思われる素材が1つ、ゴルジの手によって魔獣人間となったのだ。樂觀出来る事態ではあるまい」  
メイフェム・グリム。人間であった頃から怪物の心を持っていた、アゼル派の尼僧。

今では肉体までもが怪物と化し、人間たちを大いに殺戮している。

思わず感心してしまうほどの殺しぶりだ。

「ローラは、メイフェム殿とは仲良く出来そうな気がいたしますの。あの方は、人間であられた頃から何となく……こちら側、でしたわ」  
「それを見極めねばならん」

会議を締めくくる口調で、デーモンロードは告げた。

「今の我々には、見極めねばならぬ事が多過ぎる。ゴルジ・バルカウスが今でも我らへの復讐を考えておるのか、メイフェム・グリムはそれに手を貸すべく魔獣人間となったのか。あやつらと、戦うべきか手を結ぶべきか。ブラックローラの言う通り、メイフェムだけをこちらに引き込む事は可能であるのか」

「お待ち下されデーモンロード様、あやつらと手を結ぶ？ 引き込む、ですと？ 何故そのような事をする必要が」

「決まっておろう……」

デーモンロードの声が、低く、重く、闇の中に響いた。

「我ら、事によっては竜の御子とも戦わねばなくなる。味方は多い方が良い」

「……御子が、人間どもを守るべく我々と袂を分かつ、と？」

「それも見極めねばならぬ、という事だ」

あわよくば竜の御子を亡き者として、自身が帝王となる。そんなデーモンロードの本心というか野心を、ブラックローラは垣間見た。その程度の野望は、あって当然であろう。

配下の者たちの、そんな野心・反逆心を、赤き竜は力で押さえ込んで君臨していたものだ。

（御子様……貴方に、それが出来るかしら？）

いくらかは緑のある、それでも岩場と言っていいような場所である。

ゼピト村から領主の城までは、ここを通って行くのが最も近道であるらしい。

年長者のブレンが、シェファとリムレオンを引率するような感じで3人、領主の城へと向かっているところだ。

最後尾をとぼとぼ歩きながらリムレオンが、浮かない顔をしている。妬ましくなるほど可愛い顔が、憂いに沈んでいる。

無理もあるまい、とシェファは思う。これから自分の伯父を、恐らくは殺さなければならぬのだ。

シェファもリムレオンも、元は人間であつた生き物を殺害した事はあつても、人間を殺した事はない。

ふとシェファは、訊いてみたくなつた。

「ブレン兵長は、人を殺した事……あります、よね？ もちろん」

「何かの参考になるような話でもないが、聞いてみたいか？」

ぜひ聞かせて下さい、とシェファが答えるのを待たず、ブレンは語り始めた。

「俺が初めて人殺しをしたのは、お前よりも1つか2つ年下の時……赤き竜がこの国を蹂躪しまくっていた頃だ。当時は人間の中にも、魔物どもの手下になって悪さをする者が多くてな。メルクトにもいた。で、そういう輩を討伐するための戦に、レミオル侯が俺を伴ってくれたのだ」

メルクト地方の前領主レミオル・エルベツト侯爵は、孫のリムレオンとは似ても似つかぬ勇猛な人物であつたらしい。

「やっぱり戦で……殺さなきゃ自分が殺される状況だったから、殺した？」

「そう、でもなかったかな。今思うと」

歩きながらブレンは上を向き、何か思い出す仕草をしている。

「何しろレミオル侯は、剛勇無双そのものな御方だったからな。向かって来る敵は、侯爵がお1人で皆殺しにして下さったようなものだ。俺がやった事と言えば、レミオル侯から逃げ惑って勝手に転んだり命乞いしたりする者どもを、草刈りの如く殺して回ったくらいだ。弱い者いじめと大して変わらん」

淡々と語るブレンに、シェファはなおも問いかけてみる。



「殺した後で吐き気催したり……その夜、眠れなかったりとかは？」

「特にそんな事もなかったなあ。晩飯をたらふく食って、ぐっすり寝た。何しろ疲れたからな」

「疲れましたか……」

「そうだ。人間を殺すと、とにかく疲れる。ただそれだけの事だ」

自分は疲れもしなかった、とシェファは思った。あの残骸兵士たちを初めて虐殺した時、シェファが感じたのは、魔力のほんの僅かな消耗だけだ。

「……本当は、食べ物も喉を通らず一睡も出来なかった……のでは  
ないですか」

リムレオンが、ようやく言葉を発した。

「そんな事は今さら自慢げに語るものでもないから、語らずにいる  
だけ……違いますか、ブレン兵長」

「それは、御想像にお任せいたします」

言いつつ、ブレンは顔だけを振り向かせた。タテガミのような頭  
髪とヒゲに囲まれた顔面が、ニヤリと不敵に歪む。

「とにかく若君、これだけは肝にお銘じ下さいませよ。人など殺せ  
たところで、偉くも何ともないのです……御自分の手を汚してこそ  
一人前、などという考えは、どうかお持ちになりませんように」

「僕が……そんな考えを、持っていると？」

「そのように見えてしまうのですよ、どうしても」

「……リム様、まさか」

シェファは歩きながら振り返り、思わずリムレオンを睨みつけて  
しまった。

「あたしにばかり汚れ役押し付けて……なあんて、まだ考えてん  
じゃないでしょうね？」

「……僕はきつと、自分の手が汚れるのを、無意識に嫌がっている」  
リムレオンが俯き、くだらない事を言い始める。

「だから、いつまで経っても強くなれない……シェファやブレン兵  
長の足を引っ張るような戦いしか、出来ない」

「リム様ねえ……！」

シェファは呆れ返るしかなかった。

自身の伯父との戦いを憂鬱に感じているのだとばかり思っていたが、それよりもずっとつまらない事で、この若君は悩んでいたようだ。

「若君」

ブレン兵長の力強い手が、リムレオンの細い肩をガツシと掴んだ。傷跡のある獅子のような顔が、ニコニコと獰猛に歪み、若君の弱々しい美貌と間近から向かい合う。

「このブレン・バイアスがどれほど容赦のない人間であるかは、ご存じですか？」

「そ、それはもう」

リムレオンは息を呑み、ブレンは微笑んでいる。

「戦いで私の足を引っ張る者がいたら、それが若君であろうとシェファであろうと、私は容赦いたしません……魔法の鎧の上からでも、首をへし折って差し上げます。若君が本当に足手まといであられたなら、とうの昔に私はそれをしておりますぞ」

そしてカルゴ侯爵には、若君は雄々しく戦死なされたと報告する。冗談抜きでそのくらいの事をやりかねない笑顔のまま、ブレンは言う。

「ですが若君はまだ生きておられる。私にも敵に殺される事なく、御自身の力で戦い生き抜いて来られたのです。もう少し自信をお持ちなされ。いくらか自惚れるくらいで、若君はちょうど良いのかも知れませんが……自惚れが過ぎるようであれば、私が叩き直して差し上げますゆえ」

「それは……助かります」

リムレオンが引きつった笑いを浮かべる。暗い顔をされるよりは、まあましだ。

シェファがそう思った、その時。

「止まれ」

横柄な声がかけられた。

周囲の岩陰から、武装した男たちの姿が、ばらばらと現れている。槍が、長剣が、3人に突き付けられる。

バウルファア侯爵に仕えているのであろう、兵士たちだ。

「貴様たち、どこへ行くつもりかな？」

「見ての通り、ただ歩いているだけだが」

ブレンが答えた。

「この辺りでは、地面の上を歩くのに誰かの許可をもらわねばならんのかな」

「ほおう、官憲を相手に何て口ききやがる。こいつあますます怪しい奴らよ」

「ちよいと調べさしてもらうぜえー。そ、そっちの嬢ちゃんからよお」

何人かがニヤニヤと劣情を丸出しにして、シェファに迫ろうとする。

その何名かの眼前に、リムレオンが立ち塞がった。

「ちよつとリム様、また無茶して……」

「何だ、綺麗な坊やだなあオイ。おめえのケツから調べてやるかあ？ コイツを突っ込んでよお」

槍が1本、リムレオンに突き付けられる。

その穂先が突然、宙を舞った。柄が切断されていた。

単なる棒と化した槍を持ったまま、兵士が呆然としている。

リムレオンが、いつの間にか長剣を抜いていた。

腰の鞘から抜き放つと同時に、槍を切断。魔法の鎧を着ていないリムレオンが、そんな剣技を披露したのだ。

シェファも、呆然としてしまった。リムレオンは今、その気になれば、兵士の槍ではなく首を斬り落とす事も出来たのではないのか。この若君が、剣士として腕を上げている。それはシェファにとって、違和感すら感じさせるほどの事態だった。

そんなシェファを背後に庇いながらリムレオンは、抜き身の長剣

を兵士たちに向けている。そして告げる。

「貴方たちは、もう官憲ではありません。バウルファー・ゲドンは逆賊ですから……このままでは貴方たちも、討伐の対象になってしまいますよ」

「こッ、このガキ！」

兵隊が逆上し、槍や長剣の構えを、脅しから攻撃へと切り替える。舌打ちをしながら、ブレン兵長が動いた。

「バカどもが……！」

太い腕がブウンッ！ と唸りを発する。拳か手刀か判然としない、とにかく素手の一撃。

長剣と槍をそれぞれ構えた兵士2人が、血飛沫を舞わせて吹っ飛んだ。

「若君はな、黙ってここを通してくれれば貴様たちの命を助けてやる、と言っておられるのだ」

ブレンの重い蹴りが、槍を叩き折りつつ、兵士の腹部に打ち込まれる。

腹を抱えて吐瀉物をぶちまけながら、その兵士は倒れて痙攣した。「その温情を理解せぬ不屈き者ども……貴様らが魔獣人間の類であれば、容赦なく叩き殺しているところだぞ」

「野郎！ 叩っ殺されんなあテメーの方だっつうううのツツ！」喚き、槍や剣を振り立て、凶暴に群がる兵士たち。そのまっただ中に、ブレンの方から踏み込んで行く。

兵長の巨体が、まさに獅子の如くしなやかに獰猛に躍動する。岩のような拳が打ち込まれ、鉈のような手刀が一閃し、丸太で殴るような蹴りが唸る。

槍が折れ、長剣が弾け飛び、血飛沫が散った。

シェファが息を呑んでいる間に、立っている兵士は1人もいなくなっていた。全員、地面に倒れて弱々しくのたうち、死にかけた芋虫のような様を晒している。辛うじて1人も死んではない。

自分なら躊躇なく魔法の鎧を装着し、片っ端から焼き殺していた

だろう、とシェファは思った。

倒れ呻いている兵士たちに向かって、ブレンは言い放った。

「その辺の村で手当てをしてもらえ……まともに手当てをしてもらえるかどうかは貴様らの、日頃の領民への接し方次第だな」

返事の代わりのように、悲鳴が上がった。

倒れていた兵士の1人が、宙に浮いている。その鳩尾の辺りに、巨大なサソリの尻尾のようなものが突き刺さり、背中へと抜けていた。

「さ……せねえよ、手当てなんざあ……」

声がした。明らかに人間ではなくなっているものが、無理矢理に人語を発している。

少し離れた所に、それは立っていた。一応は人の体型をした、肉塊あるいは臓物の集合体。その左腕からサソリの尻尾のようなものが生え、触手状に伸び、兵士の身体を突き刺しながら引きずり立たせているのだ。

「うげ……げっげげ、やっとテメエらをぶち殺せる時が来たああ……そのために俺あわざと人狩りに捕まって、ゴルジ様にイジってもらったんだよオーん」

何者であるのかは考えるまでもない、残骸兵士である。シェファがこれまで虐殺してきた者たちと比べて、かなり魔獣人間に近いところまで達してはいるようだ。

それが、もう1体。

「て、テメーら無能兵隊ども、いつもいつも威張りくさりやがってよおおおおお！」

いや、3体、5体……10体を超える残骸兵士たちが、現れ群がって来ていた。

「おっ俺らの税金で生きてる奴らがよお、でけえツラしてんじゃねエーッ！」

「お前！　せっかく高い賄賂払ってやったのに！　何の便宜も図ってくれなかったよなああああ！」

「てめえらクソどものために税金なんざ納めてられっかバァァァァァカ」

魔獣人間まであと少しという段階で止まってしまった者たちが、カギ爪を、牙を、触手やハサミを振るい、兵士らを切り刻み叩き潰す。

ブレンに手加減され、命だけは助かっていた男たちが、ことごとく原形を失って空中に飛び散り、地面にぶちまけられた。

唾然としていたブレンの表情が突然、引き締まり緊迫した。何かの気配を察知した、ようである。

「若君、危ない！」

叫びと共に、ブレンの巨体が突っ込んで来る。容赦のない体当たりが、リムレオンとシェファをまとめて突き飛ばす。

今回はまあエミリイが近くににいるわけでもなし、と思いながらシェファが地面にぶつかり、辛うじて受け身を取った、その時。

直前までリムレオンが立っていた辺りで、白い爆発が起こった。

何者かによる攻撃魔法、であろうか。

ブレンが大型肉食獣の動きで地面を転がり、その爆発をかわしている。

「上手くかわすものねえ、さすがに……」

ぞっとするほど涼やかな女の声が、上の方から降って来た。

凹凸の見事な肢体を、唯一神教の法衣で禁欲的に包み込んだ姿が、岩壁の上に立っている。

「かわさなければ楽に死ねたものを……うふっ、ふっふふふ、あっははははは」

白い光を発射したばかりの片手を揺らめかせ、高笑いをしているメイフェム・グリム。

まずはブレンが、声を投げた。

「……何がおかしい」

「高い所へ上るとねえ、馬鹿笑いをしてみたくなるものよ？」

答えつつメイフェムが、全身をメキッ！と痙攣させる。

「ほんと、笑えるくらいに醜く無様だから……ケリスの命を穢しながら、地面を這いずる者どもが……ね……」

法衣が下着もろとも破けて散り、翼が広がった。羽毛の翼と、皮膜の翼。

左右形の異なるそれらが、清らかなる聖女の裸身を背後から包み隠す。

「笑える……けれど、笑って許してあげる……わけには、いかないのよ」

翼が開き、魔獣人間バルロックの姿が露わになった。

が、それすら一瞬どうでもよく思えてしまうような事が今、シェファの近くで起こっている。

「あ……ン……押し倒されて、しまいましたわ……」

リムレオンが、1人の女の子と重なり合って倒れている。

ひらひらした、短く薄手の黒いドレスに身を包んだ、細身の美少女。リムレオンの身体の下で、嫌らしい身じろぎをしている。

「ローラはこれから、何をされてしまうの……？」

「ご、ごめん！」

慌てて身を起こし離れようとするリムレオンの首に、少女の細腕がするりと絡み付く。

「すごいわ、ローラこんなの初めて……ほんの一しずくの、綺麗な生命力……」

「な……何を……」

うろたえるリムレオンの、妬ましいほど滑らかな頬に、少女の可憐な唇が近付けられる。

「口づけだけで吸い尽くしてしまいそうな、儂くて甘美な命……魔法の鎧の下に、こんな美味しそうな殿方がいらしたなんて……」

「え……っと、君、どこかで……？」

リムレオンが、うろたえながらも訝しんでいる。

確かに、どこかで見たような女の子はあるが、ゆっくりと思いつくよりも先にやらなければならない事がある。

「ねえリム様、すっ転ぶ度に女の子とぶつかっちゃうってのは一体……どうゆう特異体質なのよねえちょっとおおお！」

「そ、そんな事を言われても……」

困っているリムレオンの首根っこを掴んで引きずり寄せながら、シェファはブレン兵長を睨み、怒鳴った。

「わざと？ やっぱわざとやってんでしょオッサンこら！」

「何の話だ！」

魔獣人間バルロックが、岩壁の上から、飛び蹴りで降って来たところである。急降下して来た猛禽の爪を、ブレンは跳んでかわしていた。

大型肉食獣を思わせる巨体が、着地しつつ転がり込み、残骸兵士たちの触手や爪を回避する。

起き上がる動きと共に、ブレンは右拳を、天空へと向かって突き上げた。

「武装……転身ッ！」

太い中指に巻き付いた竜の指輪が、光を発した。

その光が上空に投影され、輝く紋様が空中に描き出される。様々な記号を内包した、真円。

それが、雷鳴を発した。

降り注ぐ稲妻の中、ブレンの姿は、黄銅色の全身甲冑をまとう勇壮なる騎士へと変わってゆく。

そこへ、魔獣人間バルロックが襲いかかる。振り上げた右手を、白く発光させながら。

「唯一神の御許へ送ってあげるわ……貴方たちだけは、この私が！」  
白い光が実体を得て長剣となり、メイフェムの叫び・踏み込みと共に一閃した。

ブレンも、魔法の戦斧を一閃させていた。

2つの武器が激突し、焦げ臭い火花を飛び散らせる。

「あらまあ……変わってしまったわれたのねえメイフェム殿ってば」

黒衣の美少女が、片手を庇にして見物しながら、呑気な声を出し



ている。

「あんなんじゃないあ、もう殿方は寄り付きませんわねえ……ケリス殿お1人に、操を立てていらっしゃるのねえ」

「あんた……」

シェファは魔石の杖を、黒衣の少女に突き付けた。

先端の魔石が、ぼお……と赤く輝き始める。

「思い出したわ、もう1人のバケモノ女……リム様に付きまとしてたわけ？」

「ブラックローラ・プリズナと申します。そんな、こちらの若様に付きまとしていたわけではありませんわ。ローラが付きまとして調べて見極めなければいけないのは、あちらのメイフェム・グリム殿の方……」

「君は……あの時の……」

リムレオンも、思い出したようである。

トルル1匹を、触れただけで粉々の乾燥死体に変えた、少なくとも人間ではない少女。

人間ではあり得ない魔的な美貌が、リムレオンに向かってニッコリと妖しく歪む。

「でも何だか、メイフェム殿の事なんてどうでも良くなってしまいましたわ……だって、こんな美味しそうな若様とお近付きに」

「お近付くんじゃないってのよ、バケモノ女がリム様につ」

怒りの魔力が流れ込みつつある杖を、シェファはさらに突き付けた。

赤熱する魔石をかわしつつ、ブラックローラがおどけている。

「ああん駄目、貴女の生命力はとっても不味そう……この世で一番不味いもの、それはドロドロした女の情念。そんなの食べたら、お肌の年齢が100歳くらい上がっちゃう」

「その綺麗なお肌……ひん剥いてやる！ どうせその下に、魔獣人間と同じようなゲテモノの身体！ 隠してんでしょーがあああッ！」  
「だ、駄目だよシェファ。落ち着こう」

「リム様もっ！ 何でゲテモノ女なんか庇ってんのよ！」

「か、庇ってるわけじゃ……」

「ふふっ……竜の御子様みたいな俺様系の方も素敵だけど、お尻に敷かれ気味な殿方も……ローラは嫌いじゃありませんのよ？」

「誰もアンタの好みなんて訊いてない！ バケモノ女はバケモノの牡とくつついてりゃいいでしょうがあああああッッ！」

「おおい、まだかかりそうか」

ブレン兵長が、いささか切羽詰まった声を出している。

豪雨の如く切りかかって来るバルロックの長剣と、時折一閃する猛禽の爪。それらを魔法の斧でことごとく弾き返しながらも、ブレンはじりじりと後退を強いられている。

残骸兵士たちが遠巻きに群れながらも、メイフェムに加勢する機会をうかがっているようだ。

防戦一方のまま、ブレンは辛うじて声を発した。

「取り込み中すまんが、そろそろ戦ってくれんかな」

「あ……す、すみません！」

リムレオンが右拳を握り、屈み込んで地面を殴った。その地面に、光の紋様が広がった。

「シェファ、行くよ……武装転身！」

「そうね、バケモノ女は2匹とも始末しないと……武装、転身」

右手をかざし、身を翻す。竜の指輪からキラキラとこぼれ出た青い光が、シェファの全身にまとわりつく。

リムレオンの全身は、すでに白色の魔法の鎧に包まれている。

颯爽たる白騎士の姿が、ブレンに加勢するべく風のように駆け出した。

残骸兵士が3体、その行く手を阻んで、カギ爪と触手とハサミを振るう。

それらを擦り抜けて、リムレオンは駆けた。疾駆に合わせて、左右の拳が放たれる。魔法の手甲をまとった拳。残骸兵士が2体グシヤッ、バキィッ！ と吹っ飛びながら破裂し、脳だか臓物だかを噴

き上げる。

それと同時にリムレオンは、半ば跳躍するように片足を跳ね上げていた。下から上へと一閃する、斬撃にも似た蹴り。3体目の残骸兵士が、噴き上がるように飛び散って原形を失った。

蹴り上げた足で即座に踏み込み、ブレンの加勢に向かおうとするリムレオン。

その近くに、何者かが着地した。着地と同時の、襲撃だった。

甲高い金属の激突音が、響き渡る。

リムレオンが、いつの間にか魔法の剣を抜いていた。その刃に、同じく抜き身の長剣がぶつかったところである。

「く……っ」

面頬の内側で歯を食いしぼるリムレオン。魔法の鎧を着ていながら、1人の生身の剣士に押し込まれている。

「ほう……鎧の頑丈さに頼らず、ちゃんと剣を抜いて防御するじゃねえか」

顔立ちの整った、見るからに不敵そうな若い男。リムレオンと剣を押し付け合いながら、牙を剥くように微笑んでいる。

「メルクトの若君ってのはアンタだな……気に入った。仲良く出来そうだ」

「ゼノス王子！ 手を出さないで！」

魔法の戦斧による反撃をかわしながら、バルロックが叫んだ。

「魔法の鎧の装着者は、3人とも私の獲物！ 私が決着をつけなければいけない戦い！ そう言ったでしょう！」

「なあメイフェム殿。美味しいモノの独り占めは、唯一神の教えに反するんじゃないかねえのかい」

どこの王子かは不明だが、とにかくゼノス王子と呼ばれた男が、交わる刃と刃を挟んでリムレオンと睨み合いつつ、ニヤリと笑みを深くする。整った口元で、白い牙が光った。

歯と言うより、間違いなく牙だ。

「1人くらい俺によこせ……復讐なんぞより、ずっと美味しい思い

が出来そうだぜえ」

### 第33話 狂乱の聖女と魔獣王子

以前は、魔法の鎧が勝手に動いてくれた。

今は、己の意思で手足を動かしているという実感がある。

もちろんそれは錯覚で、本当は魔法の鎧がリムレオンを内包したまま、相変わず勝手に戦ってくれているのかも知れない。

だが動いているのは自分の手足だ、とリムレオンは感じた。魔法の鎧に取り込まれた、もう1人の自分などではない。そんなものはない。

戦うのも、殺すのも、そして負ければ殺されるのも、たった1人しかないリムレオン・エルベツトなのだ。

「おめえさん、メルクトのエルベツト家の若君って事あ……あのティアンナ姫の、兄貴だか従兄だか」

そんな言葉と共にゼノスは地面に転がり込んでかわし、即座に起き上がり、また斬り掛かって来る。まさに獣の動きだ。で漂って来る。

「って事あ、俺にとっても兄貴みてえなもんだなあ……兄さああああん！」

「わけのわからない事を……！」  
猛烈な斬撃を魔法の剣で受け流しながら、リムレオンは片足を跳ね上げた。

その蹴りを、ゼノスは地面に転がり込んでかわし、即座に起き上がり、また斬り掛かって来る。まさに獣の動きだ。

「嫁だから！」  
謎めいた叫びと共に襲い来る長剣を、リムレオンは後退りで回避した。

暴風のような斬撃が、目の前を激しく通過し、すぐさま角度を変え、振り下ろされて来る。

「ティアンナ姫は俺の嫁だから！ そこんとこヨロシク兄さん！」

「何を……言っている？」

第2撃、3撃。息つく間もなく閃くゼノスの長剣を、リムレオンは辛うじてかわした。

4撃目はかわしきれず、魔法の剣で受けた。ぶつかった刀身と刀身が、甲高く音を響かせる。

その響きが空中に残っている間も、ゼノスは獣の如く躍動し、長剣を振るい、斬撃を降らせて来る。うち何発かが魔法の鎧をかすめ、火花を散らせた。

「政略結婚でもさあ、愛を育む事って出来ると思うわけよ」

全く理解不能な事を口走りつつ、ゼノスが長剣を振り下ろす。

その落雷の如き斬撃を、リムレオンは魔法の剣でガキーン！と受け止めた。ぶつかり合った刃と刃が、そのまま噛み合い、動かなくなった。

擦れ合う2本の刀身の向こうでゼノスが、なおも意味不明な事を言い続ける。

「そーゆうワケだからさあ、俺が勝ったらちゃんとティアンナ姫に会わせてくれよなっ兄さん」

「お前……ッ」

この男が何者であるのかは当然、わからない。リムレオンはただ、気に入らない、と思った。

女王エル・ザナード1世を、ティアンナなどと馴れ馴れしく本名で呼ぶ。それが気に入らなかった。

その思いが、口調に籠った。

「……ティアンナは忙しいんだ。お前なんか相手にするわけがないだろうっ」

「てめ……何呼び捨てにしてんだ人の嫁さんをおおおおおおおおおおッ！」

ゼノスが突然、逆上した。

と同時に、リムレオンの腹にズドッ！と衝撃がめり込んで来る。魔法の鎧でも防ぎきれない衝撃。

ゼノスの、蹴りだった。

「うっ……く……」

息を詰まらせ、身を折るリムレオン。

そこへゼノスの長剣が、断頭台の刃の如く振り下ろされる。

「馴れ馴れしいぞデメエ、兄貴だか従兄だか知らねえがッ!」

怒声と同時の斬撃を、リムレオンは倒れ込んでかわし、呼吸も回復せぬまま起き上がった。

そして魔法の剣を構え直そうとするところへ、ゼノスのさらなる斬撃が襲い来る。

「馴れ馴れしく名前で呼び合うような関係かぁーてめえら!」

怒りの一撃が、構えの整わぬリムレオンの両手から、魔法の剣を打ち飛ばした。感覚がなくなるほどの痺れが、リムレオンの左右の前腕を襲った。

そこへゼノスが、容赦なく踏み込んで来る。

「まさかイトコ同士であんな事やこんなコトしたりされたりする関係じゃねーだろうなあああああああああああ!」

長剣が、まっすぐ心臓に向かって突き込まれて来た。

リムレオンは、ほんの少しだけ右方向へと身体をずらした。魔法の鎧が、ではなく自分の身体が勝手に動いた。ブレン兵長との訓練を、肉体が覚えてくれている。

心臓を狙っていた切っ先が、左の脇の下をかすめて通過する。

リムレオンはそのまま左腕で、ゼノスの右腕を抱え込んだ。抱え込んだ腕に右手を添え、関節を極めた。

「ぐっ……」

極められた右腕が、ぼろりと長剣を手放す。

人間の腕ならば、容易く折れているところだ。が、このゼノスという男は恐らく、いや間違いなく、人間ではない。

人間ではない男が、ティアナを狙っているのだ。

「お前が何者なのかは知らない……けれど、野放しにはしておけないっ」

「へ……だったらどうするよ兄さん、ええおい！」

リムレオンの視界がいきなり暗転し、その闇の中で火花が散った。ゼノスの、頭突きだった。面頬が凹んだかと思えるほどの衝撃である。

よろめくりムレオンの腕を無理矢理に振りほどき、ゼノスは叫ぶ。「野放しに出来ねえならブチ殺してみろ俺を、俺を！ 俺をををを！」

リムレオンの身体が物のように振り回され、近くの岩壁に激突する。

落とした長剣を拾おうともせずにゼノスは素手で、リムレオンの頭を岩壁に押し付け、擦り付けながら走り出した。

魔法の兜が、面頬が、ガリガリガリツと岩を削って火花を散らす。リムレオンの意識が遠くなりかけた。それでもゼノスの叫びは聞こえる。

「殺してみろ俺を、じゃねえとティアンナ姫が俺のモノになっちゃうぞ？ 毎日毎日あんな事やこんなコトしちまうぞおお？ どうするどうする、どうするよ兄さああああああああん！」

「誰がっ……兄さんのよッ！」

走るゼノスの前方で待ち構えていたシェファが、両手で魔石の杖を振るった。

青い魔法の鎧をまとった細身が、柔らかくねじれる。腰の力が充分に入った、一振りである。

パリパリと電光を帯びた魔石の杖が、ゼノスの顔面を直撃していた。噴出した大量の鼻血が、電熱に灼かれて蒸発する。

「ぐぶ……う……」

出血・感電しながらゼノスが後方に吹っ飛び、倒れ、のたうち回る。

リムレオンも、岩壁を擦ってずり落ちながら倒れ込んでいた。

脳が、まだ揺さぶられているような感じである。魔法の兜がなかったら、頭蓋骨を擦り下ろされていたところだ。



「リム様、大丈夫？」

「だ、大丈夫……ありがとう、シェファ」

少女に助け起こされてリムレオンは立ち上がり、見回した。残骸兵士たちは1体残らず、あちこちで消し炭の塊と化し、ブスブスと煙を立ち上らせている。シェファが、またしても手を汚してくれたようだ。

「……こいつ、なめてるわね。あたしたちの事」

鼻血を垂れ流しつつ感電し転げ回っているゼノスに、シェファは魔石の杖を向けた。

「バケモノのくせに、人間の皮かぶったまんま戦うなんて……まあいいわ。本当の姿と実力、出されないうちに片付けちゃいましょうか」

ぼんやりと赤く輝く魔石に、魔力を集中させてゆくシェファ。

それを妨害する形に、何か巨大なものが飛んで来た。投げ飛ばされて来たのか、蹴り飛ばされたのか。

とにかくそれを、シェファはかわした。

かわした少女の足元にドシャアツと倒れ込んだのは、黄銅色の甲冑に包まれた巨体である。

「ブレン兵長！」

リムレオンは屈み込み、助け起こした。

男2人を背後に庇ってシェファが身構え、ブレンを叩き飛ばした何者かに魔石の杖を向ける。

「本当……手こずらせて、くれるわね」

メイフェム・グリム……魔獣人間バルロックが、血まみれで立っている。その肉体のあちこちがザクザクと裂け、とめどなく鮮血を溢れ出させていた。魔法の戦斧による傷であろう。致命傷と言えるほどの深手ではないが、軽傷でもない。

「それほどの力、ケリスの命を穢すゴミクスどもを守るために使うなんて……ああもう、許せないったら」

「別にねえ、あんたに許してもらおうって気はないのよっ！」

シェファの怒声に合わせ、魔石の杖がドギョルルルルッ！と一直線に光を放った。ゼノスに向けて放たれるはずだった、真紅の光の束。

それが、バルロックの眼前で何かに激突し、止まった。

唯一神の加護による。不可視の防壁。

ぶつかり合ったそれらが、もろともに砕け散った。赤と白の光の破片がキラキラと散り、消える。

その間、バルロックの全身が、淡い光に包まれていた。

光の中、ブレンが懸命に負わせたのであろう幾つもの裂傷が、塞がって瘡蓋となる。

光が失せると同時に、それら瘡蓋がボロボロと剥がれ落ち、その下から魔獣人間の無傷の肌が現れる。

癒しの力。

このメイフェム・グリムという女は、人間をやめた身でありながら唯一神への信仰心を失っていない。強大な魔獣人間であると同時に、19年前の竜退治の時と同じ、手練の聖職者でもあるのだ。

「ちょっと、あんた……それ、ズルくない？」

シェファが呆然と呻き、メイフェムが嫣然と微笑む。

「遠慮する事はないのよ。貴女たちも、どんどんズルをなさい……例えば、そのゼノス王子を人質に取ってみてはどう？」

「おっ俺なんか平気で見殺しにすんだろうがよ、アンタは」  
鼻血を拭いながら、ゼノスが立ち上がる。

ブレンも、リムレオンの腕の中から、よろりと身を起こした。

「兵長……大丈夫ですか？」

「参りました……いくら傷を負わせても、すぐあのよう回復させてしまう」

厳つい面頬の内側でブレンが、息も絶え絶えに苦笑している。

「馬鹿げた戦闘能力のみならず、自己補給能力まで備えている……まさに1人軍隊です、あの女は」

「そう絶望する事ありませんわ」

黒い、優美な姿が1つ、こちら側にユラリと立った。今のところ、こちら側に味方をしている形である。

「いくら癒しの力でも、流れ出た血の量まで回復出来るものではないかもしれませんから……それに唯一神の御加護と言っても、その発現は気力の消耗を伴うもの。無限に続くものではありませんわ。そうでしょう？　メイフェム殿」

「ブラックローラ・プリズナ……」

少なくとも、再会を喜び合う口調ではなかった。

「赤き竜の飼っていた牝コウモリが、相変わらず鬱陶しく飛び回っているものね。まさかとは思うけれど……人間の味方をしているつもり、ではないでしょうね？　人間を手当り次第にしゃぶって食い散らかしていたお前が」

「誰の味方をして誰を敵とするべきか……ローラたちは今、模索している最中ですよ」

ブラックローラが1歩、こちら側から、メイフェムの方へと歩み寄った。

「ねえメイフェム殿……仲直り、しません？　ローラは貴女とだったら仲良く出来そう」

「この私に……赤き竜の残党に加われ、と？」

「戦闘中にちまちまとダルーハの傷を治してウザい思いさせてくれた事、くらいは許して差し上げますから。ね？　ローラと一緒に、竜の御子を支えてあげて下さいな」

「お前と一緒に……ふ、ふふっ……うっふふふふ、なっ何度も、何度も何度も」

声を、身体を震わせ、魔獣人間バルロックが笑い出す。

「牝コウモリの分際で何度も何度も、ケリスを何度も何度も誘惑して……何度も何度もケリスに手を出そうとして何度も何度も何度も何度もこの小娘もどきがああああああああッ！」

笑いを絶叫に変えながら、メイフェムが左腕を振るう。

背ビレのある鞭が生えて伸び、超高速でブラックローラを打ち据えた。

ひらひらした黒いドレスに包まれた可憐なる肢体が、無惨にちぎれ飛び、陽炎の如く揺らいで消滅した。幻影、あるいは残像。

本物のブラックローラはすでに、バルロックの背後にフワリと着地している。

即座に気付いたメイフェムが、

「お前は！ お前だけは許さない！」

後方に蹴りを突き込みながら、振り返る。

槍の如く突き込まれる猛禽の爪をかわしながらブラックローラは、  
「あん……だって、あなたたちの中ではケリス殿が一番、美味しそ  
うだったから……」

微笑み、細身を翻した。ひらひらした黒いドレスの一部が、刃物のように閃いた。

微かな鮮血がしぶいた。

「く……っ」

メイフェムが息を呑み、後退りをする。

しなやかに筋肉の付いた二の腕に、細い裂傷が刻み込まれていた。  
そこへブラックローラが、形容し難い動きでユラリと迫り、語り  
かけながら舞う。

「ねえメイフェム殿、女として忠告しますわ……ケリス殿の事なん  
て、もうお忘れになってはいかが？」

黒いドレスが、羽ばたいた。

目の錯覚ではない。それは黒い、皮膚の翼だった。

ひらひらした薄手のドレスの一部が、そんなふうに変化し、刃の  
如く一閃したのである。

後退りしながら揺らぐ、魔獣人間の身体。そのどこから、また  
しても血飛沫が散った。

「死んでしまった殿方を19年も引きずるなんて……女はもっと、  
さばさばと生きなければ。ね？」

材質不明の、黒いドレス。もしかしたらブラックローラの身体の一部なのかも知れないそれが、一瞬またしても刃の翼と化して閃き、バルロックを襲う。

辛うじてかわした魔獣人間の肩から、たくましい乳房から、微かな鮮血が噴き上がり続ける。

「いい加減、新しい男を見つけた方がよろしくてよ？ 何ならローラが紹介して差し上げますわ……人間じゃないのばかりですけど」  
「……………！」

「今のメイフェム殿には、お似合いでしょう？」

ブラックローラは明らかに、調子に乗り始めていた。

ほっそりと可憐に引き締まった身体が、ひらひらと奇怪なる舞いを続ける。黒いドレスが、時には長い黒髪の一部が、瞬間的に刃の翼に変化しては魔獣人間を切り刻みにかかる。

バルロックは、一見すると防戦一方だ。回避・後退し、何度も浅手を負って血をしぶかせながら、しかし反撃の機会を狙っている。人間ではない娘たちのそんな戦いを、しかし黙って見物してなければならぬ理由はなかった。

リムレオンは、魔法の剣を拾った。

シェファは、すでに魔石の杖を構えている。

ブラックローラ及びバルロックに向けられた魔石が、赤く熱く、輝きを強めてゆく。人間ならざる娘2人を、まとめて灼き殺す構えである。

「……させねえ！」

ゼノスが長剣を拾い、斬り掛かって来た。肉食獣の奇襲を思わせる斬撃が、シェファを襲う。

横合いからリムレオンは踏み込み、魔法の剣を一閃させた。

ゼノスは舌打ちをしながらもシェファへの奇襲を諦め、長剣でリムレオンの斬撃を受け止めた。ぶつかり合った刃と刃が、火花を散らせて離れる。

2度目のぶつかり合いが起こる前に、ブレン兵長が猛然と突っ込

んで来た。魔法の戦斧が、落雷の如く振り下ろされる。

並の魔獣人間であれば綺麗に両断されてしまうであろう、その一撃が、ゼノスを叩きのめした。

直撃の瞬間メキッ！　と音を響かせ、ゼノスの肉体が変化を起こした。

脆弱な人間から強靱な魔獣人間へと変化を起こしかけた肉体が、しかしブレンの一撃を受けて無傷で済むはずもなく、大量の鮮血をドバアツと空中にぶちまけながら後方によるめき倒れる。

ゼノスがいかなる姿に変化しつつあり、どれほどの傷を負ったのか、ゆっくりと確認している場合ではなさそうだ。

ブラックローラの細い身体が、吹っ飛んでいた。

黒いドレスがズタズタにちぎれ、布地の細切れが空中を漂う。大量の臓物と一緒にだ。

ブラックローラの身体は、半ば真つ二つにちぎれていた。今度は残像でも幻覚でもない。

可憐なる肉体が、無惨な状態で宙を舞い、地面に激突し、びゅるびゅると臓物をぶちまける。血は、あまり出ていない。

「ひらひらと……相変わらず、鬱陶しい事」

嘲りながらバルロックが、左足を優雅に着地させた。猛禽の爪に、ちぎれた臓物の一部が絡み付いている。

それを踏みにじって立つ魔獣人間の全身は、血まみれではある。が、先程ブレンが負わせた傷とは比べようもない軽傷ばかりだ。

そんなバルロックに向かって、シェファの杖が、光の束を発射した。

高熱量そのものの凝集体である真紅の光がドギョルルルルッ！　と直進し、魔獣人間に激突する。不可視の防壁を張る暇も与えぬ、鮮やかな直撃だった。

「うぐう……ッ！」

光の束は碎け散って消え、バルロックの身体は吹っ飛んで転げ回った。

これを喰らってゴルジ・バルカウスは跡形もなくなったが、メイフェム・グリムは、少なくとも原形はとどめている。焦げ臭い煙を発して転げ回るその肉体が、どれほどの損傷を受けたのかはわからない。かなりの深手ではあるうが、絶命には至っていない。

シェファが、魔石の杖にすがりつくように、へなへたと崩れ落ち座り込んでしまう。

「ごめん……これ、1日に2発か3発ぶっ放すのが限界みたい」

「いや、よくやったシェファ。若君、あとは我らで」

「……はいっ」

ブレンと共に、リムレオンは駆け出した。

とどめを刺す。

魔法の戦斧と魔法の剣で、魔獣人間とは言え重傷を負った女性を、絶命するまで切り刻む。

これがすなわち実戦というもので、リムレオンが、いもしないもう1人の自分などに押し付けず、やらなければならない戦いなのだ。躊躇いを捨てて踏み込み、魔法の剣を振り上げながら、しかしリムレオンは横目に捉えた。

血まみれで倒れていたゼノスが、むくりと上体を起こしながら、こちらに向かって吼える様を。

もはや半ば人間ではない姿である。具体的にどういう姿形であるのかを把握している暇はないが、牙を剥いて吼えるその様は、まさに獣としか表現のしようがない。

獣の如く吼えるゼノスの口から、紅蓮の炎が吐き出され、横合いからブレンとリムレオンを襲った。

「ぬ……」

「うあ……っ」

魔法の鎧が、凄まじい勢いで熱を持った。火傷を負う一歩手前の熱量が、リムレオンの全身を包み込む。

感覚としては、熱風に近い。魔法の鎧がなければ2人とも、一瞬にして焼死体と化しているところであろう。

吹きすさぶ熱風のように渦巻く炎の中、ブレンもリムレオンも切り刻む対象を見失い、よろめいた。

荒れ狂う炎の轟音の中から、声が聞こえる。

「逃げるぜメイフェム殿！ こいつら相手に4対2ってのは、いくら何でも無謀が過ぎらあ」

「くっ……あ、貴方に借りを作ってしまったというわけ？」

「借りは返さなくていいからよ、ここで1発決め台詞。こないだ教えたやつ」

「……今日のところは、これで勘弁してあげるわ！」

「そーゆう事。じゃあな兄さん、また会おうぜっ！」

ブレンとリムレオンの周囲で渦巻いていた炎が、消えてゆく。

ゼノスとメイフェムの姿も、消えていた。

「……逃げられました、な」

苦笑混じりに、ブレンが言う。

「ここで討ち取れるほど容易い相手ではなかった、と思うしかありません……すまんシェファ。無理をして魔力を振り絞ってもらったのに、逃がしてしまった」

「いえ、あたしが1発で仕留められなかったから……それにバケモノがもう1匹、出て来ちゃいましたからね」

あのゼノスという男。魔獣人間としての正体を完全に現す事なく、去って行った。

「……あの男も、ゴルジ・バルカウスの手による魔獣人間なんだろうか」

リムレオンは呟いた。

「でもまあ、そのゴルジはシェファが倒してくれた。これ以上、魔獣人間が増える事はもう」

「あ……ン……駄目ですよ、そんな考え無しな事をおっしゃっては……」

半ば真っ二つになったブラックローラが、まだ生きて声を発している。



「ゴルジ・バルカウスを倒すなんて、魔法の鎧の2つや3つでは絶対無理……あの男は300年くらい前に、もう人間をやめているのだから……」

苦しげに喋りながらブラックローラは、さらさらと灰に変わりつつあった。

無惨にちぎれた身体も、溢れ出した臓物も、まるで目に見えぬ炎に焼かれ火葬されているかのように焦げ崩れ、灰となり、風に舞った。そんな状態でも、声は出ている。

「ローラってば調子こき過ぎました……これでは元に戻るまで何週間もかかりそう。その間に貴方たちが、何か面白そうな事してくれそうなのに見れない……ああん残念っ……」

戦いで力尽きると灰に変わり、だが時を経て元の姿と力を取り戻す。不死、と表現しても過言ではない怪物。

リムレオンが書物で得た知識の中に、それは確かにいる。

「君は……吸血鬼か？」

「ローラは血なんて吸いません……そんなには、ね。血……って、とっても不味いんですのよ……」

声を発しながらもブラックローラは、今や完全に灰に変わり、サラサラと風に乗って飛んで行く。いや風など吹いていない。灰と化した吸血鬼の少女が、己の意思で空を漂い去りつつあるのだ。

厳密に言うところではなく、吸血鬼の肉体と魂を組成している、悪しき粒子、としか言いようのない物質であるらしい。

それらが1粒残らず、空の彼方へと消えてゆく。最後に1つだけ、言葉を残しながら。

「ローラからの忠告……くれぐれも竜の御子様にだけは、逆らわないで……ローラこんなだから、何かあっても取りなしてあげられませんかよ……」

竜の御子。またしても、その名前が出た。

が、そんな会うかどうかともわからぬ何者か、などよりも肝心な事を、リムレオンはついに問い質せなかった。

「ゴルジ・バルカウスが……生きている？」

ブラックローラは、そう言っていたようだ。

「だけど、あの男は確かにシェファが……」

「……やっぱり、ね。そんな感じがしてたのよ」

当のシェファは、何やら納得している様子だ。

「殺したって言うより、人形を1つぶっ壊しただけ……そんな手応えだったから」

「人形が、まだ何体も残っているという事か」

言いつつ、ブレンが腕組みをする。

「……これは、サン・ローデル以外の地方でも行われているかも知れませんか。魔獣人間造りの、くだらぬ実験が」

領民を惨たらしい残骸兵士に変えてしまう実験が、ヴァスケリア王国のあちこちで……あるいは他国でも行われているとしたら。

これはもう、魔法の鎧の2つや3つではどうにもならぬ事態が起こっている、と言うべきかも知れない。

人間が引き起こす厄介事には女王たるティアンナが、人間以外の者どもには自分たちが対処する。リムレオンはそう思い定めていたのだが。

（僕の方では、どうにもならないかも知れない……ティアンナ、僕は貴女の期待に応えられない……のか……？）

### 第34話 嵐がもたらすもの

夢のような3年間だった。

その夢を、アレンは今もまだ見続けている。

否。夢というよりは、妄想だ。

妄想の中で、エミリイ・レアは常に従順だった。アレンのいかなる求めにも、恥じらいながら応じてくれた。

何でも、させてくれた。

最初は可愛らしく嫌がりながら、最後には必ずアレンを受け入れてくれた。

「うっ……」

出そうになった声を、アレンは辛うじて呑み込んだ。

声は抑えられても、欲望の噴射を押さえ込む事は出来なかった。

ドピュドピュッと噴出したものが、雑草の茂みの中へと消えてゆく。肥料か何かにはなるだろうか、とアレンはぼんやりと思った。

「はあ、はあっ、はあ……ふう……」

呼吸が整ってくると、快感の余韻に代わって、猛烈な自己嫌悪が沸き上がって来る。

「ごめん……ごめんよ、エミリイ……」

まずは唯一神に向かって懺悔をしなければならない身でありながらアレンは、この場にはいない少女に詫びていた。

ヴァスケリア王国北部ガルネア地方、リュセル村の唯一神教会。

その小さな庭園の片隅に立つ物置小屋の陰で、アレン・ネッドは姦淫の罪を犯していた。妄想の中にいる少女を相手にだ。

現実のエミリイとは、3年も一緒に旅をしながら、姦淫どころか手を繋いだ事もない。

自分だけでなくマディックも、クオルもレイニーもそうだろう、とアレンは信じている。抜け駆けのように彼女に手を出した者など、いないはずだ。

法衣をいそいそと着直しながら、アレンは思い出に浸った。

4人で、旅をしていた。

ディラム派が主流となっている唯一神教会の腐敗を、憤りながら何か出来るわけでもなく、細々とローエン派の教えを守りながら、ただ旅をしていた。

サン・ローデル地方のゼプト村に立ち寄った際、そこに住む1人の少女が両親を病で亡くした。

財物の寄進がなければ何もしないディラム派の教会は、貧乏人の村人には墓地を貸そうともしなかった。

だからアレンたち4名で、ささやかながら唯一神教式の葬儀を行ったのだ。

死者を悼む気持ちは無論あった。が、それよりもディラム派への反発心が大きかったのは認めなければならない。半ば腹いせのような葬儀だった。

それでもエミリイは、いたく感謝してくれた。その場でローエン派に入信し、旅に同行してくれた。

夢のような至福の3年間で、そこから始まったのだ。

その3年の間にエミリイは12歳から15歳へ、愛らしい少女から美しい乙女へと成長した。アレンは21歳から24歳になり、大して何も変わらなかった。

女を知らないのは相変わらずで、解放出来ない性欲を、こうして1人で処理する日々が続いた。増えた、と言っていい。

日に日に美しくなってゆくエミリイを、アレンは妄想の中で犯し続けた。

この3年で大して何も変わらなかった、のではなく、より卑しくなったと言ふべきであろう。

「何をやっているんだ、私は……」

自己嫌悪に打ちひしがれてアレンは座り込み、頭を抱えた。

「唯一神よ、卑しく愚劣なる下僕アレン・ネッドをお許し下さい……いえ、罰をお与え下さい」

「アレン」

呼ぶ声が聞こえた。

同じく唯一神教の法衣を着用した若者が1人、教会の庭園で、見回しながら呼んでいる。

クオル・デーヴィ。かつての旅の仲間の1人である。他2人、マディック・ラザンとレイニー・ウェイルは、いささか手の届きにくい所へ行ってしまった。

「おいアレン、どこにいる？　ちょっと手伝っておくれよー」

「あ、ああ。何だいクオル」

アレンは慌てて、物置小屋の陰から出て行った。

「何だ、そんな所で何をしていた？」

「もっ物置の整理をね。それより何を手伝うって？」

「ああ……村長が、昨日からちよつとな。咳が、止まらなくなっているらしい」

リュセルの村長は、1週間ほど前から急に足腰が立たなくなり、今は半ば寝たきりのような状態である。確か、もう70歳は超えているはずだ。

アレンもクオルも、初歩的な癒しの力は使える。が、それで老いによる病をどうにか出来るものではない。

それでも2人がかりなら、軽い風邪くらいは治してあげられるかも知れなかった。

村長宅へ向かうべく教会を出たところで、通りすがりの村人たちに声をかけられた。

「あ、おはようございます司祭様がた」

「おはようございます。唯一神の恵み多き日になりますように」

クオルと共に礼儀正しく挨拶を返しながら、アレンは心の中で苦笑した。

（司祭様、とはね……まさか私たちが）

ディラム派が権力を握っていた時は教会組織に居場所がなく、旅の貧乏僧侶として彷徨うしかなかった自分やクオルが、今では司祭

である。レイニーなどはもつと巧みに立ち回って、今やクラブ・ルマン大司教の側近だ。

これも全てダルーハ・ケスナーのおかげだ、などとは思いたくなかった。

ディラム派によって占められていた教会勢力が、ダルーハ軍による略奪と殺戮で一掃された。そのおかげでローエン派がこうして台頭の機会を得たのは確かなのだが。

「司祭様あー」

前方から、子供たちが駆けて来た。7、8歳くらいの、男の子が2人と女の子が1人。

「おはようございまあす」

「おはよう……サーラは、もう大丈夫なのかい？」

クオルが身を屈めて子供たちと目の高さを合わせ、微笑みかける。「うん。サーラはもう、へいちゃらさ」

「司祭様たちのおかげだよー」

答えたのは、サーラと呼ばれた女の子ではなく、2人の男の子だった。

サーラは無言で、大人しめに微笑んでいる。笑顔は取り戻したものの、言葉は失ったままだ。

2ヶ月ほど前まで、サーラはダルーハ軍残党に捕われており、笑顔も言葉も失うような目に遭っていたのだ。

サーラだけではない。この村そのものが、ダルーハ軍残党によって食い物にされていた。

そこへ、アレンたち一行が偶然、立ち寄ったのだ。

ダルーハ軍残党に対し、村人への無法をやめるよう説得を試みたレイニーとマディックは、その場で殴り倒され蹴り転がされた。

止めに入ったエミリイに、ダルーハ軍残党兵士たちが獣欲剥き出しで襲いかかった、その時である。彼が、現れたのは。

「ねえ司祭様あー」

男の子2人が、問いかけてきた。

「あのバケモノのお兄ちゃんは？ どこ行っちゃったの？」

「ああ、彼はね……」

子供たちにどう説明するべきか、アレンは一瞬だけ迷った。

「……今は、旅に出ているんだ。王国じゅうの悪い奴らを、やっつけて回っているんだよ」

「へえー、やっぱカッコいいなあ」

男の子2人の目が、キラキラと輝いている。

「また来てくれるかなあ、あの兄ちゃん」

「来てくれるさ。みんなが良い子にしていればね」

あの若者の事を、唯一神の化身である、などと民に語っている聖職者も、大司教の側近の中にはいるらしい。唯一神御自らが下界に降りて悪しきものを滅ぼし、その後の支配をローエン派に委ねたのだ、などと。

クラバー大司教は、とにかく何でもかんでも利用して、民衆を掌握しようとしている。

目を輝かせる男の子2人に向かって、クオルが顔と声を強張らせた。

「……駄目だよ君たち、あんなものに憧れては」

説教を始めようとするクオルの肩を、アレンは軽く叩いた。

子供たちに、強いものに憧れてはいけない、などと言ったところで無理に決まっている。

幼い頃のアレンも、そうだった。何も考えず、ダルーハ・ケスナーに憧れていた。

クオルが難しい顔をしているのに気付かず、2人の男の子がはしゃいでいる。

「あくりゅう、てんしーん！」

「おれは、ざんぎゃくなのだ！」

それを見つめるクオルの表情と声が、憎悪に近いものを孕んだ。

「子供たちが暴力礼賛主義に染まってしまう……！ アレン、君はそれを黙認するのか？」

「落ち着けクオル。君にも私にも、彼を否定する資格はないんだ。子供たちが彼に憧れてしまうのを妨げる資格もな」

ダルーハ軍残党の獣欲の餌食になるところだったエミリイを助けたのは、彼だ。サーラたち村の女の子を救出したのも、彼だ。

「……この村を救ったのは、我々ではなく彼なんだよ」

「結果的にそうなったただけだ……！ あれは、あんなものは、何の英雄的行為でもない！ 単なる暴力だ！」

クオルの声は、震えている。

「あんな暴力なんかなかったも村は救えたさ……ダルーハ軍の残党たちを、説得して改心させる事だって出来たはずだ」

マディックとレイニーは、それをやろうとして袋叩きに遭い、殺されかけた。

その間クオルは、木陰に隠れて怯えていた。

咎める資格は自分にはない、とアレンは思う。何も出来なかったのは、自分も同じなのだ。

「……あ……あ……」

サーラが、可愛い口をぱくぱくさせて何か言おうとしている。言葉葉を失っていた少女がだ。

「し……さい……さまあ……」

「サーラ……喋れるのかい？」

「サーラはこのごろ、ちよつとずつしゃべるよー」

男の子2人が、説明してくれた。

「これもエミリイ姉ちゃんのおかげさ」

「そうか、エミリイの……」

身体は癒えても心は壊されたままのサーラに、四六時中付き添って様々な世話をしていたのは、エミリイだった。

「……どこ……？」

サーラが、懸命に声を発している。

「エミリイおねえちゃん……どこに、いるの……？」

「……エミリイも、旅に出ている」



としか、アレンには答えられなかった。

「ちよつと、いろいろと嫌な事があってね……でも大丈夫、すぐに帰って来てくれるよ。エミリイも」

「……いやなこと……あつたの……？」

エミリイ・レアは、現在の唯一神教会ローエン派の有り様に、絶望してしまったのだ。

無理もない、とアレンは思う。今のローエン派は、バルムガルド王国によるヴァスケリア侵略の、片棒を担いでいるようなものなのだ。

それを知りながら何もせず、何も出来ずにいるアレンにも、エミリイは愛想を尽かしてしまったに違いない。

「あたし……エミリイおねえちゃんのこと、なぐさめてあげたい……」

「……そうだね、私もだよ」

サーラの頭を軽く撫でながら、アレンは思い返していた。去り行く若者の、別れ際の言葉を。

俺に出来るのは殺戮だけだ。人の心を救う事など出来ん……それは、それこそが宗教の役目というものだろう。うちの馬鹿親父の尻拭いを押し付けてすまんが、あとの事は任せるぞ。

（……私は、何も出来ていないよ）

今はここにいない、人間ならざる若者に、アレンは心の中で語りかけた。

（人々の心を救うには……やはり君がこの地にとどまって、その圧倒的な力を見せ続けるべきではなかったのか？）

彼と出会って、アレンは1つ確信した事がある。

圧倒的な暴力というものは、使い方さえ誤らなければ、綺麗事だけの平和宗教などよりもずっと効果的に人々の心を救い支える。19年前の、ダルーハ・ケスナーのようだ。

つまりぬこだわりである事は、頭ではわかっている。

これは戦いなのだ。戦争、と言ってもいい。卑怯なくらい強力な武器があるのなら、むしろ積極的に使うべきなのである。そうすれば、戦いも早く終わる。

頭では理解しながらも、しかしリムレオンには出来なかった。魔法の鎧を着たまま、生身の人間と戦う事が。

（それをやったら、魔獣人間と同じになってしまう……）

などトリムレオンが思っている関係無しに、城内の兵士たちは襲いかかって来る。

多少は腕を上げたとは言え、生身で多勢と戦えるような力は、リムレオンにはない。

魔法の鎧を装着し、対抗するべきか。

元々は人間であった者たちを大勢、殺害してきた。それと同じように人間を殺すのか、殺さなければならぬのか。

などとリムレオンが迷っている間に、ブレン兵長が戦ってくれた。無論、生身でだ。

領主バウルファア・ゲドン侯爵の居城、その城壁の上である。城内を逃げ回っていた侯爵を、追い詰めたところだ。

領主の身边を警護する兵士たちが、槍や長剣を振りかざし、挑みかかって来る。

彼らのまったく中へと向かってブレンの方から、生身・素手のまま踏み込んで行った。

丸太のような蹴りが跳ね上がって槍をへし折り、兵士の身体を吹っ飛ばす。

蹴り飛ばされた兵士が後続の何人かに激突し、重なって倒れた。その間ブレンは、槍で突きかかって来た1人の兵士を無造作に掴み捕え、大型武器のように振り回し、他の兵士たちに叩き付けた。人が、物のように吹っ飛び続けた。

「……やる事ないわね、あたしたち」

シェファが感心し、呆れている。彼女もリムレオン共々、魔法の

鎧の装着を解いた生身の状態である。

同じく魔法の鎧なしで大いに武勇を発揮していたブレンが、  
「無駄な抵抗はやめよ！ もはや貴様たちに味方する魔獣人間の類は1匹もおらぬ！」

武器代わりになっていた兵士の身体を放り捨てながら、大音声を雷鳴の如く響かせる。

「ゴルジ・バルカウスもメイフェム・グリムも逃げ去った！ 戻っては来ぬ。そんな状態でもバウルフアー侯を見捨てず守って戦う貴様たちは、クズばかりのサン・ローデル地方軍の中であって、まともな軍人の性根を失わなかった者どもなのだろう。あっぱれである。その忠誠、今後はこちらのリムレオン・エルベツト様に捧げるが良いい」

「え……僕？」

いきなり名指しをされて、リムレオンはうろたえた。

ブレンに叩きのめされた兵士たちは、城壁上のあちこちで石畳に横たわり、苦しげに呻いている。血を吐いている者もいるが、1人も死んではない。深刻な重傷を負った者もないようだ。

全く無傷の者が1人だけいる。豪華な甲冑に身を包んだ、体格の良い人物。

「な……何なのだ、貴様たちは……」

城主バウルフアー・ゲドン侯爵。見るからに高価な全身鎧がよく似合った威風堂々たる姿に、しかし隠しようもない怯えが露わになっている。

「何の権利があって……領主たるこの私に、かのような無法を働くのか……」

「無法を働いたのは貴方です、伯父上」

1歩リムレオンは進み出て、何年かぶりの伯父・甥の会話を試みた。

「領民を、あのようなものに造り変えて……」

「わっ私ではない！ 私は何もしておらぬ！ 全てはあのゴルジ・

バルカウスとメイフェム・グリムが」

リムレオンは腰の長剣を、シャッ！と音を立てて抜き放った。もちろん魔法の剣ではない、普通の長剣だ。

「言い訳をするくらいなら戦って下さい伯父上。1対1の、勝負です」

「ちょっとリム様……！」

何か言おうとするシェファを、ブレンが止めた。

「おやりなさい若君、それにバウルフアー侯爵閣下。このブレン・バイアス、僭越ながら立会人を務めさせていただく」

「感謝します。さあ、伯父上」

魔法の鎧を装着せぬままリムレオンは長剣を構え、切っ先をバウルフアーに向け、言い放った。こんな偉そうな口をきくのは生まれて初めて、かも知れない。

「おっしゃる通り、領主を相手に無法を働いているのは僕たちの方です。僕を斬り殺しても、罪に問われる事はありませんよ」

「若造が……！」

バウルフアーも長剣を抜き、構えた。堂々たる構え、ではある。自分よりも一回り以上は大柄な伯父の甲冑姿を、リムレオンはじつと見つめた。

若い頃から、リムレオンなどよりもずっと長い期間、武芸で身体を鍛えてきたのであろう事は間違いない。

そんな相手に対し、リムレオンは躊躇なく踏み込んだ。そして長剣を突き込んだ。

切っ先が、バウルフアーの顔面に突き刺さる寸前で止まった。リムレオンが止めたのだ。

「ひ……っ……」

若い頃から鍛えてきたのであろう剣技を発揮する暇もなく、バウルフアーは怯えに支配されていた。堂々たる構えが崩れ、立派な甲冑姿がへなへたと座り込んでしまう。

尻餅をついた伯父の顔面に長剣を突き付けたまま、リムレオンは

声をかけた。

「……終わりです、伯父上」

「ま……待て、待ってくれ……」

思った通りの命乞いを、バウルフアーは始めていた。

「まさか私を殺すつもりではあるまいな……誰の命令だ、カルゴか？　一領主にそのような命令を下す権限が……ま、まさかエル・ザナード1世女王が？」

「誰の命令であろうと、貴方を生かしておいてはならない。僕は、そう思っています」

リムレオンは言った。

「伯父上……貴方が守らなければならない領民が一体何人、惨たらしい姿に変わって命を落としたか」

「全てはゴルジ！　それにメイフェム！　あやつらがした事だ！

私は、私とて止めようとはした、だが止められるわけがなからう？

あの怪物どもを！」

座り込んだまま、バウルフアーは泣き出していた。

「私は怪物どもに担ぎ上げられ、そして捨てられたのだぞ！　領民どもよりも誰よりも、私こそが被害者なのだ！　わからんのか、それがわからんのかああああああ！」

「……リム様、どいて」

シェファが、魔石の杖をバウルフアー侯に向けた。

「やっぱリム様がやる事じゃないわよね。あたしに任せて、こういう事は」

「シェファ……」

自分は何をやっているのだ、とリムレオンは思った。

何故、バウルフアーの眼前でこの長剣を止めてしまったのか。あのまま顔面を突き刺し、頭蓋骨の中を抉っていれば、伯父のこんな無様に泣き喚く姿を見ずに済んだのだ。

魔法の鎧を着て、魔獣人間や残骸兵士を殺戮する。今まで自分がやってきたそれらと、何が違うと言うのか。

「……若君の温情に感謝なさるのですな、バウルフアー侯爵閣下」  
ブレンが、伯父と甥の間に割って入って来た。

リムレオンは長剣を下ろした。安堵してしまった自分が、情けなかった。

「若君は貴方のために、逆賊としての刑死ではない、もっと栄誉ある最期を御用意なされた……謹んで受けよ、バウルフアー・ゲドン」  
謎めいた事を言いながらブレンが、泣きじゃくるバウルフアー侯爵の頭を片手で撫でた。いや、掴んだ。もう片方の手を、侯爵の顎の辺りに添えた。同じく、掴んだ。

そして、捻った。

頸椎の折れる音が、鈍く重く響いた。

「ブレン兵長……！」

息を呑みながら、リムレオンは叫んだ。

「何を……貴方は、一体……！」

「私は何もしておりませんよ、若君」

だらりと頭部が垂れ下がったバウルフアーの屍を、ブレンは軽々と抱え上げ、城壁の外へと放り捨てた。

「御覧の通りです。バウルフアー・ゲドン侯爵は自身の罪を悔い、死をもって償うべく城壁から身を投げた……御立派な最期でございました」

「これが……」

シェファも、息を呑んでいる。

「なるほど、これが大人のやり方ってわけ……勉強になるわあ」

「シェファお前もな、やたらと自分の手を汚そうとするのはよせ。若君もです。先程も申し上げた通り、人間など殺せたところで偉くも何ともないのですから」

人間の首をへし折る手が、リムレオンの細い肩を優しく叩く。

「魔法の鎧を着ている時は、大いに殺戮を行う。生身の時は虫も殺せない……それで良いではありませんか」

「ブレン兵長……」

リムレオンの胸中に1つの疑念が生じ、それはすぐ確信に変わった。

「貴方はもしかして……父上から、何か密命のようなものを」

恐らくは殺害を躊躇うであろうリムレオンに代わって、手を下す事。バウルファー・ゲドン侯爵を、確実に絶命させる事。それを、カルゴ・エルベツト侯爵はブレンに命じていたのではないか。

それには答えずブレンは、にやりと微笑んだ。

「後味が悪い……と感じておられますか？ 若君」

その寧猛な笑顔がすでに答えだ、と思いながら、リムレオンは言った。

「……後味のいい戦いなんて、あるわけないですよね……」

女王エル・ザナード1世に不満を抱く地方貴族たちの中で、一番の大家物と言えば、やはりサン・ローデル領主バウルファー・ゲドン侯爵であった。

彼が他の地方貴族を糾合し、バルムガルドあたりと結びついて叛乱を起こしていたら、恐ろしく厄介な事になっていただろう。

そうなる前に、バウルファー侯は自滅してくれた。

自身の罪を悔い、城壁から身を投げた。

伯父カルゴ・エルベツト侯爵からの書簡には、そう記されている。無論ティアンナは信じていない。誰か、手を汚した者がいるはずなのだ。

「私は……とうとう貴方にまで汚れ役を押し付けるようになってしまったのね、リムレオン……」

玉座の上から、謁見の間の天井を見上げながら、ティアンナは呟いた。

馬鹿げているほど高い天井のあちこちに、豪華な彫刻が飾られている。

その中に、全裸の天使の像があった。少しだけ、リムレオンに似

ている。

あの従兄には今少し、返り血で汚れるような事をしてもらわなければならぬ。

伯父からの書簡によると、バウルファア・ゲドンに魔獣人間という戦力を提供していた者たちが、行方をくらませたままであるらしい。その者たちの名も、記されていた。

ゴルジ・バルカウス、及びメイフェム・グリム。

後者に関しては、ある程度は調べがついている。19年前、ダル・ハ・ケスナーに同行して赤き竜と戦った、勇者の1人。アゼル派の聖武術を使う尼僧で、書簡によると魔獣人間と化し、リムレオンを大いに苦しめたのだと言う。

「ダル・ハ・ケスナーの女版、のようなものですか」

玉座の隣で、副王モートン・カルナヴァートがぼやいている。

「英雄と怪物は、どうやら紙一重のものであるようです」

「紙一重どころではない方も、おられるようですが……」

ティアンナは溜め息をついた。

東国境でバルムガルド軍を大量虐殺した何者かも、相変わらず行方をくらませている。

彼と関係があるかどうかは不明だが、あの大量虐殺が行われる少し前、北の戦災地で何かが起こったらしい。

ダル・ハ軍の残党が、北で暴れている。

その知らせがティアンナの耳に入った頃には、しかしダル・ハ軍残党は姿を消していた。

改心しローエン派に帰依したのだ、などとクラブ・ルマン大司教は言っている。

そう言いながらローエン派が、バルムガルドから軍事力を借りてダル・ハ軍残党を皆殺しにしたのだ、という噂もある。こちらの方が真実に近いとティアンナは思っているが、皆殺しを実行したのは、ローエン派でもバルムガルド軍でもないだろう。

東国境の虐殺跡を目の当たりにした今なら、わかる。



北の戦災地で彼は、同じような大殺戮を行ったのだ。己の父親がしでかした事の、後始末をするために。

結果として戦災地の民衆が助かったわけであるから、自分が文句を言う筋合いではない。ティアンナは、そう思う事になっていた。

だがもう1つ、思ってしまう事がある。

（やはり……貴方を野放しにしておくべきではなかったかも知れませんがね）

「あやつの所在はいまだ掴めませんが……」

モートンが言った。

「いささか気にかかる報告が1つ上がって来ております。陛下の御耳に入れる事、お許し願えましょうか」

「お聞かせ下さい、副王閣下」

「それでは……」

1つ咳払いをして、モートンはもったいつけた。

「ダルーハ軍の残党は、実は北で皆殺しにされた者たちだけではないようなのです。ダルーハ・ケスナーに比較的、近い地位にあった部隊長の1人が、残党の一部を率いて逃げ回っているとの事。北の者どもと違って悪事を働いているわけではありませんが……念のため、監視を付けてあります。陛下の御命令1つで、いつでも討伐軍を差し向けられるのですが」

「……その前に皆殺しにされてしまうかも知れない、と？」

「父親がした事の後始末だけを考えて、あの男が動き回っているのであれば」

特に悪事を働いているわけではない残党勢力を、彼は少なくとも放置してはおかないだろう。モートンはそう言っているのだ。

上手くすれば、彼の所在が掴めるかも知れない、とも。

「逃げ回っている者たちは現在、サン・ローデル及びメルクト方面へ向かっているとの事」

「何ですって……」

ティアンナは息を呑んだ。

彼が、その残党たちを追って動いているのだとしたら。

メルクト地方に、彼は姿を現すかも知れない。そして、リムレオンと出会うかも知れない。

「おわकारの事と思いますが陛下」

語気を強めて、モートンは言葉を続けた。

「あの男が本気で暴れたら、町の1つや2つ……下手をすれば国が1つ滅びます。そんな事が起こる前に、手綱をお付けになるべきではないかと」

「手綱を……あの方に？」

「あの馬鹿怪物を飼い馴らせるのは陛下、貴女だけなのですよ。あやつは陛下の御ためとあらば何でもするでしょう」

確かに彼は、頼んでもいない事を片っ端から暴力で解決してくれている。北のダルーハ軍残党、東のバルムガルド軍侵攻。面倒事が2つも、ティアンナが何もしていないのに片付いてしまったのだ。

西のバウルファー・ゲドン侯爵の叛乱は、起こる前にリムレオンが片付けてくれた。

（殿方に仕事をさせて、自分は何もしない……これが、女王というものなの？）

「とにかく陛下は一刻も早く、あの男に手綱あるいは首輪を付けて御自分の手元に置かれるべきです。強大なる力を、陛下はお持ちにならなければいけません……何しろ、ゾルカ・ジェンキムが死んでしまったのですから」

「……そうですね」

ゾルカが死んだ。それはすなわち、魔法の鎧の製造が不可能になってしまったという事である。

ゴルジ・バルカウスなる、魔獣人間を戦力として保有する何者かが暗躍していると言うのにだ。

人間ではないものへの対処は、リムレオン・エルベットに任せておけば良い。生前ゾルカはそう言っていたが、リムレオン1人に期待を寄せるのは酷というものだろう。

もしかしたらメルクトへ向かっているのかも知れない1人の若者に、ティアナは心の中から祈らずにはいられなかった。  
(どうかリムレオンを助けて……ガリエル様……)

### 第35話 魔王軍、最後の戦士

円卓である。上座というものがない。

これらの周りに座る者たちは全て平等、身分の上下など存在しないというわけだ。

今は5名、座っている。

ここガルネア地方の領主であるエラン・ドグマ侯爵。エヴァリア地方領主マギ・ハザン侯爵。ロッド地方領主ライアン・ベルギ侯爵。そしてクラバー・ルマン大司教。

残る1名は、デキウスが初めて見る若い男である。

20歳前後、であろうか。顔立ちは秀麗で優しげだが、眼光は鋭い。髪は、黒髪に近い焦げ茶色。すらりとした優美な長身は、しかし筋肉が力強く引き締まってもいる。

こんな貴族的な正装よりも騎士の甲冑が似合いそうだ、とデキウスは思った。

座っているこの5人の他に、立っている者が2人いる。

1人は、恐らくクラバー大司教の秘書か何かであろう。唯一神教の法衣に身を包んだ若い娘。その豊麗な胸の膨らみも、腰から太股にかけての魅惑的な曲線も、匂い立つような色香も、法衣などでは全く隠せていない。そんな身体に、豊かな金髪が絡み付いているのだ。

美貌は、あのブラックローラ・プリズナに匹敵する。眠たげな両の瞳からは、何の感情も読み取れない。

もう1人が、デキウスである。

デキウス・グローラー。今はそう名乗って、何の特徴もない初老の男の姿をしている。そしてライアン・ベルギ侯爵に執事として仕え、この会合の場にまで同行を許されているのだ。

ガルネア地方の唯一神教会聖堂。その議事室内を、デキウスは盗み見るように見回した。

自分以外に6人いるが、注意を要するのはその中の2名。大司教の秘書とおぼしき金髪の娘と、焦げ茶色の髪をした若い男。

他4名は、デキウスの主であるライアン・ベルギ侯爵も含め、まあ有象無象と言っても良からう。

そのライアン侯爵が、まずは言う。

「女王エル・ザナード1世は、専横を極めつつあります……これはヴァスケリアという王国そのものの危機と言えましょう」

「税が5公5民などと……民から愛される慈悲深き女王のつもりでしょうが」

エラン侯爵が、続いてマギ侯爵が同調する。

「あの小娘は何もわかっておらぬ！ 民を富ませるにはまず国を富ませねばならぬと言うのに」

「しかも横暴かつ極めて戦闘的であらせられます、女王陛下は。まるで古のアゼル派の如く」

クラバー大司教が、嘆かわしそうな声を出した。

「方々もご存じでしょう、バウルファー・ゲドン侯爵閣下の一件を」

「バウルファー侯は……やはり殺されたのでしょうか？ 罪を悔いて自ら命を絶った、などという話になっているようですが」

「暗殺です。間違いはありません。女王の放った暗殺者が、バウルファー侯を殺害して城壁から放り捨て、投身自殺の状況を作ったのです」

「……？ 私は、女王の伯父たるカルゴ・エルベットが刺客を送ったもの、と聞いておりますが」

「であるにしても、それは女王の意を受けてのものである事は疑いありません……エル・ザナード1世は、我らが団結する事を恐れ、先手を打ったのです」

「叛乱の罪を捏造してバウルファー侯に被せ、殺害したというわけですね……まさに横暴、いや暴虐」

「愚かなる民たちは、その暴虐を見ようとせず、ダルーハ・ケスナー討伐という一点のみを見て現女王を盲信しております。今やこ

の国は、ダル―ハ以上の暴君を戴いてしまったと言うのに……」

クラバー大司教も、地方領主3名も、不満を吐き出すばかりである。専横を極める女王に対し、結局どのような行動を起こすのか、具体的な話には全く触れようとしない。具体的な事など、何も出来はしないからだ。

このような者たちに、エル・ザナード1世の政権を覆す事など出来るわけがなかった。

何しろあの女王には、竜の御子がついているのだ。

「バウルファー侯には今少し、我らとの連携を重んじていただきたかった」

エラン侯爵が、愚痴をこぼした。

「我ら地方領主が一致団結し、大司教猥下やバルムガルドの方々とも協力して兵を挙げていれば……逆賊ダル―ハに擁立されただけの小娘ごとき、たやすく排除出来たものを」

バウルファー・ゲドン侯爵が、ここにいる者たちとの連携を軽んじ、単独での叛乱に踏み切った理由。それは魔獣人間という戦力を手に入れてしまったからだ。

魔獣人間の軍勢を操り、エル・ザナード1世を打倒する。それに成功すれば、手に入れた権力を、他の地方領主や大司教などといった輩に分配する必要もなく独占出来る。それがバウルファー・ゲドンの狙いであったのだろうが、女王は先手を打った。

ゾルカ・ジェンキムが造り上げた、魔法の鎧。それを装備した少数精鋭の戦闘集団を動かし、バウルファー侯を始末してしまったのだ。大掛かりな軍事行動を起こす事もなく、叛乱の芽を摘み取ってしまったのである。

この場にいる大司教やら地方領主やらといった者どもとは比べ物にならぬ、鮮やかな手際だった。

そんな抜け目のない女王に、竜の御子が与力しているのである。デキウスは、心の中で嘲り呟いた。

（仮に我らが力を貸してやったところで、こやつらではエル・ザナ

ード1世の打倒など夢のまた夢……それにしても)

わからないのは、竜の御子である。

人間の女王に懸想しているのであれば、無理矢理に奪って犯し、この王国もろとも己の支配下に置いてしまえば良いのである。彼の父親が、19年前にそうしたように。

それが出来るだけの力を持ちながら実行せず、何やら彷徨いながら小規模な殺戮を繰り返し、遠回しに女王を援助し続ける。

竜に人間の血など入ったせいで、全く理解不可能な怪物が出来上がってしまった。

(竜の御子よ、貴殿に我々を統率する意思がない……となれば、我らは我らで勝手にやらせてもらわねばならぬ。結果、貴殿と敵対する事になろうともだ)

人間どもが我が物顔で歩き回るこの世界を、さしあたっては竜の御子に頼らず征服・支配する。そのために歩むべき道を模索している最中なのだが、その模索すら行き詰まっているというのが現状だ。

ゴルジ・バルカウス一味との接触を試みたブラックローラは、試みたその場でメイフェム・グリムに倒されてしまった。

(愚か者が……メイフェム・グリムが貴様の話など聞くはずはなからうに)

それでも、メイフェム・グリムがこちら側に近い、というブラックローラの話は、わからぬでもなかった。

いや、メイフェムだけではない。ダルーハ・ケスナーを筆頭とするあの5名全員、人間のために戦っているながら、人間の側にはとどめておけぬ何かを、間違はなく持っていた。

実際あの5人のうち、人間として死ねたのはケリス・ウェブナーとゾルカ・ジェンキムだけなのだ。

(ダルーハ・ケスナー……無論、貴様は許せぬ。が、貴様が懐かしくもある……そして貴様は一体、竜の御子をどのように育て上げたのだ?)

「……方々には、お詫び申し上げなければなりません」

焦げ茶色の髪の若者が、ようやく言葉を発した。

「我らバルムガルドの不手際が、女王エル・ザナード1世にここまでの横暴と増長を許してしまったのです」

バルムガルド人、であるようだ。

エル・ザナード1世からヴァスケリア王国を奪うための、この悪だくみの会合に、バルムガルド王国を代表し参加しているようである。

「大司教猥下……こちらは？」

「おお、ライアン侯爵にはまだ御紹介しておりませんでしたか。ウオルグ・バセット大使閣下の後任として、バルムガルドの秘密外交を担当しておられる方です」

クラバーの言葉を受けてバルムガルド人の若者が立ち上がり、恭しく身を折り、名乗った。

「レボルト・ハイマンと申します」

「ほう……バルムガルドにその人ありと謳われし知勇の將軍と、同じ名をお持ちとは」

ライアン侯の言葉に、レボルトと名乗った若者は無言で微笑みを返した。重く、暗い笑顔だった。

バルムガルド随一の名將と言われるレボルト・ハイマン將軍は、ヴァスケリア東国境において、事もあるうに竜の御子と戦うなどという愚行をやらかし、3000人もの兵士を失った。形としては、ヴァスケリア軍に大敗を喫したという事になる。

レボルト將軍はその後、行方知れずとなった。敗戦の責を負って処刑されたとも、獄中死したとも言われている。

そんな悲運の名將と同じ名前を持つ若者が、一同を見回し、語る。「この場の方々には、認識していただかなければなりません……エル・ザナード1世女王が魔物を飼っている、という馬鹿げた噂が、しかし紛れもない真実であるという事を。かの女王は、人ならざるものの力を利用し、国を治めようとしているのです」

事情を知らぬ者が聞けば妄言としか思われぬような事を、レボルト



ト・ハイマンは真摯そのものの表情と口調で、力強く語っている。  
「それはすなわち、魔物が国を治めるに等しい事態……かつての赤き竜の如く」

「あの時代が再び来る、とおっしゃるのですか……」

エラン侯爵が、青ざめながら言う。

「噂には聞いております。ダルーハ・ケスナーを討ち取ったのは、女王の飼ひ操る魔物であると……」

「そのようにしてエル・ザナード1世は、人の世の政に魔物を介入させてしまったのです」

レボルトの鋭い両眼が、ギラリと凜猛なほどの熱を帯びた。

「赤き竜、それにダルーハ……このヴァスケリアという国は、人間ではないものによって立て続けに蹂躪されてきました。無礼を承知で申し上げますが、それは人間である貴方がたが、人ならざる者どもに台頭する機会を与えてしまっているからです。現女王が行っている事は、まさにそれであると言えます。魔物の力に頼って政治を、軍事を行う……その魔物がヴァスケリア王国を支配・蹂躪するのも時間の問題でありましょうな、このままでは。赤き竜、ダルーハ・ケスナーに続く、第3の魔王の誕生です。その脅威と災禍は、我がバルムガルド王国にまで及ぶでしょう」

円卓の一同を見回していたレボルトの眼差しが、デキウスに止まった。睨んでいる、ような眼光である。

「人間の世に人間ならざる者の介入をもたらすヴァスケリア現政権は、何としても打倒せねばなりません。そのためならば我らバルムガルド王国、これまで通りローエン派の方々に、のみならず国を憂える貴方がた地方貴族の皆様に対しても、大いに力添えをさせていただきます。とにかく人間の世界に魔物の介入など……させてはならないのですよ、絶対に」

デキウス1人に向かって語りかけている、ようでもある。

（こやつ……見抜いておるとでも？）

敵意に近いものを孕んだレボルトの言葉と眼光に、曖昧な微笑み

だけを返しながらデキウスは、クラブー大司教の方を盗み見た。

正確には、大司教の背後に控える、金髪の娘の方を。

相変わらず、眠たげな眼差しをしている。はっきりと炎を燃やすレボルトの両眼とは対照的に、ぼんやりと靄がかかったような瞳。

そこからはやはり、何の感情も読み取れなかった。

領主バウルファー・ゲドンの死を悼む者が、サン・ローデル地方に、少しはいたのかも知れない。

が、やはりと言うべきか喜んだ者が大半である。

喜びの声でサン・ローデルの人々は、新しい領主を迎え入れた。

リムレオン・エルベツト。

それが、サン・ローデル地方新領主の名である。女王エル・ザナード1世の名前で、布告が出されたばかりだ。

前領主バウルファー・ゲドンは逆賊として認定され、ゲドン家は貴族の地位を剥奪された。

エルベツト家は、メルクト及びサン・ローデルを親子で領有する大貴族となった。

エル・ザナード1世の母方の実家が、王国西部における最大勢力となったわけだ。政敵の多い女王が、自身の味方となり得る伯父の一族に力を持たせるべく行った人事であろう、と語る者もいる。

そういった政治的な話は、しかしエミリイ・レアにとっては、どうでも良かった。

「リムレオン様……」

呟きながらエミリイは今、村はずれの森へと向かって、ふらふらと歩いている。

戦いが終わりメルクトへ帰ってしまった、とばかり思われていた若君が、帰らずサン・ローデルにとどまる事となってしまった。

と言っても領主である。自分などが気軽に会えるような相手ではないと、エミリイも頭ではわかっているのだ。

領主ともなれば、正式な夫人はどこかの名家から迎え入れるにしても側室ならば、領内の娘たちの中から選り放題だろう。

(リムレオン様のお傍にいられるなら、あたし側室でも……)

思いかけてエミリイは、ぶんぶんと頭を横に振った。

「唯一神よ、愚かなる下僕エミリイ・レアは相変わらず未練と妄念に捕われております……どうか、罰をお与え下さい……」

祈りを捧げながらもエミリイは、唯一神よりも自分の両親に叱ってもらいたい気分だった。だからこうして、父と母の眠る村はずれの森へと向かっている。

思い浮かべてしまうのは、シェファ・ランティの事だ。失礼ながらどこかの貴族令嬢ではなく平民の娘にしか見えないから、彼女もまた領主の正妻となるのは難しかろう。が、傍にいられるなら側室でもいい、と考えるような女の子にも見えなかった。

もしもリムレオンが、どこかの大貴族の姫君とでも政略結婚をする事になったら。シェファは恐らく何も言わず、ひっそりとリムレオンの傍から姿を消すだろう。エミリイはそう思う。

だがシェファが、エミリイと一緒にリムレオンの側室になってしまふような事があったなら。

「シェファさんとも、仲良く出来る……2人でリムレオン様を愛でてあげるのも楽しいかなあ……なあって、あはははは……はあ……」  
笑いながらエミリイは溜め息をつき、俯いた。

こんな独り言、シェファに聞かれたら殺されかねない。

顔を上げつつ、エミリイは木陰で足を止めた。

両親の墓の前に、誰かいる。

エミリイと同じく唯一神教の法衣に身を包んだ、人影。墓前に跪き、ぶつぶつと祈りを呟いてるようだ。

懐かしさが、エミリイの胸に満ちた。

「レイニー……」

名を呼びながら、木陰から飛び出す。

法衣姿の人影が立ち上がり、エミリイの方を向いて、穏やかに微

笑む。穏和そのものの顔に口髭が、紳士的に生え整っている。

「……まずは君の御両親に挨拶を、と思ってね」

「レイニー！」

エミリイは駆け寄って行った。

「お久しぶりです！ おヒゲ……少し濃くなりました？」

「まあね。少し貫禄を出そうと思ったんだが」

レイニー・ウェイル。エミリイの両親を弔ってくれたローエン派僧侶4名の最年長者で、確か31歳になるはずだ。

年長者だからというわけではなからうが立ち回りが巧みで、大司教クラバー・ルマンにかなり近い地位にまで上ったはずのレイニーが、しかし何故こんな場所にいるのか。エミリイが訊く前に、本人が説明してくれた。

「実はこの度、サン・ローデル地方教会の司教を任される事になってね。赴任の報告を、まずは君の御両親にと思って」

「そうだったんですか……」

大司教の側近と、地方教会の責任者。どちらの方が立場が上なのか、エミリイにはよくわからない。

そんな事より、つめる話はいくらでもある。

「皆さんは元気ですか？ アレンもクオルも……マディックは、相変わらず？」

「……ああ。消息を絶ったままだ」

マディック・ラザンは、クラバー大司教のやり方をかなり露骨に批判し、教会を破門され、北の戦災地を1人立ち去って行方をくらませた。

「大司教猥下のなさりようは、私も確かに……ちょっとどうかな、とは思う。が、平和がもたらされているのは事実なんだ。それが何よりだ、と私は思うよ」

エミリイも以前は、そうとしか思っていなかった。

今はもう1つ、思う事がある。4人と再会する事があったら、ぜひ話してみたいと思っていた事だ。

「レイニー、あたし思うんです。北の戦災地に平和がもたらされているとしたら、それはローエン派やバルムガルド王国のおかげではなく、あの方の」

「そこまで」

声を潜めながら口調強くレイニーは、エミリイの言葉を遮った。

「それ以上、言うてはいけない。我々はあの時、5人揃って夢を見ていたのだ。あんな恐ろしいものは、夢の中にしかないんだよ」  
公に認めてはならない、とレイニーは言っているのだ。

自分たちの目の前で大いに手を汚した、あの人間ならざる若者の存在を。

あの時、彼はエミリイたちを助けてくれたのだ。

彼がいなかったらレイニーもマディックも、ダルーハ軍残党の兵士たちに殺されていたかも知れない。エミリイも慰みものにされていただろうし、リュセル村の人々も食い物にされているままだった。1つ、エミリイが実感せざるを得なかった事がある。

戦に敗れ、統率者を失い、破れかぶれになってしまったダルーハ軍の残党兵士たちを、説得で改心させる事など絶対に不可能であったという事だ。彼らを暴力で駆逐する。それしかリュセル村を救う手段はなかった。

エミリイたちには不可能なそれを実行してくれたのが、あの若者なのである。

平和をもたらすためには、誰かが手を汚さなければならない時もある。

平和主義を掲げるローエン派の聖職者であるからこそ、その事をもっと真摯に見つめるべきではないのか。少なくとも、手を汚した誰かの存在を否定などするべきではない。

エミリイがそう言い募ろうとした、その時。

木が1本、凄まじい音を立てて倒れた。

「人間……ぐっふふ人間どもオオオオオオッ！」

己が折り倒した大木の幹を踏みつけながら、巨大なものがそこに

姿を現し、叫んでいる。

2メートルを超える巨体は、岩のような筋肉で盛り上がっており、まるで岩の大男といった感じの姿だ。石柱でも切り倒せそうな巨大な斧を、両手で持っている。

凶暴性以外の何も感じさせない顔面が、目を血走らせ、牙を剥き出しにして叫ぶ。

「デーモンロード様は言われた！ 人間を、少しばかり殺戮してみよと」

「竜の御子が、人間どもに味方しているのであれば！ 人間をいくらか殺せば姿を現すであろうと！」

1匹だけではない。岩の大男が4匹、いや5匹、喚きながら姿を現していた。

大斧、戦鎚、巨大剣……5匹とも、そのまま攻城兵器として使えるような大型の武器を携えている。

「トロルだと……！」

エミリイを背後に庇いながら、レイニーが息を呑む。

「ダルーハ・ケスナーの死後、あちこちで魔物の出現が相次いでいると聞いてはいるが……」

「ダルーハ・ケスナーはもはやおらぬ……さあーどうする人間ども」

5匹のトロルが各々、大型の得物を構え揺らめかせながら、ニヤニヤと牙を剥いている。

「さあどうする、不味そうな男に美味そうな娘よ」

「ほ、本当に美味そうな娘よのうグッフッフ」

「乳と尻は俺がもらう……」

「お、俺は太股があれば良い……」

「ふん、二の腕の美味さを理解出来ぬとは味覚の貧しい奴らよグヘヘヘ」

5匹のトロルが、5つの方向からにじり寄って来る。

後退りも出来ぬままエミリイは、レイニーと身を寄せ合った。

（唯一神よ……罰をお与え下さい、とは確かに言いましたけど、で

もこれは……その、ちょっと……」

「ま、待て」

レイニーが、トロル相手に会話を試みている。

「私は、こう見えてもけっこう美味なのだよ。だから、この娘は見逃して」

「ゲヘヘへ美味なワケなかるおーが貴様などオオ！」

トロルの1匹が、大型の戦鎚を振りかぶり、襲いかかって来る。

「美味しい肉は喰らう！ 不味い肉は叩き潰してブチまけるうう！」

「待て……えええ……」

弱々しい声と共に、何かが突っ込んで来た。

牛、のように見える。声は弱々しいが、突進の勢いはかなりのものだ。

角を振り立てての体当たりが、命中した。

レイニーを撲殺する寸前だったトロルが、戦鎚を振り上げた姿勢のまま吹っ飛んで倒れた。

体当たりを喰らわせた何者かも、倒れていた。

牛ではなかった。何とも例えようのない姿をした生き物である。

体型は、辛うじて人間に近い。四肢を備えた、人型の肉塊。その全身はカサカサに乾いて、ひび割れている。

頭から生えた2本の角。その片方は、折れていた。今の体当たりで折れたようだ。

「ぐっ……何だ、貴様……」

倒れていたトロルが、むくりと巨体を起こした。その脇腹に、折れた角が突き刺さっている。

トロルはそれを、無造作に引き抜いて放り捨てた。

脇腹に残った傷口が、狭まり、塞がってゆく。再生能力。トロルという生き物は、手足くらいなら斬り落とされても即座に繋がってしまうという。

一方、体当たりで力を使い果たして倒れている何者かは、折れた角を再生させる様子もなく、死にかけたままである。

角を生やした、人型の肉塊。似たようなものを見た事がある、とエミリイは思った。

リムレオンたちが残骸兵士と呼んでいたものの、に似てはいないか。それが、もう2体。木陰から、ふらふらと姿を現していた。

「待て……魔物ども……」

「守る……俺は、人を守ってみせる……」

全身が干涸びひび割れた、人型の肉塊あるいは臓物の塊。それが2体、巨大な爪とハサミを振り上げ、トルル5匹に挑みかかって行く。

うち1匹が、進み出て大斧を振るった。

残骸兵士らしきものの2体が、叩き斬られて飛び散った。

「……何なのだ、こやつら」

くると大斧を回しながらトルルが、己の叩き斬ったものに蹴りを入れる。

切り裂かれ、砕け崩れた肉塊が、パサパサに乾いた臓物をぶちまけながら転がった。

「よく見ると人間のようでもあり……我らの同類に、似ていなくもない」

「ふん、何にせよ不味そうな者どもよ。食えたものではない」

「こやつら……もしやデーモンロード様のおっしゃった、魔獣人間とやらしいものでは？」

「ぶっ……はははははは！　だとしたら聞きしに勝る出来損ないよなあー魔獣人間とは！」

トルルの1匹が笑いながら、片角の残骸兵士にガスガスと蹴りを降らせる。干涸びた人型肉塊のあちこちが破け、臓物らしき乾いた有機物が溢れ出して潰れ崩れた。

「やめて……！」

駆け寄ろうとしたエミリイの腕を、レイニーが掴んだ。

「何をしている、早く逃げるんだ」

「で、でも……」



「彼らは何者であるのかはともかく、君を助けてくれようとした事は確か……無事に逃げ延びるのが恩返しというものだ」

「おおーっと、そうはいかぬ！」

トロールが1匹、巨大な剣で斬り掛かって来る。

そして、後方に吹っ飛んだ。

何かが、エミリイたちの頭上を通過して飛び、トロールの胸板を直撃したのだ。

1本の槍が、トロールの巨体を、胸から背中へと貫通していた。

串刺しにされたトロールが、大量の血とやかましい悲鳴を吐き散らし、転げ回る。

「ダルーハ様がおられないからと言って……大きな顔をしない方が身のためだぞ、魔物ども」

槍を投げた、と思われる何者かが、後方からエミリイの横をゆったりと歩き抜けて前に出る。

「ダルーハ様よりも恐ろしい怪物が今、この国をうろついているのだから……あの若君がいる限り、貴様らが安心して悪事を働ける世の中になど絶対になりはしない」

中肉中背、がっしりとした身体つきの男性である。薄汚れたマントの下に、軽い革製の鎧を着込んでいるようだ。旅の傭兵か何かであろうか。

頬骨の目立つ顔つきは、獣のように鋭く、だが痛々しい憔悴をも感じさせる。

年齢はレイニーと同程度、30歳前後といったところであろう。

叩き斬られ、碎かれ、潰されて死にかけた残骸兵士たちが、声を発する。

「た……隊長……」

「無様なところを……お見せして……」

「……先走り過ぎだ、馬鹿者どもが」

隊長と呼ばれた男が、呻くように言った。

「俺は、お前たちを……死なせるために、引き連れていたのではな

い」

「見ての通り、我らの肉体はもはや限界を迎えておりました……」

「朽ち果てる前に……1度は、せめて1度だけは……人を守るための戦を、したかったのです……」

消え入りそうな声を発する残骸兵士に、エミリィは駆け寄り、屈み込んで片手をかざし、祈った。

癒しの力。少女の小さな五指と掌が淡く光を発し、干涸び崩れた無惨なる肉体を照らす。

が、照らしただけだった。何も起こらない。

「唯一神よ、癒しを……どうか、お願い……」

「無駄だ……我々はもはや、神の御加護を受けられぬ身体……ありがとう、お嬢さん」

残骸兵士は、微笑んだようだ。

「その優しいお気持ちだけを……いただいて行く……」

「隊長、おさらばです……貴方の部下で、本当に……良かった……た……」

残骸兵士たちが、それきり何も言わなくなった。

もの言わぬ、黒ずんだ屍と成り果てた彼らを、トロールたちが蹴り碎く。

「……よくわからぬ輩がおるものよ。クズ肉の分際で、我らに刃向かうとは」

「ぐっ……に、人間どもがああ……」

串刺しにされていたトロールが、折れた槍を胸と背中から引き抜きながら、怒り狂っている。

「貴様らがいくらイキがったところで無駄、我らの再びの台頭を妨げる事など出来はせぬ！ ダルーハを失った貴様らにはなああ！

わからぬか、それがッ！」

「わかっておらんのは貴様らの方だ。人間はもはや、ダルーハ様を必要とはしていない……殺戮しか出来ぬ英雄に頼らずとも人間は、貴様たちになど負けはしない」

隊長の身体がメキッ！と痙攣した。

「そうとも……こんな力など、人間には……必要、ないのだ……ッ！」

薄汚れたマントと革鎧が、ちぎれて飛び散った。

新たな鎧が、筋肉もろとも盛り上がって来ていた。鉄か、青銅か。全身甲冑のように見えるが、それは皮膚が金属質に変化した、全裸の肉体であるようだ。

首から上では頭蓋骨が、青銅色の金属兜に変化し、3本の角を生やしている。左右の側頭部からは1本ずつ、湾曲した猛牛の角を。そして額からは1本、螺旋状に捻れつつまっすぐに尖った角を。

その1本角から頭頂、後頭部にかけては、燃え盛る炎にも似た、豊かなタテガミだ。

顔面は、兜の下で黒い陰となっている。よくは見えないが、人間の顔面ではなくなっているのは間違いない。

その異形の顔面が、シュー……ッと蒸気のような吐息を漏らしつつ、言葉を発する。

「魔獣人間が出来損ない……貴様たち、そう言っていたな」

青銅色の全身鎧と化した巨体が1歩、トロールたちに迫る。その足は、まるで鉄槌のような重く力強い蹄である。

「出来損ないが、どれほどのものであるのか、今から貴様らに見せてやるとしよう……この魔獣人間ユニゴーゴンがな」

（アサド……）

近くに立つ、櫟の巨木。その根元に眠る1人の少年に、エミリイは心の中で語りかけた。

（貴方と同じ人が、ここに……）

人間ではなくなってまで、何かを守ろうとする人がいる。今は、エミリイたちを守ろうとしてくれている。

「魔獣人間……だと……」

トロールたちが各々、大型の得物を構え、5対1の戦闘態勢を作りながら言った。

「デーモンロード様がおっしゃった。魔獣人間などという作り物の怪物どもを従えてイキがっっておる……確かゴルジ・バルカウスとやという愚物がおると。貴様、そやつの配下か」

「ゴルジ……？ 知らんな、そのような者」

魔獣人間ユニゴーゴンが、言葉と共にシューッ！ と蒸気のような息を吐く。

「俺をこのようなものに造り変えたのは、ムドラー・マグラという狂人だ……まあ志願したのは俺の方から、だがな」

### 第36話 魔法王国の遺産

今思えば結局のところ、羨ましかっただけなのだろう。ギルベルト・レインはそう思う。

ケスナー家の父子を、自分はただ羨んでいた。

彼らと同等の力があれば、腐敗しきったヴァスケリア王家を打倒し、この国を救う事が出来る。そう思ってギルベルトは、ムドラー・マグラによるおぞましい人体実験に自ら志願した。

そうして得た力を今、振るっている。

大型の得物を振り上げ襲いかかって来る、5匹のトロル。そのまっただ中に、ギルベルトは踏み込んで行った。

魔獣人間ユニゴーゴンとなった青銅色の巨体が、踏み込みと同時に竜巻の如く翻る。右足が、続いて左足が、跳ね上がって弧を描いた。蹄による蹴りが、左右交互にブンッブウンッ！と重く唸り、トロルたちの武器を打ち弾く。

巨大な剣が2本、大斧が2本、戦鎚が1本。ことごとく蹴り碎かれ、へし折れた。

残骸に変わった武器を手にしたトロル5匹が、啞然として固まり、立ちすくんでいる。

蹴り終えた足で、ギルベルトは即座に踏み込んだ。

トロルの1匹が怯え、逃げ腰になる。

逃がさず、ギルベルトは蹴りを叩き込んだ。右の蹄が振り上がり、打ち下ろされて、トロルの片脚をへし折った。岩のような筋肉が破れ、折れた骨が現れる。

よめいたトロルの巨体が、腹を抱える形にズドッ！と折れ曲がる。その腹に、ユニゴーゴンの左足が打ち込まれていた。悲鳴を漏らそうとするトロルの口から、ゴボツと血まみれの臓物が吐き出される。

「駄目だな、この程度の力では……」

自嘲しつつ、ギルベルトは右拳を振り下ろした。

鉄槌の如きその一撃が、臓物を吐き続けるトロルの横面を直撃する。

両の眼球をポポンツと噴出させながら、トロルは倒れた。

頭蓋骨を叩き割った手応えを握り締めつつ、ギルベルトは自嘲を続けた。

「この程度の力で、俺は……ダルーハ様に、戦いを挑むなどと……」  
倒れたトロルの顔面を、左足で思いきり踏み付ける。金属質の蹄が、半ば叩き割られていた頭蓋骨をグシャアツと潰し砕いた。吐き出された臓物、飛び出た眼球。それらに混じって、潰れた脳がドバアーツと地面に広がった。

片脚を折られ頭を潰された巨体が、それでもすぐには絶命せず、痙攣している。再生能力を懸命に働かせようとしながら、しかしトロルは次第に痙攣を弱め、死体になっ

ていった。その屍を踏み付けたまま、ギルベルトは思う。たかがトロル1匹、ダルーハならば一撃で粉砕していたところだ。

レドン地方領主としてのダルーハ・ケスナーは、仁君だった。

領民を慈しみ、その圧倒的な暴力を、弱者の救済のためにしか振るわなかった。

それはしかし、ダルーハ自身の意思ではなかった。領主夫人レフイーネ・ケスナー元王女が、夫をどのように操縦していたのだ。

長くダルーハに仕えていながら、ギルベルトはそれを見抜く事が出来なかった。

夫人が傍にいてくれる限りは眠らせておけたものを、ダルーハは、夫人の死と同時に解放した。

金で流れ者を集めて軍団を編成し、それと同時にムドラーを使って魔獣人間の開発にも着手し、叛乱の準備を始めたのである。

その時点においてもギルベルトは、愚かにも信じ込んでいた。竜退治の英雄が今再び、王国を救うために立ち上がるのだと。凶猛なる赤き竜から、腐敗を極めるヴァスケリア王政へと相手を変え、英

雄が人々のための戦いを再び始めるのだと。

だからこそギルベルトは、自ら進んでムドラー・マグラの実験材料となる事に、何の躊躇いもなかった。憧れの英雄に少しでも近付き、共に戦う。そのための力が手に入るのならば、人間の肉体になど何の未練もなかったのだ。

残る4匹のトルルが、捨て台詞も吐かずに背を向け、逃走を開始していた。

巨体に似合わぬ逃げ足を発揮しつつある彼らを、ギルベルトは足では追わず、まずは息を吸った。青銅色に金属化した巨体を反らせ、一気に前傾させながら、口を開いた。

胸の内で燃え盛るものを、ギルベルトは一気に吐き出した。

シューッ！ と蒸気のような音を立て、だが蒸気ではないものが、ユニゴゴンの口から放射されてトルル4匹を襲う。

それは、炎に似ていた。青色に激しく燃える有色気体。だが熱量はない。

偽物の炎だ、とギルベルトが常々思っているそれが、4匹のトルルを包み込んで渦巻き、消えた。

逃走中の姿勢のまま、トルルは4匹とも固まり、静止している。

岩のようだった巨体が、本物の石と化している。

トルルたちは、4体の石像に変わっていた。

何も焼き尽くす事が出来ない、対象物をただ石化させるだけの炎。こんなものではない、本物の炎を吐く父子がいた。

そう思いながらギルベルトは、ずかずかと足早に歩み寄り、拳を振るい、蹄を振り上げ、4つの石像をことごとく打ち碎いた。肉片ではなく石の破片に変わったトルルたちが、崩れ落ち飛び散って行く。

トルル程度の怪物を石に変える事は出来ても、ダルーハ・ケスナーに対しては全く効果がなかった。

竜の血を浴びた肉体が、偽物の炎を蹴散らしながら歩み迫って来る。

その姿が見えた時には、ギルベルトは叩きのめされていた。どのように叩きのめされたのかも、理解出来なかった。

破竹の勢いで勝ち進みながらダルーハ軍は、王国北部の町や村を大いに蹂躪した。

民衆が、虐殺されてゆく。

事態がそこに至って、ようやくギルベルトは気付いたのだ。最愛の妻レフィーネを失ったダルーハ・ケスナーが、英雄ではなく魔王であつた事に。

止めなければならぬ、と思った。思っただけでなく、ギルベルトは行動を起こした。ダルーハの本陣に乗り込んで諫言を行い、聞き入れられずに戦闘となつた。

否、戦闘などと呼べるものではなかった。

魔獣人間としての全力を尽くしながらギルベルトは、一方的に殴り倒され、蹴り転がされた。

殺される寸前のギルベルトを、部下たちが捨て身で救い出してくれた。

共にムドラーの実験材料となり、残念ながら魔獣人間には成れなかった兵士たち。100人以上はいた彼らのうち、半数はその場でダルーハに虐殺された。残った半数を率いて、ギルベルトは逃げた。逃げるしかなかった。

その逃避行の最中、部下たちは次々と死んでいった。中途半端に人間ではないものとなった彼らの肉体は、もはや自然に寿命を重ねてゆけるものではなくなっていたのだ。せいぜい数週間か、1、2ヶ月で干涸び朽ち果ててゆく身体。ギルベルトは、どうしてやる事も出来なかった。

せめて、安息の地を。

そう思いながら彷徨っている間に、次々と死んでゆく部下たち。

その最後の3名が今、この小さな森の中に横たわっている。

トロルたちに叩き潰され、もはや何だかわからなくなった3つの屍を、2人の唯一神教徒が丁寧に横たえてくれていた。品の良い口



髭を生やした男と、美しい少女。2人で屍たちの傍らに跪き、祈りを呟いている。

「……人として、扱ってくれるのだな」

ギルベルトは振り返り、声をかけた。

3本の角を生やした、青銅色の魔獣人間。そんな異形に振り向かれても、2人は恐れた様子を見せない。

「私たちに出来る事は、他にはありませんから……」

少女の方が立ち上がり、言った。

「助けていただいて、ありがとうございます」

「人であろうとなかろうと、我らにとっては命の恩人。それだけでございます」

口髭の男が、そう言って恭しく頭を下げる。

この2人、もしかしたら魔獣人間の類を見たのは初めてではないのかも知れないとギルベルトは思った。

そこそこの地位の高い聖職者であると思われる口髭の男が、人間ではなくなった兵士3名の屍を痛ましげに見下ろし、言った。

「この方々を我々の手で弔う事、お許し願えましょうか？」

「そうしてくれるか」

ギルベルトは応え、続いて問いかけた。

「……俺は部下たちに、安息の地を与えてやりたかった。最後の最後で、その真似事くらいは出来たのだろうか？」

「死は、どれほど罪深き者にも必ず与えられる安息です。が、それは唯一神の与えたもうた生を全うしてこそ」

口髭の聖職者が、魔獣人間ユニゴゴンの姿をちらりと見据える。

「……失礼ながら、貴方は死に急いでおられるように見える」

「見ての通り、俺は人間をやめた。唯一神の与えたもうた生とやらを投げ出し、悪しき命を与えられた身だ。あんた方から見れば、真っ先に死すべき存在なのではないのか？」

言いつつ、ギルベルトは背を向けた。

部下たちは全員死んだ。弔いも任せた。もはや自分がここにいる

べき理由もない。この世にいるべき理由もない。

「……とてつもなく恐ろしいものが、もうすぐ俺を殺しにやって来る。俺に死ぬ気があるうがなろうが、そいつが俺を生かしてはおかんよ」

あの若君が本気で暴れたら、町や村の1つ2つは容易く滅びる。人が住む場所に、自分はいるべきではない。

「その……恐ろしい方は何故、貴方を生かしておかないのですか？」少女の方が、追いつがるように声をかけてきた。

「悪い人……なのですか？ その方は」

「悪、ではないな」

背を向けたまま、ギルベルトは会話に応じた。

「無理矢理にでも正義と悪に分類するとしたら、そいつは正義だ。だから俺を殺しに来るのさ」

「あたし、貴方のような人を知っています。そこの櫛の木の下に……眠っています」

確かに、大きな櫛の木が立っている。その根元に誰かが埋まっている、と少女は言っているようだ。

「その人は、人間ではなくなってまで、あたしたちの村を守ろうとしてくれました」

（魔獣人間……という事か？）

ムドラー・マグラ以外にも、魔獣人間の製造を行っている者がいるという事か。

「村を守ろうとして死んだ、というわけかな」

ギルベルトは会話を続け、少し情報を集めてみる事にした。

「俺の部下たちのように自然に朽ち果てたのか、それとも殺されたのか、気になるところだ」

「殺されました……その殺した人が結局、村を守ってくれたんです」

「ふん。何かを守ろうとする者同士が殺し合う……実によくある話さ」

「あたしは、そんなの嫌です。あたしを助けてくれた人が、そんな

殺し合いをするなんて……もう絶対嫌」

俯きながらも、少女は言葉を続けた。

「貴方の命を狙ってる、その恐ろしい方が……悪い人じゃないのなら、何とか説得を」

「おいおい、命知らずなお嬢さんがいたものだな」

ギルベルトは思わず振り返り、人間の表情が失せた顔で苦笑した。  
「あれを説得！ ある意味それは、ダルーハ様に戦いを挑むより凄  
い事だぞ」

「……要は、命を粗末にするなという事だ。エミリィ・レアは貴方  
に、ただそう言っている」

口髭の男が言った。こうして見ると、高位の聖職者らしい威厳の  
ようなものが、感じられなくもない。

「ともあれ、部下の方々の弔いには貴方も立ち会うべきだろう。そ  
の後の身の振り方は、ゆっくり考えると良い」

「……そうだな」

魔獣人間を造っている輩が、ムドラー・マグラ以外にもいるのな  
ら、確かに放っておくべきではない。

自分や部下たちのようなものが生み出される。それは、止めなけ  
ればならない。

自分を殺しに来るであろう若者に、ギルベルトは無言で語りかけ  
た。

（すまんな若君……今しばらく、あんたに殺されてやるわけにはい  
かないようだ）

あらゆる物事を魔法で解決する事の出来た時代があった。

レグナード魔法王国の時代である。

強大な力を持つ少数の魔術師たちが為政者となって、魔力の乏し  
い民衆を支配する。そんな体制が、1000年近くは続いたらしい。  
それだけ続けば当然、国というものは腐ってくる。

強大な魔術師であるはずの為政者たちは、この頃になると搾取に励み享楽にふけるばかりで魔力の鍛錬を怠り、民衆の叛逆を自力で鎮圧する事が出来なくなっていた。

衰えた魔術師たちが、魔力に乏しいが体力に優れた平民の叛逆を抑えるために造り出したもの。それが魔獣人間である。

この生ける凶器が大量生産され、叛乱鎮圧の戦に投入されようとした頃。魔術師たちにとっても民衆にとっても予想外の事態が起った。

怪物・魔物たちによる、襲撃と侵略である。その頃の彼らには、かの赤き竜のような強大なる統率者が存在せず、言わば烏合の衆に等しい状態であったようだ。

そんな魔物たちによる侵攻に対し、魔獣人間の軍勢が実戦投入されたわけだが敗れ、レグナード魔法王国は滅びた。

敗れはしたものの魔獣人間の軍勢は、それなりに健闘したようである。勝者である魔物たちも壊滅に近い状態に追い込まれ、結局は元魔法王国の民衆だった人間たちに駆逐されてしまった。

その人間たちによって、様々な国が興されては滅んだ。

その興亡と戦乱が300年ほど続いた後の現在。レグナード魔法王国の、恐らくは最も禍々しくおぞましい部分が、ここバルムガルドに生き残っている。

王国南西部ヴォルケット州、ゴズム山脈の奥地近く。

建築したと言うより、山そのものを彫り込んで造り上げたかのような、巨大な岩の城郭である。

レグナード魔法王国の遺跡。

バルムガルド王家の管理下にあった、この巨岩の城郭が、今は実質的にゴルジ・バルカウスの私有地と化している。

ゴズム岩窟魔宮と名付けられた、この城郭の内部奥深くで発見されたもの。それらが今、メイフェムの周囲あちこちで、氷のようなものに閉じ込められ、あるいは透明な筒状の容器の中で液体に漬けられている。

液体の中で一カ所の腐敗もなく、まるで水中で眠っているかのようなマンティコアやデーモンの死体。氷あるいは水晶に似たものの中に、生きたまま閉じ込められたかのようなバジリスクやキマイラ。液体に漬けられた、臓物らしきものや眼球もある。五体満足では室内に収まらぬ巨大な怪物……サイクロプスやワイバーンといった生き物たちの、肉体の一部であろう。

レグナード魔法王国の在りし時代から約300年間、この岩窟魔宮の奥深くに保存されていた、魔物・怪物たちの生体標本である。

「魔法王国の先人たちは、残しておいてくれたのだよ。魔獣人間の材料を、私のためにな」

枯れ木のような身体をローブに包み、顔に仮面を貼り付けた男が、感慨深げに言う。

ゴルジ・バルカウス。何人目であるのか、メイフェムは知らない。「そうでなければ、まあガーゴイルやオーガーはともかく……バジリスクやロック鳥の細胞など、そうそう手に入るものではない」

「……まあ、そうでしょうね」

メイフェムは見回した。

トロル、ヒドラ、ウェアウルフ、サラマンダー、キマイラ……19年前、少なくとも1度は戦った事のある怪物ばかりである。

彼らの見本市とでも言うべきこの岩窟の大広間に現在いるのは、メイフェム・グリム以外には3名。

ゼノス・ブレギアス元リグロア王太子。ゴルジ・バルカウス。それに、メイフェムの法衣の裾にしがみついている小さな女の子。

メイフェムとお揃いの、唯一神教の法衣を着せられた、幼い少女である。

「何でえ。結局、連れて来ちゃったのかい」

「仕方がないでしょう。貴方に差し上げると言ったのに、受け取ってくれないんだもの」

ゼノスと会話をしながらメイフェムは、マチュアの頭を軽く撫でた。撫でるのではなく、頭蓋を握り潰してやる事も出来る。

それがわかるのかマチュアは、臆病な仔犬のように怯えながらも、しかしメイフェムから離れようとしなない。

マチュアという名前と、自分の身体。命。それら以外の全てを、この小さな少女は失ってしまったのだ。

彼女の母親はバウルファー・ゲドン侯爵の城で、魔獣人間どころか残骸兵士にすら成れずに絶命した。父親は、メイフェムが惨殺した。ついで大勢の人間を殺して潰して引き裂いたが、マチュア1人だけが、その場にいながら運良く殺戮を免れたのだ。

それを、この小さな愚かな少女は、助けてもらったなどと勘違いをしている。勘違いしたままメイフェムの法衣を掴み、身を寄せ、俯いて怯えている。

そんなマチュアに対する興味を早々に失ったゼノスが、周囲の動かぬ怪物たちを興味深げに見回す。

「それにしても、こいつあまさに壮観ってやつだなゴルジ殿……：こんだけ材料があるんならよ、そこいらじゅうの人間どもに植え付けて魔獣人間の大量生産を」

「そう単純にはゆかぬのだよゼノス王子。例えばだ、ある人間にトルとマンティコアの細胞を植え付けてみたとする。出来上がった魔獣人間が、それではトルとマンティコアを同時に相手取って戦えるだけの力をもっているのかと言うと」

「必ずしもそうではない、というわけね」

「その通りだメイフェム殿。貴女には以前言ったと思うが、魔獣人間には適性というものがある。重要なのは、素体となる人間の質なのだよ。貴公らのような素晴らしい素材には、なかなか巡り会えぬもの」

バルムガルド国民を使つての魔獣人間製造を、ゴルジは国王ジオノス2世から許可されたらしい。

つい最近までヴァスケリアのサン・ローデル地方で行われていた事が、バルムガルド1国全体で行われる事となる。かつてレグナード王国の魔獣人間製造施設であった、このゴズム岩窟魔宮を中心と

してだ。

「ほほう、俺たちや素晴らしい素材か。そうかそうか、選ばれし者ってやつだな……うん？」

嬉しそうな声を出しながらゼノスが、何か見つけたようだ。

マチュアの身長ほどの、岩の台座。その上に、古びた壺が安置されている。生首ほどの大きさで、陶器か金属製か判然としない。

「何だい、こいつぁ……」

「ああ触らぬ方が良いぞ。その壺の中身は、この世で最も扱いに慎重を要する物質よ。それを浴びた者は全身が灼けて溶け、跡形もなくなる。運良く一命を取り留めたとしても、人間ではいられなくなる」

「まさか……」

メイフェムが息を呑み、ゴルジが頷いた。

「そう……竜の血だ」

その壺の中身と同じものを全身に浴びて死にかけ、人間ではないものとして覚醒した男を1人、メイフェムは知っている。

「かの赤き竜よりも、ずっと古い時代の竜であろうな。魔法王国の先人たちが、いかにして竜の血液の採取になど成功したのかは、残念ながらわからん。とにかく魔獣人間の材料としては、禁断の切り札とも言うべき逸品よ」

「竜の力を持つ魔獣人間……確かに、恐ろしい怪物になりそうね」

「無論、素材となる人間は選ばねばならんがな。竜の力に耐えられる肉体……貴公ら2人ではどうかと悩みに悩んだが、結局やめた」

「助かったわ」

ダルーハ・ケスナーでさえ、浴びただけで死にかけた竜の血液。自分など一たまりもなかっただろうとメイフェムは思う。

「だがな、つい最近……駄目で元々と思い、使ってみたのだよ。その壺の中身を2、3滴ほどな」

仮面の下で、ゴルジは嬉しげに笑った。

「成功した。誕生したのだよ、竜の力を持つ魔獣人間が1人」

「へえー。どんな奴よ、今ここにいんのかい？」

ゼノスが見回した。

「俺やメイフェム殿よりもバケモノかい、そいつ」

「いい勝負であろうな。まあ近いうちに、貴公らにも紹介出来ると思う」

竜の力を持つ魔獣人間。とは言えダルーハほどの怪物ではないだろう、とメイフェムは思う。あの男を上回る怪物が、もし存在するとしたら。

（赤き竜……やはり、お前の血筋）

「とにかく万事、私の思う通りに進みつつある」

仮面の下でゴルジの両眼が、邪悪なほど熱っぽく輝いている。

「やはりエル・ザナード1世を生かしておいたのは正解であった。

あの女王が例の怪物を操ってバルムガルド軍を撃退した、そのおかげで私は今こうして、バルムガルド一国を魔獣人間造りに活用する事が出来る」

「……例の、怪物？ 何でえそいつは」

ゼノスの口調が、殺意に近いものを孕んだ。

「俺の嫁さんの近くに、バケモノがいるってのかい。そいつあ捨て置けねえなああ」

「詳しい事はよくわからん。が、ジオノス2世陛下がおっしゃるには……ダルーハ・ケスナーの息子、であるらしい」

（ダルーハの息子……そう。そういう事になっているのね）

あの時、救出されたレフィーネ女王が、その身に宿していた命。

それが何であろうとレフィーネ女王の産んだものなら、ダルーハは己の子として育てたであろう。そういう男だった。

「……とにかく人間という種族は、一刻も早く、こやつらに対抗し得るだけの力を持たねばならん」

動かぬ怪物たちを見回し、睨みながら、ゴルジは語る。

「魔獣人間という戦力の確保に、もう少し早く着手していれば……レグナード魔法王国が滅びる事も、なかったであろう」



まるで自分が、300年前の魔法王国滅亡に立ち会ったかのような事を、彼は言っている。

「あ……あのう……」

メイフェムにすがりついたままマチュアが、か細い声を発した。

「あなたたちは、何をしようとしてるんですか……？ 悪い事なら、やめて下さい……」

「ゴルジ殿の考えてる事なんて、わかるわけないでしょう？」

にこにこ笑いながらメイフェムは、唯一神教徒のベールを被った少女の頭を、少し強めに撫でた。頭蓋骨をがくがくと揺さぶられ、マチュアが泣きそうな声を出す。

そこへ、ゴルジが声を投げた。

「私はただ、人間という種族そのものを救おうとしているだけだ。それがわからぬなら、わからぬままで良い……黙って大人しくメイフェム殿に飼われておれ。餌代くらいは我らが負担してやる」

「はっはっはーお嬢ちゃんよ。驚いた事に今ここにいる奴らの中で、人間はおめえーだけだ」

ゼノスが笑う。

「人間じゃねえ奴のやる事なんぞ、人間の頭で理解しようとするモンじゃねえぜ？ なあゴルジ殿」

「ゼノス王子、それにメイフェム殿にも言っておくがな。我々は確かに、肉体はすでに人間ではない。だが心は人間だ。人間の心を、失ってはならぬ。人間を守るのが、我らの使命なのだからな」

もう遅い、とメイフェムは思った。人間の心など、自分はどうの昔に失っている。

「……それでゴルジ殿。人間を守るために、私たちはこれからどう動けばいいのかしら？」

「エル・ザナード1世女王を、守らねばならん」

ゴルジは即答した。

「ヴァスケリア国内で、赤き竜の残党どもが蠢いておる。奴らは女王に叛意を抱く地方貴族どもに接近し、何やらそそのかしている様

子……どうせ叛乱やら国家転覆の類であろうがな」

人間を使って、人間の世に混乱をもたらし、それに乗じて覇権を狙う。小賢しい手段であると言える。暴力のみで人間を制圧しようとして失敗した赤き竜を、反面教師にでもしているつもりであろうか。

「何にせよ、エル・ザナード1世には健在でいてもらわねばならん。魔物どもの暗躍に足元をすくわれ、不慮の死を遂げる……：ような事など、起こってはならんのだ。あの女王は生かしたまま、出来れば我らの側に取り込みたい。そうすればヴァスケリアでも、大々的に魔獣人間を造れるようになるかも知れん」

ゴルジの仮面が、ゼノスの方を向いた。

「我らの中で、かの女王といささかなりとも縁のあるゼノス・ブレギアス元リグロア王太子。貴殿に、エル・ザナード1世女王との接触と彼女の護衛を頼みたいが」

「せせせせ接触？　イイんだな？　そりやもういろんなトコ接触しまくっちゃうよー何しろ俺の嫁さんだからなあ、旦那として当然の権利を行使しまくっちゃうぜえ俺あよおおおおおおお！　お！」

ゼノスがのけ反り、驚喜し始めた。

「護衛だって任せとけ。やっぱ自分の嫁さんは自分<sup>てめえ</sup>で守らねえとなあ。守って守って守って守って俺のモノにする！　そうすりゃ自動的にコッチに取り込める事にならなあああ、そうだろゴルジ殿！」

「……貴方にそれが出来るなら、ね」

ゴルジの代わりに答えながら、メイフェムは溜め息をついた。

「ねえゴルジ殿……大丈夫なの？　こんな事をゼノス王子に任せてしまつて」

「メイフェム殿よりは適任だ。貴女では、些細な事に逆上して女王を殺してしまいかねん」

「……確かに、ね」

マチュアの頭を荒っぽく撫で回しながら、メイフェムは苦笑する

しかなかった。

ゴルジが、さらに言う。

「とにかく、エル・ザナード1世女王には生きて戦い続けてもらわねばならんだ。彼女が健在である限り、今回のような恩恵が、これからも我々にもたらされるであろう」

殺すのは、いつでも出来る。ゴルジは、そう言っているようであった。

そんな思惑とは無関係にゼノス王子が、舞踏か演武かよくわからぬ動きをしながら喜び回っている。

「いえええい嫁嫁嫁ヨメ俺の嫁！ 結婚だよ結婚結婚！ いいんだよ政略結婚でもよォー、そっから愛を育んできゃいいんだからなっお嬢ちゃん。結婚にゃあ夢を持たなきゃダメだぜえー？」

「は……はい……」

困惑しているマチュアの頭をガクガクと撫で回しながら、メイフエムは思う。

ヴァスケリア王国に、かつての赤き竜に勝るとも劣らぬ危機が迫りつつある。

バウルファア・ゲドンなどという小物を始末しただけで、あの者たちは魔法の鎧を脱いでしまうのか。否、そんなはずはない。そんな事は絶対にさせない。

彼らの戦いは、むしろこれから始まるのだ。

（戦いなさい、命を賭けて……そして、私に見せてちょうだい。ケリスが命を捨てて守った、美しいものを……）

### 第37話 黄昏の魔族

豊麗な胸から、優美にくびれた胴、そこから白桃の如く膨らんだ尻に至るまでの魅惑的な曲線は、唯一神教の清楚な法衣によって、より肉感的に引き立てられているようであった。

そんな身体に、蜂蜜を思わせる金髪がフワリとまとわりついている。

その美貌には、天使のような、などという芸のない表現しか当てはまらない。

眠たげな瞳は、どこか遠くをぼんやり眺めているようでもあり、この聖堂前に集う群衆の全員を見つめているようでもあった。

年齢は、20歳になるかならぬか、といったところであろう。

アマリア・カストゥールという名前以外、この娘に関してアレンは何も知らない。クラブ・ルマン大司教の、秘書のような仕事をしているらしいのだが。

そんな彼女が今、ガルネア地方の唯一神教会聖堂の露台に立ち、民衆に語りかけている。

「許す事。それは時として、何よりも難しいものです……唯一神が与えたもうた試練、と言って良いでしょう」

大声ではない。涼やかな風のように、人々の間をよく通る声である。

「この試練を、皆様と共に乗り越えて行きたいのです……許しましょう。ダルーハ・ケスナーのために道を誤った、哀れなる者たちを」露台を仰ぎ見る形に集まった民衆が皆、うっとり聞き入っている。

聖堂近辺の町人、村人。さすがにガルネア地方の領民が1人残らず集まって来ているわけではあるまいが、それでも見渡す限りと言っている群衆の海が、アレン・ネッドとクオル・デーヴィの周囲に広がっていた。

その全員を優しく撫でるかの如く涼やかに、アマリアの声が流れ続ける。

「祈りましょう。彼らの魂に、貴方がたの愛する人々と同じ安らぎが訪れますように……」

皆殺しにされたダルーハ軍残党のために、アマリアは祈っている。彼らに家族や友や恋人を殺された民衆の、目の前でだ。

アレンは見回した。皆、アマリアに倣って両手を握り合わせ、恍惚とした表情で祈っている。

「ああ、素晴らしい……そうは思わないかアレン」  
祈りながら、クオルが言った。

「ダルーハ軍の兵士たちに愛する者を殺された人々が、その兵士たちのために祈っている……まさしく聖女アマリアの心が皆に伝わったのだ」

1つ肝心な事をクオルは見落としている、とアレンは思った。

ダルーハ軍残党は皆殺しにされたのだ。だから民衆も、許す気になっている。祈ってやるつもりになっていくのだ。

ここガルネア地方で大いに非道を働いたダルーハ軍の兵士が、1人でも生き残ってこの場にいたとしたらどうか。

聖女アマリアが何と言おうと、その兵士は群衆によって吊るし上げられ、下手をすると殺されていただろう。

憎い相手が、惨たらしく虐殺された後だからこそ、許す事が出来る。

人間ならざるあの若者が大虐殺を実行してくれた後だからこそ、生き残った者たちが、こうして平和的に祈りを捧げ、聖人のような気分になる事が出来るのだ。

そのようにしてローエン派が平和的に、人々の心を支配してゆく。（それが宗教というものの、なのだろうけど……）

思いつつもアレンは、周りに合わせて祈りを捧げるふりをした。それにしても。いつの間にか、聖女などと呼ばれるようになっていく。

アマリア・カストゥール。この女性が、いつからこんなふうになるでクラバー大司教の代理人の如く振る舞うようになったのか、アレンは思い出せなかった。

その美貌で、戦災地の民衆の、男性のみならず女性たちの心まで掴んでしまっている。

もちろん美貌だけではない、人の心を虜にするような何かをアマリア・カストゥールは持っているのだろうが、アレンにはわからなかった。

（エミリイの方が全然、可愛いし魅力的じゃないか……！）  
どうしても、そう思ってしまう。

「人は、許し合いながら生きてゆけるはずなのです」

聖女アマリアの可憐な唇が、涼やかな綺麗事を紡ぎ続ける。

「それが出来ないのは、世の中が悲しい方向へと流れているから……この悲しい流れを、止めましょう？ 人が許し合い、笑い合い、愛し合える世の中を作ってゆきましょう。皆さんの力で、私たちの力で……唯一神の、御力で」

「そうだ、唯一神はいくらでも力を貸して下さる。聖女と共に平和への道を歩む、我々に……」

クオルが、うっとりとし祈り呟いている。

周りの民衆も、同じような有り様だった。男も女も老人も若者も、熱っぽく目を輝かせて露台上の聖女に見入り、その言葉に聞き入っている。

この北の地に勢力基盤を持っていながらも普段は王都の大聖堂にいるクラバー・ルマン大司教の、戦災地における代理人を、アマリア・カストゥールは完璧に務めていると言っているだろう。

否。今やヴァスケリア王国北部の民衆の大部分は、大司教よりももしかすると唯一神よりも、聖女アマリアを信仰の対象としてしまっているのではないか。

「これで、いいのかな……こんな事で……」  
アレンの呟きを、クオルが聞きとがめた。

「何か言ったかアレン……君は聖女の言葉に耳を、心を、傾けないのか？ 何故だ？」

「落ちてくオル、君は考えた事があるのか……戦災地の民衆が、こうして呑気な祈りを捧げていられるほど急激に生活を回復させたのは何故だ。その豊かさは、どこから来ている？ バルムガルド王国ではないのか」

大国バルムガルドは相変わらず、ヴァスケリア国内のローエン派に資金を注ぎ込み続けている。

バルムガルドがヴァスケリア征服に乗り出し、クラブー大司教や聖女アマリアがそれを容認したら。少なくともこの場にいる民衆は、あっさりと征服を受け入れてしまおうだろう。

今、聖女が優しく語り唱えている平和主義。その先にあるのがバルムガルドによる侵略・支配である事は、少し考えればわかりそうなものだ。

そんな少しの事を考えるだけの思考力をも、アマリア・カストゥールは民衆から奪いつつある。聡明な聖職者だったクオル・デーヴィイからも。

「クオル……このままではヴァスケリアは、バルムガルドに乗っ取られてしまうぞ」

「いいじゃないか、それでも」

耳を疑うような事を、クオルはあっさりと口にした。

「国名がヴァスケリアからバルムガルドに変わるだけで、誰も困りはしないだろう？ 困るのは今の女王その他、支配層の愚かな人々くらいで、民衆は普通に暮らしてゆけるさ。他国が欲しがるのは、ただ与えてやればいい。それで平和は保たれる。抗って血を流し、戦って勝利したところで、平和より素晴らしいものを得られるわけではないんだ。そうだろう？」

「クオル……」

君はダルーハ軍残党がしていた事を目の当たりにしたのではないのか。アレンは、そう叫びそうになっていた。

バルムガルドの兵隊が、ヴァスケリアの民衆に対して、あれと同じ事を行わないと何故、断言出来るのか。

そう叫んだところで、しかし今のクオルには届かないだろう。

「右の頬を打たれたら、ただ左の頬を差し出せばいいのさ。それだけで平和はもたらされる……ああ聖女アマリアよ、どうか私の頬を打って欲しい……」

熱っぽい、劣情にも似たもので、クオルの両眼は輝いている。

アレンは天を仰いだ。唯一神ではなく、1人の若者に語りかけた。（貴方が今この場にいたら、私たちは皆殺しにされてしまうかも知れないな……ガイエル・ケスナーよ）

サン・ローデル西部森林地帯は、魔物の棲む森として知られていた。

実際オークやゴブリンの類が、山賊程度の規模で棲みついてはいるらしい。トルルやオーガーの目撃情報もある。

森林地帯の奥深くには、もっと危険な怪物が棲んでいる。サン・ローデル西部の村々では、大昔からそう言い伝えられてきたようである。

その怪物たちは、森の奥にある何かを守っているのだという。

それは恐ろしい魔力を秘めた宝物である、とも言われている。魔王や邪神の類が封印されて眠っているのだ、という話もある。

とにかく魔物の住処として、昔から恐れられている森林地帯なのである。

だが今、ブレンの目の前に群れている怪物たちは、そんな魔の森林から溢れ出して来た者たちではなかった。

ざっと見回して視界に入るのは、武装したオークの数個部隊。それらの隊長格と思われるトルル数体。

報告によるとこの者どもは、西に隣接するロッド地方から、魔の森林地帯を迂回するようにしてサン・ローデル領内に入り込んで来



たのだという。

人間の兵隊であれば、ロッド地方領主ライアン・ベルギ侯爵の不穏な軍事行動という事になる。対応を誤れば、政治的な問題にもなり得る。

が、怪物どもが勝手に動いているだけならば話は簡単だ。要は、皆殺しにしまえば良いのである。

サン・ローデル地方西部に広がる平原。右方向に目を向ければ、鬱蒼と木々の連なる風景が、遠くに見て取れる。

魔の森林地帯。

確かにそこを避けるようにして怪物たちは、西方向から進軍して来ていた。方角的に、ロッド地方から来ているとしか思えない。

その進軍を、ブレン・バイアス率いる20名の王国地方軍部隊が阻んでいるところである。

「……何だ？ 貴様ら」

怪物たちの指揮官と思われる魔物が1体、オークの群れをかき分けるように進み出て来た。

ブレンを僅かながら上回る巨体である。筋骨隆々たる巨漢の胴体が、猛々しい獣の頭部を載せているのだ。

ねじ曲がった角を生やした、凶暴な獣。強いて言うならヤギに似ている。牛のようでもある。が、言葉を発する口には、肉食獣そのものの牙が生え揃っている。

「人間どもが、なけなしの力を振り絞って我らに刃向かうか。健気なものよなあ」

その口で嘲笑いながら魔物は、凶悪なほどに筋肉質な両腕でブンッ！ と得物を振りかざした。鋭利な3本の刃を備えた、三つ又の槍である。

その両腕とは別に、3、4本目の腕のような形で、大型の翼が生え広がっている。尻からは、蛇のような尻尾。

デーモンである。魔物と呼ばれる者たちの中では、かなり高位の種族だ。

そんな上位の魔物に率いられた、怪物の群れ。オークだけでも100匹は超える。対する王国地方軍部隊は20人。

自分たちが負けるなどと、デーモンは全く考えていないようであった。

「良い良い、刃向かおうと刃向かわずとも人間どもは皆殺しと決まっておる。せいぜい健気に抗って、我らを楽しませてみよ」

「……わかった。死ぬほど楽しませてやる」

言いながら、ブレンも進み出た。軽い革の鎧すら身に着けていない、たくましい身体に粗末な布服だけを着用した姿でだ。

対照的に完全武装した20名の兵士たちが、緊張あるいは恐怖に震えながらも槍を構えて踏ん張り、健気に隊伍を組んでいる。

背後の彼らに、ブレンは問いかけて確認した。

「領民の被害は？」

「現在のところ、死亡者・負傷者は出ておりません。付近の村々の住民は全員、避難済みであります」

「上出来だ」

右の拳をグッと握り込みながら、ブレンは命じた。

「お前たちは、弱って逃げ腰になった怪物だけを狙え。1匹逃せば、領民が5人殺される。そう思って皆殺しに励むように」

「は、はい」

震える兵士たちを後方に残し、ブレンは魔物たちに向かって足を速めた。

握り込んだ右拳の中指では、竜の指輪が淡く光を発している。

「何だ何だ、素手で我らに挑もうと言うのか？　それはいささか健気過ぎるのではないか人間ごときが！」

叫びながらデーモンが、三又の槍を振るう。

それを合図として、怪物たちが一斉に襲いかかって来た。オークが、トルルが、凶暴な雄叫びと地鳴りを響かせ、荒波の如く押し寄せて来る。

その様を見据えながらブレンは、右拳を天に向かって突き上げた。

「武装転身……ッ！」

竜の指輪から上空へと、光の紋様が投影される。

様々な記号・図形を内包した、真円。空中に描き出されたそれが雷鳴と電光を発し、ブレンに降らせる。

落雷を思わせる衝撃と共に、ブレンの全身は魔法の鎧に包まれた。黄銅色の力強い甲冑姿が、押し寄せる怪物たちのまったく中へと突入しつつ、魔法の戦斧を振るう。

オークの生首が、臓物が、4、5匹分は宙を舞った。

右手で戦斧を振るいつつ、ブレンは左足を跳ね上げていた。魔法の脛当てと軍靴でガッチリ固められた蹴りが、オークの1匹を粉碎する。粉碎された肉塊が、臓物を空中に垂れ流しながら吹っ飛んで行く。

早くも怯み始めたオークたちを蹴散らして、トロルが3匹、大型の戦鎚を振り上げて3方向から突進して来る。

うち最も足の速い1匹に向かってブレンは踏み込み、魔法の戦斧を右上から左下へと振り下ろした。

オークとは比べ物にならぬ強烈な手応え、と共にトロルの巨体が斜め真つ二つになり、地面に崩れ落ちて臓物をぶちまける。

再生能力を持つ怪物を倒す手段。それは一撃で絶命させ、身体機能を停止させる事。それしかない。

ブレンは振り向きながら、魔法の戦斧を横薙ぎに一閃させた。

振り下ろされて来た2本の戦鎚が、その一閃に打ち弾かれて跳ね上がる。跳ね上がった武器を手放すまいとして巨体を泳がせる、2匹のトロル。

彼らの間を走り抜けながらブレンは、右に、左に、魔法の斧を叩き付けた。

トロル2匹、それぞれの下半身から、上半身が滑り落ちた。

逃げ腰になり始めた怪物たちに、王国地方軍兵士20名が、機を逃さず挑みかかる。

ブレンがバウルファア・ゲドン侯爵を殺害して城壁から放り捨て

た、あの時まで侯爵の護衛を投げ出さなかった兵士たちである。そこそこは精鋭で、トロルはともかくオーク相手ならば充分に戦える力を持っている。

頭数で勝りながら戦意で劣るオークの群れが、人間の兵士たちの槍や長剣にかかって倒れてゆく。

後押しを受けるようにしてブレンは踏み込み、魔法の戦斧を一直線に振り下ろした。

トロルが1匹、頭頂から股間まで斬り下ろされて真っ二つになり、左右に倒れる。

その向こうに、デーモンが立っていた。

「人間ごときが、邪魔をするか……！」

三又の槍がビュンツと構えられ、穂先がまっすぐブレンに向けられる。

「デーモンロード様はおっしゃった。竜の御子の出方を見るべく、人間を殺戮してみよと……」

「教えてやれるのは、俺たちの出方くらいだなっ」

双方、同時に踏み込んだ。

三又の槍と魔法の戦斧が激突し、火花と焦げ臭さを発散させる。柄まで金属で出来た三又槍が、デーモンの剛力で回転し、ブレンを襲った。穂先が、石突が、立て続けに打ち込まれて来る。

それらをブレンは、魔法の戦斧でことごとく打ち返した。

打ち返された三又の穂先が、間髪入れず別方向から叩き付けられる。強烈な一撃が、ブレンの左肩をかすめた。黄銅色の肩当てから、火花が散った。

「む……っ」

衝撃に、ブレンは歯を食いしばった。

直撃を何度も喰らえば、魔法の鎧は無傷でも、中の肉体が無事では棲まないだろう。

デーモンの巨体が、勢い付いたように躍動する。三又槍が、様々な角度から、まるで豪雨の如くブレンに降り注ぐ。

それらを魔法の戦斧で弾き返し、紙なら燃やせそうな火花を飛び散らせながら、ブレンはよろめいた。半ば、わざとである。

案の定、デーモンは突っ込んで来た。

猛牛を思わせる巨体の突進と共に、三又の穂先がまっすぐにブレンを襲う。

黄銅色のたくましい甲冑姿が、よろめきながら翻った。魔法の斧が斜めに振り下ろされ、三又槍を激しく受け流す。

突進の勢いを保ったまま、デーモンの巨体は前のめりに泳ぎ、地面に倒れ込んだ。

そこへ、ブレンが斬り掛かる。

起き上がる暇もないまま、デーモンは左手を掲げていた。

分厚い掌が赤く発光し、燃え上がり、その炎が球形に固まって発射された。

魔法の戦斧で、ブレンはそれを打ち砕いた。小規模な爆発が起こった。

爆風によるめくブレンに向かって、なおも火球を発射しながら、デーモンはゆったりと立ち上がって三又槍を右手で構えた。

魔物の左掌から発生した炎が、塊になって3発、4発と流星のように飛び、ブレンを襲撃する。

何発かを戦斧で粉碎し、何発かは跳んでかわしながら、ブレンは見た。兵士の1人が、トロルの大斧によって頭を叩き割られる様子を生き残っているトロルが2匹、ブレンを避けるようにして兵士たちに襲いかかっていた。

デーモンの火球を碎き続ける、魔法の戦斧。振るいながら、ブレンはそれを手放した。投擲。魔法の戦斧がギュルルルッ！と回転しながら、まるで戦場そのものを薙ぎ払うように弧を描いて飛ぶ。トロル2匹が、上下真つ二つになって臓物を噴き上げた。

逃走を開始したオークたちの、生首がスパパパパッと宙を舞った。

それだけの怪物たちを叩き斬って、ようやく魔法の戦斧は勢いを

弱めて落下し、地面に突き刺さる。

回収する暇など与えてくれるはずもなくデーモンが、得物を失ったブレンを狙って火球を乱射する。

無理に武器を回収しようとはせず、ブレンは跳躍した。跳んだ足元で火球が地面にぶつかり、爆炎と土が大量に飛散する。

爆風に吹っ飛ばされた感じにブレンは地面に転がり込み、起き上がりながら駆け出した。その足元で、またしても火球が爆発する。吹っ飛んだブレンの身体が、地面を転がりながらも徐々にデーモンとの距離を縮めてゆく。

5回目の転がり込みでブレンは、デーモンの足元に達した。

「ぬっ……」

至近距離にまで迫られた事に気付いたデーモンが、やや狼狽しながらも三又槍を突き下ろして来る。

それをかわしながらブレンは、デーモンの背後に回り込んでいた。そして右腕を、魔物の首に巻き付ける。巻き付けた右腕を、左手でガッチリと固定する。

「ぐえ……ッ！」

魔法の鎧をまとう剛腕に頸部を拘束・圧迫されて、デーモンが潰れた悲鳴を漏らした。

こうして完全な形で首を押さえてしまえば、魔物であろうが何であろが、人型の生物は何も出来なくなる。

締め上げながら、ブレンは語りかけた。

「貴様の槍さばき、見事なものだった……それに比べて、攻撃魔法の狙いは実にお粗末なものであったと言わざるを得んな」

魔力による狙撃の正確さは、シェファの方が上だった。

彼女がいればもっと楽な戦いになったのだが、今は別の任務に就いている。

「最後まで……槍一筋で、勝負するべきだったな」

「うぐっ……が……ッ」

ミシミシ……ッと筋肉も声帯も気管もまとめて押し潰す感触が、

魔法の鎧越しにブレンの二の腕へと伝わって来る。

そんな状態でありながらデーモンは、ゴボツと血を吐きつつも叫んでいた。

「わ……我ら、魔族に……栄光あれ……ええええっ……！」

「良き死に様！」

両腕で首を絞め固めたままブレンは、デーモンの巨体を思いきり振り回し、地面に叩き付けた。

太い頸骨が折れ、強靱な筋肉がちぎれた。その凄惨な感触が、魔法の鎧を通じてブレンの腕に強烈に伝わって来る。

デーモンの首は、ちぎれていた。

頭部の失せた大型の屍を地面に残し、ブレンは立ち上がった。そしてデーモンの生首を右脇に抱えたまま、呼吸を整える。

下手な魔獣人間よりも、ずっと手強い相手だった。

「これが、魔物か……」

魔獣人間のような、作り物の怪物ではない。遥か古の時代から存在し、人間という種族を脅かしてきた、言わば本物の怪物たち。

それが赤き竜の死後20年近くを経て今、またしても人間に対する威力行動を開始しつつある。

（こやつらに魔獣人間で対抗しよう、というのが貴様の考えか……ゴルジ・バルカウス）

ブレンは強敵の首級を目の高さに掲げ、見据えた。

実際に戦った今なら、わからぬでもない。本物の怪物どもから人間を守るために、人工の怪物を造り出す。そんなゴルジ・バルカウスの、最初は世迷い言としか思えなかった思想がだ。

その思想に基づいて造り出されたのが、あのメイフェム・グリムのような輩なのである。人間を、守るどころか殺し尽くしてしまいかねない、生ける殺戮凶器。

「……駄目だな。やはり認めるわけにはいかん、魔獣人間などという手段を」

呟きつつブレンは、己の全身を見下ろした。

魔物たちに対抗し得る、魔獣人間以外の手段……魔法の鎧。

ブレンは見回した。

視界一面にぶちまけられた、トロルやオークたちの屍。それらの中で生きている者がいないかどうかを確認して回る、兵士たち。

彼らに魔法の鎧を装着させ、部隊を形成する事が出来れば。ブレンはそう思うし、開発者ゾルカ・ジェンキムの頭にも当然あっただろう。魔法の鎧の大量生産。それを実現する前に、しかしゾルカは死んだ。

「戦闘終了です、隊長」

兵士の1人が報告に来た。

「敵は全滅、我が方の戦死者は2名……ノット・レジャーとスペル・アンカーです」

「そうか……」

この20人の中では最も腕の立つ兵士、とブレンが思っていた2名である。実戦では案外、そういう者から死んでゆく。

「すまん。俺が少し、猪突猛進し過ぎた」

「隊長のせいではありません。死んだ者が弱いのです……そういうものでしょう」

「隊長、20人で100匹もの怪物どもを退治したのですよ。大勝利ではありませんか」

「犠牲が2人で済んだのは奇跡です。隊長のおかげですよ」

兵士たちが、続々と集まって来た。

うち3人が、3人がかりで魔法の戦斧を運んで来てくれた。

「たっ隊長、これを……早く！ 本当に重いっス！」

「おお、すまん」

右手で、ブレンは受け取った。

「……本当は、投げたら手元に戻って来る予定だったのだ。投げ方の修練が足りなかったようだな……俺も、まだまだだ」

「隊長がまだまだなら、俺たちは何なんですか」

「ブレン隊長は、本当にお強い。貴方がもっと昔からサン・ローデ



ルにいて下されば、バウルファー侯も……あんな事には」

いくらか年配の兵士が、俯き加減に言う。

「……申し訳ございません。決して、今の御領主様を否定したわけでは」

「バウルファー・ゲドン侯爵は、立派な御領主であられたようだな」ブレンは言いつつ、少なくとも昔は、という部分を省略した。

「そんな御方を、俺は殺して城壁から放り捨てたわけだが」

「いえ、本当は我らがやるべき事であったのかも知れません」

兵士の1人が、毅然と言った。

「元凶は、あのゴルジ・バルカウスとメイフェム・グリム……ですが、お傍にいながらバウルファー侯をお止め出来なかったのは我々です」

「人間に止められるものではないさ。怪物どものやる事など」

その兵士の肩を軽く叩きながらブレンは、ふと遠くに視線を投げた。

鬱蒼と木々の連なる、魔の森林地帯。

「ところで……あの森にも、魔物どもが棲んでいるそうだな？」

「はい。ですが、ここ数年は被害らしい被害もなく……オークやゴブリンが時折、畑を荒らすくらいのものでありましょうか」

「そのオークやゴブリンどもも、いくら我々に駆逐されようと、決して森の奥深くへ逃げ込もうとはしません」

「我々が、あの森林地帯の中程の地点へと追い詰めたオークが、そこから先へは逃げ込もうとせず、斧で頭を割って自害したのを見た事があります」

「ふむ……下等な怪物どもを恐れさせるほどのものは、あるという事だな。あの森の奥には」

それが何であるかを、ブレンとしては調査してみたいところだが、今はそんな場合ではなかった。

現時点ではさほど実害のない、漠然と恐ろしげなだけの何かよりも、現実的に差し迫っている脅威を片付けなければならぬ。

ゴルジ・バルカウス一味の魔獣人間たち。それに、赤き竜の残党とおぼしき魔物の群れ。

（やれやれ、魔法の鎧は3つしかないと言うのに……）

つい愚痴をこぼしそうになって、ブレンは苦笑した。

魔法の鎧も魔獣人間も使わずに、ことごとく魔物どもを退治してのけた英雄たちを、自分は知っているではないか。

あの頃は、恐ろしくて物陰から見ているだけだった。今なら、普通に会話をする事が出来るだろうか。

心の中で、ブレンは語りかけてみた。

（その末路は逆賊であろうと、俺の中では、貴方は今でも英雄だ……力をくれ、ダルーハ卿）

感服するしかなかった。

「それにしても、よくやるものだ。まさか、あのような手があったとはな」

デキウスは、つい声に出して笑ってしまった。それが主君の耳に入った。

「何だ……何がおかしいのだデキウス・グローラー」

領主の椅子に、いささか落ち着きなく腰を下ろした、痩せ形中年男。

ロッド地方領主、ライアン・ベルギ侯爵である。貴族としては、まあ凡庸としか言いようのない人物だ。

それでも形としては主君なので、デキウスは礼を失せぬよう答えた。

「……単なる思い出し笑いでございますよ、侯爵閣下。先日のお会合、あれは実に面白いものでございました」

ガルネア地方聖堂で行われた会合。確かに、笑えるものではあった。

「あの大司教殿下、地方領主の方々に対して主導権を握ろうと、一

生懸命になっておられましたなあ……御自身が傀儡に過ぎぬという事に、果たして気付いておられるのやら」

「こ、これ！ 何を言い出すのだ」

ライアン侯爵が、青ざめながら椅子から腰を浮かせ、周囲を見回した。

デキウスは、優しく声をかけた。

「ご安心を。聞き耳を立てている者などおりませんよ」

「……あの大司教がバルムガルドの傀儡に過ぎぬという事くらい、私とて知っておるわ」

咳払いをしながら、ライアン侯は言った。

デキウスが感服しているのは、バルムガルド王国の、そのやり方である。

宗教勢力を利用して、出来る限り軍事力を使わずに敵国を侵略・支配してゆく。人間という非力極まる生物ならではの、巧みな戦略である。大抵の物事が力押しで何とかなってしまふ魔族の者たちでは、なかなか考えつかぬやり方だ。

（……見習うべきかも知れんな、人間どものやり方を。今の魔族には、力押しが出来るほどの力はない。それは認めねばならん）

それを、痛感させられたばかりである。

謎めいた行動を取り続ける竜の御子を、おびき出して出方を見るべく、配下の怪物たちに人間の殺戮を命じてみた。

形としてデキウスは現在、ロッド地方領主の部下であるから、領内で殺戮を行うわけにはいかない。だから隣のサン・ローデル地方に、怪物の一隊を送り込んでみたのだ。

サン・ローデル領内に入った途端、その一隊は全滅した。皆殺しにされた。竜の御子をおびき出す暇もなく、人間たちの手によって。詳しい事はわかっておらず調べている最中だが、1つだけ明らかなる事がある。

力押しで人間たちを攻撃すれば、必ず手痛い反撃を喰らうという事だ。考えてみれば、19年前に思い知っていなければならぬは

ずの事である。

今回もまた強烈な反撃を受け、剛勇のデーモンを1体、失ってしまった。

サン・ローデル地方領主は、リムレオン・エルベットとかいう名の少年貴族である。その若造が、魔族の侵攻に備えて何らかの手を打ったのか。

ダルーハ・ケスナーを失った人間たちが、魔族に対する有効な攻撃手段を確立させたという事なのか。

ゴルジ・バルカウス一味をサン・ローデル地方から追い払った、あの魔法の鎧の力であろうか。

だとしたら、それを何としても排除しなければならない。力押しではないやり方だ。

力押しでは上手くゆかぬと判明してしまった以上、バルムガルド王国を見習って、他の勢力を利用するやり方で事を進めるべきなのだ。

そう言えばバルムガルドも、力押しでヴァスケリア王国を攻めて失敗し、竜の御子によって大いに殺戮されたのだった。

（力押しで、何もかも上手くゆく。そんな生き物が存在するとしてら……竜の御子よ、貴殿くらいであろうか）

『苦労なさっておられる……みたいですわねえ』

声が聞こえた。人間の耳には聞こえぬ声。デキウスの心に、脳裏に、直接語りかけてくる声。

だから口は開かず、念ずる事で、デキウスは会話に応じた。

『……念話が出来る程度には、回復したようだな』

『身体はまだ全然ぐちゃぐちゃのバラバラですけどねえ。まったくメイフェム殿ってば洒落が通じないんだからあ……それよりデーモンロード様。人間相手に策略で勝負なさろうなんて、無謀が過ぎますわよ？』

『その名で呼ぶな。今の私は人間デキウス・グローラー。力押しでしか物事を片付けられぬ魔族ではない』

『うっふふふ……見る人が見れば、人間じゃないってわかつちやいますよ?』

先日 of 会合で、あのレボルト・ハイマンという男が自分に向けていた鋭い眼光を、デキウスは思い出していた。

今ならわかる。あの男はデキウスを、少なくとも人間ではないという所までは見抜いていた。

『人間は、力の無さを悪知恵で補いつつ歴史を綴ってきた種族。力しか取り柄の無い魔族の方が、彼らを策略で打ち負かそうなんて……ローラは悪い事は言いません。お得意分野の力押しで勝負なさった方が身のためですわよ?』

「我らが帝王・赤き竜はな、力押しの勝負でダルーハ・ケスナーに敗れたのだ。それを忘れたのか」

デキウスはつい、肉声を発してしまった。

ライアン侯爵が、落ち着きのない表情を向けてくる。

「なっ何だ? 何か申したかデキウスよ」

「……御無礼を。単なる思索でございます」

恭しく、デキウスは跪いて頭を垂れた。

人間に化け、人間に仕える。こんな事をしているのも、魔族の歩むべき新しい道を模索するためだ。

(我ら魔族は、力押しの戦いで疲弊しながら歴史を綴ってきた。今や新しい在り方を見つけないければ、我らに未来はないのだ)

念じて、ブラックローラ・プリズナは何も応えない。

念話は、すでに切れていた。

### 第38話 人の姿をまとう者たち

リムレオンはさぞかし迷惑しているだろう、とティアンナは思う。サン・ローデルのような大地方の領主の地位など、野心のかけらもないあの従兄にとっては、要らないものの筆頭であろう。

バウルファー侯亡き後のゲドン家からは、貴族の特権を全て剥奪した。当主が領民に対し大々的に人狩りなどを行っていたから、一族そのものに叛逆の罪を被せるのは難しい事ではなかった。

とにかくエルベツト家には、強大な力を持ってもらわなければならない。そしてエル・ザナード1世の政権を、強固に支えてもらわなければならない。

自分の身に何かあればヴァスケリア王国は滅びる、とまで自惚れるつもりはティアンナにはないが、それでも万一の時は、エルベツト家の人々に王国を守ってもらうしかないのだ。

（お願いするわよりムレオン。私の身には、何が起こるかわからないから……こんな書簡まで来てしまうし）

独立宣言、である。

ヴァスケリア王国北部のレドン地方、ガルネア地方、バスク地方、エヴァリア地方……ダルーハ・ケスナーの叛乱によって特に大きな被害を受けた、いわゆる「北の戦災地」として一括りに扱われる事の多い4地方をそれぞれ治めていた領主たちが、バルムガルドと同じような事を言い始めたのだ。

すなわち逆賊ダルーハに擁立されたまま玉座に居座っている女王など、自分たちは認めるわけにはいかない。レドン、ガルネア、バスク、エヴァリアの4地方は、シーリン・カルナヴァート殿下を女王に戴き、正統なるヴァスケリア王国としての道を歩む、と。

その宣言が記された書簡には、クラバー・ルマン大司教の聖印も押されている。ヴァスケリアの唯一神教会はこの独立を支持する、という事だ。

書簡を携えて来た使者に、ティアンナはとりあえず微笑みかけた。  
「それで……私に、どのようにせよと？」

「正統ヴァスケリア女王たるシーリン・カルナヴァート陛下は、しかし現在バルムガルド国内におられます」

若い男だった。黒に近い、焦げ茶色の髪をしている。

正装し跪いた長身は、すらりと無駄なく鍛え込まれ、優男そのものの外見にそぐわぬ力を秘めているのがティアンナにはわかった。

秀麗な顔を伏せたまま、その使者は言葉を続けた。

「シーリン陛下には一刻も早く、王国として統治なさるべき4地方へと入っていただかねばなりません。そのためには貴国の領内を通せねばなりませんゆえ」

「通過など……そもそも独立など、許すわけがなからう。何を言っておるのだ」

シーリン・カルナヴァート元王女と同腹の兄であるモートン副王が、玉座の隣で怒っている。

「許されるわけがないとわかっていながら、このような書簡を持って来る。それはもはや宣戦布告に等しいという事、理解しておるのだろうか？」

ティアンナは軽く片手を上げて、副王を黙らせた。こんな偉そうな仕草で、兄は黙ってくれる。

跪いたままの使者に、ティアンナは問いかけた。

「使者殿……貴方のお名前を、お聞かせ願えましょうか？」

「レボルト・ハイマンと申します」

「バルムガルド王国に、そのようなお名前の将軍がおられたと記憶しておりますが」

ティアンナの言葉に、レボルトの長身が一瞬、微かに震えた。有るか無きかの反応だった。

「レボルト殿、貴方は……バルムガルドの方ですか？」

「……いかにも。正統なるヴァスケリアの独立建国は、バルムガルド王国としても大いに支持するところでございます」

謁見の間に集う廷臣たちが、ざわついた。

独立せんとしている4地方の領主らではなく、彼らの後ろ楯であるバルムガルド王国が、このような使者を送ってくる。独立を認めなければ我らが黙ってはいないぞ、と言っているようなものだ。モートンの言う通り、宣戦布告に等しい。

「……東国境における不幸な出来事を、忘れたのか」

そのモートン副王が、さらに言った。

「あのような戦、我らとて望むところではなかった。それでも我らが勝ってしまったが、嫌な戦であった。あれを繰り返すような事態は、お互い避けようではないか使者殿」

「戦……ではありませんよ、あれは」

拝跪したまま、レボルトは顔を上げた。

秀麗な顔に、鋭く険しい、敵意に等しいものが漲っている。

「あんなものは戦ではなく……虐殺です。そうでありましょう？

エル・ザナード1世陛下」

ティアンナは息を呑んだ。

ヴァステリア軍の大快勝と語られているあの戦が、本当はどういうものであったのか、このレボルトという若者は知っているのか。

「おわかりですか女王陛下。貴女は人間の戦に、人間ではないものを持ち込んでしまわれたのです」

「私が持ち込んだわけではありませんよ、レボルト殿」

彼は、様々な物事を、頼んでもいないのに暴力で解決してくれる。「魔物を飼っている。世の人々は私の事を、そのように言っておられるようですが……あの方を飼い馴らす事など、誰にも出来はしません」

「貴国とは何の関係もない怪物が、勝手に現れて勝手に暴れたと。そうおっしゃるのですな」

レボルトの鋭い両眼の中で、敵意が燃え上がった。

「ならば我々も勝手に、あの怪物を退治させていただく。構いません？」



「命知らずな事はおやめなさい。貴方1人が命を落とす、だけでは済まない事になりますよ」

ヴァスケリアを守るために、バルムガルドを滅ぼす。彼ならばそう言って、実行に移しかねない。

そんな事が起こる前に、面倒事は片付けなければならない。人間である自分たちの手で、穏便に速やかに。

「……会談の場を設けていただく必要がありますね。私とシリン・カルナヴァート元王女、のみならず独立を望んでおられる地方領主の方々に大司教猊下、そしてバルムガルド国王ジオノス2世陛下を交えて」

「ジオノス2世も同じ事を申ししております。新たなる国家を承認するための会合、1度は開かねばなりません」

ゆらりと立ち上がりながら、レボルトは言った。

「日時や場所に関しては、いずれまた……」

「ジオノス2世陛下によりしくお伝え下さい。むやみに他国を狙わずともバルムガルドは富める国……行き過ぎた拡張主義はその富を損ない、貴国に大いなる不利益をもたらすでしょう。」と

「大いなる不利益……あの怪物が、我が国に攻め込んで来るとでも」  
レボルトの身体が、メキ……ッと痙攣した。秀麗な顔が一瞬、歪んだ。

人間の表情筋では絶対に起こりえない歪み方だ、とティアナは感じた。

「そうになったら、この私が迎え撃つ……そして倒す。それだけです」

「貴方は……!」

ティアナは思わず、玉座から立ち上がってしまいそうになっていた。横のモートン副王も、むくんだ顔を青ざめさせて目を見開いている。

間違いない。こんなふうに身体を震わせ、表情をねじ曲げながら人間の姿を脱ぎ捨てていった者たちを、自分は知っている。先の戦

で、嫌になるほど目の当たりにした。

この場では人間の姿を脱ぎ捨てようとせず、レボルト・ハイマンは一礼し、背を向け、歩み去って行く。

彼が今その気になれば、謁見の間を守る衛兵たちなど片っ端から虐殺し、エル・ザナード1世を殺害する事も出来るだろう。

何故かそれをせずに去って行くレボルトの背中に、ティアンナは一言だけ問いかけた。

「……何故です？」

廷臣たちが、キョトンとしている。この質問の意味を理解した者がレボルト以外にいとすれば、モートンくらいであろう。

歩みを止めず、顔だけを少し振り向かせて、レボルトは答えた。

「今ここで私がそれを実行すれば……人間ではないものが、人間の政に介入する事になる。それは許されないのですよ、女王陛下」

鋭い、禍々しいほどに鋭い瞳が、ギラリと輝きを増した。

「私がこの力を振るうのは、あの怪物に対してのみ……奴は、この私が始末する。必ずだ」

紛れもなく、魔獣人間の眼光だった。

自分が何故こんな所にいるのか、リムレオンは時折わからなくなる。

今は、領主の椅子に座っている。以前はバウルフアー・ゲドン侯爵が座っていた椅子である。

自分は伯父から全てを奪ってしまったのだ、という思いが、まるでバウルフアー侯の亡霊のように、リムレオンの心に取り憑いて離れてくれない。

2人、床に這いつくばるように平伏していた。

うち1人は、本来ならば今頃この椅子に座っていたかも知れない人物である。

ガートナー・ゲドン伯爵。30歳。亡きバウルフアー侯の長男で、

父親譲りの大柄な体格をしているが、明らかに鍛え方が不足しており、巨体というよりは肥満体である。

逆賊に認定され、領地も特権も失ってしまったゲドン家の代表たるガートナー伯爵が、13歳も年下の新領主に対して、平伏しながら泣き事を漏らした。

「我らの財産を全て没収とは、あまりに惨い処置……せめて東部3町8村の徴税権だけでも、返していただくわけには参りませぬか。何とぞ、どうか」

「……伯爵、とりあえず顔をお上げ下さい。頭を下げられても、出来る事と出来ない事がありますから。メッケル司祭、貴方もです」

ガートナーより少し年上と思われる中年の男が、土下座をしたまま顔だけを上げた。泣き顔に近い表情だ。

メッケル・バウアー司祭。少し前までは司教だった。唯一神教会サン・ローデル地方聖堂の、頂点にいた聖職者である。

ダルーハ・ケスナーの叛乱以前、ディラム派が教会の主流だった頃は、その宗教的権威を私用して不正に富を貪っていたらしい。エミリイ・レアの話によると、貧しい者のためには何もしないこの人物のせいで、彼女の両親は病死しても埋葬すらしてもらえなかったようである。

領主ゲドン家とも結託して領民からの搾取に励んでいた司教が、今や司祭に降格し、一切の利権を失って、新領主の眼前で土下座をしているのだ。

「どうか……どうか私めに、エルベツト家の方々のお力添えを……」  
女王の親族であり、いまやヴァスケリア王国西部における最大の領袖となったエルベツト家の権威に、この元司教は何やら期待しているようである。

「唯一神の御心に背く事なく、清貧を旨として聖務に励んで参りましたのに……このような仕打ち、ローエン派の大司教勢力によるディラム派への不正な攻撃としか言いようがありませんぬ」

ディラム派を中枢とする教会組織が、ダルーハ軍によって完全に

破壊された。それによって台頭の機会を得たローエン派の大司教が、王国全土からディラム派を一掃しようと考えてるのは、まあ当然であろう。

ここサン・ローデルにおいても、ディラム派の司教がこうして罷免された。クラバー・ルマン大司教の派遣したローエン派の司教が、そろそろ赴任して来る頃である。

「エルベツト家は一介の地方貴族です。教会の人事に介入する権限はありません……が、異議の申し立てくらいなら出来るかも知れません」

リムレオンは言った。

「新しく赴任して来る司教殿のお仕事ぶりを、しばらく見てみましょう。前の司教殿の方が良かった、という声が領民から少しでも上がって来たら、僕も考えてみる事にします」

「そ、そのような悠長な……」

泣き事を続けようとするメッケル司祭を無視してリムレオンは、続いてガートナー伯爵に言葉をかけた。

「伯爵。徴税権に関しては、もう地方領主が好き勝手にはやれない体制が出来上がっています。それはご存じでしょう」

ティアンナが作り上げた体制である。5公5民。この税制を、放っておけば搾取に走る地方領主たちに遵守させるため、ティアンナはかなり強引な改革を断行したようだ。

王都からの監視体制も、税で私腹を肥やした領主に対する罰則も、強化された。

東国境でバルムガルド軍に大勝した事で、女王エル・ザナード1世の権威というものは間違いなく高まった。だから、いくらか強引な政策も押し通せる。反エル・ザナード1世派の筆頭とも言えるべきバウルファー・ゲドン侯爵がこの世から消えた今となつては、尚更だ。

「ガートナー伯。貴方がサン・ローデル地方東部3町8村でどれほど無法な搾取を行っていたのかは、調べさせていただきました」

毅然とした口調を、リムレオンは作ってみた。

「体制がどうであろうと、貴方がたに徴税を任せるわけにはいきません。普通に暮らしてゆけるだけのものを月々、ゲドン家の方々にはお渡しします。それで足りないとおっしゃるなら、何か仕事をしなさい」

「む、無体な……我が父を殺め、領主の地位を奪い取っておきながら、それでも足らずに何と無体な事をおっしゃるのか」

ガートナーが恨み言を呻く。

殺して奪った。確かにゲドン家の人々にしてみれば、そういう事にしかならないだろう。

言い返す事が出来ずにいるリムレオンに対し、ガートナーはなおも語気を荒げてゆく。

「いい気になるなよ小僧！ 貴様は自分の伯父を殺害し、我らから全てを奪い！ その無法を、女王の親族であるからと見逃されて」

「勘違いをなさっては、いけませんなあ」

言葉と共に男が1人、領主の間にのしと歩み入って来た。

タテガミのような頭髮と髭に囲まれた厳つい顔に、傷跡を走らせた男。見るからに軍人だが、軍装はしていない。大柄な力強い身体には、粗末な布服を着用しているだけだ。

手土産のようなものを、左手でぶら下げている。角を生やした、魔物の生首だ。

「バウルファー・ゲドン侯爵閣下を殺害し奉ったのは、リムレオン・エルベツト様ではなくこのブレン・バイアス……仇をお討ちになつてはみませんかガートナー伯爵殿。受けて立ちますぞ？」

ニヤリと獐猛に微笑みながらブレンは、ガートナー及びメツケル両者の眼前に、魔物の生首を転がしてみせた。両者とも女性のような悲鳴を漏らし、尻餅をついた。

ブレンに続いてぞろぞろと入って来た兵士たちが、尻餅をついた2人を引きずり起こし、捕え、連行してゆく。

シェファがこの場にいないくて良かった、とリムレオンは思った。

彼女ならば容赦なく攻撃魔法をぶつ放し、ガートナーもメッケルも焼き殺していたかも知れない。

ブレンが、リムレオンに向かって跪き、報告した。

「若君……いえ侯爵閣下。魔物どもの一団が、西より領内へと侵入しておりました」

侯爵閣下とは誰の事だ。一瞬、リムレオンはそう思った。

「幸いに領民に被害なきうちに殲滅いたしましたでしたが、気を抜く事は出来ません」

「西……と言うと、ロッド地方でしょうか」

リムレオンは考え込んだ。

ロッド地方の領主はライアン・ベルギ侯爵という、自分とは全く面識のない人物である。ただバウルファー侯に近い、すなわち反エル・ザナード1世派の地方貴族であるという噂は聞いている。

だからと言ってライアン侯が、魔物どもと結託して不穏な行動を起こしている、などと断定出来るものではないだろうが、それでもロッド地方に赴いて調べてみる必要はありそうだ。サン・ローデルに魔物を送り込んでいる元凶が、ライアン侯爵の領内にあるのなら当然、彼の下承を得て排除しなければならない。

「……ブレン兵長、留守を頼みます」

領主の椅子から、リムレオンは立ち上がった。

「侯爵閣下……どちらへ？」

「ロッド地方へ、調査に行つて来ます。魔物たちの出所を確かめないと」

「いけません、領主様がそのような！ 一体何を言っておられますか」

ブレンの大きな身体が、リムレオンの眼前に立ち塞がった。

「このブレン・バイアス1人にお命じ下さるべきです」

「ブレン兵長は今、戦つて来たばかりではありませんか。僕とて魔法の鎧の装着者です。調査くらいなら」

「いい加減になさい、お2人とも」

領主の間に、一組の男女が入って来た。

声を発しているのは女性の方である。やや太り気味の、中年女性。リムレオンの母、ヴァレリア・エルベツトだ。

「領主様ともあろう御方が、単身で他の地方へ出向かれるなど……貴方の身に何かあれば、ゲドン家の愚か者たちが領主の座に返り咲いてしまうかも知れないですよ」

「愚か者って……母上、貴女の御実家の方々ではありませんか」

ここサン・ローデルの統治には、旧領主ゲドン家の出身であるヴァレリアの助言が必要不可欠だった。エルベツト家にあって、サン・ローデル地方の事を最も知り尽くしているのが、この母なのだ。

もちろん様々な事に正式な決定を下しているのは、領主たるリムレオンである。が、その決定に至るまでの道筋は、母が整えてくれる事が多い。

「愚か者は、愚か者です……侯爵閣下、まさかあの者たちに負い目を感じていらっしやるわけではないでしょうね？」

容赦のない口調で、母は言った。

「いけませんよ、そんな事では。先程もそう、あそこは貴方が毅然とした態度をお取りにならなければいけないところ。ブレン兵長に頼らず、御自分であの者たちを退出させなければならなかった場面です。兵長も、あまり過保護な事はなさらないように」

「も、申し訳ございません」

ブレンの大きな身体が、小さくなった。

「……貴方も、何やら負い目に近いものを感じていらっしやる？」

言いながらヴァレリアが、優しく微笑んだ。

「兄は、愚か者だから死んだのです。手を下したのが、たまたまブレン殿だったというだけの事。それより、こちらの侯爵閣下がバウルファー・ゲドンのようになってしまわぬよう、貴方にはしっかりと補佐をお願いしなければなりません」

「はっ……」

小さくなったまま、ブレンが平伏している。

1つ咳払いをしてから、リムレオンは訊いた。

「……ところで母上、そちらの方は？」

ヴァレリアの伴って来た、1人の男性。先程から、恭しく跪いたままである。

ブレンと同年代か、やや年下であろうか。紳士的な口髭を生やした穏和そうな男で、唯一神教の法衣を身にまとっている。

ヴァレリアが紹介する前に、本人が名乗った。

「レイニー・ウェイルと申します。この度サン・ローデル地方聖堂の司教位を拝命し、赴いて参ったところでございまして」

先程つまみ出されて行ったメッケル元司教の、後任者というわけだ。彼がまだこの場にいたとしたら、激しい言い争いが展開されていただろうか。

「リムレオン・エルベツトと申します。サン・ローデルの領主をやらせていただいておりますが、至らぬ所ばかりで」

跪いているレイニー司教に合わせて、リムレオンも片膝をついた。「ローエン派の方々にも、いろいろと助けていただきたいと思ひます」

「新しい御領主様の事は、エミリイ・レアから聞いておりますよ」

レイニーが顔を上げ、微笑んだ。

「彼女を、ご存じなのですか？」

「いささか縁がありましてな……それより侯爵閣下、御領内に魔物たちが入り込んでおります」

微笑んでいたレイニー司教の表情が、曇った。

「私もエミリイも、実はそれで少々危険な目に遭いまして。その時はトロルが5匹ほどでしたが」

「トロルが……」

リムレオンは息を呑んだ。

「そ、それでエミリイは？」

「ああ、彼女は無事です。ゼピト村にも被害はなく」

「そうですか……」



メルクト地方でオークやギルマンに襲われていた頃と比べて、魔物たちの出現頻度が上がっていた。

ブレンだけでなくシェファも、サン・ローデル全域を駆け回って対処してくれている。

自分は何をしているのだ、とリムレオンは思う。何のために、竜の指輪を中指にはめているのか。領主の椅子になど、座っている場合ではないのではないか。

「……実に興味深い話だ。トロル5匹に襲われて無事とは」  
ブレンが、訊問のような口調で言った。

「いかにして危機を脱したのか、ぜひともお話をお聞きたいが」  
「それは……申し上げて良いものかどうか……」

しばし躊躇った後、レイニーは口にした。聖職者の口には似合わない、禍々しい単語をだ。

「御領主様は……魔獣人間、というものをご存じでしょうか？」

いくらか頬骨の目立つ顔立ち。がっしりと筋肉の引き締まった肉体。

脱いだ上着を腰に巻き付けた、上半身裸の姿で今。ギルベルト・レインは、巨人のような大木と向かい合っていた。

いくら巨大でも、樹木である。殴ろうが蹴ろうが斧を叩き付けようが、回避も防御もしないし反撃もしてこない。

「見かけがそこそ立派なだけの、でくの坊か……まるで俺だな」  
呟きながら、ギルベルトは左足を離陸させて身を捻った。

部下を、1人も救えなかった。その思いを宿した蹴りが、大木の幹を直撃する。

人の胴回りほどもある幹が、その一撃で折れた。  
バキバキバキッと倒れて来た大木を、ギルベルトは裸の上半身で受け止め、左肩に担ぎ上げた。

この大木を切り分けて薪に変え、村へ運ぶ。何か畑仕事の類があ

れば、ついでに手伝う。

前の領主が人狩りなどをやったせいで労働力が激減しているらしく、体力だけが取り柄のギルベルトのような来訪者は歓迎された。

サン・ローデル地方、ゼピト村の近くの山中である。ここにギルベルトは一軒の小屋をもらい、住んでいた。

村へ下りて行つては、力仕事や汚れ仕事をこなす。それだけで村人たちは、食料などを分けてくれる。いろいろと、良くしてくれる。村に住んではどうか、と村長やエミリイ・レアは勧めてくれたが、ギルベルトは山中での1人暮らしを選んだ。

あれだけ部下がいたのに、とうとう自分1人だけになってしまった。

「……これからどうするつもりだ、役立たずのギルベルトよ」

蹴り折った大木を担いだまま、ギルベルトは空を見上げ、自身に問いかけた。

木は、折り倒せば薪や木材となり、人の生活の助けとなる。

だが魔獣人間は、生きている間は殺戮を行うだけ。死ねば、蛆もたからぬ有機物の残骸と化すだけ。本当に、何の役にも立ちはしない。

エミリイから、いろいろと話は聞いた。

前領主が人狩りなどをやらかしたのは、魔獣人間を造るためであったらしい。

その魔獣人間造りを実際に行っていたのが、ゴルジ・バルカウスなる男であるという。

魔獣人間などという出来損ないの生命体に過剰な期待を抱いている愚か者が、ムドラー・マグラ以外にも存在しているのなら、殺しておかなければならない。自分や部下たちのような者が、生み出される前に。

ギルベルトはそう思ったのだが、しかしエミリイの話によると、ゴルジ・バルカウスはすでに死んでいるらしい。複数の魔獣人間を引き連れてゼピト村を攻めたものの、村を守ってくれた者たちに倒

されてしまったのだという。

「魔獣人間など、その程度のもの。いずれは誰かに倒されるしかないという事か……うん？」

折り倒したばかりの大木を担いだまま、ギルベルトは振り向いた。地面に残った切り株の傍らに、いつの間にか人影が1つ、うずくまっている。

「ふううむ、これは……」

若い女だった。娘、いや少女と言ってもいい。エミリイ・レアよりも、1つか2つ年上であろうか。

地味な灰色のローブに、細身を包んでいる。あまり着飾ろうという気はないようだ。

「これは、まったく……種も仕掛けもありません、って感じよねえ。本当にこんなブツとい木、蹴りで折っちゃったんだあ」

鮮やかな折れ跡の残った切り株をまじまじと観察しながら、その少女は何やら感心している。

あまり長くない、さらりとした髪に囲まれた顔立ちは、美しい。が、一癖ありそうなものを感じさせる。

そんな美貌が、ちらりとギルベルトの方を向いた。

「強いよねえ、お兄さん……いや、おじさん……かな？　微妙なお年頃って感じ」

「……30を過ぎたばかりだ。文句があるか」

会話に応じてやりつつもギルベルトは、担いでいた大木をズウ……ンツと地面に転がした。何か、嫌な気配を感じたからだ。

「貴様は何者だ小娘。俺に、何か用があるのか」

「あたしはセレナ・ジェンキム。通りすがりの旅の魔術師……もどきです」

名乗りながら、少女は立ち上がり、1度だけ身を翻して見せた。地味な灰色のローブに一瞬、魅惑的な身体の曲線が浮かんた。

「もどきですから当然、強い攻撃魔法とか使えません。強くてかっこいい、お兄さん？　おじさま？　に助けてもらえたらなあーって

感じなんだけど」

何から助けて欲しいのかは、すぐに明らかになった。

嫌な気配に続いて、まず音が聞こえた。金属製の甲冑が複数、カチャ、カチャ……と音を立てている。

「なるほど……追われているのか、こいつらに」

ギルベルトは見回した。

落ち着きなく金属音を鳴らしながら、周囲に群れつつあるもの。

それは鈍色の全身鎧に身を包んだ、歩兵たちだった。

ざっと数えて15、6人。1人の例外もなく、頭から手足の爪先に至るまで、生身の露出が一カ所もない。顔を覆う面頬に横一筋、視界確保用の裂け目が走っているが、その奥に眼光の輝きは感じられなかった。

生気と呼べるようなものを全く感じさせない、鈍色の甲冑兵士たち。死体に全身鎧を着せているのか、とギルベルトは一瞬思った。

屍のような鎧歩兵たちが、しかし動いている。長剣や槍を構え、じりじりと包囲を狭めて来る。

その包囲の中でギルベルトは自然に、セレナ・ジェンキムと身を寄せ合う格好になっていた。

とりあえず、訊いてみる。

「おい、何だこいつらは」

「んー、一言で言う……出来損ない、かな？ あたしの親父が造った物の、失敗作みたいなもん」

「出来損ない、か……」

今の自分の相手にはふさわしい、とギルベルトは思った。

1度でいいから、人を守るための戦をしたかった。部下たちは、そう言いながら死んでいった。

人を守る。その真似事くらいなら、自分にも出来るかも知れない。部下たちの分まで、などと思ってしまうのは柄ではないが。

魔獣人間のような出来損ないの怪物とは違う、本物の怪物が、もうすぐ自分を殺しにやって来る。

（それまで、少しあがいてみるか……もう少しでいい、待ってくれよ若君）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5858t/>

---

灼熱のドラゴンニュート

2011年11月17日03時28分発行